續國譯漢文大成

文學部　七十三

309
65

始

吉田侍郎氏 寄贈本

續國譯漢文大成

文學部 第七十三册（第十九帙の一）

高靑邱詩集 一の一

309
65

高青邱集 第一卷 目次

總說……一—二四
高青邱年譜……二五—三五

卷一 樂府

上之回……三七
君子有所思行……四〇
李夫人歌……四三
古別離……四六
燕歌行……四九
吳趨行……五一
南山有鳥……五六
玉波冷雙蓮……五八
芷秀葯華……六一
吳鉤行……六三
短歌行……六五
白馬篇……六八
宛轉行……七一
長門怨……七三
班婕妤……七五
閶闔篇……七七

塞下曲……八〇
折楊柳歌辭二首……八二
箜篌引……八四
將進酒……八七
雨雪二首……九三
羅敷行……九五
當壚曲……九九
游俠篇……一〇〇
關山月……一〇三
鞠歌行……一〇五
古詞……一〇九
王明君……一一〇
烏夜啼……一一六
行路難三首……一一八
劉生……一二四
怨歌行……一二六
雉子斑……一二八
蒿里歌……一三〇
薊門行……一三三
巫山高……一三四
上留田……一三八
董逃行……一四二
碧玉歌……一四六
堂上歌行……一四七
隴頭水……一四九
少年行二首……一五三
芳樹……一五五
放歌行……一五六
空城雀……一六〇
相逢行……一六二

妾薄命……一六三
神仙曲……一六五
結客少年場行……一六八
長相思……一七三
君馬黃……一七五
團扇郎……一七七
楊白花……一七八
門有車馬客行……一八〇
估客詞……一八三
欋歌行……一八四
雞鳴歌……一八七
華山畿……一八九
長安有狹斜行……一九一
雙桐生空井……一九四
征婦怨……一九六
襄陽樂……一九八
飲酒樂……二〇〇
鳳臺曲……二〇一
美女篇……二〇四
將軍行……二〇八
長安道……二一三
洛陽陌……二一五
悲歌……二一七
邯鄲郭公歌……二一八
車遙遙……二二一
楚妃歎……二二三
神絃曲……二二六
白紵詞二首……二二八
阿那瓌……二三一
江南思……二三三

銅雀妓……二三六
猛虎行……二三八
湘中絃……二四〇
獨不見……二四一
豔曲二首……二四三
羽林郎……二四五
燕燕于飛……二四八
浮游花……二五〇
野田行……二五一
壯士行……二五四
邯鄲才人嫁爲廝養卒婦……二五四
秋風引……二五七
涼州詞二首……二六〇
虞美人曲……二六三
築城詞……二六五
永嘉行……二六八
神女宛轉歌二首……二七一
東門行……二七四

卷二 樂府

愛妾換馬曲……二七九
美人磨鏡詞……二八一
朝鮮兒歌……二八三
野老行送陳大尹……二八九
秋江曲送顧使君……二九二
湖州歌送陳太守……二九四

秦箏曲……二九六
從軍行……二九八
大梁行……三〇〇
東飛伯勞歌……三〇四
春江花月夜……三〇七
踏歌行……三〇八
子夜四時歌……三〇九
迎送神曲……三一三
有所思……三一六
吁嗟篇……三一八
擊筑吟贈張贊軍……三二二
苦哉遠征人……三二三
鑿渠謠……三二五
荆門壯士歌……三二六
城虎詞……三二八
寒夜吟……三三一
戍婦詞……三三二
羇旅行……三三三
小長干曲……三三六
春江行……三三八
寄衣曲二首……三三九
廢宅行……三四一
青樓怨……三四三
鬪角吟……三四四
刺促行……三四六
牧牛詞……三四八
捕魚詞……三五〇
養蠶詞……三五二
射鴨詞……三五四
伐木詞……三五五

打麥詞……三五七
采茶詞……三五九
賣花詞……三六一
洞房曲……三六三
待月詞……三六四
惜花歎……三六六
照鏡詞……三六九
田家行……三七〇
憶遠曲……三七一
金井怨……三七四
送客曲……三七五
里巫行……三七七
主客行……三八〇
春夜詞……三八二
新絃曲……三八四
竹枝歌六首……三八六
轉應詞二首……三九二
五雜組二首……三九四
五噫歌弔梁伯鸞墓……三九六
疊韻吳宮詞……三九七
鶴媒歌……三九九
牛宮詞……四〇二
照田蠶詞……四〇三
妾薄命……四〇五
出門行……四〇六
田家行……四〇八
病駝行……四一〇

琴操

風樹操……四一二
之荊操……四一五
登丘操……四一七
望歸操……四一八

辭

望廬山辭……四一九
放鶴辭……四二一

卷三

五言古詩

擬古十二首……四三七
寓感二十首……四五八
詠隱逸十六首……四八八
向長……四八八
周黨……四九〇
弔伍子胥辭……四二三

三言

梧桐園……四三二

三四言

王敬伯歌……四三三
王覇……四九二
梁鴻……四九五
法眞……四九八
韓康……五〇〇
陳留老父……五〇二

龐　公……五〇五
漢濱老父……五〇七
王　績……五〇九
朱桃椎……五一三
武攸緒……五一五
盧　鴻……五一七
秦　系……五一九
陸龜蒙……五二一
張志和……五二三
吳越紀遊十五首……五二五
始發南門晚行道中……五二五
渡浙江宿西興民家……五二八
早過蕭山歷白鶴柯亭諸鄉……五三〇
次錢淸謁劉寵廟……五三二
登蓬萊閣望雲門秦望諸山……五三四
開長鎗兵至出越城夜投龕山……五三七
夜抵江上候船至晚始行……五四一
登鳳凰山尋故宮遺跡……五四三
宿湯氏江樓夜起觀潮……五四六
過奉口戰場……五四八
泊德淸縣前望金鵞玉麈二峰……五五一
舟次敢山阻風累日登近岸荒岡僧舍……五五三
過硤石……五五六
謁雙廟……五五八
登海昌城樓望海……五六三
春日懷十友詩……五六六
余司馬堯臣……五六六
張校理羽……五六九
楊署令基……五七一
王隱君行……五七二
呂道士敏……五七四
宋軍杳克……五七五
徐記室賁……五七七
陳孝廉則……五七八
僧道衍……五八〇
王徵士彝……五八二
秋懷十首……五八三
出郊抵東屯五首……五九八

卷四　五言古詩

戚舊酬宋軍杳見寄……六〇七
蕭鍊師鷹窠絕頂丹房……六一九
隨月圖……六二四
映雪圖……六二五
顧榮廟……六二六
停君白玉巵……六三一
讀　史……六三五
雜　詩……六三七
池上雁……六三九
題綠綺軒……六四二
答張山人憲……六四三
澄景閣夜宴……六四五
贈馬冠軍……六四六
送劉明府……六五〇
暮　歸……六五三
澹室爲吳君賦……六五五

窓明道人詩……六五六
九日無酒步至西汀朋眺……六五九
題倪雲林所畫義興山水圖……六六一
餞孝子廬墓……六六四
送蜀山人歸吳興兼簡菁山靜者……六六六
鶴瓢山房爲試茶之會……六六八
晚憩靈鷲院池上……六七一
贈談鬼谷數晉師金松隱……六七二
贈惠山腎僧東山……六七六
嫣雉太史自海上入郭……六七八
送徐七山人往蜀山書舍……六八二
會宿城西客樓送王太史……六九一
題林居圖兼簡盧公武……六九三
鴻山書舍圖爲黃君伯淵賦……六九四
詠三良……六九六
詠荊軻……六九九
魏使君見示呂忠肅公舊贈詩因賦……七〇四
題秋林高士圖……七一一
春草軒雨中懷王太史……七一三
始還西齋……七一四
次徐山人與倪雲林贈答詩韻……七一七
因病不飲……七二二
三　鳥……七二三
題陳生畫……七二六
青邱道中……七二七
送李用和提擧……七二八
贈銅臺李壯士……七三三
題春江送別圖送王使君彥强……七三七
蘭室爲袁省郎賦……七三八
我愁從何來……七三九

賦得法華雨送惠上人歸江上……七四二
秋　風……七四四
秋　雨……七四五
題曹氏春江雲舍……七四七
燕客次蔡參軍韻……七四八
退思齋爲蔡參軍賦……七五二
遊師子林次倪雲林韻……七五三
尹明府所藏徐熙嘉蔬圖……七五五
來鴻軒……七五七
蘿　徑……七六〇
茶　軒……七六一
讀　書……七六二
過立公房……七六五
賦得桃塢送別……七六六
東園種蔬……七六九
聞張著作值雨宿陳山人園因寄……七七〇
鄭隱君秀野軒圖……七七二
與諸公飮綠茗園……七七四
送上海石明府……七七五
逢雲巖僧元實將赴湖上賦以送之……七七六
舟歸雨中……七七八
秋夜會飮送劉別駕得星字……七七九
送陳博士歸番禺葬親……七八〇
渡吳淞江……七八三
無言上人丈室逢李道士……七八五
贈陶蓬先生……七八七
孤鶴篇……七九一
雜　詩……七九四
白水冒我田……七九五
送韓司馬赴邊郡……七九七

醉贈王卿……七九九
送賈二文學北游……八〇〇
送海昌守李使君遷海虞……八〇二
端居懷兩王孝廉……八〇四
送芑上人東歸……八〇五
大水……八〇七
送黃主簿之歸安……八〇九
送王推官赴潮陽……八一一

高青邱集

文學博士　久保天隨　譯解

總說

元の一代は、戲曲小說等、謂はゆる俗文學の製作、新に肇まつて其盛を極めたる時にして、その詩に於ても、史籍に於ても、敍事議論に於ても、遂に前代に追及するものあらず。當時の文章は、全く道學者が攻經の餘に成りしものにして、その人、すでに宋に及ばず、その作の愈よ下れるは、理の當に然るべきところ。但だ詩に於ては、聊か取るべきものなしとせず。元詩は、由來、纖弱綺靡の誚あり。沈德潛、これを辨じて曰く、人は謂ふ、元詩は纖弱にして宋に遜る、と。これ未だ元人の大全を究めずして、遽に一方の論たるなり。遺山、未だ元に仕へざるも、巨手、先を開いて、時に冠絕するは、もとより必ずしも言はず。趙虞楊范の如きに至つては、皆卓然家を成して、正宗たり。その餘、奇を騁せ、麗を鬪はす、一にして足らず。蓋し、宋詩末流の弊や、粗率となり、生硬となる。元詩は、これに反す。宋詩の流弊を救はむと欲せば、元を舍てて、曷をか以てせむや、と。然れども、元詩が到底纖麗にして、その極、黴弱に流れたるは、幾んど、疑を著くるの餘地なく、謂はゆる昌谷の錦囊を撈り、

玉谿の芳韻を嗣ぐもの、亦た實に然るものあり。顧るに、宋詩の弊は、多く虚字を斡旋し、流動自在なれども、その極、徑露に失して含蓄に乏しきに在り、且つ莊重の趣を缺くもの、比比として皆然り。これ曩に周弼が三體詩を著して、四實を先としたる所以。元初の趙孟頫の如き、さすがに之に鑑みるところありけむ、多く實字を用ひ、通體豐腴なるを以て、その歸宿となす。ここに於て、元代の詩人は、多く西崑に尸祝し、孟頫、實に其唱首たり。然れども、宋初楊劉諸公の缺點を免れ得たるは、その才藻、いささか之に過ぎ、巧慧、自ら然るが故ならむのみ。されば、大體に於て、宋元の別をいへば、宋は其調甚だ駁、元は稍や純、宋は創撰に急にして、元は臨摸に過ぐ、まことに、李慈銘が「元詩は南宋に勝れり、ただ氣格靡なるに苦むのみ」といへるが如く、單に詞彩の上より觀れば、元、むしろ宋に駕すべきも、到底體を具へて微なるを免れず。諸家齊しく各體を攻めて、ひとり、五古に短なるも、亦た宋人と同じ。元人一代の氣習、かくの如く、大抵、辭に拘束せらるるを免れざるも、虞集、ひとり斯病少く、楊維楨、亦た別調を出すに意あり、これ、その大家たる所以に外ならず。

明の太祖朱元璋、金陵に即位し、次いで、元を破つて四方を經略し、統一の業、はじめて成るや、四百州の曠土は、再び漢族の手に落ちぬ。その元に勝つて歸るや、圖書を收めて之を金陵に送致し、詔して、四方の遺書を求め、秘書官丞を設け、尋いで改めて翰林典籍といひ、その科擧、士を取るや、經義を以て先と爲せり。かくの如きは、奎運の盛を謀るに似たりと雖も、太祖刻薄の心よりいへば、天下の俊才を覊束し、風雲の志を抱くことなからしめむと欲せしものにして、その究極、四海を愚にするの老猾手段に外ならざれども、表面上、必然の結果として、一代を擧げて、文物典章、斐然として稍や觀るべきものあり、唯だ奈かむ八股文の標榜は、幾多の擧子を心死せしめしを。

明の世を閲する、二百七十餘年、その間、文人詩客、亦た必ずしも少からず、國初に當りては、宋濂・王褘・方孝孺の輩、專ら文柄を握り、その本づくところは、實に元季の虞柳黃吳に在り、師友講貫、以て之を致せるなり。詩壇に於ては、曠世の逸才たる我が高青邱を中堅とし、前には劉基あり、後には相竝んで吳中四傑と稱せられし楊基・張羽・徐賁の輩あり。なほ、元季の餘風を存し、未だ隆時の正軌を極めずと雖も、亦た以て一時の盛を推すに足る。永樂以還、詩文、ともに、體、臺閣を崇び、骫骳振はず。弘治・正德の間、李東陽、はじめて出で、詩文兩道に亙つて、氣運の先聲を爲し、李夢陽・何景明等、謂はゆる七子の徒、相繼いで起り、口を極めて復古を唱道し、文は西京以下、詩は中唐以下、ともに一切唾棄して取らず、天下翕然として之に向ふや、明の詩文は、ここに忽ち一大變を經たり。嘉靖の時に及び、王愼中・唐順之の輩、これに反抗し、文は歐曾を宗とし、詩は初唐に倣ひしが、李攀龍・王世貞等、謂はゆる後七子の徒、復た李何の舊に沿ひ、更に之を驅つて極端に至らしめ、文は必ず秦漢、詩は必ず盛唐、これを表面より觀れば、菁英彬彬たるに似たりと雖も、氣力骨節、ともに之を缺けり。その後、流弊を矯正せむが爲に、歸有光は、司馬歐陽を以て自ら命じ、徐渭・湯顯祖・

袁宏道・鍾惺の輩、各〻その時に鳴りしが、往往にして、苛激に失するを免れず。次いで、錢謙益・艾南英の北宋を矩矱するあり、張溥・陳子龍の東漢を奉守するあり、而して遂に宗社の革命に際せり。

元明交替の際に於ける高青邱は、言ふまでもなく詩壇に於ける景星祥鳳たり。しかも、その寃に死するや、年、未だ四十に達せず、從つて、その詩も、亦た一家の風を樹立するに至らず。その命の屯蹇、天、實に之を作す。然れども、有明一代の冠冕として、當時に喧傳し、百代に朗映するは、更にも言はず、その著作の千古に不朽なる、もとより論なきなり。

高啓、字は季迪、青邱、又槎軒と號す、吳郡の人、元の順帝至元二年丙子（わが延元元年、楠公が湊川に戰死せし歲）を以て生まる。祖は本凝、父は一元、字は順翁、兄を杏といひ、青邱は其次なり。他に一姉あり。その家系、もと渤海に出づと稱し、世、汴京に住せしが、南渡の時、蹕に從つて臨安に來り、後、吳に趨つて吳人となる。家世富みたれども、その名、聞こゆるものなし。青邱の生まれし時、その居は、城の北郭に在り、後に吳淞江上の大樹村に徙る。蓋し、その產たる田百餘畝、沙湖に在り、江を東に遡り南に切するが故に、その課耕の便を謀つて然りといふ。

青邱が少にして警敏なりしことは、友人張適の作れる哀辭の序に「未だ冠せざるに、穎敏を以て聞こゆ、所交、千言を以て之に貽つて曰く、子、能く記憶するや否や、と。君、一目卽ち誦を成す」といひ、門人呂勉の傳に「書、一目卽ち誦を成し、久しうして忘れず、尤も書史に粹、詩を爲るを嗜み、語を出すに、塵俗の氣なく、清新俊逸、天、これを授けて然るものの如し」といへるを見て知るべし。その早く怙恃を失ひしことは、風樹操の一詩に就いて徵すべく、稍や長ずるに及び、兄杏、淮右に戍せしを以て、家政を綜理して江城に往來せり。年十八ばかり、頎にして未だ冠せず。かつて、青邱の鉅室周仲達の女を聘せしが、家產冷落せしに因つて、六禮を備ふる能はず。一旦、翁病むや、所交、これに戲れて曰く、若の婦翁、安からざるあり、盍んぞ往いて之を問はざる、可ならむか。啓曰く、諾、願はくは、偕に往かむと。遂に同じく其第に抵る。翁、所交に謂つて曰く、吾が疾、近ごろ稍や瘉ゆるも、未だ率爾新客と見ゆべからず。その善吟を聞く。客位の間に蘆雁の圖あり、もし一題すれば足れり、と。青邱乃ち筆を走らし、一絕を書して曰く、

西風吹折荻花枝。好鳥飛來羽翼垂。沙闊水寒魚不レ見。滿身霜露立多時。

翁、笑つて曰く、若、偶を欲するの意、亟なり。所交に語り、請うて共に回れ、當に日を擇んで、之に妻はすべきなり、と。因つて婚を畢るといふ。妻、亦た時に詩を作る。後、しきりに一男三女を擧ぐ。子祖授は、晚年はじめて獲るところ、不幸にして、生まるるや、直に殤す。一女亦た夭し、死後に存せしは唯だ二女のみ。

吳中の地たるや、古しへより聞人少からず、王禕、かつて季迪の詩卷に序して曰く、余、かつて吳中の詩を論ず、唐に陸魯望あり、宋に范致能あり。魯望の詩は、寄興悠然たれども、その音響は、駸

駸として已に晩唐に迫る。致能の詩は、措辭溫縟、然れども、その格調は、特だ宋なるのみ。勝國の時に在つて、余、吳に適き、陳子平の詩を得たり。その言たる、平實にして流麗、これを陸范に揆るに、吾、其れ孰れか先孰れか後たるを知らざるなり。吳の詩、元に在つては惟だ子平、而して、知るもの、蓋し鮮し。今、吾、ここに於て復た季迪の詩を得たり。季迪、年方に壯、志氣偉然、その自ら見るところ、殆んど詩に止まらず。しかも、その詩に於ける、已に能く自ら家を成す、唐宋以來の作者と又孰れか先孰れか後なるを知らざるなり、と。蓋し、靑邱の詩に於けるや、刻苦洗鍊して之を得たるものといふべく、弱冠を踰ゆるや、日に詩五首を課せしが、久しうして、精ならざるを恐れ、日に二首、後一首、皆工緻沈著、人の道ふを經ざるの語、然れども、以て人心に當るあり、しかも手足の舞蹈を知らざるなり。その詩名、夙に顯はれしも、亦た決して偶然ならず。

當時、吳中の地は、人材の淵叢にして、亂離の世に志を得ざるもの、皆來つて、ここに滙會せり。その北郭の十才子と稱せられたるは、王行・徐賁・張羽・宋克・余堯臣・呂敏・陳則・唐肅・高遜志、及び我が高啓にして、卜居相近く、日夕往來して、詩酒の樂を偕にせしことは、張羽が續懷友詩の序に「皆落魄して事に任へず、故に詩酒に留連するを得たり」といへるが如し。靑邱も、亦た唐肅を送るの序中、これを稱して曰く、余、世、吳の北郭に居る、同里の交善きもの、惟だ王止仲一人のみ。十餘年來、徐幼文は毘陵よりし、高士敏は河南よりし、唐處敬は會稽よりし、余唐卿は永嘉よりし、張來儀は潯陽よりし、各〻故を以て、來つて吳に居り、しかも、皆余と鄰る。ここに于て、北郭の文物、遂に盛なり、と。靑邱、後に春日十友を懷ふの詩あり、中に其七友を擧げて、唐肅・高遜志を少けり。別に楊基あり、亦た靑邱の詩友たり。或は、この楊基に前の張羽・徐賁及び我が靑邱を加へて、高楊張徐といひ、これを唐の四傑に比するものあり。張習、かつて論じて曰く、惟だ文の似たるのみならず、その終るところ、亦た相遠からず。眉菴と盈川とは、終を同じうせしこと、一の如し。太史の斃は、賓王に同じく、北郭は海に溺れずと雖も、わづかに要領を全うして、首邱に非ず、司丞は、龍口に投ず、又昭鄰と異なるなし、と。

至正十六年、張士誠、湖州・松江・常州の諸路を陷るるや、制を嬌め、饒介を以て淮南行省參政となし、吳中に分守せしむ。介、位隆に望尊しと雖も、しかも、賢を禮し、士に下り、靑邱の名を聞き、使をして之を召さしむること再、靑邱畏避、これに久しうし、强ひて後に往く。座上皆鉅儒碩卿。倪雲林の竹木圖を以て題を命ず、實は之を試むるが爲にし、仍つて、原詩木緜曲の韻に次せしむ。時に、靑邱、わづかに冠せしのみ、衆、これを易る。侍立少頃、答へて曰く、

主人原非二段干木一。一瓢倒瀉瀟湘綠。踰レ垣爲惜酒在レ旁。飲餘自鼓無絃曲。

饒、大に驚異し、その含蓄深遠、稗作の及ぶべきに非ざるを以て、これを上座に延き、特に命じて圖に書せしむ。諸老、これが爲に掣肘し、これより、名、搢紳の間に重く、前輩と雖も、これを畏れざ

るはなかりしといふ。饒介、すでに敬禮を加へ、これに仕を勸めしが、青邱、笑つて答へず、然れども、その才を惜み、これを延いて諸子に敎へしめ、その名、日に益す振ふ。

呂勉の本傳に、青邱の人と爲りを記して「先生尤も權略を好む。事を稠人中に論ずるや、言繁ならずして、切に肯綮に中り、人聳動交聽して、その心に厭服せざるなし。故に、饒及び方鎭・丁仲容、交を締すること、左契を驗するが如く、與にするところの王彝・楊基・張憲・張羽・周砥・王行・杜寅・徐賁・宋克・余堯臣・釋道衍輩、皆豪宕不羈、倜然として以爲へらく、天下の事就るべし、と。一時の武勇、多く之に下る」といへり、然れども、弱齡にして且つ詩名あるもの、その胸中の謀略は、不幸にして遂に人に知られず、至正十八年、亂を避けて、吳淞江上の青邱に遷り、その外舅に依るの止むを得ざるに至れり。啓が青邱と號するは、實に此時に始まる。青邱子歌は、卽ち此間の作にして、その天分を自覺し、仍つて、その野心と霸氣とを抑へ、白眼冷かに世上の人を見て、純ら其力を詩に用ひむとするの決意を見るべし。

この年の冬、東南、吳越に游び、一歲を隔てて歸り、作るところ、吳越紀游あり。今存するもの十五首。蓋し、三歲の游、その作るところ、決して此に止まらず、散佚すでに久しくして、乃ち然るのみ。その後、二年を經、至正二十三年、青邱より還つて、婁江の濱に寓す。吳淞江の東北七里ばかり、海に入るの江口は、卽ち其地なり。ここに居ること三年、二十五年、又徙つて郡中に居り、遂に圜中に落つ。中秋翫月の詩は、二十六年丙午の事に係り、卽ち圜中に在る時の作なり。亂平いで後、居を江東に移し、至正十八年以後、ここに至るまで、十年の作を輯めて、缶鳴集といふ。その詩、凡そ七百三十二篇、これ卽ち青邱が最始の詩集にして、自ら序するところ、以て其抱負の一斑を窺ふに足る。

洪武元年、明の太祖の始めて卽位するや、元季亂離二十年、天下の久しく兵戈に苦むを知り、乃ち武を偃せて、大に文敎を興さむと欲し、この年八月、先づ學士詹同等十八人に命じ、十道に分行して賢哲隱逸の士を訪求せしめ、九月、詔を下して賢を求め、十一月、又夏元吉等をして、徧く天下に賢才を訪求せしむ。次いで、開國の例に依つて、前朝の史を修せむと欲し、十二月、詔して、局を天界寺に開き、文學の士を召して、同じく纂修せしむ。翌年正月、青邱も亦た同里の謝徽と共に召され、金陵に赴いて其事に與かることとなり、仍つて天界寺に寓す。寺は、元の時、龍翔集慶寺と名づけ、江寧府志に據れば、城中大市橋の北に在りといふ。

二月、史局の開かるるや、宋濂・王褘、その總裁たり。濂、字は景濂、潛夫と號す、浦江の人。元季、翰林編修となり、明初、徵されて翰林學士承旨となる。太祖、かつて評して曰く、浙東の人才は、唯だ卿と王褘とのみ。才思の雄なるは、卿、褘に如かず、學問の博きは、褘、卿に如かず、と。太祖、又劉基と文を論せしに、基云ふ、宋濂第一、その次は臣敢て讓らず、と。褘、字は子充、濂と同門、二人相竝んで、文名一時に高し。時に同じく纂修に與かるもの、汪克寬・胡翰・宋禧・陶凱・陳基・曾魯・

趙汸・張文海・徐尊生・黃篪・傅恕・王錡・傅著・趙塤・謝徽等にして、啓と共に凡そ十有六人。太祖、これを召し、親ら諭して曰く、今、爾等に命じて纂修せしめ、以て一代の史を備へむとす。務めて其事を直敍し、美を溢する勿れ、惡を隱す勿れ、庶はくは、公論を合して、以て鑑戒を垂れよ、と。この際、青邱は、主として曆志を編したり。呂勉の傳に曰く、總裁宋公、以へらく、曆は黃帝より以來、聖君の重んずるところ、徵遠、明かにし難し、と。特に之を先生に委ねて考據を爲さしむ。運氣・度數・歲餘・歲差・授時・步氣の屬、古に徵し、今を驗し、必ず天道に脗合せむことを求め、苟焉にして已むに非ず、及び他の志傳、節に詳明あり、文實に、事核に、深く公の獎賞するところとなる、と。その、八月、書成り、十三日、表を奉じて之を奉天殿に上進するや、白金文綺の賜あり。越えて二日、同じく纂修に與かりし士十六人、天界寺の中庭に置酒して中秋の佳節を賞し、兼ねて修史の初めて畢れるを慶す。青邱、每に詩あり。但し、順帝の一朝、史、猶ほ未だ備はらず、乃ち儒士歐陽佑等に命じ、北平に往いて、その遺事を採らしめ、明年二月、詔して、重ねて史局を開き、六月を閱して書成り、七月、これを進奏し、元史ここに全し。書、はじめて頒行するや、紛紛として、すでに竊議多く、後來に迨びては、遞に相考證し、紕漏彌よ彰はると稱せらる。然れども、古來史を修して、此の如く早く畢りしもの、他に其例を見ず、諸人の勤勉、以て事に當りしこと、亦た自ら臆度すべし。

元史の編修、すでに畢りし後、青邱は、諸功臣の子弟に教授するの任を命せられ、三年正月、開平王の二子、東宮に侍學するに經を授け、二月、翰林院編修を授けらる。これ實に青邱が最得意の時代にして、その家を金陵に移し、仍つて自ら天界を去つて寓を鍾山里の第に遷し、一家再び團欒せしも、亦た實に此時に當れり。然れども、青邱は、久しく盈に處るべからざるの戒を忘れず、また哲人身を保つ所以を思ひ、早くも、勇退を欲したり。蓋し、明の太祖、刻薄の資を以て、效程を見るに急なるや、轉じて刑名となり、流れて猜忌となり、刑を用ふること太だ繁く、前代功臣跋扈の跡に懲ること甚しく、大に宿將功臣を削滅し、その終を克くするもの、極めて少し。青邱の機を見るに敏なる、豈に之を知らざらむや。ここに於て、その年七月、特に戶部侍郎に擢んでられしが、年少未だ理財の任を諳んせざるを以て固辭し、仍つて、白金を賜はつて放歸せらるるを得、同じく徵に應せし同里の謝徽と共に、歸つて復た江上の青邱に居れり。

四年、更に居を武邱の西麓に移し、徒を集めて業を授けしが、未だ幾ならずして、城南に遷る。時に盧熊といふものあり、郡志を修して、初めて成る。青邱、乃ち之が爲に考據し、併せて、躬づから、風俗・古蹟・祠廟・家墓・山水・泉石・園亭・寺宇・橋梁等を探覽して雜賦し、每に一詩を系け、その衆體兼ね備はれるを名づけて姑蘇雜詠といひ、この年十二月、初めて成つて世に傳ふ。その詩、凡そ一百二十三篇。自ら序して、その本旨を述ぶ。

五年十月、禮部主事魏觀、蘇州府の知府となつて任に來るや、士を好み、王彝等を延見す。青邱、

京師に在りしとき、かつて舊好ありしを以て、尤も禮遇せられ、相與に往還虛日なし。すでにして、その路稍や相距れるを以て、明年春、青邱は、城南の寓居より城中の夏侯橋に徙り、以て朝夕の親與に便せり。誰か圖らむ、青邱、遂に魏觀の累を以て遽に罪を獲むことを。

魏觀は、元と勝國の遺才にして、頗る自ら矜詡し、且つ青烏經術を解し、任に到るや、ただ更張せんと欲す。以へらく、吳城に蛇門なければ、東南水陸より來るの生氣間沮す、故に百年の富、極品の貴、甚だ妨ぐるところありと、圖つて之を闢かむと欲す。これより先、在城の諸委港、久しく淤し、舟艇往來便ならざるを以て、民を役して、錦帆涇を挑濬すること、甚だ急、すでに多く怨を斂む。蘇州の郡治は、舊と城の中心に在りしが、張士誠、これに據つて宮となせしに因り、胥門內なる元の都水行司に遷つて治し、士誠の敗るるや、火を放つて、爲に荒墟となれり。觀、その地の西に偏し、武衞の下に出づるを以て、舊治に卽いて之を新にせむと欲す。吳帥、その左に居るを慮り、觀の內より出づるや、諸帥俯見して禮を爲さず、銜んで密に之を疏す。時に方張といふものあり、蜚語をなして上聞し、觀が宮を復し涇を開くは、心に異圖あるに因るといふ。太祖、もと猜忌の人、乃ち御史張度をして、往いて之を覘はしむ。度、亦た狡猾、郡に至り、僞つて役人となり、搬運の勞を執りて、その中に雜事し、斧斤工畢り、吉日を擇んで構架するに及び、乃ち還り奏して之を劾す。觀、遂に之が爲に罪を得。青邱も亦た觀の爲に上梁文を撰し、王彝は、河を浚うて佳硯を獲たるとき、觀の爲に頌を作りしに因りて、ともに、目して黨とせられ、攣かれて京に赴く。傳へて云ふ、青邱の侍郎を以て引いて歸り、夜、龍灣に宿するや、夢に、父、その掌に書して、一の魏の字を作り、相見るを愼めといふ、青邱、これに由つて、甫里に避匿し、絕えて城に入らざりしが、魏觀、賢守を以て殷勤に之を迎接したれば、遂に居を城中に移し、仍つて、その禍に罹る、と。又云ふ、致仕の後、夢に、一人、その手を執り、一の蘇の字を書して之に囑す、後、凡そ蘇姓の者は、皆、接見せず、と。諸人の檻送せられて京に赴くや、洶懼して魄を喪ふ。青邱、ひとり亂れず、途に在つて、吟哦を絕たず、詩あり云ふ、

楓橋北望草斑斑。十去行人九不レ還。自知淸澈原無レ愧。盍下倩二長江一鑑中此心上。

洪武七年九月、遂に京師に腰斬せらる。時に年三十九。人、貴賤賢否老少となく、咸な之を痛惜すといふ。張羽に槎史赴臺の詩あり、曰く、

高臺闞二江山一。梯航輳成レ闤。佳麗煥二夙昔一。而獨慘二我顏一。游者固云レ樂。子去不二復還一。平生五千卷。事救二此日艱一。天網豈恢恢。康莊徧榛菅。所レ恃莫レ可レ滅。才名穹壤間。

その罪を獲たりといふ上梁文は、今傳はらず、蓋し諱んで存せざるか、但だ集中に郡治上梁の詩あるのみ。或は云ふ、青邱の罪を獲たるは、その嘗て廷中に在りし日、宮女の圖に題して、

女奴扶レ醉踏二蒼苔一。明月西園侍レ宴回。小犬隔レ花空吠レ影。夜深宮禁有レ誰來。

といひ、又畫犬を詠じて、莫下向二瑤階一吹中人影上、羊車半夜出二深宮一といひしに因る。明の太祖、色を好み、後宮九千人、その脂粉錢、四十萬に上る、故に、その詩を以て、己を譏諷するものとなし、大に之を銜み、遂に魏觀の獄を假つて之を殺せしなりと。青邱が觀の爲に郡治を頌せしこと、もとより、罪、死に當らず、蓋し詩に因つて怒に觸れ、遂に慘刑を受けしものか。或は青邱の如上の詩を以て庚申君を刺るの作となし、好事者、これに因つて附會をなせしならむといふものあれども、この說、蓋し非なり。同時に順祿といふものあり、又かつて宮詞を作りて、諷刺するところあり、太祖、これを治せむとせしが、その平生の作、皆洪武正韻を用ひしが故に、遂に之を釋したりといふ。この一事、以て青邱の事を證すべきなり。後人、青邱の刑死を言はず、李志光が「已むを得ずして、廁つて客となる、復た之を强辭して、故里に歸り、殊に悒悒樂まず、遂に蹇連して以て歿す」といひ、張適の哀辭の序に「事に緣つて連坐して以て歿す、士大夫、これが爲に痛惜せざるなし」といひ、周沈の鳬藻集の序に「居ること數歲、不幸にして、故人罪を得たるを以て京師に沒す」といふが如き、皆憐んで之を諱むの辭なるのみ。

青邱の死に先つこと一年、洪武六年二月、その子祖授を擧げしが、先つて殤し、唯だ二女を遺せしのみ、遂に後なし。諸友、皆、青邱の其罪に非ずして死するを悼み、張羽の詩、最も其情の切なるを見る。曰く、

燈前把ㇾ卷淚雙垂。妻子驚看那得ㇾ知。江上故人身已歿。篋中尋得寄來詩。
消息初傳信又疑。君亡誰復可ㇾ言ㇾ詩。中郎幼女今癡小。遺藁千篇付二與誰一。
生平意氣竟何爲。無ㇾ祿無ㇾ田最可ㇾ悲。賴有二聲名消不一ㇾ得。漢家樂府盛唐詩。

なほ數首を擧ぐ。

昔別會有ㇾ期。茲別渺無ㇾ跡。茫茫堪輿間。飄然竟何適。音容啓二遐想一。恍忽猶在ㇾ側。眼底乏二異香一。
嗟能致二魂魄一。且暮悽以深。形影弔二單隻一。惟餘二瑤華言一。和諧重二金石一。寄示者歷歷。滿紙雲煙疊。
一讀一愴ㇾ情。老淚屢揮滴。有ㇾ名齊二李杜一。泉下奚太息。　徐賁

鸚鵡才高竟殞ㇾ身。思二君別ㇾ我愈傷神。每憐四海無二知己一。頓覺中年少二故人一。祀託二友生一香稻糈。魂
歸二邱隴一杜鵑春。文章穹壤成二何用一。哽咽東風淚滿ㇾ巾。　揚基

首首、その傷悼惋惜に勝へざるを見るべし。

呂勉は、傳の末に論贊を付して曰く、先生著すところ、缶鳴・吹臺・鳳臺・槎軒、詞は扣舷、文は鳬藻等の集あり、議論精鑿、敍事典贍、賈誼・班固の流か。詩の高古は魏晉に類し、冲澹は韋柳の如く、和暢は高岑の如く、放適は王孟の如く、質直は元白の如く、樂府は、多く漢制に擬し、その新聲は、張籍王建と雖も、逮ばざるところ、數千萬言、衆長を兼ねて、人の意表に出づ、啻に良金美玉の、重きを時に取るのみならず、布帛菽粟、世に用ふべし。老杜の謂はゆる、眼前を道ふの句、先正の謂は

ゆる、事に隨ひ、意を命じ、景に遇ひ、情を得、唐より以來、世の詩豪となつて、しかも自ら一大家を成すものなり。天、何ぞ異才を靳んで、年、ここに止まるや。もし下壽に登らしむれば、就すところ又量るべけむや。太史公、賈生を傳し云ふ、詔令の議下る毎に、諸老先生、言ふ能はず、生盡く之が爲に對ふ、人人各〻その意の出さむと欲するところの如し。諸生、ここに於て、乃ち能にして及ばずとなすなり、と。先生の才、生に下らず、出處亦た相遠からず、年稍や之に過ぐと雖も、しかも、終に首極に値ふ。夫れ名は古今の美器、造化深く之を忌む、故に兩間、完名なし。范母云ふ、すでに令名あり、しかも、壽考を欲す、兼ぬるを得べけむや、と。これ亦た此の如し、悲しいかな、と。この言確當なれども、その詞藻を論ずるに至りては、聊か未だ足らず、仍つて、諸家の評論に就いて觀るところなかるべからず。

趙甌北の青邱を論ずる、極めて公平妥當の見地を推すべし。曰く、詩は、南宋の末年に至りて、纖薄、すでに極まる、故に元明兩代の詩人、又轉じて唐を學ぶ、これ亦た風氣循環、往復自然の勢なり。元末明初、楊鐵崖、目して巨擘となす。然れども、險怪は昌谷に傚ひ、妖麗は溫李に倣ふ、これを以て、自ら一家を成すも、究に康莊大道に非ず。當時、王常宗、すでに文妖を以て之を目す、未だ後生の爲に法を取るべからざるなり。惟だ、高青邱は、才氣超邁、音節響亮、唐人を宗派して、自ら新意を出し、一たび涉筆すれば、博大昌明の氣象あり、亦た有明一代の文運を開く。論者、推して開國の詩人第一と爲す、信に虛ならざるなり。李志光、高太史傳を作つて謂ふ、その詩、上は建安を窺ひ、下は開元に逮ぶ、大曆以後に至りては、これを藐とす、と。これ亦た確論に非ず、今悉く之を閱するに、五古五律は、漢魏六朝初盛唐に脫胎し、七古七律は、參するに中唐を以てし、七絕は、併せて晚唐に及ぶ。要するに、その英爽、人に絕つ、故に唐を學んで唐に囿せられず。從來、唐を學ぶもの、李何の輩、その面貌を襲うて、その聲調に倣ふ、而して、神理索然、優孟の衣冠たり。鍾譚等、又一字一句に從ひ、冷僻を標擧し、以て味外の味を得たりと爲す、幽獨君の鬼語なり。ひとり、青邱は、天半の朱霞、下界に照映するが如く、今に至るも、猶ほ光景、常に新なり、その天分、及ぶべからざればなり、と。

青邱の唐代名家に於ける、體に從つて、その形似を認むべし。杜を學びしものあり、韓を學びしものあり、白を學びしものあり、李義山を學びしものあり、溫飛卿を學びしものあり、萬有を挫籠して、常師なきを見るべし。而して、その高きものは、往往にして、李白に逼り、天分の異常なること、ここに於て愈よ知るべし。李白の詩、從前未だ能く之を學びしものあらず、惟だ、青邱、これと相上下し、唯だ形似するのみならず、且つ神似するものあり。趙甌北乃ち曰く、司馬子微、青蓮の仙風道骨あるをいふ。而して、青邱の陶篷先生に贈るや、亦た云ふ、謂余有㆓仙契㆒泥滓非㆓久淪㆒と。蓋し、二人、實に皆出塵の才あり、故に相契神識の間に在るのみ、と。

青邱と同時に名あるもの、劉基・宋濂を以て其最とす。而して、青邱、實に之と相下らず。陳田の明詩紀事に曰く、季迪、諸體竝に工に、天才絶特、允に明三百年詩人の稱首として、止だ一時に冠絶するのみに非ざるなり。青田、二鬼詩を作り、潛溪と竝に天壤に峙つを自負す、豈に江上に青邱子あるを知らむや。青邱子歌、その自負、亦た復た淺からず。玉は崑崙に碎け、蘭は楚澤に焚く、千古の才人、同聲淚を下す、と。

謝徽の序中、青邱の詩を總評して曰く、季迪の詩、情に緣り、事に隨ひ、物に因つて形を賦し、縱橫百出、開闔變化して、一體の長に拘はらず。その體製の雅醇なるは、冠冕委蛇、佩玉して長裾するなり。その思致淸遠なるは、秋空素鶴、廻翔下らむと欲して、輕雲霽月の連娟するなり。その文采の縟麗なるに至つては、春花翹英、蜀錦新に濯ふが如く、その才氣の俊逸は、泰華秋隼の孤騫、崑崙の八駿、風を追ひ、電を躡んで馳するが如きなり、と。これに次いで、楊愼は曰く、季迪、元風を一變し、首として大雅を開く、と。李東陽は曰く、國初、高楊張徐と稱す、高は、才力聲調、三人に過ぐる遠きこと甚し。百餘年來、亦た未だ卓然として之に過ぐるものあらず、と。王世貞は曰く、太史、弘博凌厲、殆んど正始に駸駸たり、一時の宿將、鋒を選んで、敢て陣を橫ぎるなく、快は、迅鶻の颷に乘じ、良驥の景を躡むが若く、麗は、太陽朝霞、秋水芙蕖の若し、詞家の射鵰手なり、と。又曰く、明興つて、赤幟を立つるものは二家のみ、才情の美、季迪に過ぐるはなく、聲容の壯、次に伯溫に及ぶ、と。胡元瑞は曰く、國初、高楊張徐と稱す、季迪は風華穎邁、特に諸人に過ぐ。同時に劉誠意の淸新、汪忠勤の開爽、袁海叟の峭拔の如き、皆自ら一家を成して、相羽翼するに足る。劉崧・貝瓊・林鴻・孫蕡は、抑も其次なり、と。朱彝尊曰く、侍郎、跌宕風華、鳳觀虎視、造邦の巨擘、言を待たざるところ、而して何仲默、別に袁景文を推して第一となす、試に諸體を合して之を觀れば、袁、自ら高の敵に非ざるなり、と。

青邱の才、兼に始まりて、その體、備はれりと雖も、亦た必ずしも、その失なくんばあらず。沈德潛曰く、侍郎の詩、上は漢魏盛唐より、下は宋元諸家に至るまで、その間に出入せざるなく、一時、大作手を推す。ただ才調餘あつて、蹊徑未だ化せず、故に元風を一變するも、未だ直に大雅を追ふこと能はず、と。紀昀、亦た曰く、啓、天才高逸、實に明一代詩人の上に據る。その詩に於ける、漢魏に擬すれば漢魏に似たり、六朝に擬すれば六朝に似たり、唐に擬すれば唐に似たり、宋に擬すれば宋に似たり。凡そ古人の長ずるところ、これを兼ねざるはなく、元季纖穠縟麗の習に振うて、これを古に返す、啓、實に力ありとなす。然れども、世に行はるる太だ早く、殞折太だ速に、未だ鎔鑄變化、自ら一家を爲す能はず、故に古人の格を備有し、しかも、反つて、啓を名づけて何の格となす能はず。これは、天、實に之を限る、啓の過に非ざるなり。ただ、その古調を摹倣するの中、自ら精神異象、その間に存するあり、これを褚臨の禊帖に譬ふ、究に硬黃雙鉤する者の比に非ず、故に終に

北地・信陽・太倉・歴下と同じく後人の詬病とならず、と。

青邱の集を通覽するに、その詩、凡そ三變せり。その一は、少壯の作にして、恰も元季に際し、一方に於て悲壯沈痛の音を爲すと共に、一方に於ては、飄逸の調を帶びたり。青邱は、元遺山の如く、實は亡國の臣たり、而して、杜甫の如く亂離を經、李白の如く不羈の天才を有したり。故に、その詩、或は李白の如く飄逸、或は杜甫の如く沈痛、或は遺山の如く悲壯、その諸體を兼ねて、才情以て之を貫けるは一なり。その二は、明初徵に應じて臺閣に翺翔せし時代の作にして、身に官位の尊あり、家に儲粟を缺かず、その詠ずるところ、亦た興國の盛事に係り、その詩、亦た博大昌明、自然雍和の氣に滿ちて、毫も衰颯の氣を帶びず。その三は、晩年の作にして、江村に歸臥したる後、一切利名の念を捨て、寂寞を喜んで索居し、曠散を樂んで韜晦す。不平の氣と塵俗の習と、兩つながら滌ひ盡して、一も存するなく、その心、すでに逸、その境、すでに閒、從つて、その詩は、冲澹にして曠放なり。青邱の詩、すでに三變す、その初、未だ仕へざるや峭拔、中ごろ仕へては宏麗、晩年に至つては洗練、これを大體の趨向と爲す。もし青邱をして、世に年を享くること長からしむれば、その境、その詩、更に幾次の變を加へしか、もとより、未だ知るべからず。

青邱の最も長ずるところは、七古に在り、嶔崟磊落、方にその生動を極む。蓋し、矯逸の才、規矩に局促するを欲せず、奔放馳騁の處に於て、恰も其妙を見る。明皇秉燭夜游圖の如き、憶昨行の如き、陳氏歌の如き、雨花臺の如き、張中丞廟の如き、鐵券歌の如き、皆佳品たり。青邱子歌に至りては、構想の飄逸と用筆の離奇と、相俟つて、その詩に對する抱負の決して尋常ならざるを知了すべし。五古は、紀遊諸作、稍や取るべきも、その餘は、淺近に失し、夐に相及ばず。五七言律に至りては、帆過京口渡、砧響石頭城。僧來雙屐雨、漁臥一船霜。馬帶レ雲過レ嶺、人同レ燕到レ家。日短清江路、風高大樹村。雪明窗促レ曙、陽復坐銷レ寒。飛雉新阡麥、啼鶯故苑花。樓空三日雨、書亂一牀塵。舊音猶帶レ楚、新夢未レ離レ吳の如き、函關月落聽レ雞度、華嶽雲開立レ馬看。白下有レ山皆繞レ郭、清明無二客不一レ思レ家。疏柳一旗江上酒、亂山孤艇道中詩。半雨暮成風外雪、孤梅春動臘中花。數杵秋聲荒苑樹、一帆暝色太湖船。吳歌重把還鄉酒、蠻布猶穿過嶺衣。松風吹レ壁鶴翻墮、梅雨過レ谿魚子生。客中得レ酒銜二悲喜一、亂後相逢説二死生一。人雜二島夷一爭二午市一、潮隨二山雨一入二秋城一。寒池蕉雪詩人畫、午榻茶煙病叟禪。閒園細雨梨花落、廢苑平蕪燕子飛。一冬多暖天無レ雪、半夜初寒月有レ煙。吳地有レ園花已盡、楚山無レ塚草空新。雪滿山中高士臥、月明林下美人來の如き、いづれか清儁ならざる。絶句に至りては、暫時握レ手還分レ手、暮雨南陵水寺鐘の一首、純然たる唐音にして、直に響に王江寧に接するあり、これ既に至れりと爲すべし。

青邱の詩に於ける、平生の著作、甚だ富めり。元季家を挈へて舅父に依り、吳淞江上に隱れたる時、江館・青邱の諸集と婁江吟藁とあり。後、自ら諸集中の詩を選んで、之を萃めたるものを缶鳴集

となす。その京に入つて史官たるや、鳳臺集あり。退隱後には、姑蘇雜詠あり。その他、吹臺・南樓・勝壬等の諸集あり。缶鳴集、收むるところ、凡そ七百三十二篇、これ至正十八年二十三歲より同二十七年三十二歲に至るまで、凡そ十年間の詩にして、その以後、至正二十八年、卽ち明の太祖洪武元年より、同三年、歸田の後に至るまで、その詩凡そ二百二十八篇、前後十三年間、作るところ、合せて千篇の多きに上る。この年、又自ら刪改を加へ、彙粹して一となし、凡そ九百餘篇、これを手定の集となし、謝徽、これに序す。これより、その法に死するまで、三歲の間、作るところは、未だ集を成さず。永樂元年、その夫人の兄の子周立、字を公禮といふもの、凡そ一千首を訂定して、甫里に刻す。正統の末、その版火に燬くるや、景泰の初、郡人徐庸、字を用理といふもの、遺佚を掇拾し、合せて一編となし、題して大全集といひ、劉昌の序を冠して之を刻す。手定の稿に比して、その增すところ、幾んど九百篇。これ蓋し最後三年間の作に非ずして、その多數は、靑邱が當日自ら棄て去りしものを其間に錯置せしこと疑なく、集中、往往にして複句ある、亦た此に本づく。淸の雍正年中、金檀が靑邱詩集に註するや、更に補入するところ、二百餘篇、篇什の宏富、愈よ加はると雖も、益す其舊を失ひしこと、固より論なし。金檀の註は、未だ博洽詳備を以て許すべからざるも、略ぼ其體を得、且つ其用を爲すに足る。今日、大全集と金檀註本と竝び行はると雖も、大全集は、訛誤殊に少からず、金檀註本は、補入の作、大概淺陋、ともに細心に觀玩して、識別するところなかるべからず。

扣舷集一卷、載するところの塡詞、凡そ三十二闋、大抵頽靡に失し、兩宋の雅音、すでに求むべからず、靑邱も亦た時習に沿うて偶ま指を染めたるに過ぎざるべし。鳧藻集五卷、收むるところの文、各體併せて、凡そ一百二十篇、紀昀、これを評して曰く、唐時、古文を爲るもの、俗體を矯むるを主とす、故に家を成すものは、蔚として鉅製なれども、家を成さざるものは、僻澁に流る。宋時、古文を爲るものは、先正を宗とするを主とす、故に歐蘇王曾よりして後、沿うて元に及ぶまで、家を成すもの、盡く門戶を闢く能はず、家を成さざるものも、亦た具に典型あり。啓、詩才富健、古を摹するに工に、一代の巨擘たり。而して、古文は、甚しく名を著さず。然れども、元末に生まれ、宋を去ること、未だ遠からず、猶ほ前輩の規度あり。洪宣以後、漸く流れて膚廓冗沓となり、臺閣體と號するものの及ぶところに非ず。この集、誰の編するところたるを知らざれども、その詩集を以て之を例するに、殆んど亦た啓の自定、蓋し平生の古文、この集に盡く、と。この集、はじめ、刻本なかりしが、周忱、蘇州巡撫たりしとき、はじめて鈔本を郡人周立（前に見ゆ、靑邱の夫人の兄の子）に得、正統九年、監察御史鄭子昂、又本を忱に得、因つて、敎授張素に命じて之を校刊せしめ、忱、これが序を作る。金檀の註を作るとき、舊刻原本を得、扣舷集と併せて詩の後に附刻せり。但し、註は、詩に限りて他の二集に及ばず。

靑邱の詩の我が邦に行はるること、すでに久し。その詩醇と稱するものは、菊池谿琴・齋藤拙堂の

選に係り、詩鈔と稱するものは、廣瀬淡窓の手に成る。別に中島棕隱は、金檀註本に就いて、律絕の部を校刊し、明治中、近藤元粹は、進んで同書の全部を活刷に附し、初學、その益を受くること、極めて多し。大抵、邦人の詩を學ぶや、はじめ張船山より入り、而して明の高青邱、而して宋の陸放翁、これを其鐵門限となす。船山詩草は前半、放翁は詩鈔、ともに覆刻あり。三家の詩、ひとり平易解し易きのみならず、兼ねて、その書の得易きに因りて、自然流傳の廣きを致せしものと思はる。ここに、青邱の詩を講述するに際し、金檀の註本に據りしことは、もとより論なきも、その引據未だ足らざるところは、諸書を參考して、その補訂を務めたり。希はくは、讀者、これに依つて、その大旨を領解するを得むか。

高青邱年譜

金檀の高青邱集註本には、卷首に年譜が冠してある。さう詳細ではないが、略ぼ事實を盡して居るし、殊に時事の項は、對照に極めて便である處から、ここには、それを節略して、附載することにした。

元順帝至元二年丙子　初めて生まる。

至元三年丁丑　二歳

至元四年戊寅　三歳

至元五年己卯　四歳

至元六年庚辰　五歳

至正元年辛巳　六歳　【時事】春正月己酉朔改元。

至正二年壬午　七歳

至正三年癸未　八歳

至正四年甲申　九歳

至正五年乙酉　十歳

至正六年丙戌　十一歳

至正七年丁亥　十二歳

至正八年戊子　十三歳　【時事】十一月、台州方谷珍の兵起る。

至正九年己丑　十四歳

至正十年庚寅　十五歳

至正十一年辛卯　十六歳　【時事】夏四月、詔して河防を修し、賈魯を以て總治河防使となす　五月、穎州劉福通の兵起り、韓山童の子韓林兒を奉じて主と爲す　九月、徐壽輝、蘄水を陥れて都となし、國を天完と號し、僭して帝と稱し、治平と改元す　【出處】未だ市里に喬せず、北郭に家せしとき、王行と比鄰、その後、徐賁・高遜志・唐肅・宋克・余堯臣・張羽・呂敏・陳則等、皆卜居相近く、仍つて北郭の十友と號し、一時詩酒の樂を極む。十子の名、この數年に肇まる。

至正十二年壬辰　十七歳　【時事】二月、徐壽輝、江州を陥れ、總管李黼、これに死す　定遠の人郭子興、兵を起して濠州に據るや、明の太祖、濠に入つて之に附く　三月、台州路の達魯花赤泰不華、兵を帥ゐ、方谷珍と澄江に戰つて之に死す　九月、余闕を以て淮西宣慰副使となし、安慶を守らしむ。

至正十三年癸巳　十八歳　【時事】五月、泰州張士誠の兵起りて高郵に據る、知府李齊、之に死す　明の太祖、義兵營を破り、滁陽に入つて之を守り、人を遣し、郭子興を迎へしめて滁に入り、滁陽王と稱す　【出處】この年、外舅周仲達、所交に語り、日を擇びて婚を成す。未婚以前は、仍ほ北郭に居りしが、旣婚以後は、北郭靑邱の間に往來す。

至正十四年甲午　十九歳　【時事】六月、張士誠、揚州を攻め、達識帖睦邇の兵敗る、尋いで盱眙及び泗州を陥る。

至正十五年乙未　二十歳　【時事】二月、劉福通等、韓林兒を迎へて至り、立てて以て帝と爲し、又小明王と號し、都を亳州に建て、國を宋と號し、龍鳳と改元す　三月、滁陽王卒す　六月、明の太祖、兵を起し、和陽より江を渡りて、太平路を取る。

至正十六年丙申　二十一歳　【時事】正月、天完主徐壽輝、漢陽に據る　二月、張士誠、平江に入つて之に據る　三月、明の太祖、師を帥ゐて金陵に克ち、集慶路を改めて應天府となす　張士誠、湖州・松州・常州の諸路を陥れ、制を矯め、饒介を以て淮南行省參政となし、蔡彥文を參軍と爲す　七月、張士誠、杭州を破る　余闕を以て淮南行省參知政事と爲し、仍ほ安慶を守らしむ　十月、淮安城破る、江東廉訪使褚不華、これに死す　【出處】饒介、啓の詩を覽て驚異し、以て上客と爲す　【著作】凡そ饒介・蔡彥文と酬答するものは、皆、この年以後に在り　送人戍梁溪　燕客次蔡參軍韻

退思齋　陪臨川公游天池

至正十七年丁酉　二十二歲　【時事】三月、徐達、常州を攻む、張士誠、その弟士德を遣して來り援けしめしが、徐達、兵を伏せて之を擒にす　五月、明の太祖、寧國等の路を取り、八月、揚州路を取る　張士誠、嘉興に寇し、屢ば楊完に敗られて、元に降る。元、士誠を以て太尉となし、その將吏を官すること差あり　九月、天完の將陳友諒、倪文俊を襲殺して、その軍を幷せ、自ら平章と稱す　十二月、天完の將明玉珍、成都に據る

至正十八年戊戌　二十三歲　【時事】正月、陳友諒、安慶を陷る、守將淮南行省右丞余闕、これに死す　五月、宋の劉福通、汴梁を破り、その主韓林兒を奉じて之に居る　七月、苗帥楊完、兵敗れて自殺す　張士誠、杭州嘉興に據る　十月、拜住哥、邁里古志を誘殺す　張士誠、兵を遣して紹興を守る　十二月、明の太祖、婺州路を取る　【出處】この年、饒介の幕に往來し、北郭諸友と互に相酬唱す、すでにして、外舅に依り、吳淞江の青邱に居り、自ら青邱子と號し、冬に至り、出でて吳越に游ぶ　【著作】靑邱子歌　甫里卽事　送張貢士會試　謁甫里祠　次韻春日漫興　爲外舅題畫　吳越紀游

至正十九年己亥　二十四歲　【時事】七月、張士誠、大に浙西諸郡の民を發して杭城を築く　九月、明の太祖、衢處等の州を取る。青田の劉基・龍泉の章溢・麗水の葉琛、及び宋濂を薦むるものあり、卽ち使を遣し、書幣を以て之を聘す。時に朱文忠等、金華を守り、復た王褘・王天錫を薦む。至れば、皆之を用ふ　詔して、使を遣し、御酒龍衣を以て張士誠に賜ひ、海運の糧を徵す。これより、士誠、每年米十餘萬石を運して、京師に至らしむ　十二月、陳友諒、その主徐壽輝を徙し、江州に都して、自ら漢王と稱す　【出處】時に吳越に游ぶ　【著作】郭芳卿弟子陳氏歌　築城詞

至正二十年庚子　二十五歲　【時事】五月、陳友諒、その主徐壽輝を弑し、遂に自ら帝と稱し、國を漢と號す　【出處】吳越に游び、青邱に歸る　【著作】送王禩赴大都

至正二十一年辛丑　二十六歲　【時事】明の太祖、師を帥ゐて漢を伐ちて、江州を拔く。漢主友諒、武昌に走る　【出處】青邱に寓す　【著作】贈薛相士

至正二十二年壬寅　二十七歲　【時事】正月、明の太祖、江西諸路を取る　二月、金華の苗軍、亂を作して、胡大海を殺す　四月、徐達、復た南昌を定め、朱文正に命じて之を守らしむ　張士誠、その屬饒介を以て、咨議參軍となせしが、秋、これを罷む　【出處】婁江に寓居し、婁江吟藁を作る　【著作】游天平山　別城中故居

至正二十三年癸卯　二十八歲　【時事】正月、明玉珍、帝を成都に稱し、國號を建てて夏といふ　詔して、使を江南に遣して樂工を求む　七月、漢主陳友諒、洪都を圍む。明の太祖、諸將を帥ゐて之を討ち、大に鄱陽湖に戰ふ。友諒、敗死し、子理立つ　張士誠、自ら吳王と稱す　詔して、

使を遣して糧を徵せしが與へず　【出處】婁江に寓して、城邑に往來す　【著作】癸卯九日

至正二十四年甲辰　二十九歲　【時事】正月、明の太祖、國を建てて吳といひ、二月、自ら將として漢を伐つ。漢王陳理降る。湖廣江西、悉く平らぐ　七月、太子愛猷識理達臘、冀寧に出奔して、擴廓帖木兒に依る　九月、明の太祖、起居注二員を起し、宋濂・魏觀を以て之と爲す　【出處】城邑に往來す。

至正二十五年乙巳　三十歲　【時事】三月、太子、大に兵を發して、孛羅帖木兒を討つ　五月、孛羅帖木兒、誅に伏す、太子を召して京師に還らしむ　【出處】郡中に居る　【著作】答衍師見贈　練圻老人農隱

至正二十六年丙午　三十一歲　【時事】三月、夏主明玉珍卒す、子昇立つ　四月、明の太祖、淮安諸路を取る。八月、兵を遣して張士誠を伐つ。九月、湖州諸路を取る。十一月、兵、平江に至りて之を圍む　十二月、宋主韓林兒卒す　【出處】時に圍中に在り。

至正二十七年丁未　三十二歲　【時事】明の太祖、元を建つ　九月、太祖、平江に克ち、吳王張士誠を執へて、以て歸るや、自ら縊る。その將、潘元紹等降る。その官屬饒介等、及び家屬流寓の人二十餘萬を金陵に徙し、平江路を改めて蘇州府と爲す　【出處】亂後、復た居を江上に移す。缶鳴集の自序に云ふ、近ごろ、江東の渚に客たりと。又云ふ、戊戌より丁未に至るまで、詩七百三十三篇を得たり、これに題して缶鳴集といふと。この年、女を亡ふ　【著作】答余左司元夕會飲　雨中春望　重午書事　弔七姬　送家兄西還　哭臨川公　聞家兄謫壽州　夢鍾離兩兄　兵後出郭　城西廢塢　秋日江居七首

至正二十八年、明太祖洪武元年戊申　三十三歲　【時事】正月、太祖、皇帝の位に金陵に卽き、洪武と改元す　五月、汴に幸して、元都を窺ふ　王褘、出でて漳州判となる　七月、汴より金陵に還る　閏月、兵、通州に至る、乙丑夜、元帝、北に去る　八月、庚申、師、大都に入る。學士詹同等十人に詔し、十道に分行して賢哲隱逸の士を訪求せしむ　九月、詔を下して賢を求む　十一月、夏元吉等を遣し、天下に分行して、賢才を訪求せしむ　大本堂を建て、起居注魏觀を以て太子說書となす　十二月、詔して元史を修す　【出處】江上に寓す、次韻周誼秀才の詩に、去年圍中在北郭、今年旅寓向江渚　とあるは、是れなり。詩內、又、弟兄離隔關山迴の句あり、兄の遷謫を送る、亦た斯時に在るを知る　【著作】亂後經婁江舊館　愛竹軒　幻住精舍　袁憲史由湖廣調福建　兵後逢張孝廉醇　次韻周誼秀才　江鄉吹簫　范園看杏花

洪武二年己酉　三十四歲　【時事】都督孫遇仙等十八人に詔して、天下の五嶽四瀆四海の神を祭らしむ　二月、詔して、元史を修し、左丞相李善長を以て監修たらしめ、前起居注宋濂・漳州府判王褘を召して總裁となし、山林遺逸の士、汪克寬・胡翰・宋禧・陶凱・陳基・曾魯・趙汸・張文海・徐尊

生・黄篪・傅恕・王錡・傅著・謝徽・趙壎及び啓、共に十六人を徴して、同じく纂修せしめ、局を天界寺に開く（一に十八人に作る。その二を逸す。今、姓譜中に於て、鮑頴を得たり。字は尙絅、歙の人、洪武の初、薦められて元史を修し、翰林修撰に陞り、出でて耀州同知となる。集中、五律幷に排律、鮑翰林を送るものあり、卽ち此。又陳鎰の甘白先生詩集の序に、張適、字は子宜、洪武の初、渤海の高季迪諸公と同じく徴されて、元史を修す。又王彝傳、王彝、布衣を以て召されて元史を修せしが、金幣を賜うて遣還す。當時徴されしもの三十二人、天界玩月の詩一十八人に作るものあり、今明史藁趙壎傳に據つて一十六人に作る）安南王陳日煃、使を遣して朝貢す　琉球國、使を遣して朝貢す　高麗王顓、使を遣して朝貢す　帝、藉田に耕す　四月、徐達、隴州に克つ、元將李思齊降る。師を移して慶陽を圍む、元將城を以て降る　博士孔克仁等に命じて、諸子に經を授けしめ、功臣の子弟は、咸な學に就かしむ　六月、宋濂を以て翰林學士と爲す　八月、元史成る　九月、朝燕饗舞の數を定む　十月、甘露、乾清宮に降る　楊璟を遣し、夏に使して招諭せしむ　冬至、昊天上帝を圜邱に祀り、仁祖を奉じて配す【出處】この年、薦を以て元史を修し、金陵に赴いて天界寺に寓す【著作】會宿鷄鳴山房將赴召不預　別內　將赴金陵泊閶門　赴京道中逢鄉友　赴京留別發土橋　過八岡　白鶴溪　次丹陽　寓天界寺　登天界寺鐘樓　至京師觀燈　聞雨聲憶故園　早至闕候朝　夢歸　寒食逢杜賢良飲　見花憶故園　己酉初夏　雨中登天界西閣　親舊寄酒　送葛省郎　寄張祠部　左掖作　送陳秀才　送聯書記　送傅侍郎　得二女消息　夜坐天界　訾吳粳　送金判官　賦得烏衣巷　登雨花臺　答內寄　眞氏女　送李架閣　送王哲　望茅山　贈楊滎陽　天界玩月　對辛夷懷徐七　送許先生　送證上人　送王孝廉　奉游西園　會宿成均　送錢判官　送劉省郎　胡普二博士同宿　至日夜坐送舒徵士　聖壽節　甘露降後庭　冬至車駕南郊　禁中雪　雪夜呈危宋二院長　奉天殿進元史　九日賜糕　送王錡赴北平　送哲明府　寄丁二侃　寄徐記室　得故人書因寄　晩過淸溪　晩晴　送朱謝二博士還吳　送內兄周誼還江上　晩登南岡　晩晴遠眺

洪武三年庚戌　三十五歲

【時事】二月、王褘、大本堂に敎ふ　四月、詔して、科を設けて士を取る　詔して、子樉等十人を封じて王と爲し、禮成るや、太廟に告ぐ　五月、親ら地示を方邱に祀り、百僚に詔して、射を習はしむ　六月、命じて、故の宋の理宗の頂骨を訪ねて、故陵に歸葬せしむ　七月、宋濂・王褘等、續修元史を進む　九月、禮書成る　魏觀を以て太常卿となし、侍讀學士に改め、尋いで祭酒に遷る【出處】この年、家を移して金陵に至り、天界を去り、遷つて鍾山里第に寓す　正月、開平王の二子、東宮に侍學す、命を奉じて之に經を授く　二月、翰林院編修を授けらる　七月、帝、闕樓に御して召對し、戸部侍郎に擢んでられしが辭す、金幣を給して放ち歸らしむ。すでに里に旋るや、復た江上の靑邱に居り、姑蘇雜詠を作り、四年十二月に至りて成るを告ぐ【著作】客中述懷　京師寓廨　家人至京　早春侍皇太子游東苑　送高麗使張子溫　淸明呈館

中諸公　喜逢萱卿　衍師見訪鍾山里第　送賈文學試舉歸吳　四月朔日休沐　題王翰林畫蘭　奉迎車駕享廟還宮　風雨早朝　謝賜衣　西清對雨　宿太廟　春日過直　晚出趨朝　送顧式　觀鷺　夢姊同謝國史游鍾山　追挽恭孝先生　封建親王賜宴　楊滎陽赴召至京　早出鍾山門未開　京師午日　京師秋興　辭戸部東還出都門　酬謝翰林　重過甘露寺　過白鶴溪　歸吳至楓橋　送徐山人還蜀山　至吳淞江　歸田園　南寺尋悟公　睡覺　訪李鍊師　效樂天　至蓮村　題高彥敬畫　天平山　始歸江上　嫣雛子歌　臘月二十四日

洪武四年辛亥　三十六歲　【時事】親ら進士を策し、吳伯宗等及第に出身を賜ふこと、差あり　六月、王師、蜀を平らぐ　魏觀を貶して龍南令となせしが、復た召して禮部主事となす　編修王褘をして吐蕃に諭さしむ　【出處】この年、江上より居を城南に移す　【著作】雨中曉臥　江上看花　贈沈蒙泉　贈治冠梁生　喜聞王師下蜀　丁孝廉惠冠巾　答胡博士二十韻　端陽寫懷

洪武五年壬子　三十七歲　【時事】十月、禮部主事魏觀を以て蘇州府知府となす　王褘を遣して、雲南故の元の梁王に諭さしむ　【出處】城南に居る。時に魏觀郡となり、舊あり、相與に往還す　【著作】兜羅被　江上晚歸　南州野人　雨後讀待制詩　九日

洪武六年癸丑　三十八歲　【時事】二月、蘇州府知府魏觀を陞せて四川行省參政となせしが、尋いで、蘇は大郡として其代を難んずるを以て、觀に命じて、復た蘇州に知たらしむ　十二月、故の元の梁王、使臣王褘・吳雲等を殺す　【出處】この年春、城南より徙つて、夏侯里に居る　【著作】出郊抵東屯五首　嫣雛太史自海上入郭　會宿城西　春草軒懷王太史　雨中不寐　陪張水部過西橋　五禽言

洪武七年甲寅　三十九歲　【時事】蘇州府知府魏觀、舊治を復するを以て劾せられて死す　【出處】啓等、魏觀の爲に文學を聞く、誣ふるもの、目するに觀に黨するを以てして罪を得、啓、王彝等と、皆、その難に與かる。

高青邱集 卷一

樂府

上之回

聖主重行幸。六蚪法乾旋。
北巡初避暑。東祠已祈年。
羣官從清塵。粲若星麗天。
前揚豹尾竿。左靡魚須旃。
瀚海通漢月。蕭關絶胡煙。
願奉千齡樂。皇躬長泰然。

上之回

聖主、重ねて行幸、六蚪、乾に法つて旋る。
北巡、初めて暑を避け、東祠、已に年を祈る。
羣官、清塵に從ひ、粲として、星の天に麗るが若し。
前には、豹尾の竿を揚げ、左には、魚須の旃を靡かしむ。
瀚海、漢月に通じ、蕭關、胡煙を絶つ。
願はくは、千齡の樂を奉じ、皇躬、長く泰然たらむ。

【字解】【一】行幸　蔡邕の獨斷に「天子車駕至るところ、令長三老、官屬を見、親ら軒に臨みて樂を作し、賜ふに食帛を以てし、民爵級あり、或は田租を賜ふ、故に之を幸といふ」とあつて、その地方の人民に、色色賜はり物があつて之に幸するところから、幸といつたのが始まりで、後には、唯だ其處に臨まれることを云ふ樣に成つたのである。【二】六蚪　蚪は虬に同じ、龍の屬。ここで

は馬を指す。もと馬は龍の神靈なるものが化成したものと考へられて居た。六蚓は卽ち六馬、天子乘御の車は、六頭の馬に引かせる。續漢書に天子五輅駕六馬といひ、揚雄の甘泉賦に、四蒼螭兮六素蚓とある。【三】法乾旋　易の乾卦に天行健とあつて、ここでは、天子が乾の卦象に法つて、天行健といふ通り、まめまめしく處處游幸するといふこと。【四】北巡初避暑　元の世には、毎年孟夏、駕、灤京に幸して、暑を避け、七月に還られる。高青邱の少時は、元末の世に當つて居るから、取り敢へず、當時の事實を取り入れたのである。【五】東祠巳祈年　東祠は城東の天壇、禮記の月令に「天子、乃ち來年を天宗に祈る」とあつて、卽ち東郊に天を祀つて、豫め來年の豐穰を祈るのである。【六】淸塵　司馬相如の諫獵書に犯屬車之淸塵とあつて、行幸の鹵簿が通過する時に起る車塵。【七】星麗天　麗はかかる。【八】豹尾竿　漢書揚雄傳の注に「大駕八十一乘、三行を作し、尙書御史、これに乘じ、最後の一乘に豹尾を縣く、以前は皆省中」とある。つまり、供奉せる尙書中書兩省職員の最後の車に建てる旗竿であつたが、後世は必ずしも其處ではないと見える。その名の示す通り、上に豹尾をぶら下げてある。【九】魚須旆　魚須の須は鬚に同じ、旆も旗。これは、旗竿の頂に魚鬚を付けて飾としたので、司馬相如の子虛賦に靡魚須之橈旃とあつて、その注に「海魚の鬚なり」とある。左といふのは、鹵簿の前頭の左側と見える。【一〇】瀚海　戈壁沙漠を指す、史記の匈奴傳に「驃騎將軍、左賢王と接戰す、左賢王遁走す。驃騎、狼居胥山に封じ、姑衍に禪し、翰海に臨んで還る」とあつて、注に「翰瀚同じ」とある。【一一】漢月　漢は、漢代、もしくは漢地、卽ち中國。ここでは後者とする方が旨意明瞭である。【一二】蕭關　一統志に「平涼府鎭原縣の西北に在り」といひ、王維の詩に愁看漢使蕭關外とある。もとは胡漢の境と看做されて居た。【一三】胡煙　胡地の煙。【一四】千齡　卽ち千年、魏徵の冬至樂章に穆穆我后、道應千齡とある。【一五】皇躬　聖躬に同じ、卽ち龍體。【一六】泰然　安らかにして動かざること。

【題義】樂府に就いては、かつて、李太白集に於て詳說して置いたから、ここには詳說せぬが、要するに、樂章竝に之と歷史的關係を有する幾多の附屬物を倂稱したものである。上之回は、古今樂錄に「漢の鼓吹鐃歌十八曲、四を上之回といふ」とあり、樂府正聲に「漢の短簫鐃歌曲」とある。いづれにしても、鐃歌、卽ち軍樂である。その起原に就いては、漢書武帝紀に「元封四年冬十月、雍に行幸し、五時を祠り、回中の道を通じ、遂に北して蕭關を出で、獨鹿鳴澤を歷、代よりして還つて河東に幸す」とある其時の事を指したものであらうといふことで、現に沈建の廣題には「漢曲、皆當時の事を美す」とある。靑邱の此作も、專ら原始的意義に沿襲したものであつて、北巡の一句の如き、聊か元時代の事實を匂はせてはあるが、格別の深義も無く、つまり、何時といふことに關係せず、天子が邊境を巡遊して後還幸になつたのを奉迎したものと見れば善い。

【詩意】わが聖天子は、重ねて行幸せられ、六頭立の馬車に召され、易に天行健といへるに法つて、まめまめしく巡遊せられた。そこで、最初には、暑を避くる爲に北巡し、次いで、豫め來年の豐穰を祈る爲に、城東の天壇に於て祭を行はれ、それから、諸方に赴かれ、多くの官人どもは、これに供奉して、御車の塵に從ひ、その粲然として、きらびやかなることは、列星の天に挂るが如くであつた。その鹵簿の前頭には、豹尾を下垂せる旗竿を押し立て、左には、魚鬚を飾とせる旗を靡かせ、威儀肅肅として練り行かれる。いつしか、帝威遠く邊疆の外に及び、今まで萬里の絕域として考へられて居た沙漠にも、中國の月が照り輝いて、淸光相通じ、華夷の限界たりし蕭關の近傍にも、胡地の煙を絕つて、中國と同じく、王化に霑ふ樣になり、つまり、帝國の版圖も益す廣く成つて來たので、これは、主として、聖主御威德の然らしむるところである。あはれ、千年の齡を保つて、長しへに、太平の樂

を享け、いつまでも龍體健に、泰然としておはされむことを祈るばかりである。

【餘論】この詩は、お目出たい一方で、命意もとより莊重、措辭も亦た典雅であるが、その性質上、格別の者ではない。唯だ瀚海の二句は、對偶を以て之を行り、聊かながら、精彩を添へた樣な趣がある。

君子有所思行

(一)騁望(二)京輔地。(三)金城千里餘。
(四)峩峩(五)松柏陵。(六)靄靄(七)桑柘墟。
(八)明堂(九)表青陽。(一〇)飛觀(一一)切紫虛。
況有(一二)戚里第。高樓夾(一三)清渠。
愛妾(一四)舞羅縠。(一五)嬖奴(一六)鳴珮琚。
(一七)東園賜祕器。(一八)上林(一九)乘副車。
(二〇)玄運有恆旋。盛時無久居。
勿嗤城南巷。寂寞(二一)揚雄廬。

君子有所思行

騁望す京輔の地、金城千里の餘。
峩峩たり松柏の陵、靄靄たり桑柘の墟。
明堂、青陽を表し、飛觀、紫虛に切す。
況んや、戚里の第あり、高樓、清渠を夾む。
愛妾、羅縠を舞ひ、嬖奴、珮琚を鳴らす。
東園、祕器を賜ひ、上林、副車に乘す。
玄運、恆に旋るあり、盛時、久しく居るなし。
嗤ふ勿れ城南の巷、寂寞たり揚雄の廬。

【字解】【一】騁望　目を馳せて遠望する。【二】京輔　漢書百官志に「擧初、長安に都す、京兆尹・左馮翊・右扶風、これを三輔といふ」とある。京師三輔の略。【三】金城　史記の秦本紀論贊に「關中の固、金城千里」とある。堅固なる城壁。【四】峩峩　高く聳ゆる貌。【五】松柏陵　松柏の叢生する陵墓。【六】靄靄　薄く霞んで見える。【七】桑柘墟　桑柘を雜植する村墟、柘は野生の桑。【八】明堂　天子の諸侯を會する處。【九】表青陽　爾雅に「春を青陽となす」とある。明堂は、宮城の東に當つて、卽ち春に應ずるといふ意。【一〇】飛觀　飛は、その勢飛舞せむとするを云ふ。觀は樓閣。唐書諸公主傳に「長寧公主、楊愼交に下嫁し、第を東都に造る、崇臺飛觀、相聯屬す」とある。【一一】切紫虛　天に接觸するといふので、樓閣の巍然として高きを形容して云ふ。江總の雙闕の詩に、「刻鳳棲靑漢、圖龍入紫虛」とある。【一二】戚里　史記の萬石君傳に「萬石君、名は奮。高祖、その姉を召して、美人と爲し、奮を以て中涓となす、書謁を受くるや、その家を長安中の戚里に徙す」とあつて、元は地名であるが、後には、外戚の居宅の所在地を云ふ。【一三】清渠　渠は溝、清は其水の澄めるを云ふ、曹植の賦に「臨淥渚之清渠」とある。【一四】舞羅縠　羅縠を著けて舞ふ、羅縠ともに薄絹。侍兒小名錄に「越苧蘿山の女を得たり、西施といふ、飾るに羅縠を以てす」とある。【一五】嬖奴　氣に入りの家僕。【一六】鳴珮琚　珮琚は卽ち佩玉、腰につける玉の飾、有官者に限る、家僕までが官職を授けられたといふ意。後漢書の梁冀傳に「冀、官奴秦宮を愛し、官、太倉令に至る」とある。【一七】東園賜祕器　漢書佞幸傳に「董賢、上に寵幸せらる、上方の珍寶、盡く董氏に在り。東園に至るに及びて、祕器珠襦玉柙、豫め以て賢に賜ひ、備具せざるなし」とある。【一八】上林　一統志に「西安府城内に在り」とある、宮城内の御苑。【一九】乘副車　副車は天子乘用の車に次げる車で、萬一の用に供するもの。史記佞幸傳に「韓嫣、かつて上と臥起す、詔あり、從つて、入つて上林中に獵す。天子の車駕、道に蹕して未だ行かず、先づ嫣をして副車に乘じ、數十騎を從へ、鶩馳して獸を視せしむ」とある。【二〇】玄運　玄は老子などの謂ふ道、卽ち宇宙の本體、玄運は天運に同じ。【二一】揚雄廬　漢書の本傳に「揚雄、字は子雲、成都の人なり。その先、岷山の陽に居る、郫といふ、田一廛あり、宅一區あり」と見ゆ、又盧照鄰の長安古意に寂寂寥寥揚子居、年年歲歲一牀書とある。

【題義】君子有所思行は、樂苑に「雜曲歌辭」とあり、樂府古題要解に「陸機の命レ駕登二北山一、鮑照の出登二銅雀臺一、沈約の晨策終南首、その旨、雕室麗色、久歡を爲すに足らず、燕安酖毒、滿盈宜しく敬忌すべきところなるを言ふ、是れなり」とあつて、つまり、物質的饒富の常住に非ざるを言うて、世の羣俗を戒めたのである。念の爲に、一番古い陸機の作を左に擧げることにする。

命レ駕登二北山一。延佇望二城郭一。廛里一何盛。街巷紛漠漠。甲第崇二高闈一。洞房結二阿閣一。曲池何湛湛。清川帶二華薄一。邃宇列二綺窗一。蘭室接二羅幕一。淑貌色斯升。哀音承レ顔作。人生盛行邁。容華隨レ年落。善哉膂粲士。營レ生奥且博。宴安消二靈根一。酖毒不レ可レ恪。無下以二肉食資一取中笑藜與上レ藿。

【詩意】高い處に登つて、三輔と稱する京城一帶の地を眺めると、堅固なる城壁が、千里に餘る位長く續いて居る。その城壁に沿うては、松柏の茂れる峩峩たる陵墓もあるし、靄靄として桑柘の霞める村里などがある。それから、城内で第一に目に付くのは、明堂であつて、東方に當り、卽ち靑陽の春を代表するものとして知られ、又、處處に聳えたる樓閣は、高くして、天にも屆きさうである。外戚の方方の居第は、水澄める溝渠を夾んで、高樓竝び起り、まことに、見事に且つ立派である。その外戚の第中に於て、愛妾は、薄絹をつけて舞ひ、氣に入つた家僕までが、官職を賜はつて、腰下の佩玉を鳴らして歩くといふ始末。まして、當主の尊貴にして、君寵を擅にせることは、東園に至りて祕器を賜はり、上林に於て副車に乘ずる位である。しかし、天運は、絶えず循環し、榮枯は、條忽の間に變ずるものであるから、盛なる時も、決して、永くは續かぬ。これに比べると、成都城南に小さな廬舍を構へて寂寞に甘んじ、一生懸命に勉强して居た揚雄の如きは、まことに偉いもので、決して、これを笑つては成らぬ。

【餘論】はじめは、京輔の騁望を寫し、城外より城内、それから戚里の諸第、第中の僕妾より、主人の榮華を極めたる現狀を描き出し、結四句に於て、本意を逗露したので、まさしく、映照の妙を極めて居る。

李夫人歌

(一)延年罷レ歌少(二)翁望。
(三)蘭芬凄凄銷二複(四)帳一。
(五)臨レ歿最難レ忘。
(六)歔欷不二相讎一。
陳二杯觴一列二燈火一。
(七)是耶非。幄中坐。

李夫人の歌

延年、歌を罷めて、少翁望む。
蘭芬、凄凄として、複帳に銷ゆ。
歿するに臨んで、最も忘れ難し。
歔欷して相讎はず。
杯觴を陳ね、燈火を列す。
是か非、幄中に坐す。

【字解】【一】延年　李夫人の兄、題義の條に見ゆ。【二】少翁　方士の名、亦た題義の條に見ゆ。【三】蘭芬　芬は香。【四】複帳　鄴中記に「冬月、月光錦を用ひ、白縑を以て裏と爲して、複帳と名づく、帳の四角、純金銀鑿鏤の香爐を安んじ、藉くに百和香を以てし、帳頂に金蓮花を安んじ、中に金箔織成の錦囊を

新宮漏殘星欲ㇾ墮。　新宮漏は殘して、星、墮ちむと欲す。

臨く」とある。【五】臨歿最難忘　漢書外戚傳に「はじめ、夫人、病篤し。上、自ら臨んで之を候す。夫人、被を蒙つて謝して曰く、妾、敢て燕媠を以て帝を見ず。上曰く、第だ一たび見ゆれば、我、將に千金を加賜して兄弟に尊官を予へむとす。夫人曰く、尊官は帝に在り、一見に在らず、と。上復た言ふ、必ず之を見むと欲す、と。夫人遂に轉鄕歔欷して復た言はず」とある。【六】歔欷　上に引ける漢書の文に見ゆ、すすり泣き。【七】是耶非　題義の條に見ゆ。【八】新宮　新に竣工せし宮殿。【九】漏殘　說文に「漏は銅を以て水を受け、節を刻す、晝夜百刻」とある。殘は、盡くる。

【題義】李夫人歌は、樂府詩集に「雜歌辭」といひ、樂府遺聲に「佳麗曲」とあつて、その題の示す如く、李夫人の事實を歌つたものである。李夫人の事は、漢書の外戚傳に見えて居て「李夫人、もと倡を以て進む。はじめ、夫人の兄延年、性、音を知り、歌舞を善くす。武帝、これを愛し、上に侍して歌舞す。歌うて曰く、

北方有二佳人一。絕世而獨立。一顧傾二人城一。再顧傾二人國一。寧不ㇾ知傾城與二傾國一。佳人難二再得一。

上、嘆息して曰く、善し、世、豈に此人あらむや、と。平陽主、因つて延年に女弟あるを言ふ。上、これを召し見る。妙麗善く舞ふ。これに由つて幸を得、昌邑の哀王を生む。夫人、早く卒す。上、思念して已まず。方士齊人少翁、能く其神を致さむと言ひ、廼ち、夜、燈燭を張り、帷帳を設け、酒肉を陳し、而して、上をして他帳に居らしむ。遙に好女を望み見るに、李夫人の貌の如し。幄に還つて坐し、而して歩するも、又就いて視るを得ず。上、益す相思うて悲感し、爲に詩を作つて曰く、

是耶非耶。立而望ㇾ之。偏何姗姗其來遲。

樂府の諸音家をして、これを絃歌せしめ、上、又自ら賦を爲り、以て夫人を傷悼す」とある。

【詩意】李夫人、すでに逝いてより、その兄延年の唱へた歌も、全く罷めて、復た奏せず、ただ方士の少翁が、その魂の在るところを望むばかり。蘭に似たる香も複帳の中に消え、物とはなしに、淋しく、凄じく、まことに傷心の極である。その李夫人が臨歿の有様は、武帝に取つては、最も忘れ難きものであつて、後向になつて啜り泣きをしつつ、とうとう顏を見せなかつたのは、長しへに物思の種となつた。そこで、少翁の計らひとして、杯觴を並べ、燈火を列ね、ありし日の魂を招き寄せ、それらしき女の姿は見えたものの、それかあらぬか、武帝みづからも判じ兼ね、つくねんとして帷幄の中に坐つて居られる。時しも、新宮の水時計は、將に盡きなむとして、爛たる星も墮ち、漸く夜あけに近づけば、心あわただしきを免れず、まことに、悽愴の極である。

【餘論】この詩は、事實を有りの儘に敍したのであるが、李夫人の生涯の事を短幅の中に織り込み、人をして、回顧思念に勝へざらしむる處は、流名に手際であつて、結一句は、餘情愈よ盡きざるを覺えしめる。

古別離

他人豈不レ別。所レ別諒（一）有レ由。
嗟君今何營（二）。輕薄好二遠遊一。
遙遙京洛（三）車。汎汎（四）江漢（五）舟。
君身非二賈胡（六）一。所（七）レ至自輒留。
徽音（八）已冥邈。思懷尚綢繆（九）。
（一〇）露滋二紅蘭春一。霜（一一）變二綠桂秋一。
此時望二歸來一。含レ情上二高樓一。
（一二）川塗本無レ限。君去焉得レ休。
願令二中（一三）斷阻一。化二彼山與レ邱。

古別離

他人、豈に別れざらむや、別るるところ、諒に由あり。
嗟す君、今何をか營み、輕薄にして遠遊を好む。
遙遙たり京洛の車、汎汎たり江漢の舟。
君が身は、賈胡に非ず、至るところ、自ら輒ち留まる。
徽音已に冥邈たり、思懷、尚は綢繆たり。
露は紅蘭の春を滋し、霜は綠桂の秋を變す。
この時、歸り來るを望み、情を含んで、高樓に上る。
川塗、本と限なく、君去らば、焉んぞ休するを得む。
願はくは、中より斷阻し、彼の山と邱とに化せしめむ。

【字解】【一】諒有由　まことに理由がある。【二】何營　何事をか營む。【三】京洛　洛陽を指す、一統志に「京洛は、今の河南府洛陽縣、爲貢豫州の域。成王、洛に營みて、王城の下都と爲す。平王東遷して、王城に居る。隋の煬帝、ここに都して、豫州といふ。唐には東都といひ、宋には西京といふ、故に京洛と稱す」とある。【四】汎汎　水に浮んで輕き貌。【五】江漢　揚子江と漢水、書經江漢の注に「江漢は源を梁に發し、荆に合流す、岷山に出づるものは江なり、大別に至つて漢に會す。嶓冢に出づるものは漢なり、大別に至つて江に會す」とある。【六】賈胡　商賈をする胡人、卽ち西域の商人。【七】所至自輒留　後漢書馬援傳に「伏波は、西域の胡賈に類す、一處に到れば、輒ち留まる」とあつて、その注に「言ふは、賈胡に似て、至るところの處、輒ち停留するなり」とある。【八】徽音　好音、德音に同じ、よき音信。【九】綢繆　まとひめぐる。【一〇】露滋紅蘭春　江淹の別賦に見二紅蘭之受一レ露とある。【一一】霜變綠桂秋　白居易の詩に綠桂爲二佳客一、紅蕉當二美人一とある。綠桂は、葉の茂れる桂樹。【一二】川塗　川は平原、塗は途に同じ。平原の上の道路。【一三】中斷阻　中より斷阻する、中斷して障害物を設ける。

【題義】古別離は、樂府詩集に「雜曲歌辭、楚辭に曰く、悲莫レ悲二兮生別離一、古詩に曰く、行行重行行、與レ君生別離、と。後、蘇武、匈奴に使し、李陵、これに詩を與へて曰く、良時不レ可レ再、離別在二須臾一、と。故に後人これに擬して、古別離を爲る。梁の簡文帝、又生別離を爲り、宋の吳邁遠に長別離あり、唐の李白に遠別離あり、亦た皆これに類す」とある。元來、別離に關した詞章は、詩經にも見え、その後、愈よ多いが、古別離は、均しく別離といふものの、その古義に沿うて、趣向を著けたのである。その他、生別離といへば、生の一邊を、長別離といへば長の一邊を、遠別離といへば遠の一邊を重んじて、各〻その構想を試むるを例として居る。

【詩意】別離の悲に苦むものは、ひとり吾のみではなく、他人とても、隨分有ることであるが、その別離に就いては、まことに止むを得ぬ理由があつて、出て行く男の心を諒とすることが出來る。しかし、自分は、これと異なつて居る。君は格別營むところあつて、その爲に遠方に出かけるといふのでもなく、ただ本來の資性輕薄にして、遠遊を好み、その爲に後に殘れる妻子の事などは、少しも顧み

ない。君の行くのは、何處かといへば、遙遙たる車を驅つて、北は京洛の地に向ひ、汎汎たる舟を泛べて、南は江漢の流を渉り、放浪、しばらくも止まず、おまけに、商賣をする西域の胡人でもないのに、到る處、いつまでも滯留して、なかなか歸らず、無論、故鄕の事などは、念頭にも無いと見える。されば、おのれ獨り空閨の中に居り、よき便りは、待てども來らず、君を戀ふる思ひは、結ぼれて、ほごす術だに無い程である。もとより垂れこめて居て、わが家の外に出ることもなく、露が紅蘭の花を濕ほせば、春たるを知り、霜が綠桂の色を變ずれば、秋だと領くばかり。今しも、君が歸つて來はせぬかといふので、情を含んで高樓に登り、はるかに眺めやれば、平原の上には、道路長く續いて、どこが終點といふこともなく、從つて、この路を行く君が、一たび去つて止むことの無いのも、尤も千萬の事である。出來ることなら、この平坦たる路を中斷して、山だの岡だのいふ障礙物に化せしめ、これより先には、行かれぬ樣にしたいものである。

【餘論】起首四句は、他人の別離自ら其由あるを云うて、情郞の遠遊を好むことに及び、遙遙の四句は、その行跡遠く、且つ客たることの久しきを述べ、徽音の四句は、自己に反折し、露滋、霜變の二句は、春秋の移り變ることよりして、暗に別離の久しきを云ひ、以下六句は、望中の景に就いて、新意を發し、願令二中斷阻一の二句は、絕望の極、情絕癡絕、古人に於ては、絕えて見ぬところである。

燕歌行

(一)清商(二)變レ節(三)朱火違。
(四)嚴霜塗レ庭(五)卉木(六)腓。
(七)邊城蚕寒(八)未レ授レ衣。
念君(九)遐征不レ能レ歸。
涼風時來動二(一〇)中闈一。
(一一)蠨蛸在レ戶(一二)熠燿飛。
賤妾(一三)宵興歎(一四)無レ依。
(一五)簪珥不レ施減二容輝一。
欲レ寫二憂思一撫二(一六)瑤徽一。
君今不レ在聽者稀。
(一七)啓明未レ出燈已微。
(一八)愛而不レ見徒歔欷。

燕歌行

清商、節を變じて、朱火違ふ、
嚴霜、庭に塗れて、卉木腓たり。
邊城の蚕寒、未だ衣を授けず、
念ふ君が遐征、歸る能はざるを。
涼風時に來つて、中闈を動かし、
蠨蛸は戶に在り、熠燿は飛ぶ。
賤妾、宵に興きて、依るなきを歎ず、
簪珥、施さず、容輝を減ず。
憂思を寫さむと欲し、瑤徽を撫す、
君、今在らず、聽く者は稀なり。
啓明、未だ出でず、燈、すでに微なり、
愛して見えず、徒に歔欷。

【字解】【一】清商　禮記に「孟秋の月、その音は商」とあつて、淸は、之を形容して云ふ。つまり、秋聲。【二】變節　時節を變換させる。【三】朱火　李太白の詩に朱火始改レ木とあり、詩經に七月流火の注に、「火は大火心星なり」とある、即ち夏に當れる大火心星が其處を變じて西に移つたといふこと。【四】塗庭　庭上に一ぱいになる。【五】卉木　草木に同じ。【六】腓　詩經に、百卉具腓とあつて、赤く變色する、即ち枯死する。【七】邊城　邊境の城塞。【八】未授衣　詩經に九月授レ衣とあつて、九月になれば、冬の衣服を用意する。【九】遐征　遠征に同じ。【一〇】中闈　閨中に同じ、闈は紗帳。【一一】蠨蛸　蜘蛛。【一二】

熠燿　螢の別名。【一三】宵興　夜中に起き出る。【一四】無依　この身を寄せる處が無い。【一五】簪珥　簪は頭上の釵、珥は耳飾、漢書東方朔傳の注に「珥は珠玉耳を飾るものなり」とある。【一六】瑤徽　說文に「琴節を徽といふ」とあつて、卽ち琴の絃、瑤は之を美して云ふ。【一七】啓明　太白、明星、卽ち金星、爾雅に「明星、これを啓明といふ」とあつて、その注に「太白星なり、晨に東方に見はるるを啓明となし、昏に西方に見はるるを太白となす」とある。【一八】愛而不見　楚辭の字面。

【題義】燕歌行は、樂府正聲に「相和歌辭平調曲」とあり、古題解に「魏の文帝、秋風蕭瑟天氣涼、別日何易會日難、等二篇、時序遷換して行役歸らず、佳人怨曠、訴ふるところなきを言ふなり」とあり、廣題に「燕は地名なり、言ふは、良人燕に從役して此曲を爲る」とある。後世になると、燕地には重きを置かず、唯だ夫を慕ふ思婦の情を述べることを旨として居る。念の爲に、文帝の秋風蕭瑟を次に掲載して置かう。

秋風蕭瑟天氣涼。草木搖落露爲㆑霜。羣燕辭歸鴻南翔。念㆓吾客游㆒多㆓思腸㆒。慊慊思㆑歸戀㆓故鄉㆒。君何淹留寄㆓他方㆒。賤妾煢煢守㆓空房㆒。憂來思㆑君不㆓敢忘㆒。不㆑覺淚下霑㆓衣裳㆒。援㆑琴鳴㆑絃發㆓清商㆒。短歌微吟不㆑能㆑長。明月皎皎照㆓我牀㆒。星漢西流夜未㆑央。牽牛織女遙相望。爾獨何辜限㆓河梁㆒。

【詩意】清き商聲の吹き動くや、季節、いつしか變じて秋となり、夏に其威を逞うした大火星も、その處を遷し、やがて、きびしく冷たい霜が、庭一面に降りると、草木の葉も、赤く枯れて仕舞つた。さなきだに、邊地の城塞は、遙に北方に當つて、寒氣の襲ふこと早きに、冬の衣裳も、まだ送らずにあるので、君が遠征久しきを經て、なかなか歸ることの出來ないのは、わが物思の種であつて、仕事も手に付き兼ねる始末。今しも、涼風は、時時吹き來つて、紗帳の中に入り、蜘蛛は、戶の上に巢を張り、螢は、光を曳いて飛んで來て、いづれも、時を知り顏に、秋は愈よ深く成つて來た。妾は、獨り寐の夢圓かならず、夜中に起き出でて、寄る邊なき此身の薄命を嘆き侘びつつ、自ら顧みれば、釵も差さず、耳飾も施さず、たださへ、粧を爲さぬのに、憔悴しては、愈よ容輝を減じて、醜く見える。そこで、物憂き心を寫し出さむとして、手馴れの琴を彈せむとしたものの、君し在らねば、聞いて吳れる人もなく、たとひ、彈いて見た處で、全く無益の業くれである。あけの明星は、まだ見えず、夜あけまでには、いささか時があるが、閨中の燈火は、將に滅せむとして、その影も薄くなつた。その殘燈影裏に獨坐し、戀しと思ふ人の見えぬを嘆きつつ、徒に啜り泣きをする、この有樣を、どうかして君に知らせたいものである。

【餘論】一應無難には出來て居るが、格別の名句もない。ただ欲㆑寫㆓憂思㆒撫㆓瑤徽㆒の二句は、篇中の精彩で、兼ねて、この詩の生命である。

吳趨行

吳趨行

(一)僕本吳鄕士。請歌㆓(二)吳趨行㆒。　僕は本と吳鄕の士、請ふ吳趨行を歌はむ。

(三)吳中實豪都。(四)勝麗(五)古所名。
(六)五湖(七)洶巨澤。(八)八門(九)洞高城。
(一〇)飛觀(一一)被山起。(一二)遊艦沸川橫。
(一三)土物既繁雄。民風亦和平。
(一四)泰伯德讓在。(一五)言游文學成。
(一六)長沙(一七)啓伯基。(一八)異夢表(一九)休禎。
(二〇)舊閥凡幾家。(二一)奕代產才英。
遭時各建事。(二二)徇義或(二三)騰聲。
(二四)財賦甲(二五)南州。(二六)詞華竝(二七)西京。
茲邦信多美。(二八)粗擧難(二九)備稱。
願君聽此曲。此曲匪(三〇)誇盈。

吳中、實に豪都、勝麗、古しへ名づくるところ。
五湖、巨澤を洶し、八門、高城を洞す。
飛觀、山に被つて起り、遊艦、川に沸いて横ふ。
土物、すでに繁雄、民風、亦た和平。
泰伯、德讓在り、言游、文學成る。
長沙、伯基を啓き、異夢、休禎を表す。
舊閥、凡そ幾家、奕代、才英を產す。
時に遭うて、各〻事を建て、義を徇へて、或は聲を騰ぐ。
財賦、南州に甲たり、詞華、西京に竝ぶ。
この邦、信に美多し、粗ぼ擧げて備に稱し難し。
願はくは、君、この曲を聽け、この曲、誇盈に非ず。

【字解】【一】僕本吳鄉士　作者高靑邱は、吳郡の北郭に生まれ、世、蘇州の人なるが故に云ふ。一統志に「禹貢揚州の域、天文は斗の分野、周の太伯仲雍、はじめて居るの地、武王、仲雍の曾孫周章を此に封じて、吳國となす」とある。【二】吳趨行　題義の條に見ゆ。【三】吳中　今の蘇州府城、古しへの姑蘇。【四】勝麗　形勝に據りて風景佳麗なること。【五】古所名　むかしから其名がある。【六】五湖　一統志に「太湖は府城の西南五十里に在り、禹貢、これを震澤といひ、周官・爾雅、これを具區といひ、史記・國語、これを五湖といふ。圖經、貢湖・遊湖・胥湖・梅梁湖・金鼎湖を以て五湖となす」とある。すると、五湖は、太湖の別名だといふ說と、貢湖等五個所の湖沼を併稱する說と、二つあるので、靑邱は、いづれを取つたか不明であるが、しばらく、前者に從ふことにする。【七】洶巨澤　澤は沮洳の地、又湖沼と同義に用ふることもある。ここでは、後者で、大きな湖沼が洶湧する。【八】八門　姑蘇志に「周の敬王六年、闔閭、國を有し、伍員、大城を創築し、門を爲る。東を婁といひ、匠といひ、西を閶といひ、胥といひ、南を盤といひ、蛇といひ、北を齊といひ、平といふ。歷代、皆その舊に仍る。梁の龍德二年、はじめて、甎を以て、裏を甃す。外に濠あり。宋初、門、すでに二を塞ぎ、惟だ閶胥盤封婁齊の六門のみ」とある。【九】洞高城　高い城壁を繰り拔く。【一〇】飛觀　前に見ゆ、高く聳えたる樓臺。【一一】被山　山を掩ひかぶせる。【一二】遊艦　遊舫に同じ、遊山船。【一三】土物　その地方の產物。【一四】泰伯　周の大王の長子。大王が末子の季歷を愛して、之を立てむとするを知り、次弟仲雍と共に、吳の地に逃れ來り、文身斷髮、以て用ふべからざるを示したから、季歷は、遂に大王の後を承けることになり、その子が文王で、やがて、周家八百年の基業を成した。その詳は、史記の周本紀・吳世家等に見ゆ。祝穆の方輿勝覽に圖經の序を引いて「泰伯、天下を遜り、季札、一國を辭す、德の化するところのもの、遠し、更に秦晉を歷て、風俗淸美」とある。【一五】言游　言偃、字は子游、孔子の弟子、論語に「文學には子游子夏」とある。なほ其の詳は史記仲尼弟子列傳に見ゆ。【一六】長沙　孫堅、漢末の人、三國志の本傳に「堅、議郎より長沙太守に拜せられ、義兵を興して董卓を討つ、袁術、堅を表して破虜將軍を行ひ、豫州刺史を領せしむ、後、武烈と諡す」とあり、姑蘇志に「孫王の墓は、盤門外に在り」と見ゆ。【一七】啓伯基　伯は霸と通ず、霸業の基を啓く。堅の子孫、權に至り、遂に帝と稱し、魏蜀と鼎立して、天下を三分した。【一八】異夢　吳書に「堅、世、吳に仕へ、富春に家し、城東に葬る。冢上、數ば光怪あり、雲氣五色、天に屬す。父老謂ふ、孫氏、其れ興らむ、と。母、堅を懷姙するに及び、腸出でて吳の閶門を繞ると夢み、寤めて之を懼れ、以て鄰母に告ぐ。鄰母曰く、安んぞ、吉徵に非ざるを知らむや、と。堅生まれて、容貌凡ならず、性闊達にして、奇節を好む」とある。【一九】

休績　日出たき祥瑞。【二〇】舊閥　むかしからの家柄、史記の功臣年表に「人臣、功に五品あり、その等を明かにするを閥といひ、日を積むを閲といふ」とあつて、門は家格を示すこと、又冊府元龜に「閥閲二柱、相去ること一丈、柱端に瓦筒を置き、號して烏頭となし、有爵者は、その門に之を立つ」とあつて、もと門柱の先端に瓦筒を置くことから、閥閲といふ名稱が出て來て、家格家柄の義に用ひたのである。【二一】奕代　累世に同じ、代代。【二二】徇義　國家の爲に大義を唱へる。【二三】騰聲　名譽を揚げる。【二四】財賦　財は物資、賦は租稅。【二五】甲南州　甲は第一、南州は南方諸州。蘇州府志に「天下の財賦、多く東南に仰ぎ、而して、蘇を甲と爲す」とある。【二六】詞華　詞章の華彩。【二七】西京　帝王世紀に「漢の高帝、長安に都し、光武、洛陽に都す。時人、洛陽を謂うて東京と爲し、長安を西京となす」とあつて、西京は卽ち長安。又三都賦の序に「班固、西都を賦し、張衡、西京を賦す」とあつて、班張二人、ともに後漢の人、その長安の事を述べた賦は、特に著名であつた。そこで、西京に竝ぶとは、班張二人に匹敵するといふ義。【二八】粗擧　その大略を擧げただけでといふ義。【二九】備稱　事こまかに名ざす。【三〇】誇盈　誇張して豐盈を旨とする。

【題義】吳趨は、蘇州城內の坊名で、姑蘇志に「吳趨坊は、皐橋の南に在り」と記してある。もと吳中の一坊であるが、その名義より、又その實際繁華なる處より、府城全體を代表するものとして考へられて居たので、吳趨行は、猶ほ吳中行といふが如く、つまり、吳中の景況を敍し、原注にも「古樂府に吳趨行あり、吳人、その土風を歌ふなり」といつて居る。

【詩意】予は、元と吳鄉の生まれであるから、ここに、吳趨行を歌ふのであるが、國自慢の段は、どうか大目に見て貰ひたい。吳中は、實に立派な都會であつて、その形勝に據り、風景の麗しいことは、むかしから、著名である。名だたる五湖は、廣大な湖沼であつて、波瀾洶湧し、堂堂たる八つの門は、高い城壁をくり拔いて、郭外に通ずる樣に成つて居る。城外には、高き樓臺が山に掩ひかぶさつて參差上下し、遊山舟は、沸くが如く川中に橫はつて居る。土地の產物は、種類と分量と、兩つながら豐富であるし、從つて、居民も、生活に不足なき處から、風氣も極めて平和である。ここは、むかしから、隨分人物が寄り集まつた處で、泰伯は、國を其弟に讓る爲に、此地に逃れ來り、謙恭の美德は、千歲の後、依然として存し、言游は、孔子に從學し、十哲の一人として、特に文學に達して居た。それから、孫堅は、その地より出て、長沙の太守に拜し、やがて霸業の基を啓き、その母が始めて姙んだ時は、不思議な夢を見たが、それは、目出たき祥瑞であつて、現に堅の子の孫權は、天下を三分して、帝と稱した。吳中には、むかしから、名高い門閥が幾家といふ程あつて、世世才俊英豪を產出し、これ等の人人は、時に遭うて、各〻事業を成し遂げ、國家の爲に大義を唱へて、聲譽を揚げた。吳中の物資租稅は、南方諸州の第一に算せられ、詞章の華彩は、かの西京を賦した班固・張衡と相竝ぶ位である。かくの如く、吳中は、美美しきことが澤山あつて、以上は唯だ其大略を擧げしに過ぎず、到底事こまかに名ざすことは出來ない。予は、ここに、吳趨行を歌つたが、君よ、願はくは、篤と此曲を聽かれよ、この曲は、有の儘を述べただけで、決して、誇張豐盈を旨としたものではない。

【餘論】起首二句は、單に發端に過ぎず、吳中の八句は、大體の形勢を述べ、泰伯の四句は、その地の人物を算し、舊閥の四句は、世世才英に乏しからざるに及び、財賦の四句は、財賦詞華ともに卓絕

したることを言ひ、結二句は、起首に呼應し、聊か勢が拔けて居るやうであるが、體裁上、まことに止むを得ぬことと思ふ。全體に於て、整つては居るが、兎角、活趣に乏しい樣な憾がある。

南山有烏

南山に烏あり

南山有烏北山羅。(一)　南山には烏あり、北山には羅、
兩地一(二)失驚風波。　兩地一失、風波に驚く。
哀鳴獨宿心靡他。　哀鳴獨宿、心、他なし、
竟抱幽恨歸山(三)阿。　竟に幽恨を抱いて山阿に歸る。
不及山上松。　及ばず山上の松、
纏綿同(四)女蘿。　纏綿、女蘿に同じきに。
君歸來。聽妾歌。　君歸り來つて、妾が歌を聽く、
相思感君情意多。　相思、君の情意多きに感ず。
贈君明珠淚滂沱。　君に明珠を贈つて淚滂沱、
死生茫茫終奈何。　死生茫茫、終に奈何。

【字解】【一】羅　鳥を捕ふる網。【二】一失　その處を失ふ。【三】山阿　阿は邊、或は側。【四】女蘿　古詩に與君爲新婚、兎絲附女蘿とあつて、その注に「女蘿は、松蘿なり」とあり、又、毛詩草木疏に「今松蘿、松に蔓して生ず」とある。つまり、女蘿は松樹に卷きつくものと決まつて居る。

【題義】これは、靑邱が新に作つた樂府で、古人には、その作例がない。原注に「吳王の女玉、韓重を悅びしが得ずして死す。重、遊學して歸り、往いて、その墓に哭す。玉の形、見はれ、重に明珠を贈り、歌を作つて曰く、南山有烏、北山張羅」とある。玉は本名紫玉、吳王は卽ち闔閭。靑邱は、純ら古辭の意に沿襲し、且つ其起首の字を取つて題としたので、その意義の範疇、自ら定まつて居るところは、卽ち樂府の特質である。

【詩意】南山には烏が居るし、北山には烏を捕ふる網が張つてある。されば、烏は何時までも、南山に居れば善いので、北山に向へば、險呑千萬である。おのれは王者の娘で、もと深宮の中に養はれて居るべきものであるのに、妄りに、外間の人を戀うたのは、丁度、南山の烏が飛んで北山に向つた樣なもので、一たび其處を失へば、風波に比すべき災難が起つて、驚かざるを得ぬ樣なことになる。かくて、おのれは、伴もなく、ひとり淋しく居て、悲しげに鳴き暮らし、人を戀ふる以外には、他の心なく、とうとう焦がれ死に死んで仕舞つて、幽恨を抱いた儘、山側に葬られた。その山上の松には、女蘿が纏ひ付いて、兩者互に相離れずに居るが、おのれは孤棲して、戀ふる人と相遇はず、して見れば、到底女蘿にも及ばぬ譯である。今しも、君は游學を畢つて、歸り來り、そして墓前に哭して、

ちッとおのれの歌を聽いて居られる。今まで頻りに焦がれて居た心には、君の情意の厚きを感ずること、愈よ多く、決して、おろそかには致さぬ積り。そこで、君に明珠を贈つたが、涙滂沱として止めもあへず、おのれと君とは、死生茫茫、幽明處を異にし、今さら、奈何ともすることの出來ないのは、愈よ以て恨の種である。

【餘論】起四句は、紫玉の薄命なる生涯を敍し、不レ及二山上松一の二句は、反襯頗る趣がある。君歸來より以下は、韓重の事に繫けて云つたので、死生茫茫の七字は、人をして、語語咽絕を疑はしめる。

玉波冷雙蓮

玉波冷雙蓮

（一）金風暮剪（二）雙頭蘂。　金風暮に剪る雙頭の蘂、
啼臉辭レ秋嫣血紫。　啼臉、秋を辭して、嫣血紫なり。
（三）宮女三千罷二笑喧一。　宮女三千、笑喧を罷め、
（四）錦雲障冷鴛鴦死。　錦雲障冷にして鴛鴦死す。
滿江煙玉流二（五）古香一。　滿江の煙玉、古香を流し、

【字解】【一】金風　禮記の月令に「孟秋の月、盛德金に在り」といひ、卽ち秋風。【二】雙頭蘂　一つの花に雌蘂が二つある。【三】宮女三千　漢武故事に「上、明光宮を起し、燕趙の美女三千人を發して、之に充つ」とあつて、漢代以後、いつでも宮女三千といつて居る。春秋の頃の諸侯國は、どうか分からぬが、ここでは、後世の通稱に從つたのである。【四】錦雲障　錦雲の如き模樣を彩りたる衝い立。【五】古香

尋レ魂弔レ影愁茫茫。　魂を尋ね、影を弔うて、愁茫茫。
吳天墜露衰紅濕。　吳天の墜露、衰紅を濕し、
一夜波涼小龍泣。　一夜、波涼しく、小龍泣く。

李賀の詩に、南山老桂吹二古香一とある。

【題義】これも、靑邱が古題を探し出して、その文詞の缺を補つたので、原注に「唐の處士李甗、夜、震澤に游んで女郞に逢ふ、爲に玉波冷雙蓮の曲を歌ふ、曰く、これ吳宮の二隊長を哀むの辭と。又その製するところの芷秀葯華の曲を歌ふ。蓋し、龍女といふ。二曲、世皆傳はらず、予、戲に爲に之を補ふ」とある。なほ李甗の事は、翁澍の具區志に詳しく、これが卽ち靑邱の準據したものであらうと思はれる。今、その文を抄すれば「唐の大曆の初、處士李甗、秋夕、震澤に於て、艫を捨てて野步し、望中煙火を見、漁家たるを意ふ。漸く近づけば、卽ち朱門粉雉、嘉木修竹、畫舟、白蓮中に倚る。徘徊して未だ敢て前み入らず。俄に靑衣あり、出でて曰く、君は李處士に非ざるか、願はくは、少しく進むことを得む、と。甗、步に隨つて入れば、瓊窗洞戶の中、女郞あり、狹體環質、衣、雲霓の如し。生を揖して曰く、嘉德を延佇し、積むこと年あり、今夕何の夕ぞ、邂逅相逢ふ、と。靑衣に命じ、方丈を捧げ、酒を珊瑚の鍾に酌んで、以て勸む。侍兒數輩、樂を執り、女郞、曲に倚り、玉波冷雙蓮の

曲を歌うて曰く、これ吳宮の二隊長を傷むの辭、某は人に非ざるなり、龍宮に生まれて、楚辭を好む。君、能く我が一曲を受けて、世人に傳へむや、と。乃ち水晶簪を以て盤を扣いて、芷秀葯華の辭を誦す。俄にして、鐘聲、水を隔つるを聞く。女郎曰く、これ清虛の士に非ざれば、游ぶことを得ずと。素綃を持し、生を送つて門を出で、扉を閉ぢて悄然たり。生、徐に清潯を歩すれば、朝日すでに上る。廣陵の胡人、その綃を識つて曰く、龍頷小霄の緝むるところなり」とある。震澤は、卽ち五湖。話中の女郎は、前後の關係から、云ふまでもなく龍女。その龍女が、何故に吳宮の二隊長を弔ふ辭を歌つたか、その理由は分からぬが、或は湖邊に二隊長の墓とかいふ樣な遺跡があつたからと思はる。なほ、吳宮の二隊長が、孫武に斬られて命を失つたことは、極めて名高い事實で、史記の孫子列傳に「吳王闔閭、婦人を以て兵を試みしむ、武子、王の寵姬を以て、左右の二隊長と爲す。申令の後、二隊長、大に笑ふ。武子、これを斬る」とある。無論、これは節略したので、その詳は、原文に就いて見て貰ひたい。

【詩意】吳宮の二隊長が孫武に斬られた其光景は、つれなの秋風、颯として吹き至り、物さびしき夕暮に、蓮の花の中なる雙頭の蘂を吹き剪つた如くである。二隊長は、泣き顔をそむけた儘、其花の秋に辭するが如く斃れたが、跡には、嫣血紫を染めて、宮階の前に注いだであらう。かくて、女兵たりし三千の宮女どもは、孫武の威に懾れて、最早笑ひどよめくことを爲さず、進退先後、孫武の命に從ひ、水火を踏むも厭はぬ樣に揃つたが、錦雲を描ける衝い立は、兩個の鴛鴦に比すべき二隊長の屍を冷に匝つて居た。ここに、數千年後の今日、滿江の碧水は、煙を帶びたる玉の如く、むかしながらの匂を留めて、さすがに美人の遺跡たるに負かず、しかも、魂を尋ね、影を弔はむとすれば、愁茫茫として、何處に向ふべきかを知らず。今しも、秋、將に闌ならむとし、渺渺たる吳天は、露落つること繁く、半は衰へし蓮の花の紅なるを濕し、夜の波、岸をゆすつて、涼しき折から、潭底には、小龍女が吳宮の故事をしのびて、傷心の餘、よよと泣いて居る。

【餘論】前半四句は、二隊長が死に就く時の光景、後半四句は、龍女が之を弔うたことを想像して言つたので、その措辭の幽妙なるは、卽ち神韻の縹渺たる所以、殊に吳天の二句は、新婉工麗を極めて居る。

芷秀葯華

春香上(一)羅襦暗引(二)蘭橈渡。
蝶散掩(三)紅房(四)王孫歸已暮。
(五)斜條拂蛾眉(六)采擷同(七)芳杜。

芷秀葯華

春香、羅襦に上り、暗に蘭橈を引いて渡らしむ。
蝶は散じて紅房を掩ひ、王孫歸らば、すでに暮れむ。
斜條、蛾眉を拂ひ、采擷、芳杜に同じ。

(八)脈脈雨煙濃。(九)江皐斷腸路。　脈脈として、雨煙濃かに、江皐、斷腸の路。

【字解】【一】羅襦　史記の滑稽列傳に「羅襦、襟解けて、微に薌澤を聞く」とある。薄絹の肌著。【二】蘭橈　梁の簡文帝の采蓮曲に、「桂楫蘭橈浮二碧水一」とある。木蘭で作つた楫。【三】紅房　蘂の部分で、卽ち花心。【四】王孫歸已暮　史記の淮陰侯傳に、「我、王孫を哀んで食を進む」とあつて、その注に「秦末、多く國を失ふ、王孫公子といふは之を尊ぶなり」とある。後には、貴遊年少輩を指して云ふ。それから、楚辭に、芳草兮萋萋、王孫兮不レ歸とある。【五】斜條　斜に生じたる葉。【六】采擷　二字ともに摘み取る。【七】芳杜　吳均の詩に、達洲茂二芳杜一とあり、說文に「杜は甘棠なり、赤きものを杜となし、白きものを棠となす」とある。【八】脈脈　連延して絕えざる貌。【九】江皐　皐は澤地、屈原の九歌に朝馳二鶩於江皐一とある。

【題義】芷秀菂華の由來は、前詩の題義の條に見えて居て、原注にも「事は前に見ゆ、芷は卽ち菂なり、香草、吳中に出づるもの佳なり」とあるし、博雅に「芷葉、これを菂といふ」とある。芷は蘭の種類、芷秀菂華とは、それが秀でて生長し、且つ花を著けたといふので、つまり、香草の花に就いて興を起し、遠遊の人の歸り來らぬを怨んだ意を述べたのである。

【詩意】蘭にまがふ岸芷が花を開き、その香は、美人の羅襦に吹き上る位、自然、木蘭の舟を引きつけて、此處に來させやうとして居る。そこで、早く往けば善かつたが、やがて、花心すでに萎めば、香も無くなつて、今まで集まつて居た蝶は散じて仕舞つた。女どもの早く來なかつたのは、王孫を待つて居たからであるが、いつまでも歸り來ず、歸つて來た處で、春はすでに暮れて、折角の岸芷も、最早見るに足らぬであらう。女どもは、兎も角も、ここまで來たからといふので、斜に生じたる葉をちぎつて、おのが顏に當てて蛾眉を拂ひ、それを珍らしさうにすることは、さながら、芳杜を摘んだやうである。時しも、小さめそぼふりて、脈脈絕えず、あたりは暗く煙つて、江皐の路すがら、斷腸の思を催すばかりである。

【餘論】一往情深くは、出來て居るが、宛轉の致が聊か足らぬ様である。具區志の本文に龍女の言を載せて「某は人に非ざるなり、龍宮に生まれて、楚辭を好む、君、能く我が一曲を受けて世人に傳へむや」といひ、水晶簪を以て盤を扣きつつ、芷秀菂華の辭を誦したといふからには、この辭は、もと楚辭體であつたに相違なく、靑邱の擬作、亦た宜しく然るべき筈である。それを五古を以て行つたから、どうやら、堅くなり過ぎて、柔か味が足らぬのも、必然の結果である。すべて、詩は、その由來に關係し、その內容に適應して、その體を擇ぶべきもので、これは、靑邱その人に取つては、疑もなく、千慮の一失であらうと思はれる。

吳鉤行

(一)吳鉤若霜雪。吳人重(二)游俠。
樽前含笑看。上有(三)仇家血。

吳鉤行

吳鉤は霜雪の若く、吳人は游俠を重んず。
樽前、笑を含んで看れば、上に仇家の血あり。

【字解】【一】吳鈎　題義の條に詳しく述べるが、鈎は曲つて居る刀で、吳地で出來るのが、むかしから鋭利比なしと稱せられて居る。【二】游俠　男伊達。【三】仇家　怨ある家の者。

【題義】 これも青邱の新題で、原注には「吳鴻扈稽なり」とあるが、これだけでは、一寸分からぬ。吳越春秋に「闔閭、すでに莫邪を寶とし、復た命じて金鈎を作らしむ。令して曰く、能く善鈎を爲るものは、これを百金に賞せむと。鈎を作るもの甚だ多し。人あり、王の重賞を貪るや、その二子を殺し、血を以て金に釁り、遂に二鈎を成して、以て獻じ、鈎に向つて子の名を呼んで曰く、吳鴻扈稽、我、ここに在り、と。聲、口に絕ゆれば、鈎、ともに飛んで父の胸に著く。王、大に驚き、乃ち百金を賞し、遂に服して身を離さず」とある。これは、吳鈎の由來で、その鋭利なることも、直に推測される。杜甫の前出塞にも少年別有贈、含笑看吳鈎とある。青邱の此詩は、吳鈎の鋭利と吳人の游俠とを合敍したので、いづれが主といふこともない。

【詩意】 吳地の曲刀は、磨ぎ澄まして霜雪の如く、これを佩ぶるものは吳人、吳人は、性來游俠を重んじ、人を殺すことなどは、何とも思はず、無論、この吳鈎が每度役に立つ譯である。游俠以て命となせる吳人は、罇前に坐して、その吳鈎の拔身を眺め、ためつ、すかしつ、かつて怨を報じた仇人の血痕が全く拭ひ終らず、聊か殘つて居るのを認め、覺えず微笑を漏らして、さも快げに見えた。

【餘論】 この詩は、僅僅二十字であるが、俠客豪爽の面目、さながら見るが如く、まことに、寸鐵人を殺す底の趣がある。

短歌行

置酒高臺　樂極哀來
人生處世　能(一)幾何哉
日西月東　百(二)齡易終
可嗟(三)仲尼　不(四)見周公
鼓(五)絲拊(六)石　以(七)永今日
歡以別虧　憂因(八)會釋
燕(九)鴻載鳴　蘭無(一〇)故榮
子如不樂　白髮其(一一)盈
執子之手　以酌我酒
式(一二)詠短歌　爰祝(一三)長壽

短歌行

酒を高臺に置く、樂極まつて哀來る。
人生世に處る、能く幾何ぞや。
日は西に、月は東に、百齡終り易し。
嗟すべし、仲尼、周公を見ず。
絲を鼓し、石を拊ち、以て今日を永うす。
歡は別を以て虧け、憂は會に因つて釋く。
燕鴻、載ち鳴き、蘭に故榮なし。
子、もし樂まずんば、白髮、其れ盈たむ。
子の手を執り、以て我が酒を酌ましむ。
式て短歌を詠じ、爰に長壽を祝す。

【字解】【一】能幾何哉　能く幾何の歳月を經るべきかといふ意。【二】百齡　百年に同じ。【三】仲尼　孔子、名は丘、字は仲尼、その母が尼山に禱つて之を生み、且つ第二子だから仲尼といつたのである。【四】不見周公　論語に孔子の語を載せ「甚しいかな、吾が衰へたる、吾、復た夢に周公を見ず」とある。孔子は、壯年の頃、刻苦して道を求め、自然に感通して、數ば夢に周公を見たが、晩年に成つては、氣力大に衰へて、復た舊日に似ず、仍つて、最早周公を夢みることも無い樣に成つたと云つて嘆息されたのである。【五】鼓絲　琴瑟の類を彈ずる。【六】拊石　磬を敲く。【七】以永今日　今日といふ日を成るべく永くして樂まうといふ意。【八】因會　會は會面、會晤。【九】燕鴻載鳴　鴻は雁の大なるもの、載は乃ちに同じ。禮記の月令に「仲春の月、玄鳥至り、仲秋の月、鴻雁來る」とある。玄鳥は卽ち燕。この句は、燕が鳴き、それから雁が鳴くといふので、春に成り、やがて又秋に成るといふ意。【一〇】故榮　前日の花、卽ち花の盛みしことをいふ。【一一】其盈　頭上に一ぱいに成る。【一二】式　以てと訓すべし。【一三】祝　もと祝史、卽ち神に仕ふる人、神主の義。それから轉じて、將來の多幸を神に願ふ、卽ち祈る。これを單に慶賀の意味に見るのは、わが邦人の誤用である。

【題義】 短歌行は、樂府正聲に「相和歌辭平調曲」とあり、題解に「魏の武帝の對レ酒當レ歌、人生幾何、晉の陸機の置二酒高堂一、悲歌臨レ觴、皆當に時に及んで行樂すべきを言ふなり」とある。魏の武帝の作は、月明星稀の二句が東坡の前赤壁賦に引いてある處から、かなり、世に知られて居る。しかし、青邱の此作は、全然、陸機の作に倣つたものであるから、左に之を引抄して置かう。

置二酒高堂一。悲歌臨レ觴。人生幾何。逝如二朝霜一。時無二重至一。華不二再揚一。蘋以レ春暉。蘭以レ秋芳。來日苦短。去日苦長。今我不レ樂。蟋蟀在レ房。樂以レ會興。悲以レ別章。豈曰レ無レ感。憂爲レ子忘。我酒既旨。我肴既臧。短歌可レ詠。長夜無レ荒。

序に云ふが、樂府題として、別に長歌行といふのがある。短歌と長歌とは、何も篇幅が短いとか長いとか云ふ樣なことから名づけたのではなく、短歌は前にも述べた通り、時に及んで樂を爲すべきを言ひ、長歌は、芳華久しく留まらず、當に努力して樂を爲すべく、老大に至りて傷悲する樣なことが有つては成らぬといふ意を述べ、その究極は、粗ぼ同じ樣であるが、その構想の次第が違ふ。樂府は、すべて此の如く、その題に特有なる意義があつて、その詠出すべき內容は、前以て一定し、その窮屈なる範圍內に於て、作者の才思を騁せむことを試みるのである。

【詩意】 酒を高臺の上に置いて、さて宴を始めやうとするに際し、驀然、感觸する處あつて、樂極まり哀來るを覺え、物とはなしに淒涼悲惋の思に堪へぬ。おもへば、人は斯世に居て、幾何の年月を持ちこたへられやうか。百歲は、もとより難く、七十でさへ、古來稀なりといふ位。日が西に沒すれば、月が東に出る。每日かくの如くして、烏兎の運行は、しばらくも止まらず、百年の長きも、容易に過ぎ去つて仕舞ふ。老年になると、元氣往日に似ず、孔子の聖を以てしても、再び夢に周公を見ないと云つて嘆息された位。されば、琴瑟を彈じ、磬を敲き、樂を奏して、せめては、今日の一日を長くして、十分愉快に遣つて見やうでは無いか。元來、折角の歡樂も、別離の爲に虧けて仕舞ふが、反對に、憂思は、良友の會合に因つて、消釋するものである。春になれば、燕が來て鳴き、秋になれば、雁が大空を度つて叫ぶ。節物の推移は、實に瞬く間の事であつて、蘭の花は、いつまでも咲いて

は居らず、前日の榮は、見る影もない様に成つて仕舞ふ。今、君にして樂まざれば、やがて、白髮が頭に一ぱいに成るであらう。そこで、君の手を執つて引き寄せ、この酒を酌み玉へといつて勸め、序に、この短歌を詠じ、時に及んで行樂すべき趣旨を述べ、君の齡長かれかしと祈る次第である。

【餘論】全體は、陸機の作に依倣して、聊か改竄を施したに過ぎぬが、歡以別虧、憂因會釋は、原作の樂以會興、悲以別章に比して、愈よ人に近きを覺える。

白馬篇

白馬銀鏤鞍（一）。流光皎如練（二）。
龍沙（三）積雪裏。一去誰曾見。
昨日羽林兒（四）。獨拜建章殿（五）。
天子親賜與。騎向交河（六）戰。
疾驅不辭家（七）。恐獲逗遛譴。
萬里倏若飛。神速虜難變。
前收日逐屯（八）。右斷康居（九）援。
事定入關（一〇）來。箙中（一一）有餘箭。

白馬篇

白馬銀鏤の鞍、流光皎として練の如し。
龍沙積雪の裏、一去誰か曾て見む。
昨日、羽林の兒、獨り拜す建章殿。
天子、親ら賜與、騎して交河に向つて戰ふ。
疾驅して家を辭せす、恐らくは逗遛の譴を獲む。
萬里、倏として飛ぶが若く、神速、虜、變じ難し。
前に日逐の屯を收め、右に康居の援を斷つ。
事定まつて關に入つて來る、箙中に餘箭あり。

【字解】【一】銀鏤鞍　銀鍍金をした鞍、李白の少年行に銀鞍白馬度春風とある。【二】流光皎如練　流光は馳せ行く馬の光彩、皎は白きこと、練は練り絹。韓詩外傳に「顏淵、吳門を望み、一匹練を見る。孔子曰く、馬なり」とあり、謝莊の舞馬賦に、狀吳門之曳練とあり。【三】龍沙　後漢書班超傳に、坦步蔥雪、咫尺龍沙とあつて、その注に「蔥嶺・雪山・龍堆・沙漠なり」とある。龍堆は、卽ち白龍堆、沙漠の近傍に在る小丘。【四】羽林兒　漢書百官公卿表の注に「羽林は、宿衞の官、その羽の疾きが如く、林の多きが如きを言ふなり。武帝の太初元年に置き、建章營騎と名づけ、後に名を羽林騎と更む。又、從軍死事の子孫を取り、羽林官に養ひ、敎ふるに五兵を以てし、羽林孤兒と號す」とある。つまり、天子の親兵、近衞兵、又、皇宮警視の樣な職に服して居たものと見える。【五】建章殿　漢宮の名、三輔黃圖に「建章宮に殿臺等三十六殿あり」といひ、禁城の中心たる宮殿であらう。【六】交河　漢書西域傳に「車師の前王、交河城に居る、河水交流して城を繞る、故に交河といふ」とある。【七】不辭家　家に歸つて暇乞をする暇もない。【八】日逐屯　日逐は匈奴輔相の姓氏、漢書宣帝紀に「日逐王先賢撣、人衆萬餘を將ゐて來り降る」とあり、晉書匈奴傳に「呼延氏、最も賢、すなはち左日逐・右日逐あり、世、輔相たり」とある、屯は屯營。【九】康居　西域の國名、漢書西域傳に「康居は、長安を去ること萬二千里」とある。【10】關　邊關、多分玉門關を指すのであらう。【二】箙中　周禮考工記の注に「箙は箭を盛る器なり」とあつて、卽ちえびら。

【題義】白馬篇は、樂府詩集に「雜曲歌辭齊瑟行」とあり、歌錄に「名都・美女・白馬、竝に齊瑟行なり、皆首句を以て篇に名づく。人、當に功を立て、事を立つべく、力を盡して國の爲にし、私を念ふべからざるを言ふなり」とあり、又、題解に「曹植の白馬飾金羈、鮑照の白馬騂角弓、沈約の白馬紫金鞍、皆邊帥戰征の狀を言ふなり」とある。就中、曹植の作が一番古くて、後人の範となつて居る

から、下に之を擧げることにする。

白馬飾㆓金羈㆒。連翩西北馳。借問誰家子。幽幷游俠兒。少小去㆓鄉邑㆒。揚㆑聲沙漠垂。宿昔秉㆓良弓㆒。楛矢何參差。控㆑弦破㆓左的㆒。右發摧㆓月支㆒。仰㆑手接㆓飛猱㆒。俯㆑身散㆓馬蹄㆒。狡捷過㆓猨猴㆒。勇剽若㆓豹螭㆒。邊城多㆓警急㆒。胡虜數遷移。羽檄從㆑北來。厲馬登㆓高隄㆒。右驅蹈㆓匈奴㆒。左顧陵㆓鮮卑㆒。寄㆓身鋒刃端㆒。性命安可㆑懷。父母且不㆑顧。何言子與㆑妻。名編壯士籍。不㆑得㆓中顧㆑私。捐㆑軀赴㆓國難㆒。視㆑死忽如㆑歸。

【詩意】白馬に銀鍍金せる鞍を置いて、勢よく馳せて行く、それを遠方から眺めると、流るる光彩は皎皎として、さながら練絹を引いた樣である。その行く先は、積雪の中に埋もれたる龍堆沙漠の先だといふことで、一たび此を去れば、誰も最早遇ふことも出來まいと思はれる。これは、羽林宿衞の者であつて、昨日、建章殿に於て拜謁すると、天子は、辱くも物を賜はり、仍つて敕命を畏み、馬に騎して、遠く西域なる交河に向つて征戰せむが爲に、直に發足し、家に歸つて暇乞をする餘裕だに無い位。愚圖愚圖して居ると、滯留の廉を以て譴責を受ける虞がある。かくて、萬里の遙なるも、一息に馳せ行き、倏として飛ぶが如く、その神速なることは、胡人どもが邪魔をしても、變ずることが出來ぬ程である。やがて、愈よ其地に至り、奮鬪力戰、前には匈奴日逐王の屯營を收めて漢の有となし、右には康居の援兵を斷ち切つて、天晴、大功を奏した。事定まりし後、還つて邊關に入れば、箙の中に餘箭あり、つまり、持つて往つた箭を殘らず射盡さずして、見事に其功を成したのである。

【餘論】この詩は、大體、曹植の作に依倣したのであるが、聊か簡潔にした爲に、ある意味に於ては、蒼勁簡切の趣を加へた。龍沙積雪裏、一去誰曾見といひ、疾驅不㆑辭㆑家、恐獲㆓逗遛譴㆒の如きは、極めて切實であるし、結二句、事定入㆑關來、箙中有㆓餘箭㆒は、原作にも見ざるところ、極めて新警である。

宛轉行

宛轉復宛轉。宛轉日幾廻。
君腸鹿盧斷。我腸車輪摧。

宛轉行

宛轉復た宛轉、宛轉日に幾廻。
君が腸は鹿盧斷え、我が腸は車輪摧く。

【字解】【一】宛轉　のたくるといふのが本義で、輾轉して已まざる貌。【二】鹿盧　轆轤に同じ、廣韻に「圓轉木なり」とあり、集韻に「井上、水を汲む木、或は轆轤に作る」とある、車井戸の車。

【題義】宛轉行は、樂府詩集に於ては琴曲歌辭に列し、その前に宛轉歌といふのがあるが、粗ぼ同じ物だらうと思はれる。宛轉歌は、一に神女宛轉歌といひ、その由來に就いては、續齊諧記に王敬伯の話が出て居るが、それは、この集中に神女宛轉歌といふのがあるから、その處で述べることにする。

宛轉歌の諸作を見ると、劉妙客は、その後半に於て、歌宛轉、宛轉淒以哀、願爲㆓星與㆑漢、光影共徘徊といひ、歌宛轉、宛轉情復悲、願爲㆓煙與㆑霧、氛氳對㆓容姿㆒といひ、郞大家宋氏の作には、歌宛轉、宛轉和且長、願爲㆓雙鴻鵠㆒、比翼共翺翔といひ、歌宛轉、宛轉那能異㆓棲宿㆒、願爲㆓形與㆑影、出入恆相逐といひ、劉方平の作には、歌宛轉、宛轉恨無窮、願爲㆓波與㆑浪、俱起碧流中といひ、歌宛轉、宛轉傷㆓別離㆒、願作㆓楊與㆑柳、同向㆓玉窗㆒垂といつて居る、ひとり、江總の作のみは、篇幅太だ長く、そして、歌宛轉の常型と大に異なつて居る。中唐の頃、張籍は宛轉行を作つたが、矢張、宛轉歌を祖述し、專ら閨中の情思を述べて居る。

華屋重㆓翠幄㆒。綺席雕㆓象牀㆒。遠漏微更疎。薄衾中夜涼。爐氣暗徘徊。寒煙背㆓斜光㆒。妍姿結㆓宵態㆒。寢璧幽夢長。宛轉復宛轉。憶憶更未㆑央。

【詩意】宛轉として復た宛轉、宛轉たること日に幾回。そして、何が宛轉かと問へば、君の腸は井上の轆轤の如くして、遂に斷え、我が腸は、車輪の如くして、遂に摧ける。君と我と、心腸宛轉、その苦は、まことに譬へるものもない程である。

【餘論】その何の爲に心腸宛轉たるかは、ここに說明してないが、いづれ、夫が旅へ出るとでもいふので、そこは、すべて讀者の推測に任かせて、餘情を含ませたのである。

長門怨

(一)憎寵一時心。塵生(二)舊屋金。
苔滋銷㆓(三)履跡㆒。花遠度㆓(四)鑾音㆒。
暮雀(五)重門迴。秋螢(六)別殿陰。
君明猶不㆑察。妒極是情深。

長門怨
憎寵一時の心、塵は生ず舊屋の金。
苔は滋うて履跡を銷し、花は遠くして鑾音を度る。
暮雀、重門迴に、秋螢、別殿陰る。
君の明、猶ほ察せず、妒極まれるは、是れ情の深きなり。

【字解】【一】憎寵　漢書外戚傳に「陳皇后、寵を擅にし、驕貴十餘年、しかも、子なし。衞子夫の幸を得るを聞き、幾んど死するもの數ばなり」とある。【二】舊屋金　舊金屋といひたいところを押韻の都合で顚倒したので、漢武故事に「帝、膠東王たり、年數歲、長公主、指し問うて曰く、兒、婦を得むと欲するや否や。曰く、得むと欲す、と。阿嬌を指して、好むや否やといへば、笑つて曰く、若し阿嬌を得ば、當に金屋を爲つて之を貯ふべし」とある。阿嬌は、卽ち陳皇后の小字、皇后は、取りも直さず武帝の幼馴染、且つ初戀の人であつた。【三】履跡　無論天子の履の跡。【四】鑾音　說文に「人君の乘車は四馬鑣、八鑾鈴、鸞鳥の聲に象る、和すれば敬なり」とあり、崔豹の古今注に「鸞の口に鈴を銜む。故に之を鑾鈴といふ」とある。鑾は卽ち天子の車を引く馬の鑣に付けた鈴。【五】重門　深宮の門。【六】別殿　正殿と離れて、別に成つて居る後宮の殿閣を云ふ。

【題義】長門怨は、樂府正聲に「相和歌辭楚調曲」とあり、題解に「漢の武帝陳皇后の作るところなり。后は長公主嫖の女、字は阿嬌、衞子夫の幸を得るに及び、后、退いて長門宮に居り、愁悶悲思、司馬相如の文章に工なるを聞き、黃金百觔を奉じて、悲愁を解くの辭を爲らしむ。相如、爲に長門賦

を作る。帝、見て之を傷み、復た親幸を得るもの數年。後人、これを悲んで爲に長門怨を作る」とある。長門は宮名、その長門宮に居て、失寵を怨み侘びて居る陳皇后の心情を忖度して、趣向を著けるのが、卽ち長門怨の本旨である。

【詩意】君王が妾を愛せらるるも、寵せらるるも、ともに一時の出來心で、妾の身に成つて考へれば、まことに便りなく、果敢ないことである。今しも、君王は、專ら衞夫人を寵せられ、妾は、押し退けられて、この長門宮に退處し、むかし語りになつて居る彼の金屋には、塵が積つて居る。此方の宮殿に通ずる路には、苔が滋うて、君王の履の跡を印せず、そして、花遠き彼方には、御車を引く馬の鑣の鈴の音が聞こえて、君王は、相變らず、衞子夫の方へ御出になる。そこで、獨りつくねんとして居ると、日暮には、雀の噪ぐ聲喧しく、彼方には、門幾重はるかに隔り、秋の螢は、力なく飛んで、此方なる別殿は、陰つて見える。君王の聰明を以てして、猶ほ妾の心事を察せられないのは、如何なる故か。妾は、嫉妬の爲に疎まれたといふが、煎じ詰めれば、嫉妬は君王に對する愛情が深いからであるのに、この點を考へられぬのは、まことに遺憾である。

【餘論】この詩は、形式上、純然たる五律である。元來、樂府は、その題に特有なる意義を詠出すれば、それで善いので、もとより、詩體の如何は論せず、樂府は、必ず長短句と心得て居るのは、大なる誤である。この詩の兩聯は、先づ無難といふ丈で、さばかり面白くもないが、首尾は、ともに振つて居るので、愔寵一時心といひ、妒極是情深といひ、ともに名句である。

班婕妤

(一)徽誠雖可守。(二)妙舞却難工。
已別(三)增成舍。初來(四)長信宮。
(五)扇歸秋篋裏。(六)燭滅夜帷中。
莫忌爭新寵。曾(七)辭玉輦同。

班婕妤

徽誠守るべしと雖も、妙舞、却つて工なり難し。
すでに增成舍に別れ、初めて長信宮に來る。
扇は歸る秋篋の裏、燭は滅す夜帷の中。
忌んで新寵を爭ふこと莫れ、かつて辭す、「玉輦の同じき」を。

【字解】【一】徽誠　徽衷、寸誠などに同じ、李商隱の賀埠表に犬馬之徽誠空切、鴛鴻之舊列難階とある。【二】妙舞　趙飛燕外傳に「飛燕、體輕く、能く掌上の舞を爲す」とある。【三】增成舍　漢書外戚傳に「孝成の班婕妤、選ばれて後宮に入り、始め少使となり、俄にして婕妤となる、增成舍に居る」とあつて、應劭の注に「後宮に八區あり、增成は第三なり」とある。【四】長信宮　漢官儀に「帝の祖母は長信宮と稱し、帝の母は長樂宮と稱す」とあつて、長信宮は天子の祖母の居られる御殿の名。【五】扇歸秋篋裏　例の秋扇の故事で、題義の條に詳しく述べることにする。【六】燭滅夜帷中　江淹の詩に悵哉心神遠、燭滅此深堂とある。【七】辭玉輦　漢書外戚傳に「成帝、後庭に游び、かつて婕妤と輦を同じうして載せむと欲す。婕妤辭して曰く、古しへの圖畫を觀るに、聖賢の君、皆名臣の側に在るあり。三代の末主、乃ち嬖女あり。今、輦を同じうせむと欲す、これに近似する毋からむや、と。上、その言を善しとして止む」とある。

【題義】班婕妤は、樂府正聲に「相和歌辭楚調曲、一名婕妤怨」とあり、題解に「漢の成帝の班婕妤の作るところなり、婕妤は徐令彪の姑、況の女、美にして文を能くし、大に帝に寵せらる。帝、後に趙飛燕姉娣を幸して、後宮に冠たり。婕妤、自ら恩の薄きを知り、罪を得むことを懼れ、太后を長信宮に供養するを求め、因つて、賦及び紈扇の詩を爲り、以て自ら傷む。後人、これを傷み、婕妤怨を爲り、以て其詩に擬す」とある。なほ史記外戚世家に、「婕妤は、秩、列侯に比し、常に遷つて皇后となる」とあつて、皇后の次に居る女官である。婕妤の作つた賦は、自悼賦であるし、紈扇の詩は、次の通りである。

新裂㆓齊紈素㆒。皎潔若㆓霜雪㆒。裁爲㆓合歡扇㆒。團團似㆓明月㆒。出㆓入君懷袖㆒。動搖微風發。常恐秋節至。涼颷奪㆓炎熱㆒。棄㆓捐篋笥中㆒。恩情中道絕。

これが卽ち秋扇の出處で、長く後世怨婦曠女の口くせの樣に成つて居る。この首も、前の長門怨の陳皇后と同じく、班婕妤その人に代つて、心中の怨情を述べたのである。

【詩意】妾は、區區たる寸誠を守ることは出來るが、趙飛燕の如き妙舞は、どうしても、眞似ることが出來ない。妾は、すでに君寵を失ひしに因つて、增成舍に別れ、太后を供養せむことを求めて、初めて、この長信宮に來た。扇は、秋に遭へば、不用の物として篋中に收められるし、獨り寐の紗帳の中、燈火は、消えた儘で、まことに淋しさの極みである。かの飛燕は、妾を以て、妬忌性となし、自分と新寵を爭ふものとして居るだらうが、それは、大した間違ひ、妾は、おのが分を守り、決して他人を猜むことなく、かつて、君王から一處に玉輦に乘れと命せられたが、嬖女が側に居るのは三代の末主の事で、君王の名譽に關するからといつて、切に之を辭退した程である。

【餘論】これも形式上、純然たる五律で、その落想措辭、ともに前首と伯仲の間に在る。

閶闔篇

閶闔篇

(一)天門迎ㇾ旭開㆓紫霞㆒(二)。
天門旭を迎へて、紫霞を開き、

(三)八表洞達(四)春無ㇾ涯。
八表洞達、春、涯なし。

(五)閶道縈(六)廻度㆓鸞(七)車㆒。
閶道縈廻、鸞車を度り、

(八)羽旗揚(九)ㇾ彩鐘鼓撾。
羽旗、彩を揚げて、鐘鼓撾つ。

(一〇)後宮三千人。
後宮三千人、

(一一)秀色掩盡世上花。
秀色掩ひ盡す世上の花。

(一二)宸游時過廣成(一三)家。
宸游、時に過ぐ廣成の家、

【字解】〔一〕天門　詳しくは題義の條に述べるが、もと天宮の門、それから轉じて、帝城の門、屈原の九歌に、「廣開㆓兮九門㆒」とある。〔二〕紫霞　霞は朝やけ夕やけの類、空の色が一面に赤くなること。かすみと訓したのは、邦讀の誤である。紫は、赤の極めて濃かなるをいふ。〔三〕八表　八面・八方に同じ、四方四隅。〔四〕洞達　がらりとして通達する。

(一四)瑤觴(一五)再壽盛(一六)露華。　瑤觴再び壽して、露華を盛る。
(一七)一仁興萬福加。　一仁興り、萬福加はる。
何須慕神仙。　何ぞ須ゐむ、神仙を慕うて、
(一八)辛勤煉(一九)丹砂。　辛勤、丹砂を煉るを。
小臣微詞欲拜獻。　小臣微詞、拜獻せむと欲す、
帝德自大非爲誇。　帝德自ら大にして、誇を爲すに非ず。

【五】閣道　長廊の道、上に屋根を設けてある。史記の始皇本紀に「三十五年、前殿阿房を作る、上には以て萬人を坐せしむべく、下には以て五丈の旗を建つべし。周馳して閣道を爲り、殿下より直に南山に抵る」とある。【六】禁廻　二字ともに繞る。【七】鸞車　前に長門賦の鸞音の處に注して置いた。鸞は、馬の鑣に付けてある鈴。これは天子乘用の馬車。【八】羽旗　上に翠羽を付けて飾りとした天子の旗。【九】掲彩　光彩がはつきりと見える。【一〇】後宮三千人　前に玉波冷斐蓮の詩中に注して置いた。【一一】秀色　容貌の殊に優れたること、張衡の七辨に淑性窈窕、秀色美艶とある。【一二】宸游　御游に同じ。楊顔に「帝は、北辰宮に居る、故に宸と稱す」とある通り、天子に關したものには、いつでも宸の字を冠する。【一三】廣成子　古しへの仙人の名、莊子に「黄帝、廣成子が空同の上に在るを聞き、故らに往いて之を見る」とある。【一四】瑤觴　玉の盃。【一五】再壽　重れて壽を獻する。【一六】露華　美酒を云ふ、酒史に「酒に梨花露、薔薇露、桃花雨、瓊林秋露あり」といひ、酒名には、多く露の字を用ひる。曹唐の游仙詩に、酒傾玄露醉瑤觴とある。【一七】一仁　天子自ら仁徳を行はれる。【一八】辛勤　辛苦に同じ。【一九】丹砂　仙藥、本草に「丹砂、久しく服すれば、神明に通じて老いず」とある。

【題義】閶闔篇は、樂府遺聲に「宮苑曲」とあり、樂府詩集に「雜曲歌辭、張衡の西京賦に曰く、表嶢闕于閶闔」と。閶闔は天門なり、王者、これに象る。紫微宮の門、名づけて閶闔といふ、闕を立てて以て表と爲す、閶闔篇、蓋し此に出づ」とある。すると、閶闔は天門、ここでは禁城の正門。閶闔篇は、取りも直さず、禁城中の光景を敍したのである。

【詩意】禁城の門は、朝日を迎へて豁開し、そこには、紫色の霞が棚引き渡り、八面ともに、洞然開通して、長閑けき春は、涯際もなく、さすがに、尋常人間の光景とは、自然に異なつて居る。閣道は、禁り廻つて、行けども盡きず、そこを行幸の御車が、しづしづと、練つて行き、先頭に立てた翠羽の旗は、光彩發越し、それに續いて鐘鼓を敲く音が聞こえる。天子の後宮には、三千の佳麗が居て、その容貌の秀絶なる、世上の花を掩ひ盡して顏色なからしめる。無論、君王は、此に幸して歡樂を極められるが、時とすると、廣成子に比すべき名だたる仙人の家を過ぎられることもあり、そこでは、玉の盃に美酒を盛り、わが君王の爲に、しろしめす御世長かれとて壽を獻するを例として居る。顧みれば、人君が一人先に立つて仁を行へば、萬福加はること論なく、何も不老不死の神仙を慕ひ、辛苦して仙藥を煉ることなどは爲さずもあれ。君王が、廣成子を訪問されるのは、元と大道を論ぜられる爲めである。そこで、小臣、卽ちかく申す某は、謹んで、微詞を獻するので、帝者の德は、自然、洪大なるを旨とすべく、決して、誇張して之を稱頌すべきものではない。

【餘論】起首二句は、堂堂として、流石に禁城の光景たるを失はぬ。全篇の主旨は、一仁興の四句に在るので、神仙を慕ふに因つて、巨費を抛ち、はては藥の爲に却つて早く死んだ人君は、古來、いく

らもあるので、これは、まさしく頂門の一針に當つべく、即ち作者諷意の在るところである。

塞下曲

日落五原塞。蕭條亭堠空。
漢家討狂虜。籍役滿山東。
去年出飛狐。今年出雲中。
得地不足耕。殺人以爲功。
登高望衰草。感歎意何窮。

塞下曲

日は落つ五原の塞、蕭條として亭堠空し。
漢家、狂虜を討ち、籍役、山東に滿つ。
去年、飛狐を出で、今年、雲中を出づ。
地を得るも、耕すに足らず、人を殺して、以て功と爲す。
高きに登つて衰草を望む、感歎、意、何ぞ窮まらむ。

【字解】【一】五原　後漢書郡國志に「幷州五原郡、秦置く。武帝、名を更めて九原と爲す」とあり、一統志に「山西大同府の西北、中受降城は、秦漢九原縣の地」とある。【二】蕭條　物さびしき貌。【三】亭堠　物見、後漢書光武本紀に「建武十二年、杜茂を遣し、衆郡の弛刑を將ゐて、亭堠を築き、烽燧を修す」とあつて、その注に「亭堠は伺候、敵を望むの所。秦法、十里に一亭、漢、これに由つて改めず」とある。【四】狂虜　狂つて暴れる胡人、即ち匈奴。【五】籍役　籍は軍籍に入れる、役は說文に「邊を戍するなり」とある。徵集して邊地に差遣する。【六】飛狐　地名。長城より塞外に通ずる要地の一。史記文帝本紀に「中大夫令勉を以て、車騎將軍となし、飛狐を出でしむ」とあり、一統志に「山西大同府廣昌縣は、古しへの蜚狐道」とある。【七】雲中　城名、漢書衛青傳に「公孫賀、車騎將軍となり、雲中を出づ」とあり、一統志に「大同府北に雲中城あり」と見ゆ。【八】衰草　胡地の草は早く秋に逢つて枯れる。

【題義】塞下曲は、樂府遺聲に「征戍曲」とあり、樂府詩集に「新樂府雜題」とある。漢魏六朝の間には、あまり見えぬが、唐になつてから、その作、漸く多く、皆塞外慘澹の光景を敍して、人主の黷武弄兵を戒めたので、隋唐の際、邊境往往にして多事なりしに因つて、必然的に詩人の賦詠に上つたのである。塞は、即ち長城、漢書に「秦の始皇、六國を滅し、蒙恬に命じて、胡を擊ち、悉く河南の地を收め、河に因つて塞と爲し、謫戍を徙して以て之に充て、九原より雲陽に至り、邊山の險に因り、谿を塹して城となし、臨洮より起つて遼東に至るまで、萬餘里」とある。

【詩意】日は五原の故塞に落ちむとし、暮色、遠くより至り、さなきだに蕭條として、物さびしいのに、處處の物見には、番人も居らず、胡人が頻りに南下して、邊境漸く多事ならむとするは言はずもがな。そこで、漢の朝廷では、狂暴なる胡虜を征せむとし、山東地方に於て兵士を徵集し、どしどしと北邊に繰り出し、去年は、飛狐口より、長城を越えて進軍したが、今年は、又、雲中城より討つて出る手配をした。かくの如く、年年、兵を出して何を爲すのか、たとひ、匈奴を追ひまくつて、塞外を占領した處で、沙漠荒寒の地、もとより耕作に適せず、唯だ胡人を殺して、それを大功とするだけで、何の役にも立たぬ。今しも、高きに登り、秋草の遙に接せる天際を望み、感嘆の極、わが意、窮まらず、淒然として、久しく佇立して居る。

【餘論】得レ地不レ足レ耕の二句は、全幅精神の在るところで、秦皇漢武の如き人主が、地下で之を聞いたならば、定めて、悔恨に堪へぬことであらう。現に沈徳潛は「千古邊を開く者の爲に戒を垂る」と云つて居る。

折楊柳歌辭二首

　　　　　　　　　　　　　折楊柳歌辭　二首

高枝拂二(一)翠幰一。低枝垂二(二)綺筵一。　高枝は翠幰を拂ひ、低枝は綺筵に垂る。
春風千萬樹。此樹妾門前。　春風千萬樹、この樹、妾の門前。

【字解】【一】翠幰　說文に「幰は車幔なり」とあつて、車中に垂れた幕、それが翠色を爲して居る。韋莊の少年行に醉下二酒家樓一、美人雙翠幰とある。【二】綺筵　美美しき宴席。

【題義】折楊柳歌辭は、略して折楊柳といひ、樂府正聲に「鼓角横吹曲、雙角を用ふるものは胡樂なり」とあり、樂府詩集に「漢の横吹曲。唐書樂志に曰く、梁の樂府に胡吹歌あり、云ふ。

上レ馬不レ捉レ鞭。反拗楊柳枝。下レ馬横吹曲。愁殺行客兒。

この歌辭、元と北國に出づ、卽ち鼓角横吹曲の折楊柳是れなり、と。宋書五行志に曰く、晉の太康の末、京洛、折楊柳の歌を爲す。その曲、兵革苦辛の辭あり。按ずるに、古樂府、又小折楊柳あり、相和大曲に折楊柳行あり、淸商四曲に月節折楊柳歌十三曲あり、これと同じからず」とあり、題解に、「別離を傷むなり」とある。すると、折楊柳といふ樂府題は、類似したものが外に幾らもあるが、この折楊柳歌辭といふのが、一番古く、且つ別離の思ひを敍することを旨としたのである。三輔黃圖に「霸橋は、長安の東に在り。漢人、客を送つてこの橋に至り、楊柳を折つて別を贈る」とある通り、柳を折つて別を送るのは、古くからの風俗で、卽ちこの樂府題の由つて來るところである。

【詩意】柳の樹の高い枝は、路行く人の車の翠幰を拂ひ、低い枝は綺筵の席にしだれて居る。春風に吹かれて芽ぐんだ樹は、千萬を以て數ふべく、もとより、限り知られぬ程であるが、この柳だけが、妾の家の門前に在つて、つまり、遣る瀨なき妾の思を顯はして居る。

江頭横(一)吹悲。北客休二南去一。　江頭、横吹悲む、北客、南に去るを休めよ。
聞道武(二)昌門。愁レ人無二別樹一。　聞くならく武昌門、人を愁へしむるは、別樹なし、と。

【字解】【一】横吹　古今樂錄に「横吹は胡樂。張騫、西域に入つて之を傳ふ」とあつて、笛を主とした胡樂であらうと思はれる。王維の詩にも、横吹雜二繁笳一とある。そして、この折楊柳歌辭は、前にもいへる通り、横吹曲に屬して居る。【二】武昌門　晉書陶侃傳に「侃、かつて諸營に課して、柳を種う。都尉夏施、官柳を盜んで、之を己の門に植う。侃、後に見、車を駐めて問うて曰く、これは是れ武昌西門前の柳、何に因つて盜み來る、と。施、惶怖して罪を謝す」とあつて、武昌の柳は、何か特徵があつて、世に著名なも

のと見える。

【詩意】江頭には、横吹の樂聲、悲しげに聞こえ、現に折楊柳の一曲を譜して、別離の思を述べて居る。北地の人は、これを聞かば、感慨に堪へざるべく、南に向つて旅することは止めたが善からう。もし南游すれば、やがて、武昌に往くこともあらうが、その武昌の城門外は、すべて柳ばかりで、特に人を愁へしめるからである。

【餘論】前首は、別離を道はす、却つて遠人を送る女の心を柳に託し、後首は、折楊柳の曲、すでに悲しきに、武昌は柳ばかりであるから、愈よ堪へられぬだらうと云ひ、ともに別思離緒以外に、その構想を試みたものである。

箜篌引

箜篌引

濁流赴レ海東若レ傾。(一)
濁流、海に赴き、東して傾くるが若し、

(二)津卒刺レ船朝不レ行。(三)
津卒、船を刺して、朝に行かず。

(四)公乎提レ壺徑欲レ渡。
公や、壺を提げて、徑に渡らむと欲す、

大聲呼レ公公不レ顧。
大聲、公を呼べども、公、顧みず。

(五)飢鯨饞蛟肆二啖呑一。(六)
飢鯨饞蛟、啖呑を肆にし、

竟以二深淵一作二高墳一。
竟に深淵を以て高墳と作す。

貪レ生畏レ死誰不レ有。
生を貪り、死を畏る、誰か有らざらむ、

公獨不レ然果狂叟。
公、ひとり然らず、果して狂叟。

(七)二十五絃彈且歌。
二十五絃、彈じ且つ歌ふ、

公今渡レ河將二奈何一。
公、今河を渡る、將に奈何せむとする。

公今渡レ河將二奈何一。
公、今河を渡る、將に奈何せむとする。

公今渡レ河將二奈何一。
公、今河を渡る、將に奈何せむとする。

【字解】【一】東若傾　河水東に向つて、その勢、傾くるが如く、流の極めて急速なるをいふ。【二】津卒　渡し守。【三】刺船　舟を滑ぐ。【四】公　男子を呼ぶ稱。【五】飢鯨　古今注に「鯨は海魚なり、大なるものは長さ千里、小なるものは數千丈」とある。【六】饞蛟　饞は食、蛟は龍の屬。【七】二十五絃　瑟をいふ。この箜篌引は、元と瑟調曲なる故に、特に瑟を擔ぎ出したのであらう。史記封禪書に「泰帝、素女をして五十絃の瑟を鼓せしむ。悲し、帝、禁ずれども止めず。故に、其瑟を破つて二十五絃となす」とある。

【題義】箜篌引は、樂府正聲に「相和歌辭、瑟調曲、又琴操に入る、一名公無渡河」といひ、張永の技錄には「相和に四引あり、一に曰く箜篌引」といひ、題解に「舊說、朝鮮の津卒霍里子高の妻麗玉の作るところとあり、子高、晨に起きて船を刺す。一白首の狂夫あり、髮を抜き、壺を提げ、流を亂して渡る。その妻、隨つて呼び、これを止むれども及ばず。ここに于て、その妻、箜篌を援つて之を鼓し、歌を作つて曰く、

公無レ渡レ河。公竟渡レ河。渡レ河而死。當レ奈二公何一。

聲、甚だ悽愴。曲、終つて、亦た河に投じて死す。子高、還り、その聲を以て麗玉に語る、麗玉、これを傷み、箜篌を引いて、その聲を寫す、聞くもの涙を墮して飲泣せざるなし、名づけて箜篌引といふ」とある。そこで、後世では、無謀を戒める意を含ませて、擬作して居る。

【詩意】 濁流滔滔として海に赴き、その東向の勢の淒まじきは、さながら傾くが如くである。そこで、渡し守は、朝早く、舟を漕ぎ出さうとしたが、河の流の平時よりも烈しきに驚いて、躑躅して立つて居る。その時、何者とも知れず、白髮頭の老人があつて、壺を手にした儘、無謀にも、この河を徒渉せむとして居る。渡し守は、大聲を發し、渡つては成らぬといつて呼びかけたが、その人は、少しも顧みず、さつさと河の中へ進んで行つた。すると、水中に棲む飢ゑた鯨や、貪食なる蛟どもが、寄つてたかつて、啖呑を肆にし、公は遂に其處で溺死し、深淵を以て、其身を葬る墳墓として仕舞つた。顧みれば、生を貪り死を畏るるの念は、誰にしても無かるべき筈もないのに、公、ひとり、然らざるを見れば、果然、狂人である。かくて、その妻の思慕を譜して曲となし、それを瑟に合せ、二十五絃を掻き拂ひつつ歌を唱へ、公今河を渡る、さて如何しやう、如何しやうといひつつ、盡きぬ怨は、千歲の下、依然として、むかしの儘である。

【餘論】 この詩は、狂夫渡河の事實を有りの儘に述べただけで、その諷諭の意旨は、讀者をして、言外に之を領會せしむる樣にした。飢鯨饞蛟の二句は、まさしく名句で、淒涼無限、まことに悲哀の極である。

將進酒

君不見陳孟公。(一)
一生愛酒稱豪雄。
君不見揚子雲。(二)
三世執戟徒工文。(三)(四)
得失如今兩何有。(五)
勸君相逢且相壽。
試看六印盡垂腰。(六)
何似一巵長在手。(七)
莫惜黃金醉青春。(八)
幾人不飲身亦貧。

將進酒

君見ずや陳孟公、
一生酒を愛して、豪雄と稱す。
君見ずや揚子雲、
三世戟を執つて、徒に文に工なり。
得失、今の如き、兩つながら何か有らむ、
君に勸む、相逢うて且つ相壽せよ。
試に看よ、六印の盡く腰に垂るるを、
何ぞ似む一巵長しへに手に在るに。
惜む莫れ、黃金、青春に醉ふを、
幾人か飲まず、身も亦た貧なり。

【字解】【一】陳孟公　漢書陳遵傳に「遵、字は孟公、哀帝の時、校尉となり、槐里の大賊を擊つて大に功あり。嘉威侯に封ぜらる。酒を嗜み、大飲する每に、賓客、堂に滿つれば、輒ち門を關ぢ、客の車轄を取つて井中に投じ、急ありと雖も、終に去ることを得ず」とある。【二】揚子雲　漢書揚雄傳に「雄、字は子雲、待詔歲餘、羽獵賦を奏し、除せられて郎給事黃門となり、王莽、劉歆と竝ぶ。哀帝の初、又董賢と同官。成哀平の間に當つて、莽賢皆三公となり、權、人主を傾く、而して、雄は三世官を徙さず」とある。【三】

酒中有趣世不識。(九)　酒中趣あり、世、識らず、
但好富貴忘其眞。(一〇)　但だ富貴を好んで、其眞を忘る。
便須吐車茵。(一一)　便ち須らく車茵に吐すべし、
莫畏丞相瞋。(一二)　畏るる莫れ丞相の瞋るを。
桃花滿谿口。　桃花、谿口に滿ち、
笑殺醒遊人。(一三)　笑殺す醒遊の人。
絲繩玉缸釀初熟。(一四)　絲繩玉缸、釀、初めて熟し、
搖蕩春光若波綠。(一五)　春光を搖蕩して、波の若く綠なり。
前無御史可盡歡。(一六)　前に御史なし、歡を盡すべし、
倒著錦袍舞鸜鵒。(一七)(一八)　倒に錦袍を著けて、鸜鵒を舞ふ。
愛妾已去曲池平。(一九)(二〇)　愛妾、すでに去つて、曲池平かに、
此時欲飲焉能傾。　此時、飲まむと欲するも、焉んぞ能く傾けむ。
地下應無酒壚處。(二一)　地下、應に酒壚の處なかるべし、

三世　人主三代の間。【四】執戟　東方朔の客難に「官は侍郎に過ぎず、位は執戟に過ぎず」とあり、史記淮陰侯傳の注に「郎中は、宿衞執戟の人なり」とある。執戟は、戟を執つて宿衞することで、揚雄の郎給事たりしことを指す。【五】兩何有　兩者とも何が有るか、何にも殘つて居らぬといふ義。【六】六印盡垂腰　史記蘇秦傳に「我をして負郭の田二頃を有せしむれば、豈に能く六國の相印を佩びむや」とあり、杜牧の周相公に謝する啓に「揚僕は三組腰に垂れ、蘇秦は六印手に在り」と見ゆ。【七】一巵　巵は杯、一杯に同じ、劉向新序に「趙の斷養卒、往いて燕王に見えて曰く、賤人、長者に見えむことを希ふ、願はくは、一巵の酒を請はむと。」すでに飲む。復た

何苦寂寞孤平生。(二二)　何を苦んで、寂寞、平生に孤く。
一杯一曲。　一杯一曲、
我歌君續。　我歌ひ君續ぐ。
明月自來。　明月、自ら來つて、
不須秉燭。(二三)　燭を秉るを須ゐず。
五岳既遠。(二四)　五岳すでに遠く、
三山亦空。(二五)　三山亦た空し。
欲求神仙。　神仙を求めむと欲すれば、
在杯酒中。　杯酒の中に在り。

曰く、賤人長者に見えむことを希ふ、願はくは、復た一巵の酒を請はむ」とある。【八】青春　韓愈の詩に、且可勤買拋青春とあつて、その注に「蘇東坡云ふ、唐人、酒を名づくるに、多く春を以てす、拋青春、必ず酒名ならむ」とある。青春は、拋青春の略と見るが善い。【九】酒中有趣　晉書孟嘉傳に「嘉、桓温の參軍となり、酣飲す。温、問ふ、酒中何の好きあつて、卿、これを嗜むか。答へて曰く、公、未だ酒中の趣を得ざるのみ」とある。【一〇】其眞　酒の眞味。【一一】吐車茵　車中の茵の上に反吐をする。漢書丙吉傳に「馭吏、酒を嗜む、かつて、吉に從つて出で、醉うて丞相の車上に嘔す。西曹の主吏、白して、これを出さむと欲す。曰く、醉飽の失を以て士を去る。この人をして、將た復た何くに容れしめむとする。西曹、第だ之を忍べ。これ丞相の車茵を汙せしに過ぎざるのみ」とある。【一二】丞相瞋　宰相の怒、杜甫の麗人行に愼莫近前丞相瞋とある。【一三】笑殺醒遊人　李白の山水歌に武陵桃花笑殺人とある。【一四】絲繩玉缸　酒を壺に盛り、紐で括つてぶら下げるのが、漢以後の風俗で、辛延年の羽林郎に就我求清酒、絲繩提玉壺とあり、岑參の詩に花撲玉缸春酒香とある。【一五】搖蕩　動かし漾はす。【一六】前無御

史 史記滑稽列傳に「酒を大王の前に賜へば、執法、傍に在り、御史、後に在り、髡、恐懼俯伏して飲む、一斗に過ぎずして徑に醉はむ」とある。【一七】倒著錦袍 王昌齡の詩に、簾外春寒賜㆓錦袍㆒」とある。【一八】鸜鵒 舞の名、晉書謝尚傳に「王導、尚が諸會あるを以て、謂つて曰く、君が能く鸜鵒の舞を作すを聞き、一坐傾想すと。尚、便ち衣幘を著けて舞ひ、旁に人なきが若し」とある。【一九】愛妾已去 晉書石崇傳に「崇に妓綠珠あり、美にして艶、善く笛を吹く。孫秀、人をして之を求めしむ。崇、勃然として曰く、綠珠は吾が愛するところ、得べからざるなり、と。秀怒り、詔を矯めて崇を收む。崇、正に樓上に宴す。崇、綠珠に謂つて曰く、我、今、爾の爲に罪を得たり。綠珠泣いて曰く、當に死を君の前に效すべし、と。因つて、自ら樓下に投じて死す」とある。【二〇】曲池平 新論に「雍門周、孟嘗君に謂つて曰く、千秋萬歳の後、高臺すでに傾き、曲池すでに平かなり」とある。曲池は汀岸の曲れる池。【二一】酒壚 壚は酒を甖める處、土を以て築く。晉書王戎傳に「かつて、黃公酒壚の下を經て過ぎ、顧みて、後車の客に謂つて曰く、吾、むかし、嵇叔夜・阮嗣宗と此に酣暢す、今日、これを視れば、近しと雖も、邈として山河の若し」とある。【二二】孤平生 孤は孤負する、そむく。平生は從來の夙志。【二三】秉燭 燈火を執る。古詩十九首に「晝短苦㆓夜長㆒、何不㆓秉㆑燭遊㆒」とある。【二四】五岳 支那本土に於て各方の鎭となれる名山。東は泰山、南は衡山、西は華山、北は恒山、中は嵩山。【二五】三山 拾遺記に「三壺は、すなはち海中の三山なり、一に曰く方壺、すなはち方丈なり、二に曰く蓬壺、すなはち蓬萊なり、三に曰く瀛壺、すなはち瀛洲なり、形、壺器の如し」とある。

【題義】將進酒は、樂府正聲に「漢短簫鐃歌曲」といひ、樂府詩集に「古詞に曰く、將㆑進㆑酒、乘㆓太白㆒」と。大略、飮酒放歌を以て言となす。宋の何承天の將進酒篇に曰く、將㆑進㆑酒、慶㆓三朝㆒、備㆓繁禮㆒、薦㆓嘉肴㆒」と。すなはち、朝會進酒、且つ濡首荒志を以て戒となすを言ふ。梁の昭明太子が洛陽輕薄兒といふが如きは、但だ遊樂飮酒を敍するのみ」とある。唐になると、李白・李賀の作が殊に著名で、つまり、この世は詰まらぬから、飮酒放歌、以て快樂を恣にすべしといふことを述べ、青邱の此作も、矢張、その意を踏襲して居る。

【詩意】むかし、陳孟公といふ人があつたが、終生、酒を愛して、豪雄と稱せられて居た。又揚子雲といふ者があつたが、三代の天子に歷事し、郎給事として、宿衛執戟の微職に居り、文章は上手であつたが、何の役にも立たなかつた。陳孟公の豪雄も、揚子雲の窮迫も、千年後の今日になつては、得失兩つながら存せず、おもふ存分の事を遣つて除けただけ、陳孟公の方は痛快である樣に見える。そこで、君に勸めるが、相逢うた上は、且つ酒を酌んで、互に壽を爲すが第一である。たとひ、六國の相印を殘らず腰に下げて見た處で、まことに詰まらぬことで、それよりは、長しへに、一つの杯を手にして居た方が、はるかに面白い。黃金を投じて、青春の銘を打てる酒に醉ふことは、惜しいと思つてはならぬ。現に、酒を少しも飮まなくても、一身貧乏に苦んで居る者が、隨分あるので、下戶の建てた倉といふのも、あまり見たことは無い。酒中の趣は、まことに微妙にして、意味が深いが、世人、これを識らず、そして、富貴を好んで、あくせく奔走し、酒味の眞を忘れて居るのは、氣の毒千萬の事である。それよりも、飮めるだけ、酒を飮んで、車中の茵に反吐を嘔いても善いので、丞相の怒りなどを畏れてはならぬ。桃の花は、谿口に滿ち、その色赤くして、亦た醉へるが如く、定めて醒游の人を笑つて居るであらう。今しも、紐でぶら下げる壺の中には、美釀はじめて熟し、蓋を取ると、

その色緑なること、波の如く、春光を動かし漾はすばかり。ここは、宮中の讌席と異にして、前に御史も控へて居ず、全くの無禮講であつて、十分に酔つた揚句に、錦袍を裏がへしに著て、鸜鵒の舞を遣つた處で、咎める人が居ないから、差支は無い。浮生の事は、榮華盛衰、定まらず、やがて愛妾が死んで、曲池も埋もれることもあらうが、その時、初めて酒を飲まうと思つた處で、とても、杯を傾けられるものではなく、又、自ら死んで仕舞へば、地下には酒を賣つて居る處もないのに、何を苦んで、むッつり打澄まして、平生の夙志に孤負するのか。そこで、一杯飲む間に、一曲を歌ひ、ひとりでは疲れるから、我が後には、君よ、續いて歌はれよ。兎角する内に、明月招かずして自ら席を照らし、光明晝の如く、燈火を執るにも及ばず、天も流石に心ありげに見える。むかしの人は、この世を果敢なんで、しきりに仙藥を探がさうとしたが、五岳は既に遠くして、容易に至るべからず、海中の三神山は、話だけで、有無の程は分からず、神仙を求めむと欲すれば、ここ杯酒の中に在るので、つまり、酒に酔つた善い氣分は、仙を得たと同じである。

【餘論】起首、陳孟公と揚子雲とを掲起し、得失如今兩何有の一句を以て之を收束し、一轉して、酒に及び、飲を解せざるものの愚を笑ひ、便須吐車茵の四句は、酒を飲むには必ず其量を縱にすべきを言ひ、桃花笑殺は、殊に反襯の妙を極めて居る。愛妾以下は、逆境竝に死後に於て、はじめて酒を飲まうとしても、その到底、及ぶべからざることを述べて、及時行樂の快に及び、一杯一曲以下の八句は、四言を以て之を遣り、落想措辭、ともに其妙を極めて居る。大體に於て、李白・李賀の諸作にも遜らず、まさしく、卷中の白眉である。

雨雪二首

雨雪暗桑乾(一)。深愁没馬鞍(二)。　雨雪、桑乾暗く、深愁、馬鞍を沒す。

臨關將月認(三)。覆磧(四)作沙看。　關に臨んでは月と認め、磧を覆うては沙と作して看る。

不阻(五)胡兒獵。聊供漢使餐(六)。　胡兒の獵を阻まず、聊か漢使の餐に供す。

春風消不得。三月戍袍(七)寒。　春風消して得ず、三月戍袍寒し。

【字解】【一】桑乾　寰宇記に「桑乾水は、卽ち今の盧溝なり、源、馬邑縣の桑乾山に出づるを以て、故に名づく」とある。【二】沒馬鞍　杜甫の詩に馬寒防失道、雪沒錦鞍韉とあるに本づいたのであらう。【三】將月認　黃滔の春雪の詩に連天寧認月とある。將は與と同義。【四】覆磧　沙漠を掩ふ、韻會に「吳楚、これを瀨といひ、中國、これを磧といふ、又沙漠、これを磧といふ」とある。【五】不阻　妨げず。【六】漢使餐　漢書蘇武傳に「單于、武を幽して大窖の中に置き、絕えて飲食せしめず。天、雪を雨らす、武、雪と旃毛とを嚙み、幷せて之を咽む」とある。【七】戍袍　戰袍に同じ。

【題義】雨雪は、樂府正聲に「漢鼓角橫吹曲」といひ、題解に「胡曲なり」といひ、樂府詩集に「梁薇

の詩に云ふ、昔我往矣、楊柳依依、今我來思、雨雪霏霏と。雨雪曲、蓋しこれを此に本づく」とある。もとより、雪中の景であるが、胡曲とある通り、これを胡地に繋けて意象を著けたのである。

【詩意】滿天の雪、ちらちらと降り、桑乾河一帶の地は、暗くして見え分からず、征人の深愁は、馬鞍をも沒する程である。その雪が關に臨めば、玲瓏として月の如く認められ、沙漠を掩うては、その瑣屑なること、沙粒に似て見える。この雪は、もとより慣れたこととて、胡兒の狩獵を妨げず、そして、蘇武は、これを食つて、わづかに生きて居た。胡地の雪は、春になつても、なかなか解けやらず、三月に入つても、なほ戰袍の寒きを覺える程である。

雨雪暗龍沙(一)。愁陰(二)入漢家(三)。　雨雪、龍沙暗く、愁陰、漢家に入る。

恨迷青塚(四)草。驚見黑山(五)花。　恨は青塚の草に迷ひ、驚いて黑山の花を見る。

夜積氈廬(六)重。朝隨羽旆(七)斜。　夜は氈廬に積んで重く、朝に羽旆に隨つて斜なり。

空思鵁鶄觀(八)。柳色變年華(九)。　空しく思ふ鵁鶄觀、柳色、年華を變す。

【字解】【一】龍沙　前に白馬篇に見ゆ、龍堆と沙漠。【二】愁陰　天色曇つて愁ふるが如きを云ふ。【三】漢家　中國を指す。【四】青塚　歸州圖經に「胡中白草多く、王昭君の冢上、ひとり青し、故に青塚といふ」とある。【五】黑山　九城志に「黑山は楡林窟に在り、水草甘茂、虜騎、内に侵せば、必ず此に至る」とあり、一統志に「肅州衛城の北に在り、沙漠中、これを望めば、惟だ黑山を見る」とある。【六】氈廬　漢書蘇武傳の注に「穹廬は氈帳」とあつて、卽ちテント。【七】羽旆　羽を飾りとせる軍旗。【八】鵁鶄觀　三輔黃圖に「甘泉苑は、武帝置く。苑中に宮殿臺閣百餘所を起し、鵁鶄觀あり」とある。【九】年華　季節の模樣。

【詩意】雪がちらちら降つて來て、龍堆沙漠一帶の胡地は、ほの暗く、空は掻き曇つて、さながら愁ふるが如く、中國の方にまで續いて居る。やがて、雪が積もれば、四時草が茂つて居るといふ青塚も、何處だか分らぬ樣になつて、盡きせぬ恨を藏し、黑山には花が咲いた樣に見えて、心に驚くばかり。夜に當つて、テントの上に積めば、その重きに堪へざるべく、朝には、羽の飾りある陣頭の大旆に隨つて、斜に飛んで居る。長安の都なる鵁鶄觀に於ては、柳色綠にして季節の模樣を變じ、世は今春であるのに、胡地は、この通りの寒さ、從つて、征人の苦痛も思ひやられる。

【餘論】二首、ともに純然たる五律、いささか古色を帶びた處は面白いが、無論、槍より以下、取り立てて言ふべき程の者でもない。

羅敷行

陌上(一)三月時。柔桑(二)多綠枝(三)。　陌上三月の時、柔桑、綠枝多し。

攜筐行采葉。日暮畏蠶(四)飢。　筐を攜へて行くゆく葉を采る、日暮れて蠶の飢ゑむことを畏る。

（五）使君駐車馬。相逢在桑下。　使君、車馬を駐め、相逢うて、桑下に在り。

漫說（六）同心言。不是（七）知音者。　漫に同心の言を說くも、是れ知音の者ならず。

君貴多輝光。妾賤無紅妝。　君は貴くして輝光多く、妾は賤しくして紅妝なし。

自信田間婦。難從（八）天上郞。　自ら信す、田間の婦、天上の郞に從ひ難きを。

長安畫樓宇。無限（九）如花女。　長安の畫樓宇、無限、花の如きの女。

使君當早歸。莫共羅敷語。　使君、當に早く歸るべし、羅敷と共に語る莫れ。

【字解】【一】陌上　陌は大道。【二】柔桑　若若しい桑樹。【三】綠枝　葉の綠なる枝。【四】長躄飢　姚翻の采桑詩に桑間視欲暮、閨裏遽飢蠶とある。【五】使君　官職ある人の尊稱。【六】同心言　易に「同心の言、その臭、蘭の如し」とある。【七】知音　列子に「伯牙善く琴を鼓し、子期これを聽く」とあつて、流水高山の二曲を聽き分けたが、後に子期が死んでからは、伯牙は知音の無きを傷んで、絃を斷つた儘、復た琴を彈じなかつた。【八】天上郞　李賀の剌年少に、美人挾座飛瓊觴、貧人喚云天上郞とある、天上の仙界に居る若殿原。【九】如花女　黃滔の詩に亭巖山下如花女、占得姑蘇臺上春とある。

【題義】羅敷行は、樂府正聲に「相和歌曲、一名陌上桑、一名艷歌羅敷行、一名日出東南隅」とあり、崔豹の古今注に「陌上桑は、秦氏の女子に出づ。秦氏は邯鄲の人、女あり、羅敷と名づけ、邑人千乘王仁の妻となる。王仁、後に趙王の家令となる。羅敷出でて、桑を陌上に采る。趙王、臺に登り、見て之を悅び、因つて、酒を置いて奪はむと欲す。羅敷、巧に箏を彈ず、仍ち陌上桑の歌を作り、以て自ら明かにす。趙王、乃ち止む」とある。しかし、樂府解題には「古辭に言ふ、羅敷、桑を採り、使君に邀へられ、盛に其夫の侍中郞たることを誇り、以て之を拒む、前說と同じからず。陸機の扶桑升朝暉の如き、但だ美人の好合を歌ふのみ、古詞と始めは同じうして末異なり。又採桑あり、亦た此に出づ」とある。陌上桑の詩中に見えた羅敷は、その機智を以て、夫壻ののろけを言ひ、趙王を辟易させて、その戀慕の念を絕たしめたのであるが、古今注には、さう細かく書いてないから、解題には、疑を挾んだのであらうが、前說と同じからずといふのは、稍や果斷に失するの嫌があり、いづれにするも、羅敷は、趙王に向つて、見事、肱鐵砲を食はしたのである。次に、陌上桑の全篇を引抄し、古今注の文辭の足らぬ處を補ふことにする。

日出東南隅。照我秦氏樓。秦氏有好女。自名爲羅敷。羅敷喜蠶桑。採桑城南隅。青絲爲籠係。桂枝爲籠鉤。頭上倭墮髻。耳中明月珠。緗綺爲下裙。紫綺爲上襦。行者見羅敷。下擔捋髭鬚。少年見羅敷。脫帽著帩頭。耕者忘其犁。鋤者忘其鋤。來歸相怨怒。但坐觀羅敷。使君從南來。五馬立踟躕。使君遣吏往。問是誰家姝。秦氏有好女。自名爲羅敷。羅敷年幾何。二十尚不足。十五頗有餘。使君謝羅敷。寧可共載不。羅敷前置辭。使君一何愚。使君自有婦。羅敷自有夫。東方千餘騎。夫壻居上頭。何用識夫壻。白馬從驪駒。青絲繫馬尾。黃金絡馬頭。腰

中鹿盧劍。可レ直二千萬餘一。十五府小吏。二十朝大夫。三十侍中郎。四十專二城居一。爲レ人潔白皙。鬑鬑頗有レ鬚。盈盈公府步。冉冉府中趨。坐中數千人。皆言夫壻殊。

【詩意】春も三月に成つて、隴畝の間なる大道には、若若しい桑が茂つて、綠の葉は枝に一ぱいである。そこへ、羅敷は、籠を攜へ、行くゆく桑の葉を摘みつつ、日暮になると、蠶が飢に苦むだらうから、早く間に合ふ樣にしたいといふので、わき目も振らず、せッせと働いて居る。すると、趙王は、忽然として、行列の車馬を停め、桑の樹の下に於て羅敷に遇ひ、おもひの丈を搔き口說いた。趙王は、同心の言葉の積りで、遠慮なく言はれるのであらうが、折角ながら、趙王は私に取つては、知音の者ではない。君は、王者の貴を以て、美美しく著飾つて居られるが、私は、もとより貧賤の身分であつて、紅粉の妝をなすことだに出來ぬ。私は、田舍生まれの女であつて、とても、天上の仙宮に居る樣な若殿原に從ふことは出來ない。長安の都には、畫に見るが如き立派な樓閣が建ちつづき、その中に住む花の如き女性は、數かぎりもない位。その澤山な女の中には、お氣に召す樣な才色兼備の者が、幾らも御坐りませう。貴方は、私に向つて、色色話されずに、どうか早く御歸り下さい。折角ながら、私は、貴方の御心には從ひ兼ねます。

【餘論】通篇、事實に沿ひ、漫說二同心言一以下十句が羅敷の言葉である。陌上桑の古詞中、羅敷前置レ辭、使君一何愚、使君自有レ婦、羅敷自有レ夫の數句は、大義凜然として犯すべからず、續いて來るの氣の言葉と相俟つて、羅敷の大膽なることを表示し、まことに、痛快の極であるが、青邱が此詩に於て自信田間婦、難レ從二天上郎一云云といへるは、自謙の意に本づき、婉柔にして女らしい處はあるが、古詞に見る樣な氣魄を缺いて居るから、これでは、驕慢なる趙王の度膽を拔くことは出來ず、從つて、肱鐵砲もあまり有效ならず、惡くすると、手ごめに遇ふ虞が有りはせぬかと、いらぬ心配をするが、扨て如何なものであらう。

當壚曲

(一)光豔動二春朝一。妝成映二洛橋一。(二)

(三)錢多自解レ數。(四)箏澀未レ能レ調。

花如二秦苑一(五)好。(六)酒比二蜀都一饒。

(七)深謝諸年少。來沽不レ待(八)レ要。

當壚曲

光豔、春朝を動かし、妝成つて、洛橋に映ず。

錢多きも、自ら數ふることを解し、箏は澀つて、未だ調ふる能はず。

花は秦苑の如く好く、酒は蜀都に比して饒し。

深く謝す諸年少、來り沽うて要するを待たず。

【字解】【一】光豔 その容色の極めて光華あるをいふ。【二】洛橋 洛陽に在つて洛水に架した橋、崔顥の相逢行に、妾年初二八、家住洛橋頭とある。【三】錢多自解數 漢書五行志に「童謠に云ふ、河間姹女工數レ錢」とあるを暗用す。【四】箏澀 急就篇に「箏は瑟の類、本と十二絃、今は十三」とあり、集韻に「秦俗薄惡、父子あり、瑟を爭ひ、各〻その半を入る、當時名づけて箏となす」

とある。澀は指が硬くて思ふ樣に彈ぜられぬこと。韋應物の詩に秦女學レ箏指猶澀とある。【五】秦苑　一統志に「西安府城内の上林苑は、本と秦苑」とある。【六】酒比蜀都饒　一統志に「成都郫縣の人、大竹を刳いて春釀を筩に傾け、郫筩と號す。相傳ふ、晉の山濤、郫を治むる時、筠管を用ひ、酴醾を釀して酒を作り、兼旬方に開く、香、百歩に聞こゆ、故に蜀人その法を傳ふ」とある。蜀都は、卽ち成都、成都の酒は、他に比類なき釀法に依つたものと見える。【七】深謝　謝は、詫びるといふことではなく、挨拶をする。【八】不待要　要は要求する、格別要求せずとも、御望みの品は、大抵用意して備へてあるといふこと。

【題義】當壚曲は、樂府遺聲に「觴酌曲」といひ、樂府詩集に「雜曲歌辭」といひ、漢書司馬相如傳に「相如、卓文君と倶に臨卭に之き、盡く車騎を賣つて、酒舍を買ひ、乃ち文君をして壚に當らしめ、相如、身自ら犢鼻褌を著け、庸保と雜作して、器を市中に滌ふ」とあつて、當壚曲は、この意を取り、主として、酒家の少婦を詠出したのである。

【詩意】當壚の少婦の豔にして美しき、その光彩艷容、春の朝に動き、新妝方に成れば、洛橋に映ずるばかり。その少婦は、性質太だ巧慧にして、錢が幾ら多くとも、これを數へて間違はず、箏を彈ずるに、その手が、まだ慣れずして澀り勝ちに、絃を調ふる能はざる處が、却つて風情ある樣に見える。その家を繞れる花は、さながら、上林の如くであるし、貯へてある美酒は、成都に較べて更に多い。そこで、諸年少に挨拶して、いつでも來て酒を買はれよ、御望みの品は、特に言ひ付けられずとも、大抵備へてありますといつた。まことに、この酒壚は、行樂に持つて來いといふ處で、年少輩の毎毎入りひたつて居るのも、無理もない事と思はれる。

【餘論】これも、純然たる五律であるが、極言すれば、平淺庸近、決して、靑邱を重からしめるものではない。

游俠篇

游俠篇

游俠向何處(一)蕩蕩長安城。
游俠、何の處に向ふ、蕩蕩たり長安城。

城中暮塵起。殺人無(二)主名。
城中、暮塵起り、人を殺して主名なし。

所殺豈私讎。激烈爲不平。
殺すところは、豈に私讎ならむや、激烈、不平の爲めなり。

新削(三)安陵刀。光奪衆目明。
新に安陵の刀を削り、光は衆目を奪うて明かなり。

不畏(四)赤棒吏(五)里閭自横行。
赤棒の吏を畏れず、里閭、自ら横行。

灌夫(六)託爲友。袁盎(七)事以兄。
灌夫は託して友となり、袁盎は事ふるに兄を以てす。

負(八)氣不負(九)勢。傾身復傾情。
氣を負うて勢を負はず、身を傾け、復た情を傾く。

笑顧少年輩。瑣(一〇)瑣眞可輕。
笑うて顧みる少年の輩、瑣瑣として眞に輕んずべし。

【字解】【一】蕩蕩　廣き貌、長安の城壁の内部、卽ち城内ががらりとして廣い。【二】無主名　これを使嗾した人の名が分から

ない。【三】安陵刀　說苑に安陵を鄢陵に作つて居る、いづれにするも、楚地に產する名刀と見える。【四】赤棒吏　北齊書瑯琊王傳に「魏氏の舊制、中丞出でて道を淸むれば、王公、皆遙に車を住め、牛を去り、軛を地に頓し、以て中丞の過ぐるを待つ、その或は遲違すれば、赤棒これを棒す」とある。中丞は、御史中丞、今で云へば警視總監の樣な者と思はれる。【五】里閭　閭は里の入口の門。【六】灌夫　史記の本傳に「灌夫、人となり剛直、酒を使ひ、任俠を好み、然諾を已ろ、諸の與に交通するところ、豪傑大猾に非ざるなし」とある。【七】袁盎　史記の本傳に「袁盎、病んで、免じて家居し、閭里と浮沈し、相隨つて行き、雞を鬭はせ、狗を走らす、洛陽の劇孟、かつて袁盎を過ぐ、盎、善く之を待つ」とある。【八】負氣　負は自負する、恃む。氣は氣慨、氣骨。【九】負勢　勢は權勢。【一〇】瑣瑣　猥小の貌。

【題義】游俠篇は、樂府詩集に「雜曲歌辭。漢書游俠傳に、戰國の公子、魏に信陵あり、趙に平原あり、齊に孟嘗あり、楚に春申あり、競うて游俠を爲す、漢興つて、魯人朱家及び劇孟・郭解の徒、皆俠を以て聞こゆ。萬章は、城西柳市に在り、號して城西萬章といふ。趙君都・賈子光あり、皆長安の名豪、仇怨を報じ、刺客を養ふものなり。魏志、楊阿若、名は豐、字は伯陽、少にして游俠、常に仇を報じ怨を解くを以て事となす、故に時人これが號を爲して曰く、東市相斫楊阿若、西市相斫楊阿若と。後世遂に游俠曲あり」とあつて、張華・王褒の作を最も古きものとし、唐の李白にも、同題の作がある。いづれも、俠客豪爽の趣を述べることを旨として居る。

【詩意】游俠の豪客は、何處に向ふかといへば、蕩蕩として廣き長安城内である。日暮、城中に塵の起つた處を尋ねると、屹度、人が殺されて居る。殺したのは、かの豪客に相違ないが、使嗾した發頭人は、誰とも分からない。豪客の人を殺す、何も私怨が有るからといふでなく、その性、激烈にして、他人の爲に、不平の思に堪へぬ處から、つい賴まれて遣るといふのである。そこで、新に安陵の名刀を磨いて、これを打ち振れば、光輝發越して、衆目を奪ふべく、赤棒を手にすれば、威權赫灼たる中丞でさへも、決して、畏ることなく、里閭の間に入つて、おのが心の儘に橫行して居る。そこで、灌夫は、これに託して友と爲し、袁盎は、兄分として之に事へて居る。游俠の豪客は、唯だおのが氣慨を恃むだけで、決して、權勢を恃まず、一たび、心が投合すれば、一身を傾けるは愚か、滿胸の情を傾けて、その人の爲に盡し、決して後へは引かぬといふ決心がある。されば、笑ひつつ、少年輩を顧み、汝等の爲すことは、まことに瑣瑣として客臭く、何の役にも立たず、眞に輕侮すべきものだといつて、その氣焔凄じく、到底、これに當ることは出來ない。

【餘論】遊俠の面目を描き出して、紙を出でむとするを疑ふばかり。所レ殺豈私讎の二句は、彼の眞本領を表示し、結末四句、負レ氣不レ負レ勢は、氣慨凜凜として、容易に侵すべからざるの概がある。

關山月

月出遼海東。朔雲捲胡風。
纔升楡塞遠。復照柳城空。

關山の月

月は出づ遼海の東、朔雲、胡風に捲く。
纔に楡塞に升つて遠く、復た柳城を照らして空し。

影滿雕弧外。光沈金柝中。　影は滿つ雕弧の外、光は沈む金柝の中。
思家擧頭望。今夜一軍同。　家を思ひ、頭を擧げて望む、今夜、一軍同じ。

【字解】【一】遼海　集韻に「海は遼陽縣に在り」と見えて、今の渤海を指す。【二】翔雲　翔は朔方、北地の寒げなる雲。【三】捲胡風　胡天の風に捲かれる、雲が風の爲に吹き捲ばるること。【四】楡塞　一統志に「永平府撫寧縣楡關、隋の時、漢王諒、兵を將ゐて高麗を伐たむとし、兵、楡關に臨むとは、卽ち此」とある。しかし、長城には、多く楡を植ゑたから、楡塞・楡關などいふので、無論、さういふ地名もあらうが、ここのは、汎く長城と見る方が宜しい。【五】柳城　一統志に「柳城の廢縣は、永平府城の西に在り。隋、縣を置いて遼西に屬し、唐、ここに營州を置く」とあつて、今の滿洲の西、蒙古境に在つたらうと思はれる。【六】雕弧　彫刻を施した立派な弓、張說の詩に雕弧月中上、畫的暈重圍とある。【七】金柝　博物志に「番兵、刁斗を謂うて金柝といふ」とあり、唐書段秀實傳に「候卒を戒め、金柝これを警る」とある。

【題義】關山月は、樂府正聲に「漢の鼓角橫吹曲」とあり、題解に「離別を傷むなり、古しへの木蘭詩に萬里赴戎機、關山度若飛、朔氣傳金柝、寒光照鐵衣、按ずるに、相和曲に度關山あり、亦た此に類す」とある。つまり、關山に照り亙れる月を見て、故鄕を思ふ征夫の情緖を述べたので、梁の元帝、陳の後主、各その作があるが、李白の明月出天山、蒼茫雲海間、長風幾萬里、吹度玉門關に至りては、殊に有名である。

【詩意】月は遼海の東より上り、程なく朔天の雲は胡風に吹き捲かれて、空も漸く晴れたから、清光愈よ遠きに亙つた。そこで、楡樹茂れる長城に差し上げれば、次第に遙になり、はては、人煙空虛となれる柳城の廢墟をも照らした。その月の影は、引き搾る弓以外に圓く、やがて光は、曉近く金柝聲中に在つて、次第に沈んで行く。今宵しも、一軍幾十萬の征人は、家鄕の思に堪へず、さながら言ひ合はせた樣に、頭を擧げて、この天上の月を眺め、愈よ深き愁に堪へられない。

【餘論】この詩、第一第二の兩句以外は、平仄が合拍して居て、さながら梁陳時代の作の如く、殆んど成形しかかつた五律、換言すれば、原始的の五律に擬したのである。影滿雕弧外は、李白の邊月隨弓影と同じく、唯だ月が弓に似て居るといふだけの意を、巧者に言ひ廻はしたものであるし、光沈金柝中は、例の朔氣傳金柝、寒光照鐵衣を變化して出したものである。又、思家擧頭望の二句は、李益の磧裏征人三十萬、一時回首月中看と全く同義である。

鞠歌行

鞠歌行

玉蘊彩。劍閟鋒。　玉は彩を蘊み、劍は鋒を閟づ、
牛鐸之音混黃鐘。　牛鐸の音、黃鐘に混ず。
俾神奇。作妄庸。　神奇をして、妄庸と作らしむ、

【字解】【一】蘊彩　光彩を包み匿す。【二】閟鋒　鋒先を閉ぢこめて見えない樣にする。【三】牛鐸　牛の首に掛けた鈴、晉書荀勖傳に、

（五）揚徵察陋世罕逢。　徵を揚げ、陋を察する、世、逢ふこと罕なり。
（六）物有合。（七）勢必從。　物合ふあり、勢必ず從ふ、
如（八）魚得水（九）雲與龍。　魚の水を得、雲の龍と與にするが如し。
（一〇）夷吾囚。（一一）伊尹農。　夷吾は囚へられ、伊尹は農たり、
（一二）二主擧之享（一三）萬鍾。　二主、これを擧げて、萬鍾を享けしむ。
嗟古人。孰繼蹤。　ああ古人、孰れか蹤を繼がむ、
（一四）女子猶爲悅己容。　女子、猶ほ己を悅ぶが爲に容る。

「易、樂事を掌り、律呂を修す。かつて、路に于て趙の賈人の牛鐸を聞いて、その聲を識る。樂調未だ調はざるに及びて、乃ち曰く、趙の牛鐸を得れば諧はむと。遂に郡國に下して、悉く牛鐸を送らしめ、果して、音を諧ふるを得たり」とある。【四】黄鐘　律呂の名、一番低い調。【五】揚徵察陋　隱れたるものを擧げ、陋劣なる者の中より特に察知して引き上げる。【六】物有合　物は孤立せず、必ず二つ類を以て相合ふ。【七】勢必從　前と同義で、必然の勢、同類の者に從って一處になる。【八】魚得水　蜀志諸葛亮傳に「亮と情好日に密なり。關羽張飛等悅ばず、先主曰く、孤の孔明あるは、猶ほ魚の水あるがごときなり」とある。【九】雲與龍　易に「同明相照らし、同類相求む、風は虎に從ひ、雲は龍に從ふ」とある。【一〇】夷吾　管仲の字、管仲は公子糾に從ひ、公子小白の齊に入るを防いだが、小白、遂に齊に入って桓公となり、魯に命じて、公子糾を殺さしめた。その時、召忽は其難に死んだが、管仲は、囚はれむことを請うて、齊に送られ、後に鮑叔は之を桓公に進めて、相となし、遂に桓公をして覇たらしめ、諸侯を九合し、天下を一匡した。その詳は、史記の本傳並に齊世家に見ゆ。【一一】伊尹　伊尹は始め有莘の野に耕して居たが後に湯を輔けて王たらしめた。【一二】二主　齊の桓公と殷の成湯とを指す。【一三】萬鍾　鍾は升目の名。萬鍾の祿といへば、この上もない多額の俸祿。【一四】女子猶爲悅己容　古い諺に「士は已を知るものの爲に死し、女は已を悅ぶものの爲に容る」とあつて、數ば史記に見えて居る。

【題義】鞠歌行は、樂府正聲に「相和歌辭平調曲」とあり、樂府詩集に「古今樂錄に曰く、王僧虔の技錄、平調又鞠歌行あり、今歌ふものなし、と。陸機の序に曰く、按ずるに、漢の宮闕に含章鞠室、靈芝鞠室あり、後漢馬防の第宅、卜して道に臨み、閣に連り、池に通じ、鞠城、街路に彌る。鞠歌は、將に之を謂はむとするなり。又、東阿王の詩に連騎擊壤、或は謂ふ、蹙鞠乎と。三言、七言。奇寶名器と雖も、知己に遇はざれば、終に重んせられず、知己に逢はむことを願うて、以て意を託す」とある。この中間、陸機の序といふのは、折角ではあるが、どうも、意義晦澀である處から、金檀の注には、これを省略してある。おもふに、鞠歌の鞠は鞠室の鞠、卽ち鞠問の義で、人が罪に遇ふことを云つたものと見え、人にして知己に逢はざれば、罪なくして辛き目を見るといふ處から構想して、知己を得むことを囑望したものと思はれる。この題には、前に云へる陸機を始め、謝靈運・謝惠連等の作があるが、李白のが一番よく人に知られ、且つ其詩も第一に高妙であるから、下に全篇を引抄することにする。

玉不自言如桃李。魚目笑之卞和恥。楚國青蠅何太多。連城白璧遭讒毀。荊山長號泣血人。忠臣死爲刖足鬼。聽曲知寗戚。夷吾因小妻。秦穆五羊皮。買死百里奚。洗拂青雲上。當時賤如泥。朝歌鼓刀叟。虎變磻溪中。一擧釣六合。遂荒營丘東。平生渭水曲。誰識此老翁。奈何今之人。雙目送飛鴻。

【詩意】玉は其光彩を包み匿し、劍は其の鋒先を閉ぢて顯はさざれば、誰も見分けず、牛の首に掛ける鈴に黃鐘の妙音が混入したからといつて、顧みるものもなく、天晴、神聖奇絕なるものを、妄誕庸淺の物にして退けて仕舞ふのは、まことに遺憾であるが、微賤なるものを擧げ、陋劣なる者の中から見分けるといふ人は、この世に於て逢ふこと稀であるから、どうにも仕方が無い。しかし、物は自ら其類に合すべく、勢は必然的に同じ樣なものに從ふことであつて、たとへば、魚が水を得、雲が龍に從ふ樣なものである。現に、管仲は、その初、囚人であつたし、伊尹は、元と有莘の耕夫であつたが、一は桓公に用ひられ、一は成湯に擧げられ、ともに、その輔佐となつて、萬鍾の大祿を得、そして、その君をして大業を成さしめた。して見ると、うまく其時に遭ひさへすれば、神奇なるものは、矢張、神奇なるものとして認められることである。それにつけても、引込んでのみ居らず、然るべき相手を見たならば、おのれを推薦することも必要で、ここに、夷吾・伊尹等、古人の蹤を繼がむとせば、女子が己を悅ぶものの爲に容るといふ通り、その人の目につく樣に名のり出ることが、必要である。

【餘論】李白の作は、五言と七言とが相雜つて居たが、題解に三言七言とあるから、靑邱は、特に意を用ひて、これに循從したものと見える。この詩は、あまり新警の處も無く、李白の作に比すれば、篇幅も短く、兎に角、まとまつては居るが、縱橫歷落の趣は、遂に彼に一籌を輸することを免れない。

古詞

古詞

（一）妾刀不斷機。郎行當早歸。

妾が刀、機を斷たず、郎が行、當に早く歸るべし。

（二）還將機中錦。作郎身上衣。

還た機中の錦を將て、郎が身上の衣と作さむ。

【字解】〔一〕妾刀不斷機　鷄跖集に「樂羊子、遊學し、未だ三月ならずして歸る。その妻、刀を引き機に趨つて曰く、君子、學を尋れ、中道にして歸る、何ぞ斯機を斷つに異ならむや、と。羊子乃ち發憤して業を卒ふ」とあつて、孟母の話と全然相同じく、唯だ彼は母子、此は夫妻といふだけの相違である。〔二〕還　またと訓す、もと循環する意で、又ぞろといふのが本義であるが、ここのは、加之、かてて加へてといふ樣な意味である。

【題義】この詩は、字解の條に引ける樂羊子の故事に本づいて、新に趣向を施したので、もとより、古題でもないが、事實の本づく處が古いから、假りに題を署して古詞としたのであらう。以下、かういふ例は幾らもある。又、その體裁は、齊梁の小樂府に類似して居る故に、矢張、意を用ひて樂府の中に厠へて置いたのであらう。

【詩意】さきに、吾が郎が中途で廢學して歸つて來た時、私は、甚だ本意なきことに思ひ、どうか、發憤させたいといふ一念から、わざと織りかけてある機を斷ち切つた。その後、かなり歲月を經、君も自然學業が成就したことと思はれる。そこで、もう二度と小刀で機を切る樣なことは致さぬから、君も安心して早く歸つて下さい。加之、今、機の上にかけて居る錦を以て、君が身上の衣となし、

君が天晴出世をして、光彩、里閭を照らす樣に有りたいものと、毎毎心に念じて居る。

【餘論】前半だけでは、あつさりし過ぎて、詩には成らぬが、後半を得て、更に一歩を踏過し、ひとり、君の卒業のみか、その榮達を併せて希望して居る處に於て、一段の眞情を發見すべく、詩としては、紆餘曲折の趣を爲し、頗る情に入つて婉なる妙趣がある。

王明君

都門塵拂春風面。　都門塵は拂ふ春風の面、
臨別看花涙如霰。　別に臨んで花を看て、涙、霰の如し。
君王惆悵惜蛾眉。　君王惆悵、蛾眉を惜む、
不似前時畫中見。　似ず前時畫中に見る。
白髮呼韓感漢恩。　白髮の呼韓、漢恩に感じ、
單于漫號閼氏尊。　單于、漫に號す、閼氏の尊。
氈裘肉食本異俗。　氈裘肉食、本と異俗、
不如但嫁巫山村。　如かず、但だ巫山の村に嫁せむには。
黃沙白雪無城闕。　黃沙白雪、城闕なく、
手冷鵾絃夜彈歇。　手冷かにして、鵾絃、夜彈歇む。
相隨萬里到穹廬。　相隨うて、萬里、穹廬に至る、
只有長門舊時月。　只だ長門舊時の月あるのみ。
妾語還憑歸使傳。　妾が語、還た歸使に憑つて傳ふ、
妾身沒虜不須憐。　妾が身、虜に沒するも憐むを須ひず。
願君莫殺毛延壽。　願はくは、君、殺す莫れ、毛延壽、
留畫商巖夢裏賢。　留めて畫かしめよ、商巖夢裏の賢。

【字解】【一】都門　長安を指す。【二】春風面　春風を含める如く、和氣靄靄として、にこやかな顏、杜甫の詠懷古跡に畫圖省識春風面とあるに據る。【三】涙如霰　涙がはらはらと落つる貌、江淹の雜體詩に揮涙如霰とある。【四】君王　漢の元帝。【五】惆悵　悵然として愁に堪へざること。【六】蛾眉　美人の義。【七】前時畫中見　延壽が故らに惡し樣に畫いた其姿を見た時、その詳は、題義の條に注することにする。【八】呼韓　匈奴の單于、即ち君主の名。【九】單于漫號閼氏尊　漢書匈奴傳に「竟寧元年、呼韓邪、復た入朝す。自ら云ふ、願はくは、漢氏に壻として、以て自ら親しましむ、と。元帝、後宮良家の子王嬙を以て單于に賜ふ。單于、驩喜し、上書して塞を保つことを願うて歸る。王昭君、寧胡の閼氏と號す」とある。又閼氏に就いては、集韻に「閼音は煙、氏、一に支に作る、單于の適妻なり」とあり、習鑿齒の燕王に與ふる書に「山下に紅藍あり、北人、その花を採つて緋黄に染め、その上英の鮮なる者を挼取して臙脂を作り、婦人採挎して、用つて顏色となす、因つて、妻を閼氏と名づく」とある。つまり、臙脂を以て妝を爲す處から、その普通なる閼氏の字を用ひて、單于の嫡妻の稱としたのである。又寧胡は「胡、これを得て、國以て安寧なり」といふ義。【一〇】氈裘　毛氈や羅紗の樣な厚い地の織物で、冬の衣裳を造る、胡地は寒氣甚しきが故である。【一一】巫山村　昭君の生まれた處は、峽江の中で、巫山に近い處であつた。一統志に「昭君は、荊州府秭歸の人、今歸州に明妃廟、昭君村あり」といひ、陸旅の明妃出塞圖の詩に、昭君北嫁呼韓國、巫山更有昭君村」とある。【一二】

黃沙　沙漠、その色黃なるが故に云ふ。【一三】**鵾絃**　樂府雜記に「賀懷智、鵾雞の筋を以て琵琶の絃となし、鐵撥を用ひて彈ず」とある。ここでは琵琶の義。【一四】**穹廬**　氈帳、即ちテント。匈奴は、水草を逐うて移轉する蠻民であるから、家屋なくして、テントの中に住んで居る。【一五】**長門**　前に見ゆ。漢宮の名、陳皇后が寵を失ひし後、しばらく此に居た。【一六】**憑**　依る、たのむといふ意義も聊か加はつて居る。【一七】**歸使**　胡國より南に歸る漢使。【一八】**沒虜**　胡人の中に沒する。【一九】**商巖夢裏賢**　殷の武丁が賢相を得むことを思ひ、夢に其人に遇つたといふので、その繪參を畫かせて物色し、傅巖の下に版築を爲せる多くの役夫の中に於て其人を見出し、擧げて相とした、それが卽ち傅說、その事は史記に見ゆ。商巖の商は殷、殷代傅巖の賢者といふ義。

【題義】　王明君は、樂府正聲に「相和歌辭吟嘆曲、又淸商曲」とあり、題解に「王嬙、字は昭君。漢の元帝、後宮すでに多く、常に見ることを得ず、乃ち畫工をして、その形を圖せしめ、圖を按じ、召して幸す。宮人皆畫工に賂す。昭君、自ら其貌を恃んで、ひとり與へず、乃ち惡しく之を圖す。後、匈奴入朝し、美人を選んで之に配す。昭君行くに當る。入つて辭するに及びて、光彩人を射り、左右を竦動す。天子、方に信を外國に失ふを重かり、悔恨すれども及ばず、その事を窮按す。畫工に杜陵の毛延壽・安陵の陳敞・新豐の劉白・洛陽の龔寬・下杜の陽望・長安の樊育あり、皆同日に棄市せらる。漢人、昭君の遠嫁を憐んで、爲に歌詩を作る。はじめ、武帝、江都王建の女を以て公主とし、烏孫王昆莫に嫁す。琵琶馬上に樂を作し、以てその道路の想を慰めしむ。その明君を送るも、亦た然り。晉の文帝、諱は昭、故に改めて明君と爲す。石崇、妓あり、綠珠といふ、歌舞を善くす、この曲を以て之に敎へ、而して、自ら王明君の歌を製す、その文悲雅、我本漢家子、是れなり」とある。

昭君の事跡は、ざッと此の如く、やがて、千古の好題目となり、樂府の中で、王昭君・昭君怨・明妃曲など題するものは、いづれも、その事を歌ふを主としたものである。なほ昭君の出身に就いて、琴操には「昭君は、齊國王穰の女、端正閑麗、未だ嘗て門戶を窺はず、穰、その異なるを以て、人、これを求むれども與へず、年十七、これを元帝に獻ず」とあるが、これは一異說と見るべく、矢張、荊州秭歸の人、年十七、選ばれて、良家の子となつて、後宮に入つたといふのが事實であらう。後漢書には、敕して妾を匈奴に賜ふに際し、昭君は數歲進御されざるに因り、不平の極、掖庭の令に就いて、自ら志願して出でたとあつて、畫工の一條などは全く閑却されて居るが、これは眞逆と思はれる。琵琶馬上の事は、石崇の作つた王明君の詩の序に見え、もと推測に出でたものであるから、直に之を事實とするのは、聊か誤つて居る。なほ昭君入胡後の事に就いて、下に略說することとしやう。昭君、すでに呼韓邪に嫁せし後、伊屠智牙師といふ男子を一人生み、後に右日逐王となつた。三年の後、呼韓邪單于は、老病で死んだ。その初、單于は昭君を娶る前に、嬖妾が二人あつて、若い方の妾の生んだのが雕陶莫皐、それが嗣いで立つて復株累若提單于となつた。然るに、匈奴は、未開の蠻族で、父の死後には、その羣妾を引き受けて、おのが妻とするといふ一般の風習であつたから、新單于は、無理に迫つて、昭君を妻とし、須卜居次・當于居次といふ二人の娘を生ませた。居次は、公主、卽ち內親王の義、かくの如き次第で、昭君は、勿論、滿足もしまいが、いつしか、心まで、胡地の人と成り

下り、やがて老死したといふことである。後漢書は、これと稍や異にして、呼韓邪に嫁して、二女を生み、單于が死んで、前閼氏の子が代り立つて昭君を妻とせむとした時、昭君は上書して歸るを求めたが、成帝は、詔して、胡俗に隨はしめたとある。ひとり、一統志には、昭君の子――まさか生みの子ではあるまいが――に世達（一本に世違）といふものがあつて、父に代つて位を嗣いだ時、昭君に妻たらむことを求め、昭君が「汝は胡禮を爲すか、それとも、漢禮を爲すか」といつて尋ねると、世達は「われは、胡禮を爲さむことを願ふ」といひ、どうしても聽かなかつた故に、昭君は、哀れ無殘にも、毒藥を呑んで死んだとあるが、時代すでに邈たり、今さら所説の是非を判定することは出來ない。それから、昭君を葬つた處は、胡地の中で、四時草常に青きが故に、青塚と稱するとのことで、前に雨雪の第二首に注して置いた。

【詩意】長安の車塵は、昭君のにこやかなる春風の面を拂ひ、今しも、告別の爲に朝見したが、これが御別れで、これから萬里の胡地に行くことかと思へば、ふと目を移して、折から咲き匂ふ花を見ても、涙ははらはらと霰の如く、たばしつて落ちる。元帝も、亦たかかる美人を胡人に與れてやるのは、如何にも殘念至極だといふので、只管惆悵せらるる、その愁の氣色は、さきに似ても付かぬ畫を御覽に成り、こんな物はといつて、はね退けられた其時とは、丸で違つて居た。昭君、すでに胡地に入りし後、白髮頭の呼韓邪單于は、愈よ漢恩の辱きを感じ、昭君を尊んで、寧胡の閼氏と號した位。かくの如く、尊崇されたのは、せめてもの事であるが、厚い羅紗を冬の衣とし、肉を常食とし、漢地とは全然異なつた風俗であるから、まことに、住み憂く、情なく覺えたことは、もとより、言を俟たず。これでは、いつその事、故鄕の近くなる巫山の村あたりの只だ人の處に嫁した方が、どれ程善いかと、つくづく感じたことであらう。抑も、塞外の風景たるや、黃沙萬里、冬になれば、白雪地を埋め、その間、城郭宮闕などは全く無い。夜は琵琶を掻き鳴らす手も冷たく、鵾雞の筋を張れる其絃を彈じて、やがて一曲を奏し終れば、淒涼愈よ堪へず、萬里の遠きを經て、ここなる氈帳まで相隨つて來るものは、唯だ長門宮前に眺めた舊時の月のみである。今しも、南方に歸る漢使があるから、その人に賴んで、漢帝に言傳をして貰ひたいが、私の身は、胡虜中に歿しても、もとより薄命の致すところ、自分でも諦めて居るから、決して、御憐愍の念を起されずとも善い。私を北行せしめた其事の張本たる毛延壽は、もとより憎い奴ではあるが、人物畫家として、すぐれた技能を持つて居るものであるから、私の爲に之を死刑に處せられず、これを留めて置いて、君王に、古しへの武丁が傅巖の賢人を得たといふ樣なことがあつた時、夢に見た其人の像を畫かせて、物色させたらば、宜しからう。つまり、君王は、私の如き一婦人の事は念頭に置かず、天晴、賢相を得て、至治を圖る樣にせらるれば善いので、何分にも、御願いたします。

【餘論】都門の二句、氈裘の二句、相隨の二句、ともに昭君の心事を忖度し、極めて工警新婉である。

王漁洋は、結末二句を斥け「高季迪は、明三百年間、詩人の冠冕、然れども、その明妃曲に云ふ、君王莫レ殺毛延壽、留畫商巖夢裏賢、これ三家村學究の語、謂はゆる下劣の詩魔、知らず、季迪、何を以て墮落かくの如き、而して、盲者反つて以て警策となす」と云つて居るが、兎に角、忠厚の本旨を失はず、毛延壽の畫工たることを活用したのは、まさしく面白い。

烏夜啼

啼烏驚多棲(一)未レ久。
半起二疎(二)桐一上二高柳一。
燈下佳人顰(三)二淺眉一。
機中少婦停二織手一。
月入二空閨一夜欲レ深。
數聲猶似レ聽二君琴一。

烏夜啼

啼烏、驚くこと多くして、栖む、未だ久しからず、
半は疎桐より起つて、高柳に上る。
燈下の佳人は淺眉を顰め、
機中の少婦は織手を停む。
月は空閨に入つて、夜、深からむと欲す、
數聲、猶ほ君の琴を聽くに似たり。

【字解】【一】棲　塒に休む。【二】疎桐　葉が疎になつて居る桐の木。【三】顰淺眉　すこし眉を顰めて心配らしき顏をする。

【題義】烏夜啼は、樂錄に「清商西曲歌なり、周の房中樂の遺聲、江左に謂はゆる梁宋の新聲なり。その辭、宋の臨川王義慶の作るところに始まる。宋の元嘉中、彭城王義康を豫章郡に徙す。義慶、時に江州たり、相見て哭す。文帝、聞いて之を怪み、召して、宅に還らしむ。義慶、大に懼る。妓妾、烏の夜啼くを聞き、齋閣を叩いて曰く、明日當に赦あるべし、と。旦に及んで、南兗州刺史に改める。これに因つて、歌を作る、故に其詞に云ふ、

　籠窻窗不レ開。烏夜啼。夜夜望二郎來一。

蓋し其妾を詠ずるなり」とある。後人にも、その擬作が大分あるが、普通世に知られて居る李白の一首の如きは、唯だ閨中の女が遠人を思ふ有樣を敍して居る。青邱の此作も、矢張、主人の不在の間、羣妾が夜烏の啼くのを聞いた其趣を寫して居る。

【詩意】夜啼く烏は、頻りに何事にか驚いたものと見えて、塒に休む間もあらせず、その半數は、葉の疎になつた桐の木から飛び起つて、高い柳に移り、どうやら、唯だならぬ有樣である。主人の不在を守る羣妾どもは、これを聞いて、何か異變でも無ければ善いがといふので、燈下に坐せる佳人は、聊か眉を顰め、機を織りかけて居た少婦は、その細い手を停めて、ともに物思に沈んで居る。折しも、明月、光を流して空閨に入り、夜は愈よ深く、烏は又しても鳴いて居るが、その數聲は、主人の彈ずる琴の音を聞いて、驚いて啼いたものとも思はれるので、さうすれば、主人が御歸りに成つたのでもあらうか。

【餘論】一篇の精神は、結末二句に在るので、自ら慰藉の辭を爲すは、哀惋の至、餘情長しへに盡きざる所以である。

行路難

行路難

君不見盤中(一)鯉。
君見ずや、盤中の鯉、

暫失風濤登俎(二)几。
暫く風濤を失つて俎几に登る。

君不見枝(三)上蜩。
君見ずや、枝上の蜩、

纔出糞(四)壤凌雲霄。
纔に糞壤を出づれば雲霄を凌ぐ。

推移變化詎可測。
推移變化、詎ぞ測るべけむや、

勿謂明日同今(五)朝。
謂ふ勿れ、明日、今朝に同じ、と。

(六)出乘高車入大馬。
出でて高車に乘じ、入つては大馬、

半是當年徒(七)步者。
半は是れ、當年徒步の者。

(八)范叔曾逃客(九)溺餘。
范叔、かつて逃る客溺の餘、

(一〇)衛青亦在人管下。
衛青亦た在り人管の下。

(一一)悠悠行(一二)路莫相(一三)欺。
悠悠行路、相欺く莫れ、

爲雌爲雄未可知。
雌と爲り、雄と爲る、未だ知るべからず。

【字解】【一】盤中鯉　盤中に入れて持つて來た鯉魚。【二】俎几　まな板。【三】枝上蜩　蜩は蟬、ひぐらしの類。【四】糞壤　きたない土。【五】今朝　今日に同じ。【六】出乘高車入大馬　出づるには高車、入るには大馬と限つたのではなく、これは互文で、出入の際、高車大馬に乘するといふ義。【七】徒步者　漢書公孫弘傳に「徒步より起り、數年にして、宰相封侯に至る」とある。徒步は車馬を雇ふことが出來ず、止むなく自ら步行する貧窮の士人。【八】范叔　史記范雎傳に「雎は魏人、字は叔、魏の中大夫須賈に從つて齊に至る。齊の襄王、雎の辨口を聞いて、雎に金及び牛酒を賜ふ。賈、魏國の陰事を以て齊に告ぐるを疑ひ、歸つて魏の相魏齊に告ぐ。齊、大に怒り、舍人をして雎を笞擊せしむ。雎、佯つて死す、卽ち卷くに簀を以てして、厠中に置き、賓客飮むもの、醉うて更る〳〵雎に溺す。雎、簀中より守者に謂ふ、我を出さば、必ず厚く謝せむ、と。守者出して簀中の死人を棄つ。雎、後、秦に入つて相と爲る」とある。【九】客溺餘　溺は小便、客人どもに小便をしかけられた其揚句。【一〇】衛青　史記衛青傳に「青は平陽の人。その父鄭季、吏と爲り、平陽侯の家に給事たり、侯の妾衞媼と通じて青を生む。青の同母兄は衞長子、而して姊は衞子夫。平陽公主の家、幸を天子に得たるより、故に姓衞氏を冒す。少にして、その父に歸し、羊を牧せしむ。先母の子、皆これを奴畜し、以て兄弟の數と爲さず。青、かつて從つて入り、甘泉の居室に至る。一鉗徒あり、青を相して曰く、貴人なり、官、封侯に至らむ、と。青、笑つて曰く、人奴の生、笞罵せらるるなきを得ば足れり、安んぞ封侯を得むや、と。元朔元年春、衞夫人、男あり、立つて皇后となるに及び、青、匈奴を擊つて功あり、長平侯に封じ、車騎將軍に拜せらる」とある。【一一】悠悠　相關知せざる貌。【一二】行路　行路の人。【一三】相欺　欺は壓倒する、凌辱する。

【題義】行路難は、樂府遺聲に道路曲とあり、樂府詩序に雜曲歌辭とあり、題解に「備さに世路の艱難、及び離別悲傷の意を言ひ、多く君不見を以て首となす」とある。

【詩意】盤中に盛られた鯉魚は、しばらく風濤を離れて仕舞つたから、龍門に上つて龍となることも出來ず、まごまごして居ると、俎板に載せて料理されて仕舞ふ。これに反して、枝上の蟬は、穢い土から出るや否や、高く飛んで、はては雲霄を凌がむとして居る。天地間に於ける、あらゆる事物の推

移變化は、到底、人智を以て豫測することが出來ず、明日は、決して今日と同じでは無い。現に、出入の際、高車大牛に乘じ、堂堂として時めく王公貴人の大半は、その昔、車にも馬にも乘れず、止むを得ず、自分の足で、てくてく徒歩して居た手合である。范雎が、一たび秦に入つて宰相となつたのは、醉客から小便をしかけられ、散散な目に遭つた其揚句の果であるし、衞青は、戰功を以て封侯となつたが、これも、むかし人の笞の下に打ち据ゑられて、弱り切つて居たものである。かういふ風であるから、われは今風塵の底に跼蹐して居るが、悠悠たる行路の人よ、決して凌辱しないが善いので、行く末、雌となるか、雄となるか、未だ知るべからず、決して、この儘で老い朽ちる譯でもない。

【餘論】盤中鯉と枝上鯛と、生死榮衰相反し、推移變化の二句、これを承け、更に世上の人事に移つて、范雎・衞青を以て、その實例となし、悠悠行路の二句は、自奮の意に滿ちて、氣焰萬丈、當るべからざるの概がある。つまり、人世の行路は、難澀なものであるが、行く末の運命次第で、これに打克つことも出來るといふので、反照的に、行路難を詠出したのである。

危莫若編虎須(一)。　危きは、虎須を編むに若くはなく、
險莫若觸鯨牙(二)。　險は、鯨牙に觸るるに若くはなし。

行路之難復過此。　行路の難、復た此に過ぐ、
前有瞿塘(三)後褒斜(四)。　前には瞿塘あり、後には褒斜。
杯酒朝驩(五)。　杯酒朝に驩べども、
矛刃夕加。　矛刃夕に加はる。
恩讎反覆間。　恩讎は反覆の間、
楚漢生一家(六)。　楚漢、一家に生ず。
鉤弋(七)死雲陽。　鉤弋は雲陽に死し、
鴟夷(八)棄江沙。　鴟夷は江沙に棄てらる。
所以(九)賢達人(一〇)。　所以に賢達の人、
高飛不下避網罝(一一)。　高飛して下らず、網罝を避く。
行路難堪歎嗟。　行路難、歎嗟するに堪へたり。

【字解】【一】虎須　須は鬚に同じ。莊子に「虎頭を料り、虎須を編む、幾んど虎口を免れざるか」とある。【二】鯨牙　李白の公無渡河に「有長鯨白齒若雪山、公乎公乎挂罥於其間」とある。【三】瞿塘　峽名、揚子江の上流、一統志に「瞿塘は、夔州府城の東に在り、舊名西陵峽。兩岸對峙、中に一江を貫き、灧澦堆、その口に當る、乃ち三峽の門、瞿塘峽口、諺に云ふ、灧澦大如象、瞿塘不可上、灧澦大如馬、瞿塘不可下」とある。【四】褒斜　二谷の名、班固の西都賦に、右界褒斜隴首之險とあり、一統志に「褒谷は漢中府褒城縣に屬す、連雲棧を出づれば、直に鳳縣の斜谷に至る」とある。【五】朝驩　朝に驩樂を爲す。【六】楚漢生一家　楚は項羽、漢は高祖、卽ち劉邦。一家の中に在りて、劉項の如く互に敵視する。【七】鉤弋　漢書外戚傳に「孝武の鉤弋趙倢伃は、昭帝の母なり。鉤弋、宮に居り、大に寵あり。元始三年、昭帝を生み、鉤弋子と號す。後、衞太子敗る。鉤弋の子、年五六歲、壯大多智、上、かつて我に類すといひ、立てむと欲す。その年稚く、母少なるを以て、女主の顓恣を恐れ、猶與、之に久しうす。鉤弋倢伃、事に甘泉に從ふ、過

あつて讒められ、憂を以て死し、因つて雲陽に葬る」とあつて、その注に「甘泉宮南に在り、土俗、呼んで女陵と爲す」とある。【八】鴟夷　伍員、字は子胥。吳越春秋に「子胥、劍に伏して死す、吳王、盛るに鴟夷の器を以てし、これを江中に投ず」とあつて、その注に「鴟夷は革囊なり」とある。【九】所以　故にと訓ずべし。【一〇】賢達人　賢明達識の士。【一一】網罟　ともに鳥を捕ふる網。

【詩意】危きは、虎の鬚につかまるに越したことはなく、險なるは、鯨の牙に觸るるに過ぎたことはない。しかし、人生行路の難きことは、虎鬚を編み、鯨牙に觸るるどころではなく、前には罶塘あり、後には褒斜あり、到底、無事に此を過ぐることは出來ない。抑も人生の事たるや、朝には、杯酒を共にし、睦まじく歡樂を爲して居ても、夕には、互に矛刃を以て斬り合ふといふ樣なことがある。恩讐は、反覆の間に變じ、同じ一家の內に居ても、漢楚の劉項の如く、互に反目して相鬩ぐといふことがある。されば、鉤弋夫人は、昭帝の生母で、武帝の寵ありしに拘はらず、雲陽に於て憂死し、伍子胥は、闔閭夫差の二人を助けて大功ありしに拘はらず、一朝讒を被つて死を賜はり、その屍は革囊に入れて、江沙の中に棄てられて仕舞つたといふことで、夫婦君臣の間でも、恃みにならぬことは、ざツと此通り。されば、賢明達識の士は、鳥が高く大空に飛んで再び下り來らず、網でも捕られない樣にすると同じく、超然高蹈、成るべく、世事に關係しない樣にして居る。人生行路の難き、まことに嘆息杏嗟するに堪へたる程である。

【餘論】この首は、正面から、人生行路の難きを言つたので、起四句は、その極めて險なるを寫し、杯酒朝驩以下の六句は、その由つて來る所以を摸索し、所以賢達人以下は、處世の要訣を述べて、之を結んだのである。

(一)雕牀(二)玉案(三)刺繡茵。　雕牀玉案、繡茵を刺す、
(四)宜城酒多光照春。　宜城、酒多くして、光、春を照らす。
坐留北方之(五)上客。　坐に北方の上客を留め、
歌(六)侑南國之佳人。　歌は南國の佳人を侑む。
(七)盛時(八)徂流若川水。　盛時は徂流して、川水の若く、
榮貴長存竟誰是。　榮貴長く存するは、竟に誰か是れなる。
(九)魏帝高臺碧瓦空。　魏帝の高臺、碧瓦空しく、
(一〇)梁王故苑黃塵起。　梁王の故苑、黃塵起る。
世人傾奪首未廻。　世人傾奪、首未だ廻らさす、
可憐不飲(一一)冢纍纍。　憐むべし、飲ます、冢纍纍。

【字解】【一】雕牀　彫刻を施しなどして飾り立てたる牀。【二】玉案　立派なる食卓。【三】刺繡茵　刺繡を施した坐布團。【四】宜城　漢書地理志に「南郡縣宜城、故の鄢」とあり、張華輕薄篇に蒼梧竹葉、宜城九醞とある。【五】上客　大賓。【六】侑　すすむ。【七】盛時　榮華を極めた最盛の時。【八】徂流　行き去つて流れる。【九】魏帝高臺　魏志に「建安十五年冬、太祖、乃ち鄴に于て銅雀臺を作る」とあり、水經注に「後、樓臺倶に毀つ、土人地を掘つて瓦を得、色頗る青く內平瑩」とある。【一〇】梁王故苑　史記梁孝

王世家に「東苑を築く、方三百餘里」とあり、一統志に「歸德府城東の梁園、一名兎苑、或は曰く、卽ち兎園、梁の孝王築く」とある。【二】冡纍纍　丁令威の歌に何不レ學レ仙冡纍纍とあるを用ふ。

【詩意】人生行路の難きこと、すべて上に述べた通り、この上は、時に及んで行樂する外はない。今、雕牀玉案を列ね、繡せる坐布團を竝べて、筵席の用意を爲し、酒は宜城の名醸を貯へ、その尊中に漲れるを見れば、光、春を照らすばかり。そこで、坐上には北方の上客を留め、又南國の佳人をすすめて、幾曲の歌を唱へさせる。顧みれば、人生の盛時は、行き行きて、流れ去ること、さながら川水の如く、榮華富貴、長く存して居たのは、何人であるか、さういふことは、絕對に無いといつても宜しい。見よや、曹操の築いた銅雀臺は、いつしか毀たれて、青い瓦は、全く見えなくなり、梁の孝王の開いた東苑は、いつしか荒廢して、黃塵滿目、風に隨つて起るといふ有樣。世間の人は、わき目もふらず、互に傾奪を事とし、まだ首を回らさぬ極めて短い時の中に、多くの人は、纍纍たる塚墓と化して仕舞ふので、この間、酒を飲んで樂を極めないのは、まことに、氣の毒なことである。

【餘論】及時行樂、殊に飮酒の興を以て、人生の果敢ないことを逆敍したので、行路の難きも、亦た推測の中に在る。但し、詩としては、未だ見るに足らず、落想措辭、ともに淺近である。

劉生

劉生

(一)結レ客(二)諸陵下。平生好レ(三)排レ難。客に結ぶ諸陵の下、平生、好んで難を排す。

(四)鶻瑩(五)白楊刀。(六)鵲驚(七)黃柘彈。鶻は瑩く白楊の刀、鵲は驚く黃柘の彈。

(八)投レ瓊(九)遠邸夜。(一〇)擊レ筑(一一)高樓旦。瓊を投ず遠邸の夜、筑を擊つ高樓の旦。

念無レ可レ報レ恩。空(一二)椎二車壁一嘆。念ふ恩を報ずべきなく、空しく車壁を椎して嘆ず。

【字解】【一】結客　漢書原涉傳に「郡國の諸豪、及び長安五陵諸の節氣を爲すもの、皆歸して之を慕ふ、涉、遂に身を傾けて、ともに相待つ」とある。【二】諸陵　後漢書光武帝紀の注に「高祖の長陵、惠帝の安陵、文帝の霸陵、景帝の陽陵、武帝の茂陵、昭帝の平陵、宣帝の杜陵、元帝の渭陵、成帝の延陵、哀帝の義陵、平帝の康陵」とあつて、漢の累世の陵を指す。【三】排難　むづかしい事件を始末する。【四】鶻瑩　鶻は鶻膏の略、本草に「鷿鷉は、水鳥なり、大さ鳩の如し、その膏、刀に塗れば鏽せず」とある。【五】白楊刀　白楊にて鞘を作つた刀。【六】鵲驚　鵲は邦訓かささぎ、支那朝鮮では烏と同じく人家の近くに居る。【七】黃柘彈　黃柘の柘は野桑、その材が黃色なる故に云ふ。彈は丸、卽ちはじき玉。西京雜記に「長安五陵の人、柘木を以て彈となし、眞珠を丸となし、以て鳥雀を彈ず」とある。【八】投瓊　瓊は美玉。【九】遠邸　漢書文帝紀の注に「郡國朝宿の舍、京師に在るもの、率れ邸と名づく。邸は至るなり、歸り至るところを言ふなり。今人、因つて、逆旅を謂うて皆邸舍といふ」とある。【一〇】擊筑　筑は風俗通に「狀、瑟の如くして大、頭に絃を安んじ、竹を以て之を擊つ」とあり、廣韻に「筑は箏にして十三絃」とある。【一一】高樓旦　旦は朝、又は曉に同じ。【一二】椎車壁　車の壁を敲く、南史王融傳に「融行いて、朱雀桁開くに遇ひ、路人塡塞す。乃ち車壁を槌して曰く、車中乃ち七尺なかるべけむや、車前豈に八騶乏しかるべけむや」とある。

【題義】劉生は、樂府正聲に「漢の鼓角橫吹曲」とあり、題解に「劉生は、何代の人たるを知らず、

齊梁以來、爲るところの劉生の詞を觀るに、皆、その任俠豪放、三秦の地に周游するを稱す。或は云ふ、劍を抱いて尚征し、符節官となる、と。未だ詳にせざるところなり」とある。念の爲め、梁の元帝の作を擧げると、

任俠有二劉生一。然諾重二西京一。扶風好驚レ坐。長安恒借レ名。榴花聊夜飲。竹葉解二朝酲一。結レ交李都尉。
遨遊佳麗城。

青邱の此作も、矢張、任俠豪放の士を想像として、篇を成したのである。

【詩意】劉生は、五陵の下に於て、游俠の客と交を結び、平生好んで六づかしい事件を引受けて、これを解決する。白楊の鞘に納めたる刀には、鵜膏を塗つて、光り輝き、黃柘の彈き玉を投ぐれば、鵲が驚いて飛ぶ。夜、都では遠い處なる大官の邸を訪問して美玉を贈り、高樓の曉、筑を擊つて、打興じて居る。しかし、恩を受けても、これに報ずる路なきに念ひ到れば、車壁を敲いて浩嘆を禁せず、何につけても、恩讎必ず報いて、その心に快として居る。

【餘論】劉生は、もとより俠客で、この詩も、俠客を詠じたものと見ても善いが、中間兩聯、いささか切當を缺き、從つて、讀者の心目を動盪するに足るものなきを遺憾とする。

怨歌行

二

妾始充二下陳一（一）。嬌容常自持。　妾はじめ下陳に充てられ、嬌容、常に自ら持す。
上宮（二）三千妓（三）。一一妒二蛾眉一。　上宮三千の妓、一一蛾眉を妬む。
絃急有二斷聲一。鏡暗無二妍姿一。　絃、急にして斷聲あり、鏡、暗くして妍姿なし。
遂令三開時花。遽作二落後枝一。　遂に開時の花をして、遽に落後の枝とならしむ。
昨夕歌吹歡。今夕蛩語（四）悲。　昨夕歌吹の歡、今夕蛩語悲し。
從來班婕妤。不レ勝（五）趙昭儀。　從來班婕妤、勝たず趙昭儀。

【字解】【一】下陳　史記李斯傳に「後宮を飾り、下陳に充つる所以」とあつて、その注に「下陳は猶ほ後列のごときなり」とある。【二】上宮　後宮の正殿。【三】三千妓　妓はここでは宮女の義。【四】蛩語　蛩はこほろぎ、古今注に「蟋蟀、一名は吟蛩、秋、初めて生じ、寒を得れば鳴く」とある。【五】不勝趙昭儀　漢書班婕妤傳に「その後、趙飛燕姊弟、微賤より興り、禮を踰え、制を越ゆること、寖く前よりも盛なり。班婕妤、許皇后、皆、寵を失ふ」とあり、趙飛燕は、その初、昭儀であつた。昭儀は、女官の名。

【題義】怨歌行は、樂府正聲に「相和歌辭楚調曲」とあり、題解に「傅休奕、昭昭朝時日、皎皎最明月、十五入二君門一、一別終華髮、偕老に及ばず、猶ほ死して穴を同じうするを望むの意。班婕妤の紈扇詩、亦た怨歌行といふ」とある。その班婕妤の紈扇詩は、前に班婕妤の條に於て引抄して置いた。この詩は、班婕妤の樣な後宮失寵の女に代つて、その怨曠の情を敍したのである。

【詩意】その初、私は後宮の下陳に充てられたが、嬌冶の容貌は、持つて生まれて來たので、少しも變らない。そこで、三千の宮女は、一一私を妬まぬものはなく、さまざまの辛らい憂目にも遇つた。絃を彈ずること急なれば、ぷッきり切れて、聲が中斷するし、鏡暗ければ、うつる姿も、あでやかではない。揚句の果は、折角開いた花をして、散り過ぎし後の枝の如く、見る影も無い樣にして仕舞つた。昨夜は君王に侍して、絃管興を添へ、十分の歡樂を極めたが、今夕は、ひとり冷宮に居て、こほろぎの悲しい聲を聞くのみである。從來、班婕妤は、才德を兼備するに拘はらず、遂に趙飛燕に勝つことが出來ず、はては、長信宮に退處したので、恰も私の今日の境涯と似て居る。

【餘論】絃急有斷聲以下の六句が、篇中の精彩で、且つ此詩の生命である。結末に婕妤飛燕を點し、前の下陳上宮と相映帶して居る處は、さすがに結構の緊密を推すべきものである。

雉子斑

（一）雉子斑、（二）雊朝陽。
低飛蓬蒿隱文章。
（三）十步一啄。
（四）于彼山梁。
（五）爭雄決鬭憤氣張。
好勇守（六）介性之良。
安能受馴（七）畜。
（八）斂翼自摧傷。

雉子斑

雉子は斑なり、朝陽に雊く、
低く蓬蒿に飛んで文章を隱す。
十步に一啄、
彼の山梁に于てす。
雄を爭うて、決鬭、憤氣張る。
勇を好み、介を守るは、性の良。
安んぞ能く馴畜を受け、
翼を斂めて自ら摧傷せむ。

【字解】【一】雉子斑　爾雅の釋鳥に「雉は伊洛よりして南、素質五彩、皆備はつて章を成すを翬といふ。江淮よりして南、素質五彩、皆備はつて章を成すを搖といふ」とある。斑は文章ある貌。ここのは、翬か、搖か、一寸分からぬ。【二】雊　書經の高宗肜日に「越に雊雉あり」といひ、說文に「雊とは雉の鳴くなり」とある。【三】十步一啄　莊子の養生主に「澤雉は十步に一啄、百步に一飲」とある。【四】于彼山梁　論語に山梁雌雉とある、山梁は山間の石橋。【五】爭雄決鬭　爾雅に「雉は絕だ力あり、最も健鬭す」とある。【六】守介　耿介の節を守る、周禮大宗伯執雉の注に「その介を守つて、死するを取る」とある。【七】馴畜　馴らして飼養せらる。後漢書酷吏傳に「殺雉、桑下に馴る」とある。【八】斂翼　飛ばぬ貌、潘岳の賦に雞登棲而斂翼とある。

【題義】雉子斑は、樂府正聲に「漢短簫鐃歌曲」とあり、題解に「古詞中に云ふあり、雉子高飛止、黃鵠高飛已、千里雄來、飛從雌視、と。梁の簡文帝の妬場時向隴の若きは、但だ雉を詠ずるのみ」とある。この詩も、單に雉子を詠じただけで、格別の意味もない。

【詩意】雉子の斑なるが、朝日に向つて啼き、そして、低く蓬蒿の間に飛び入つて、その爛然たる文彩を匿して仕舞つた。かくて、山間の石橋の邊に行き、人の來ぬのを見澄まして、十步に一たび啄み、悠悠として、ひとりで恣にして居る。しかし、雉が雄を爭つて決鬭する場合には、憤氣、胸中に滿

ち、容易に敵に屈しない、それも其筈で、勇を好み、且つ耿介の節を守るのは、この鳥の性の最も良きところである。かういふ風に、雉は勇を好み、介を守つて居るから、能く人に馴らして飼養せられ、そして、翼を斂めて飛ばうともせず、その儘、自ら豪氣を摧き傷くる樣なことは決して爲さぬ。

【餘論】　雉子斑より于二彼山梁一に至るまでは、普通見るところの雉の生活狀態であるが、爭雄以下の四句は、雉の勇鋭死を輕んずることを寫し、彼に代つて大に氣焔を吐いたので、或は、自ら以て擬したものかも知れぬ。

蒿里歌

(一)素驂(二)駕(三)廣柳。蕭蕭出(四)城闉。
(五)玄廬(六)儼象設。猶恐死有神。
(七)古原閉愁寃。荒草不得春。
一作泉下客。長違(八)室中親。
昔興每待旦。(九)今臥焉知晨。
(一〇)斂衣已成灰。(一一)含貝仍作塵。

蒿里歌

素驂、廣柳に駕し、蕭蕭として城闉を出づ。
玄廬には、儼象設け、猶ほ恐る、死して神あることを。
古原、愁寃を閉ぢ、荒草、春なるを得ず。
一たび泉下の客となり、長く室中の親に違ふ。
むかし、興くる、每に旦を待ち、今臥する、「焉んぞ晨を知らむ。」
斂衣、すでに灰と成り、含貝、仍つて塵となる。

(一二)家門諒不遠。(一三)欲歸竟何因。
平生所愛物。娛玩由他人。
哀哉此里中。同逝壯老均。
聖賢亦豈免。鬪道庶可珍。

家門、まことに遠からず、歸らむと欲するも、「竟に何にか因らむ。」
平生愛するところの物、娛玩、他人に由る。
哀しいかな、この里中、同逝、壯老均し。
聖賢、亦た豈に免れむや、道を鬪く、庶はくは珍とすべし。

【字解】【一】素驂　三頭立の馬で、その毛色が白い。【二】駕　車を引く樣に馬を付ける。【三】廣柳　陸雲の詩に龍轜被二廣柳一とあり、漢書季布傳の注に「廣柳は棺を與するの車、喪車なり」とある。【四】城闉　城壁の内。【五】玄廬　曹植の誄に痛二玄廬之虛郭一とあり、玉篇に「玄廬は、喪車の屋舍なり」とある。今で云へば祭場、そこへ喪車の儘靈柩を引き入れると見える。【六】儼象　儼然たる儀式。【七】古原　墓地を指す。【八】室中親　家に居る眷屬。親は近親で、もとより父母に限つた譯ではない。【九】今臥　今次死去せしことをいふ。【一〇】斂衣　經帷子、禮の喪大記に「尸に衣するを斂といふ」とあり、又「斂するに時服を以てす」とある。【一一】含貝　死者の口中に含ませて入れ置く貝。禮の雜記に「天子は九貝を飯し、諸侯は七、大夫は五、士は三」とあつて、その注に「飯は含むなり、貝は水物、古しへ以て貨と爲す」とある。【一二】家門　家の格式ではなく、おのが生家の門。【一三】欲歸竟何因　歸らうと思つても、死んだ後は、どうすることも出來ぬ。陸機の挽歌詩に人往有二反歲一、我行無二歸年一とある。

【題義】　蒿里歌は、元と單に蒿里といひ、樂府正聲に「相和歌曲、又行に作り、又薤露歌と名づけ、又泰山吟と名づく」とあり、題解に「喪歌なり、舊曲、本と田横の門人に出で、歌うて以て横を送る。一章、人命は奄忽として、薤上の露晞き易きが如きを言ひ、二章、精魄、蒿に歸するを言ふ。漢の武帝の時に至り、李延年、分つて二曲となし、薤露は王公貴人を送り、蒿里は士大夫庶人を送り、柩を

挽くものをして、これを歌はしむ。世、呼んで挽歌となす」とある。魏の武帝の作の如きは、この題を借りて、漢末の事實を詠出したが、青邱の此作は、唯だ死後の淒涼を敍し、矢張、挽歌の本旨に協ふ樣にしてある。

【詩意】廣柳車に棺を載せ、それを三頭立の白馬に引かせ、蕭蕭として、城内から繰り出す。やがて、玄廬と稱する祭場に至れば、喪車を据ゑて、嚴かなる樣樣の祭器を列べ、愈よ告別の祭をする。つまり、人が死んでも神靈なほ存するが故に、決して忽にしてはならぬといふ趣旨である。それから、墓地に埋葬する。その墓地は、むかしながらの荒野であつて、愁寃の氣が閉ぢ籠つて居る爲に、春になつても、草が青く延びない。人にして、一たび死んで、黃泉の客となれば、永久に室中なる眷屬姻親と懸け離れて、再び逢ふことが出來ない。むかし、無事で生存して居たときは、寢床から起きるに、毎毎夜明けを待つて居たが、今度長き眠に落ちて仕舞へば、どうして、晨になつたことを知らうか、最早決して夢路から覺めることはない。埋葬して後、久しきを經れば、棺中の物は、いつとなしに風化されて仕舞ひ、經帷子は灰となり、口中に含ませた貝も、やがて、塵となつて仕舞ふ。おのが家の門は、まことに遠くはないが、歸らうと思つても、到底歸ることも出來ない。生前、常常大事にして居た物品なども、すべて他人の手に渡つて愛玩される。悲しいかな、この里中のものは、いづれも死んで仕舞ふので、壯者老年の區別などはない。聖賢とても、矢張、死を免れぬが、唯だ生前に道を聞いて、或は言を立て、或は行を爲し、その爲に不朽であるのは、どうやら、珍とすることが出來るので、もし道を聞かなければ、聖凡賢愚、毫も擇ぶところがない。

【餘論】死後淒涼の有樣を事こまかに敍し、一誦、人をして黯然魂銷せしめる。古原の四句、家門の四句は、人人意中の語であるだけに、殊に感慨に堪へざらしめる。結末二句は、一歩を拓開して、極めて面白いが、措辭上、なほ聊か物足らぬ樣な氣がする。

薊門行

行行光祿塞。望望單于臺。
天寒水草盡。萬里孤軍來。
中國多荒土。窮邊何用開。

薊門行
行行、光祿の塞、望望、單于の臺。
天寒くして水草盡き、萬里孤軍來る。
中國に荒土多し、窮邊、何ぞ開くを用ひむ。

【字解】【一】行行　行き行きて止まらざること。【二】光祿塞　漢書武帝本紀に「太初三年夏、光祿勳徐自爲を遣して、五原塞外の列城を築かしめ、西北、盧朐に至る、因つて名づく」とある。【三】望望　望み望む、佇立して凝望すること。【四】單于臺　漢書武帝本紀に「帝、行いて、雲陽より長城を出で、北、單于臺に登り、單于に告げて曰く、單于能く戰はば、天子自ら將に邊に待たむとす、能はずんば、亟に來つて臣服せよ」とある。【五】荒土　未開の土地。【六】窮邊　邊境の果。

【題義】薊門行は、樂府遺聲に「都邑曲」とあり、樂府遺聲に「雜曲歌辭」とあり、題解に「上に出

自の二字あり、從軍行と同じくして、兼ねて、燕薊の風物及び突騎悍勇の狀を言ふ」とある。次に一統志に「薊邱は、順天府舊燕城の西北隅に在り、即ち古しへの薊門なり」とあつて、今の北平附近。そこは、古しへ胡地に通ずる要路の一であつたので、從つて、薊門行、一に出自薊門行は、塞外の光景を敍するを旨としたのである。

【詩意】一たび薊門を出でたる後、行き行きて、彼の徐自爲の築いた光祿塞を過ぎ、やがて單于臺に登り、胡天に向つて凝望した。時しも、冬天は寒くして、水は凍り、草は枯れ、胡人は、遷徙したものと見えて、ここらには、その影だに見えず、そこへ漢家の兵は、萬里を經て遣つて來たものの、孤軍遠く懸つて、續くものもなく、これでは、戰爭も六づかしい。おもへば、中國の廣き、未開の土地はいくらもある位だから、何の必要があつて、かくの如き邊境の果を占領して、版圖を擴げやうとするのか、これは、全く武を黷し、兵を弄するものといふべく、是非とも、人君の一考を煩はしたいものである。

【餘論】全幅の精神は、結二句、中國多二荒土一、窮邊何用ㇾ開の十字に盡きて居る。そして、この二句は、杜甫の前出塞なる君已富二土境一、開ㇾ邊一何多から換骨奪胎したものであらう。

巫山高

巫山高

(一)巴江西上巫(二)峽深。
(三)奇峰十二(四)江之陰。
(五)陽雲高臺不ㇾ可ㇾ尋。
但見丹楓碧樹(六)攢二幽林一。
昔聞(七)瑤姫在二(八)其下一。
(九)月爲二環玦一風爲ㇾ襟。
空山久獨居。
偶感二襄王心一。
(一〇)楚宮鬪二秋夢一。
彷彿來同ㇾ衾。
神仙會遇當ㇾ有ㇾ道。
豈效二世俗一成二荒淫一。

巴江、西に上れば巫峽深し、
奇峰十二、江の陰。
陽雲高臺、尋ぬべからず、
但だ見る、丹楓碧樹、幽林に攢まるを。
むかし聞く、瑤姫の其下に在るを、
月を環玦と爲し、風を襟と爲す。
空山久しく獨居、
偶ま襄王の心を感ぜしむ。
楚宮、秋夢を鬪ち、
彷彿として、來つて衾を同じうす。
神仙の會遇、當に道あるべし、
豈に世俗に效うて、荒淫を成さむや。

【字解】【一】巴江　一統志に「巴江は、荊州巴縣に在り、源を蜀の岷山に發す」とある。すると揚子江の支流であるが、この巴江は、必ずしも特殊の地名とせず、古しへの巴地を流るる揚子江の上流と見る方が善い。【二】巫峽　一統志に「巫山は、夔州巫山縣大江の濱に在り、形、巫の字の如く、首尾一百六十里、十二峰あり。巫峽は、瞿塘峽・歸峽と世に三峽と稱す、連亙七百里、重巒疊嶂、天日を隱蔽し、亭午夜分に非ざれば、日月を見ず」とある。【三】奇峰十二　上に見ゆ。【四】江之陰　日光を受けない方を言ふから、川では南が陰になる、巫山は、北岸に在るのだが、押韻の都合上、止むを得ず、かくしたのであらう。【五】陽雲高臺　陽臺、一に朝雲臺といふ。そ

千秋遺賦應多恨。暮雨蕭蕭猿自吟。

千秋の遺賦、應に恨多かるべし、暮雨蕭蕭として、猿、自ら吟ず。

れを併せて此の如く言つたのであらう。【六】攢幽林　攢は聚まる、聚まつて幽林となるといふ義。【七】瑤姬　襄陽耆舊傳に「赤帝の女を瑤姬といふ、未だ行かずして卒す、巫山の陽に葬る、故に巫山の女といふ。楚の懷王、高唐に游び、夢に神に遇ふといふのは卽ち此」とある。【八】其下　奇峰十二の麓。【九】月爲環玦　環玦は環佩と同じく、腰につける飾りの玉、それが月に輝くといふ處から、此の如く云つたので、下の風爲襟も、襟が風に吹かれるといふ意、ともに神仙縹緲の貌を形容したのである。【一〇】楚宮閟秋夢　楚宮は高唐觀、楚王の離宮。閟は鎖す。宋玉の神女賦の序に「むかし、先王、かつて高唐に游び、怠つて晝寢ぬ。夢に一婦人を見る、曰く、妾は巫山の女なり、高唐の客となる、君が高唐に游ぶを聞く、願はくは、枕席を薦めむ、と。王、因つて之を幸す」とある。これに據ると、神女と契つたのは襄王でなくて、先王、卽ち懷王、これを辯じた人も段段ある。しかし、これを襄王とするのは、むかしからの因襲であつて、青邱も、矢張、その通りにして置いたものと見える。【一一】千秋遺賦　宋玉の神女賦を指す。【一二】猿自吟　巫峽の啼猿は、むかしから著名で、數ば詩にも見えて居る。

【題義】巫山高は、樂府正聲に「漢短簫鐃歌曲」とあり、題解に「大約、江淮水深く、梁の以て渡るなし、水に臨んで遠望し、歸るを思ふを言ふのみ。齊の王融の想像巫山高、范雲の巫山高不極の如きは、雜ふるに、陽臺神女の說を以てし、復た遠道思歸の意なし」とある。念の爲め、その全篇を擧げると、漢の鐃歌中の古辭は、

巫山高。高以大。淮水深。難二以逝一。我欲二東歸一。害梁不レ爲。我集無レ高。曳レ水何梁。湯湯回回。臨レ水遠望。泣下霑レ衣。遠道之人。心思レ歸。謂二之何一。

何だか誤脫があるらしく、押韻の工合も變であるし、十分に句讀を施すことも出來ない。次に、王融は、

想像巫山高。薄暮陽臺曲。煙雲乍舒卷。猿鳥時斷續。彼美如レ可レ期。寤言紛在レ矚。憮然坐相望。秋風下二庭綠一。

范雲は、

巫山高不レ極。白日隱二光暉一。靄靄朝雲去。溟溟暮雨歸。巖懸獸無レ跡。林暗鳥疑レ飛。枕席竟誰薦。相望空依依。

青邱の此作は、專ら神女の事を敍し、そして、古しへの俗說は、荒誕不稽、信ずべからざることを言うて、神女の爲に、寃を雪いだのである。

【詩意】揚子江の上流を西へ上ると、やがて、巫峽に達するが、その處は、峽谷幽深にして、名だたる十二峰が江陰に聳え、古しへの陽臺は、何處とも分からず、今は、唯だ紅楓綠樹、相聚まつて、幽林を爲せるを見るのみである。聞けば、赤帝の女の瑤姬が、十二峰に住んで居て、環佩は月に輝き、雨襟に風を生じ、神仙縹緲の姿、もとより、この世の人では無い。瑤姬は、久しく、空山の中に獨居して居たが、偶然、襄王の心を動かし、高唐觀裏、一夕の夢に入り、はては、彷彿として、衾を同じうし、枕席を薦めたといふことである。しかし、神仙が會合するには、必然の方法あるべく、決して、

世俗の所爲に效うて、穢はしい荒淫の振舞を爲す筈はなく、これは、飛んでもない濡衣であらう。この事は、一たび宋玉の賦に入り、詞彩の美を以て、千秋に傳はつて居るが、神女にして知るあらば、もとより遺恨の至、しかも自ら之を辯するに由なく、今でも、暮雨蕭蕭の中、猿が悲しい聲をして啼くのは、さながら神女に代つて、その怨を訴へるかの如く聞こえる。

【餘論】前人の窠臼以外に、新しい構想を試みたのは、頗る多とすべく、千秋遺賦の二句は、含蓄あつて、餘情長しへに盡きず、まさしく、その妙を極めて居る。

上留田

上留田

有弟兄不見憐。　弟あるも、兄に憐まれず、
上留田。　上留田。
行泣念彼先人。(一)　行く〳〵泣いて彼の先人を念ふ、
上留田。　上留田。
弟寒衣不蔽身。　弟寒くして、衣、身を蔽はず、
上留田。　上留田。

【字解】(一) 先人　死せし父母をいふ。

兄富出乘華軒。(二)　兄は富んで、出づるには華軒に乘ず、
上留田。　上留田。
死而棺椁不全。(三)　死して棺椁全からず、
上留田。　上留田。
他人爲葬古原。　他人、爲に古原に葬る、
上留田。　上留田。
我行見此古墳。　我、行いて、この古墳を見る、
上留田。　上留田。
白楊一何翩翩。(四)　白楊、一に何ぞ翩翩たる、
上留田。　上留田。
人生孰無弟昆。(五)　人生、孰れか弟昆なからむ、
上留田。　上留田。
爾獨大義不敦。　爾、獨り大義敦からず、

(二) 華軒　立派な車。
(三) 棺椁　椁は棺を蔽ふもの。
(四) 白楊　多く墓畔に樹うる木。
(五) 弟昆　弟兄に同じ。

上留田。　上留田。

鄰人之歌悲不㆑可㆑聞。　鄰人の歌、悲しくして聞くべからず、

上留田。　上留田。

【題義】 上留田は、樂府正聲に「相和歌辭瑟調曲」とあり、題解に「下に行の字あり。舊說、上留田は地名、この地の人、その孤弟を字はざるものあり、鄰人、弟の爲に怨歌を作り、以て其兄を諷す、因つて、地名を以て曲と爲す、蓋し漢代の人」とあつて、その古辭に、止だ五言四句、

里中有㆓啼兒㆒。似㆑類㆓親父子㆒。回㆑車問㆓啼兒㆒。慷慨不㆑能㆑止。

といふのである。これに次ぐのは、魏の文帝の作で、徐獻忠の樂原に「每句、上留田の三字を著くるは、魏の文帝より始まる、董逃行の每句董逃の字を著くるに類す」とあつて、その全篇は、

居㆑世一何不㆑同。上留田。富人食㆓稻與㆑粱。上留田。貧子食㆓糟與㆑糠。上留田。貧賤亦何傷。上留田。祿命懸在㆓蒼天㆒。上留田。今爾歎息將㆑欲㆓誰怨㆒。上留田。

といふのである。後に李白の作の如きは、每句に上留田の三字を著けず、用筆頗る自由、構想も亦た雋妙であるが、青邱の此作は、矢張、魏文の舊制に擬したのである。つまり、上留田の三字は、歌ふ時に、相の手の拍子の樣なものに成るのであるから、詩意を解釋する際には、これを省いて、每句を續けて見る方が宜しい。

【詩意】 ここに弟あるも、少しも之を劬はらぬ無慈悲な兄がある。そこで、弟は行く〳〵泣きながら、死んだ兩親の事ばかり思つて居る。弟は、冬凍える程であつても、身を蔽ふ衣だになく、兄は富貴にして、外出する時には、必ず立派な車に乘つて居る。やがて、弟が死んでも、棺槨ともに全からず、その跡始末も、甚だ手薄、まことに傷ましい程であつたから、他人が却つて同情して、どうやら、荒野原なる墓地に埋葬したといふ話。今、われ行いて、その孤墳を見ると、前には、しるしの白楊が唯だ一本あつて、夕風さむく、枯れ葉が、はらはらと落ちて來る。顧みれば、人生、誰か兄弟なからむ、然るに、汝、ひとり、大義敦からず、弟に辛らく當つて、死後まで此の如くならしめたのは、如何なる故か。それにつけて、鄰人が歌を作つたといつて、頃ろ流傳して居るが、その歌の意調、ともに悲しく、まことに聞くに忍びない位。あはれ、兄たるものよ、この歌を聞いて、少しは、自ら反省するが善からう。

【餘論】 事實の性質上、すでに善く人を動かすに足るが、この作は、聊か局促した氣味で、筆が伸びて居ない樣である。これに校べると、李白同題の作の後半、一鳥死、百鳥鳴、一獸走、百獸驚、桓山之禽別離苦、欲㆑去廻翔不㆑能㆑征、田氏倉卒骨肉分、青天白日摧㆓紫荊㆒、交柯之木本同形、東枝顦顇西枝

榮、無心之物尙如此、參商胡乃尋天兵、孤竹延陵、讓國揚名、高風緬邈、穎波激清、尺布之謠、塞耳不能聽の如きは、典故の運用も、的確切實であるし、資材すでに繁富、そして、一氣流注、まことに堂堂たる大手筆である。

董逃行

(一)史侯稱臣董侯立。
(二)山東義師(三)烽火急。
(四)羌兒夾輦奉(五)西遷。
百姓驅隨棄村邑。
(六)畢圭苑中高作營。
千里不復聞鷄鳴。
(七)舊宮焚燒(八)無片瓦。
(九)黄金盡出諸陵下。

董逃行

史侯は臣と稱して、董侯は立つ、
山東の義師、烽火急なり。
羌兒、輦を夾んで、奉じて西に遷り、
百姓驅隨して、村邑を棄つ。
畢圭苑中、高く營を作し、
千里、復た鷄鳴を聞かず。
舊宮、焚燒して、片瓦なく、
黄金盡く諸陵の下より出づ。

【字解】【一】史侯稱臣董侯立　通鑑紀事に「はじめ、靈帝、數ば皇子を失ふ、何皇后、子辯を生む、道人史子眇の家に養はれ、號して史侯といふ。王美人、子協を生む、董太后、自ら之を養ひ、號して董侯といふ。帝崩じ、辯卽位す、年十四。弟協を渤海王に封ず、年九歲。七月、徙して陳留王と爲す。九月、董卓、帝を廢して弘農王となし、陳留王協、卽位す、卽ち孝獻帝なり」とある。【二】山東義師　後漢書獻帝紀に「初平元年春正月、卓、弘農王を弑す、山東の州郡、兵を起して董卓を討ち、袁紹を推して盟主と爲す。紹、河内に屯し、曹操、酸棗に屯し、袁術、魯陽に屯し、衆各數萬、豪傑心を歸す」とある。【三】烽火　のろし、急警あれば、之を打ち上げる。史記周本紀に「幽王、烽燧大鼓を爲り、寇至るあれば烽火を擧ぐ、諸侯悉く至る」とある。【四】羌兒　羌は西方蠻種の名、後漢書董卓傳に「卓、字は仲穎、隴西臨洮の人なり、膂力人に過ぎ、雙帶兩鞬、左右に馳射し、羌胡の畏るるところとなる」とある。ここでは、董卓部下の羌兵。【五】西遷　後漢は、東、洛陽に都して居たから、東漢と云ふのだが、董卓は獻帝に勸めて、無理に都を長安に遷した。通鑑に「董卓、大に兵を發し、以て山東を討たむことを議し、又山東の兵盛なるを以て、都を遷し、以て之を避けむと欲す。揚彪、黄琬、諫む、卓答へず」とある。【六】畢圭苑中高作營　後漢書獻帝紀に「初平元年二月、都を長安に遷す。董卓、畱つて、京師の百姓を遷し、悉く西して關に入り、自ら留まつて畢圭苑に屯す」とある。その畢圭苑は、後漢書靈帝紀に「光和三年、畢圭靈昆苑を作る」とあつて、その注に「洛陽縣宣平門外に在り」と見ゆ。【七】舊宮焚燒　獻帝紀に「初平元年三月己酉、董卓、洛陽の宮殿及び人家を燒く」とある。【八】無片瓦　唐書五行志に「咸通七年、童謠に曰く、頭無片瓦、地有殘灰」とあるを用ひたのであらう、一片の瓦だに滿足に殘つて居らぬといふ意。【九】黄金盡出諸陵下　獻帝紀に「初平二年、孫堅、董卓の將胡軫と陽人に戰ひ、軫の軍、大に敗る。董卓、遂に洛陽の諸帝陵を發掘す」とあり、通鑑紀事に、又「呂布をして、諸陵及び公卿以下の冢墳を發いて、その珍寳を收めしむ」とある。【一〇】日欲晡　淮南子に「日、悲谷に至る、これを晡時といふ」とあり、玉篇に「申時なり」とあるから、今の午後四時頃で、日の漸く暮れむとするをいふ。【一一】歌殘　殘は盡きる、止む。【一二】布乎　後漢書董卓傳に「人あり、呂の字を布上に書し、負うて市に行き歌うて曰く、布乎と。卓に告ぐるものあり、卓、悟らず」とある。これは、司徒王允が呂布を仲間に引き入れて、董卓を除かむとし、そして、董卓を郿塢から長安に呼び寄せた時の事である。

長安城頭日(一〇)欲晡。
董逃歌(一一)殘歌(一二)布乎。

長安城頭、日晡せむと欲す、
董逃歌殘して、布乎を歌ふ。

【題義】董逃行は、樂府詩集に「相和歌辭淸調曲」とあり、題解に「崔豹の古今注に曰く、董逃歌は、

後漢游童の作るところなり、終に董卓の亂を作すあり、卒に以て逃亡、後人、これに習うて歌章を爲り、樂府、これを奏し以て炯戒となす」とあり、その次に「後漢書五行志に曰く、靈帝の永平中、京師歌うて曰く、

承㆓樂世㆒。董逃。遊㆓四郭㆒。董逃。蒙㆓天恩㆒。董逃。帶㆓金紫㆒。董逃。行謝㆑恩。董逃。轉正㆓車騎㆒。董逃。華欲㆑發。董逃。與㆑中辭。董逃。出㆓西門㆒。董逃。瞻㆓宮殿㆒。董逃。望㆓京城㆒。董逃。日夜絶。董逃。心摧傷。董逃。

案ずるに、董は董卓を謂ふなり。言ふは、跋扈せむと欲し、殘暴を縱にするも、終に逃竄に歸して族滅に至るなり。風俗通に曰く、卓、董逃の歌を以て、主として巳發となし、太だ之を禁絶すと。楊孚の董卓傳に曰く、卓、董逃を改めて董安となす、と。樂府題解に曰く、古詞に云ふ、吾欲㆓上謁從㆓高山㆒、山頭危險大難㆑言と。言ふは、五岳の上、皆黄金を以て宮闕となし、しかも、靈獸仙草多く、以て長生不死の術を求むべく、天神をして、君上を擁護し、以て壽考ならしむるなり、と。陸機の和風習習薄林、謝靈運の春虹散彩銀河の若きは、但だ節物芳華、時に及んで行樂すべく、徂齡をして坐ながら徙らしむるなきを言ふのみ。晉の傅玄に、歷九秋篇十二章あり、具さに、夫婦別離の思を敍し、亦た題して董逃行と云ふ、未だ詳ならず」とある。すると、董逃行は、一番古いものの外、古辭、竝に陸機以下の作は、皆題に特有なる意義を離れて、全く似ても似付かぬものとなつて仕舞つたのである

が、その理由は、明白でない。靑邱の此作は、原始的意義を沿襲し、純ら董卓跋扈の事實を詠出したのである。但し、最古の童謠は、前の上留田と同じく、毎句の終に董逃の二字を著け、仍つて篇名とした位であるが、靑邱は、これを學ばず、極めて、自由に遣つて除けたのである。

【詩意】史侯と號せられた皇子辨は、一旦帝位に卽きしものから、やがて廢せられ、弘農王となつて人臣の列に就き、その弟にして董侯と號せられし陳留王協が、新に天子となつた。それは、全く董卓の廢立に係るので、山東の豪傑は、大義を唱へて兵を起し、必ず董卓を誅せむとし、その爲に、天下は俄に騷がしくなり、到る處、烽火を以て急を報ずるといふ始末。兎角する内に、董卓の部將は、拒ぎ切れずして敗北した處から、董卓は、その部曲の羌兵をして、鳳輦を夾んで擁護せしめ、天子を奉じて、洛陽から、西、長安に都を遷すことになり、百姓も驅られて之に隨ひ、その村邑を棄てて、止むを得ず、一處に其居を移すことに成つた。そして、董卓だけは、居殘つて、洛陽の畢圭苑に高く陣營を構へ、しばらく駐屯して居たが、王畿千里の間、全く荒殘に歸して、雞の聲だに聞かず、洛陽の宮闕は、悉く焚き拂はれて、一片の瓦だに殘つて居らず、歷代の帝陵は、すべて發掘されて、棺中に收めた黄金まで掠められて仕舞つた位、慘澹たる光景は、まことに、目も當てられない。しかし、天運循環、さしもの董卓も、やがて誅戮される時が來たので、長安城頭の夕まぐれ、董逃の歌は聞こえずして、新に布乎を歌ふものがあつたが、董卓は、全く之を悟らざりしに因り、遂に呂布に刺し

殺されて仕舞ひ、罰は覿面の程おそろしく、翻つて又、氣味の善いことであつた。

【餘論】僅僅十句の中に、巧に盜賊の始終を述べ、結末二句は、極めて新警で、前人の未だ道及せざるところである。

碧玉歌

碧玉歌

碧(一)玉小(二)家女。初無珠(三)翠妝。

碧玉は小家の女、初め珠翠の妝なし。

感郎相顧重。朽質自生光。

郎が相顧重するに感じ、朽質自ら光を生ず。

【字解】〔一〕碧玉　女の名、題義の條に見ゆ。〔二〕小家　門地高からざる家柄。〔三〕珠翠　珠は玉、翠は翡翠の羽、ともに頭髮衣裳の妝飾とする。

【題義】碧玉歌は、樂府正聲に「淸商吳聲歌曲」とあり、詳しくいへば、淸商曲辭の中で、吳聲曲辭に屬するものである。樂苑に「碧玉歌は、宋の汝南王の作るところなり。碧玉は、汝南王の妾の名、これを寵愛すること甚しく、これを歌ふ所以」とあつて、もとは、汝南王が、のろ氣半分に、自分の愛妾の事を歌つたので、原作は三首、卽ち左の通りである。

碧玉破瓜時。郎爲情顚倒。芙蓉陵霜榮。秋容故尙好。

碧玉小家女。不敢攀貴德。感郎千金意。暫無傾城色。

碧玉小家女。不敢貴德攀。感郎意氣重。遂得結金蘭。

樂府詩集は、この次に、同前二首として、左の作が附記してある。

碧玉破瓜時。相爲情顚倒。感郎不羞郎。回身就郎抱。

杏梁日始照。蕙席歡未極。碧玉奉金盃。淥酒助花色。

前三者は、汝南王の作に相違ないが、後の二首は、同人異時の作か、それとも後人の擬作か、今さら、分からない。靑邱の此作は、矢張、原作に擬して、作つたものと見える。

【詩意】碧玉は、賤しい家の生まれで、その初めは、珠翠の妝だに無かつたが、一たび汝南王の御氣に入つたといふので、ひたすら眷顧愛重せらるる厚意に感じ、だんだん靚妝を凝らす樣にもなり、衰朽の質も、自然、光彩を生ずる樣に成つて來た。

【餘論】後半は、卽ち己を悅ぶものの爲に容るといふので、つまり、女の心意氣である。

堂上歌行

堂上歌行

堂上歌。歌(一)南山。

堂上に歌ひ、南山を歌ふ。

主人爲歡仰客顏。

主人歡を爲して、客の顏を仰ぐ。

【字解】〔一〕歌南山　南山は詩經に載する天保九如の詩で、その中に「如南山之壽」の句あるよりいふ。

翠帷夜卷出兩鬟。　翠帷、夜卷いて、兩鬟を出し。
移尊更飲花樹間。　尊を移して更に飲む花樹の間。
花樹間有明月。　花樹の間、明月あり。
客不醉歌不歇。　客醉はざれば、歌うて歇ます。

【二】翠帷　翠色の紗帷。【三】兩鬟　兩個の鬟髮、卽ち年の若い侍婢。

【題義】堂上歌行は、樂苑に「雜曲歌辭」とあるだけで、その由來等は分からない。今存するものの中で、一番古いのは、鮑照の一首である。

四座且莫諠。聽我堂上歌。昔仕京洛時。高門臨長河。出入重宮裏。結交曹與何。車馬相馳逐。賓朋好容華。陽春孟春月。朝光散流霞。輕步逐芳風。言笑弄丹葩。暉暉朱顏酡。紛紛織女梭。滿堂皆美人。目成對湘娥。雖謝侍君閒。明妝帶綺羅。筝笛更彈吹。高唱好相和。萬曲不關心。一曲動情多。欲知情厚薄。更聽此聲過。

これで見ると、春日花闌なる頃、客を會して歡を爲し、壽を獻する意を旨としたので、靑邱の作も、矢張、これに依倣したのである。

【詩意】主人は、高會をなして、歡樂を極めむが爲に、客の顏色を仰ぎつつ、堂上に於て歌ひ出したので、その歌は、矢張、お目出たい彼の南山の詩であつた。夜になると、翠色の紗帷を卷き上げて兩個の美人は、奥より出て來り、更に席を花閒に設けて、酒樽を移し、そして、愉快に飲み直さうといふ積り。花樹の間には、今しも明月高くさし上り、春の夜の景色は、何とも云へぬ位、客にして醉はぬ限りは、主人は歌うて歇ます、十分心を盡して、席上に周旋して居る。

【餘論】花樹間以下四句は、短句を疊んで、一種節奏の妙を極めて居る。

隴頭水

人間何處無流水。　人間、何の處か流水なからむ、
偏到隴頭愁入耳。　偏に隴頭に到つて耳に入るを愁ふ。
夜雜羌歌明月中。　夜は羌歌に雜はる明月の中、
秋驚漢夢空山裏。　秋は漢夢を驚かす空山の裏。
隴阪崎嶇九廻折。　隴阪崎嶇、九たび廻折、
聲隨到處長嗚咽。　聲は到る處に隨つて長しへに嗚咽。
欲照愁顏畏水渾。　愁顏を照らさむと欲するも、「水の渾る」を畏る、
前軍曾洗金創血。　前軍かつて洗ふ金創の血。

【字解】【一】隴頭　隴山の頭、題義の條に注す。【二】雜　まじる。【三】羌歌　羌人の歌。【四】漢夢　漢兵の夢。【五】隴阪　題義の條に注す。【六】水渾　渾は濁る。【七】金創血　刀で切られた創口から出る血、白居易の詩に、身被金創面多痱、扶病徒行日一驛とある。【八】流不乾　于濆の隴頭吟に深疑嗚咽聲、中有征人淚とある。

回レ頭千里是長安。　頭を回らせば、千里是れ長安。
征人涙枯流不レ乾。　征人涙枯るるも、流は乾れず。

【題義】隴頭水は、樂府正聲に「漢の鼓角橫吹曲」とあり、題解に「一に吟に作る、別離を傷むなり」とあるが、隴頭の流水に寄せて、征戍の苦を述べるのが本義らしく思はれる。又、略して隴頭と題したのもある。樂府詩集に「通典に曰く、天水郡に大阪あり、名づけて隴坻といひ、亦た隴山といふ、卽ち漢の隴關なり。三秦記は曰く、その阪九回、上るもの七日にして乃ち越ゆ、上に淸水ありて、四に注下す、謂はゆる隴頭水なり」とあり、一統志に「關は鳳翔府隴州に在り、その阪九廻、上らむと欲するもの、七日にして乃ち至る、俗歌に曰く、

隴頭流水。鳴聲幽咽。遙望二秦川一。肝腸斷絕。

とある。この題は、古來作者頗る多く、隴頭水と題するものの中、一番古いのは、梁の元帝で、

銜レ悲別二隴頭一。關路漫悠悠。故鄕迷二遠近一。征人分二去留一。沙飛曉成レ幕。海氣旦如レ樓。欲レ識二秦川處一。隴水向レ東流。

といふもので、諸作、大抵五言であるが、七言には、王建の一首がある。

隴水何年隴頭別。不レ在二山中一亦嗚咽。征人塞レ耳馬不レ行。未レ到二隴頭一聞二水聲一。謂是西流入二蒲海一。還聞北海繞二龍城一。隴東隴西多屈曲。野麋飮レ水長簇簇。胡兵夜回水傍注。憶著來時磨レ劍處。向前無レ井復無レ泉。放馬回看隴頭樹。

青邱の此作は、雷同を避くる爲に、亦た七言を以て之を出し、且つ水を主として、題義に違はぬ樣に務めたものらしい。

【詩意】この世界、何處へ往つても、流水の無い處はないが、隴頭に至れば、その流水の聲、いかにも物悲しく、聞きたくないと思ふばかりである。隴頭流水の聲は、夜になると、羌人の歌聲の中に交つて、明月の中に響き、秋になると、漢兵の夢を驚かして、空山の裏に鳴りどよめいて居る。隴阪は崎嶇として險しく、九たび廻折する位、その間、流水の聲は、到る處、長しへに咽び入る樣に聞こえる。旅する征人輩は、その水に臨んで、愁顏を照らさうとしたが、前軍の兵士が、先刻劍口の血を洗つた爲に、ひどく濁つて仕舞つて、水鏡の役にも立たない。ここに、頭を回して眺めやれば、長安は、遠く千里を隔て、わが行、愈よ遠く、まことに、征戍の苦に堪へず、しかも、征人の涙は枯れ盡すとも、隴頭の水の流は、決して乾く時なく、いつでも、咽ぶやうな聲を爲して居る。

【餘論】夜雜羌歌の二句は、對偶を以て之を行り、漢夢の二字は、作者の獨刱に係るものらしく、まことに目新らしい。欲照愁顏以下の四句は、意訓、ともに悽絕、自然悲哽の氣分に滿ちて居る。

少年行二首

官侍長楊拜夕郎。　官は長楊に侍して、夕郎に拜せられ、
況憑內寵在椒房。　況んや、內寵の椒房に在るに憑る。
賜金十萬身無用。　賜金十萬、身に用なし、
乞作胡姬一日妝。　乞うて作す、胡姬一日の妝。

【字解】（一）長楊　漢の離宮の名、三輔黃圖に「長楊は、秦の舊宮、漢に至りて之を修飾し、以て行幸に備ふ、宮中に垂柳數畝あり、因つて名づく」とある。（二）夕郞　漢官儀に「黃門郞、日暮、靑瑣門に入對して拜す、名づけて夕郞といふ」とある。（三）憑　因る、恃む。（四）內寵　左傳に「齊侯內を好んで內寵多し」とあつて、後宮に在つて恩寵を受くること。（五）椒房　皇后の宮殿、爾雅翼に「椒は實多くして香し。漢世、皇后を椒房と稱するのは、その實蔓延、升に盈つるに取る。椒を以て屋に塗るは、その溫煖を取る」とある。椒は山椒。（六）身無用　おのが身には何の必要もない。（七）乞　與へるといふ義に見るべし。（八）胡姬　漢の羽林郞の詩に調笑酒家胡」とあり、胡姬年十七とある。胡姬は、塞外西域の婦人、酒店などでは之を雇つて、給仕の用に供したのである。

【題義】少年行は、樂府遺聲に「游俠曲」といひ、樂府詩集に「雜曲歌辭」とある。もとは、結客少年場行から出たので、結客少年場行に就いては、樂府詩集に「後漢書に曰く、祭遵、かつて部吏に侵され、客に結び、人を殺す、曹植の結客篇に曰く、結客少年場、報怨洛北邙、樂府題解に曰く、結客少年場行は、生を輕んじ、義を重んじ、慷慨以て功名を立つるを言ふなり。廣題に曰く、漢の長安少年、吏を殺し、財を受けて仇を報じ、相與に丸を探つて彈と爲し、赤丸を探り得れば武吏を斫り、黑丸を探り得れば文吏を殺す。尹賞、長安の令となり、盡く之を捕ふ。長安中、これが爲に歌うて曰く、

何處求子死。桓東少年場。生時諒不謹。枯骨復何葬。

按ずるに、結客少年場行は、少年の時、任俠の客に結び、遊樂の場を爲し、終つて成るなきを言うて、故に此曲を作るなり」とある。結客少年場行より轉じて少年子、少年樂、少年行となり、又少年行から分かれて、漢宮少年行、長樂少年行、長安少年行、渭城少年行、邯鄲少年行等が出て來た。少年行には、古詩もあり、律もあるが、盛唐諸家は、往往七絕を以てし、ともに人口に膾炙して居る。試みに其二三を抄すると、

五陵年少金市東。銀鞍白馬度春風。落花踏盡游何處。笑入胡姬酒肆中。　李白

馬上誰家白面郞。臨堦下馬坐人牀。不通姓名麤豪甚。指點銀瓶索酒嘗。　杜甫

新豐美酒斗十千。咸陽游俠多少年。相逢意氣爲君飲。繫馬高樓垂柳邊。　王維

出身仕漢羽林郞。初隨驃騎戰漁陽。孰知不向邊庭苦。縱死猶聞俠骨香。

その旨とするところは、游俠少年の富貴豪爽の態度を寫すに在つて、靑邱の此作も、無論さうである。

【詩意】長安の少年、出仕して黃門郞となり、長楊離宮の行幸にも供奉することが出來る立派な身分、その上、一族の者が、內寵を受けて皇后の宮殿に居すわつて居る爲に、御蔭を受けることも非常

で、勝手に威張り散らしても、誰も之に楯をつくものもない。天子より、黄金十萬を賜はつても、家には金が呻る程あつて、何の必要もない處から、惜氣もなく、これを氣に入つた酒家の胡姬に與へて一日の化粧料となさしめる。

【餘論】後半二句は、前人の窠臼に陷らず、まさしく、新意を出したものと見える。

(一)下直平明出禁門。　下直、平明、禁門を出で、
笑提(二)博局伴(三)王孫。　笑うて、博局を提げて王孫を伴ふ。
寶刀不敢輕(四)輪却。　寶刀敢て輕しく輪却せず、
明日(五)沙場欲報恩。　明日、沙場、恩に報いむを欲す。

【字解】【一】下直　當直を終りて退出する。漢官儀に「尚書郎は、晝夜更直、五日、建禮門内に于てす」とあり、黄庭堅の詩に玉堂下直長廊靜とある。【二】博局　雙六の盤、漢書呉王濞傳に「孝文の時、呉の太子、入つて見え、皇太子に侍するを得たり。飲んで博す。呉の太子もとより驕る。博して、道を爭ふこと不恭なり。皇太子、博局を引き、呉の太子を提げて之を殺す」とある。【三】王孫　前に見ゆ。【四】輪却　賭けて賭物を取られる。【五】沙場　戰場に同じ、匈奴との戰は沙漠に於て行はれしが故に云ふ。

【詩意】昨夜は、宮禁の内に當直して居たが、平明退出して、宮城の門を出で、笑うて、雙六の盤を提げ、貴公子輩と游び、嬉戲して日を送つた。しかし、腰下の寶刀だけは、賭物にしない。もし負けて之を取られると、それこそ大變、明日從軍して、塞外の戰場に向ひ、國恩に報いむが爲に、奮戰する時、是非無くてはならぬからである。

【餘論】この首も、結二句が一寸目新しいが、措辭が稍や圓熟しない樣な憾がある。

芳樹

(一)葳蕤映(二)華闥。窈窕臨清沼。　葳蕤、華闥に映じ、窈窕、清沼に望む。
風姿巧弄春。露氣微含曉。　風姿、巧に春を弄し、露氣、微に曉を含む。
(三)垂條拂(四)過騎。(五)翳葉留歸鳥。　垂條、過騎を拂ひ、翳葉、歸鳥を留む。
忽憶共攀人。(六)徘徊行獨遶。　忽ち憶ふ共攀の人、徘徊して行く獨り遶る。

【字解】【一】葳蕤　說文に「草木華垂の貌」とある、ふさふさと垂れる。【二】華闥　闥は漢書高后紀の注に「闥は闈なり」とある、立派なる戸ばり。【三】垂條　しだれた枝。【四】過騎　過ぎ行く騎士。【五】翳葉　上に翳せる葉。【六】徘徊　逍遙して去りがてにする。

【題義】芳樹は、樂府正聲に「漢の短簫鐃歌曲」とあり、題解に「古詞に云ふあり、妒人之子愁殺人、君有他心、樂不可禁、と。王融の相思早春日、謝脁の早翫華池陰、但だ時暮れて衆芳歇絕する

を言ふのみ」とある。青邱の此作は、矢張、原作の意を承け、且つ昔時同游の人を思ふ意を併せて言つたのである。

【詩意】時しも春の末、芳樹は、ふさふさと茂つて、立派なる閨中の戶ばりに映じ、窈窕として、淸い池に其影を涵し、その風姿は、巧に春を弄し、露氣は、ほのかに曉色を含んで居る。それのみか、垂れた枝は、過ぎ行く騎士を拂ひ、翳せる葉は、歸鳥を留むるに足るべく、今しも、生生の氣が充ち滿ちて居る。これを見るにつけて、忽然として、さきに一緖に樹を攀ぢて幽賞を縱にせし人を思へば、徘徊して去るに忍びず、獨り其周圍を廻つて、しばしも步を停めなかつた。

【餘論】前六句は、芳樹の形容に過ぎぬが、結二句、一轉して情に入り、聊か新婉の趣がある。

放歌行

泰山玉(一)檢書成功。　泰山玉檢、成功を書し、
(二)芝房正奏甘泉宮。　芝房正に奏す甘泉宮。
(三)漢家五葉號全盛。　漢家の五葉、全盛と號す、
有似白日初當中。　白日の初めて當中するに似たるあり。

【字解】【一】玉檢　漢書武帝紀封禪の注に「玉檢は、玉を以て檢と爲すなり」とあり。說文に「檢は書署なり」とあり、後漢書祭祀志に、「上、梁松等の奏を許し、乃ち封禪の故事を求む。有司奏す、當に方石を用ひ、再び累ねて壇中に置くべし、皆方五尺、厚さ一尺、玉牒を用ひて書藏す、方石牒、厚さ五寸、長さ尺三寸、廣さ五寸、玉檢あり」とある。玉檢は、天子が自ら署名して玉璽を押すこと。【二】芝房正奏甘泉宮　漢書武帝紀に「詔して曰く、甘泉宮內、芝を產す、九莖連葉、上帝博く臨み、下房に異ならず、朕に弘休を賜ふ、其れ天下に赦さむと、芝房歌を作る」とある。【三】漢家五葉　高祖・惠帝・文帝・景帝より武帝に至るまで、凡そ五世。【四】雄雞天上　玄中記に「桃都山に大樹あり、桃都といふ、枝相去ること三千里、上に天雞あり、日、はじめて出でて、この木を照らせば、天雞卽ち鳴き、天下の雞、皆、これに應ず」とある。【五】咸陽　一統志に「咸陽縣は、

(四)雄雞天上啼清曙。　雄雞、天上、淸曙に啼き、
春滿(五)咸陽萬家樹。　春は滿つ咸陽萬家の樹。
諸侯客子盡西來。　諸侯の客子、盡く西に來り、
只道明時苦難遇。　只だ道ふ、明時、苦だ遇ひ難しと。
(六)褐衣不脫見至尊。　褐衣脫せずして、至尊に見え、
立談一刻皆承恩。　立談一刻、皆恩を承く。
(七)賡詩已上柏(八)梁殿。　詩を賡して、すでに上る柏梁殿、
獻賦還過金(九)馬門。　賦を獻じて、還た過ぐ金馬門。
大道易登平(一〇)若砥。　大道登り易く、平、砥の若し、
始信青(一一)雲纔尺(一二)咫。　はじめて信ず、青雲、わづかに尺咫。
共喜嚴(一三)徐得寵榮。　ともに喜ぶ、嚴徐の寵榮を得たるを、
未容絳(一四)灌生讒毀。　未だ容さず、絳灌の讒毀を生ずるを。
(一五)丹詔仍聞訪草(一六)萊。　丹詔、仍ほ聞く草萊を訪ひ、

西安府に屬す」とあつて、後には長安の一部になつて居る。【六】褐衣　孔融の禰衡を薦むる表に「乞ふ、衡をして、褐衣を以て召し見えしめむ」とある。【七】賡詩　詩を和作する。

皇心務欲攬(一七)羣材。　皇心、務めて羣材を攬せむと欲す。

嗟君猶在新(一八)豐邸。　嗟す君が猶ほ新豐の邸に在り、

日暮空歌歸(一九)去來。　日暮、空しく歸去來を歌ふを。

【八】柏梁殿　古文苑に「武帝、柏梁臺を作り、羣臣二千石に詔し、能く七言詩を爲るものあらば、乃ち座に上るを得むと、梁王より以下、詩を作るもの二十五人」とある。【九】金馬門　史記滑稽傳に、「東方朔歌うて曰く、陸沈于俗、避世金馬門」とあつて、その注に「金馬門は、宦署の門なり、門旁に銅馬あり、故に金馬門といふ」とある。【一〇】不若砥　詩經に周道如砥とある。【一一】青雲　二義あつて、一は仙を得ることとなし、一は榮達となす。ここのは、後者、元稹の詩に、願登青雲路とある。【一二】咫尺　咫は八寸、その距離の極めて短きをいふ。【一三】嚴徐　漢書の列傳に「嚴安は、臨菑の人、故の丞相史を以て上書す。武帝、安を以て騎馬令となす。徐樂は燕郡無終の人、上書す、武帝召し見て曰く、何ぞ相見るの晩きや、と。郎中に拜せらる」とある。【一四】絳灌生讒毀　史記賈生傳に「賈生年二十餘、最も少しと爲す。詔令の議下る毎に、諸老先生、言ふ能はず、賈生盡く之が對を爲す。天子、公卿の位に任ぜむことを議す、絳灌・東陽侯・馮敬の屬、盡く之を害ありとし、乃ち賈生を短つて曰く、洛陽の人、年少初學、專ら權を擅にして、諸事を紛亂せむと欲す、と。ここに于て、天子、亦た之を疎んじ、乃ち以て長沙王の太傅と爲す」とある。絳は絳侯、卽ち周勃。灌は灌嬰。いづれも高祖の功臣の生き殘りで、卽ち當時の元老輩である。【一五】丹詔　詔敕は丹を以て書するが故に云ふ。【一六】草萊　草むらの內。【一七】攬　收攬する。【一八】新豐　三輔舊事に「太上皇、關中を樂まずして、鄕里を思慕す。高祖、豐沛の屠兒沽酒賣餅の商人を徙し、立てて新豐となす」とあり、一統志に「新豐城は、今の西安府臨潼縣に在り」と見ゆ、長安近傍の小市。【一九】歸去來　歸へり去らむ、いざと訓ず。來の字には、意義なし。陶淵明の歸去來辭に、歸去來兮、田園將蕪胡不歸とある。

【題義】放歌行は、樂府正聲に「相和歌辭瑟調曲」とあり、題解に「鮑照の放歌行、蓼蟲避葵菫の類、朝廷方に盛に、君上才を愛す。何すれぞ、路に臨み、相將ゐて去るを言ふなり」とある。

【詩意】今しも太平の御世で、天子は泰山に封禪し、成功を書して之を山に藏し、自ら御名を署して、玉璽を押され、甘泉宮には、靈芝が生じて、その爲に、芝房の歌を奏された位。大漢の世、丁度五代になつて、方に繁盛の頂點に達し、たとへば、皎皎なる白日が、天の中央に當つた樣である。天上の雄雞、一たび叫んで、夜がほのぼのと明けると、咸陽萬家の樹には、韶光正に立ちこめ、九重の都は、春の錦のやうである。諸侯の客たりしものは、盡く西に來て、帝都の中に聚まり、この聖明の時に際しては、亂世と異にして、君臣の遇合の困難なることも一通りではないといつて居る。しかし、實際、才藝あるものは、そんな事もなく、褐衣を脫せずして至尊に拜謁し、一刻の間、立談をしたばかりで、天子に見ぬかれ、恩寵を承けて俄に榮達を極め、或は聖作に賡和する爲に、柏梁臺に上ることを許され、或は賦を獻じて、金馬門を過ぐるものさへある。大道は、坦坦として砥の如く、宮城の方に向つて登ることも困難ではなく、青雲は、咫尺の間に在つて、高貴榮達を極めることは、何の造作もない。かくて嚴安・徐樂などと共に、寵榮を得、そして、周勃灌嬰の如き元老から讒毀されることもない。聞けば、天子は、詔を下し、遍ねく草萊の中を尋ねて、材力ある羣賢を收攬せむとする思召だといふことであるのに、如何なれば、君のみ、都に近き新豐の邸に居て、遂に用ひられず、日暮、空

しく歸去來を歌つて、立ち去らうとするのであるか。まことに、その意を得ぬ次第、今少し辛棒をして、自ら薦達する樣にしたらば善からうと思はれる。

【餘論】 起首二解は、刻下太平の世、都の景色も佳氣氤氳、何分、事が無いから、一寸見ては手に唾して功名富貴を取ること難かるべきを云ひ、次の二解は、才藝あるものは、必ず用ひられることを云ひ、最後の一解は、天子、賢良を求むるに急なるに際し、何故、君ひとり空しく歸去來を歌ふかといつて、題意を全うしたのである。

空城雀

空城雀。何（一）局促。　　空城の雀、何ぞ局促。
城頭飛。城下宿。　　城頭に飛んで、城下に宿す。
（二）百匝得（三）一枝。　　百匝して一枝を得、
千啄逢一粟。　　千啄して一粟に逢ふ。
衆雛隨（四）啾啁。　　衆雛、隨つて啾啁、
所欲各易足。　　欲するところ各〻足り易し。
不須羨彼（五）珍羽禽。　　須ひず彼の珍羽禽を羨むを、
翩翩高集（六）珠（七）樹林。　　翩翩として高く集まる珠樹の林。
一朝身陷（八）虞羅裏。　　一朝身は陷る虞羅の裏、
回首空城不如爾。　　首を回らせば、空城爾に如かず。

【字解】【一】局促　こせこせと忙しげに立ち廻る。【二】百匝　百たび飛び繞る。【三】一枝　莊子に「鷦鷯、深林に巣ふも、一枝に過ぎず」とある。【四】啾啁　嗟聲の騷がしきをいふ。【五】珍羽禽　珍らしく見事な羽毛を持つて居る鳥。【六】集　止まる。【七】珠樹林　唐書藝文傳に「王勃兄弟、皆進士と成る。勃・勔・勮、皆才名を著はす。故に、杜易簡、三珠樹と稱す。後に、助・劼、又、文を以て著はる」とあるが、ここのは、唯だ其字面だけを用ひただけである。又、張九齡の感遇に、側見雙翠鳥、巣在三珠樹とある。【八】虞羅　虞は虞人、羅は羅氏、ともに周代の主獵官。周禮冬官に「山虞は禽を致し、澤虞は禽を屬す」とあり、又「司馬羅氏、烏鳥を羅するを掌る」とある。

【題義】 空城雀は、樂府遺聲に「鳥獸曲」とあり、樂府詩集に「雜曲歌辭」とあり、題解に「鮑照の雀乳四鷇、空城之阿、輕飛近集、羅網に傷つくを免るるを言ふのみ」とある。

【詩意】 空城の雀は、如何なれば、こせこせと忙はし氣にして居るか。雀の爲すところを見ると、城頭より飛んで城下に宿し、百たび飛び匝つて、やッと宿するに足る一枝を見出し、千たび啄んだ揚句、わづかに食ふに足る一粟を得る位。多くの雛鳥は、がやがやと頻りに騷いで居るが、その欲するところは、もとより瑣瑣たるもので、各自に、たやすく、その慾求を滿足せしめることが出來る。かの珍らしい羽毛を有する禽鳥は、翩翩として三珠樹の上に高く止まつて居て、一朝、虞人羅氏の手に捕へられると、それまでの事、いくら悔やんでも追ッ付かず、空城を顧みて、却つて賤しい雀に及ばぬこと

を嘆息する位。それに付けても、汝、雀たるものは、決して、得意に見ゆる彼等を羨んではならぬ。

【餘論】究極は、分に安んじ足るを知るべき旨を諷諭したので、雀と珍羽禽とを對立して、構想を試みたのである。

相逢行

相逢行

沽酒渭橋(一)邊。平陵(二)俠少年。　酒を沽ふ渭橋の邊、平陵の俠少年。

相逢各有贈。寶劍與金鞭。　相逢うて各〻贈あり、寶劍と金鞭と。

【字解】【一】渭橋　長安の北なる渭水に架した橋、一統志に「西安府中の渭橋は、府城の西北、渭水の上に在り。東渭橋は、府城の東に在り、以て洛陽に通ず。西渭橋は、舊長安の西、渭水に跨つて以て茂陵に通ず。唐には咸陽橋と名づく」とあつて、ここのは、後者だらうと思はれる。【二】平陵　漢の昭帝の陵。

【題義】相逢行は、樂府正聲に「相和歌辭、清調曲」とあり、題解に「古辭相逢行、文意、雞鳴曲と同じ。陸機の長安狹斜行、李賀の難忘曲、皆ここに出づ」とあり、王僧虔の技錄に「相和歌清調六曲、相逢狹路行あり、亦た長安狹斜行といひ、亦た相逢行といふ」とある。この詩は、俠少年が相逢ひし時の光景を敍したのである。

【詩意】平陵に住まへる俠少年は、處處遊び廻つた揚句に、渭橋の邊なる酒樓に上つた。その少年輩は、相逢うて、互に贈遺をなし、此方から寶劍を贈れば、彼方から金鞭を寄越した。

【餘論】短章零句の中、特に趣向を著ける餘地もなく、後半十字、猶ほ且つ生氣の凜凜たるを覺える。

妾薄命

妾薄命

寂寞復寂寞。秋風吹羅幕。　寂寞、復た寂寞、秋風、羅幕を吹く。

玉階有微霜。桂樹花已落。　玉階に微霜あり、桂樹、花すでに落つ。

昔爲卷衣女(一)。承歡(二)在瑤閣(三)。　むかしは、卷衣の女たり、歡を承けて瑤閣に在り。

棄魚(四)感淚多。當熊(五)慙力弱。　魚を棄てて淚の多きを感じ、熊に當つて力の弱きを慙づ。

寧知色易老。難求黃金藥(六)。　寧ろ知らむや、色、老い易く、黃金の藥を求め難きを。

宮深去(七)天遠。憂思將何託。　宮深くして天を去ること遠く、憂思、將に何くにか託せむとする。

君恩非不深。妾命自輕薄。　君恩、深からざるに非ず、妾が命、自ら輕薄。

微軀願有報。和親(八)死沙漠。　微軀、願はくは報ずるあらむ、和親、沙漠に死す。

【字解】【一】卷衣女　樂府題解に「秦女卷衣は、咸陽春景の美、秦女衣を卷き以て所歡に贈るを言ふなり」とある。【二】承歡

君王の寵を受くること。【三】瑤閣　立派なる高閣。【四】棄魚　戰國策に「魏王、龍陽君と共に釣る。龍陽君、魚を得、泣いて曰く、臣、魚を得て甚だ喜ぶ、後、得るもの益す大なれば、直に前の得るところを棄てむと欲す。四海の内、美人亦た甚だ多く、裳を蹇げて大王に趨る。臣、亦た曩ほ前に得るところの魚のごときなり、安んぞ能く泣出づるなからむや」とある。後から來た女に寵を奪はるることを云ふ。【五】當熊　漢書外戚傳に「上、虎圏に幸す。熊、逸して圏を出で、殿に上らむと欲す。馮婕妤、直に前み、熊に當って立つ。元帝、此を以て倍す敬重す」とある。【六】黃金藥　黃金を精錬して造つた仙藥。李白の詩に嘗て餐ニ黃金藥一去爲ニ子陽賓一とある。【七】去天　この天は天子を指す。【八】和親　漢の高祖、匈奴に白登に圍まれ、力、敵すべからざるを知り、後に婁敬の策を容れ、女を匈奴に嫁せしめて、和親を圖つた。燦獻の王昭君詩に君恩不レ可レ再、妾命在ニ和親一とある。

【題義】妾薄命は、樂府遺聲に「佳麗曲、亦た惟日月といふ。その事、漢書許后傳に出づ、曰く、奈何妾薄命、端遇竟寧前」とあり、樂府詩集に「雜曲歌辭」とあり。題解に「曹植の日月旣逝レ西藏は、蓋し宴私の歡、久しからざるを恨む。梁の簡文の名都多ニ麗質一の如きは、良友反らず、王嬙遠く嫁し、盧姬嫁する遲きを傷むなり」とある。靑邱の此作は、卽ち前者で、後宮失寵の姬人に代つて、その薄命を傷嗟したのである。

【詩意】寂寞復た寂寞、秋風、颯として羅幕に吹き入り、玉階には、微霜白く置き、桂樹の花は、すでに落ち、見るからに物悲しく淋しき景色。むかしは、衣を卷いた秦女と同じく、春景の美に乘じて歡を承け、瑤閣を居として君寵に矜つて居た。しかも、龍陽君が歎いた通り、後に得た程、大きいと云ふので、君恩の此に移るを見れば、涙の多きに堪へず、馮婕妤の如く、檻を出た熊に當つて、その爲に君王に敬重されるには、力が弱くて到底眞似も出來ない。姿色は、もとより衰へ易いものであるに、黃金の仙藥は、この世に於て求めることが出來ない。身は冷宮に退處して、天子の御膝元を距つること、愈よ遠く、心中の憂思は、何物にか託すべき。君恩は、もとより深からざるに非ず、かうなるのも、つまり、私の身世輕く、命運薄きが爲めであつて、誰を怨むにも當らない。しかし、この微軀を以て、必ず君國の爲に報效を圖りたいと、平生願つて居るので、もし和親の爲めならば、遠く胡國に向ひ、沙漠の中に死んだ處で、決して、厭ふところではない。

【餘論】君恩非レ不レ深、妾命自輕薄の二句は、おのが宿命之を然らしむるを言ひ、怨んで誹らず、謂はゆる溫柔敦厚の本旨に協つたものである。

神仙曲

(一)上清(二)眞人古仙子。
(三)保レ神錬レ(四)魄從ニ無(五)始一。
(六)眉上霜毫如レ髮長。
幾見(七)金烏日中死。

神仙曲

上清の眞人、古しへの仙子、
神を保ち、魄を錬つて、無始よりす。
眉上の霜毫、髮の如く長く、
幾たびか見る金烏の日中に死するを。

【字解】【一】上清　靈寶本元經に「四人天外を三清境といふ、玉清・太清・上清、亦た三天と名づく」とあり、大眞經に「三清の間、各〻正位あり、聖は玉清に登り、眞は上清に登り、仙は太清に登る」とある。【二】

東游不ニ肯居ニ蓬萊一。　東游肯て蓬萊に居らず、

(八)滄海頃刻飛ニ黃埃一。　滄海、頃刻にして黃埃を飛ばす。

金輿玉座儼何處。　金輿玉座、儼たるは何の處ぞ、

(九)蔚藍天上彌(一〇)羅臺。　蔚藍天上彌羅臺。

(一一)碧桃落盡花無數。　碧桃落ち盡して花無數、

一笑虛空卷ニ煙霧一。　一笑虛空に煙霧を卷く。

(一二)鳥篆玄(一三)文世莫ㇾ窺。　鳥篆玄文、世、窺ふなし、

(一四)茂陵還掩蓬(一五)科露。　茂陵還た掩ふ蓬科の露。

眞人　道の眞を體得せし人、仙人と同じであるが、上に引ける大眞經の文を見ると、聖眞仙といつて、特に區別してあるから、仙人よりは一段上の階級に居るものと見える。【三】 保神　精神を保つ。【四】 鍊魄　普通に魂魄といふが、魂は靈魂、即ち胸。魄は、肺、魄を鍊るといへば、其體を精鍊して不老不死なること。【五】 無始　太古に同じ。【六】 眉上霜毫　眉の上の白毛、李白の贈ニ胡僧一詩の序に「胡僧あり、幾百歳なるを知らず、眉の長さ數寸」とあり、王禹偁の詩に、扶桑枯盡靈椿老、始放ニ龐眉出ニ壽毛一とある。【七】 金烏　韻會に「金烏は日中三足烏なり」とある。【八】 滄海頃刻飛黃埃　滄海は大海、頃刻は暫時の義。黃埃は黃色の塵埃、土けぶり。神仙傳に「麻姑、自ら說いて云ふ、すでに東海の三たび桑田となるを見る。さきに、蓬萊に至りしに、水涸れて、往昔、會せし時よりも淺く、略ぼ半ばなり。豈に將に復た還つて陵陸とならむとするか」とある。【九】 蔚藍天　杜甫の登ニ金華山一の詩に上有ニ蔚藍天一、垂ㇾ光抱ニ瓊臺一とあり、老學菴筆記に「蔚藍は乃ち隱語、天の名。意義を以て解すべきに非ざるなり」とある。【10】 彌羅臺　出處も、意義も、一寸分からない。金櫃の注には、范成大の步虛詞、梵氣彌羅融ニ萬象一、玉樓十二倚ニ晴空一を引いてある。【一一】 碧桃　白桃に同じ。白色の純粹なるものは、積ると碧に見えるより云ふ。【一二】 鳥篆　索靖の草書狀に「蒼頡、すでに書契を正す、これを科斗鳥篆といふ」とあつて、即ち鳥跡に擬した篆字。【一三】 玄文　理義玄妙なる文章、揚子法言に「育にして秀でざるものは、吾が家の童烏か、九齡にして我が玄文を與ふ」とある。この玄文は、太玄經の文章といふことであるが、字面だけは、ここから切り出して來たのであらう。【一四】 茂陵　漢の武帝を葬りし處。【一五】 蓬科　蓬顆に同じ、漢書の注に「顆は土塊をいふ、蓬顆とは塊上に蓬を生ぜしをいふのみ」とある。即ち土饅頭に草が生えたといふこと。

【題義】 神仙曲は、樂府詩集に「雜曲歌辭」とあり、題解に「曹植に仙人篇、升天行、遠游飛龍篇あり、皆神仙游戲、六合の外に翶翔するを言ふ。唐の李賀、神仙曲あり」と見えて居る。曹植の仙人篇は、仙人攬ニ六箸一、對博太山隅といふので、人生寄の如く、當に羽翼を養うて九天に徘徊し、以て韓終・王喬に從ふべしといふ旨を述べ、神仙篇等、皆同じ意味である。李賀の作は、

碧峰海面藏ニ靈書一。上帝揀作ニ神仙居一。晴時笑語聞ニ空虛一。鬭乘ニ巨浪一騎ニ鯨魚一。春羅ニ剪字一邀ニ王母一。

共宴紅樓最深處。鶴羽衝ㇾ風過ㇾ海遲。不ㇾ如却使ニ青龍去一。猶疑王母不ニ相許一。垂ㇾ露娃鬟更傳語。

青邱の此作も、矢張、仙道の貴ぶべきことを述べたのである。

【詩意】 上清天上に居る眞人は、むかしの仙子であつて、心神を保ち、精魄を鍊ること遠く太古よりし、眉の上なる白毛は、伸び伸びて、髮ほども長く、太陽の中なる金烏が死んだのを見たことも、幾回といふ位。その壽の長きこと、蓋し測り知るべからざる程である。そこで、東方に游んでも、蓬萊に居らず、蓬萊は、名だたる仙境であるが、眞人の目より見れば、未だ道ふに足らず、四面の滄海

は、暫時の間に淺くなつて、陸地に化し、はては土けぶりを揚げるので、とても、こんな處に行ひ澄まして居る譯には行かぬといふのである。そこで、金輿を停め、玉座に倚り、儼然端居して居るのは何處かといへば、三十三天の最高たる蔚藍天、その中でも、彌羅臺といふ處。道觀などでは、白桃の花落ち盡し、其下に鋪ける花片は、數へ切れぬ位、ここにも、人間の劫風なほ吹き至るを免れず、そして、虛空は煙霧に捲かれて、何處とも知られず、つまり、仙道を修することは、勿論困難であるし、一躍して仙界に登ることは、もとより出來ない。しかし、長い歲月を積んで、修行さへすれば、出來ないことも無いのであるが、鳥跡の篆字で書かれた道家玄妙の文章などは、世上これを窺ふものなく、折角の仙方が有つても、誰も之を體得しないから、仕方がないので、漢の武帝など、つまらぬ方士輩に欺かれ、はては、死を免れず。茂陵の抔土は、露を帶びたる蓬に掩はれて埋沒して居るといふ有樣で、見る人をして、覺えず傷心せしめる。

【餘論】東游不ㇾ肯居二蓬萊一の二句は、人の意表に出で、眞人の超越的なることを形容したのであるし、鳥篆の二句は、尋常仙を學ぶものの愚を嘲笑したので、前と相待つて、その旨意は、愈よ明白である。

結客少年場行　客に結ぶ少年場行

結レ客須レ結二游俠兒一。
(一)借レ身報レ仇心不レ疑。
(二)千金買得利七首。
(三)摩挲誓許レ酬二相知一。
白馬(四)縵胡纓。
行行人盡止。
朝游二(五)洛北門一。
暮醉二(六)秦東市一。
感レ君在二一言一。
不レ惜レ爲二君死一。
(七)朱家曾脫季將軍。
(八)田光終酬燕太子。
君不レ見魏(九)其盛時

客に結ぶ、須らく遊俠の兒に結ぶべし、
身を借し、仇を報じて、心疑はず。
千金買ひ得たり利七首、
摩挲誓つて相知に酬ゆるを許す。
白馬、縵胡の纓、
行行人盡く止まる。
朝には洛の北門に遊び、
暮には秦の東市に醉ふ。
君に感ずる、一言に在り、
君の爲に死するを惜まず。
朱家、かつて脫す季將軍、
田光、終に酬ゆ燕の太子。
君見ずや、魏其の盛時、客、門に滿つる

【字解】【一】借身　借は借りるではなく、貸す。人の爲に身を貸し力を出す。【二】千金買得利七首　利七首は鋭利なる懷劍、史記刺客列傳に「太子、豫め天下の利七首を求め、趙人徐夫人の七首を得、これを百金に取り、工をして藥して之を焠せしめ、以て人を試む、血、縷を濡し、人立ちどころに死せざるものなし」とある。【三】摩挲　撫でさする。【四】縵胡纓　莊子に「趙の太子曰く、吾が王見るところの劍士は、皆蓬頭突鬢垂冠、縵胡の纓、短後の衣」とある。粗纓にして文理なきこと、つまり飾もない粗末な冠の紐、李白の俠客行に趙客縵胡纓、吳鉤霜雪明とある。【五】洛北門　洛陽の北門、河南府志に「北に芒邱を控へ、東漢諸陵在り」と見ゆ。【六】秦東市　秦は長安、

客滿門。　を、

自言一一倶銜恩。　自ら言ふ、一一倶に恩を銜むと。

魏（一〇）其既罷誰復見。　魏其すでに罷めて、誰か復た見む、

養士堂中塵網遍。　養士堂中、塵網遍し。

始知結客難。　はじめて知る、客に結ぶの難きを、

徒言意氣傾（一一）南山。　徒に言ふ、意氣、南山を傾くと。

食君之祿有不報。　君の祿を食うて、報いざるあり、

何況區區杯酒間。　何ぞ況んや、區區杯酒の間。

結客不必皆薦紳（一二）。　客に結ぶ、必ずしも皆薦紳ならず、

緩（一三）急叩門誰可親。　緩急、門を叩く、誰か親むべき。

屠（一四）沽往往有奇士。　屠沽、往往にして奇士あり、

愼勿相輕閭（一五）里人。　愼んで相輕んずる勿れ、閭里の人。

長安の東市、極めて繁華な處と見える。史記日者列傳に「司馬季主、長安の東市にトす」とある。【七】**朱家脱季將軍**　史記季布列傳に「布、髠鉗して魯の朱家に賣らる。朱家、洛陽に之き、汝陰侯滕公を見て曰く、臣、各〻その主に用ひらる、季布、項籍に用ひられしは、職のみ。今、上はじめて天下を得、ひとり、己の私見を以て、一人を求む、何ぞ天下に廣からざるを示すや、と。滕公、上に見えて言ふこと朱家の指の如し、上、廼ち季布を赦し、召し見て、郎中に拜せらる」とある。【八】**田光慚酬燕太子**　史記刺客列傳に「田光曰く、今、太子、光に告げて曰く、言ふところのものは國の大事、願はくは、先生泄らす勿れ、と。これ、太子、光を疑ふなり。願はくは、足下、急に太子を過ぎて、光すでに死すといひ、言はざることを明かにせよ、と。終に自剄して死す」とある。【九】**魏其盛時客滿門**　史記魏其武安列傳に「魏其侯竇嬰は、孝文后の從兄の子なり。賓客を喜ぶ。孝景三年、吳楚反す。嬰を大將軍に拜して滎陽を守る。七國破る。魏其侯に封ぜらる。諸游士賓客、爭うて魏其侯に歸す」とある。【一〇】**魏其既罷誰復見**　上に引ける史記列傳の續きに「建元六年竇太后崩ず、魏其勢を失ひ、諸客稍稍自ら引いて怠傲、唯だ灌將軍ひとり故を失はず、魏其、日に默默として志を得ず、而して、獨り厚く灌將軍を遇す」とある。【一一】**傾南山**　南山は終南山の略、長安の正南に當つて、最も近きが故に、特に借り來つたのであらう。【一二】**薦紳**　史記伯夷列傳に「薦紳先生、能く之を言ふ」とあつて、その注に「笏を紳に薦む、故に薦紳と謂ふ」とある。薦は插む。紳は大帶。【一三】**緩急叩門誰可親**　史記袁盎列傳に「一旦急あつて門を叩くに、親を以て解と爲さず、存亡を以て辭と爲さず、天下望むところのものは、ひとり季心劇孟のみ」とある。【一四】**屠沽**　狗や牛を屠るを業とするもの、賤業者、史記信陵列傳に、「侯嬴、公子に謂つて曰く、臣の過ぐるところ居者朱亥、この子、賢者、世、能く知るなし、故に屠間に隱るるのみ」とあり、又刺客列傳に「聶政、人を殺して仇を避け、母姉と齊に如き、屠を以て事となす」とある。【一五】**閭里**　閭巷の中に住む貧者。

【題義】　結客少年場行は、前に少年行の題義に於て詳述して置いたから、その條を見て貰ひたい。なほ樂府詩集には「雜曲歌辭」とあり、樂府遺聲には「游俠曲、曹植の結客少年場、報怨洛北邙を取つて題となし、鮑照・范曄より始まる」とあるが、曹子建の集中には、右の二句は見えず、多分間違ひだらうと思はれる。この題も、少年行と同じく、少年の游俠を敍したものである。

【詩意】　客に結ぶには、游俠の少年と交るのが一番善いので、彼等は、人の爲に、その身を貸し、その仇に報い、一度決心した以上は、すこしも遲疑することはない。彼は、千金を投じて、銳利なる懷劍を購ひ、平生、これを撫摩して、相知の人に酬いむことを誓つて居る。彼は、白馬に跨り、飾もな

い粗末な冠の紐をしめて、出かけるが、行く先先で、人は盡く歩を停めて見入るばかり。かくて、朝には洛陽の北門に遊び、暮には長安の東市に醉ひ、放浪以て活を爲し、決して、一つ處には居らない。彼は、唯その一言に感じて、君の爲に死することを厭はないので、かの季布を救つた魯の朱家の如き、燕の太子に酬ゆるが爲に自刎して死んだ田光の如き、その常に欽慕するところである。むかし、魏其侯竇嬰が榮華を極めた時に當りては、賓客その門に滿ち、さながら言ひ合はせた樣に、一一、その恩に感じ、決して忘れはせぬといつて居た。しかし、魏其侯すでに勢を失つた時には、誰も再び來て遇はうともせず、昔日天下の士を養つて居た高堂の中には、塵を帶びた蛛の巣が、一ぱいに掛つて居るといふ樣な始末。これを見て、はじめて客に結ぶことの容易ならぬことが分かるので、彼等が自負して、その意氣、終南の山を傾くるに足るといつて居た處で、もとより、あてには成らず、君の祿を食んで居ながら、決して、その德に報いやうともしない樣な、輕薄な不屆な奴もあるので、まして、區區たる杯酒の間に歡を爲した位の事では、とても、天下の士に結ぶことは出來ぬ。抑も客に結ぶには、何も必ずしも縉紳の輩に限つた譯ではない。一旦緩急ありし時、門を叩くと、早速出て來て、力を出して吳れるといふのは、誰であらうか。顧みれば、屠沽輩中、却つて、往往奇士と稱すべきものがあるから、何分、愼重にして、閭巷の貧者を馬鹿にしては成らぬ。

【餘論】感ㇾ君在二一言一不ㇾ惜三爲ㇾ君死一の十字は、游俠の眞面目を描き出し、凛凛として千古に死せざるの概がある。結末四句は、薦紳尊貴、必ずしも恃むに足らず、屠沽中、却つて奇士あるを言ひ、古今同慨、又、閭里の人の爲に大に氣を吐いたのである。

長相思

長相思。思何長。
愁如二天絲一遠悠揚。
搖ㇾ風曳ㇾ日不ㇾ可ㇾ量。
未ㇾ能ㇾ絆二去足一。
唯解ㇾ結二離腸一。
關山碧雲看ㇾ欲ㇾ暮。
空幃坐掩茎蘭香。
長相思。思何長。

長相思

長相思、思何ぞ長き。
愁は天絲の如く、遠く悠揚、
風に搖き、日を曳いて、量るべからず。
未だ去足を絆する能はざるも、
唯だ離腸を結ぶを解す。
關山碧雲、看る暮れむと欲す、
空幃坐に掩ふ、茎蘭の香。
長相思、思何ぞ長き。

【字解】【一】天絲　かげろふ、游絲に同じ、王建の詩に、初晴天墮ㇾ絲とある。【二】絆去足　立ち去つて行く足を縛る。【三】結離腸　別離の心腸を結びつける。【四】碧雲　晴れた雲。【五】茎蘭　茎も香草の名、長門賦に、席二茎蘭一而茝香とある。

【題義】長相思は、樂府遺聲に「怨思曲」といひ、樂府詩集に「雜曲歌辭」といつて居る。元と漢人

詩中の語で、古詩に客從二遠方一來、遺二我一札書一、上書二長相思一、下言二久離別一とあつて、長は久遠の辭、行人久戍、書を寄せて、思ふところに遺るといふ意である。なほ外に客從二遠方一來、遺二我一端綺一、文綵雙鴛鴦、裁爲二合歡被一、著以二長相思一、緣以二結不解一とあつて、被中に綿を入れ、相思綿綿の意を致し、これを長相思といつたのである。次に、蘇李贈答の作と稱する中に、蘇武は生當二復來歸一、死當二長相思一といひ、李陵は行人難二久留一、各言二長相思一とある。その長相思といふ三字が、まことに面白いから、遂に之を切り離して題としたので、陳の後主は、長相思、久相憶といひ、徐陵は、長相思、望レ歸難といひ、江總は、長相思、久別離といひ、いづれも、一篇の起首に長相思の字を塡用した。靑邱の此作も、矢張、これに倣つたのである。

【詩意】長く相思うて止まず、如何なれば、かくまで我が思は長いのであらうか。思の果は愁となり、その愁は、遠くに行き亙り、かの風に搖らめき、日を曳いて、到底量るべからざるかげろふの如くである。すでに天絲の如しといふからには、その絲は、たとひ去り行く人の足を縛ることは出來ずとも、離別の心腸の動もすれば寸裂せむとするのを結んで固めることは出來やう。今しも、千里の關山、碧雲ほの暗くして、將に暮れむとし、人もなき空閨の紗帳の中、唯だ匂ひ籠めたる荃蘭の香しきを聞くのみ。長く相思うて止まず、如何なれば、かくまで我が思は長いのであらうか。

【餘論】愁如二天絲一遠悠揚の四句は、愁思の綿綿として絕えざるを云ひ、去足、離腸の二句に至りて、

更に一境を進め、新婉悲痛を極めて居る。

君馬黃

君馬黃。我（一）馬玄。　君が馬は黃、我が馬は玄。
君馬金（二）匼匝。　君が馬は金匼匝、
我馬錦（三）連乾。　我が馬は錦連乾。
兩馬喜遇皆嘶鳴。　兩馬喜び遇うて皆嘶鳴、
何異主人相見情。　何ぞ異ならむ主人相見るの情。
長安大道可レ竝（四）レ轡。　長安の大道、轡を竝ぶべし、
莫レ矜二得意一爭レ先行。　得意に矜つて先行を爭ふ莫れ。
（五）搖レ鞭共踏二落花一去。　鞭を搖かして、共に落花を踏んで去る、
（六）燕姬酒壚在二何處一。　燕姬の酒壚、何處にか在る。

【字解】【一】我馬玄、玄は黑色。【二】金匼匝　杜甫の詩に、馬頭金匼匝とある、匼匝は馬の頭を包むもので、それが黃金で造つてある。【三】錦連乾　連乾は連乾障泥の略、あふり、卽ち馬の腹卷、それが錦で仕立ててある。晉書王濟傳に「濟、善く馬性を解す。かつて、一馬に乘じ、連乾障泥を著く。前に水あり、終に肯て渡らず。濟曰く、これ必ず是れ障泥を惜むならむと。人をして解き去らしむれば、便ち渡る」とある。【四】竝轡　轡は手綱、くつわといふのは邦人の誤訓である。【五】搖鞭　搖は振り動かす。【六】燕姬　北地の美人。

【題義】君馬黃は、樂府正聲に「漢の短簫鐃歌曲」とあり、古今樂錄に「漢の鼓吹鐃歌十八曲、十を君馬黃といふ」とあり、題解に「初に君馬黃、臣馬蒼、二馬同逐臣馬良と言ひ、終に美人歸以南、歸以北、駕レ車馳レ馬、令二我心傷一」とある。金檀注にも、これだけしか引いてないが、これでは不十分であるし、且つ原詩とも些か違ふから、次に君馬黃の古詞を全篇引くことにする。

君馬黃。臣馬蒼。二馬同逐臣馬良。易之有レ騩蔡有レ赭。美人歸以南。駕車馳レ南。美人傷二我心一。佳人歸以北。駕車馳レ馬。佳人安能極。

その美人といひ、佳人といつたのは、前の君と同じく、矢張、その友を指したのであらうが、どうやら、晦澀を免れない。青邱の此作は、兩少年、馬上ながら相逢ひし光景を敍し、その意象も明白である。

【詩意】君の馬は毛なみが黃色であるが、我が馬は黑色である。君の馬は頭に黃金の飾を施して居るが、我が馬は腹に錦のあふりを締めて居る。かくて、路上に於て、兩馬がはたと出會ふと、さながら喜悅に勝へざるが如く、互に長嘶し、兩個の主人が相見て喜ぶ情と、宛ら同じである。それから、手綱を連ねて、長安の大道をしづしづと歩ませるが、得意に先を爭つて行くやうなことをしてはならぬので、仲よく、相竝んで、蹄の音、ぽこぽこと步ませる。時たま、鞭を打振り、滿地の落花を踏みつつ、目指すは燕姬の酒壚で、何處であつたかといひつつ、ひたすら尋ねて居る。

【餘論】必ずしも、古詞の原意に拘泥せず、題名に重きを置き、兩馬より兩少年に及び、その貴游の狀を敍したので、結二句、彷彿として、その風度をしのばしめる。

團扇郎

團扇郎

團（一）扇團且潔。人言似（二）二明月一。
明月豈得レ如長圓不二曾闕一。

團扇、團にして且つ潔、人は言ふ、明月に似たりと。
明月、豈に如くを得むや、長く圓にして、かつて闕けず。

【字解】【一】團扇　うちわ。元來、扇は卽ち團扇。日本でいふ扇、卽ち疊めるものは、元と支那になく、宋元の間に、日本から傳へたので、摺疊扇といつて珍重した。普通、扇といふのは必ず團扇である。【二】似明月　班婕妤の怨歌行に「新裂二齊紈素一、皎潔若二霜雪一。裁爲二合歡扇一、團團似二明月一」とある。

【題義】團扇郎は、樂府正聲に「淸商吳聲歌曲」とあり、古今樂錄に「團扇郎は、王詢の婢謝芳姿の作るところなり。晉の中書令王珉、白團扇を捉へ、嫂の婢謝芳姿と愛するあり。情好甚だ篤し。嫂、婢を捶撻して苦に過ぐ。王、東亭に聞いて之を止む。芳姿、もとより歌を善くす。嫂、一曲を歌はしめ、當に之を赦すべしといふ。聲に應じて歌うて曰く、

白團扇。辛苦互流連。是郎眼所レ見。

珉、聞いて更に之を問ふ、汝の歌、何を道ふかと。芳姿、卽ち改めて云ふ、

白團扇。顔頳非昔容。羞與郎相見。

後人、因つて之を歌ふ」とある。そして、その古詞として知らるるのは、左の數首である。

七寶畫團扇。燦爛明月光。餉郎却暄暑。相憶莫相忘。

青青林中竹。可仿白團扇。動搖郎玉手。因風託方便。

犢車薄不乘。步行耀玉顔。逢儂都共語。起欲著夜半。

團扇薄不搖。窈窕搖蒲葵。相憐中道罷。定是阿誰非。

御路薄不行。窈窕決橫塘。團扇鄣白日。面作芙蓉光。

白練薄不著。趣欲著錦衣。異色都言好。清白爲誰施。

大抵、白團扇に因つて興を起し、乃ち其情思を抒べたので、靑邱の此作も、無論さうである。

【詩意】この團扇は、白い練絹で張つたのであるから、團團として、且つ皎潔であり、人は、その形が明月に似て居るといつて居る。しかし、明月は、到底相如かず、この團扇は、いつまでも、圓くして、月の樣に闕けることは決してない。あはれ、郎の恩情も、この團扇の如く有りたいものである。

【餘論】ほんの尋常口頭の語に過ぎぬが、一種癡絕の處は、まさしく愛すべきを覺える。

楊白花

楊白花

楊白花(一)。太輕(二)薄。
楊白花、太だ輕薄。

不向宮中飛。
宮中に向つて飛ばず、

却度江南落。
却つて江南に度つて落つ。

美人踏(三)踏連臂歌。
美人踏踏、臂を連ねて歌ふ、

山長水濶奈爾何。
山は長く水は濶く、爾を奈何。

奈爾何。春欲晚。
爾を奈何、春晚れむと欲す、

何不飛去仍(四)飛返。
何ぞ飛び去つて、仍ち飛び返らざる。

洛陽樹。多啼鴉。
洛陽の樹、啼鴉多し、

愁殺人。楊白花。
人を愁殺す、楊白花。

【字解】〔一〕楊白花　題義の條に見ゆ。もと人名であるのを、此では、楊花の白いに併せて云ふ。〔二〕輕薄　浮氣。〔三〕踏踏　足ぶみをする。〔四〕仍　すなはちと訓すべし。

【題義】楊白花は、樂苑に「雜曲歌辭」とあり、その由來に就いては、南史に「楊白花は、武都仇縣の人、少にして勇力あり、容貌瓌偉、胡太后、逼つて之を幸す。白花、禍を懼れ、會ま父大眼卒するや、白花、部曲を擁して、南、梁に奔る。太后、追思して已まず、爲に楊白花の歌を作り、宮人をして、連臂蹋足、これを歌はしむ。聲甚だ悽惋。その歌に曰く、

陽春二三月。楊柳齊作花。春風一夜入閨闥。楊花飄蕩落南家。含情出戸脚無力。拾得楊花淚沾臆。秋去春來雙燕子。願銜楊花入窠裏。

又「楊華、本名は白華、梁に奔り、後、華と名づく」とある。後世、柳宗元の作が最も著名で、卽ち左の通りである。

楊白花。風吹度江水。坐令宮樹無顏色。搖蕩春光千萬里。茫茫曉月下長秋。哀歌未斷城鴉起。

【詩意】白い楊花は、まことに浮氣なもので、わが宮中に向つて飛び入らず、却つて、はるばる南に向ひ、江南に度つて吹き落ちた。後宮の美人どもは、足ぶみをしつつ、臂を連ねて歌ひ、楊花すでに飛びし後、ここより江南に至るまで、山は長く、水は濶く、汝を奈何すべき、といひつつ、調子を揃へて、高聲に唱へて居る。あはれ、楊花よ、汝を奈何すべき。今しも、春は暮れなむとして居るのに、何故に、再び飛び去つて、乃ち此に飛び返らぬか。ここ洛陽の城中には、樹木生ひ茂り、塒に噪ぐ鴉の聲、かしましく、汝、楊白花は、人を愁殺して、物思に堪へざらしめる。

【餘論】美人踏踏連臂歌より、何不飛去仍飛返に至るまで、二解五句、聲調宛轉、一誦して、人の柔情を斷ち盡さしめる。

門有車馬客行

門に車馬の客あり行

門有車(一)馬客。乃是故鄉士。　門に車馬の客あり、乃ち是れ故鄉の士。

昔別各壯(二)顏。今見不相似。　むかし別るる、各々壯顏、今見れば相似ず。

上堂敍情親。拜跪出妻子。　堂に上つて、情親を敍し、拜跪して、妻子を出す。

對(三)案未能食。歷歷問桑(四)梓。　案に對して、未だ食ふ能はず、歷歷として、桑梓を問ふ。

當時同游人。十有八九死。　當時同游の人、十に八九の死するあり。

松柏長新墳。荊棘生故址。　松柏、新墳に長じ、荊棘、故址に生ず。

歡言方未終。悲感還復始。　歡言、方に未だ終らず、悲感、還た復た始まる。

因思興(五)謝端。歎息不能止。　因つて、興謝の端を思ひ、歎息して止む能はず。

【字解】【一】車馬　馬車に乘じた貴客。【二】壯顏　壯年の顏。【三】對案　案は食卓。【四】桑梓　詩經に維桑與梓、必恭敬止とあつて、故宅の義。【五】興謝　先祖に對して報恩の祭祀を爲す。呂溫の賀遷獻饗二組表に紛紛興謝、綿韻載紀とある。

【題義】門有車馬客は、樂府正聲に「相和歌辭瑟調曲」とあり、樂府題解に「曹植等の門有車馬客行、皆この客に問訊するを言ひ、或は故舊鄉里を得、或は京師より親し、備さに市朝遷謝親友彫喪の意を敍するなり。按ずるに、曹植、又門有萬里客」あり、亦た此と同じ」とある。青邱の此作も、矢

張、車馬美美しき同鄕人の來訪を受け、故園の模樣の大分變つたことを聞いたといふに因つて、悲慨の感を寄せたのである。

【詩意】門前に遣つて來た車馬の客は、如何なる人かと思へば、故鄕の士人であつて、むかし別れた時は、各〻壯年の顏を爲して居たが、今見ると、似ても似付かぬ樣な風であつた。取り敢へず、堂上に請じ入れて、親密なる情誼を敍し、妻子を呼び出して拜跪せしめた。やがて、酒肴を用意して薦めたが、食卓に對して、まだ箸を下さぬ間に、わが故宅の事など一一詳しく問うて見た。すると、少壯の時、一緒に遊んだものどもは、十人の中、八九人まで、物故して仕舞ひ、その新墳には、松柏生ひ茂り、その住宅の跡には、荊棘を生じたといふことである。折角逢つて嬉しいと思つたが、喜悅の言葉が、まだ終らぬ中に、悲愴な感じが、又ぞろ始まつて來た。それに就けても、かうして略ぼ不自由なく、無事で生存して居るのは、先祖の御蔭だといふので、ひしひしと心に思ひ當り、至急に報恩の御祭りでも行はうと思ひ、歎息して、止むことが出來ない。

【餘論】昔別各壯顏の二句は、爾我の容貌、すでに老いて、その舊に似ざるを言ひ、當時同游人の四句は、舊時の交友、すでに在らざるを言ひ、ともに悲痛の極である。かういふことは、謂はゆる人人意中の語であるから、その措辭の巧拙に關せず、容易に人を感動せしめるものである。

估客詞

上客荊州〔一〕商。小婦揚州〔二〕娼。
金多隨處樂。不是不思鄕。

估客の詞

上客は荊州の商、小婦は揚州の娼。
金多くして隨處に樂む、これ鄕を思はざるにあらず。

【字解】【一】荊州　今の宜昌一帶の地。蜀に通ずる咽喉に當り、從つて、互商が多いと見える。【二】揚州　古しへより風月佳麗の地として知られ、杜牧などが壯時狂態を演じたのも、卽ち此地である。

【題義】估客詞は卽ち估客樂、估客樂は、淸商曲辭の西曲歌に屬し、その由來に就いては、古今樂錄に「估客樂は、齊の武帝の製するところなり。帝、布衣の時、かつて樊鄧に遊ぶ、登祚以後、往事を追憶して歌を作り、樂府令劉瑤をして、管絃、これを被らして、敎習せしめしが、卒に遂に成るなし。人あり、啓す、釋寶月、善く音律を解す、と。帝、これを奏せしむ。旬日の中、便ち諧合に就く。歌者に敕して、常に重ねて感憶の聲を爲さしめ、猶ほ世に行はる。寶月、又兩曲を上る。帝、數ば龍舟に乘じ、五城江中に游んで放觀し、紅越布を以て帆となし、綠絲を帆繂となし、鍮石を篙足となし、篙榜の者は、悉く鬱林布を著け、淡黃袴と作して列開し、江中に衣て出でしむ。五城殿、猶ほ在り。齊舞十六人、梁は八人、唐書樂志に曰く、梁、その名を改めて商旅行となす」とある。齊の武帝の作は、

昔經二樊鄧役一。阻レ潮梅根渚。感憶追二往事一。意滿辭不レ敍。

寶月の作は、

郎作二十里行一。儂作二九里送一。拔二儂頭上釵一。與レ郎資二路用一。有レ信數寄書。無レ信心相憶。莫三作レ瓶落レ井。一去無二消息一。

又二首、

大艑珂峩頭。何處發二揚州一。借問艑上郎。見二儂所歡一不。

初發二揚州一時。船出二平津一泊。五兩如二竹林一。何處相尋博。

後に賈客樂といふも、全く同じである。

【詩意】上客として奉られて居るのは、荊州の商人であるし、その席に侍して居る若い女は、揚州の娼妓である。荊州の商人は、金を澤山持つて居るから、どこででも、おもふ儘に歡樂を極めることが出來るので、必ずしも、故鄉の事を打忘れ、旅で游蕩三昧を盡して居る譯でもない。

【餘論】荊商の豪富を敍したので、後半十字、その游冶の狀を想見せしめる。

櫂歌行

櫂歌行

(一)溶漾(二)漢潭清。(三)搴二荷趁一浪平。　溶漾として漢潭淸く、荷を搴つて浪の平かなるを趁ふ。

船輕知二體弱一。簪滑見二鬢傾一。　船、輕くして體の弱きを知り、簪、滑かにして「鬢の傾く」を見る。

落日懸二江思一。浮雲結二浦情一。　落日、江思を懸け、浮雲、浦情を結ぶ。

去從二(四)千葉隱一。歸愛二一花迎一。　去つて、千葉の隱すに從せ、歸つて一花の迎ふるを愛す。

(五)吳歈幷(六)子夜。誰似(七)櫂歌聲。　吳歈、幷せて子夜、誰か似む櫂歌の聲。

【字解】(一)溶漾　水の滿ち滋へたる貌。蘇軾の詩に孤帆信二溶漾一。弄二此半篙碧一とある。(二)漢潭　漢水の淵。(三)搴荷　蓮の花を采る。(四)千葉　蓮の葉の重り合ふをいふ。(五)吳歈　吳都賦に荊豔楚舞、吳歈越吟とあつて、吳地の歌をいふ。(六)子夜　樂府題解に「舊史に云ふ、晉に女子あり、子夜といふ、作るところの聲、至つて哀し。晉の武帝の太和中。瑯琊王軻の家に鬼あつて、これを歌ふ、後人、四時に依つて、これが調を爲り、子夜吳聲四時歌といふなり」とある。もとは、歌を善くする女の名、後には歌の名となつた。(七)櫂歌　舟歌、梁の簡文帝の詩に從來入二枝管一。誰在二櫂歌前一とある。

【題義】櫂歌行は、樂府正聲に「相和歌辭、瑟調曲」とあり。樂錄に「王僧虔の技錄に云ふ、櫂歌行の歌、明帝、王者布二大化一の一篇、或は云ふ、左延年の作、今歌はず。梁の簡文帝、東宮に在り、更めて歌を製す。少しく此に異なるなり」とあり、題解に「晉樂、魏の明帝の辭を奏して云ふ、王者布二大化一と。備さに平吳の勳を言ふ。晉の陸機の遲遲春欲レ暮、梁の簡文帝の妾住在二湘川一の若きは、但だ舟に乘じ、櫂を鼓するを言ふのみ」とあつて、後世は、すべて、この類である。念の爲め、陸機・簡文の二作を左に引抄して置く。

遲遲暮春日。天氣柔且嘉。元吉隆初巳。濯レ穢游二黃河一。龍舟浮二鷁首一。羽旗垂二藻葩一。乘レ風宜二飛景一。道遙戲二中波一。名謳激二清唱一。榜人縱二櫂歌一。投レ綸沈二洪川一。飛レ繳入二紫霞一。　　陸機

妾家住二湘川一。菱歌本自便。風生解レ刺レ浪。水深能捉レ船。葉亂由レ牽レ荇。絲飄爲レ折レ蓮。濺レ妝疑二薄汗一。霑レ衣似二故湔一。浣レ紗流暫濁。汰レ錦色還鮮。參同趙飛燕。借問李延年。從來入二絃管一。誰在二櫂歌前一。　　簡文帝

【詩意】溶溶漾漾として、漢水の淵は、水の色も極めて淸く、その岸邊に近き淺い處には、蓮の花が咲いて居るから、若い女は、それを采らむが爲に、舟に乘り、浪の平かなるを趁うて、だんだんと漕ぎ寄せて來た。その船の輕げに浮ぶに因つて、乘つて居る女の體の纖弱なるを知り、簪が滑り落ちた爲に、雲鬟が半ば傾いて見える。落日は江上の思を懸け、浮雲は極浦の情緖を結ぶやうである。やがて、大きな蓮の葉の簇つて居る間に漕ぎ入つて、その姿の隱るるに任せたが、さして、得るところなく、又漕ぎ戻ると、一つの蓮の花が心ありげに相迎ふるが如く、取り敢へず、これを采つて、ひどく心に愛でて歌ひ出した。その櫂歌の聲の優しくして風情あるは、到底、吳歈・子夜の及ぶところではない樣に思はれた。

【餘論】主として、采蓮の女の櫂歌を唱へる樣を敍したのである。落日の二句は、對偶を以て之を行り、江思浦情などは、獨瓶に係るものと思はれる。その意味は、落日浮雲、これを江浦の間に見て、愈よ情思あるを覺えるといふ丈であるが、空靈縹緲の趣がある。

雞鳴歌

雞鳴の歌

(一)北斗城邊北斗低。
北斗城邊、北斗低し、

萬家夢破一(二)聲雞。
萬家夢は破る、一聲の雞。

馬蹄踏(三)踏車轆(四)轆。
馬蹄踏踏、車轆轆、

(五)闕下連趨市中逐。
闕下には連りに趨つて市中には逐ふ。

雄雞安得レ噤(六)二爾聲一。
雄雞、安んぞ爾の聲を噤するを得む。

利名少息二世上爭一。
利名、少しく世上の爭を息むれば、

(七)漫漫夜長人不レ驚。
漫漫、夜長くして、人驚かざらむ。

【字解】【一】北斗城　三輔黃圖に「はじめて、長安城を營く、狹小なり。惠帝に至りて、更に之を築く、周廻六十五里、城の南は南斗形を爲し、北は北斗形を爲す。今に至つて、人、呼んで斗城となす」とある。【二】一聲雞　溫庭筠の詩に、碧樹一聲天下曉とある。【三】踏踏　馬蹄のぽこぽこと響くこと。【四】轆　車の軋る響。【五】闕下　闕は門旁の巨屋、史記高祖本紀に「蕭丞相、未央宮を營み、東闕北闕を立つ」とあり、釋名に「闕は門の兩旁に在り、中央闕然として道をなすなり」とある。【六】噤　口を閉ぢる、聲を出さぬ樣にする。【七】漫漫夜長　甯戚の飯牛歌に長夜漫漫何時旦とある。

【題義】雞鳴歌は、樂府詩集に「雜謠歌辭」とあり、廣題に「漢に雞鳴衞士あり、宮外に雞唱するを

主る。舊儀、宮中と臺と、竝に雞を畜ふことを得ず、晝漏盡きて夜漏起れば、中黃門、五夜を持し、甲夜畢つて乙に傳へ、乙夜畢つて丙に傳へ、丙夜畢つて丁に傳へ、丁夜畢つて戊に傳ふ。戊夜これを五更と爲す。未明三刻、雞鳴けば、衞士起唱す。漢書に曰く、高祖、項羽を垓下に圍む。羽、この夜、漢軍の四面皆楚歌するを聞く。應劭曰く、楚歌は雞鳴歌なり。晉太康地記に曰く、後漢の固始・銅陽・公安・細陽、四縣の衞士、この曲を闕下に習うて之を歌ふ。今の雞鳴歌、是れなり、と。然らば、この歌は、蓋し漢歌ならむ。按ずるに、周禮、雞人、大祭祀を掌る。夜旦を嘷いて、以て百官を嚻むと、すなはち起るところ亦た遠し」とある。すると、雞鳴歌は、周禮に雞人、漢の雞鳴衞士あるに因み、雞鳴に因つて興を起し、早曉の光景を敍したもので、その古詞は卽ち左の如くである。

東方欲レ明星爛爛。汝南晨雞登レ壇喚。曲終漏盡嚴具陳。月沒星稀天下旦。千門萬戶遞二魚鑰一。宮中城上飛二烏鵲一。

無論、青邱も、此詞を本とし、その上に聊か新意を出さむことを試みたのである。なほ、相和歌辭に雞鳴篇といふのがあるが、それは、題解に「劉孝標の雞鳴篇、但だ雞を詠ずるのみ」とあつて、この雞鳴歌とは、全然異なつて居る。

【詩意】北斗城と稱せらるる長安の城北に於ては、北斗が下に沈み、夜は將に明けむとし、雞が一聲高く歌ひ出すと共に、萬家の夢は破られて、城中の人は、すべて起き出でた。すると、馬蹄の音はぽこぽこ、車輪の響はぎいぎいと、相交つて聞こえ、それが外城の大門より入つて、市中に向ひ、互に相逐ふが如く、まことに騷がしい。あはれ、雄雞よ、どうかして汝の聲を止めて鳴かぬ樣にすることは出來ぬか。さうすれば、利名に關する世上の爭鬪も、少しく止み、朝まだきから、人が騷ぎ立てることもなく、夜は漫漫として長く、すべての人は、靜に、のんきに、驚くことなくして、十分に眠ることも出來るであらう。

【餘論】雞鳴を以て、市朝喧闐の因となし、そこで雄雞をして其聲を噤せしめたいといつたのである。この雄雞の七字は單句、前後の關鍵となつて、極めて緊健にして力あるを覺える。

華山畿

華(一)山畿。牛車止。
華山畿、牛車止まる、

不レ同レ生。可二同死一。
同じく生きざるも、同じく死すべし。

棺開棺開。
棺開け、棺開け、

與レ郎去(二)來。
郎と去らむ。

【字解】【一】華山畿　地名。
【二】去來　歸去來の來と同じく、もと語助であつて、意味はない。

【題義】華山畿は、樂府正聲に「清商吳聲歌曲」とあり、樂錄に詳しく其由來を敍して「宋の少帝の

時、南徐の一士子、華山畿より雲陽に往かむとし、客舍の女子を見て、これを悅ぶも因なく、遂に心疾に感ず。母、爲に華山に至つて尋訪し、女を見る。女、聞いて之を感じ、因つて蔽膝を脫し、母をして密に其席上に置いて、之に臥さしめ、當に已ゆべしといふ。少日果して差ゆ。忽ち席を擧げて蔽膝を見、抱持呑食して死す。葬時、車、華山より度る、女の門に至る比、牛、肯て進まず。女、妝點沐浴して出で、歌うて曰く、

華山畿。君既爲レ儂死。獨活爲レ誰施。歡若見レ憐時。棺木爲レ儂開。

棺、聲に應じて開き、女、遂に棺に入る。家人叩打、これを如何ともするなし。乃ち合葬し、呼んで神女冢といふ」とある。青邱の此詩は、取りも直さず、その女の作つた古詞に擬したのである。

【詩意】ここに、送葬の行列が華山畿に差しかかると、棺を載せて居た牛車が、はたと止まつた切りで動かない。われと郎と、たとひ、一緒に生活したことは無かつたにしても、もろともに死して、同穴の好を全うすることは出來る。棺よ開け、棺よ開け、われは、これより郎と共に、遠く地下黄泉に向つて去るであらう。

【餘論】辭旨剴切、古詞に比して、更に、一層を進めた感はあるが、短篇零章、もとより詞彩の美を望むことは出來ぬ。

長安有狹斜行

長安有狹斜（一）、狹斜僅容騎。
路逢兩俠童、廻鞭（二）問君第。
君第渭橋（三）西、易覓難復迷。
長子侍溫室（四）、次子籍金閨（五）。
少子備宿衞（六）、光耀（七）與兄齊。
三子每來返、雜沓（八）擁輪蹄（九）。
（一〇）大婦彈鵾雞（一一）、中婦舞前溪（一二）。
小婦勸杯酒、能唱白銅鞮（一三）。
丈人（一四）莫遽起、庭樹（一五）未烏栖。

長安に狹斜あり行

長安に狹斜あり、狹斜、わづかに騎を容る。
路に逢ふ兩俠童、鞭を廻して君の第を問ふ。
君の第、渭橋の西、覓め易くして復た迷ひ難し。
長子は溫室に侍し、次子は金閨に籍す。
少子は宿衞に備はりて、光耀兄と齊し。
三子每に來り返り、雜沓、輪蹄を擁す。
大婦は鵾雞を彈じ、中婦は前溪を舞ふ。
小婦は杯酒を勸め、能く唱ふ白銅鞮。
丈人、遽に起つ莫れ、庭樹、未だ烏栖まず。

【字解】【一】狹斜　狹い小路。【二】廻鞭　馬を廻すに同じ。【三】渭橋　前に相逢行に見ゆ。【四】溫室　殿名、三輔黃圖に「溫室殿は武帝建つ、冬、これに處れば溫煖」とある。【五】籍金閨　謝朓の詩に旣通金閨籍とあつて、その注に「金閨は卽ち金門、官者の署、承明金馬著作の庭」とある。今でいへば侍從式部の詰所。【六】宿衞　史記齊悼惠王世家に「哀王三年、その弟、入つて漢宮に宿衞す。太后封じて朱虛侯となす。四年、章の弟興居を封じて東牟侯となし、皆長安中に宿衞す」とある。宮城を警備する

役、今で云へば皇宮警視。【七】光耀　光彩に同じ。【八】雜沓　ごたごた込み合ふ。【九】輪蹄　車馬に同じ。【一〇】大婦　長子の妻、以下皆これに倣ふ。【一一】鵾絃　前に王明君の詩に鵾絃といへると同じ、鵾雞の筋を張つて絃とした琵琶。【一二】前溪　宋書樂志に「前溪歌は、晉の車騎將軍沈玩製するところ」とあり、樂府題解に「舞曲なり」とあり。寰宇記に「前溪は、烏程縣南に在り、東、太湖に入る、これを風渚といふ」とあり、前溪歌に、憂思出レ門倚、逢レ郎前溪渡、莫レ作二流水心一、引レ新都舍レ故とある。【一三】白銅鞮　樂府題解に「都邑三十四曲、白銅鞮歌あり、亦た襄陽白銅鞮といふ」とある。【一四】丈人　長老の尊稱、ここでは前の三子の父親。【一五】庭樹未烏栖　李白の烏栖曲に姑蘇城上烏栖時とある。

【題義】長安有二狹斜一行は、樂府正聲に「相和歌辭、淸商曲」とあり、樂府詩集に「相逢行、一に曰く、相逢狹路間行、亦た曰く「長安有二狹斜一行」とあつて、ともに富貴の家庭の平和なる有樣を寫して居る。その相逢狹路間と題するは、

相逢狹路間。道隘不レ容レ車。不レ知何年少。夾レ轂問二君家一。君家誠易レ知。易レ知復難レ忘。黃金爲二君門一。白玉爲二君堂一。堂上置二樽酒一。作二使邯鄲倡一。中庭生二桂樹一。華燈何煌煌。兄弟兩三人。中子爲二侍郎一。五日一來歸。道上自生レ光。黃金絡二馬頭一。觀者盈二道傍一。入門時左顧。但見雙鴛鴦。鴛鴦七十二。羅列自成レ行。音聲何噰噰。鶴鳴東西廂。大婦織二綺羅一。中婦織二流黃一。小婦無レ所レ爲。挾レ瑟上二高堂一。丈人且安坐。調レ絲方未レ央。

その長安有二狹斜一行と題するは、

長安有二狹斜一。狹斜不レ容レ車。適逢兩少年。挾レ轂問二君家一。君家新市傍。易レ知復難レ忘。大子二千石。中子孝廉郎。小子無二官職一。衣冠仕二洛陽一。三子俱入レ室。室中自生レ光。大婦織二綺紵一。中婦織二流黃一。小婦無レ所レ爲。挾レ瑟上二高堂一。丈夫且徐徐。調レ絃詎未レ央。

この二詩は、極めて相類似し、その辭句に至りても全然同一の句があるので、或は先に相逢狹路間の方が出で、後に之を節略して長安有二狹斜一としたのでは無からうかと思はれる。但し、その紆餘曲折の妙を極めたのは、相逢狹路間であつて、長安有二狹斜一の方は、精彩に乏しき憾がある。靑邱の此作は、矢張、長安有二狹斜一に擬したので、句數までも同じである。なほ樂府題解に「晉の陸機の長安狹斜行に云ふ、伊洛有二歧路一、歧路交二朱輪一と、すなはち世路險狹邪僻、正直の士、手足を措くところなきをいふ。唐の李賀に難忘曲あり、亦た此に出づ」とあつて、後には、この題の原始的意義を離れて、この構想を試みる樣に成つたのである。

【詩意】長安に狹い小路があつて、わづかに車騎を容るるばかり。路に兩個の俠少年に逢つたが、馬を廻して、君の邸は何處だといつて問うた。君の邸は、渭橋の西に當り、まことに分かり易く、決して迷ふ樣なことはなく、その結構からして、すでに素張らしい。それから、君の家の長子は、至尊に溫室殿に侍し、次子は、籍を金馬門に置いて、宮禁に奉仕して居るし、少子は、皇城警衞の任に當り、その光彩、上の二兄と均しく、三人ながら、打ちも揃つて、立派な身分である。その三子が家に歸つて來る其度ごとに、各〻車騎を擁して、狹い小路が雜沓する位、そして、長子の婦は、琵琶を彈じ、

中子の妻は、前溪の曲を舞ひ、末子の妻は、杯酒を勸めつつ、白銅鞮を歌ふことが、極めて上手である。かくの如く、三夫婦、打ち揃つて、高堂の上で宴を催すことであるから、團欒の樂、たとふるに物もない位。三子の父君の喜、推して知るべしである。あはれ、丈人よ、遽に起つことなく、緩ッくりして居られるが善い。庭樹には、烏の歸り栖むなく、まだ日暮には程もあるから、十分に、樂を極めることが出來やう。

【餘論】この首は、全く古詞を踏襲しただけであるが、古意古色、ともに及ばず、そして、どことつて、新しい構想を著けた處もなく、忌憚なくいへば、淺俗凡近を免れぬものである。

雙桐生二空井一

雙桐空井に生ず

(一)交生碧玉樹。(二)竝覆黃金井。
根通二夕潤一深。葉帶二朝光一冷。
應レ有レ感二秋人一。時來鑑二愁影一。

交〻生ず碧玉の樹、竝に覆ふ黃金の井。
根は夕潤に通じて深く、葉は朝光を帶びて冷かなり。
應に有るべし、秋を感ずるの人、時に來つて愁影を鑑す。

【字解】【一】交生　交は交錯、枝を交へる。【二】黃金井　井欄等に黃金の鍍金がしてある。西征記に「太極殿上、金井、金博山轆轤あり。交龍、山を井上に負ふ、金獅子あり、龍の下に在り」と見ゆ。

【題義】雙桐生二空井一は、樂苑に「相和歌辭平調曲」とあつて、もと猛虎行から出たのである。魏の明帝の猛虎行に、雙桐生二空井一、枝葉自相加、通泉漑二其根一、玄雨潤二其柯一とある。これは、無論、篇中の一解であつて、王僧虔の技錄に「荀餘載するところ、雙桐の一篇、今傳はらず」とある通り、その全篇が散佚したから、猛虎行として、旨意の究極するところも判じ兼ねるが、この四句は、全く井上の雙桐を詠じたものである。そこで、この四句の意を取つて之を演じ、桐生二空井一と題して、別に一首としたものがあつて、その古詞は、

季月對二桐井一。新枝雜二舊株一。晚葉藏二栖鳳一。朝花拂二曙烏一。還看稚子照。銀牀繫二轆轤一。

といひ、後人の作は、あまり見えぬが、青邱の此作も、矢張、その意を承けたのである。

【詩意】葉は碧玉と見まがふ梧桐の樹が、兩株枝を交へて列立し、その下なる黃金の井を覆うて居る。もともと井戶に接近して居るから、桐の根は、夕に地下濕潤の氣を受け、桐の葉は、朝に井水に映つる曙光を帶びて、極めて涼しげに見える。しかし、處がら、秋の哀れを感ずる人は、時たま、この桐樹の邊に來り、そして井水に臨んで、愁を含んだ其姿を照らし見ることであらう。

【餘論】根通の二句は、桐が金井に接近したることを道うて、題義を全うし、應レ有レ感二秋人一の二句は、桐と井とを合せ、且つ一步を拓開したのである。

征婦怨

(一)良人不レ願封侯印。
(二)虎符遠發(三)當番陣。
幾夜春閨(四)惡夢多。
竟得將軍(五)軍覆信。
身沒猶存舊戰衣。
東家(六)火伴爲收歸。
妾生不レ識邊庭路。
尋レ骨何由到二(七)武威一。
(八)紙幡剪得招レ魂去。
只向當時送行處。

征婦怨

良人は願はず、封侯の印、
虎符遠く發す當番の陣。
幾夜か春閨、惡夢多し、
竟に得たり將軍軍覆るの信。
身沒して、猶ほ存す舊戰衣、
東家の火伴、爲に收めて歸る。
妾生まれて識らず、邊庭の路、
骨を尋ね、何に由つてか武威に到らむ。
紙幡剪り得て、魂を招いて去る、
只だ向ふ、當時送行の處。

【字解】【一】良人 わが夫を指して云ふ。【二】虎符 後漢書杜詩傳に「舊制、兵を發するに、皆虎符を以てす。符策合會、取つて大信と爲す」とあつて、兵を發する時の割符には虎を畫いて居る。【三】當番 舊唐書職官志に「凡そ散官當番上下」とあり、金史兵志に「西北邊、分番屯戍軍あり」と見ゆ。【四】惡夢 緣起の惡い夢。【五】軍覆信 全軍覆滅したといふ便り。【六】火伴 木蘭詩に「出レ門看二火伴一、火伴始驚惶」とある。火は夥と通ず、なか間。【七】武威 漢書地理志に「武威郡武威縣、故の休居王の地、武帝の太初四年開く」とある。【八】紙幡 紙の旗。紙を剪つて魂を招くといふのが、唐代の風俗で、ここでは取り敢へず、靈前に建てた紙旗の紙を剪つたのであらう。

【題義】征婦怨といふ題は、漢魏六朝の間には無く、樂府遺聲に「怨思曲」とあり、樂府詩集に「新樂府雜題」とある通り、唐になつて、はじめて見えた。その中、孟郊の四首は、五言の短篇であるが、張籍のは七言八句である。

九月匈奴殺二邊將一。漢軍全歿遼水上。萬里無三人收二白骨一。家家城下招レ魂葬。婦人依倚子與レ夫。同居二貧賤一心亦舒。夫死二戰場一子在レ腹。妾身雖レ存如二晝燭一。

青邱の此作は、張籍を學び、いささか句數を增し、且つ新意を出して、その雷同を避けたのである。

【詩意】わが夫は、何も印綬を賜はつて封侯になりたいといふ志望も無かつたが、虎符を以て當番の兵士に徵集せられたから、私に別れて、萬里遠征の途に上つたのである。すると、春の夜の閨の中、幾度か續いて、しきりに惡い夢を見たので、萬一の事が無ければ善いがと、ひそかに案じて居た處が、案の定、將軍深く胡地に入り、不幸にして、戰、利あらず、全軍爲に覆沒をしたといふ悲しい報知を得た。わが夫も、無論、死んで仕舞ひ、あとに殘したのは、著古した戰袍だけで、東家の仲間は、親切にも、これを取り收めて歸つて來た。私は、もとより女の身で、生まれてから、邊庭の路を知らないから、夫の遺骨を尋ねたいと思つた處で、どうして武威の彼方まで行かれやうか。そこで、仕方がないから、靈前に立てた紙旗の紙を剪つて、亡魂を招かむとし、取り敢へず、前年、別を送つた其處へ出かけて往つた。

【餘論】幾夜春閨惡夢多の四句は、一氣に筆を下し、まことに悲愴の極であるし、紙幡剪得招レ魂去の二句は、悽惋の至、餘哀長しへに盡きざる底の趣がある。

襄陽樂

門前黃(一)柳鴉雛宿。
羅(二)幌低垂婢擎レ燭。
懸(三)璫結珮略妝成。
日暮相邀漢(四)江曲。
水靜花寒月小(五)明。
舟中樓上鬬歌聲。
腸斷年年大堤路。
南商行(六)過北(七)商行。

襄陽樂

門前の黃柳、鴉雛宿し、
羅幌低く垂れて、婢は燭を擎ぐ。
懸璫結珮、略ぼ妝成り、
日暮相邀ふ、漢江の曲。
水は靜に、花は寒くして、月小や明かに、
舟中樓上、鬬歌の聲。
腸は斷つ、年年大堤の路、
南商は行過し、北商は行く。

【字解】【一】黃柳　春の初、黃に芽ぐんだ柳。【二】羅幌　うす絹の幕。【三】懸璫　璫は耳飾り、廣韻に「璫は耳珠」とあり、古詩に腰若レ流ニ紈素一、耳著ニ明月璫一」とある。【四】漢江　卽ち漢水。【五】小明　すこしく明かなること。【六】行過　過ぎ去る。【七】北商行　行は來るの義。

【題義】襄陽樂は、樂府正聲に「淸商西曲歌」とあり、樂錄に「襄陽樂は、宋の隨王誕の作るところなり。誕、はじめ襄陽郡となり、元嘉二十六年、仍つて、雍州刺史となり、夜、諸女の歌謠を聞き、因つて、これを作る。歌とする所以は、和中、襄陽來夜樂の語あればなり。舊舞十六人、梁は八人、又大隄曲あり。亦た此に出づ。簡文帝の揚州十曲、大隄・南湖・北渚等の曲あり。通典に曰く、裴子野の宋略に稱す。晉安侯劉道彥、襄陽太守となつて善政あり、百姓業を樂み、人戶豐贍、蠻夷順服、悉く沔に緣つて居る。これに由つて、これを歌うて、襄陽樂と號すと。蓋し此に非ざるなり」とある。その隨王誕の作つた古詞は、凡そ九首、試みにその二三を擧げると、

朝發ニ襄陽城一。暮至ニ大隄一宿。大隄諸女兒。花豔驚ニ郎目一。

江陵三千里。西塞陌中央。但問相隨否。何計道里長。

人言ニ襄陽樂一。樂作非ニ儂處一。乘レ星冒ニ風波一。還ニ儂揚州一去。

襄陽曲といふのも、つまり同じもので、唐の李端の作は、五七言雜體である。

襄陽隄路長。草碧楊柳黃。誰家女兒臨ニ夜妝一。紅羅帳裏有ニ燈光一。雀釵翠羽動ニ明璫一。欲レ出不レ出脂粉香。同居女伴正ニ衣裳一。中庭寒月白如レ霜。賈生十八稱ニ才子一。空得門前一斷腸。

青邱の此作は、七言八句で、形式は前人を踏襲せぬが、その內容は、矢張、襄陽の繁華、殊に游衍の樂多きことを述べたのである。

【詩意】黃色に芽ぐんだ門前の柳には、鴉の雛が宿つて、今しも黃昏の時、うす絹の紗帳は、低く垂

れ、婢は燈火を指し上げて持つて來た。この時、少婦は耳に明璫を懸け、腰に環珮を結び、晩妝略ば成れるに因つて、漢江の邊に出かけて、游冶郎を迎へむとして居る。眺めやれば、水は淀んで靜に流れ、花は夜色を帶びて冷かに、そして、月はほのかに明るい。しくものもなき朧夜の景色にあくがれて、舟中でも、樓上でも、闘歌の聲がかけ合ふ樣に聞こえる。年年、この頃、大隄の路は、人の腸を斷つばかり、倡情冶思、自ら勝へず、そこで、南客が立ち去れば、北商が入れ替つて來て、すこしも客の絶え間が無い位賑はしい。

【餘論】前半四句は、襄陽の少女を寫し、後半四句は、大隄の風物を描き出したが、芳芬悱惻の趣に於ては、なほ稍や足らざるの憾がある。

飮酒樂

(一)七絃五絃角(二)奏。
(三)一觴兩觴羽(四)行。
且樂(五)眼中人聚。
莫憂頭上天(六)傾。

飮酒樂

七絃五絃角奏し、
一觴兩觴羽行す。
且つ眼中人の聚まるを樂む、
頭上天の傾くを憂ふる莫れ。

【字解】【一】七絃五絃　琴の種類。琴はもと十三絃であるが、かういふ數の絃を張つたのもある。【二】角奏　淸角の曲を奏する。韓非子に「師子、琴を援つて之を鼓して曰く、淸角に如かずと。一たび奏すれば、雲、西北方より來り、再び奏すれば大風雨」とあり、博物志に「淸角は黃帝の琴」とある。【三】一觴兩觴　觴は杯。【四】羽行　羽觴といふ語から點化したので、鳥羽の如く迅に行る。演繁露に「諸家、羽觴を釋すること、同じからず、唯だ李耆、漢書音義を引いて、生爵の形を作すといふもの、是れなり。孟康、亦た曰く、羽觴は生爵形を作し、頭尾羽翼あり」と見ゆ。【五】眼中人　杜甫の詩に眼中之人吾老矣とある。わが眼中に在つて、一段の敬意を拂つて居る人。【六】天傾　列子に「杞國の人、天の墜つれば身寄るところなきを憂へ、寢食を廢す」とある、取り越し苦勞、いらぬ心配をする。

【題義】飮酒樂は、樂苑に「雜曲歌辭、淸商曲」とあつて、題名の通り、飮酒の樂みを敍したのである。

【詩意】七絃五絃の琴を以て、淸角を奏せしめ、一杯二杯、杯は鳥の羽の如く、席上を巡つて居る。唯だ眼中に在る然るべき人人と會飮すれば、まことに愉快の極、頭上の天が傾き墜ちはしまいかなどいふ、取り越苦勞はせぬが善い。

【餘論】簡警切當ではあるが、いささか物足らぬ感じがするので、今少し厥辭を放つて、作者平生の伎倆を發揮して吳れたらと、折角の好題目に對して、いささか遺憾である。

鳳臺曲

(一)飛裙織霧秋痕薄。

鳳臺の曲

飛裙、霧を織つて秋痕薄く、

【字解】【一】飛裙　風に吹かれ

る貌。【二】星漢　銀河、卽ち天の河。【三】漠漠　ほの暗き貌。【四】瓊臺　立派な高臺。【五】嬴女　秦の穆公の女弄玉をいふ、詩の秦風の注に「秦は、初め、伯益禹を佐け、水を治めて功あり。姓を嬴氏と賜ふ」とある。【六】鵝管參差　李賀の詩に、「王氏吹笙鵝管長」とある。鵝管とは、鵝の羽莖ほどの管、簫の各管をいふ。參差は、長短齊しからざるの貌。金檀の注には、楚辭の「望夫君兮未來、吹參差兮誰思」を引き、參差は洞簫としてあるが、洞簫は、この場合に全然關係がない。

(二)星漢低宮花(三)漠漠。　星漢、宮に低れて花漠漠。
(四)瓊臺夜寒閉(五)嬴女。　瓊臺夜寒くして嬴女を閉し、
(六)鵝管參差隔煙語。　鵝管參差、煙を隔てて語る。
(七)瑤京(八)舊侶招遠游。　瑤京の舊侶、招いて遠游、
人間帳冷鴛鴦愁。　人間帳冷かにして鴛鴦愁ふ。
海影無塵月如夢。　海影塵なく、月、夢の如し、
仙骨(九)不欺鸞背重。　仙骨、鸞背を欺いて重からず。
衰蘭泣露空(一〇)秦苑。　衰蘭露に泣いて秦苑空しく、
(一一)叢玉聲微彩霞遠。　叢玉聲は微にして、彩霞遠し。

【七】瑤京　天上の都。【八】舊侶　むかしの仲間。【九】不欺鸞背重　鸞背を壓倒して重からしめることはない。體の極めて輕きをいふ。【一〇】秦苑　秦宮の苑囿。【一一】叢玉　簫をいふ、陳暘の樂書に「簫の器たる、竹を編んで成るものなり、故に叢玉と稱す」とある。

【題意】鳳臺曲は、上雲樂の一で、古今樂錄に、「上雲樂七曲、梁の武帝製して、以て西曲に代ふ。一に曰く鳳臺曲、二に曰く桐柏曲、三に曰く方丈曲、四に曰く方諸曲、五に曰く玉龜曲、六は曰く金丹曲、七に曰く金陵曲」とあつて、樂府詩集に據れば、清商曲に屬して居る。鳳臺曲の古詞は、

鳳臺上。兩悠悠。雲之際。神光朝天極。華蓋過延州。羽衣昱耀。春吹去復留。

といふので、鳳臺を點出してあるが、純ら吹笙の事を云つたのである。しかし、王無競・李白の作は、鳳臺に關係ある蕭史・弄玉の事を主として詠出して居る。列仙傳に「蕭史は、秦の穆公の時の人、善く簫を吹いて、能く孔雀白鶴を致す。穆公の女弄玉、これを好す。公、妻はす。乃ち弄玉に敎へて、鳳臺を作らしめ、一旦、夫婦同じく鳳に隨つて去る」とあり、一統志に「鳳女臺の址は、寶雞縣に在り」と見えて居る。靑邱の此作も、矢張、蕭史弄玉登仙の事を敍したのである。なほ、鳳凰曲・蕭史曲なども、鳳臺曲と類似したものである。

【詩意】風に吹かるる衣の裾は、さながら霧を織つた樣で、秋を帶びて稍や涼しく、銀河は天を橫ぎつて、斜に宮闕の上に垂れかかり、花は漠漠として、ほの暗く、物とはなしに凄寥の趣がある。この時しも、嬴家の女たる弄玉は、瓊臺の中に獨坐して、長き夜を明かし兼ねて居ると、參差たる鵝管を吹きすさぶ聲が、煙を隔てて聞こえ、ここに、初めて蕭史と相知るやうになつた。二人とも、もとは上界の神仙、何かの事の爲に、此世に謫せられたものと見え、瑤宮なる仙人仲間が、もう還つて來いといつて、頻りに招いた爲に、再び遠遊して、やがて天宮に向ふことになつたが、昨日、人間の契を

思へば、故帳冷にして兩個の鴛鴦、まことに愁に堪へぬばかり。眺めやれば、萬里の滄溟、晴れ渡つて塵だになく、いざよふ月は、ほのかにして夢の如くである。この時、二人は、鸞鳳の背に乘つて、天空を橫絶したが、體軀すでに輕くして、まことに、相應しげに見える。下界に於ては、秦苑の中、凋みかかつた蘭花が、露を帶びて、さながら愁ふるが如く、やがて、簫聲次第に微になつて、二人の影は、遠く彩霞の中に沒して仕舞つた。

【餘論】起四句は、二人歡會の事由、瑤京の二句は、再び天上に歸る樣に成つたことを敍し、海影の四句は、卽ち登仙の有樣を描き出したので、縹緲孤詣、筆筆仙氣を帶びて居る。

美女篇

美女婉清揚。(一)白皙(二)纖且長。(三)
艷色照上國。(四)不殊古姬姜。(五)
巧笑發令姿。(六)芳詞(七)吐柔腸。
(八)耀首有何物。黃金作釵梁。(九)
(一〇)珥懸礫(一一)砢珠。褘(一二)帶藿(一三)葯香。
新服製羅紈。光輝麗靑(一四)陽。
上袂繡(一五)蛺蝶。下(一六)裙織(一七)鴛鴦。
(一八)姍姍步春風。乍見驚欲翔。
雖有楚(一九)大夫。善賦焉能詳。
豈徒騁(二〇)妍媚。況乃持貞(二一)良。
家居闢高門。宛在城中央。
過者共傾慕。日(二二)晏停上(二三)襄。
借問誰氏子。無非金(二四)與張。
(二五)蹇修豈不勤。通(二六)辭重珪(二七)璋。
(二八)中懷非所託。雁(二九)幣徒相將。
永宵歎遲(三〇)回。起倚東西廂。
君子苟未(三一)得。年(三二)徂諒何傷。

美女篇

美女、婉として淸揚、白皙、纖にして且つ長し。
艷色、上國を照らし、古しへの姬姜に殊ならず。
巧笑、令姿を發し、芳詞、柔腸を吐く。
首を耀かす、何物かある、黃金、釵梁と作す。
珥には懸く礫砢の珠、褘には帶ぶ藿葯の香。
新服、羅紈を製し、光輝、靑陽よりも麗なり。
上袂に蛺蝶を繡し、下裙に鴛鴦を織る。
姍姍として春風に步し、乍ち見れば驚いて翔らむと欲す。
楚の大夫ありと雖も、善賦、焉んぞ能く詳にせむ。
豈に徒だ妍媚を騁するのみならむ、況んや乃ち貞良を持するをや。
家居、高門を闢き、宛として城の中央に在り。
過ぐるものは、共に傾慕、日晏くして上襄を停む。
借問す、誰氏の子、金と張とに非ざるはなし。
蹇修、豈に勤めざらむや、通辭、珪璋よりも重し。
中懷託するところに非ざれば、雁幣、徒に相將ゐるのみ。
永宵、遲回を歎じ、起つて倚る東西の廂。
君子、苟くも未だ得ず、年徂いて、諒に何ぞ傷まむ。

【字解】【一】清揚 容貌美にして氣揚がる貌。【二】白皙 色の白きこと。【三】纖且長 肥えずして丈長きこと。【四】上國

首都附近一帶の地を云ふ。【五】姫姜　姫は周の姓、姜は齊の姓、大國の公主。【六】令妻　令は淑に同じ、しとやかに上品なる風貌。【七】芳詞　かんばしき言葉。【八】耀首　頭を耀かす。【九】釵梁　簪の軸。【一〇】珥　耳飾。【一一】礫砢珠　南越志に「珠に九品あり、大を礫砢珠となす」とあり。【一二】褘　帶に同じ。【一三】藿蒳　香草の名、法苑珠林に「四月八日、佛を浴す、法、當に三種香を取るべし、一に都梁、二に藿香、三に艾蒳香」とある。【一四】靑陽　春をいふ、春は陽にして東に當り、その色靑なるが故に云ふ。【一五】繍　ぬひとりする、刺繍。【一六】下帬　帬は裳、もすそ。【一七】織鴛鴦　西京雜記に「趙飛燕、皇后となる、その女弟、鴛鴦襦・鴛鴦褥・鴛鴦被を上る」とあつて、いづれも、鴛鴦を織り出したものと見える。【一八】嫺嫺　閑雅の貌。【一九】上襄　詩經に兩服上襄とあつて、馬車を引く馬。【二〇】楚大夫　宋玉、神女賦を作る。【二一】驕　驕する、恣にする。【二二】貞良　貞淑溫良の德。【二三】日晏　日が暮れる。【二四】金與張　漢書蓋寬饒傳に「寬饒、上に許史の屬なく、下に金張の託なし」とあつて、その注に「許伯は、宣帝の皇后の父、史高は宣帝の外家なり、金は金日磾なり、張は張安世なり」とある。【二五】蹇修　楚辭に、「解二佩纕一以結レ言兮、吾令二蹇修以爲一レ理」とある、蹇修は媒妁。【二六】通辭　媒を爲すに當つて辭理を通ずること。【二七】珪璋　ともに美玉。【二八】中懷　中心に同じ。【二九】雁幣　結婚の時の幣物は、雁を第一とするが故に云ふ、禮記の昏義に「壻は雁を執り、入つて揖讓して堂に升り、再拜して雁を奠す」とある。【三〇】遲回　踟躕する。【三一】未得　未だ然るべき人主に遭はざること。【三二】年徂　歳月の過ぎ去ること。

【題義】美女篇は、樂府遺聲に「佳麗曲」とあり、樂府詩集に「雜曲歌辭、齊瑟行」とある。又、歌錄に「名都・美女・白馬、竝に齊瑟行なり、曹植の名都篇に曰く、名都多二妖女一、美女篇に曰く、美女妖且閑、白馬篇に曰く、白馬飾二金羈一、皆首句を以て篇に名づく、猶ほ艶歌羅敷行に日出二東南隅一あり、豫章篇に鴛鴦篇あるがごときなり」とある。すると、もとは齊瑟行であつたが、起首に名都の字あるに因つて、名都篇と名づけ、美女の字あるに因つて美女篇と名づけ、やがて引き離して各〻一の樂府題となつたのである。なほ、曹植美女篇の注に、美女は以て君子に喩ふ。言ふは、君子すでに美行あり、願はくは明君を得て之に事へむ、もし、其人を得ざれば、徵求せらると雖も、終に屈せざるなり」とあつて、靑邱の此作も、無論、その意を承けたのである。

【詩意】ここに、一個の美女があつて、婉然として、姿容美に、丰彩太だ揚がり、色は白く、そして、體は、あまり肥えず、丈高くして、すらりとして居る。されば、その艶色は、上國に照り輝き、むかしの大名の御姫樣といつても善い位。巧に笑へば、淑姿愈よ顯はれ、應對辭令が上手で、その柔腸を吐くかと思はれる。頭上を輝かすは、何物かといへば、黃金を軸にした美事な釵を差して居るし、耳飾りとしては、礫砢の珠を懸け、帶には藿蒳などいふ香草を焚きこめて居る。新裁の衣服は、羅紈を以て製し、その光輝は、春よりも麗しく、上なる袂には蝶を刺繍し、下なる裳には鴛鴦が織り出してある。その姍姍として、徐に歩を春風の中に移す有樣を瞥見すると、誰でも、あッと驚いて飛び出すばかり。たとひ、宋玉が如何に善く賦を作つた處で、どうして、この美女を細かく寫し出すことが出來やう。加之、この美女は、獨り、容貌服飾の妍麗嬌媚を恣にするばかりでなく、中には、貞淑溫良の德を備へて居て、德容兩つながら之を兼ねて居る。その住宅は、立派な高門を開いて、城内の中央に在る處から、その前を過ぐるものは、ともに心を傾けて之を慕ひ、日暮になつて來客が少い時

など、その車馬を停めて、じツと見入つて居る位。この美女は、本來どこの家の娘さんかといへば、金張に比すべき名族であつて、その門地は、もとより卑賤ではない。されば、媒妁の役を務めるものは、辭理を通じて、珪璋よりも貴い樣に言ひ觸らして、必ず高貴の人に配する樣にしたいと、精精骨を折つて居るが、美女の身になると、苟くも、おのが中心を託するに足る樣な人でなければ、雁の贄も役に立たず、その儘、お流れとなつて仕舞ふのである。かくの如く、德容門地、何一つとして缺くる處もないのに、容易に然るべき配偶者を得ぬ處から、秋の夜長に、その不運を歎き侘びて遲回し、起つて、東西廂に倚り、心も落ち付かず、その身を持て餘まして居る樣な次第。君子も、矢張、その通りで、苟くも其心に得て、これならと思ふ樣な明君でなければ、決して、出でて仕へず、たとひ、歲月しきりに移るとも、決して自ら悲傷せずに居る。

【餘論】起首六句は美女の姿容態度、矯首の八句は服飾衣裳、婀娜の六句は其才德、家居の六句は其地望、かなり細かに列敍してある。褰修の六句は、未だ其耦を得ざるをいひ、結二句は、翻つて、君子の身上に至り、全篇諷諭の旨も、ここに至つて、はじめて明白である。

將軍行

將軍結（一）髪從鞍馬。　將軍結髪して、鞍馬に從ひ、

【字解】結髪　髪を結び上げる。卽ち元服する、史記李將軍傳に「臣

新領（二）前軍號橫（三）野。　新に前軍を領して、橫野と號す。
面（四）謾不數屠（五）狗兒。　面謾、數へず屠狗の兒、
負（六）勇曾擒射（七）鵰者。　勇を負うて、かつて擒にす射鵰の者。
狼（八）星掃天芒（九）角斜。　狼星、天を掃うて、芒角斜なり、
大旗獵（一〇）獵吹風沙。　大旗、獵獵として、風沙を吹く。
黃（一一）金傾盡養部（一二）曲。　黃金、傾け盡して、部曲を養ひ、
匈（一三）奴未滅何爲家。　匈奴、未だ滅びず、何ぞ家を爲さむ。
前日賢（一四）王五千騎。　前日、賢王の五千騎、
直入朝（一五）那殺邊吏。　直に朝那に入つて邊吏を殺す。
天子初聞怒赫然。　天子、初めて聞いて怒る赫然、
出師誓奪河（一六）南地。　師を出して誓つて奪はむとす河南の地。
五（一七）營材（一八）官元自多。　五營の材官、元と自ら多し、
詔書未須徵（一九）七科。　詔書、未だ七科を徵するを須ひず。

結髪して、匈奴と戰ふ。今乃ち一たび單于に當るを得たり」とある。【二】領前軍　先陣を部下とする。【三】橫野　將軍の號、後漢書王常傳に「卽ち常を拜して橫野將軍となし、位次、諸將と席を絕つ」とある。【四】面謾　面前に於て謾罵する。【五】屠狗兒　史記淮陰侯傳に「信、かつて樊將軍噲を過ぐ、門を出でて笑つて曰く、生きては乃ち噲等と伍を爲す」とあり、又樊噲傳に「噲、屠狗を以て事と爲す」とあり。【六】負勇　勇氣を自負する。【七】射鵰者　史記李將軍傳に「匈奴三人、射て中貴人を傷つく。廣曰く、是れ必ず鵰を射るものならむ、と。乃ち三人に馳す。三人馬を亡うて步行す。行くこと數十里、廣、身自ら二人を射殺し、生きながら一人を得たり、果し

已御(二〇)明堂推(二一)畫轂。　すでに明堂に御して、畫轂を推し、

還開(二二)武庫授雕(二三)戈。　還た武庫を開いて雕戈を授く。

(二四)灞陵原頭軍晩發。　灞陵原頭、軍、晩に發し、

北出雲(二五)中與高闕。　北に出づ、雲中と高闕と。

(二六)單于一夜六騾逃。　單于一夜、六騾逃れ、

(二七)大漠無人唯漢月。　大漠人なく、唯だ漢月。

塞下從此烽火稀。　塞下、これより烽火稀なり、

朝臣共賀震(二八)皇威。　朝臣、共に賀す皇威を震ふを。

人生寧似功成樂。　人生寧ろ功成るの樂に似むや、

白日長安鼓(二九)吹歸。　白日長安、鼓吹して歸る。

て鵰を射るものなり」とある。【八】狼星　即ち天狼、史記天官書に「東に大星あり、狼といふ。狼角、色を變ずれば盜賊多し」とある。【九】芒角　その光芒をいふ。【一〇】猨猱　猨猱と蹲く、鮑照の詩に猨猱曉風遊とある。【一一】黄金傾盡　漢書竇嬰傳に「孝景三年、吳楚反す。上、嬰を拜して、大將軍となし、金千斤を賜ふ。賜ふところの金、これを廊廡の下に陳し、軍吏過ぐるや、輒ち財取して用を爲さしむ。金、家に入るものなし」とある。【一二】部曲　部下の組分け、史記李將軍傳に「廣、行くに部曲なし」とあつて、その注に「將軍、軍を領す、皆部曲あり。大將軍は督五部、部ごとに校尉一人、部下に曲あり、曲に軍候一人あり」と見ゆ。【一三】匈奴未滅何爲家　史記霍去病傳に「天子、爲に第を治す、驃騎をして之を視せしむ、對へて曰く、匈奴、未だ滅びず、家を以て爲すなきなり、と。上、益す重んじて之を愛す」とある。【一四】賢王　匈奴單于の下に居て左右大臣の如きもの、史記匈奴傳に「冒頓に至つて、匈奴最も強大、左右賢王を置く」とある。【一五】朝那　地名、一統志に「今の平涼府平涼縣は、漢の安定郡朝那縣、府城の東に朝那城あり」と見ゆ。【一六】河南地　支那内地の河南ではなく、塞外なる黄河以南の地、漢書に「秦の始皇、六國を滅し、蒙恬をして胡を擊たしめ、悉く河南の地を收め、河に因つて塞を爲し、謫戍を徙して以て之に充つ」とある。【一七】五督　上の部曲の條に見ゆ。大將軍に隸屬する五部の督兵。【一八】材官　漢書に「材官蹶張」とあつて、その注に「武技の臣」とある。【一九】徵七科　人民中、七種類の者を兵士として徵集する、漢書武帝本紀に「天漢四年、春、天下の七科の讁を發す」とあつて、その注に「吏の罪ある一、亡命二、贅壻三、賈人四、故と市籍ある五、父母、市籍ある六、大父母、市籍ある七」とある。【二〇】明堂　天子の諸侯を會する處。【二一】推轂　天子、自ら將軍の車轂を推して之を出征せしむること、漢書馮唐傳に「臣聞く、上古、王者の將を遣すや、跪いて轂を推して曰く、閫より以内は、寡人、これを制せむ、閫より以外は將軍之を制せよ」とあり、隋書禮儀志に「諸侯及び夫人、命夫、命婦の幣、畫轂雲牙、軾、虞文を以てす」とある。畫轂の轂は車軸の先端、畫は之を雕飾したること。【二二】開武庫　武器庫を開く、晉書馬隆傳に「武帝の時、涼州刺史楊欣、羌戎の和を失ふ。帝、馬隆を以て武威太守となし、勇士三千人を募り、隆が自ら武庫に至りて仗を選び、三年の軍資を給するを聽るす」とある。【二三】雕戈　飾のある矛、國語に「晉の惠公、韓簡をして敵を挑ましむ。穆公、雕戈を衡へ、出でて使者を見て曰く、寡人、將に身もて見えむとす」とある。【二四】灞陵　金檀注には、一統志に「灞水は、西安府城の東に在り」とあるを引いてあるが、切實でない。灞陵は、勿論、灞水の近傍であるが、漢の文帝の陵の名。【二五】雲中與高闕　史記衞青傳に「車騎將軍青をして雲中に出でしめ、以て、西、高闕に至り、遂に河南の地を略す」とあり、後漢書明帝紀の注に「高闕は山名、因つて以て塞に名づく、朔方の北に在り」とあり、班固の燕然山銘に「凌高闕、下雞鹿」とある。【二六】單于一夜六騾逃　單于が夜六頭の騾馬を驅つて逃げ出したといふこと。史記霍去病傳に「元狩四年、大將軍、武剛車をもて自ら環つて營を爲さしめ、而して、五千騎を縱つて、往いて匈奴に當らしむ。匈奴、亦た萬騎ばかりを縱つ、會ま日、且さに暮れむとし、大風起り、砂礫面を擊ち、兩軍相見えず、單于遂に六贏に乘じ、壯騎數百ばかり、直に漢の圍を衝いて西北に馳せ去る」とある。【二七】大漠　今の戈壁沙漠。【二八】震皇威　皇威遠く胡地に震ふ。【二九】鼓吹　鼓を擊ち笛を吹く、軍樂を爲すこと、後漢書班超傳に「八年、超を拜して將兵長史となし、鼓吹幢麾を假す」とあり、岑參の凱歌に「鳴笳擂鼓擁軍行」とある。

【題義】將軍行は、樂府遺聲に「征戍曲」とあり、樂府詩集に「新樂府雜題」とあつて、唐代に初めて出來た樂府題。題名の示す通り、將軍が征戍して功勳を建てる次第を敍したので、作者の本意は、外征の際、かくありたしといふ理想を現はしたのであらう。

【詩意】將軍は、その昔、はじめて元服した少年の頃より、鞍馬に從つて外征を事として居て、頃ろは、先鋒の兵士を預つて、横野將軍の號を賜はつた。將軍の人となり、もとより豪爽、面前に於て謾罵し、屠狗の樣な出身の賤しいものは物の數ともせず、又勇氣を自負して、匈奴の鵰を射るものを擒にしたこともある。今しも、天狼の星、斜に長い尾を引いて、その光芒、大空を掃ふばかり、變亂の兆たることは、言ふまでもなく、大旗は颯颯として、風沙が之に吹きつける。そこで、將軍は、黃金を散じ盡して、部曲の士を養ひ、匈奴が滅亡せぬ内は、自分の家どころでは無いといふ決心である。聞けば、先頃、匈奴の左右賢王が五千騎を率ゐて、朝那城に攻め入つて、わが邊境の吏を殺害したとのことで、天子、はじめて之を聞こし召されると、赫然として怒を發し、直に出兵して、黃河以南の胡地を奪ひ取らむと心に誓はれた。目下、將軍部下の兵營に於ては、武技に達したものどもが、もとより多く、特に詔書を發して、七科の新兵を徵發する必要もない。やがて、天子は、明堂に出御の上、將軍の乘れる車の轂を推して、閫より以外の事は、一切任かせると仰せられ、又武器庫を開いて、見事な雕戈をさへ賜はつた。將軍の本陣は、灞陵附近の宿舍より、最後に出發し、路を分つて、北の方、雲中高闕の兩處より、胡地に擊つて出ると、匈奴の軍、大に敗れ、さしもの單于も、夜、六頭の騾馬を驅つて、あわただしく逃げ出すといふ始末。渺渺なる沙漠の上には、人の隻影だになく、唯だ漢家の月が、皎皎として照らすばかり。これより、塞下には、戰爭全く絕えて、烽火を打ち揚ぐることもなく、滿朝の臣僚は、皇威遠く絕域に震へることを慶賀した。この世に於て、何が樂しいといつて、思ひ通りに功成るといふ其樂に似るものなく、今しも、將軍は、白日の中、鼓吹の聲に導かれて、しづしづと長安に凱旋された。

【餘論】この詩は、將軍の出身より始めて塞外の多難、それから、將軍が詔を受けて出征するに及び、何の造作もなく、胡兵を追ひ捲くつて、やがて凱旋するといふことを、一應無難に言ひおほせてあるが、これを一概して、極めて平板で、波瀾曲折に乏しく、絕えて中心絕頂なく、その全體の結構は、斷じて其妙を極めて居らぬ、但し狼星掃レ天芒角斜の一解、單于一夜、人生寧似の二句などは、さすがに巧妙で、作者の手腕の程も窺はれる。

長安道

長安の道

(一)長樂(二)鐘聲動(三)平津樹色開。
長樂、鐘聲動き、平津、樹色開く。

(四)中郎長戟衞(五)丞相小車來。
中郎、長戟衞り、丞相、小車來る。

新成賜将第(六)。更築候神臺(七)。　新に成る將に賜ふの第、更に築く候神の臺。
誰念公車客(八)。空懷作賦才。　誰か念はむ、公車の客、空しく賦を作るの才を懷かむとは。

【字解】【一】長樂　宮名、三輔黃圖に「長樂宮は、本と秦の興樂宮なり。高帝、はじめ櫟陽に居り、七年、長樂宮成るや、徙つて長安城に居る」とある。【二】鐘聲動　朝早く鐘が鳴り出す、岑參の詩に金闕曉鐘開萬戶」とある。【三】平津　漢書公孫弘傳に「元朔中、丞相弘を封じて平津侯となす」とあつて、その注に「平津は、長安の鄕名」とある。【四】中郎長戟衞　文獻通考に「漢の武帝、はじめて期門を置く、元帝、更めて虎賁郎と名づけ、中郎將を置いて之を領せしめ、虎賁宿衞を主る」とある。【五】丞相小車來　漢書車千秋傳に、「車千秋、本姓は田氏、年老いて朝見するや、小車に乘じて殿に入るを得、因つて車丞相と號す」とある。【六】賜將第　上の將軍行の中にも注して置いたが、漢の武帝が驃騎將軍霍去病の爲に新邸を造られしこと、漢書の本傳に見ゆ。【七】候神臺　天上の神人の下降を迎へる爲に、特に築いた高臺。史記武帝紀に「公孫卿曰く、仙人、樓居を好むと。ここに于て、上、長安には蜚廉桂觀を作り、甘泉には益延壽觀を作らしめ、卿をして、具を設けて神人を候せしめ、乃ち通天臺を作り、祠具を其下に置く」とあり、三輔黃圖に「武帝、神明臺を造る、仙人を祭る處、上に銅人あり、掌を舒べて、銅盤玉杯を捧げ、以て雲表の露を承け、玉屑に和して以て之を服し、以て仙道を求む」とある。【八】公車客　後漢書丁鴻傳に「詔して、鴻を徵して至らしめ、御衣及び綬を賜うて、公車に稟食せしむ」とあつて、その注に「公車は署名、公車の在るところ、因つて以て名づく。諸の待詔の者、皆居て以て命を待つ、故に食を給せしむ」とある。又、王維の詩に名儒待詔滿公車」とある。

【題義】長安道は、樂府正聲に「漢の鼓角橫吹曲」とある。帝都繁盛の狀を詠出するのが趣旨であるが、この作は、更に進んで、皇城の壯麗に就いて構想したのである。

【詩意】長樂宮中に於ては、曉早く鐘聲が鳴り響き、名だたる侯家のある平津の地に於ては、樹色が、はツきりと見える。虎賁中郎の面面は、長戟を執つて、皇城に宿衞し、年老いたる丞相は、特別の禮遇を受け、小車に乘つて入朝する。それから、天子が驃騎將軍に賜ふ爲に建てられた新邸は、やツと竣工し、更に神人を候する高臺を築かれた。太平の今日、土木の盛、かくの如く、長安の都も、一きは美美しくなつた。ここに、公車に稟食し、やがて采用を待つて居る者どもの中には、賦を作るべき麗才を持つて居るものがあるが、誰も、それと氣の付かぬは、どうしたことか。區區として、奢侈の粉飾を爲すよりも、先づかういふ才俊を、それぞれ登庸することが、今日の急務ではあるまいか。

【餘論】詩の形式は、純然たる五律で、上の六句が長安の盛を極力描き出したから、結二句は、聊か諷諭の意を以て之を行り、自然に、抑揚の妙がある。

洛陽陌

洛陽の陌

(一)九陌看春光。(二)紅塵起相接。　九陌、春光を看る、紅塵、起つて相接す。
(三)白玉車中郞。(四)綠珠樓上妾。　白玉車中の郞、綠珠樓上の妾。
柳迷臨水影。花映(五)當壚頰。　柳は迷ふ水に臨むの影、花は映ず壚に當るの頰。

日暮過銅駝（六）。相逢盡豪俠（七）。　日暮、銅駝を過ぐ、相逢ふ盡く豪俠。

【字解】【一】九陌　陌は大道、三輔黃圖に「長安は八街九陌」とあるから、多分洛陽も同じだらうといふこと、尤も九は大數、九陌は多くの大道と見る方が善いかも知れぬ。【二】紅塵　車馬の塵、劉禹錫の詩に紫陌紅塵とあると同じく、厭ふべき意味ではない。【三】白玉　晉書衞玠傳に「少時、羊車に乘りて洛陽の市に乘ず、見るもの以て玉人と爲す」とある。【四】綠珠　前に將進酒の條に見ゆ、石崇の愛妾の名。【五】當壚　前の當壚曲の條に見ゆ、當壚少女を略して云つたのである。【六】銅駝　洛陽街衢の名、洛陽記に「洛陽に銅駝街あり、漢、銅駝三枚を鑄り、宮西の四會道に於て相對せしむ。俗諺に曰く、金馬門外集ニ衆賢一、銅駝陌上集ニ少年一」とある。【七】豪俠　豪傑と游俠の士。

【題義】洛陽陌、陌、一に道に作る、樂府遺聲に「都邑曲」とあり、樂府正聲に「漢の鼓角橫吹曲」とある。前の長安道が長安の光景を逃ぶるに對し、これは、主として、洛陽市中の狀況を敍したのである。

【詩意】洛陽の重なる大通りには、春光、すでに遍ねく、車馬の塵は地を捲いて、ほんのりと赤く、町と町と相接して居る。車中に居る若殿は、その面、白玉の如く、樓上に倚る何家の愛妾は、古しへの綠珠かと疑ふばかり、いづれも、姿容の美を矜つて居る。柳の影は、水に浮んで、いづれが、それと見まがふばかり、花は當壚の少女の紅頰に映じて、一しほ風情ありげに見える。日暮に近く、銅駝街上を過ぐれば、相逢ふもの、豪俠の士に非ざるはなく、まことに、外では一寸見られぬ有樣である。

【餘論】前の長安道が純然たる五律であるに對して、これは仄韻八句で、聲律も些か諧和を缺く處があるし、中間四句の如きも、對仗精當ならず、兎に角、五古の一體である。

悲歌

征途（一）險巇（二）。人乏馬飢。　征途險巇、人乏れ、馬飢う。

富（三）老不如貧少（四）。　富老は貧少に如かず、

美（五）游不如惡歸（六）。　美游は惡歸に如かず。

浮雲隨風。零（七）亂四野（八）。　浮雲風に隨ひ、四野に零亂す、

仰天悲歌。泣數行下。　天を仰いで悲歌すれば、泣數行下る。

【字解】【一】征途　旅の路。【二】險巇　險しくかどかどしきこと。【三】富老　富貴にして年老いたること。【四】貧少　貧賤にして年なほ若きこと。【五】美游　旅の支度に不足なくして遊歷する。【六】惡歸　失敗して歸鄕する。【七】零亂　地に垂れて亂れる。【八】四野　野原一面。

【題義】悲歌は、樂苑に「雜曲歌辭」とあり、歌錄に「魏の明帝造る」とあり、題解に「陸機の遊客

芳春林、謝惠連の羇人感淑節、皆客游物に感ずるを言ひ、憂思して作るなり」とあつて、靑邱の此作も、矢張、客遊中の苦況を敍したものである。

【詩意】旅する路は險しく、かどかどしく、人は疲れ、馬は飢ゑ、到底、その苦に堪へない。おもへば、富貴にして老いたるは、貧賤にして年なほ少きに如かず、何不足なく遊歴するよりも、失敗して歸鄕するが善く、いづれにしても、滅多に旅などには出ぬに限る。眺めやれば、浮雲風に隨ひ、野原一面に垂れて亂れ、物象黯澹、天を仰いで悲歌すれば、數行の淚が留めどなく、自然に流れ落ちる。

【餘論】通首凄寥の極、富老不レ如二貧少一の二句は、閱歴中より得た至情の語に相違ないが、いささか、大丈夫の氣慨を缺いて居る。但し李時遷は「漢魏を數へず」といつて激賞した。

邯鄲郭公歌

邯鄲郭公の歌

(一)郭公舞。郭公舞。
郭公舞ふ、郭公舞ふ、

(二)天子無レ愁亦無レ苦。
天子愁なく、亦た苦なし。

醉後君臣一笑看。
醉後、君臣、一笑して看る、

(三)鄴宮長夜鼕鼕鼓。
鄴宮長夜、鼕鼕の鼓。

【字解】【一】郭公　題義の條に注す。【二】天子無愁　北齊書後主紀に「斛律光、死する後、益す驕縱、盛に無愁の曲を爲り、帝、自ら胡琵琶を彈じて之を唱へ、侍して之に和するもの、百を以て數ふ。人間、これを無愁天子といふ」とある。【三】鄴宮　一統志に「鄴都は、今の彰德府、齊の神武、晉陽に據り、後其立して、并せて鄴都に據る」とある。【四】不解平陽圍　平陽は、晉陽の間違ではなからうかといふことで、同じく、後主紀に「武平七年、周の武帝、晉州を圍む。十二月、帝、圍所に至り、城南に戰つて大に敗れ、軍を棄てて先づ還り、安德王延宗等を留めて、晉陽を守らしむ。德化元年庚申、帝、鄴に入る。辛酉、延宗、周師と晉陽に戰つて大に敗れ、周師に虜へらる」とある。【五】竟作長安虜　同じく後主紀に「帝、位を幼主恒に授けて、自ら太上皇となり、鄴より、先づ濟州に趨る。周師、漸く迫る。幼主、又鄴より東走す。太上皇、百餘騎を將ゐて、東走、河を渡り、太皇太后を濟州に留め、高阿那肱を遣して留守せしめ、太上皇、并に皇后、幼主を攜へて、青州に走り、將に陳に遜らむとし、金囊を鞍後に置き、韓長鸞・淑妃等、十數騎と青州南鄧村に至り、周將尉遲綱に獲られ、ともに長安に送り、封じて溫國公と爲す」とある。【六】高山摧爲一抔土　後主が後年死を賜はつたことを云つたので、同じく後主紀に「建德七年に至り、宜州刺史穆提婆と反を謀るを誣ひられ、延宗數十人と、長幼となく、咸な死を賜ひ、長安北原洪瀆川に葬る」とある。一抔土は、一つかみの土で、漢書張釋之傳に「たとひ、愚民、長陵一抔の土を取るも、陛下何を以て其法を加へむや」とあるに本づく。

郭公郭公爾莫レ舞。
郭公郭公、爾、舞ふ莫れ。

(四)不レ解二平陽圍一。
平陽の圍を解かず、

(五)竟作二長安虜一。
竟に長安の虜となる。

(六)高山摧爲二一抔土一。
高山、摧けて一抔の土となる。

【題義】邯鄲郭公歌は、樂苑に「雜謠歌辭」とあり、その本詞は北齊人の作で、左の通りである。

邯鄲郭公九十九。技兩漸盡入二鬝口一。大兒緣二高岡一。雉子東南走。不レ信二吾言一時。當レ看二歲在一レ酉。

樂府廣題に之を解釋して「北齊の後主高緯、雅に傀儡を好み、これを郭公といふ。時に、戲に郭公歌

を作る。將に敗れむとするに及び、果して、邯鄲に營す。高郭、聲、相近し。九十九は末數なり。騰口は鄧林なり。大兒は周帝を謂ふ、太祖の子なり。高岡は後主の姓なり。雉は鷄の類、後主の父武成の小字なり。後鄧林に敗る。盡く歌言の如し、蓋し語妖なり」とある。すると、この童謠の意味は「邯鄲に營して居る北齊の後主は、決して成功しない、やがて力盡きて、鄧林に入るであらう。周帝は、北齊の高氏を壓服し、後主は、東南に走るであらう。たとひ吾が言を信ぜずとも、酉の年になつたら、屹と思ひ當るであらう」といふので、それが、やがて、事實となつたのである。なほ陳後山詩話に「楊大年の傀儡の詩に云ふ、

鮑老當レ筵笑二郭郎一。笑他舞袖太郎當。若敎二鮑老當レ筵舞一。轉要郎當舞袖長。

郭郎は、即ち郭公なり」とあつて、郭公は、轉じて郭郎となり、後世、戲場に其名を存して居たといふことが分かる。青邱の此詩は、矢張、この童謠の原意を沿襲して、いささか改作を試みたのである。

【詩意】郭公は舞ふ、郭公は舞ふ。舞を爲して、娯樂として居る天子は、もとより愁もなく、從つて、苦もなく、まことに、お目出た過ぎる。君臣、ともに醉後に於て、笑ひながら顏を見合せ、鄴都の宮中に於ては、夜もすがら、鼓聲鼕鼕として、しばらくも止む時がない。さはれ、郭公よ、郭公よ、今しも、天下多事の折から、決して舞などをして居てはならぬ。平陽の圍は解けずして、やがて、周師に陷れられ、はては、後主以下、殘らず捕虜になつて、はるばる長安に連れて行かれ、山の高きを姓とした北齊の君も、遂に死を賜はり、一抔の土に歸し、盡きぬ恨を併せて葬られて仕舞ふ樣な始末、それにつけても、宴飲游樂は、斷じて戒むべきことである。

【餘論】作者は、後代に生まれて、その以後の事實を知つて居るから、その構想は、自然周匝であつて、諷諭の意味も顯然として居る、但し、古意古色、兩つながら之を存し、含糊なる詞章の中に、其旨意を摸索するといふ趣は、自然相及ばぬ樣である。

車遙遙

(一)鶤雞啼レ霜海城白。
(二)征夫趣(三)レ裝牛(四)上レ軛。
天生二(五)兩轂一轉二長途一。
那得レ令二君不一レ爲レ客。
出レ門已遠第一程。
(六)耳中鳴鐸漸無レ聲。
房戸寧嗟寂寞守。

車遙遙

鶤雞、霜に啼いて、海城白し、
征夫裝を趣し、牛は軛を上ぼす。
天、兩轂を生じて、長途に轉ず、
那んぞ君をして、客とならざらしむる「を得む。
門を出でて、已に遠し第一程、
耳中の鳴鐸、漸く聲なし。
房戸、寧ろ嗟せむや、寂寞として守るを、

【字解】【一】鶤雞　司馬相如の上林賦に、「鶤二玄鶴一、亂二昆雞一」とあつてその注に「昆雞は、鶴に似て黄白色、亦た鶤に作る」とある。【二】征夫　旅ゆく人。【三】趣裝　支度をする。【四】牛上軛　軛は車の横木で、それに牛を縛りつけて、愈よ出かける用意をする。【五】兩轂　賈島の詩に碌碌復碌碌、百年雙轉轂とある。【六】耳中鳴鐸　鐸は鈴、車に付けてある。今まで、耳に聞こ

山川唯念苦辛行。(七)　山川、唯だ念ふ、苦辛して行くを。
欲二車不一レ行願二車覆一。　車の行かざるを欲し車の覆るを願ふ、
還愁損二我車中玉一。(八)　還た愁ふ、我が車中の玉を損ずるを。
安得身如二芳草一多。　安んぞ得む、身は芳草の如く多く、
相隨千里車前綠。　相隨うて千里車前に綠なるを。

えて居た鈴の聲。【七】苦辛行　顧僴して行く、李嶠の詩に、「嗟君未レ得レ志、猶作二苦辛行一」とある。【八】車中玉　前に洛陽陌に白玉車中郎とあつて、その處に注して置いたが、これは、衞玠の故事を暗用したのである。車中に居る玉の如き人、即ち吾が郎といふ意。

【題義】車遙遙は、樂府遺聲に「車馬曲」とあり、樂錄に「雜曲歌辭」とある。征人の車、遙遙として、次第に天涯に向ふ有樣を目睹して、興を寄せたので、現存するものでは、唐の車皷の作が一番古く。即ち左の通りである。

車遙遙兮馬洋洋。追二思君一兮不レ可レ忘。君安游兮西入レ秦。願將二微影一隨二君身一。君在レ陰兮影不レ見。君仰二日月一妾所レ願。

青邱の此作も、無論、原意を承け、且つ幾分の新らしみを加へたのである。

【詩意】鵾雞は、霜に啼いて、さながら寒を警しむるが如く、海城一帶、そろそろ白んで、夜が明けかかつた。この時しも、征人は支度を爲し、そして、車に牛をつけ、愈よ出發することになつた。天は兩轂を以て轉ずる車てふ物を造り出して、長途を越えて行かしめるから、旅といふことが每に在るので、車にして存在する上は、君をして、客となることを止めしむることが出來ない。君は門を出て已に遠く、やがて第一の宿場にかかつたと見え、今まで聞こえて居た鈴も、次第に音がせぬ樣に成つて仕舞つた。君去りし後、私が寂寞として、ひとり空閨の戶を守つて居ることは、もとより厭ひはせぬが、君が幾山川を越えて、難儀せらるることは、絕えず心にかかつて、忘れることは出來ない。いつそ、行けない樣に車が顚覆して仕舞へば善いがと思ふが、さうすれば、ひよつと車中なる吾が郞の玉の顏に傷つけはせぬかと、それが又心配になる。そこで、どうかして、この身は芳草となり、どこまでも、その端なく、千里相隨つて、車前に綠色をなし、絕えず、君に添うて居たいと思ふが、これも、亦た及びなき願望であらう。

【餘論】唐代諸家の作に比して、更に數步を進めたもので、天生二兩轂一轉二長途一の二句は、車の存在を怨む意で、極めて面白く、房戶寧嗟寂寞守の二句は、その性情の正を見るべく、安得身如二芳草一多は、癡絕嬌絕、その沒理窟の處が、まことに、兒女の語たるに相應しい。

楚妃歎

(一)章華臺前(二)楚江水。　章華臺前、楚江の水、
(三)月色墮レ煙(四)烏欲レ起。　月色煙に墮ちて、烏、起たむと欲す。

【字解】【一】章華臺　左傳に「楚子、章華の臺を成し、諸侯と之を落せむとす」とあつて、その注に「臺、

(五)六宮不レ敢レ解二羅衣一。六宮敢て羅衣を解かず、

(六)獵火照レ山君未レ歸。獵火山を照らして、君未だ歸らず。

今、華容城内に在り」と見ゆ。楚子は、即ち楚の莊王。【二】楚江　揚子江、李白の詩、洞庭西望楚江分とある。【三】月色墮煙　殘月が曉煙の中に落ちる。【四】烏欲起　宿つて居た鴉が飛び起きて啼き立てる。【五】六宮　周禮の天官に「内宰は、陰禮を以て六宮に敎ふ」とあつて、その注に「後五前一、王者は后一宮、三夫人一宮、九嬪一宮、二十七婦一宮、八十一女御一宮、凡そ百二十人」とある。ここでは、唯だ奥御殿、御内儀と見れば宜しい。【六】獵火　李白の大獵賦に獵火燃兮千山紅とある通り、獵をするには、山を燒いて、禽獸を追ひ出すことが例になつて居る。

【題義】楚妃歎は、樂府正聲に「相和歌吟歎曲」とあり、樂府詩集に「謝希逸の琴論に、楚妃歎七拍あり、楚妃は樊姬なり」とある。その樊姬の事實は、劉向列女傳に詳しく「楚姬は、楚の莊王の夫人なり。莊王、狩獵畢弋を好む。樊姬、諫むれども止まず、乃ち禽獸の肉を食はず。王、かつて虞丘子と語り、以て賢となす。樊姬、これを笑ふ。王曰く、何を笑ふや。對へて曰く、虞丘子、賢なり、未だ忠ならざるなり。妾、後宮に充てらるること十一年にして、進むるところのもの九人、妾より賢なるもの二人、妾と同列のもの七人。虞丘子、楚に相として、薦むるところのもの、その子孫に非ざれば族昆弟、未だ賢を進め、不肖を退くるを聞かざるなり。妾の笑ふも、亦た宜ならずやと。王ここに於て、孫叔敖を以て令尹となし、楚を治むること、三年にして、莊王、以て霸たり」とある。そこで、楚妃歎は、主として、樊姬の事實を詠出したので、現存するものの中では、晉の石崇の四言が一番古いが、樂府題解に「陸機の吳趨行に云ふ、楚妃且勿レ歎と、明かに近題に非ざるなり」とあつて、もつと早く此題を作つた人もあつたらうが、すでに散佚して仕舞つたのである。その七言は、唐人に始まつたので、張籍に左の一首がある。

湘雲初起江沈沈。君王遙在二雲夢林一。江南雨多旌旗暗。臺下朝朝春水深。章華殿前朝二萬國一。君心獨自終無レ極。楚兵滿地能逐レ禽。誰用二一身一繼二筋力一。西江若翻二雲夢中一。麋鹿死盡應レ還レ宮。

青邱の此作は、矢張、七言であるが、特に四句に限つたのである。なほ、楚妃吟・楚妃怨などいふのも、類似の題名で、二三その作がある。

【詩意】章華臺の前には、揚子江の流廣く、殘月が曉雲の中に落ちて、宿鴉は飛び起つて、啼き出さうとして居る。この時しも、樊姬は、獨り後宮に居て、夜もすがら、羅衣をも解くことなく、少しも眠らずして、君王の還御を待つて居るが、獵火は山を照らして、君王は、又しても例の御樂に耽つて居られる。かういふ始末では、國事憂ふべく、まことに、嘆息の至りである。

【餘論】この詩は、七言四句であるが、二句づつで韻が換つて居るから、絶句ではなく、六朝の樂府には、この體が頗る多い。全篇の趣旨は、楚王が狩獵に耽つて、國事を怠つて居ることを、樊姬が非常に嘆かはしく思つて居る其情思を述べたので、まことに、諷諭の本旨に協つて居るし、月色墮レ煙の七字は殊に明瑩である。

神絃曲

秋燈畫壁熏ニ煙埃一。(一)
(二)石馬汗流神下來。
(三)花衫(四)娑娑(五)絃切切。
(六)旋風吹レ幡愁百結。
(七)雌狐學レ拜戴ニ髑髏一。
(八)鬼箭(九)射レ劍血灑レ秋。
老鴉飛散巫嫗(一〇)泣。
(一一)苦篁嘯レ雨溪幽幽。

神絃曲

秋燈畫壁、煙埃を熏し、
石馬、汗流れて、神下り來る。
花衫娑娑として絃切切、
旋風、幡を吹いて愁百結。
雌狐、拜を學んで、髑髏を戴き、
鬼箭、劍を射て、血、秋に灑ぐ。
老鴉、飛び散じて、巫嫗泣き、
苦篁、雨に嘯いて溪幽幽。

【字解】【一】熏煙埃　燈火の油煙が燻る。【二】石馬汗流　天寶遺事に「潼關の戰、祿山の將崔乾祐、白旗軍を領して左右に馳突す。又黄旗數百隊を見る。官軍、ひそかに謂ふ、これ賊ならむと。敢て之に逼らず。須臾にして、乾祐と戰ふを見、黄旗軍勝たず。退いて又戰ふもの一ならず。俄にして、在るところを知らず。後、昭陵奏す、この日、靈宮の前の石人馬、汗流る」とある。【三】花衫　宋史儀衛志に「傳敎幡、信幡各二、幡を執る人、皆武弁、緋寶相、花衫勒帛」とあつて、花衫は傳令使の服裝である。【四】娑娑　張衡の賦に修ニ初服之娑娑一兮、長ニ余佩之參參一とあつて、さわさわと衣ずれの音のすること。【五】絃切切　白居易の琵琶行に小絃切切如ニ私語一とある。【六】旋風　つむじ風、李賀の神絃曲に旋風吹レ馬馬踏レ雲とある。【七】雌狐學拜戴髑髏　狐談に「狐、夜、尾を撃てば火出づ。將に怪を爲さむとすれば、必ず髑髏を戴き、北斗を拜す。髑髏、墜ちざれば、化して人と爲る。詩に曰く、莫ニ赤匪レ狐、莫ニ黑匪レ烏と。今狐の在るところ、烏　輒ち聚つて之を噪ぐ、蓋し皆妖幹の物」とある。【八】鬼箭　鬼神の放つた箭。【九】射劍　劍を射たのではなく、射中てた爲に劍に爲つたのだが、詩語であるから、かういふ語法を用ひたのである。【一〇】巫嫗泣　周禮に「女巫は、歳時の祓除釁浴を掌る」とあり。國語に「男に在つては覡といひ、女に在つては巫といふ」とあつて、その注に「覡巫は鬼を見るもの」とある。巫嫗は、鬼を呼び下すことを業として居る。なほ此句の意は、金檀の按に「狐創つき、鴉散じ、巫泣けば、神降つて、妖邪盡く斂まる」とある。【一一】苦篁　篁は竹の叢を爲すもの、苦竹に同じ、卽ち熊笹の類。

【題義】神絃曲は、一に神絃歌といひ、樂府詩集に「清商吳聲歌曲」とあり、古今樂錄に「神絃十一曲、一に曰く宿阿、二に曰く道君、三に曰く聖郎、四に曰く嬌女、五に曰く白石郎、六に曰く清溪小姑、七に曰く湖就姑、八に曰く姑恩、九に曰く採菱童、十に曰く明下童、十一に曰く同生」とある。その命名の由來は、或は神の名に取り、或歌曲の內容から來たのもあるらしい。何にしても、神絃曲は、神靈を呼び下す時、絃聲に合はせて唱へる歌曲である。唐の李賀に神絃曲、神絃別曲などがあるが、青邱は、まさしく之に擬したのであるから、左に神絃曲だけを擧げて、參照に便することにしやう。

西山日沒東山昏。旋風吹レ馬馬踏レ雲。畫絃素壁聲淺繁。花裙綷縩步ニ秋塵一。桂葉刷レ風桂墜レ子。青狸哭レ血寒狐死。古壁彩虬金帖尾。雨工騎入秋潭水。百年老鴞成ニ木魅一。笑聲碧火巢中起。

【詩意】秋の夜の燈火は、物古りたる畫壁を照らし、油煙がもやもやとして、頻に燻つて居る。時しも、石馬は汗を流して走り出し、そして、天上の神は、これに乘つて下界に降つて來られる。この間、

傳令の役を奉仕する女巫は、麗しき花衫を著け、衣ずれの音がざわざわとして聞こえ、歌に和する絃聲は、切切として咽ぶが如く、天地森粛の中、神の下降を導く旗は、旋風に吹き靡かされ、物とはなしに、愁思の百結するを覺える。雌狐は、人に化けやうとして、北斗を拜む眞似を爲し、そして、髑髏を頭上に戴せて踊つて居た處が、何處とも知らず、神箭が飛んで來て見事に命中し、狐は創を帶び、その創口からは、血が颯と迸つて秋に注いだ。そこで、狐は化け終せずに、その儘、どこかへ逃げて仕舞ひ、狐の居る處には、いつでも必ず居るといふ烏どもは、驚いて飛び散じ、神おろしの役に當つた女巫の嫗も、その靈驗に感じて、覺えず泣き出した位。かくて、妖邪すでに斂まりし後は、熊笹の雨を帶びて鳴る聲、さながら嘯くが如く、溪谷の中、幽幽として、唯だ凄氣が吹き動くのみである。

【餘論】この詩は、疑もなく、李賀を眞似たので、字句さへも、いささか踏襲した痕跡がある。後半、卽ち雌狐學レ拜戴二髑髏一の四句は凄寥の極、鬼氣紙に滿つるを覺ゆるばかり。これを前にして楊鐵崖、これを後にして徐青藤などに、一寸類似の者はあるが、その以外には、一寸見られないのである。

白紵詞。二首

白紵の詞　二首

(一)白紵出レ自二呉女工一。　白紵は、呉の女工より出づ、

著來色與二素(二)體一同。　著け來れば、色、素體と同じ。

舞時偏向江(三)渚宮。　舞ふ時、偏に向ふ江渚の宮、

長袖拂起微有レ風。　長袖拂ひ起つて、微に風あり。

(四)觴催管促四座中。　觴は催し、管は促す、四座の中、

(五)攬レ裾徘徊慘(六)二曲終一。　裾を攬つて徘徊し、曲の終るを慘む。

玉階夜寒零露濃。　玉階夜は寒くして零露濃かなり。

【字解】【一】白紵　題義の條に見ゆ、白い麻衣。【二】素體　白い肌。【三】江渚宮　一統志に「渚宮は、荊州府江陵縣に在り、楚の襄王建つ」とある。【四】觴催管促　管は笙笛の類、催促して酒を酌み、笙笛を吹く。【五】攬裾　もすそを褰げる。【六】慘　いたむ。

【題義】白紵詞は、樂府詩集に「舞曲歌辭」とある。宋書樂志に「白紵舞は、按ずるに、舞辭に巾袍の言あり、紵は本と呉地出づるところ、宜しく、これ呉舞なるべし。晉の俳歌に云ふ、皎皎白緒節、と。節は雙たり。呉音、緒を呼んで紵と爲す、疑ふらくは、白緒は卽ち白紵ならむ」とあり。南齊書樂志に「白紵歌、周處の風土記に云ふ、呉の黃龍中の童謠に云ふ、行二白者一、君追二汝句驪馬一と。後、孫權、公孫淵を征し、海に浮んで舶に乘ず。白は舶なり。今の歌の和聲、猶ほ行白紵といふ」とあり。樂府題解に「古詞、盛に舞者の美を稱し、宜しく芳時に及んで樂を爲すべし、その白紵を譽むるに曰く、質如二輕雲一色如レ銀、製以爲レ袍餘作レ巾、袍以光レ軀巾拂レ塵」とあり。唐書樂志に「呉に在つては白紵たり、晉に在つては子夜たり、故に、梁の武帝、沈約をして其辭を改めしめて、子夜四時歌となす。

後の此曲を爲るもの、白紵ならば一曲、子夜ならば四曲、今中原、白紵曲あり、辭旨これと全く殊なり」とある。要するに、白紵は、舞の衣裳、舞を爲すことから、芳時行樂の意に及んだので、それが此題の原意である。その白紵舞歌といひ、白紵舞辭といひ、又白紵曲といひ、白紵歌といひ、白紵辭といひ、四時白紵歌といひ、いづれも、內容は同一である。就中、子夜と同じといふのは、聲調を主として云つたので、必ずしも、題の原意には關係せぬことと思ふ。

【詩意】白い麻衣は、吳地の女工が製作するので、これを著ると、その色は、さながら白い肌と同じである。やがて、舞を爲さむとして、渚宮に向つて往く。その長袖を拂つて起つときは、かすかながらに、風が動く。四座の人人、これを見て、頻りに興を催し、ひたすら催促をして、酒を酌み、笙笛を吹いて、之に和せしめる。それから、一曲將に終らむとし、裾を褰げて去りがてにして居ると、玉階夜寒くして、露は濃かに、涼氣ひたすら衣を透して身にしむを覺え、物とはなしに、痛ましげに見える。

【餘論】全篇七句、毎句に押韻してあるから、卽ち柏梁體である。これは、舞女を寫しただけで、人心を搖蕩する樣な趣はない。

出(一)後閤臨(二)前楹。
舞衣(三)皎皎潔且輕。
(四)飄如白雲向空行。
(五)廻腰(六)流目(七)君已傾。
華燈吐燄(八)欺月明。
(九)喧譁不聞(一〇)遺珮聲。
(一一)茱萸實紅蘭葉紫。
千秋懽樂長如此。
妾身得向君前死。

後閤を出で、前楹に臨む、
舞衣皎皎として、潔く且つ輕し。
飄として、白雲の空に向つて行くが如く、
廻腰流目、君、すでに傾く。
華燈燄を吐いて、月明を欺き、
喧譁聞かず遺珮の聲。
茱萸の實は紅にして、蘭葉は紫なり。
千秋の懽樂、長く此の如くんば、
妾が身、君の前に向つて死するを得む。

【字解】【一】後閤　家の後方なる閨房。【二】前楹　楹は柱。【三】皎皎　白く輝くさま。【四】飄　飄然。【五】廻腰　腰をひねる。【六】流目　ながし目、秋波。【七】君已傾　傾は心を傾ける。【八】欺月明　欺は壓倒する。【九】喧譁　喝采の聲のかまびすしきこと。【一〇】遺珮　環佩を落す。【一一】茱萸　ぐみ、西京雜記に「戚夫人の侍兒賈佩蘭言ふ、宮內、九月九日、茱萸を佩び、蓬餌を食し、菊花の酒を飲み、人をして長壽ならしむ」とある。

【詩意】後なる閨房より出でて、前なる柱に臨み、白紵の舞衣は、皎皎として白く輝き、まことに潔くして且つ輕げに見える。その舞を爲す樣は、飄然として、白雲が空中に向つて飛行するが如くであるし、その腰をひねり、流し目をして、極めて風情ありげなるを見ると、君の心は、すでに傾いて仕舞ふ。その舞を爲す廣い堂宇の中に於ては、華燈煌煌として、燄を吐き、その鮮かなる光は、月明

をも壓倒せむばかり、堂中に於ては、喝采の聲、騷がしく、環佩の落ちた聲さへ分からぬ位。この舞を見ながら、茱萸の實の紅なるを佩び、蘭の葉の新に芽ぐんで紫なるを賞し、まことに、歡樂を極めて居られる。もし歡樂が千秋に亙つて長しへに此の如くであることが出來るならば、私は一身を捧げて、君の前で死にたいと思つて居ります。

【餘論】起首より喧譁不レ聞遺珮聲に至るまでは、矢張、舞態を寫し、茱萸實紅蘭葉紫の三句は、舞者が述べた壽詞であつて、歡樂長しへに存し、そして、おのれも終始君の前に居たいといふ意を逗露したのである。

阿那瓌

牛羊草(一)漫レ野。(二)大帳天山(三)下。

十萬(四)控弦兒。聞レ(五)鏑齊上レ馬。

阿那瓌

牛羊、草、野に漫り、大帳天山の下。

十萬控弦の兒、鏑を聞いて、齊しく馬に上る。

【字解】【一】漫野　野に一ぱいにはびこる。【二】大帳　帳は穹廬、卽ちテント。匈奴單于のは一番大きいから、特に大帳といつたのである。【三】天山　一統志に「哈密衞に天山あり、番人ここを過ぐるとき、必ず馬を下つて拜す。一名雪山」とあり、又「土魯番に天山あり、一名鄯連山」とある。塞外の高山。【四】控弦兒　弓を挽く兵士、漢書婁敬傳に「この時、冒頓單于、兵彊く、控弦四十萬騎」とある。【五】聞鏑　晉先置儀注に「鏑は卽ち箭なり、應劭の鹵簿圖に騎あり、鏑を執る。その始め、箭晉を以てし、後晉銅を以て器を作り、その聲、雷果に似たり」とある。

【題義】阿那瓌は、樂府遺聲に「梵竺曲」とあり、樂府詩集に「雜曲歌辭」とある。その字義に就いては、北史に「阿那瓌は蠕蠕國王」とあり、通典に「蠕蠕は、拓跋の初より雲中に徙り、卽ち種落あり、後魏の太武、神𪊧中彊盛、盡く匈奴の故地を有す。阿那瓌は、孝明帝の時の蠕蠕國主、辭、匈奴の主と云ふなり」とある。すると、この題は、主として、匈奴の土俗を詠じたものである。

【詩意】牛羊の放たれた野には、一面に草が生ひ茂り、單于の本營たる大テントは、天山の麓に設けられてある。その單于の部下なる控弦の健兒は、凡そ十萬もあつて、一たび箭聲を聞けば、一齊に馬に騎して、戰爭に出かける用意をする。

【餘論】やや淺近を免れぬが、一種豪爽の姿致はある。吳明卿は之を評して、伉健といつた。

江南思

妾本南(一)國姝。父母愛如レ珠。

(二)貌豈慙二明鏡一。(三)身纔稱二短襦一。(一)

學成(四)採蓮唱。曉出二(五)橫塘上一。

江南の思

妾は本と南國の姝、父母愛すること珠の如し。

貌、豈に明鏡に慙ぢむや、身、纔に短襦に稱ふ。(一)

學び成す採蓮の唱、曉に橫塘の上に出づ。

舟小復身輕。隨風（六）兩搖蕩。（二）　舟小にして、復た身輕く、風に隨つて兩つながら搖蕩。（二）

歸時（七）曲岸傍。恰見（八）貴遊郞。　歸る時、曲岸の傍、恰も見る貴遊の郞。

輟歌欲轉櫂。花淺不堪藏。（三）　歌を輟めて、櫂を轉せむと欲するも、花淺くして藏るるに堪へず。（三）

將瞋却成哂。相問那能隱。　將に瞋らむとして却つて哂を成す、相問ふ那ぞ能く隱れむ。

雖憐郞意深。終嫌妾家近。（四）　郞の意の深きを憐むと雖も、終に嫌ふ妾が家の近きを。（四）

回首各（九）盈盈。南湖（一〇）月又生。　首を回らせば各盈盈、南湖月又生ず。

煙波三十里。都是斷腸情。（五）　煙波三十里、すべて是れ斷腸の情。（五）

【字解】【一】南國姝　姝は詩經に、靜女其姝とあつて、眉目よしといふが本義、從つて麗人美婦をいふ。【二】臉嶽鏡明鏡　鏡に映つても、決して自ら愧かしいと思はぬ程の美貌。【三】身纔稱短褐　褐は膝までの短衣、その短衣が丁度似合ふといふので、丈高からず、從つて年の猶ほ若きをいふ。【四】採蓮唱　採蓮歌に同じ。【五】橫塘　橫に出でて居る堤。【六】兩搖蕩　舟と身と兩つながら搖り動く。【七】曲岸　彎入して居る汀岸。【八】貴遊郞　高貴にして遊衍する少年。【九】各盈盈　情思の充滿せるをいふ。【一〇】南湖　湖南に同じ。

【題義】江南思は、樂府正聲に「相和歌辭相和曲」とあり、題解に「江南曲、古詞に云ふ、江南可採蓮、蓮葉何田田、蓋し、芳辰麗景、嬉游時を得たるを美するなり。梁の簡文、桂楫晚應旋は、唯だ游戲を歌ふ。又采蓮采菱あり、皆ここに出づ。唐の陸龜蒙、又古辭を廣めて五解と爲すといふ」とある。つまり、江南の土俗を述べたので、就中、嬉游の一事は、殊に詩に入り易いから、多く此に道及して居る。この詩は、題下に注して「一に五首に作る」とあつて、四句づつ五首と見たものもあるが、四句毎に韻を換へた五古一篇と見る方が、至當である樣に思はれる。

【詩意】私は、もと南方に生まれた少女、父母は、掌中の珠の如く愛でて大切に育てた。私の顏は、鏡に向つても愧かしくない程、身の丈は、やッと短衣に釣り合ふ位。この頃、採蓮の歌を覺えたから、曉早く蓮の花を采る爲に、橫塘の邊に漕ぎ出したが、舟も小さいし、體も輕い處から、舟と體と、風に隨つて、兩つながら搖り動くを覺える程であつた。やがて、漕ぎかへして、彎入せる岸邊に來かかると、岸上に貴公子の居るのを見て、物とはなしに羞かしく、歌ひかけて居た歌も止めて仕舞ひ、棹を轉じてよそに外さうと思つたが、あたりは、蓮の花も疎であつて、身を匿すことも出來ない。そこで、初めは、貴公子の不躾なるに對して、心に怒りかけむとしたが、いつとなしに、にこやかなる笑をなし、互に相問うて見れば、どうして隱し立てをしやうか、有りの儘に殘らず話して仕舞つた。そこで、貴公子の眷戀の意、甚だ深きに對しては、しきりに同情を寄せ、さそふ水にいなむと思ふ位であるが、何分、私の家に近いから、うッかりした事をして、浮名を取つては大變だといふので、心ならずも差控へ、やがて、立ち別れて仕舞つた。互に振り向いて見て、盈盈たる情思に堪へず、去り

がてにして居ると、池の南に月が差し上り、煙波三十里、いづれの隈として、斷腸の思ならぬはなく、さすがに心殘りのされることである。

【餘論】可憐なる少女の情思を寫したので、層層遞下、極めて次第あつて、結構も緊密である。その中、舟小復身輕の二句、輟レ歌欲レ轉レ櫂の二句は、新婉比なく、雖レ憐二郎意深一の二句は、なほ性情の正を失はざるを見るべく、結末、煙波三十里の二句は、杳然として神遠きを覺え、餘韻長しへに盡きざる底の趣がある。

銅雀妓

鄴（一）宮已罷（二）レ幸。歌（三）舞尙如レ期。
誰知看（四）レ月夜。却是望レ陵時。
漳（五）澤銷二羅薦（六）一。松風吹二繐（七）帷一。
妾身未レ得レ死。寧當レ憂二色衰一。

銅雀の妓
鄴宮、すでに幸を罷め、歌舞、尙ほ期の如し。
誰か知らむ、月を看るの夜、却つて是れ陵に望むの時。
漳澤、羅薦に銷え、松風、繐帷を吹く。
妾が身、未だ死するを得ず、寧ろ當に色の衰ふるを憂ふ「べき。」

【字解】【一】鄴宮　鄴都に在つて漳水に臨み、銅雀臺も其中に在つて、孰と曹操が建てた。【二】罷幸　行幸が絕えて、曹操の旣に死せしを云ふ。【三】歌舞尙如期　題義の際に詳しく注して置く。曹操の遺言の通り、毎月一回、歌舞を爲すこと。【四】看月夜　その一回は、十五夜なる故に云ふ。【五】漳澤　そら燒の匂ひ、史記滑稽傳に「羅襦襟解け、微に薌澤を聞く」とある。【六】羅薦　牀に敷いた羅、漢武內傳に「七月七日、乃ち宮掖を修除し、坐を大殿に設け、紫羅を以て地に薦く」とある。【七】繐帷　繐は細くて粗き布、それで造つた帳幕。位牌の前に掛けるので、題義の條に引ける曹操の遺命中に見ゆ。

【題義】銅雀妓、一に銅雀臺に作る。樂苑に「相和歌辭平調曲」とあり、樂府題解に「舊說、魏の武帝遺命して、諸子に令して曰く、吾が婕妤妓人、皆銅雀臺中に著け、臺上に於て、八尺の繐帳を施し、朝晡に餔糒の屬を上り、月ごとに十五に朝し、輒ち帳前に向つて伎樂を作さしめ、汝等、時時、銅雀臺に登つて、吾が西陵の墓田を望めと。後人、その意を悲んで、これが詠を爲すなり」とある。すると、この題は、曹操死後に於ける淒寥の狀況を敍して、亂世奸雄の跡を弔ふといふのが、その本旨である。

【詩意】曹操、すでに逝き、鄴都宮中に於ては、行幸の事などは全く絕えはて、唯だ其遺命に依つて、毎月一回、帳前に於て歌舞を爲し、決して、期を誤らない。その時は、いつでも、十五夜で、多くの宮女は、月を看つつ西陵の墓田を望んだであらう。臺上で、位牌の据ゑてある處には、羅が鋪きつめてあるが、それも、空燒の匂いつしか消え失せ、松風は颯颯として、その前なる繐帳を吹き、まことに淋しき有樣である。當日の宮女たりし私どもは、まだ死ぬことも出來ずして、御奉公をして居り、年老いて色の衰へることなどは、少しも心配するに及ばぬが、なかなか果敢ないことである。

【餘論】これは、絕好題目であるのに、あまり見榮えのせぬのは、五律の體に拘束されたからであらう。それにつけても、題に因つて詩體を擇ぶといふことは、最も必要で、取りも直さず、作詩の第一義である。

猛虎行

(一)陰風吹林烏鵲悲。
猛虎欲出人先知。
目光燈(二)燈當路坐。
(三)將軍一見弧(四)矢墮。
幾家插(五)棘高作門。
未到日沒收豬(六)豚。
猛虎雖猛猶可喜。
横行只在深山裏。

猛虎行

陰風、林を吹いて、烏鵲悲む、
猛虎、出でむと欲して、人先づ知る。
目光燈燈、路に當つて坐す、
將軍一見して、弧矢墮つ。
幾家か、棘を插んで高く門と作し、
未だ日沒に到らざるに、豬豚を收む。
猛虎、猛と雖も、猶喜ぶべし、
横行只だ深山の裏に在り。

【字解】【一】陰風　空を曇らす風。【二】燈燈　光り輝く貌。【三】將軍　李廣が虎だと思つて石に射中てたといふことが史記の本傳にも見え、ここでは、それを暗用したのであらう。【四】弧矢墮　弧は弓、弓で矢を放つたといふこと。【五】插棘　いばらを地に插して虎の這入れぬ樣にする。【六】豬豚　豬も亦た豚をいふ。

【題義】猛虎行は、樂府正聲に「相和歌辭平調曲」とあり、陸機の猛虎行の注に「雜言古猛虎行、飢不從猛虎食、暮不從野雀栖、野雀安無巢、游子爲誰驕。飢不從猛虎食は、但だ發首を取つて名となす、必ずしも、篇中の意義を以てせず。他、皆これに類す。これ人にその志節を抗げ、義として、苟くも合はざるものを勸む」とあつて、猛虎行は、その古詞の起首に猛虎てふ字があつたから名づけたので、篇中の趣意には、何等の關係もない。李白の猛虎行も、亦た但だ猛虎を借りて興を起したのであるが、張籍・李賀に至りては、猛虎その物を詠じ、古詞とは大に異なつて來た。青邱の此作も、矢張、張李の眞似をしたに過ぎぬ。

【詩意】陰風颯颯として、林を搖り動かし、そこに宿せる烏鵲などは、悲しげに啼き騷いで居る。風は虎に從ふといふ通りで、この風は、虎の爲めであるといふことは、人が先づ知つて居る。やがて、虎は、のそのそと林より出で來り、目光爗爗として、路にのさばつて坐して居ると、これを付け覗つて居た將軍は、一刻も猶豫ならず、直に弓に矢を番へて、ひゆうと射放つた。元來、この虎は數ば人里に出て來て害を爲すといふので、村中の人家では、いばらを地に插んで門の如く高くし、そして、日の入り切らぬ内に、放し飼にしてある豕を片づけて仕舞はねばならぬ。さはれ、猛虎は、いくら猛惡であつても、深山の中に限つて横行して居るから、まだ始末が善いので、人間には、これにも增して恐ろしいものが、白晝に跳梁して居る。

【餘論】結末二句は諷諭の本旨で「苛政は虎よりも暴なり」といふ古語を豫想して作つたものと見え、容易に人の摸索に堪へる。

湘中絃

湘中絃

涼風嫋嫋月鄰鄰。　涼風嫋嫋として月鄰鄰たり、

竹色蘭香秋水濱。　竹色蘭香、秋水の濱。

一夜猿聲流淚盡。　一夜、猿聲、淚を流して盡く、

黃陵祠下泊舟人。　黃陵祠下、舟を泊するの人。

【字解】【一】涼風嫋嫋　楚辭に嫋嫋兮秋風とある。嫋嫋は、そよそよと吹く。【二】月鄰鄰　崔塗の湘中絃に蒼山遙遙月鄰鄰とある。鄰鄰は、きらきらと光る。【三】猿聲　王維の詩に、明到衡山與洞庭、若爲秋月聽猿聲とあつて、湘江の附近には猿が居る。【四】黃陵祠　一統志に「黃陵祠は、岳州瀟湘の尾、洞庭の口に在り、前代これを立て、以て舜の二妃を祀るもの、唐の韓愈に碑あり」と見ゆ。

【題義】湘中絃は、樂府詩集に「新樂府雜題」とある。湘靈が瑟を鼓するといふことは、著名の故事で、湘中絃は、卽ち其瑟に合はせる歌といふ意味である。なほ湘中絃・湘絃怨といふも、同じである。

【詩意】涼風、そよそよとして吹き起り、月はきらきらしく光り、秋水の濶る岸邊には、竹色翠に、蘭香溢うて、まことに人の心を動かすばかり、ここに、黃陵祠下に舟を泊した征客は、この景色に對し、夜もすがら、猿聲を聞いて、流るる淚の盡くる位、まことに、斷腸の極である。

【餘論】これは、純然たる七絕で、竹枝に近く、聲調宛轉として誦すべきも、いささか洗鍊が足らぬやうである。

獨不見

獨り見えず

白日沈大荒。北風下天霜。　白日、大荒に沈み、北風、天霜を下す。

羅幃猶苦冷。何況戍遼陽。　羅幃猶ほ冷かなるに苦み、何ぞ況んや、遼陽に戍するをや。

別時秦槐靑。今復胡草黃。　別るる時、秦槐靑く、今復た胡草黃なり。

紅淚常自滋。非因效啼妝。　紅淚常に自ら滋ひ、啼妝に效ふに因るに非ず。

鴛機促夜響。龍鏡掩晨光。　鴛機、夜響を促し、龍鏡、晨光を掩ふ。

相思獨不見。時久愈難忘。　相思、獨り見えず、時久しくして、愈よ忘れ難し。

【字解】【一】白日　晴れたる日。【二】大荒　西極の地、山海經に「日月入るところ、これを大荒の野といふ」とある。【三】天霜　天上の霜。【四】遼陽　今の遼東の地。【五】秦槐　秦地の竝木たる槐、北史に「韋孝寬、雍州の刺史となり、部內を勸し、堠處に當つては、槐樹を植ゑて堠に代ふ。すでに修復を免れ、行旅又庇蔭を得たり。周の文帝、後見て之を知つて曰く、豈に一州のみ獨

り留るを得むや、と。諸州をして、道を夾んで一里に一樹を種ゑ、十里に三樹を植ゑ、百里に五樹を植ゑしむ」とある。【六】胡草　胡地の草。【七】紅淚　拾遺記に「薛靈芸、父母に別る、玉唾壺を以て淚を承くるに、皆、紅色を爲す」とあつて、血が交つた爲に赤い色をしたのであらう、後には女の淚を云ふ。溫庭筠の詩に紅淚文姬洛水春とある。【八】啼妝　後漢書五行志に「桓帝の元嘉中、婦女、愁眉啼妝を作す、啼妝とは、薄く眉下を拭うて啼處の若し」とある。【九】鴛機　鴛鴦錦を織る機の義であらう。李商隱の詩に長家機二錦字一含レ淚坐二鴛機一とある。【一〇】龍鏡　背面に龍を鑄出した銅鏡、異聞錄に「天寶中、揚州、水心鏡を進む、盤龍の勢飛動するが若し、鏡を鑄る時、老人あり、姓は龍、名は護と稱す。童あり、呼んで玄冥と爲す。鏡の所に至つて曰く、老人、眞龍鏡を造るを解す、と。爐の所に入り、戶を局すこと三日。戶を開けば、二人の在るところを失ふ。鑄後大旱、葉法善、鏡を祠る、雨大に澍ふ」とあり、孟浩然の青鏡歎に妾有二盤龍鏡一、淸光長晝發とある。

【題義】獨不見は、樂府遺聲に「怨思曲」とあり、樂府詩集に「雜曲歌辭」とある。その意義に就いては、樂府題解に「獨不見は、思へども見るを得ざるを傷むなり」とあり、題解に「思へども見ざるを言ふなり」とある。現存する者では、柳惲の作が一番古く、

別島望二雲臺一。天淵臨二水殿一。芳草生未レ積。春花落如レ霰。出從二張公子一。還過二趙飛燕一。奉レ箒長信宮。

誰知獨不レ見。

といふので、その以後の諸作にしても、どこかに獨不見の三字を塡用しある處から、靑邱も、矢張、これに倣つたのである。

【詩意】晴れた太陽は、西の涯なる大荒の野に沈み、北風颯として天上の霜を下し、陰寒自ら堪へず、羅の幃に倚り添うて居てだに、冷氣を感ずるのに、まして遠く遼東に征戍する我が夫は、如何であらうか。さきに別れた時は、春の頃、秦の地の竝木の槐が、若葉の色、目さむるばかり靑かつたが、今は秋の末、胡地の草も、黄色に枯れて仕舞つた。私が常常に淚をせきあへぬは、何も啼妝に效うて、わざとするのではなく、情思哀婉、自ら然らしむるのである。夜には、鴛鴦錦を織る機に坐して、梭を投ぐる響を促し、朝には、龍鏡を掩うた儘、憔悴せる顏容を映さぬ樣にする。君を思へども、君は見えず、大抵の事は、時久しければ忘れるものであるが、これは、反對に愈よ忘れ兼ねて、愈よ心を惱ますのである。

【餘論】紅淚常自滋の二句、相思獨不レ見の二句、ともに、逆說して愈よ其情思の切なるを見るべく、その平板を避けた處に、技工の妙を認める。

豔曲二首

日暮洪(一)水上。折レ花行見(二)レ歡。

鴛鴦蘇(三)合彈。騕(四)褭鏤(五)銜鞍。

豔曲　二首

日は暮る洪水の上、花を折つて行く〻歡を見る。

鴛鴦蘇合彈、騕褭鏤銜鞍。

【字解】【一】洪水　詩經に洪水瀰瀰とあり、一統志に「洪水は、今の衞輝府洪縣、古しへの朝歌の地」とある。【二】見歡　歡は情郞、古樂府に風吹窻簾動、疑是所歡來とある。【三】蘇合彈　劉孝威の詩に珠丸蘇合彈、金鞍靑絲隳とある。蘇合は、多分、香

木の名であらう。それで造つた彈き玉。【四】 騕褭 類篇に「良馬の名」とある。【五】 鏤衢鞍 三輔決錄に「平陵の公孫奮、富、京師に聞こゆ。梁冀、その倹恡なるを知り、鏤衢鞍を以て奮に遺り、從つて五千萬を貸る」とある。鏤衢鞍とは、槁模樣に鏤金を施した鞍であらう。

【題義】 豔曲は、纂要に「古豔曲は、北里靡靡陽阿の曲あり」とある。つまり、豔情を逑ぶるを旨としたもので、この二首の如きは、齊梁小樂府の遺と見える。

【詩意】 淇水の邊に、日は暮れかかつた。その時しも、少婦は、路傍の花を折りながら、行く〳〵思ふ男に逢ひたいと念じて居る。やがて、その男が前面から遣つて來たが、蘇合彈にて射て取つたる鴛鴦を攜へ、鏤衢の鞍おける名馬に跨つて、まことに、風流瀟洒の姿であつた。

當時贈(一)芍藥。今日歎(二)蘼蕪。
少年不相顧。唯愛執金吾(三)。

當時芍藥を贈り、今日蘼蕪を歎ず。
少年相顧みず、唯だ愛す執金吾。

【字解】【一】 贈芍藥 詩經に「贈之以芍藥」とあつて、むかし鄭國に於ては、風俗極めて淫靡で、春の末、溱洧二水の邊に遊び、男から女に芍藥を贈つて言ひ寄る樣なことがあつた。【二】 歎蘼蕪 夫婦別れをして居ること、漢の古詩に「上山採蘼蕪、下山逢故夫」とある。【三】 執金吾 漢書百官公卿表に「中尉は秦の官、京師を徼循することを掌る。武帝の太初元年、更めて執金吾と名づく」とあつて、その注に「金吾は鳥の名なり、不祥を辟くるを主る。天子出でて行けば、主導を職とし、以て非常を禦ぐ、故に此鳥の象を執り、因つて、以て官に名づく」とあつて、なかなか權勢があつて、氣の利いた役であつた。そこで、後漢書光烈陰皇后紀に「后、諱は麗華。光武、執金吾の車騎甚だ盛なるを見て、歎じて曰く、仕官すれば當に執金吾と作るべし、妻を娶らば當に陰麗華を得べし」とある。

【詩意】 その昔、互に相眷戀し、形の如く、芍藥を贈つて言ひ寄り、遂に契を結んだのであるが、いつしか、男の方に飽きが來て、女を振り棄てて顧みず。女は、今しも、蘼蕪を採るといつて、歎いて居る。しかし、相手の少年は、そんな事には、少しも頓著せず、この上は、天晴執金吾の官職に有り付きたいといつて、しきりに運動して居る。

【餘論】 二首とも、短章零句、その構想だけは、兎に角まとまつて居るが、これを齊梁の小樂府に比すれば、古味古色が缺けて居る。

羽林郎

十五能挽弓。入衞(一)葡萄宮。
武皇深假(二)借。父有沒(三)邊功。
(四)禿衿繡(五)襦短。馬逸雙(六)銜斷。

羽林郎

十五能く弓を挽く、入つて衞る葡萄宮。
武皇深く假借、父に沒邊の功あり。
禿衿、繡襦短く、馬逸して、雙銜斷つ。

纔出(七)鬪雞坊。還過射熊館(八)。
笑擲朱(九)提銀。娼樓爛醉春。
歸時衝市過。辟(一〇)易九(一一)衞人。
橫行自無避。司(一二)隸休相忌。
明日浚(一三)稽山。爲君遮虜騎。

わづかに鬪雞坊を出で、還た過ぐ射熊館。
笑つて擲つ朱提銀、娼樓、春に爛醉す。
歸る時、市を衝いて過ぐれば、九衞の人を辟易せしむ。
橫行自ら避くるなく、司隸、相忌むを休めよ。
明日、浚稽山、君が爲に虜騎に遮らむ。

【字解】【一】蒲萄宮　漢書に「元壽三年、單于來朝し、上林の蒲萄宮に舍す」とある。上林は御苑、その中に在る別宮。【二】假借　寛假する、大目に見る。【三】沒邊功　邊地に於て戰沒したといふ功績。【四】禿衿　衿は襟、襟が引ッ込んで居る。李賀の詩に「禿衿小袖調鸚鵡」とあつて、輕便なる服裝と見える。【五】繡襠　刺繡を施したる短衣、古詩に「養蠶不滿箔、那得羅繡襠」とある。【六】雙衙　衙はくつわ。【七】鬪雞坊　鬪雞の小兒の居るところ、東城老父傳に「明皇、藩邸に在る時、民間淸明節の鬪雞戲を樂み、位に卽くに及びて、雞坊を兩宮の間に治め、長安の雄雞千數を索め、六軍の小兒五百人を選び、これを馴擾敎飼せしむ。賈昌、木雞を道旁に弄ぶ、召し入れて、雞坊小兒となす。雞羣に入れば、狎るるが如く、羣小雞、畏れて馴れ、使令人の如し、卽日、五百小兒の長と爲す」とある。【八】射熊館　漢書元帝紀に「永光五年冬、上、長楊の射熊館に幸し、車騎を布いて大に獵す」とあり、三輔黃圖に「長楊宮に射熊館あり、盩厔に在り」と見ゆ。【九】朱提銀　漢書食貨志に「朱提銀、重さ八兩を一流と爲す」とあり、又地理志に「朱提は縣名、犍爲に在り」と見ゆ。【一〇】辟易　史記項羽本紀に「赤泉侯、人馬俱に驚き、辟易數里」とあつて、その注に「開張して舊處を易ふ」とある。【一一】九衞人　滿街の人といふに同じ。【一二】司隸　漢書百官公卿表に「司隸校尉は、巫蠱を捕へ、大姦猾を督す」とある。【一三】浚稽山　漢書李陵傳に「上、陵に詔し、九月を以て發し、出でて虜障を遮らしめ、東は浚稽山、南は龍勒水上に至り、徘徊して虜を觀る、卽ち見るところなし。浞野侯趙破奴の故道より、受降城に抵つて、士を休ましむ」とあり、北邊備對に「浚稽山は、武威塞北に在り」と見ゆ。

【題義】羽林郞は、樂府遺聲に「游俠曲」とあり、樂府詩集に「雜曲歌辭」とある。羽林郞の字義に就いては、前に白馬篇の條に一寸解釋して置いたが、漢書に「武帝の太初元年、はじめて、建章營騎を置き、後、更めて羽林騎と名づけ、光祿勳に屬す。又從軍死事の子孫を取つて、羽林官に養ひ、敎ふるに五兵を以てし、羽林孤兒と號す」とあつて、その顏師古注に「羽林は宿衞の官、その羽の如く疾く、その林の如く多きを言ふ。一說に羽の主たる所以のものは羽翼なり」とあり、後漢書百官志に「羽林郞は、宿衞侍從を掌り、常に漢陽・隴西・安定・北地・上郡・西河、六郡良家を選んで、これを補ふ」とあり、又地理志に「漢興つて、六郡良家の子、羽林に選給す」とある。そこで、羽林郞は、今の近衞士官、もしくは皇宮警視の樣なものであるが、なかなか幅が利いて、大に持てたものと思はれる。羽林郞の古詞は、辛延年の作で、霍家の奴にして羽林郞たる馮子都といふものが、權勢を笠に著て、酒家の胡姬を口說いた處が、見事肱鐵砲を食つたといふことを敍してある。その以後の作も、大抵羽林郞の豪邁俊爽、まかり間違ふと、粗剛暴慢の趣を寫して居て、羽林行といふのも同じである。又辛延年の作中に胡姬年十五の句がある處から、別に一首としたものもある。

【詩意】羽林の健兒は、年十五にして、能く强弓を挽く處から、蒲萄宮に宿衞することとなり、おま

けに、父は邊庭に戰沒し、生前の功勳少からずといふ廉を以て、武帝は特別に目をかけて大事にされた。彼は詰まつた襟に、短き繡襦を穿ち、凜凜しき打扮をして居て、馬を馳すれば、頻りに奔逸して、無理に引き止めむとする兩の轡の斷れるをも厭はず、やッと鬪雞場を出たかと思へば、今度は、射熊館を過ぎ、宮禁內の要所に遠慮なく立ち入つて、見まはりをする。それから、春日、娼樓に登つて爛醉すれば、笑つて、朱提の銀錠を投げ出して、顧みもせず、その歸る時には、市場の雜沓する中を衝き拔けて通り過ぎ、滿街の人をして、覺えず辟易せしむるばかり。かくの如く、おのが意の儘に橫行して居るが、司隸よ、之を忌んで糾彈するやうなことはせずもあれ、われとても、さう矢鱈に暴れ廻はつて居る譯でもなく、報國の赤心は、依然として存して居るから、明日は、遠征の軍に從つて、浚稽山下まで押し出し、君の爲に、胡騎の南下を遮つて、おもふ存分奮鬪して見たいと思つて居る。

【餘論】羽林郎の材武出身より始め、その風度游行に及び、爛醉の後、市中を過ぐる有樣を敍し、結末四句、その本來の志望を道うて、はじめて題意を完うした。

燕燕于飛

燕燕于飛

(一)燕燕何處飛。相見江南路。

燕燕、何處にか飛ぶ、相見る江南の路。

(二)薲香細雨春。柳色芳煙暮。

薲香、細雨の春、柳色、芳煙の暮。

(三)纔從二笳外一歸。復向二舟前一渡。

わづかに笳外より歸り、復た舟前に向つて渡る。

莫レ入(四)未央宮。(五)身輕有二人妒一。

入る莫れ未央宮、身輕くして人の妒むあらむ。

【字解】【一】燕燕　雙燕なるが故に、疊んで言つたのである。【二】薲香　唐韻に「薲、蘋同じ」とある。【三】笳外　笳は蘆。【四】未央宮　漢宮の名。【五】身輕　李商隱の詩に趙后身輕欲レ倚レ風とある。趙后は即ち趙飛燕。

【題義】燕燕于飛は、樂府遺聲に「鳥獸曲」とあり、樂府詩集に「雜曲歌辭、燕燕の詩に曰く、燕燕于飛、差池其羽、之子于歸、遠送二于野一と。燕燕于飛、蓋し此に出づ。按ずるに、燕燕は、本と衛の莊姜、歸妾を送るの詩なり。江總の辭の若きは、雙燕を詠ずるのみ」とある。燕燕于飛の詩は、詩經邶風の首に在つて、その下に、瞻望弗レ及、泣涕如レ雨の二句がある。それから、江總の作は、

二月春暉暉。雙燕理二毛衣一。銜レ花弄二簾幃一。拂レ葉隱二芳菲一。或在二堂間一戲。多從二幕上一飛。若作二仙人屣一。終向二日南一歸。

といふので、靑邱も、矢張、これに擬したのである。

【詩意】雙雙たる燕子は、何處に飛ぶかといふと、江南の路に於て、現に見たことがある。折から、細雨春を溼して、白蘋香しく、芳煙暮に棚引いて、綠柳色を弄すといふ樣な景色。燕子は、人家簾幙の外から歸り去つたかと思へば、再び舟の前を飛び渡つて居る。その素早くして、身の輕げなる、も

し漢宮に入つたならば、屹度、趙飛燕に妬まれるかと思はれる。

【餘論】前六句は平凡であるが、結二句を得て、いささか活趣を増した樣な感じがする。

浮游花

（一）宛宛庭中花。　宛宛たり庭中の花、
狂風忽吹去（二）無涯。　狂風忽ち吹いて、去つて涯なし。
上入逍遙之雲天。　上は逍遙の雲天に入り、
下没慘淡之泥沙。　下は慘淡の泥沙に沒す。
開落本同何足歎。　開落本と同じく、何ぞ歎ずるに足らむ、
（三）升沈偶異自堪嗟。　升沈偶ま異なるは、自ら嗟するに堪へたり。

【字解】【一】宛宛　宛は蜿と通ず。麗はしき貌。【二】去無涯　際涯なく遠くに飛び去る。【三】升沈　一は天に升り、一は泥に沈む。李白の詩に、升沈應已定、不必問君平とある。

【題義】浮游花は　樂府詩集に「雜曲歌辭」とあるだけで、題の解釋もなく、且つ無名氏の作が唯だ一首殘つて居るだけである。

窗中斜日照。池上落花浮。若畏春風晩。當思秉燭游。

これは、落花を見て、春光の將に盡きむとするを惜み、燭を秉つて夜宴を催さうといふのであるが、青邱の作は、興を落花その物に託して、暗に浮生の狀態を諷したのである。

【詩意】うるはしき庭中の花も、すでに盛りを過ぎたから、狂風一たび至れば、すこしも堪まらず、一まくりに吹き飛ばされて、際涯もなく飛んで行く。その中の或者は上つて、逍遙に適する雲天に入り、或者は下つて、慘淡たる泥沙の中に葬られて仕舞ふ。これ等の花は、咲くも散るも、本來全く同じであるが、如何なれば、その最後に於て、一は上り、一は下り、升沈の有樣が異なつて居るのか、それは、何の理由とてはなく、もとより、偶然の事であるが、自然嘆嗟するに堪へた次第である。

【餘論】結末二句、多少の諷意ありと見るべく、まさしく、失路者の怨辭である。

野田行

（一）白楊樹下誰家墳。　白楊樹下、誰が家の墳、
（二）火燒野草（三）碑無文。　火は野草を燒いて、碑に文なし。
路旁尚臥（四）雙石馬。　路旁尚ほ臥す雙石馬、
行人指是（五）故將軍。　行人指す是れ故將軍。

【字解】【一】白楊　前にも見ゆ。多く墓地に種う。今いふポプラ。【二】火燒野草　李益の野田行に鬼火燒白楊とあるを翻用す。【三】碑無文　石碑の文字が分からなくなつた。【四】雙石馬　貴人の墓前に

當時發卒開陰宅。　當時、卒を發して、陰宅を開き、
千車送葬城東陌。　千車、葬を送る城東の陌。
子孫今去野人來。　子孫今去つて野人來り、
高處牧羊低種麥。　高處には羊を牧し、低きには麥を種う。
平生意氣安在哉。　平生の意氣、安くにか在る、
棘叢暮雨棠梨開。　棘叢暮雨、棠梨開く。
百年富貴何足恃。　百年富貴、何ぞ恃むに足らむ、
雍門之琴良可哀。　雍門の琴、良に哀むべし。

は石馬を置く。史記霍去病傳の注に「冢前に石人馬あり」と記し、杜甫の玉華宮の詩に故物唯石馬とある。【五】故將軍　史記李將軍傳に「廣、かつて夜、一騎を從へて出で、人に從つて田間に飲み、還つて霸陵の亭に至る。霸陵の尉、醉呵して廣を止む。廣の騎曰く、故の李將軍、と。尉曰く、今の將軍、尙ほ夜行するを得ず、何ぞ乃ち故なるをや、と。廣を止めて亭下に宿せしむ」とある。【六】陰宅　墓穴。【七】千車　千輛の車、史記游俠傳に「劇孟の母死す、遠方より送葬す、車蓋し千乘」とある。【八】城東陌　ここの陌は、阡陌の陌で、田間の隙地。そこが卽ち墓地。【九】棘叢　荊棘の叢。【一〇】棠梨　甘棠や梨の類。【一一】雍門之琴　桓譚の新論に「雍門周、琴を以て孟嘗君に見ゆ。孟嘗君曰く、先生、琴を鼓す、亦た能く文をなして悲ましむるや、と。雍門周、琴を引いて之を鼓し、徐に宮徵を動かして角羽を叩き、終つて曲を成す、孟嘗君、歔欷して之に就く」とあつて、その注に「雍門は齊の城門」とある。すると、雍門は元と地名であつたが、後に姓になつたのであらう。なほ、文は孟嘗君の名。

【題義】野田行は、樂府詩集に「新樂府雜題」とあるだけで、說明もないが、その內容は、野田の邊なる墓地の景を敍して、人生の果敢なさに及んだのである。その一番古いのは、唐の李益で、卽ち左の通り、

日沒出古城。野田何茫茫。寒狐上孤塚。鬼火燒白楊。昔人未爲泉下客。行到此中曾斷腸。

靑邱の此作は、李益に比して、更に鋪張を爲し、その凄寂の趣を曲盡して居る。

【詩意】白楊の木の下に淋しく殘れるは、何人の墓であるか。野火は、あたりの草を燒き、石碑の文字は磨滅して、碌碌讀めもしない。路傍には、二つの石馬が倒れて橫はつて居るので、いづれ貴人に相違なからうと思つたが、よく聞けば、案の如く、むかしの將軍なにがしの墓所であるといふ話。おもへば、ここに埋葬する當時は、多くの人足を發して墓穴を開き、なかなかの大工事を爲し、そして車騎千輛、その喪を送つて、この城東なる墓地に來たことであらう。しかも、今日では、その子孫は何處かへ往つて仕舞ひ、田夫野人が遠慮なく遣つて來て、誰に斷るでもなく、容赦なく、この墓を衝き崩し、高處には羊を牧し、低處には麥を種ゑて、全くの野良と變りはてて仕舞つた。將軍生時の意氣は、安くに在るか。今では荊棘叢を爲せる處に、暮の雨降りしきり、棠梨わづかに花を開いて居る。百年の富貴も、いかで恃むべき。これに就けても、雍門周の彈じた琴の音は、この世の果敢ないことを示して、今でも、まことに哀れに物悲しげに覺える。

【餘論】結末四句は、旨意聲調、兩つながら悲惋で、一誦人をして覺えず魂銷せしめる。

壯士行

壯士行

無險非高山。無勇非壯士。　險として高山に非ざるはなく、勇として壯士に非ざるは「なし。

半夜殺風來。劍寒燈欲死。　半夜殺風來り、劍寒くして、燈死せむと欲す。

【字解】【一】殺風　殺氣を含んだ風。【二】燈欲死　燈火が消えかかつた。

【題義】壯士行は、樂府遺聲に「遊俠曲、一に吟に作る」とあつて、壯士吟・壯士篇なども皆同じてある。樂府詩集に「燕の荊軻の歌に曰く、

風蕭蕭兮易水寒。壯士一去兮不復還。

壯士篇、蓋し此に出づ」とある。

【詩意】險なるものは、高山を最とし、勇なるものは、壯士が第一である。その壯士が、何か心に思ふところあつて、孤坐するとき、夜は將に半ならむとし、劍を拂へば、光芒人に逼つて寒く、忽ちにして、殺氣を帶びた風が、颯颯として吹き入り、燈火も消えかかつて居る。

【餘論】殺風の二字は、靑邱の獨報に係ると思はれるが、まことに悽愴の極である。

邯鄲才人嫁爲厮養卒婦

邯鄲の才人嫁して厮養卒の婦と爲る

妾能擫趙瑟。舊得君王眷。　妾は能く趙瑟を擫し、舊と君王の眷を得たり。

更衣直夜房。侍酒登春殿。　衣を更へて夜房に直し、酒に侍して春殿に登る。

出宮非故顏。里婦猶相羨。　宮を出づれば故顏に非ず、里婦猶ほ相羨む。

叢臺罷往夢。破屋流螢見。　叢臺、往夢を罷め、破屋、流螢見はる。

末路多若斯。紛紛貴成賤。　末路多くは斯の若し、紛紛として、貴、賤と成る。

【字解】【一】擫　說文に「指にて按ずるなり」とある、卽ち指で彈ずること。【二】趙瑟　瑟は琴で、今は二十五絃。趙の地で製出されるから、趙瑟と云つたのである。【三】君王眷　眷は眷愛・眷顧、御ひいき。【四】更衣　天子の御著換の御世話をする。史記外戚世家に「武帝、霸上に祓し、還つて平陽主を過ぐ。すでに飮み、謳者進む。上、望み見て、ひとり衞子夫を悅ぶ。帝、起つて衣を更ふるや、子夫、尙衣に侍し、軒中に幸を得たり」とある。【五】直夜房　夜、御次の部屋に宿直する。【六】故顏　うるはしき昔時の顏容。【七】叢臺　一統志に「叢臺は邯鄲縣北に在り」と記し、史記に「趙の武靈王の築くところ」とあり、李白の邯鄲才人行に奕本叢臺女、揚蛾入丹闕」とある。【八】流螢　どこからともなく飛んで來る螢。

【題義】邯鄲才人嫁爲厮養卒婦」は、樂府遺聲に「佳麗曲。邯鄲の才人あり、嫁して厮養卒婦となる、蓋し古しへ是事あるなり」といひ、樂府詩集に「雜曲歌辭」とある。邯鄲は、戰國の時の趙の都、才人は宮人の稱。それから薪僕を厮といひ、炊僕を養といふから、厮養は奴僕。この題は、むかし邯鄲なる趙王の宮中に奉仕して居た宮人が、如何なる故か、君寵衰へたるに因つて、宮を出で、人もあ

らうに、賤しい奴僕の妻と成つたといふ意。この題の作の中で一番古るいのは、齊の謝朓で、その全篇は、

　生平宮閤裏。出入侍ニ丹墀一。開レ篋方ニ羅縠一。窺レ鏡比ニ蛾眉一。初別意未レ解。去久日生レ悲。顦顇不ニ自識一。嬌羞餘ニ故姿一。夢中忽彷彿。猶言承ニ讌私一。

胡震亨は「眺、蓋し其事を設言して、臣妾淪擲の感を寓す、揚升庵以爲へらく、この卒は、即ち趙王武臣に御として歸るもの、と。恐らくは然らず」といつて居る、次に李白の作は、

　妾本叢臺女。揚レ蛾入ニ丹闕一。自倚顏如レ花。寧知有ニ凋歇一。一辭ニ玉階下一。去若ニ朝雲沒一。毎憶邯鄲城。深宮夢ニ秋月一。君王不レ可レ見。惆悵至ニ明發一。

これは、李白が、その身、一旦讒誣に遭ひ、君側を遠ざけられて江湖に流落した感慨を敍したものと稱せられて居る。但し、青邱の此作は、唯だ餘り人が手を付けない古題を試作したといふだけで、格別深い意味もないと思はれる。

【詩意】私は、瑟を彈ずることが上手で、その爲に、君王の眷愛を得、夜は、御著換の御世話をする爲に、御次の部屋に宿直し、晝は、御酒宴に侍坐する爲に、春の日、高殿の上に登り、まことに、人も羨む樣な身分であつた。さきに一たび宮を出でて、奴僕の妻と成り下つてからは、朝夕水仕事をするので、最早むかしの俤は無い樣に成つたが、これでも同里の婦人どもは、標致よしだといつて、頻りに羨ましがつて居る。おもへば、叢臺に居て、榮華を誇つたのは、むかしの夢と成りはてて仕舞ひ、今は、あばら家の内に起臥して、しづ心なき流螢を眺めて居る。しかし、浮世の末路は、大抵かうしたもので、貴い位地に居るものが、俄に賤しくなるのは、ひとり自分ばかりではなく、紛紛として、その例は、幾らもある。

【餘論】末路多レ若レ斯の二句は、自覺の語で、この命、奈かむともすべからざるをいひ、その中に無限の感愴と悲哀とがある。

秋風引

嗟爾秋風。
胡爲來哉。
奏ニ商(一)律一兮瑟(二)颸
　而悲哀。
叩ニ喬(三)柯一而隕レ葉。
掃(四)ニ廣路一以淸(五)レ埃。

秋風引

嗟、爾秋風、
胡すれぞして來るや。
商律を奏し、瑟颸として悲哀。
喬柯を叩いて、葉を隕し、
廣路を掃うて、以て埃を淸む。

【字解】【一】商律　秋は律呂の上で商調に屬するが故に云ふ。【二】瑟颸　韓愈の詩に、霅霅颯颸とあり、正韻に「颸、音は聿、大風なり」とある。瑟颸はシツイツで、風聲の強く淒じきを云ふ。【三】喬柯　高い枝幹。【四】掃廣路　廣い大道を吹き掃ふ。【五】淸埃　塵埃を吹

入(六)班姬之永巷。　班姬の永巷に入り、

過(七)襄王之高臺。　襄王の高臺を過ぐ。

瑤琴自鳴。　瑤琴自ら鳴り、

羅幃齊開。　羅幃齊しく開く。

馬蕭蕭而嘶起。　馬は蕭蕭として嘶起し、

鴻(八)嗷嗷以翔廻。　鴻は嗷嗷として以て翔廻す。

使崩雲駭浪震

盪於白日兮。　崩雲駭浪をして、白日を震盪せしめ、

怱欲去而徘徊。　怱ち去らむと欲して徘徊す。

客有懷鄕失職

而對此者。　客に鄕を懷ひ職を失うて此に對するものあり、

恨盈襟而難(九)裁。　恨、襟に盈ちて裁し難し。

但欲變天地之　但だ天地の搖落を變せむと欲して、

き去つて淸淨にする。【六】班姬之永巷　班姬は班婕妤、前に班婕妤の題下に詳しく注して置いた。爾雅に「永巷は宮中の衝、又、これを壼といふ」とあつて、邦語ではつぼ、桐壼梨壼などの壼、卽ち後宮の部屋。【七】襄王之高臺　巫山に在る陽臺、前に巫山高の題下に述べて置いた。【八】嗷嗷　かまびすしき形容。【九】難裁　斷ち切ることが出來ぬ。【一〇】搖落　草木の枝葉が搖すれて葉が落ちる。【一一】節序　季節。

搖(一〇)落。

不知感(一一)節序之

摧頽。　節序の摧頽に感ずるを知らず。

秋風生歸去來。　秋風生ず、歸去來。

【題義】秋風引は、樂府遺聲に「時景曲」とあり、樂府詩集には「琴曲歌辭」とあつて、秋風に託興して、淒涼悲哀の感を述べたので、單に秋風といふのも同じである。

【詩意】ああ、汝、秋風、如何なれば此に吹き至るか。秋風は、物悲しい商調を奏でて、その聲、瑟瑟颸颸、洵に悲哀を極めて、到底聞くに堪へられない。秋風吹き至るや、高い木木を叩いて葉を落し、廣い都大路を吹き掃つて、塵を淸める。班婕妤の部屋に入つては、團扇を抛つて、その身の薄命に思ひくらべしめ、襄王の陽臺を過ぎては、朝雲暮雨、歡會唯だ夢中に在つて、その跡尋ぬるに由なきを歎かしめる。秋風の吹くにつけては、瑤琴も自然に鳴り出して、その響太だ淸越、羅幃齊しく吹き捲かれて、室中愈よ物淒じく覺える。そこで、馬は蕭蕭として嘶いて起ち、雁は嗷嗷として飛んで還つて來る。はては、その勢、愈よ加はり、崩雲駭浪を白日の中に震盪せしめ、滿目慘澹、立ち去らうとしても、徘徊して、なほ佇んで居る。ここに、故鄕を懷ひ、職を失ひ、孤獨不遇を嘆じつつ、秋風

に對するものがあつて、恨は衣襟に滿ちて、斷ち切り難く、どうかして、天地の搖落を變じて、陽春の長閑けさに引き戻さうとしても、それは、季節の推頽に當つて、今更致し方もないといふことに思ひ付かぬからで、いくら、あせつて見たところで、全然徒勞である。されば、秋風の生じた時は、立ち去つて、おのが故鄕に歸るより外はない。

【餘論】全篇、楚騷の聲調を取り入れた爲に、臭腐を化して神奇となした樣な感じがする。瑤琴自鳴より忽欲ㇾ去而徘徊に至るまでの六句は、篇中の精彩であるが、結末の稍や振はぬのは、まことに物足らぬ樣に覺える。なほ鍾廣漢の評に「善く太白を學ぶ」とある。

涼州詞二首

涼州の詞　二首

(一)蓬婆城下淨無ㇾ花。　蓬婆城下、淨として花なし。
慘慘黃(二)雲漠漠沙。　慘慘たる黃雲、漠漠たる沙。
(三)卷ㇾ葉誰將二(四)番曲一奏。　葉を卷いて、誰か番曲を將て奏す。
白頭(五)都護亦思ㇾ家。　白頭の都護、亦た家を思ふ。

【字解】【一】蓬婆城　元和郡國志に「柘州城、西面險阻にして、國守に易し。安戎江・蓬婆水あり、州南に在り。大雪山、一名蓬婆山、柘縣の西北に在り」と見え、杜甫の詩に更奪蓬婆雪外城とある。すると蓬婆城は、西藏境に近い處で、大雪山の麓に在る。【二】黃雲　夕方の雲。【三】卷葉　即ち胡笳、史記樂書に「胡笳は、觱栗に似て孔なし。後世、鹵簿、これを用ふ。伯陽、避けて、西戎に入つて作るところ、蘆葉を卷いて之を吹く」とあり、文獻通考に「葉を卷くは元と笳の制」とある。【四】番曲　番は蕃に通ず。【五】都護　西域鎭守の官名、漢書鄭吉傳に「吉、車師を破り、日逐を降し、威、西域に震ふ。遂に幷せて車師以西北道を護す、故に都護と號す」とある。

【題義】涼州詞、又、涼州・涼州歌ともいふ。樂府遺聲に「都邑曲」とあり、樂府詩集に「近代曲辭」とあり、樂苑に「涼州は宮調曲、開元中、西涼府都督郭知運の進むるところなり」とあり、西域記に「龜茲國王、臣庶の樂を知るものと、大山の間に於て、風水の聲を聽き、約節して音を成し、後、翻つて中國に入る。伊州・涼州の如きは、皆龜茲の境なり」とある。すると、涼州は、その初、中央亞細亞から來た音譜で、西涼府都督が傳獻したから、涼州といひ、もとは、樂章が無かつたから、その頃、著名の詩人の作を以て塡充したのである。今傳ふる涼州歌の古いものは、第一・第二・第三・排遍第一・第二といふ樣に、五段に分かれて居て、それに、當時の詩を嵌めたから、もとより、意味は連續して居ない。その第二は、

朔風吹ㇾ葉雁門秋。萬里烟塵昏二戍樓一。征馬長思青海北。胡笳夜聽隴山頭。

といふので、これだけは、兎に角、塞外の光景を述べて居るが、他の四首は、宮禁だの、狩獵だのに關したものである。殊に第三の

開ㇾ篋淚霑ㇾ臆。見二君前日書一。夜臺何寂寞。猶是子雲居。

は、高適の五古の結末四句を切り離したものである。そこで、後人が涼州詞を作るには、少くとも、その聲調に本づくべき筈であるが、詩人は大抵音律を知らぬ處から、さういふ譯に行かず、唯だ涼州といふ題名だけを取つて、邊塞に關した事實を詠出する樣に成つた。左の數首は、卽ち其例である。

國使翩翩隨旆旌。隴西岐路正荒城。氈裘牧馬胡雛小。日暮蕃歌三兩聲。　耿　湋

鳳林關裏水東流。白草黃楡六十秋。邊將皆承主恩澤。無人解道取涼州。　張　籍

昨夜蕃兵報國讎。沙州都護破梁州。黃河九曲今歸漢。塞外縱橫戰血流。　薛　逢

靑邱の此作も、矢張、張籍等と同じく、主として西境邊塞の光景を敍したのである。

【詩意】蓬婆城下は、高寒の地であるから、四野は、さつぱりとして、花咲く草木だになく、黃昏の雲は慘慘、見わたす限りの砂磧は漠漠として居る。この時しも、蘆葉を卷いて作つたといふ彼の胡笳を吹きすさんで、耳なれぬ蕃曲を奏するは、何者であるか。その聲、極めて悲しく、白髮頭の都護まても、家を思うて、心腸を斷つばかりである。

【餘論】この一首は、笳聲の悲しいことを詠出したので、笳は、卽ち胡地の象徵である。

(一)關外垂楊早換秋。　關外の垂楊、早く秋を換ふ、

行人落日旆(二)悠悠。　行人落日、旆悠悠。

(三)隴頭高處愁西望。　隴頭高き處、愁へて西望、

只有黃河(四)入漢流。　只だ黃河の漢に入つて流るるのみあり。

【字解】【一】關外　關は、多分、玉門關であらう。卽ち中國より西域に通ずる境上の關門。【二】旆悠悠　詩經に悠悠旆旌とある。旆は大旗、悠悠は旗のゆらゆらする貌。【三】隴頭　卽ち隴山、前に隴頭水の題下に注して置いた。【四】入漢　漢は中國。

【詩意】玉門關外は、荒寒であるから、垂柳も早く秋の色に換はつて、黃ばんで仕舞つた。征人どもは、夕日の舂く頃、大旗を推し立てて、しづしづと其處を練り行くのである。やがて、隴山の頂に達すると、西望して心を愁へしむるばかり、唯だ黃河の水のみ、東に向つて屈曲しつつ、流れて中國に入るのが賴母しいが、その他は、すべて塞外の光景で、全く從前見ぬところである。

【餘論】後半二句は、壯濶なる遠眺の中に無限の愁思を生じたので、この種の題に最も相應しい佳句である。

虞美人曲

虞美人の曲

明月帳中泣。悲風營外歌。　明月は帳中に泣き、悲風は營外に歌ふ。

(一)彷徨夜驚起。何事楚人多。　彷徨して夜驚いて起つ、何事ぞ楚人の多き。

廻レ燈擁ニ綠髻一。(二)向レ劍(三)蹙ニ青蛾一。　燈を廻らして綠髻を擁し、劍に向つて青蛾を蹙む。

(四)效レ命自無レ恨。君王其奈何。　命を效して自ら恨なし、君王其れ奈何。

【字解】〔一〕彷徨　さまよふ、去留に迷ふ樣をいふ。〔二〕向劍　史記には書いてないが、虞美人は劍に伏して死んだので、これは、將に死なむとする時をいふ。〔三〕蹙青蛾　青い眉を顰める。〔四〕效命　命を棄てる。

【題義】虞美人曲は、樂府詩集などにも見えて居ないが、唐宋以後、虞美人草行などいふ題は、いくらもあつて、青邱の此作も、矢張類似のものである、必ずしも、これを樂府と見ずとも善いが、青邱の當時、楊鐵崖は、詠史の諸作を自ら樂府と稱して居たので、これも、聊かそれにかぶれたのであらう。史記項羽本紀に「項王の軍、垓下に壁す。兵少くして食盡く。漢軍及び諸侯、これを圍むこと數重、夜、漢軍の四面皆楚歌するを聞き、項羽、乃ち大に驚いて曰く、漢、皆すでに楚を得たるか、これ何ぞ楚人の多きや、と。項王、乃ち夜起つて帳中に飲む。美人あり、名は虞、常に幸せられて從ふ。駿馬あり、名は騅、常に之に騎す。ここに于て、項羽、乃ち悲歌慷慨、自ら詩を爲つて曰く、

力拔レ山兮氣蓋レ世。時不レ利兮騅不レ逝。騅不レ逝兮可ニ奈何一。虞兮虞兮奈ニ若何一。

歌、數ば闋る。美人、これに和す。項王、泣數行下る。左右皆泣いて、敢て仰ぎ視るなし」とあり、又楚漢春秋には、この時虞姬が項羽に和して作れる詩を載せてある。

漢兵已略レ地。四方楚歌聲。大王意氣盡。賤妾何聊レ生。

もし、この詩が確實の者ならば、無論、蘇李の唱和に先つて居るから、五言詩の元祖としても善いのであるが、何分にも、聲調といひ、構想といひ、ともに、この時代の者とは受け取れず、もしかすると、唐人詠史の逸詩ではなからうかと思はれる。

【詩意】明月は帳中にさし込んで、さながら泣くが如く、悲風は營外に吹きすさんで、歌ふが如く聞こえる。この時しも、項王は、夜驚いて起ち、彷徨して去りもあへず、かばかり楚人の多いのは何事ぞ、もう自分の運命も、これまでだといつて嘆息した。ここに、虞美人は、消えなむとする燈火を廻らし、自ら綠なす其髻を押さへ、劍を拔いて其首に當てむとし、しかも、劍を見詰めつつ、眉を皺めて、しばし躊躇する樣のいぢらしさ。私が命を棄てるは、何でもないことで、すこしも殘念とは思はぬが、さて君王は、これから、どう成されると、その心の中に考へたであらう。

【餘論】絶好の題目を無造作に片づけた爲め、いささか、呆氣ない樣な感じがする。これ等は、宜しく七古でも試みて、大に厥辭を放つべき處である。なほ此詩は、拗體の五言律で、起首に於て對偶を爲したから、前聯は、故らに散體を以て遣つたので、唐人に於ては、數ば見るところである。

築城詞

築城の詞

去年築城卒。霜壓城下骨。　去年築城の卒、霜は壓す城下の骨。

今年築城人。汗灑城下塵。
（一）大家擧レ杵莫レ住レ手。
（二）城高不レ用二（三）官軍守一。

今年築城の人、汗は灑ぐ城下の塵。
大家杵を擧げて、手を住むる莫れ、
城高ければ官軍の守るを用ひず。

【字解】【一】大家　種種の意味に用ひるが、ここのは皆の衆といふ樣に取るが善からう。【二】城高　城は城郭その物を指すこともあるが、ここらのは、城壁と見ればならぬ。【三】官軍　ここでは張士誠の部衆を指すらしい。

【題義】築城詞、一に築城曲といふ。樂府正聲には「征戍曲」とあり、樂府詩集には「雜曲歌辭」とある。馬縞の中華古今注に「秦の始皇、三十二年、讖書を得たり、云ふ、秦を亡すものは胡と。乃ち蒙恬をして胡を擊ち、長城を築かしむ。時に民怨んで勞苦し、死者相屬す。民歌つて曰く、

生レ男愼勿レ擧。生レ女哺用レ脯。不レ見長城下。尸骸相支拄。

後、因つて築城の曲あり」といひ、淮南子に「秦卒五十萬を發して修城を築き、西は流沙に屬し、北は遼水に繫り、東は朝鮮に結ぶ。中國內郡、車を輓いて之に餉す。後、因つて築城曲あり」と見え、ともに、長城を築いて胡虜を限るといふ其工事に關したものとしてある。樂府詩集には「又築城睢陽曲あり、これと同じからず。古今樂錄に曰く、築城相杵は、漢の梁の孝王より出づ。孝王、睢陽城を築く、方十二里、唱聲を造り、小鼓を以て節と爲し、築くもの杵を下し、以て之に和す。後世、その聲を謂つて睢陽曲となす。晉太康地記に曰く、今樂家の睢陽曲は、これ其遺音と。唐書樂志に曰く、睢陽操、舂牘を用ふと、是れなり。按ずるに、漢書に曰く、梁の孝王、睢陽城を廣むる七十二里と。而して、十二里と云ふ、未だ孰れか是なるを知らず」とある。すると、睢陽の築城曲は、杵で土を撞き堅める者に歌はせたのである。靑邱の此作は、長城の大工事と睢陽の下杵とを打して一丸とした樣なものであつて、多分、至德十九年七月、張士誠が大に浙西諸郡の民を發して杭城を築いた其時の作なるべく、築者に向つて、その仕事を忽にせぬ樣にと、激勵の意を主として述べたのである。

【詩意】去年、築城の工事に出た人夫どもは、いづれも、死んで仕舞つて、その骨を城下に暴らし、そして、白骨は霜に壓せられて、見るも傷ましげな有樣である。今年、築城の工事に出た人夫どもは、今しも、仕事の眞最中で、流るる汗は、城下の塵に注ぐ位。何にしても、築城は大工事で、幾多の生靈が、その爲に苦むことは、言ふまでもない。しかし、城は、どうしても築き上げねばならぬから、皆の衆、精精骨を折つて盡力し、城壁の土を撞き固める其杵を擧げて、決して手を止めてはならぬ。城壁が見上ぐるばかり高く堅固に出來れば、萬一の場合にも、官軍の防守を用ひず、城中の民は、枕を高くして眠ることが出來る。

【餘論】結二句は、作者の本志で、勸說太だ力めたものである。

永嘉行

永嘉行

帝衣濺血忠臣死。　帝衣血を濺いで、忠臣は死し、
五部初興屠各子。　五部初めて興る、屠各の子。
宣陽門外曉吹笳。　宣陽門外、曉に笳を吹く、
持戟誰爲衞宮士。　戟を持して、誰か衞宮の士となる。
滿城草綠胡馬嘶。　滿城草は綠にして、胡馬嘶き、
內家散作軍中妻。　內家散じて軍中の妻と作る。
六璽相隨渡河去。　六璽相隨つて、河を渡つて去り、
月明歸夢遂成迷。　月明歸夢、遂に迷を成す。
萬里中原非典午。　萬里中原、典午に非ず、
至今人說王夷甫。　今に至つて人は說く王夷甫。

【字解】【一】帝衣濺血忠臣死　通鑑に「惠帝の永興元年、東海王越、帝を奉じて北征す。河間王顒、石超を遣し、衆五萬を率ゐて拒ぎ戰ふ。乘輿、蕩陰に敗る。帝、頰を傷つく。百官侍御、皆散す。前侍中嵆紹、朝服、馬より下りて輦に登り、身を以て帝を衞る。兵人、紹を轅下に引いて之を斫る。帝曰く、忠臣なり、殺す勿れ。對へて曰く、太弟の令を奉ず、惟だ陛下一人を犯さざるのみ、と。遂に紹を殺し、血、帝衣に濺ぐ。帝、草中に墮つ。超、帝を奉じて、その營に幸す。帝、餒うること甚し。水を進めしむ。左右、秋桃を奉す。顒、盧志を遣し、帝を迎へて鄴に入る。左右、帝の衣を浣はむと欲す。帝曰く、嵆侍中の血、浣ふ勿れ」とある。【二】五部初興屠各子　通鑑紀事本末に「漢の靈帝中平五年三月、詔して、南匈奴の兵を發し、劉虞に配して張純を討つ。單于羌渠、左賢王を遣し、騎を將ゐて幽州に詣る。國人、兵を發して已むなきを恐る。ここに于て、左部醯落反し、屠各胡と合して羌渠を殺し、右賢王子扶羅を立て、持至尸逐侯單于と爲す。建安二十一年に至りて、南單于扶羅の子呼廚泉、魏に入朝す。魏王、これを鄴に留め、その衆を分つて五部と爲す。晉の武帝の泰始五年、南匈奴、自ら謂ふ、その先は漢氏の外甥と。因つて劉氏を姓とす。呼廚泉の兄の子豹、豹の子淵、僭して漢と稱し、皇帝の位に晉陽に卽き、永嘉五年、劉曜・王彌・石勒を遣して、洛川に寇せしめ、懷・愍二帝を虜にす」とある。すると、五部は南匈奴、それが屠各の子だといふのが、この句の意味らしいが、上に引ける史實に對照して、聊か誤つて居る。屠各は胡族の名で、格別の事も仕出かさなかつた。【三】宣陽門　通鑑に「辛卯、王彌、宣陽に至る」とあつて、その注に「宣陽門は、洛城南面東來第四門」とある。【四】持戟誰爲衞宮士　王彌の軍が洛陽に入ると、惠帝は、仕方がないから、逃走しようとした。この句は、宮門を衞る持戟の兵士が一人も居ないといふ意。通鑑に「帝、歩して西掖門を出で、銅駝街に至り、盜に掠められ、進むことを得ずして還る」とある。【五】內家　李賀の詩注に「內家は宮掖なり。唐典に云ふ、若し犯さば、婦人を籍沒し、巧者は掖庭に入る、と。又中使は內家三十人を押領す」とある。【六】六璽相隨渡河去　六璽は傳國の璽及び其他の御印。河は黃河。通鑑に「劉曜、西明門より入つて、武庫に屯し、諸陵を發掘し、宮廟官府を焚いて皆盡く。惠帝の后羊皇后を納れ、帝及び六璽を平陽に遷す」とある。【七】遂成迷　迷うて其處に至らざること。【八】典午　蜀志譙周傳に典午忽兮、月酉沒兮とある。典は司、午は馬。司馬は晉の姓、卽ち隱語である。【九】王夷甫　王衍、字は夷甫。竹林七賢の一、晉室を救濟する能はず。且つ、その末路、節に殉すること能はざるを以て、後人の批難が多い。晉書桓溫傳に「溫、淮泗を過ぎて北境を踐み、諸僚屬と平乘樓に登り、中原を望んで、歎じて曰く、遂に神州をして陸沈し、百年邱墟ならしむ、王夷甫諸人、その責に任ぜざるを得ず」とある。

【題義】永嘉行は、樂府詩集に「新樂府雜題」とあつて、西晉永嘉の末の史實を詠出したのである。晉書懷帝紀に「永嘉五年六月、癸未、劉曜・王彌・石勒、同じく洛川に寇す。王師、頻りに賊に破らる。丁酉、劉曜・王彌、京師に入る。帝、華林園の門を開き、河陰の藕池に出で、長安に幸せむと欲し、曜等に追及せられ、遂に宮廟を焚燒し、逼つて妃后を辱かしむ。百官士庶、死するもの、三萬餘人。帝、

平陽に蒙塵す。劉聰、帝を以て會稽公となす」とある。この作の今傳はつて居るものは、無名氏の一首で、卽ち左の通りである。

黄頭鮮卑入二洛陽一。胡兒持レ戟升二明堂一。晉家天子作二降虜一。公卿奔走如二牛羊一。紫陌旌旛暗相觸。家家雞犬驚上レ屋。婦人出レ門隨二亂兵一。夫死二眼前一不二敢哭一。九州諸侯自曠土。無二人領レ兵來護レ主。北人避レ胡多在レ南。南人至レ今能二晉語一。

青邱の此作は、人の餘り注意しなかつた題目を拾ひ出して、聊か其才を試みたのである。

【詩意】蕩陰に於て、北征軍が大敗北をした時、侍中の嵆紹は、惠帝を庇つて殺され、その血は、天子の御衣に灑いだ。その頃、南匈奴の五部が頻りに勢力を得て、內地に侵入し、その首領は、劉淵といひ、もと屠各族の後裔である。やがて、胡軍は、洛陽に逼り、宣陽門外に於て、曉早く胡笳を吹きすさぶ聲かしましく、今は、戟を持して皇宮を守衞するものなくして、天子は自然蒙塵を免れず、その跡なる城中には、草が綠に生ひ茂つて、胡馬の嘶くに任かせ、幾多の宮女は、盡く散じて皆軍士の妻となり下り、劉曜、一たび洛陽に入るや、帝及び六璽を移し、黃河を渡つて、平陽に往つて仕舞ひ、月明の夜、せめては洛陽に歸る夢でも見やうと思つても、迷ひに迷うて、其地にも行かれぬといふ始末。中原萬里の地は、今や司馬氏の有に非ず、王夷甫などいふ奴原は、その責を分たねばならぬといつて、千秋の後、なほ批難されて居る。

【餘論】通篇、槪ね敍事、吹笳、持戟、胡馬、內家等の數句は、作者の想像ではあるが、決して、虛泛でなく、人をして、當時の慘狀を臆想せしめる。結二句は論斷、全幅の精神、ここに注いで、その中に、無量の感慨がある。

神女宛轉歌。二首

駐二君舟一。相見盡(一)二綢繆一。
已遣二大姬傾(二)二鑿落一。
復令二小婢進(三)二箜篌一。
歌宛轉。宛轉意何長。
願爲二灰與一レ火。同泛玉爐香。

神女宛轉の歌　二首

君が舟を駐め、相見て綢繆を盡す。
すでに、大姬をして鑿落を傾けしめ、
復た小婢をして箜篌を進めしむ。
歌宛轉、宛轉意何ぞ長き。
願はくは、爲らむ、灰と火と、同じく泛ぶ玉爐の香。

【字解】【一】盡綢繆　纏綿の思を盡す。【二】鑿落　韓愈の詩に「能傾二鑿落一」とあつて、卽ち酒器。【三】箜篌　立て琴。

【題義】神女宛轉歌は、樂府正聲に「琴曲歌辭」とあり。前に宛轉行の條に於て、聊か述べて置いたが、その本事は、舊と續齊諧記に見えて居るから、下に全文を引抄することにする。曰く、劉妙容、字は雅華、吳令劉惠明の女なり。大婢は春條、小婢は桃枝、皆箜篌を善くして宛轉歌を歌ふ。相繼い

で倶に卒す。後に會稽の王敬伯といふものあり、東宮衛佐となりて、吳を過ぎ、舟を中渚に維ぎ、亭に登りて月を望み、悵然として懷ふあり、乃ち琴に倚つて、泫露の詩を歌ふ。俄にして、戸外に嗟賞の聲あるを聞く。一女子を見る。敬伯に謂つて曰く、女郎、君の琴を悅ぶ、願はくは、共に之を撫せむと。すでにして、女郎至る。姿容婉麗、綽として姿態あり。二少女を從ふ。女郎、大婢をして、酒を酌み、小婢をして、箜篌を彈じて宛轉歌を作さしめ、女郎、金釵を脫し、絃を扣いて之に和す。將に去らむとし、錦臥具・繡香囊を留めて、敬伯に遺る。敬伯、報ゆるに牙火籠・玉琴軫を以てし、悵然として別る。敬伯、虎牢戌に至る。會ま、悳明、舟中に臥具を亡ひ、敬伯の舟に于て得たり。敬伯、具さに以て告ぐ。果して帳中に于て火籠・琴軫を得たり。乃ち三女が妙容・春條・桃枝たるを知る。唐の李端、又王敬伯の歌あり、亦た此に出づ。その歌に云ふ、

月既明。西軒琴復清。寸心斗酒爭二芳夜一。千秋萬歲同一情。歌宛轉。宛轉淒以哀。願爲二星與一レ漢。形影共徘徊。

悲且傷。參差淚成レ行。低紅掩翠方無レ色。金徽玉軫爲レ誰鏘。歌宛轉。宛轉淸復悲。願爲二煙與一レ霧。氤氳對二容姿一。

靑邱の此作は、劉妙容に代つて作つたので、後の王敬伯歌とは表裏を爲すものである。

【詩意】すでに、君の舟を駐め、相見て思の丈けを盡し、大婢をして、鑿落の杯を傾けて酒を酌ましめ、小婢をして、箜篌を彈せしめた。その唱へるのは宛轉歌で、その名の如く、聲調宛轉、意長くして盡きない。願はくは、私の此身を以て、灰となり、火とならしめ、君が贈られた牙火籠の中に在つて、一縷の煙と燃え上り、その匂ひを四邊に泛べたいものである。

解二(一)妾珮一。相貽慰二(二)離異一。　妾が珮を解き、相貽つて離異を慰む。

愁逐二(三)朝霞一天際生。　愁は朝霞を逐うて天際に生じ。

(四)歡隨二秋水一江頭逝。　歡は秋水に隨つて江頭に逝く。

歌宛轉。宛轉情相續。　歌宛轉、宛轉情相續ぐ。

願爲(五)絃與レ軫。共奏瑤琴曲。　願はくは爲らむ、絃と軫と、共に奏す瑤琴の曲。

【字解】【一】妾珮　珮は佩玉で、卽ち腰に佩ぶもの。尤も玉ばかりではなく樣樣の物が付いて居る。【二】離異　鄕を離れたる異客の情。【三】朝霞　朝やけ。【四】歡　前にも見ゆ。郞といふに同じ。【五】絃與軫　釋名に「琴下、絃を轉するもの、これを軫といふ」とあつて、扭つて絲を締めるもの。

【詩意】私の腰飾を解いて、その中なる繡香囊を君に贈り、君が離鄕異客の淋しさを慰めたいと思ふ。やがて、愁は、あけ方の朝やけと共に天際に生じ、そして、君は、秋水に隨つて、江頭に往かれて仕

舞ふ。今しも唱へるのは宛轉歌で、その名の如く、聲調宛轉、情思は長く續いて、容易に斷絕しない。願はくは、私の此身を以て、琴に亙せる絃となり、又君の贈られた軫とならしめ、そして、ともに瑤琴の一曲を奏し、この思ひの丈を述べたいものである。

【餘論】二首、ともに事實に沿ひ、牙火籠・玉琴軫を倩ひ來つた爲に、結構散漫ならずして、極めて切實緊密である。前首では願爲灰與火の二句、後首では愁逐朝霞天際生の二句、ともに、一往情の深きを覺える。

東門行

出東門。暮歸來。
入室四(一)壁空。
(二)突中無煙甑生埃。
(三)弱妻(四)蓬頭稚子瘦。
使我(五)心下忽有哀。
安能學(六)東方生。

東門行

東門を出でて、暮に歸り來る。
室に入れば四壁空しく、
突中に煙なく甑に埃を生ず。
弱妻は蓬頭、稚子は瘦す、
我が心下をして、忽ち哀あらしむ。
安んぞ能く、東方生を學ばむ、

【字解】【一】四壁空　ただ四面に壁がある丈で、その中には一物もない。【二】突中無煙甑生埃　突は煙突、甑は米を入れる素燒の瓶。【三】弱妻　年わかき妻。【四】蓬頭　頭髮亂れて蓬の如きをいふ。【五】心下　心中・胸中に同じ。【六】東方生　卽ち東方朔、下に見ゆ。【七】國士　一國に冠たる士、史記淮

空抱國士(七)才。
(八)身長七尺齒編貝。
索米不得取(九)笑咍。
(一〇)鷄鳴東門早欲開。
(一一)仗劍當遠去。
(一二)不乘駟馬不復廻。
妻前挽衣言。
君可棄妾奈此呱(一三)
呱孩。
君莫憂無糧。
田中已生(一四)秫。
君莫憂無(一五)裳。
機中布成倘可裁。

空しく國士の才を抱く。
身の長七尺、齒は貝を編む。
米を索めて、笑咍を取るを得ず、
鷄鳴、東門、早く開かむと欲す。
劍に仗つて、當に遠く去るべし、
駟馬に乘せずんば、復た廻らず。
妻は前んで衣を挽いて言ふ、
君、妾を棄つべきも、この呱呱の孩を
奈かむ。
君、糧なきを憂ふる莫れ、
田中、すでに秫を生ず。
君、裳なきを憂ふる莫れ、
機中、布成らば、倘ほ裁すべし。

陰侯傳に「信の如き者に至りては、國士無雙」とある。【八】身長七尺齒編貝　漢書、東方朔傳に「臣、朔、年二十二、長九尺三寸、目は懸珠の若く、齒は編貝の若く、勇は孟賁の若く、捷は慶忌の若く、廉は鮑叔の若く、信は尾生の若し。かくの若くんば、以て天子の大臣たるべしと。上、その高く自ら稱譽するを偉なりとし、公車に待詔せしむ。奉祿薄くして、未だ省見するを得ず。これに久しうして曰く、朱儒は長三尺餘、一囊の粟を奉じ、錢二百四十。臣、朔、長九尺餘、亦た一囊の粟を奉じ、錢二百四十。朱儒、飽いて死せむと欲し、臣朔、飢ゑて死せむと欲す。臣の言、用ふべくんば、幸に其禮を異にせよ。用ふべからざれば、之を罷めよ。但だ長安の米を索めしむる無かれと。

不ㇾ須苦(一六)慕ニ富貴一。　須ひず、苦に富貴を慕ふを、

富貴多有ニ害(一七)菑一。　富貴、多くは害菑あり。

賤妾與ㇾ君生同ㇾ居。　賤妾、君と生きては、居を同じうし、

死卽共作ニ山(一八)下灰一。　死しては、卽ち山下の灰と作らむと。

吾欲ㇾ行。爲徘徊。　吾、行かむと欲して、爲に徘徊。

仰視ニ蒼天一重咄(一九)哉。　仰いで蒼天を觀る、重ねて咄なるかな。

上、大に笑ひ、因って金馬門に待詔せしめ、稍や親近さるるを得たり」とある。【九】矢哈　哈も笑ふ、范成大の詩に推ㇾ枕藍然一笑哈とある。【一〇】鷄鳴　夜あけの頃。【一一】仗劍　劍に縋る、史記、淮陰侯傳に「項梁、淮を渡る。信、劍に仗つて之に從ひ、麾下に居るも、名を知らるるところなし」とある。【一二】不乘駟馬不復廻　一統志に「成都府城北昇仙橋、司馬相如、東游するとき、その柱に題して曰く、駟馬車に乘ぜざれば、復た此を過ぎず」とある。駟馬は四頭立の馬。【一三】呱呱孩　オギャーオギャーと泣く嬰兒、書經に「辛壬癸甲、啓呱呱として泣く」とある。【一四】生秣　說文に「齊、麥を謂うて秣といふ」とある。【一五】無裳　裳は下衣であるが、ここでは衣裳の義に用ふ。【一六】苦慕富貴　苦は、れんごろにと訓ず、あくまでといふ意。【一七】害菑　菑は禍殃。【一八】山下灰　灰は塵に同じ。【一九】咄哉　咄は愚圖愚圖と不平らしき聲、世說に「殷中軍、廢せらる。終日、恆に空に書して、咄咄怪事の四字を作るのみ」とあり、韓愈の詩に咄哉識ㇾ路行勿ㇾ休とある。

【題義】東門行は、樂府正聲に「相和歌辭、瑟調曲」とあり、樂府題解に「古詞に云ふ、出ニ東門一、不ニ顧歸一、言ふは、士貧にして其居に安んせざるあり、劍を撫して將に去らむとす、その妻、衣を牽いて之を留め、願はくは、共に糜を餔して富貴を求めずといひ、且つ曰く、今は時清く、非を爲すべからざるなりと。鮑照の傷禽惡ㇾ弦驚の若きは、但だ離別を傷むのみ。長安城門は、卽ち東都司門離別の所」とある。そこで、念の爲に、漢の古詞を擧げることにする。

出ニ東門一。不ニ顧歸一。來入ㇾ門。悵欲ㇾ悲。盎中無ニ斗儲一。還視桁上無ニ懸衣一。解一　拔ㇾ劍出ㇾ門去。兒女牽ㇾ衣啼。他家但願ニ富貴一。賤妾與ㇾ君共餔ㇾ糜。解二　共餔ㇾ糜。上用ニ滄浪天故一。下爲ニ黃口小兒一。今時清廉難ㇾ犯ニ教言一。君復自愛莫ㇾ爲ㇾ非。解三　今時清廉難ㇾ犯ニ教言一。君復自愛莫ㇾ爲ㇾ非。行吾去爲ㇾ遲。平愼行望ニ君歸一。解四

靑邱の此作も、無論、古詞の意義を沿襲したのである。

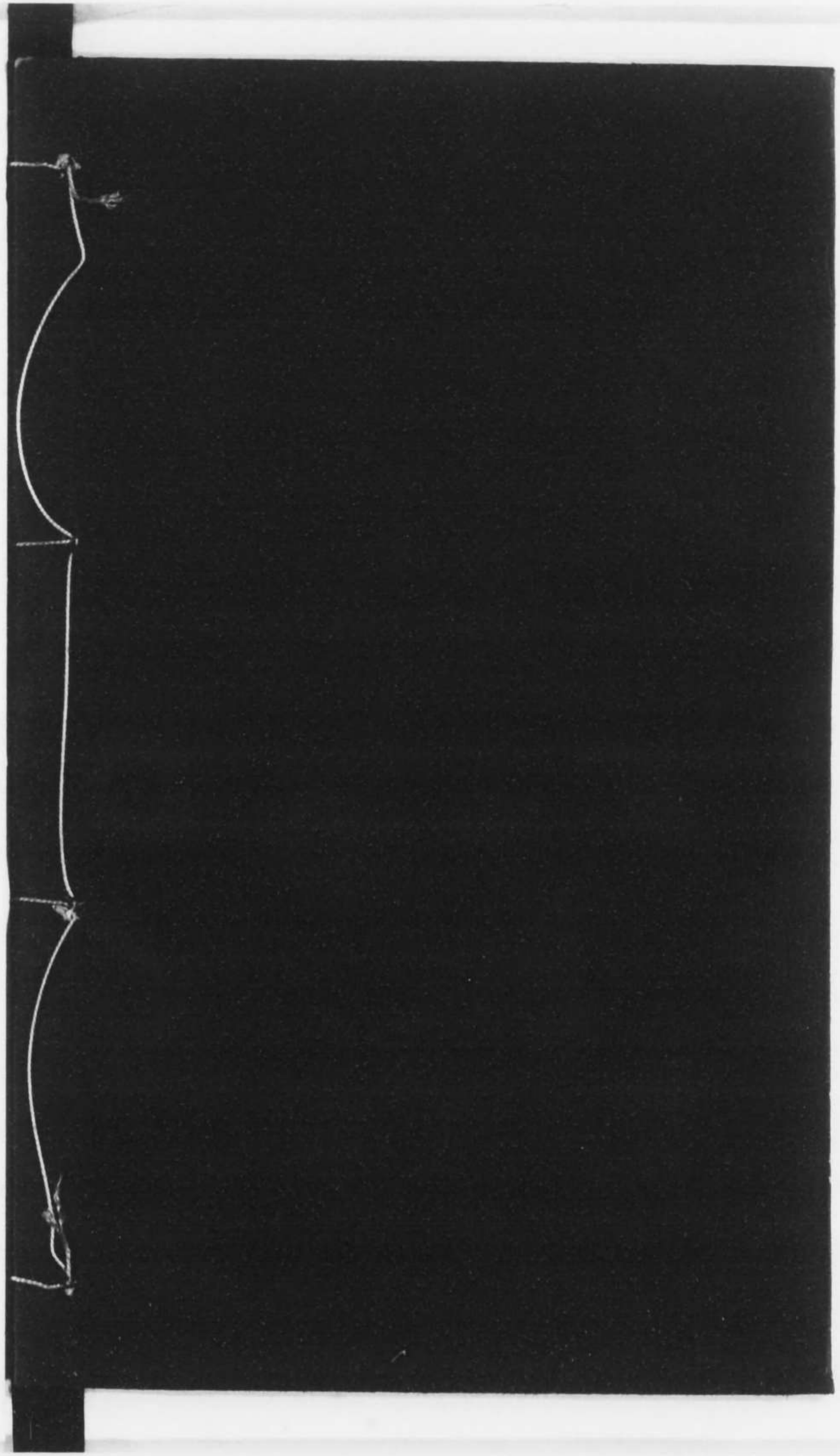
【詩意】東門を出でて、日日、奔走に衣食し、やがて、日暮に、我が家に歸つて室中の有樣を見ると、四壁山立して、中は無一物、煙突から煙も出ず、瓶中には米もなくて、塵埃が生ずるといふ始末、無論、飯も炊かない。若い妻は、氣の毒にも、髮亂れて蓬の如く、稚子は、榮養不良の爲に痩せ細り、これを見ると、覺えず、我が胸中に悲哀を生ずる。されば、古しへの東方朔の眞似をして、自ら天子に薦達することも出來ず、空しく、國士の才を抱いて、唯だ老い朽つるのみである。身の長七尺、齒は貝を列べた如く、一寸見た處から、天晴の大丈夫であるが、米を索める爲に、おどけ交りに其窮を訴へて、天子を笑はせることも出來ず、まことに、弱りはてた次第である。そこで、雞鳴いて夜が明け、東門は早くも開かむとする頃、その門を出でて都を去り、劍に縋つて遠游し、四頭立の馬車に乘

309
65

る樣な身分に成らなければ、再び歸つて來ないと決心し、さて愈よ家を辭して出かけやうとすると、妻は、進んで我が衣に縋つて引き止め、貴方が私を棄てて御出かけに成るは、止むを得ぬことであるが、呱呱として啼くこの嬰兒を如何されるか。君よ、糧食なきを憂へ給ふな、田中には、すでに麥を生じ、やがて若干の收穫もあらう。君よ、衣裳なきを憂へ給ふな、今、機の上で織りかけて居るのが出來れば、それを裁つて縫へば宜しい。さうまで思ひ詰めて、富貴を慕ふことは、まことに必要がない。加之、富貴は、多く災害を伴ふもので、富貴になれば、どうせ、善い事ばかりはない。私は、君といつまでも一緒に、生きては、居を同じうし、死ねば、もろともに山下の灰塵となる積り。折角ながら、旅立つことは、どうか思ひ止まつて下さいといつた。そこで、吾は、行きかけたものの、その爲に躑躅して去りも得せず、仰いで靑天を眺め、咄なる哉、咄なる哉といつて、わが身の不運を嘆き喞つ外はなかつた。

【餘論】起首より使㆓我心下忽有㆑哀に至るまでは、一家窮困の有樣、安能學㆓東方生㆒の四句は、才ありながら自ら薦むるを得ざる不遇の身世。鷄鳴東門早欲㆑開の三句は、志を決して、東門より去らむとすることを述べ、妻前挽㆑衣言より死即共作㆓山下灰㆒に至るまでは、その行を諫止する妻の繰り言を寫し、吾欲㆑行の三句は、その爲に、折角の決心もぐらつき出し、やがて、中止したことを記して收束としたので、全篇稍や古色古味を缺くも、情思宛轉として、自然人を動かすの妙がある。

終



續國譯漢文大成

文學部　七十四

309
65

始

續國譯漢文大成

文學部第七十四册（第十九帙の二）

高靑邱詩集一の二

吉田待郎氏 寄贈本

309
65

高青邱集卷二

樂府

愛妾換馬曲

（一）出帷掩紅袂。離廐結青絲。（二）
帷を出でて紅袂を掩ひ、廐を離れて青絲を結ぶ。

我取躡雲足（三）。君憐羞月姿（四）。
我は雲を躡むの足を取り、君は月に羞づるの姿を憐め。

惟當樹功業。詎必戀恩私。
惟だ當に功業を樹つべし、詎ぞ必ずしも恩私を戀ひむ。

回首各已遠。春山將暮時。
首を回らせば各〻すでに遠し、春山將に暮れとするの時。

【字解】【一】出帷　深閨の帷中から出て來る。【二】青絲　杜甫の詩に玉勒控青絲とあり、青絲絡頭爲君老とあり、馬の首にからげてある紐。【三】躡雲足　名馬をいふ、漢の郊祀歌に太一況、天馬下、霑赤汗、沫流赭、志俶儻、精權奇、籋浮雲、晻上馳とあつて、その注に「籋は躡に同じ」とある。又謝莊の舞賦に躡籋雲之銳景、戢追電之逸足」とある。【四】羞月姿　月をも羞かしむる艷姿。

【題義】愛妾換馬曲は、樂苑に「雜曲歌辭」とあり、樂府題解に「愛妾換馬曲、舊說、淮南王の作る

ところ、疑ふらくは、卽ち劉安ならむ、古辭、今、傳はらず」とあり、樂府原に「これ漢時俠客の爲るところ。漢武、西極の馬を重んず、一時、騰驤の價、涌起し、妾を以て換ふるものあるに至る。淮南王、以て歌辭となす」とある。今傳はつて居る中で一番古いのは、梁の簡文帝の作で、卽ち左の如くである。

功名幸多種。何事苦生離。誰言似二白玉一。定是媿二青驪一。必取二匣中釧一。廻作二飾金羈一。眞成恨不レ已。願得二路傍兒一。

【詩意】愛妾は、深閨の帷中より出で、紅袂を以て其顏を掩うて、ひたすら羞らふ氣色。名馬は、廐から離れて、頭に青絲を結んで、まことに勢が善い。さて愈よ交換といふことになつて、われは駿足雲を踊むところの名馬を取り、仍つて、愛妾を君に與へるから、君は、月も羞らふ樣な彼の姿を愛して、精精大事にして遣つて異れろ。われは、唯だ名馬を得て、天晴、功業を立てようと思ふので、區區たる恩愛私情に引きつけられる樣なことはない。やがて、名馬と愛妾と、各〻その新主に連れられて往つて仕舞ひ、ふりかへつて見ると、次第に遠くなつたが、折しも、春山黯澹として、將に暮れなむとし、物とはなしに、淋しい樣な、のこり惜しい樣な感じがした。

【餘論】惟當レ樹二功業一の二句は、大義親を滅すといつた樣な意味で、その人の志尙も、窺ひ知られる。

美人磨鏡詞

匣中舊鏡龍(一)蟠レ背。
昏(二)盡如レ同二月(三)逢レ晦。
尋得街頭負(四)局翁。
粉(五)鉛和(六)レ汞拭二青(七)銅一。
須臾瑩(八)徹無二纖(九)翳一。
試整朝來暗(一〇)梳髻。
光明還在只如レ新。
悔向二塵埃一久相棄。
明日照レ儂自(一一)畫レ眉。
不レ須レ問レ郎宜不レ宜。

美人鏡を磨くの詞

匣中の舊鏡、龍、背に蟠まる、
昏盡して月の晦に逢ふに同じきが如し。
尋ね得たり街頭負局の翁、
粉鉛、汞に和して青銅を拭ふ。
須臾に瑩徹して纖翳なし、
試に整ふ、朝來暗梳の髻。
光明、還た在り、只だ新なるが如し、
悔ゆらくは塵埃に向つて久しく相棄てしことを。
明日儂を照らして、自ら眉を畫く、
須ひず郎に問ふ、宜しきや宜しからざるやを。

【字解】【一】龍蟠背　鏡の背に盤龍の彫刻がしてある。【二】昏盡　すつかり曇つて仕舞ふ。【三】月逢晦　晦は陰曆三十日。【四】負局翁　兩浙名賢外錄に「負局先生、自つて來るところを知らず、言語、燕趙間の人に似たり。かつて、磨鏡の局を負うて吳市に徇ふ。輒ち曰く、人に疾害ありや否や、と。時に紫丸を出して之を療すれば、卽ち愈ゆ。百餘年、國に大瘟あり、人を活かすこと、萬萬計、一錢を取らず」とあり、劉禹錫の磨鏡篇に、「門前負局人、爲レ我一磨拂」とある。局は道具を入れる小箱。【五】粉鉛　鉛の粉、色白くして鏡を磨くに用ひる。【六】和汞　韻會に「汞、本と澒に作る、丹砂、化して水銀と爲るところなり」とあり、參同契の注に「粉汞は銀、土に相據る」とある。【七】青銅　鏡をいふ。張籍の白頭吟に揚州青銅作二明鏡一とある。【八】瑩徹　すつかり綺麗に光り輝く。【九】纖翳　いささかの曇り。

【10】暗梳髻　手さぐりで自ら結び上げた髻。【11】自畫眉　漢書張敞傳に「敞、婦の爲に眉を畫く、長安中、張京兆の眉憮を傳ふ」とある。從前は其夫に畫いて貰つて居たが、明日こそは、自分で畫くといふ意。

【題義】美人磨鏡辭は、古しへ其作なく、全く靑邱が特に設けた新題である。美人磨鏡は、美人が鏡を磨くといふのではなく、無論人に磨かせるのである。

【詩意】匣中に藏つてある古鏡は、その背に盤龍の彫刻があつて、いかさま由緒がありさうであるが、すつかり曇つて、丁度、三十日の月の樣である。そこで、街頭を呼び行く負局先生の樣な鏡磨きに命じて之を磨せることにし、やがて白い鉛粉を水銀に交せて、靑銅の面を拭ひ始めた。すると、暫時の間に、さしもの古鏡は、すつかり綺麗になつて、瑩煌異常、いささかの曇りも無く、試に其鏡に向つて、今朝手さぐりで結ひ上げた髻を直して見たが、すつかり、うまく出來た。鏡の光明は、又ぞろ生じて、ほんに新しい通り、この位ならば、早く磨かせれば善かつたにと。今まで長い間、塵埃の中に棄てて置いたことを後悔した位。明日おのが姿を寫して、自分で眉を畫くことも出來、わが郞に向つて、宜しいか、宜しからざるかと、一一問ひ正すにも及ばない。

【餘論】起首四句は、磨鏡の所以を述べ、それから、試に暗梳の髻を整へ、明日こそ自ら眉を畫かうといつたのは、語を出すに次第があつて、決して唐突でなく、光明還在の二句は、平凡ながら、その間に插まつて、極めて趣がある。要するに、兒女閨房中の詞として、新婉工穩を推すべきものであらう。

朝鮮兒歌

朝鮮兒。
髮綠初剪(一)齊雙眉(二)。
芳筵夜出對歌舞(三)。
木綿裘(四)軟銅鐶(五)垂。
輕身回旋細喉(六)囀。
蕩月搖花醉中見。
夷語何須問譯人(七)。
深情知訴離鄉怨。
曲終拳足(八)拜客前。
鳥啼井樹(九)蠟燈(一〇)然。

朝鮮兒の歌

朝鮮兒、
髮綠初めて剪つて雙眉に齊し。
芳筵夜出でて對して歌舞し、
木棉の裘は軟にして銅鐶垂る。
輕身回旋、細喉囀じ、
月を蕩し、花を搖かして、醉中に見る。
夷語、何ぞ須ひむ譯人に問ふを、
深情 訴ふるを知る離鄉の怨。
曲終り、拳足して客前に拜す、
鳥は井樹に啼いて、蠟燈然ゆ。

【字解】【一】髮綠初剪　綠の髮を切り揃へる。【二】齊雙眉　髮の色の綠なることが眉に齊しいといふ意。【三】對歌舞　二人相對して歌舞を爲す。【四】木棉裘　木棉織の衣。裘は皮衣であるが、ここでは衣と見れば善い。【五】銅鐶　腰の飾りと見える。【六】細喉　細い咽喉。【七】譯人　通辨、說文に「譯傳は、四夷の言を譯するもの」とあつて、その譯傳に同じ。【八】拳足　足を曲げて踞む、韓愈の聯句に里儒拳足拜とある。【九】井樹　井戸の邊に立てる木。【10】蠟燈　蠟燭。【11】

共訝(一一)玄菟隔雲海。
兒今到此是何緣。
主人爲言曾遣使。
萬里(一二)好風三日至。
(一三)鹿走荒宮(一四)亂寇過。
(一五)鷄鳴廢館(一六)行人次。
四月(一七)王城麥熟稀。
兒行道路兩啼飢。
黃金擲買(一八)傾裝得。
(一九)白飯分飡趁舶歸。
我憶(二〇)東藩內臣日。
納女(二一)椒房被(二二)禕翟。
(二三)敎坊此曲亦應傳。

共に訝る、玄菟の雲海を隔つるを、
兒、今ここに到る、是れ何の緣。
主人爲に言ふ、曾て遠く使し、
萬里の好風、三日にして至る。
鹿は荒宮に走つて、亂寇過ぎ、
鷄は廢館に鳴いて、行人次す。
四月、王城、麥熟すること稀なり、
兒は道路を行いて、兩つながら飢に啼く。
黃金擲ち買ひ、裝を傾けて得たり。
白飯分ち飡して、舶を趁うて歸る、と。
我憶ふ、東藩內臣の日、
女を椒房に納れて、禕翟を被る。
敎坊、この曲、亦た應に傳ふべし、

【一一】玄菟　漢の武帝の時に置いた朝鮮四郡の一、今の平壤附近。【一二】好風　三日至　元史高麗傳に「海道より宋に之く、便風を得ば、三日にして至るべし」とある。【一三】鹿走荒宮　史記淮南王傳に「伍被曰く、臣聞く、伍員、呉王を諫めて曰く、臣、今、麋鹿の姑蘇臺に遊ぶを見む」とある。【一四】亂寇　元末紅頭軍の朝鮮に侵入したことであらう。【一五】鷄鳴廢館　金檀の注には、南史后妃傳「齊の武帝、數ば瑯琊城に幸し、宮人、常に從ふ。早發して、湖北の埭に至り、鷄、はじめて鳴く、故に呼んで鷄鳴埭といふ」とあるを引いてあるが、切實でない。廢館の館は亭館で、外來貴賓の宿泊所。そこが荒廢して、鷄だけが鳴いて居る。【一六】行人次　次は宿る。以上二句は、高麗末期の騷亂を指したので、元史高麗傳に「至正二十二年、帝、讒を以て高麗の伯顏帖木兒を廢し、その弟塔思帖木兒を立てて王となし、又皇后奇氏の族子三寶奴を以て元子となし、兵萬人を以て之を送らしむ。鴨綠江に至り、盡く伏兵に殺さる。又屢ば使を遣して、高麗に至り、その媵妾を選ぶ。而して、奇氏の國に在るもの、多く勢を怙んで驕橫。伯顏帖木兒、盡く之を殺す。故を以て、奇氏、帝に譖し、情を以て廢立し、高麗亂る」とある。【一七】王城　この頃、高麗は開城に都して居た。【一八】傾裝　すつかり行李を傾ける。【一九】白飯　杜甫の詩に奴與白飯馬靑芻とある。【二〇】東藩內臣　高麗が東方の藩屏として、元に服屬し、仍つて臣と稱せしこと。元史高麗傳に「元の中統元年、高麗王倎を册して、制すらく、永く東藩となり、以て我が休命を揚げよ」とある。【二一】椒房　卷一、少年行に見ゆ、後宮に同じ。元史后妃傳に「順帝の第三皇后完者忽都奇氏は、高麗の人、太子愛猷識理達臘を生む」とある。【二二】禕翟　周禮の天官內司服禕衣揄狄の注に「禕は翬と同じ。伊洛の南に雉あり、素質、五色皆備はつて章を成す。江淮の南、靑質、五色皆備はつて章を成すもの、搖といふ」とあつて、その疏に「揄は、當に搖に作るべし。狄は、當に翟

特奉宸游樂朝夕。
中國年來亂未鋤。
頓令貢使入朝無。
(二四)儲皇尙說居靈武。
(二五)丞相方謀卜許都。
(二六)金水河邊幾株柳。
依舊春風無恙否。
小臣(二七)撫事憶昇平。
尊前淚瀉多於酒。

特に宸游を奉じて、朝夕を樂む。
中國、年來亂未だ鋤かず、
頓に貢使の入朝なからしむ。
儲皇、尙は說く靈武に居るを、
丞相、方に許都を卜せむことを謀る。
金水河邊、幾株の柳、
舊に依つて、春風、恙なきや否や。
小臣、事を撫して昇平を憶ふ、
尊前、淚瀉いで、酒よりも多し。

に作るべし。搖雉は、その色青きなり」とある。又隋書后妃傳の序に「周宣、位を嗣いで輿章に準はず、緯翟を衣て中宮と稱するもの、凡そ五あり」とある。緯翟は、ともに雉、その羽で飾つた衣は、皇后だけが著たのである。【三三】敎坊　稗史に「敎坊は、唐の明皇の開元二年、蓬萊宮側に、はじめて敎坊を立て、以て散樂倡優曼衍を隸す」とある。【三四】儲皇尙說居靈武　儲皇は太子。靈武は唐の肅宗が卽位した處。唐書に「安祿山、京師を陷れ、太子、皇帝の位に靈武に卽く」とある。この句は、太子が折角、都に入つたが、權臣に制せらるるに依り、復た外に出たいと思つて居るといふ義で、その史實は、元史紀事本末に「至正二十四年秋七月、太子、冀寧に走つて、擴廓帖木兒に依る。二十五年七月、孛羅帖木兒、誅に伏し、太子を召して京に還らしむ。九月、擴廓帖木兒、太子に扈從して太原に奔る。唐の肅宗の故事を用ひて自立せむと欲するや、擴廓帖木兒等、從はず、京師に還るに及び、皇后奇氏、旨を傳へ、重兵を以て、太子を擁つて城に入らしむ。擴廓帖木兒、京城に至り、その衆を散遣す」とある。【三五】丞相方謀卜許都　蜀志關羽傳に「羽の威、華夏に震ふ。曹公、許都に徙り、以て其銳を避けむことを議す」とある。許都は卽ち河南彰德府。丞相は權を專にし、自ら彰德府に卜居せむことを謀るといふ意。元史紀事本末に「至正二十五年、中書左丞相擴廓帖木兒を封じて、河內王となす。二十七年、張良弼・脫列伯、李思齊を推して盟主となし、同じく、擴廓を拒ぎ、兵連つて解けず。擴廓、はじめて命を受けて南征し、反つて、彰德に退處し、惟だ兵を陝西に用ひむことを思ふ」とある。【三六】金水河　元史河渠書に「金水河、その源、宛平縣玉泉山に出で、流れて、義和門南の水門に至りて、京城に入る、故に金水の名を得たり。至大四年七月、旨を奉じ、金水河の水を引いて、これを光天殿西花園石山の前に注いで池を作る」とある。【三七】撫事　往事を追懷する。

【題義】原注に「予、周檢校の宅に飮む、二高麗兒の歌舞するものあり」とあつて、それに感じて作つたのである。金檀注に、一統志「武王、箕子を朝鮮に封ず」及び漢書高麗傳「漢の武帝元封三年、濟南太守公孫遂、朝鮮を定め、眞番・臨屯・樂浪・玄菟の四郡となす」を引いて居るが、ともに當つて居ない。箕子の封せられた朝鮮は、今の遼東で、その都は、多分、遼陽であつたらうといふし、漢の四郡は、大同江以南には及ばなかつた。つまり、朝鮮といふ名稱は、遼東から、段段に遷つて、後には半島に限ることになつて仕舞つた。三韓の中、新羅が一番强大で、唐の太宗の援助を借り、わが天智天皇に抗して、百濟を平らげ、やがて、高句麗に及び、半島は統一された。その後、新羅では、づるく立ち廻つて、半島を自分の者にして仕舞つたが、唐では、安史の亂が起つた爲に、そんな事に關係して居ることが出來なくなつて仕舞つた。新羅に次いで、高麗が起り、元の勢力に抵抗することが出來なかつたから、甘んじてこれに服屬し、はじめには、元寇の先棒となつて、わが日本を襲つたこともある。その後、元と婚を通じ、又その王は、燕京に淹留する樣になつた。この朝鮮兒は、取りも直さず、高麗の少年で、周檢校が高麗に使したとき、その寄る邊なきを憐み、金を出して買ひ取つて、わざわざ支那に連れて來たものである。

【詩意】朝鮮の少年は、綠髮を剪りそろへて、おかツぱ頭となし、その毛の色は、眉と齊しく、まことに艶艶して居る。夜、芳筵の催さるるに際し、二少年は、席上に出て、相對して歌舞を爲すのが常で、その服裝はといへば、木棉織りの衣裳を著け、腰には銅鐶をぶら下げて居る。舞を爲すには、輕い身體を廻旋せしめ、歌を唱へるには、細い咽喉で、鳥の囀る樣に歌ひ、歌舞ともに之を醉中に見れば、月を蕩かし、花を搖がす風情がある。勿論、その歌は、夷語であるが、通譯に問ふまでもなく、深情自ら勝へず、離鄕の怨を訴へるものであることは、明かに、それと知られる。やがて、一

曲方に畢れば、足を曲げて坐し、徐に客の前で拜を爲したが、時しも、井上の老樹には、棲鳥驚いて啼き、座上には、蠟燭が燃えて搖ぎつつ、その餘韻嫋嫋たることは、言はずもがな。おもへば、汝等の故鄕は、古しへの玄菟であつて、萬里の水雲を隔てて居るのに、汝は、どういふ緣故で、はるばる此中國に來たのであるか。すると、主人の周檢校が代つて答へるには、自分は、或時遠く高麗國へ使することを命せられ、幸ひ追手の風に遇つたから、唯だの三日で長い海路を越えて、その地に到著した。その頃、高麗は、丁度紅頭軍に荒らされた後であつて、宮闕荒頽して、麋鹿園中を走り、そして、寇賊の尙ほ通行するがあり、隨處の亭館は、荒れはてて、主なき鷄が鳴いて居るばかり。しかし、致方がないから、旅人は、矢張、そこに泊まるといふ始末。四月の頃、その都なる開城に行くと、荒れ地には、麥さへ碌碌作つてない處から、居民は食を得るに由なく、この兩個の少年も、何の目あてもなく、道路をうろつきつつ、飢に啼いて居つた。そこで、色色問ひ正して、金を遣つて買ひ取ることにし、行李を傾けて、漸く其資を辨じ、それから、愈よ引き取つて、白米の飯を分ち食はしめ、そして舟に載せて、連れて來たのであるといつた。われ憶ふに、高麗が東藩の雄鎭として、內附、臣と稱せし時、女を元の後宮に納れて、皇后と稱し、その關係は、隨分親密であつたから、宮禁內の敎坊に於ても、今、少年が歌舞を遣つた其曲を傳來したに相違なく、特に宸游の際は、これを以て、朝夕、天子を樂ましめたことと思はれる。それから、中國に於ても、年來、騷亂が打續いで、容易に鋤き平らげることが出來ず、高麗から進貢使の入朝することも、頃ろは絕無となつて仕舞つた。その上、太子は、靈武の故事を用ひて、冀寧で卽位しやうと仰せられ、丞相の擴廓帖木兒は、今しも居を彰德に定め、專ら兵を陝西に用ひやうとして、この先、どんな事になるか分からぬ。おもへば、燕都の金水河の邊なる幾株の楊柳は、春風に遇ひ、むかしの如く恙なくしてありや否や。ここに、私は、往事を追懷して、早く昇平の世に歸れば善いがと思ひつづけ、樽前に濺ぐ淚は、酒よりも多く、まことに、無限の感慨に堪へられない。

【餘論】 起首より兒今到レ此是何緣に至るまでは、朝鮮兒の歌舞より始めて、その緣由の質問となり、主人爲言曾遠使より白飯分飡趁レ舶歸に至るまでは、朝鮮の衰亂より、この兩兒を購うて還りしことを言うて、上の問に答へ、我憶東藩內臣日の四句は、朝鮮と元との關係が往時極めて緊密なりしことを述べ、中國年來亂未レ鋤の四句は、中國に於ける騷亂を敍し、金水河邊幾株柳の四句は、燕都の風物、むかしの儘なりや否やといつて、その感慨を寄せ、卽ち題外に一步を踏過したものである。

野老行。送二陳大尹一

野老行、陳大尹を送る

(一)桑扈初鳴麥花落。 桑扈、初めて鳴いて、麥花落つ。

【字解】【一】桑扈 詩經の注に

大家小家蠶(二)滿箔。
村中無吏夜捉(三)人。
老(四)身醉歸行失(五)脚。
自從明(六)府一下車。
短衣糲(七)飯卽有餘。
姓名免籍(八)弓弩手。
新婦辟(九)纑兒讀書。
縣門前頭柳飛絮。
春風又隨官馬去。
雞鳴相送拜道邊。
願公受(一〇)取一大錢。

大家小家、蠶、箔に滿つ。
村中、吏の夜、人を捉ふるなく、
老身、醉うて歸つて、行く脚を失す。
明府が一たび車を下つてより、
短衣糲飯、卽ち餘あり。
姓名、弓弩手に籍せらるるを免かれ、
新婦は辟纑、兒は書を讀む。
縣門前頭、柳絮を飛ばし、
春風、又官馬に隨つて去る。
雞鳴、相送つて道邊に拜す、
願はくは、公、受け取れよ一大錢。

「桑扈は竊脂なり」とあり、吳均の詩に今來夏已晩、桑扈薄樹飛とある。鳥の名、多分頰白の類であらう。【二】蠶滿箔　韓愈の聯句に、春蠶看滿箔とある。箔は蠶を飼ふむしろ。【三】捉人　無理に人をつかまへて、兵士とする。杜甫の詩に、暮投石濠村、有吏夜捉人とある。【四】老身　野老自ら言ふ。【五】失脚　足を踏みはづす。【六】明府　地方官の尊稱。【七】糲飯　荒春の米の飯。【八】籍弓弩手　弓弩を射る役に定められて、帳簿に記入される。元史兵志に「元制、郡邑に弓手を設くるは、以て盜を防ぐなり。一百戸内ごとに、中戸一名を取つて役に充て、ともに本戸の軍站人匠打捕鷹房幹脫審治の諸色を免じて、合著差發す。その當戸推到合該差發數目は、却つて九十九戸内に于て均攤す。もし失盜勒令あらば、當該弓手、二限の盤捉を定立す」とあり、杜甫の詩に問頭指大男、果是弓弩手とある。【九】辟纑　絲を繰る。【一〇】受取一大錢　聯嶠の後

漢書に「劉寵、會稽太守に拜せらる。徵されて、將作大匠となるや、山陰に五六の老叟あり、人ごとに百錢を齎らして、寵に贈つて曰く、鄙生、未だ嘗て郡朝を識らず、明府より以來、狗、夜、吠えず、人、吏を見ず、今、當に棄て去らるべきを聞く。故に自ら扶けて送る、と。寵、爲に人ごとに一大錢を選んで之を受く」とある。

【題義】野老行も、青邱が自ら作つた題で、陳大尹の轉任を送り、一本には「馬明府を送る」としてある。陳大尹にしろ、馬明府にしろ、世間竝の地方官と見えるから、その傳記などは不詳、その本名さへ分からない。次なる秋江曲の顧使君、湖州歌の陳太守も、矢張、御多分に漏れない。この詩は、送別の詩であるが、特に野老に代つて言を立てた處から、野老行と題したのである。

【詩意】春も稍や半ならむとする頃、頰白の鳥が囀り出せば、麥の花が落ち、村中の大きな家でも、小さな家でも、蠶を始めるといふので、かへつたばかりの蟲は、箔に一ぱいである。今しも、村中至極無事、役人が暗夜に乘じて、兵士徵發の爲に、村民を無理に引き湊ふといふ樣なことがないから、私ども、老人は、十分に醉つて、歸り途に足を踏み外しても、大事ない。閣下が一たび車を下つて、私この地の長官に就職せられしより、衣食粗ぼ足りて、短衣糲飯ながらも、餘ある位。そして、暢氣にどもは、弓弩手に召し出されることを免れ、嫁は絲を繰り、幼兒どもは讀書を爲し、至つて、暢氣に暮らして居るが、取りも直さず、閣下の御陰である。今しも、春も末になつて、縣門の前には、柳の花が絮の如く飛び亂れる折から、閣下は宿づきの官馬に召され、長閑けき春風に送られて、御轉任な

される由を承り、朝早く雞の鳴き出したばかりの頃、御見送の爲に、此に參つて、道傍に拜を爲して居るので、願はくは、閣下、この老人どもの志を酌んで、折角持つて參つた中から、せめて、一個の大錢だけでも受納せられよ。

【餘論】前四句は、平穩なる田家の光景、中間四句は、これを明府統治の功に歸し、結四句は、送別の正意、劉寵の故事は、この場合に極めて切實確當である。

秋江曲。送顧使君

秋江曲、顧使君を送る

秋江(一)月滿(二)秋潮大。　秋江、月滿ちて、秋潮大なり、
江上行人待潮過。　江上の行人、潮を待つて過ぐ。
別離休說渡江難。　別離、說くを休めよ、渡江の難きを、
半日順風船穩坐。　半日の順風、船穩に坐す。
(三)楚江茫茫(四)葭菼平。　楚江茫茫として、葭菼平かなり、
(五)使君來時(六)雄雉鳴。　使君來る時、雄雉鳴く。
子弟從軍隔江去。　子弟軍に從ひ、江を隔てて去る、

【字解】(一)月滿　十五夜の滿月。(二)秋潮大　秋の最中、潮の差引の分量の多いこと。(三)楚江　揚子江。峽より以南の流域は、大抵古しへの楚地なるが故に云ふ。李白の詩に洞庭西望楚江分とある。(四)葭菼　よし葦の類。(五)使君　有位者の尊稱。(六)雄雉鳴　韓任の遠からざることが前から分かつて居たといふ意。魏書脅略傳に「奥農王弘直、雄雉あり、飛び來つて直の內鈴柱頭に登る。略をして卦を作らしむ。略曰く、五月に到らば、必ず遷らむと。期に至つて、直、果して渤海太守となる」とある。(七)茨米　菰の實。春いた後、炊いで飯とすることが出來る。說文に「茨は雕頭なり」とある、古今注に「その中、米の如く、以て飢を度すべし、卽ち今の菰子なり」とある。

幾家猶住夕陽城。　幾家、猶ほ住まる夕陽の城。
水田雖荒飯常足。　水田荒ると雖も、飯は常に足る、
(七)茨米夜舂三十斛。　茨米、夜舂く三十斛。
誰道繁華不及前。　誰か道ふ、繁華、前に及ばずと、
戶無征稅官無獄。　戶に征稅なく、官に獄なし。
渡江渡江君莫留。　渡江、渡江、君、留まる莫れ、
江北樂似江南秋。　江北の樂は似たり江南の秋。

【題義】秋江曲も新題、顧使君の送別に作つたのであるが、篇中、すべて秋江に關して居るから、これを以て題に署したのである。

【詩意】秋江の上、十五夜の月は圓かに滿ち、秋の潮は、差引多く、江上の旅客は、滿潮を待つて出發しやうとして居る。ここに、別を爲すに際し、渡江の困難な事などは、說き出づるにも及ばぬので、順風ならば、唯だ半日、その間は舟中に穩坐して居ることが出來る。大江の流、茫茫として際涯なく、兩岸には、葦などが平かに生えて居る。閣下が御著任の後、雉の雄が鳴いて、榮遷も遠からぬことと

前以て分かつて居たが、ほんの腰かけの積りでなく、統治に骨を折られたのは、まことに有り難い。頃ろ、北地に事ある爲め、子弟輩は、徵發されて從軍し、いづれも、江の彼方に往つて仕舞つたが、夕日たゆたふ城內には、まだ幾らかの家が殘つて居る。かつて、耕すものが無い爲に、水田は荒れて仕舞つたが、眞菰の實は、大分收穫があつて、一夜に三十斛も舂き白げたといふ位、飯の代用としては、十分であつた。この地の繁華、今は昔に及ばぬといふのは、間違つた考へであつて、民戶に苛稅なく、官に訴訟沙汰の無いのは、何よりの事、これにつけても、御骨折の程が分かる。閣下は、愚圖愚圖せずに、早く大江を渡つて行かれれば善いので、江北の樂は、矢張、この江南の秋の如く、器量ある御方が、どこへ往つても、相應の治績を擧げられることは、申すまでもない。

【餘論】四句一解、三たび韻を換へ、結末更に二句を添へたのは、一種の章法である、但し、この詩は、格別氣乘りのしないのを、止むを得ず作つた樣な風で、絕えて氣魄なく、精彩なく、單に無難に出來て居るといふだけである。

湖州歌。送陳太守　　湖州の歌、陳太守を送る

草茫茫。水汨汨。　　草茫茫、水汨汨、
上田蕪。下田沒。　　上田は蕪し、下田は沒す。
中田有麥牛尾稀。　　中田に麥あるも、牛尾稀なり、
種成未足輸官物。　　種ゑ成して、未だ官物を輸するに足らず。
侯來桑下搖玉珂。　　侯來つて、桑下に玉珂を搖かし、
聽儂試唱湖州歌。　　聽け儂が試に湖州の歌を唱ふるを。
湖州歌。悄終闋。　　湖州の歌、悄として闋を終る、
幾家愁苦荒村月。　　幾家か愁苦す荒村の月。

【字解】【一】茫茫　際涯なき貌。【二】汨汨　ひたひたと濺る貌。【三】上田　上の方に在る田、この上中下は、地勢から云つたので、土質から云つたのでは無からう。【四】牛尾稀　牛尾は麥の穗、東坡の種麥行に畦西種得青猗猗、畦東已作牛尾稀とある。【五】輸官物　租稅として官に上納する。【六】侯來　侯は君と同じ。【七】玉珂　珂は馬のくつわの飾り、風俗通に「勒飾を珂といふ」とあり、韓愈の詩に送以繁玉珂とある。【八】湖州歌　金檀の注に「按ずるに、宋の汪元量の水雲集、湖州歌九十八首あり、皆皐亭降を過し杭より北に徙るの事を紀す」とあるが、これは、全然無關係の事で、湖州歌は、卽ち本首を指して云ふ。【九】悄終闋　闋は歌の一くさり。

【題義】湖州歌も矢張新題で、陳太守が新に其地に赴任するを送り、且つ水災の後、大に統治に盡力されむことを囑望したのである。

【詩意】湖州一帶の地、さきに大洪水ありし後、上田は荒蕪に歸して草茫茫、下田は陷沒して水汨汨、ただ中田には麥があるが、發育甚だ惡くして、牛尾の如き穗も、碌碌出で居らぬから、折角種ゑては見たものの、稅として上納するには不足な位。君は、新に其地に赴任されるが、やがて、桑の木の下

に來て馬を停め、玉珂を搖かしつつ、私が試に上の樣な湖州の歌を唱へるのを聞いて下さい。湖州の歌は、悄然として、ここに一くさり辭んだのであるが、歌では、とても其慘狀が述べ切れず、荒村の月に對して、幾家の人が頻りに愁苦して居るから、せめては、災後救濟の方法に就いて御考へあられむことを切望する次第である。

【餘論】この詩は、長短錯落、どうやら、樂府の古調に近く、その言ふところも、まことに痛切である。

秦箏曲

嬌絃細語發研羅(一)。
臂動玉釧(二)鳴相和。
關雲隴月(三)愁思多。
愁思多。聽此曲。
停蜀琴(四)罷燕筑(五)。

秦箏曲

嬌絃細語、研羅を發す、
臂は玉釧を動かして、鳴つて相和す。
關雲隴月、愁思多し。
愁思多し、この曲を聽け、
蜀琴を停め、燕筑を罷む。

【字解】【一】研羅　絃の聲であらう。【二】玉釧　說文に「釧は臂環なり」とあつて、卽ち腕輪。【三】關雲隴月　關は何處とも分からぬが邊關、隴は隴頭、卽ち隴山。邊塞の雲月。【四】蜀琴　蜀地に產する琴、鮑照の詩に、蜀琴抽白雪とある。【五】燕筑　筑も琴瑟の類、卷一劉生の條に見ゆ。高漸離が燕市で筑を擊つたといふことがあるから、燕筑といつたのであらう。

【題義】秦箏の箏も、矢張琴の屬、わが邦で今日普通に琴といふのは、卽ち箏である。秦箏曲は、樂府遺聲に「絲竹曲」とあり、樂府詩集に「清商曲辭、江南弄」とある。江南弄で、梁の武帝の作つたのは七曲であるが、沈約の作つたのは四曲、一に趙瑟曲、二に秦箏曲、三に陽春曲、四に朝雲曲といふので、後には、その中の一曲宛を取り離して、一の題と看做して居る。沈約の原作の秦箏曲は、

羅袖飄纚拂雕桐。促柱高張散輕宮。迎歌度舞遏歸風。遏歸風。止流月。壽萬春。歡無歇。

といふので、青邱は、無論これに擬したのである。

【詩意】秦箏の嬌絃より出づる音調は、さながら、低く語るが如く、研羅と鳴り響き、これを彈ずる女の臂なる玉釧が動くと、その發する音は鳴つて相和する如く聞こえる。今しも、邊關の雲低れて、隴頭の月冴えわたり、愁思多くして堪へられぬ景色。すでに愁思多くして堪へられぬならば、蜀琴を停め、燕筑を罷め、そして、この秦箏を聽くが善い。その細細たる嬌音は、聽者の心を蕩かして、いささか、慰める便ともならう。

【餘論】秦箏の婉和なる曲調を稱して、蜀琴燕筑以外、一種の妙趣があるといふのが、究極の趣旨である。

從軍行

（一）關中惡少年。（二）占募去防邊。
匈奴入寇塞。（三）將軍下自天。
揚旌（四）三道出。（五）列格五營連。
（六）龍城望兵氣。（七）馬邑斷人煙。
（八）星攢烽夜舉。（九）月偃陣朝圓。
渴飲（一〇）疏勒水。飢飡（一一）屬國氈。
名勇單于憚。功多天子憐。
寧令（一二）竇車騎。獨擅勒燕然。

從軍行

關中の惡少年、占募されて去つて邊を防ぐ。
匈奴、入つて塞に寇し、將軍、天より下る。
旌を揚げて三道に出で、格を列して五營連る。
龍城、兵氣を望み、馬邑、人煙を斷つ。
星攢まつて、烽、夜擧がり、月偃して、陣、朝に圓なり。
渴しては疏勒の水を飮み、飢ゑては屬國の氈を飡す。
名勇にして單于憚かり、功多くして天子憐む。
寧ろ竇車騎をして、獨り擅に燕然を勒せしめむや。

【字解】【一】關中惡少年　文獻通考に「漢の武帝太初元年、李廣利を以て貳師將軍となし、郡國惡少年數萬人を發し、抑して貳師城に至りて善馬を取る」とある。【二】占募　吳書陸抗傳に「黃門豎宦、開立占募、兵民役を怨み、逋逃占に入る。特詔を乞うて、一切を悄聞し、料出して、以て羸弱敵を受くる常處を補ふ」とある。【三】將軍下自天　漢書周勃傳に「亞夫、東、吳楚を擊つて、霸上に至る。趙涉、遮つて亞夫に說いて曰く、兵事は神密を上ぶ。將軍何ぞ此より右に去つて藍田に走り、武關を出で、洛陽に至り、直に武庫に入らざる。諸侯、これを聞かば、以て將軍天より下ると爲さむ」とある。【四】三道出　漢書武帝紀に「天漢四年、貳師將軍李廣利を遣して朔方に出で、因杅將軍公孫敖は雁門に出で、游擊將軍韓說は五原に出で、單于と余吾水上に戰ふ」とあり、「征和四年、貳師將軍李廣利を遣して五原に出で、御史大夫商邱成は西河に出で、重合侯馬通は酒泉に出で、浚稽山に至つて虜と戰ふ」とあり。北史達奚武傳に「齊の神武、竇泰・高敖曹と三道夾み侵す」とある。【五】列格　柵を結ぶ。【六】龍城　漢書匈奴傳に「五月、大に龍城に會し、その先、天地鬼神を祭る」とある。【七】馬邑　漢書地理志に「雁門郡に屬す」とあり、晉太原地紀に「秦の時、この城を建つ。輒ち崩れて成らず、馬あり、周旋馳走反覆す、父老、これを異み、因依し以て城を築く、遂に馬邑と名づく」とあり。【八】星攢　烽火の多きこと星の集まるが如しといふ意、韓愈の詩に騎火萬星攢とある。【九】月偃陣朝圓　玉海に「宋朝康定元年、郭懲、趙元昊と皆偃月陣を爲す」とある。朝には偃月形の圓陣を布くといふ意。【一〇】疏勒水　漢書西域傳に「疏勒國王は、疏勒城に治す、長安を去ること九千三百五十里」とあり、又耿恭傳に「恭、疏勒城の旁に澗水あつて固むべきを以て、乃ち兵を引いて之に據る」とある。【一一】屬國氈　漢書蘇武傳に「武、元始六年春を以て京師に至る、武に詔し、一太牢を奉じて、武帝の園廟に謁せしめ、拜して典屬國となす」とある。その蘇武が胡地に在りしとき、雪と氈毛とを嚙んで之を咽みしこと、卷一雨雪の詩中に見ゆ。【一二】竇車騎　通鑑紀事に「東漢和帝の永元元年夏六月　竇憲・耿秉、朔方の雞鹿塞を出で、兵を涿山に會し、北單于と稽落山に戰つて之を破り、塞を出づること三千餘里、燕然山に登り、中護軍班固に命じ、石を刻して功を勒し、漢の威德を紀して還る」とある。

【題義】從軍行は、樂府正聲に「相和歌辭、平調曲」とあり、古今樂錄に「從軍行、王僧虔云ふ、荀錄載せるところ、左延年苦哉の一篇、今傳はらず」とあり、樂府題解に「從軍行は、皆軍旅苦辛の辭」とある。今存する中で、一番古いのは魏の王粲で、諸家の作、極めて多く、その體は、種種あつて、もとより一定しない。

【詩意】關中の惡少年輩を徵集し、遠く去つて邊境を防守するとのことで、今しも、匈奴南下、塞に

入つて寇を爲し、將軍は天より降るが如く、その不意に出でむことを考へて居る。さて、準備が愈よ整つたといふので、旗を揭げて、三道より分れて出で、柵を結つて、五營互に相連つて居る。眺めやれば、龍城の邊には、なほ兵氣を望むべきも、馬邑は、すでに人煙を斷ち、匈奴は遠く逃れて仕舞つた。しかし、烽火夜擧がれば、さながら星の攢集するが如く、警報頻りに到り、決して油斷は出來ぬといふので、朝には偃月の圓陣を布いて、豫め之に備へ、將士心を一にし、渴すれば、疏勒の水を飮み、饑うれば、蘇屬國と同じく、氈毛を嚙んで過ごさうといふ覺悟。かくて、勇名は單于も猶ほ之を憚り、度度大功を立てたにつけて、天子も愛憐して眷顧される位。この分では、竇憲をして、ひとり功を專にし、燕然山に石を勒せしめることも無からうと思はれる。

【餘論】　この從軍行の中なる主人公は、單なる兵卒ではなく、堂堂たる大將分であつて、その內容も從つて雄壯を極めて居る。しかし、格別の雋句もなく、名勇單于憚の二句は、さながら、讀者として、馬頭米囊の想を爲さしめる。

大梁行

大梁四面平如砥。
大梁、四面平なること砥の如く、

西去(一)咸陽一千里。
西、咸陽を去ること一千里。

【字解】【一】咸陽　秦の都、後の長安の北に在る、なほ卷一放歌行に注して置いた。【二】中天　天に

魏王此地昔爲都。
魏王、この地、むかし都と爲す、

宮闕中(二)天碧雲起。
宮闕、天に中して、碧雲起る。

車聲(三)輷輷夜未休。
車聲輷輷、夜未だ休まず、

帶甲十萬名蒼頭(四)。
帶甲十萬、蒼頭と名づく。

撞(五)鐘列(六)鼎宴上客。
鐘を撞き、鼎を列して、上客を宴し、

奉金走幣連諸侯。
金を奉じ幣を走らして、諸侯を連ぬ。

信陵(七)眞是賢公子。
信陵、眞に是れ賢公子、

富貴不驕天下士。
富貴、天下の士に驕らず。

已訪侯嬴(八)到里門。
すでに侯嬴を訪うて里門に到り、

復迎朱亥(九)經屠市。
復た朱亥を迎へて屠市を經たり。

傾(一〇)身折節(一一)世莫同。
身を傾け、節を折つて、世同じきなし、

緩急(一二)竟賴斯人功。
緩急、竟に賴る斯人の功。

(一三)邯鄲秦軍一椎破。
邯鄲の秦軍、一椎に破れ、

中ばする。【三】輷輷　左思の魏都賦に振旅輷輷とある、車輪の響。【四】蒼頭　戰國策に「蘇秦、魏王に說いて曰く、竊に聞く、大王の卒、武力二十餘萬、蒼頭二十萬」とあつて、その注に「蒼し、靑を以て首を帕す」とあり、又、史記項羽本紀の注に「士卒の皂巾を謂ふ」とある。頭に靑色の頭巾を被つて居る雜兵。【五】撞鐘　食事の始まる相圖に鐘を撞く。【六】列鼎　鼎は物を煮る器。【七】信陵　史記、信陵君傳に「公子無忌は、昭王の少子、安釐王の異母弟、信陵君に封ぜらる。仁にして士に下り、士、賢不肖となく、謙して之を禮し、富貴も て士に驕らず。士、爭うて之に歸す、食客三千」とある。【八】侯嬴　上文の續きに、「魏に隱士あり、侯嬴といふ、家貧

七國震動聞英風。　七國震動して、英風を聞く。
古城重過爲搔首。　古城重ねて過ぐれば、爲に首を搔く、
幾度秋風落楊柳。　幾度か、秋風、楊柳を落す。
沼上應無鴻雁來。　沼上、應に鴻雁の來るなかるべし、
苑中只有狐狸走。　苑中、只だ狐狸の走るあり。
立馬塵沙日欲昏。　馬を塵沙に立てて日昏からむと欲す、
悲歌感慨向夷門。　悲歌感慨、夷門に向ふ。
豪華多少同銷歇。　豪華多少、同じく銷歇、
獨有高名今尙存。　ひとり高名の今尙ほ存するあり。

にして大梁夷門の監者たり。公子、これを聞き、車騎を從へ、左を虛しうして、自ら侯生を迎ふ。侯生、弊衣冠を攝し、直に上つて、公子の上坐に載りて讓らず、以て公子を觀むと欲す。公子、轡を執ること愈よ恭し」とある。【九】 朱亥 上文の續きに「侯生、又公子に謂つて曰く、臣、客あり、市屠の中に在り、願はくは、車騎を枉げて之を過ぎれ、と。公子車を引いて市に入る。侯生、下つて其客朱亥を見て俾倪し、故らに久しく立つて其客と語り、微に公子を察するに、顔色愈よ和らぐ」とある。【一〇】 傾身 拜を爲すこと。【一一】 折節 おのが操守を折つて他に屈服する。【一二】 緩急 緊急の場合、緩は添へて言ふ。【一三】 邯鄲秦軍一椎破 上文の續きに「魏の安釐王二十年、秦の昭王、すでに趙の長平の軍を破り、進んで邯鄲を圍む。魏王、晉鄙をして趙を救はしめ、實は兩端を持し、以て觀望す。公子、侯生の計に從ひ、如姬に請うて晉鄙の兵符を盜み、鄴に至つて、晉鄙に代る。晉鄙、符を合して之を疑ひ、聽くなからむと欲す。朱亥、四十斤の鐵椎を袖にして晉鄙を椎殺す。公子、遂に兵を將ゐて、趙を救ひ、秦軍を擊つ、秦軍解けて去る」とある。【一四】 七國 韓・魏・趙の三韓と秦・齊・楚・燕。【一五】 苑中 苑は宮中の庭園。【一六】 夷門 侯嬴が門番となつて居た處。【一七】 銷歇 消えて無くなる。

【題義】 大梁行は、樂府詩集に「新樂府雜題」とあり、大梁は、一統志に「今の河南開封府、戰國魏、ここに都す」とあつて、この題は、大梁懷古の意を述ぶるを主とし、そして、信陵君が魏の第一等の人物であつた處から、自然、この人に關繫して居る。一番古いのは、唐堯客の作であるが、次に出た高適の方が、却つて著名で、卽ち靑邱の此作の藍本とも見らるべきが故に、左に其全篇を擧げることにする。

古城莽蒼饒荊榛。驅馬荒城愁殺人。魏王宮觀盡禾黍。信陵賓客隨灰塵。憶昔雄都舊都市。軒車照曜歌鐘起。軍容帶甲三十萬。國步連衡一千里。全盛須臾那可論。高臺曲池無復存。遺墟但見狐狸跡。古城空多草木根。暮天搖落傷懷抱。撫劍悲歌對秋草。俠客猶傳朱亥名。行人尙識夷門道。白璧黃金萬戶侯。寶刀駿馬塡山丘。年代淒涼不可問。往事唯見水東流。

【詩意】 大梁は、四面平坦にして、さながら、砥の如く、西、咸陽を距つること一千里、戰國の頃、魏王は、この地を都として居り、宮闕高く聳えて天に半ばし、碧雲、これより起つて、まことに莊麗を極めて居た。城中は、輪轡轔轔として、夜も止まず、武裝せる十萬の兵士は、蒼頭と號して、いつでも徵發することが出來、王宮に於ては食時の鐘を鳴らし、鼎を竝べて、上客を宴し、外に向つては、金幣を奉じて、山東の諸侯と連和し、絕えず、その無事を圖つて居た。ここに、信陵君は、本當の賢

公子であつて、身、富貴なれども、これを以て天下の士に威張ることはなく、すでに夷門に駕を枉げて、門番の侯嬴を訪ひ、又朱亥を迎へむが爲に、居者どもの居る陋巷を通過した。かくの如く、身を傾けて賢を禮し、節を折つて人に服することは、世にも類ないことで、果然、危急の場合に際し、この二人の功に頼つて、これを切り拔けることが出來た。公子が晉鄙の軍を奪つて、趙の邯鄲に乘り込むと、さしもの秦兵も、一椎の下に擊ち破られ、七國は、その英風を傳聞するや、恐れ入つて震動したといふ位。しかし、今日、その古城を經過すると、風光すでに舊に非ず、爲に首を搔くばかり。おもへば、柳を振ひ落す秋風は、その後、幾たび吹いたか。池は水が涸れて、雁も又來ず、御苑は草に荒れて、唯だ狐や狸が走つて居るばかり。そこで、渦卷く沙塵の中に馬を立つれば、日も黄昏ならむとし、悲歌を唱へて感慨に堪へず、それから、かの侯嬴の居たといふ夷門へ往つて見やうと思つて居る。豪華は、どれ程盛であつても、はては同じく銷亡して仕舞ふが、唯だ高名のみは、幾千年後の今日でも、依然殘つて居るので、それにつけても、信陵君は、まことに、慕はしい樣な偉い人である。

【餘論】中間二解、特に信陵君の事を敍し、自然、これが中心になつて居る。古城の四句は、滿目荒涼の景を敍し、覺えず人をして愴然たらしめる。

東飛伯勞歌

東飛伯勞の歌

前飛蜻蜓後飛蝶。　前には蜻蜓を飛ばし、後には蝶を飛ばし、
桃葉楊枝毎相接。　桃葉楊枝、毎に相接す。
誰家季女弄(一)春妍。　誰が家の季女か、春妍を弄し、
披煙映日窗戶前。　煙を披き、日に映ず、窗戶の前。
(二)金雀雙釵(三)翠羽扇。　金雀の雙釵、翠羽扇、
(四)纈屏(五)黼帳(六)文羅薦。　纈屏黼帳、文羅の薦。
嬌羞年幾(七)十五多。　嬌羞、年幾ばくか、十五多し、
(八)將呈復隱奈愁何。　將に呈せむとして、復た隱れ、愁を奈何。
(九)流暉倏沒百花暝。　流暉、倏ち沒して、百花暝す、
空持(一〇)可憐誰作竝。　空しく、可憐を持して、誰とか竝を作す。

【字解】〔一〕春妍　艷なる春景色。〔二〕金雀雙釵　脚が割れて居る釵で、金雀が其先端に付いて居る。〔三〕翠羽扇　翡翠の羽を集めて造つた團扇、西京雜記に「趙飛燕、皇后となる、その女弟、翠羽扇を上る」とある。〔四〕纈屏　玉篇に「纈は綵纈なり」とある。模樣ある縮みを張つた屏風。〔五〕黼帳　考工記に「黑と白と之を黼といふ」とあるから黑白の斑紋ある紗幘。〔六〕文羅薦　彩色せる薄紗の敷物。〔七〕十五多　十五餘といふに同じ。〔八〕將呈　その處に出で來る。〔九〕流暉　流れ行く日影。〔一〇〕可憐　愛すべき容貌。

【題義】東飛伯勞歌は、樂府遺聲に「鳥獸曲」とあり、樂府詩集に「雜曲歌辭」とある。伯勞は、夏至に鳴き冬至に止むといふ鳥で、普通、鵙といふが、よくは分からぬ。この題の古詞は、漢人の作で、左に載する通り、十五六の可憐なる少女の嬌態を寫すを主とし、東飛伯勞は、唯だ破題の字面を取つ

て來ただけで、何等の意味もない。

東飛二伯勞一西飛レ燕。黃姑織女時相見。誰家兒女對レ門居。開レ顏發レ豔照二里閭一。南牕北牕挂二月光一。羅幃綺帳脂粉香。女兒年幾十五六。窈窕無雙顏如レ玉。三春已算花後風。空留二可憐一誰與同。

後人の擬作も、無論、その意を承けて居るが、伯勞の事などは、少しも云つてない。

【詩意】前には蜻蜓が飛び、後には胡蝶が舞ひ、桃の葉と柳の枝とは、毎毎相接し、今しも、春景色は酣である。誰が家の小娘か知らぬが、この春景色に見惚れ、ひとり、窗戸の前に立てば、さながら煙を披いて日に映ずるかと疑はれる。頭上には、金雀の飾ある雙脚の釵を差し、手には翠羽の團扇を持ち、繡屏黼帳を廻らしたる文羅の敷物の上に孤坐して居る。うら若く羞を含める其姿、年は幾つか、十五よりは、些か長けて見える。折角出かかつては再び匿れる樣のいぢらしさ、人をして、覺えず、暗愁を生ぜしめる。やがて流るる入日は、忽ち沒し、百花の影ほの暗く、ものうき春は、一しほ風情ありげなるに、むなしく、可憐なる絶代の容姿を持ちながら、誰と共にするでもなく、唯だ一人で居るのは、まことに氣の毒な樣に覺える。

【餘論】全篇の結構は、古詞を摸し、その句數までも同じで、格別新意を出したとも見えないが、繡羞の二句は、一寸面白い。

春江花月夜

(一)皓月金波滿。奇花玉樹新。
(二)浮輝與二流豔一併弄二一江春一。
還持誰可レ比。(三)結綺閣中人。

春江花月の夜
皓月、金波滿ち、奇花、玉樹新なり。
浮輝と流豔と、併せて一江の春を弄す。
還た持して、誰にか比すべき、結綺閣中の人。

【字解】【一】皓月 明月に同じ。【二】浮輝與流豔 月色と花光とをいふ。【三】結綺閣 南史張貴妃傳に「後主、自ら臨春閣に居り、張貴妃は結綺閣に居り、龔孔二貴嬪は望仙閣に居る」とあるから、結綺閣中人といへば、卽ち張貴妃、名は麗華。

【題義】春江花月夜は、樂府詩集に「淸商曲辭、吳聲歌曲」とあり、晉書樂志に「春江花月夜・玉樹後庭花・堂堂は、竝に陳の後主の作るところ、後主、常に宮中の女學士及び朝臣と相和して詩を爲る。太常令何胥、又文詠に善し、その尤も豔麗なるものを采り、以て此曲となす」とあつて、つまり、陳の宮中に於て盛に唱へられた豔曲であるが、その事の頗る風流なるより、後人の擬作も多い。

【詩意】月晴れて、金波、江中に滿ち、玉樹、奇花を著けて、目もあやなるばかり、花月を兩つながら兼ぬることは、元來六つかしいのに、浮べる月の色と、流るる花の豔容とは、相待つて、滿江の春を弄して居る。さて此景色を取り出でて、誰にか比すべきとならば、後宮第一の佳麗として結綺閣におはす彼の張貴妃より外にあるまい。

【餘論】さながら、自分が當日陳宮に居た文士輩に成つた積りで作つたので、極めて切實である。且つ浮輝の二句は、取り離して見ても、佳句たるを失はない。

踏歌行

　　踏歌行

(一)香塵和レ露踏成レ泥。　香塵露に和して、踏んで泥と成る。

花下風寒(二)鬢脚低。　花下、風寒くして、鬢脚低し。

夜靜高樓有二人聽一。　夜は靜にして、高樓、人の聽くあり。

(三)起頭一句(四)唱敎レ齊。　起頭一句、唱へて齊しからめむ。

【字解】(一) 香塵　花下の塵なるが故に、特に香といつたのであらう。(二) 鬢脚低　掻き上げた鬢の毛が垂れかかる。(三) 起頭一句　最初の一くさり。(四) 唱敎齊　歌つて揃ふ樣に致したい。

【題義】踏歌行は、樂府詩集に「近代曲辭」とあり、その由來に就いては、舊唐書睿宗紀に「上元の夜、上、安福門に御し、內人を出して連袂踏歌せしめ、百寮を從へて之を觀る」といひ、宣和書譜に「南方の風俗、中秋の夜、婦人相持して踏歌し、月影中に婆娑し、最も盛集たり」とある。それから、踏歌行の今傳はつて居るのは、劉禹錫の作で、卽ち左の通りである。

春江月出大隄平。隄上女郎連レ袂行。唱盡新詞看不レ見。紅霞影レ樹鷓鴣鳴。

桃蹊柳陌好經過。燈下妝成月下歌。爲二是襄王故宮地一。至レ今猶自細腰多。

新詞宛轉遞相傳。振袖傾鬟風露前。月落烏啼雲雨散。游童陌上拾二花鈿一。

日暮江頭聞二竹枝一。南人行樂北人悲。自三從雪裏唱二新曲一。直至三春花盡時。

かくの如く、時節は、いつでも善いとして、踏歌その物の情致を詠出して居る。靑邱の此作も、やがて、これ等を摸したものに相違ない。

【詩意】花の下路の香塵は、露に溼うて、踏めば泥となり、花の下枝を搖する風は、稍や寒く、鬢のほつれが低く頰に垂れかかつて居る。この時しも、女どもは、袂を連ねて踏歌するが、夜は靜にして、高樓の上には之を聽かうと待ち構へて居る人があるから、注意して、はじめの一くさりだけでも、聲の揃ふ樣に遣つて貰ひたい。

【餘論】ただ兒女の憨態を寫し出したるに過ぎぬが、流石に多少の風情がある。

子夜四時歌

　　子夜四時の歌

(一)白白復朱朱。(二)芳條(三)罥二(四)綉襦一。　白白復た朱朱、芳條、綉襦に罥る。

摘來隨二(五)女伴一。(六)賽鬬不二曾輸一。春　摘み來つて女伴に隨ひ、賽鬬、かつて輸せず。

【字解】(一) 白白復朱朱　白いのと赤いのと交つて居る。韓愈の詩に同游百花林、朱朱兼二白白一とある。(二) 芳條　花の咲いて

居る枝。【三】罥 かかる、からまる。【四】綉襦 刺繍を施した下衣。【五】女伴 侍女輩をいふ。【六】賽鬪 花で打ち合ふ、花いくさ。

【題義】子夜歌に就いては、前に巻一櫂歌行の中なる子夜の項、竝に白紵詞の條に於て一寸述べて置いたこともあるが、念の爲め、更に詳説することにする。子夜歌は、樂府詩集に「清商曲辭」とあり、「唐書樂志に曰く、子夜歌は晉曲なり。晉に女子あり、子夜と名づく、この聲を造りしが、聲、哀苦に過ぐ、と。宋書樂志に曰く、晉の孝武太元中、瑯琊王軻の家、鬼あり、子夜を歌ふ。殷允、豫章となる。豫章の僑人、庾僧虔の家、亦た鬼あり、子夜を歌ふ、と。殷允の豫章たるは、亦た是れ太元中、すなはち子夜は是れこの詩以前の人なり。古今樂錄に曰く、凡そ歌曲終に皆送聲あり、子夜は持子を以て曲を送り、鳳將雛は澤雉を以て曲を送る、と。樂府題解に曰く、後人更めて四時行樂の詞となし、これを子夜四時歌といふ。又大子夜歌、子夜警歌、子夜變歌あり、皆曲の變なり」とある。すると、子夜は、元と女の名、時は晉の太元の前に當つて居た。その女の歌つた節が面白い處から、その節に合ふ樣に作つた短い歌曲が、卽ち子夜歌、後には四時の行樂を分詠する樣になつた。但し、後人は、歌曲の節など分からぬから、唯だその形式を摸し、內容を踏襲するに過ぎぬ。子夜歌の古詞は四十二首、子夜四時歌と題するもの七十五首、次いで、梁の武帝・王金珠等、その作を傳へ、やがて、唐の王翰・郭元振・李白等に及んで居る。その體の最も普通なるは五言四句、卽ち二十字であるが、或は五言で六句八句のものもある。青邱の此作は、矢張、古詞に倣つたので、四首は、卽ち四時を順次に分詠したのである。

【詩意】春酣にして、花が亂れ咲き、白いのと赤いのと相交り、その枝は、低く垂れて、繡襦にからまる位。そこで、花の枝を折つて、侍女輩に隨ひ、やがて、花いくさをするが、決して負けない積りである。

(一)紅妝何(二)草草。晚出(三)南湖道。
不忍便回舟。(四)荷花似郞好。

夏

紅妝、何ぞ草草たる、晚に南湖の道に出づ。
便ち舟を回すに忍びず、荷花、郞に似て好し。

【字解】【一】紅妝 紅粉の妝。【二】草草 忙しげに早く濟ます。【三】南湖 地名とも思はれるが、どこか分からぬ。【四】荷花似郞好 荷花は蓮の花、唐書楊再思傳に「張昌宗、姿貌を以て幸せらる。再思曰く、人は言ふ、蓮花は六郞に似たりと、正に蓮花六郞に似たるのみ」とある。六郞は昌宗の小字。

【詩意】お化粧も、そこそこに濟まして、日暮に南湖の道に出で、程なく、漕ぎ出した。兎角する內に、暗くなつて來たから、直に舟を回すべきであるが、あたりに咲ける蓮の花が、さながら吾が郞に似て、いとも美しき故、それに看惚れて、立ち去るに忍びない。

堂上織流黃。堂前看月光。　堂上に流黃を織り、堂前に月光を看る。
羞見天孫度。低頭入洞房。秋　天孫の度るを見むことを羞ぢ、頭を低れて洞房に入る。

【字解】【一】流黃　綾の模樣、轉じて綾その物をいふ。古樂府相逢行に中婦織流黃とある。【二】天孫　織女の星。【三】洞房　閨房、その奥深きより洞といふ。

【詩意】堂上に機を据ゑて、流黃の綾を織つて居たが、やがて、夜になると、堂前に月光を見た。織女の星は天空を度るであらうが、その名の通り、機織が上手。それに見られては羞かしいといふので、少婦は、頭を低れて、奥深き閨の中に引ッ込んで仕舞つた。

空幃擁爐坐。夜冷微紅滅。　空幃、爐を擁して坐す、夜は冷にして微紅滅す。
郎意似殘灰。無因得重熱。冬　郎の意、殘灰に似たり、重ねて熱するを得るに因なし。

【字解】【一】空幃　人なき帳。【二】微紅　炭火の殘りたるをいふ。

【詩意】人なき紗帳の中に、つくねんと爐を擁して居たが、夜の更くるにつれて、寒さは一しほ增し來り、爐中の炭火の少しばかり赤かつたのも、いつしか消えて、無くなつて仕舞つた。それはまだしも、戀の醒めはてた吾が郎の心は、殘灰の如く、二度と盛りかへして熱くなるべき因なきは、まことに嘆息に堪へぬ次第で、私は、寄る邊なき孤獨の身を喞つ外はない。

【餘論】春は芳條、夏は荷花、秋は織女、冬は爐火、各〻その時節を代表するものを倩ひ來り、それに寄せて情思を述べた。首首、いづれも可憐の極であるが、第二・第四が殊に優れて居て、古詞と其勝を毫釐の間に爭ふかと思はれる。

迎送神曲

迎送神曲

薦芳兮奠醑。　芳を薦め、醑を奠し、
斲氷爲梁兮葺荷以爲宇。　氷を斲つて梁となし、荷を葺いて宇と爲す。
神不來兮孰與處。　神、來らず、孰れか與に處る、
空山愀兮暮多雨。　空山、愀として、暮に雨多し。
渺吾望兮瀟湘。　渺として、吾、瀟湘を望む、
雲冥冥兮水茫茫。　雲冥冥として、水茫茫。
有美人兮在堂。　美人あり、堂に在り、

【字解】【一】薦芳　かんばしき花を神前に進める。【二】奠醑　醑は酒、神酒を供へる。【三】斲氷爲梁　楚辭、九歌、雲中君に桂櫂兮蘭枻、斲氷兮積雪とあるに本づく。【四】葺荷以爲宇　蓮の葉で、屋根を葺く、楚辭、九歌、湘君に築室兮水中、葺之兮荷蓋とある。【五】空山愀兮　愀は愁を含む貌。【六】瀟湘　もと二水の名、洞庭の南に於て合流する處から、その地方一帶の總名となつて居る。なほ題義の條を見よ。

盍歸來兮故鄉。　盍んぞ故鄉に歸り來らざる。

【七】有美人兮在堂　この美人は、龍を生んだ其母を指す。なほ題義の條を見よ。

【題義】迎送神曲は、樂府の古題には無く、これは、靑邱の新創に係るのである。原注に「白龍廟は、陽山に在り。世傳ふ。東晉の時、居民繆氏の女、一肉塊を生む、化して白龍となつて去る。女、蹶絕し、遂に祠を山巓に立つ。又云ふ、龍子、瀟湘に分職し、每年母を省す、と。余爲に迎送神曲を爲る」とある。すると、この詩は、白龍廟に於て其神たる白龍を迎送する意味で作つたので、前首は迎神、後首は送神に關するものである。

【詩意】かんばしき花どもを薦め、清淨にして汚れなき神酒を供へ、御迎への用意は、すつかり整つた。その神殿はといへば、氷を斲つて梁となし、蓮の葉で屋を葺き、すべてが、淸らかで且つ涼しい。もし神にして來らざれば、誰か共に居るべき。折角の準備も、すべて無駄になる。そこで、空山日暮れて、風煙さながら愁ふるが如く、やがて雨さへ降つて來た。聞けば、この廟の主たる白龍は、瀟湘に居るとのことで、その方を望めども、渺渺として際涯なく、唯だ雲冥冥として水茫茫たるばかり。白龍よ、汝の母は、現に此堂に居て、汝を待つて居るのに、何故、早く歸つて來ぬのであるか。

導(一)赤鯉兮從(二)玄鼉。　赤鯉を導とし、玄鼉を從とし、

【字解】【一】導赤鯉　赫鯉を案内とする。述異記に「江陵の北に吳子英の廟あり。子英は卽ち野人なり、善く水に入つて魚を捕ふ。一赤鯉を得、將に家の池中に著けて之を養はむとす。後に長じて徑一丈、角翅あり、子英に謂つて曰く、我、子の身を迎ふ、汝、我が背に上れ、と。遂に天に昇つて神仙となる」とある。【二】從玄鼉　黑鼉を從者とする。爾雅に「鼉、一名は土龍、その甲黑色、能く橫に飛ぶも、上騰する能はず」とあり、拾遺記に「禹、巨海を濟り、黿鼉を梁となす」とある。【三】靈旗　漢書禮樂志に招搖靈旗とあつて、その注に「招搖を旗に畫き、以て征伐す、故に靈旗と稱す」とある。招搖は、水中の怪物。【四】安歌　靜に歌ふ、楚辭の九歌に揚枹兮拊鼓、疏緩節兮安歌とある。【五】未急　音律には序破急とあつて、急は最後に聲高くすること。故に未だ終らずといふ義。【六】回輈　輈は車の轅。【七】北有湫　湫も淵と同じく、水の深い處。

冷風回兮水驚波。　冷風回つて、水、波を驚かす。
儼靈(三)旗兮來下。　儼として、靈旗、來り下り、
巫撫節兮安(四)歌。　巫は、節を撫して安歌す。
安歌兮未(五)急。　安歌して未だ急ならず、
倏回(六)輈兮山之側。　倏ち輈を山の側に回す。
南有淵兮北(七)有湫。　南に淵あり、北に湫あり、
神不留兮我心憂。　神留まらず、我が心憂ふ、
願歲來兮惠我秋。　願はくは、歲ごとに來つて、我が秋を惠め。

【詩意】白龍は、迎神の曲につれ、赤鯉を先導とし、黑龜を從者とし、天から降つて來た。すると、冷風四に吹き廻り、水、驚いて波を揚ぐる時、儼然たる靈旗を押し立てて、巫女は、調子を誤らすし

て、靜に歌つて居たが、その歌の未だ終らざるに、早くも、車の轅を山の側に廻して、もう歸つて仕舞はれる。ここは、まことに好い處で、南には淵あり、北には湫あり、どこに居ても差支もあるまじきに、白龍、しばらくも止まらず、まことに、我が心を憂へしめる。愈よ歸られるならば、致し方もないが、どうか、毎年ここに來り、そして、風雨時を以て至り、我が秋を惠んで、五穀豐穰なる樣にして貰ひたいと、謹んで御祈りをする次第である。

【餘論】二首、ともに楚辭の體を以て之を行り、無難には出來て居るが、いささか物足らぬ樣の感じがする。前首の神不㆑來兮孰與處の二句は、一寸面白いが、後首は、これを一概して淺近である。

有㆑所㆑思

思ふ所あり

有㆑所㆑思、今安在。　思ふ所あり、今安くにか在る、

煙霧迢迢隔㆓南海㆒。　煙霧迢迢として、南海を隔つ。

昔年遺㆓我翡翠裘㆒。(一)　昔年我に翡翠の裘を遺る、

篋中久閉銷㆓光彩㆒。　篋中久しく閉ざして、光彩を銷す。

宛如㆓神仙在㆒瀛洲㆒。(二)　宛として、神仙、瀛洲に在り、

乘㆑濤欲㆑至風引㆑舟。　濤に乘じて至らむと欲して、風、舟を「引くが如し。」

同心之人乃離阻。(三)　同心の人、乃ち離阻。

嗟我處㆑此將何求。　嗟、我、ここに處つて將た何をか求めむ。

【字解】【一】翡翠裘　翡翠の羽を聚めて綴り合はせた裘、拾遺記に「宋の景公、春夏は珠玉を以て飾となし、秋冬は翡翠を以て温となす」とあり、埤雅に「翠鳥、これを翡翠といふ。翡と云ふ、雄は赤くして翡といひ、雌は青くして翠といふ」とあり、集異記に「則天、張昌宗に集翠裘を賜ひ、狄仁傑をして、ともに此裘を賭せしむ。狄、因つて衣るところの紫絁袍を指して曰く、臣、これを以て昌宗に敵せむ、と。果局、しきりに北く。公、裘を褫ぎ、恩を拜して出づ」とある。【二】瀛洲　前漢書郊祀志に「蓬萊・方丈・瀛洲、この三神山は、ともに傳へて、渤海中に在り、人を去ること遠からず、蓋し嘗て至るものあり、諸仙人及び不死の藥、皆在り、金銀、宮闕を爲す。未だ至らず、これを望めば雲の如し、到るに及んで、三神山、反つて水の下に居り、風、輒ち船を引いて去り、終に能く至るなし」とある。この文を見ると、三神山は、蜃氣樓を望んで、これを海中の仙境と誤想したるものに過ぎぬ。現に山東の登州岬角は、わが魚津・四日市の如く、蜃氣樓の常現地で、東坡は、かつて、海神に禱つて、蜃氣樓を此處で見たことがある。【三】離阻　隔離阻絶、遠く離れて居る。

【題義】有所思は、樂府詩集に「鼓吹曲辭鐃歌」とあり、又「樂府題解」に曰く、古詞に言ふ、有㆑所㆑思、乃在㆓大海南㆒、何用問㆓遺君㆒、雙珠玳瑁簪、聞君有㆓他心㆒、拉雜摧㆓燒之㆒、摧㆓燒之㆒、當㆑風揚㆓其灰㆒、從㆑今以往、勿㆓復相思㆒、相思與㆑君絶と。按ずるに、古今樂錄、漢の太樂食擧第七回、亦た之を用ふ。齊の王融の如何有所思、梁の劉繪の別離安可再の如きは、但だ離思を言ふのみ。宋の何承天に所思篇あり、曰く、有㆑所㆑思、思㆓昔人㆒、曾閔二子善養㆑親と。すなはち、生きては荼苦に罹るを言ひ、慈親の見るを得ざるを哀しむなり」とある。青邱の此作は、王融・劉繪等と同じく、矢張、離思を述べただけである。

【詩意】わが思ふところの人は、今どこに居るか。煙霧迢迢として、南海を隔て、これを望まむと欲するも、見當が付かない。その人は、さき頃、翡翠の裘を贈つて吳れたが、その裘も、篋中に入れた儘で、大分長くなつたから、光彩銷亡し、全く見る影もないやうに成つて仕舞つた。わが思ふところの人は、丁度、神仙の瀛洲に居るからといふので、波濤に乘じて、折角、そこへ往きかかると、心なき風に舟を引き去られて、到底到著することがないと同じく、たとひ、見えて居ても、寄り付くことが出來ない。同心の人にして、かくの如く遠く離れて居る上は、われ獨り此處に居たところで、何の役にも立たない。

【餘論】尋常一樣の情思であるが、宛如神仙在瀛洲の二句は、新警工絕、他に其類なく、まさしく、全篇の生命である。

吁嗟篇

(一)惻惻抱(二)深隱。(三)靡靡踰(四)崇丘。
(五)凜凜歲(六)欲徂。(七)役役車未休。
不辭車未休。但傷歲莫留。

吁嗟篇

惻惻として深隱を抱き、靡靡として崇丘を踰ゆ。
凜凜として、歲、徂かむと欲し、役役として、車、未だ休「ます。」
辭せず、車の未だ休まざるを、但だ傷む歲の留まるなきを。

(八)窮陰蔽(九)九野。(一〇)徒旅同時憂。
(一一)豺虎當路啼。(一二)猿猱出林遊。
我飢雪作糧。我寒又無裘。
徒思陽春日。(一三)誰返義和輈。
天時自有常。涙下還復收。

窮陰、九野を蔽ひ、徒旅、同時に憂ふ。
豺虎、路に當つて啼き、猿猱、林を出でて遊ぶ。
我、飢ゑて雪を糧と作す、我、寒くして又裘なし。
徒に陽春の日を思ふ、誰か義和の輈を返さむ。
天時、自ら常あり、涙下つて還た復た收めむ。

【字解】【一】惻惻　痛ましげに。【二】深隱　隱は隱憂、隱衷。【三】靡靡　その行の遲きをいふ。【四】崇丘　高い岡。【五】凜凜　寒苦しき貌。【六】歲欲徂　年が暮れかかる。【七】役役　せつせと勉むる貌。【八】窮陰　歲末天寒くして曇りたること。【九】九野　九は大數、ひろき野。【10】徒旅　徒步する旅客。【一一】豺虎　豺は山犬、魏武帝の苦寒行に虎豹夾路啼とある。【一二】猿猱　埤雅に「猿は猴の屬、長臂、善く嘯き、攀援に便なり」とあり、韻會に「猱は母猴なり、人に似たり、嚴氏曰く、猱は卽ち王孫、杜詩の胡孫、是れなり。爾雅に、猱猿善援」とある。【一三】誰返義和輈　太陽が日車に乘じ、六龍を駕し、義和これを御すといふので、義和の轅、卽ち日車を後に返し、冬から引きもどすことは出來まいかといふ意。義和は、もと堯舜時代の天官で、義氏は日、和は月を觀測することを世職として居たが、後には上記の如き異說が出來たのである。

【題義】吁嗟篇は、樂府詩集に「相和歌辭、淸調曲」とあり、樂府題解に「曹植、苦寒行に擬し、吁嗟となす」とある。これより先、魏の武帝の苦寒行に、北上太行山、艱哉何巍巍の一篇があつたから、曹植は、その意を踏襲して、同じく苦寒行を作つたが、その起首に吁嗟此轉蓬、居世何獨然とある處

から、後世、これを吁嗟篇といつた。されば、青邱の此作も、題こそ異なつて居るが、その內容は、矢張、苦寒行である。

【詩意】いたましくも、心中に深き憂を抱き、のろのろとして高い岡を踰えて行く、寒氣凜凜として歲將に暮れむとする折から、せつせと勉めて、車は、しばらくも休まない。車の休まぬは、先づ善いとして、年の留まらずに暮れ行くは、いかにも痛むべく、窮冬の重陰は、一面に野を蔽ひ、徒步の旅客は、同時に憂に惱むを免れぬ。加ふるに、豺虎は、行く手の路に當つて吼え哮り、猿猱も、林中に居たたまらずして、出て遊んで居る。われ飢ゑては雪を糧食となし、寒いといつても、裘がない。そこで、無駄と知りつつ、長閑かりし陽春の日を懷かしみ、羲和の轅を廻して、この冬を引きもどす工夫は無いかと思ふばかり。さはれ、天の時には、自ら一定の常則があつて、寒盡くれば年改まり、冬の後は、すぐ春になるのであるから、屹と思ひ直し、流れ落つる涙を收めて、どうやら、旅を續けて行くのである。

【餘論】窮冬荒寒の景を敍するところは、なほ緊健切當を缺いて、いささか不十分の嫌ひがある。また、豺虎當路啼の四句は、古人を踏襲して、痕跡の歷歷たるは、あまり見ばの善いものでもない。唯だ結末二句は、暗中に一道の光明を認めたので、自奮の意を含み、全篇爲に振ふを覺える。

撃筑吟。贈張贊軍。

撃筑吟、張贊軍に贈る

(一)撃筑上君堂。君心不可忘。
筑を撃つて君の堂に上る、君の心、忘るべからず。

(二)哀聲流易水。(三)憤氣激咸陽。
哀聲、易水に流れ、憤氣、咸陽を激す。

不向諸侯座。寧來刺客場。
諸侯の座に向はずして、むしろ刺客の場に來らむや。

今朝特前奏。爲我一停觴。
今朝、特に前んで奏す、我が爲に、一たび觴を停めよ。

【字解】【一】撃筑　筑は數ば前に見ゆ。琴の類。【二】哀聲流易水　史記刺客傳に「易水の上に至る、すでに祖して道を取る。高漸離、筑を撃つ。荊軻和して歌ひ、變徵の聲を爲す。士、皆淚を垂れて涕泣す。又前んで、歌うて曰く、風蕭蕭兮易水寒、壯士一去兮不復還と。復た羽聲を爲して慷慨す。士、皆目を瞋らし、髮盡く上つて冠を指す」とある。【三】憤氣激咸陽　金檀の注には、刺客傳の贊き、荊軻が始皇を刺して中らなかつた事實を引いてあるが、これは、同傳の終りに、高漸離が、荊軻の死後、その遺志を繼いで始皇を殺さむとし、目を矐べられて寵幸を得たるを幸に、ある時、鉛を筑中に置いて、秦皇帝を扑つたが中らず、遂に誅せられたとある其事を云つたのであらう。荊軻行刺の事は、折角ながら、撃筑に何等の關係もない。咸陽は秦宮の所在地。

【題義】撃筑吟は、古しへ其作なく、青邱が自ら設けた新題と見え、自分が筑を撃つに就いて、張贊軍といふ人に、どうか杯を停めて、よツく聞いて吳れろと囑望したのである。張贊軍は、如何なる人か分からぬ。

【詩意】筑を撃ちつつ、君が堂に上つたのは、君が心、忘るべからず、深く意氣に感じたからである。

わが筑は、古しへの高漸離が荊軻と別るるに際し、悲哀の聲、易水の上に流れ、秦皇帝を扑たうとした時、義憤の氣が咸陽宮中に於て激した樣な淸越なる音を發する。われは、諸侯の座に向はず、いかで、刺客の場に來るべきぞ。もとより、彼の壯士輩の如き詭激な所行は爲さぬ積りである。しかし、今日、特に君の前に來て、得意の一曲を奏するのであるから、君も之を諒とし、わが爲に、一たび杯を停めて、その聲に寄する我が心を酌み取つて貰ひたい。

【餘論】 體は五律で略ぼ完整して居る樣なものの、一味の氣魄が、まだ足らぬ樣である。かくの如き絕好題目には、古體が相應しいので、それが即ち靑邱の絕技である。

苦哉遠征人

苦なる哉遠征人

(一)悠悠(二)荷戈子。(三)謫發事遠征。
悠悠戈を荷ふの子、謫發せられて遠征を事とす。

遠征無(四)窮期。千里萬里程。
遠征窮まる期なく、千里萬里の程。

(五)瞻斗知郷遠。覽物悟歳更。
斗を瞻て鄕の遠きを知り、物を覽て歳の更まるを悟る。

霜露(六)鑠肌膚。弊鎧(七)蟣虱生。
霜露、肌膚を鑠し、弊鎧、蟣虱生す。

況茲(八)三邊虜。驕黠未易平。
況んや、この三邊の虜、驕黠未だ平げ易からざるをや。

聞笳已心摧。(九)赴刃仍骨驚。
笳を聞いて、すでに心摧け、刃に赴いて、仍ほ骨驚く。

(一〇)軍興有嚴誅。賤命顧自輕。
軍興、嚴誅あり、賤命、顧みて自ら輕し。

區區在(一一)行間。敢望(一二)竹帛名。
區區として、行間に在り、敢て竹帛の名を望まむや。

奈何久不還。主將功未成。
奈何せむ、久しく還らず、主將、功未だ成らず。

誰憐(一三)城南室。思婦感(一四)鵲聲。
誰か憐む城南の室、思婦、鵲聲に感ずるを。

【字解】【一】悠悠　この行の遠きをいふ。【二】荷戈子　矛を擔ぐ人、詩經に荷₂戈與₁祋とある。【三】謫發　罪科ありしに因り、徵發されて僻遠の地に赴く。【四】窮期　止む期限。【五】瞻斗　斗は北斗、沈炯の歸魂賦に察₂故鄕之安否₁、但望₂斗而瞻₁牛とあり、范成大の詩に近瞻₂北斗₁璿璣次、猶夢₂西山₁翠碧堆とある。【六】鑠肌膚　鑠はとろかす。【七】蟣虱　だにしらみ、白居易の詩に、蟣虱衣中物、刀鎗面上瘢とある。【八】三邊　晉書張軌傳の論に「三邊を阻して高く視る」とあり、小學紺珠に「三邊は幽幷涼の三州なり」とある。【九】赴刃　白刃相交る間に赴く。【一〇】軍興　愈よ軍隊が活動する。【一一】行間　行伍の間。【一二】竹帛名　古しへは、紙なく、竹簡に漆書し、次いで帛に塁書したので、竹帛は、書物の義に用ふ。後漢書鄧禹傳に「禹、光武を見て曰く、願はくは、明公の威德、海内に加はり、禹、その尺寸を效し、功名を竹帛に垂るるを得むのみ」とある。【一三】城南室　室は家と同じ。【一四】感鵲聲　西京雜記に「乾鵲噪いで行人至り、蜘蛛集まつて百事喜ぶ」とある。

【題義】 苦哉遠征人は、樂府詩集に「相和歌辭平調曲」晉の陸機の從軍行に曰く、苦哉遠征人。宋の顏延年の從軍行に曰く、苦哉遠征人、畢₂力幹₁時艱。蓋し天下の征伐に苦しむなり。又苦哉行遠征人あ

り。皆從軍行より出づるなり」とある。すると、陸機・顏延年等の從軍行の起首に苦哉遠征人とあるから、この句を取り離して題に代へたので、かういふ例は、他にいくらもある。青邱の此作の如きも、その內容は、矢張、從軍行である。

【詩意】矛を擔ひ、悠悠として長途を行く人は、徵發されて遠征を事とすべく命せられたので、その遠征は、いつ止むといふ期限もなく、そして、千里萬里の道程を經過せねばならぬ。夜、北斗を眺め、その近く見ゆるに因つて、翻つて、故鄉の遠く隔つたことを知り、旅中、もとより曆日なく、風物の遷り行くのを見て、年の改まつたことを悟るだけである。霜露は、絕えず肌膚をとろかし、鎧は破れて、すこしも著換へぬ處から、だにや虱などが自然湧いて來た。かくの如く、年月の久しきを經ても、元來、三邊の胡人どもは、驕傲狡黠、なかなか平定することは出來ない。征戍の間、胡笳の聲を聞いては、心、早くも摧け、愈よ戰が始まつて、兵刃相交はるといふ場合には、骨までも驚いて震へる。軍隊の活動する時期には、誅罰も嚴しいが、この身命、もとより賤しく、顧みて自ら輕んじて居る位だから、そんな事は、どうでも善い。ただ區區として行伍の間に在るが故に、ぬけがけの功勳を立て、姓名を竹帛に留めることは、到底出來ない。如何なれば、征戍すでに久しくして、未だ還らざるか、そは主將功未だ成らざるが爲めであらう。唯だ氣の毒なのは、城南の家に居る我が妻で、時たま、乾鵲の噪ぐを聞いては、旅人が歸つて來るといふ諺を思ひ出し、そら恃みをして、はては、棘喜びに終ることである。

【餘論】軍輿有二嚴誅一の二句、奈何久不レ還の二句は、反襯的に言を立てたので、この場合には、却つて痛切である。

鑿渠謠

(一)鑿レ渠深。(二)一十尋。　渠を鑿つこと深し、一十尋。

鑿レ渠廣。八十丈。　渠を鑿つこと廣し、八十丈。

鑿レ渠未レ苦莫二嗟吁一。　渠を鑿つこと、未だ苦ならず、嗟吁する莫れ。

(三)黃河曾開千丈餘。　黃河、かつて開く千丈餘、

君不レ見(四)賈尙書。　君見ずや賈尙書。

【字解】〔一〕鑿渠　渠は溝渠、卽ち水路。〔二〕一十尋　尋は八尺。〔三〕黃河曾開千丈餘　元史紀事本末に「至正十一年、賈魯に命じ、工部尙書を以て河防使に充て、河の南北の民十七萬を發して、黃河の故道を開く、凡そ二百八十里。これより先、河の南北の童謠に云ふ、石人一隻眼、挑二動黃河一天下反、と。魯の河を治むるに及び、果して黃岡陵に於て石人一眼を得たり。而して、汝穎の兵起る」とある。穎は、その五月、穎州の劉福通の兵起り、韓林兒を奉じて主となせしこと。汝は、その九月、汝州の徐壽輝、蘄水を陷れて都となし、國を天完と號し、僭して帝と稱し、治平と改元せしこと。これが、元末に於ける騷亂の始まりで、その明年、後の明主朱元璋が初めて起つて、滁州の郭子興に附いた。〔四〕賈尙書　卽ち賈魯。

【題義】鑿渠謠は、無論、靑邱の創意に係る新樂府題、その事實は分からないが、いづれ、蘇州附近

に於ける工事で、人民の怨嗟する處から、これを慰藉する意を述べたのであらう。

【詩意】溝渠の深さは十尋、廣さは八十丈、一地方に取つては、容易ならぬ大工事であるが、格別の苦痛でなければ、少し位の事は辛棒して、決して嘆息せぬが善い。さきには、工部尙書の賈魯が、詔を奉じて、黃河の故道を千丈も開鑿し、やがて騷亂の導火線となつたことがあるが、それに比すれば、物の數でもない。

【餘論】長短錯落、まさしく樂府の特調であるが、いささか、旨意の透徹せぬ嫌がありはせぬか。但し、賈尙書を以て陪襯としたのは、さすがに巧慧の手段である。

荊門壯士歌
荊門壯士の歌

水洶洶。氷差差。
水洶洶、氷差差、

荊門葉黃杪秋時。
荊門葉は黃なり杪秋の時。

上有騰攫之猿猱。
上には騰攫の猿猱あり、

下有饞嚼之蛟螭。
下には饞嚼の蛟螭あり。

悲哉此路難。
悲しいかな、この路の難き、

【字解】【一】洶洶　水聲のかまびすしきこと。【二】差差　薄氷の將に碎けんとしてメキメキと音すること。【三】荊門　地名、題義の條を見よ。【四】杪秋　杪は枝の末端、仍つて末の義に用ふ、季秋に同じ。【五】騰攫　飛び上つて攫みかかる。

孰敢徑渡之三撫髀。
孰か敢て徑に之を渡らむとして、三たび髀を撫す。

壯士起。
壯士起つ、

劍風騷勞髮上指。
劍風騷勞、髮、上り指す。

仰天長歌不見星。
天を仰いで長歌すれども星を見ず、

哀鴻夕叫雲冥冥。
哀鴻夕に叫んで雲冥冥。

【六】猿猱　ともに猴の屬、前に呼嘯篇の中に見ゆ。【七】饞嚼　食貪で物に嚙みつく。【八】蛟螭　蛟は龍の屬で角がない。螭は說文に「龍の若くして黃、或は曰く、角なきを螭といふ」とある。【九】三撫髀　三度髀を敲く、蜀志郤正傳に「拊鼓、髀を拊ちて、以て文を濟ふ」とあつて、その注に「これは、孟嘗君の客、能く雞鳴を作し、以て其厄を濟ふものを謂ふなり。凡そ雞鳴を作すには、必ず先づ髀を拊ち、以て雞の翼を拊つに效ふなり」とある。【一〇】劍風　名劍の靈氣に因つて吹き起る風。【一一】騷勞　物淋しき貌。【一二】髮上指　ぞつとすること。

【題義】荊門壯士歌も、靑邱の創意に係る新樂府題。荊門は山の名、一統志に「荊門山は、荊州府宜都縣の西、大江の南に在り、虎牙山と相對す」とある。この地方は、戰國の時、楚の都した處で、從つて、豪健の氣風が、後世までも傳はつて居たものと見え、そこで、その地の壯士を詠出したのである。

【詩意】水聲洶洶として、岸邊の氷は、メキメキして張りつけて居る。今しも、秋の末、荊門山上の木木は黃ばんで、はらはらと落ちる。仰ぎ見れば、梢には、跳り上つて物に攫みかかる猿の類が居るし、俯して見れば、深淵には、貪慾にして物に嚙みつかむとする蛟螭の類が潛んで居る。まことに、

危險千萬であるが、誰か能く三たび髀を打つて、雞の眞似をなし、それで孟嘗君の一行を救つたといふ樣に、無事に、この難所を通過することが出來るか。すると、壯士は、我こそ先導を致さうといふので、やをら起き上ると、劍刃より吹き起る風は物すごく、陰凄の氣、乾坤に滿ち、覺えず、ぞつとして、髮上つて冠を指すといひたい位。かくて、壯士は、天を仰いで長歌しつつ、至極平氣で、その膽力も、さこそと思はれる位であるが、折しも、夜更けて雲冥冥、星一つ見えず、雁が悲しげに叫んで、大空を渡るのみである。

【餘論】起首より三撫髀に至るまでは、荊門の險、壯士起より雲冥冥に至るまでは、荊門壯士の豪を敍し、その相映帶する處に於て、無限の妙趣を認める。

城虎詞

城虎の詞

（一）候潮門開啼早鴉。　候潮門は開いて、早鴉を啼かしむ、
有虎忽入居人家。　虎あり、忽ち入る居人の家。
母兒畏（二）竄雞（三）犬伏。　母兒畏竄して雞犬伏す、
排籬突戶誰能遮。　籬を排し、戶を突くも、誰か能く遮らむ。

【字解】【一】候潮門　杭州府志に「省城の門十、東城五門の一を候潮といふ」とある。【二】畏竄　こはがつて逃げ匿れる。【三】雞犬伏　地に蹲ふして起たざること。【四】獰風　たけだけしい威勢の風。【五】

（四）獰風動樹初哮吼。　獰風、樹を動かして、初めて哮吼、
驚起東營捉（五）生手。　驚起す、東營の捉生手。
怒拔長戈試一（六）擂。　怒つて、長戈を拔いて、試みに一擂、
（七）目光落地倀（八）魂走。　目光地に落ちて、倀魂走る。
南山藜（九）藿深冥冥。　南山の藜藿、深く冥冥、
白日橫行誰（一〇）敢攖。　白日橫行、誰か敢て攖かむ。
胡爲離窟來城市。　胡すれぞ、窟を離れて城市に來る、
（一一）牙爪雖全不能恃。　牙爪全しと雖も、恃む能はず。
君不見壯（一二）士遭急縛。　君見ずや、壯士、急縛に遭ふ、
失路窮時亦如此。　失路窮時、亦た此の如し。

捉生手　捕手、とりて。唐書沙陀傳に「李存信、魏城に傅く」、羅弘信、捉生を以て逆へ戰ふ」とあり、遼史太宗紀に「十年、金瓶濼に如き、拽剌化・哥窟・魯里阿・魯掃姑等、捉生を敵境に遣す」とある。【六】一擂　擂は衝く。【七】目光落地　虎の眼球が地中に入る。段成式の酉陽雜俎に「虎死す、威乃ち地に入つて、百邪を却くべし。虎、はじめて死す、その頭の藉くところを記し、月の黑き夜を候し、これを掘ること、深さ二尺、當に物を得べし、琥珀の如し、蓋し虎の目光、淪んで地に入つて爲すところなり」とある。【八】倀魂走　おびえたる亡魂が走り出す、唐の裴硎の傳奇に「長慶中、馬拯、衞山に之き、昏黑に近く、獵人に遭傷に遇ふ。弶弓を張り、樹上に棚を爲つて居る。忽ち三五十人過ぐ。或は僧、或は道、或は丈夫、或は婦女、歌吟するもの、戲舞するもの、前んで弶弓の所に至り、その機を發して去る。獵者曰く、これは皆倀鬼、虎に食はれし人なり、虎の爲に前呵して導くのみ」とある。【九】藜藿　あかざ、よもぎの類。【一〇】誰敢攖　誰も近づくことが出來ぬ。【一一】

牙爪雖全不能恃　金檀の注には、虎が市中に來た爲に容易に殺されたといふ一事實を引抄してある。格別必要もないが、參考の爲め、ここに轉載する。稗史に「永康軍、太平興國中、虎、暴にして蹤を失ひ、誤つて市に入る。市人、これを逐ふ。虎、人に遁られ、耳を弭れ、目を闔す。長吏、善く捕獲するもの李吹口を遣す。衆曰く、李吹口至る、と。虎聞いて忙然、市屋の下に竄入して身を匿す。乃ち降る。李、遂に鞍を以て之を刺す」とある。【三】壯士遭急縛　魏志呂布傳に「建安三年、魏武、自ら布を征し、兵圍むこと急なり。遂に生きながら布を縛す。布曰く、縛太だ急、すこしく之を緩めよ。魏武曰く、虎を縛する、急ならざるを得ざるなり」とある。

【題義】城虎詞も、青邱創意の新樂府題、原注に「八月虎あり、錢塘の民居に入り、軍士に殺さる」とあつて、卽ち其事實を詠じたものである。むかしから、城虎社鼠といふ成語があるが、ここのは、その字を取つて、その意を取らず、虎の無智にして、その命を失ふに至りしを嘲笑したのである。

【詩意】候潮門は、初めて開いて、夜明けに鴉が鳴き出した頃、どうしたことか、一疋の虎が、錢塘城內の民家に這入つて來た。その家の母子は、畏れて逃げまどひ、雞犬は地に蹐ふして起たず、虎は、遠慮なく、籬を押し開き、戶內に突進したが、誰も之を遮り止めることが出來ない。強烈なる風が、颯として、樹を搖すり、やがて虎が初めて一聲高く吼え哮つた時、東營に聚まつて居た捕手どもは、何事かといふので、驚いて起ち、この虎め、不屆な奴だといふので、怒つて長い矛を拔き連れ、試みに一つき突くと、手練違はず、さしもの虎は、すぐに死んで仕舞ひ、眼球は地中に入り、虎の先導をする弱弱しき亡魂どもは、すつかり走り去つて仕舞つた。南山には、あかざ、よもぎなど生ひ茂り、奥深くして暗いから、かういふ處で、白日に虎が橫行した處で、誰も近づくことは出來ない。然るに、如何なれば、虎は、其住所を離れて、城市に入つたのであるか。そこで一突きに殺されたのは、尤も千萬の事、いくら爪や牙が完全に揃つて居ても、到底恃みとすることは出來ない。むかし、呂布は、戰敗れて虜となり、きびしく縛られたが、いかなる壯士でも、失路の厄に遭ひ、窮時の苦に際すれば、矢張、この通り、それに就けても、その居所を失へば、どうせ破滅を免れない。

【餘論】極めて面白い事實ではあるが、敍述が平板に失して居る爲めであらう。割合に讀者の感興を牽かない。結末、呂布を傭ひ來つたのは善いが、これも、些か迂濶を免れぬ樣である。

寒夜吟

月下凍痕生綠井。
隔簾霜片飛無影。
樹枝風息轉凝寒。
愁人如烏棲未安。
夜短夜長應獨覺。
熒熒殘燭嗚嗚角。

寒夜の吟

月下の凍痕、綠井に生じ、
簾を隔てて、霜片、飛んで影なし。
樹枝、風息んで、轉た寒を凝らす、
愁人、烏の如く、棲未だ安からず。
夜は短く、夜は長く、應に獨り覺るべし、
熒熒たる殘燭、嗚嗚たる角。

【字解】【一】凍痕生綠井　綠井は、綠色の甃で取り圍んだ井。その井中の水が凍りかかつたといふ意。【二】嗚嗚角　嗚嗚は咽ぶ貌、七導注に「角は長鳴と名づく、十二疊を一疊となし、鼓止めば角動き、軍中以て昏曉を司る。又古しへの角は、木を以て之を爲る、今、銅を以てする は變體なり。軍中の樂たり。俗名拔

羅題、猶今の限度なり」とあり、白居易の詩に清曉角嗚嗚とある。

【題義】寒夜吟は樂府詩集に「雜曲歌辭」とあつて、その內容は、寒夜怨と同じく、寒夜に於ける閨中相思の情趣を敍したのである。

【詩意】一輪の寒月、皎皎として照りわたり、綠井の水は將に凍らむとし、霜片簾を隔てて飛ぶも、明るい爲に、影だに見えず、やがて、木の枝を搖する風が吹き止むと、寒氣一しほ凝り、物思に沈む人は、烏と同じく、ぢつと落ち付きかねる。夜は短くとも、夜は長くとも、熒熒たる殘燭に對し、嗚嗚たる角聲を聞いて、心を傷ましめるのは、われ唯だ一人で、まことに便りないことである。

【餘論】層層遞下、結二句は、含蓄盡きず、殊に其妙を覺える。張船山の同題の詩に、一夜凍痕生₂綠井₁、隔簾漠漠花枝冷とあるは、この詩の起首を轉化して收束となし、一段、新婉の致を添へたものである。

戎婦詞

妾在當奉(一)姑。郎行當報君。
男女各有役(二)。死生從此分。

戎婦の詞

妾在り、當に姑に奉ずべし。郎行け、當に君に報ゆべし。
男女、各〻役あり。死生、これより分かる。

【字解】【一】奉姑　姑女に事へる。【二】役　役目、つとめ。

【題義】これも青邱創意の新樂府題、戎婦は征戍に行く人の妻、その人に代つて言を立てたのである。

【詩意】今回、御出征なさるに就いて、私は家に居て姑女に事へ、及ばずながら、一家の事は始末致しますから、御安心下さい。そして、貴方には、出征して、君に報ゆる爲に、十分働いて戴きたい。男女ともに、各〻務めがあつて、生死これより分れ、又と御目にかかれぬかも知れず、いかにも、名殘惜しいが、これが御別れで御座ります。

【餘論】尋常口頭の語であるが、詩としては簡警切當、そして、その旨意は、間然するところなく、まことに立派なものである。

羇旅行

馬頭北風吹地白。
手冷時驚墮鞭策(一)。
隻堠欲來雙堠過(二)。
客程不盡關山多。
狐狸縱橫古城壞。

羇旅行

馬頭の北風、地を吹いて白く、
手冷かに、時に驚いて鞭策を墮す。
隻堠來らむと欲して雙堠過ぐ、
客程盡きず、關山多し。
狐狸縱橫、古城壞れ、

【字解】【一】鞭策　策も鞭の義。【二】隻堠欲來雙堠過　說文に「堠は土を封じて臺となし、以て里を記するなり。十里に雙堠、五里に隻堠」とある。つまり、一里塚の樣なもので、五里のは一つ、十里のは二つ、但し支那の一里は日本の六町位。

(三)旗折(四)官亭無酒賣。
旗折れて、官亭、酒を賣るなし。

土風處處殊故園。
土風處處、故園に殊なれり、

(五)鄕音只聞僮僕言。
鄕音只だ聞く僮僕の言。

天涯歲晚無(六)相識。
天涯歲晚れて相識なし、

(七)囊金已空歸不得。
囊金すでに空しくして歸り得ず。

(八)暝投人家自炊黍。
暝に人家に投じて、自ら黍を炊ぐ、

(九)土屋靑燈雁啼雨。
土屋の靑燈、雁、雨に啼く。

此時暫解羇旅憂。
この時、暫く解く羇旅の憂、

夢與家人夜深語。
夢に家人と夜深に語る。

人生出門卽苦辛。
人生、門を出づれば、卽ち苦辛、

何況長爲萬里身。
何ぞ況んや、長く萬里の身となるをや。

遠遊縱得功名好。
遠遊、たとひ功名の好きを得るも、

不如貧賤鄕中老。
如かず、貧賤にして鄕中に老いむには。

【三】旗折　旗は酒旗、酒屋の目じるし、その旗の竿が折れて、つまり酒旗が掲げられて無い。【四】官亭　公設の驛亭。【五】鄕音　故鄕の訛り。【六】相識　知人。【七】囊金已空　囊中の金が盡きはてた。【八】暝　日暮。【九】土屋　土で固めて造つた家、元好問の詩に、人家土屋纔容膝とある。

【題義】羇旅行は、樂府詩集に「新樂府辭」とあつて、張籍の作が一番古く、卽ち靑邱の此作の藍本である。

遠客出門世路難。停車斂策在門端。荒城無人雪滿路。火燒野橋不得度。寒蟲入窟鳥歸集。僮僕問我誰家去。行尋田頭暝未息。雙轂長轅礙荊棘。主人舂米爲夜食。晨雞喔喔茆屋傍。行人起掃車上霜。舊山已別行已遠。身計未成難復返。長安陌上相識稀。遙望天門白日晚。誰能聽我苦辛行。爲向君前歌一聲。

【詩意】馬前に吹く北風は、霜氣を帶びて、地面が白くなり、手は冷たくて、時時驚いたやうに、鞭を取り落すことさへある。雙堠は、すでに過ぎて、今度は隻堠、長い旅路は、盡くる時なく、關山は、いやが上にも多い。時たま、市邑などもあるが、城址は荒廢して、狐狸の足跡が縱橫に入りみだれ、公設の驛亭もあるが、酒旗を掲ぐる竿は折れた儘、頃ろは、酒をも賣らぬといふこと。處處の土風民俗は、故園と異にして、どうやら、異國にでも來た樣な心持がする。そして、國の訛は、唯だ引き連れて居る下部どもの言葉に於て聞くだけである。今しも、身は天涯に在つて、歲の將に暮れむとするに際し、絕えて相識の人だになく、囊中の金は、すでに盡きはてて、歸ることも出來ず、止むなく、懶き旅をつづけて居る。かくて、日暮に民家に投宿し、黍を炊いで夕食に充てた。ここは、土で塗り固めた家で、靑燈明滅する時しも、外面は雨で、雁の天空を度つて、からろ鳴ぐ聲が聞こえる。この時、

しばらく旅中の憂を解くのは、夢に故郷に歸り、深夜、家人と語ることである。顧みれば、人生門を出づれば辛苦であるのに、萬里漂泊の身となつては、猶更の事、されば、遠游して、たとひ志望通り、功名富貴を博取するにしても、矢張、貧賤にして故郷に老いた方が、いくら善いか知れぬ。

【餘論】羇旅中の光景を敍して、周匝精細、就中、瞑投㆓人家㆒自炊㆑黍の四句は、淒涼滿目、覺えず、讀者をして魂銷せしめる。遠遊縱得㆓功名好㆒の二句は、巻一、悲歌の富老不㆑如㆓貧少㆒、美游不㆑如㆓惡歸㆒と頗る相似て、愁絶の極であるが、その大丈夫の氣概に乏しきは、稍や物足らぬ想がする。

小長干曲

郎採㆓菱葉尖㆒。妾采㆓荷葉圓㆒。
石城(一)愁㆓日暮㆒。各自撥(二)㆓歸船㆒。

小長干の曲
郎は菱葉の尖れるを採り、妾は荷葉の圓きを采る。
石城、日暮を愁へ、各自、歸船を撥す。

【字解】(一)石城　即ち石頭城、江寧府志に「石頭城は、府治の西に在り、石頭山に據つて城と爲す。諸葛亮が石城虎踞と云ひしは、即ち此れ」とあり、古樂府に、莫愁在㆓何處㆒、莫愁石城西とある。(二)撥歸船　撥は漕ぎ開く。

【題義】小長干曲は、樂府遺聲に「都邑曲、一に行に作る」とあり、樂府詩集に、「雜曲歌辭」とある。長干は地名で、圖經に、「長干里は、上元縣を去ること五里」とあり、吳都賦に長干延屬、飛甍舛互とあつて、その注に「建業の南五里、山岡あり、その間平地、吏民、東長干に雜居す。中に大長干・小長干あり、皆相連る。大長干は越城の東に在り、小長干は越城の西に在り、地に長短あり、故に小大長干と號す」とある。すると、長干は、今の南京附近で、秦淮の南に當り、處處へ出稼ぎする商人の部落であつて、その地の風俗を歌つたのが長干行、長干曲といふのも全く同じである。その一番古いのは、

逆浪故相邀。菱舟不㆑怕㆑搖。妾家揚子住。便弄㆓廣陵潮㆒。

又、小長干曲と題するものには、崔國輔の一首がある。

月暗送㆓湖風㆒。相尋路不㆑通。菱歌唱不㆑輟。知在㆓此塘中㆒。

青邱の此作も、矢張、風俗歌の積りで、小長干に於ける兒女嬉游の狀を詠出したのである。

【詩意】郎と共に各〻船を浮べ、郎は尖れる菱の葉を採り、私は圓い蓮の葉を采つた。やがて、夕日が石頭城の後に沈みかかつたから、各自に舟を漕ぎ戻して、歸つて來た。

【餘論】一讀したばかりでは、あまり無造作であるが、風日晴美なる江南に於て、輕舟短棹、若い男女の嬉戯する様が目に見える様である。

春江行

春江南北疑無岸。　春江の南北、岸なきを疑ふ、
綠草綠波連不斷。　綠草綠波、連つて斷えず。
一女紅妝出浣紗。　一女紅妝、出でて紗を浣ひ、
恰如鏡裏見桃花。　恰も鏡裏に桃花を見るが如し。
袷衣猶冷過寒食。　袷衣猶冷かにして、寒食を過ぎ、
雲度春陰半江黑。　雲は春陰を度つて、半江黑し。
浦口風多潮正深。　浦口風多くして、潮正に深く、
輕舟搖蕩似人心。　輕舟搖蕩して、人心に似たり。
鷓鴣暮啼歸路遠。　鷓鴣暮に啼いて、歸路遠く、
飛絮茫茫楚王苑。　飛絮茫茫たり楚王苑。

【字解】【一】浣紗　西施が吳宮に入らざる前、紗を浣つて居たといふことがあつて、王維の詩に誰憐越女顏如玉、貧賤江頭自浣紗とある。【二】袷衣　あはせ。【三】寒食　冬至の後一百五日、疾風甚雨あり、これを寒食といひ、この日、火を用ふることを禁じてある。【四】浦口　地名、江寧府志に「浦子口は江浦縣に在り、東、大江に出づ」とある。【五】鷓鴣　鳥の名、異物志に「鷓鴣は、その志、南を懷うて北を思はず、南に徂く人、これを聞けば家を思ふ」とある。【六】楚王苑　どことも分からぬ。

【題義】春江行は、樂府詩集に「雜曲歌辭、唐の郭元振曰く、春江巴女曲なり」とある。すると、舊と巴女が歌ひ出したので、矢張、その地の風俗を述べたものであつたらうが、後には、唯だ春江に關する情思を詠出する樣に成つた。

【詩意】草と波とは、同一の綠色であつて、相連つて斷えざるが故に、春江の南北、渺渺として際涯を知らず、さながら、岸なきを疑ふばかり。ここに、一人の女が紅妝を爲し、江頭に紗を浣つて居るが、丁度鏡の中に桃の花を見る樣である。時しも、寒食を過ぎたばかりで、袷衣では、いささか冷かなるを覺える位、曇れる空を雲が飛び度つて、その下なる半江の水は、黑ずんで見える。浦子口の邊は、風吹きすさび、潮漲つて正に深く、輕舟の搖蕩するは、浮氣な男の心にも似て居る。やがて、日暮になると、鷓鴣の鳴くのが聞こえ、南から來た人は、容易に家を思ひ、しかも、歸路の遠きを嘆するばかり。楚王苑中、飛絮茫茫として、春は將に盡きなむとし、愈よ遠客の心を傷ましめる。

【餘論】紅妝浣紗の女は、この詩中、最も重要なので、その情郎の南に歸るに就いて、聊か怨みがましいことを述べて居るのである。

寄衣曲二首

寄衣の曲　二首

郎寒甚妾寒。持衣向燈泣。　郎の寒は、妾の寒より甚し、衣を持して、燈に向つて泣く。
不是手縫遲。綿多針線澀。　是れ手縫の遲きにあらず、綿多くして針線澀る。

【題義】寄衣曲は、樂府詩集に「新樂府雜題」とあつて、擣衣曲・送衣曲と類似し、唐人の作では、張籍の作が殘つて居る。

織素縫衣獨苦辛。遠因回使寄征人。官家亦自寄衣去。貴從妾手看君身。高堂姑老無侍子。不得自到邊城裏。殷勤爲看初著時。征人身上宜不宜。

靑邱の此作は、五言四句を以て之を作り、その意を取つて、必ずしも、貌似を求めぬのである。

【詩意】邊地に征戍して居る君の寒いことは、故鄕に留守して居る私の寒さよりも一層甚しいであらう。そこで、衣を送らうとし、それを手にして、燈前で泣いて居る。何も縫ふことが手間取れて、遲い譯ではないが、あまり綿を入れ過ぎた爲に、くける針の絲が澀つて、おもふ樣に運ばないのである。

(一)賜袍非不煖。妾製稱郎身。　賜袍煖かならざるに非ざるも、妾が製、郎の身に稱ふ。

寄去龍(二)堆遠。端(三)愁到(四)已春。　寄せ去つて龍堆遠く、端に愁ふ、到ればすでに春なるを。

【字解】【一】賜袍　天子より賜はつた袍、本事詩に「開元中、邊軍に纊衣を賜ひ、宮中に製す。又僖宗の朝、內袍千領を出して、塞外の吏士に賜ふ」とある。【二】龍堆　地名、漢書西域傳に「樓蘭國、最も漢に近く、白龍堆に當り、水草に乏し。嘗主、發導し、水を負ひ、糧を儋うて、漢使を送迎す」とある。【三】端　まさにと訓すべし。【四】到已春　到著すると既に春だといふ意、王褒の古意に寒到君邊衣到無とある。

【詩意】朝廷から賜はる袍は、煖かくないこともあるまいが、私が送つたのは、しつくりと郎の身に合つて、著心地も定めて善いであらう。しかし、遠き龍堆の彼方に送るのであるから、途中で手間取れて、到著すれば、すでに春、最早綿入も不用といふ時分に成るかも知れないので、それのみが苦になつて仕方がない。

【餘論】二首、ともに新警で、餘情に富み、戍婦の可憐なる俤が、目に見える樣である。

廢宅行

廢宅行

(一)鳴珂坊裏將軍第。　鳴珂坊裏、將軍の第、

(二)列戟齊收朱(三)戶閉。　列戟齊しく收めて、朱戶閉づ。

里媼逢人說舊時。　里媼、人に逢うて舊時を說く、

有廬被奪廣園池。　廬あり、奪はれて、園池を廣む。

今年沒入官爲主。　今年、沒入して、官、主と爲る、

散盡堂中義(四)宅兒。　散じ盡す、堂中義宅の兒。

【字解】【一】鳴珂坊　唐書張嘉貞傳に「嘉祐は嘉貞の弟、幹略あり。嘉貞が相たる時に當つて、右金吾衞將軍に任ず。昆弟、朝に上る每に、軒蓋驕導、閭巷に盈つ。時に居るところの坊を號して、鳴珂里といふ」とある。珂は佩玉で、その鳴り響く聲が盛だといふ意味であらう。【二】列戟　唐書韋斌傳に「斌、銀靑光祿大

廚煙久斷無梁肉。　廚煙久しく斷えて、梁肉なく、
羣鼠飢來入鄰屋。　羣鼠飢ゑ來つて、鄰屋に入る。
官封未與別人居。　官封、未だ別人に與へて居らしめず、
日日閒苔雨添綠。　日日閒苔、雨、綠を添ふ。
(五)曲閣深沈接(六)後房。　曲閣深沈、後房に接し、
畫屛生色暗無光。　畫屛、色を生じ、暗くして光なし。
尋常不敢偸窺處。　尋常、敢て偸み窺はざるの處、
守卒時來拾(七)墜璫。　守卒、時に來つて墜璫を拾ふ。
春風多少奇花樹。　春風多少の奇花樹、
又有豪家移得去。　また豪家の移し得て去るあり。

同義。【五】曲閣　中の通路の迂曲せる高閣。【六】後房　妻妾の居る處。【七】墜璫　璫は耳飾。

【題義】これは、靑邱創意の新樂府題で、廢宅の光景を敍して、感慨を寄せたのである。

【詩意】古しへの鳴珂坊に比すべき大官輩の屋敷町なる將軍の舊第に於て、列戟は取り片付けられ、

夫に拜せられ、五品に列す。時に、陟、河東に守たり、而して、從兄由、右金吾衞將軍たり。絹、太子太師たり、四第同時に列戟、衣冠比擧なり」とある。列戟は、門内に戟を列べることで、高官に限る。【三】朱戸　韓詩外傳に「諸侯德あれば、天子之に錫ふ、一錫は車馬、再錫は衣服、三錫は虎賁、四錫は樂器、五錫は納陛、六錫は朱戸」とある。【四】義兒　五代史義兒傳に「唐、代北に起り、その與に俱にするところ、皆一時雄傑虓武の士、往往養うて以て兒となし、義兒軍と號す」とある。義兒は、義理ある兒、卽ち義兒と

恩賜の朱戸は閉ぢた儘、今は全く無人の有樣である。里の老女は、人に逢ふ毎に、昔話をして、ここには、舊と自分達の草廬があつたのを、いつしか、かの將軍に奪ひ取られ、そして、園池を廣げたのであるが、どうした事か、この屋敷は、今年沒收されて、今は官有となり、堂中に羣れて居た義兒どもも、盡く散じて、誰も居らぬ樣になつた。臺所では火を燃さぬ故、煙も久しく揚らず、そして、美粟肥肉の貯へもなく、羣鼠は、食を得ざるを以て、饑ゑた揚句に、鄰家へ往つて仕舞つた。この屋敷は、官の封印をつけた儘、また別人に交付して住む樣にせぬから、閒苔日日に長じて、雨でも降ると、一層綠色を增して見える。曲閣は、奧深くして、後房に接し、畫屛風も、へんな色になつて、黯澹として光彩がない。平生は、偸に窺ふことすら出來ぬ閨房にまでも、番卒は、時時這入り込んで、落ちて居る耳飾を拾ふとのこと。又珍らしい花樹も、いくらかあつて、春風吹き度る頃に咲き出づるが、いつしか、有力なる豪家に移し去られて、庭なども、次第に荒廢して仕舞つた。

【餘論】この詩は、前の羇旅行などと同じく敍述周匝で、描寫に規律ある處は、まさしく、靑邱の特技である。そして、官封未與別人居の二句、春風多少奇花樹の二句は、殊に面白く覺える。

青樓怨

青樓怨

(一)浴金熏爐(二)鏤玉奩。　浴金の熏爐、鏤玉の奩、

【字解】【一】浴金　金なメツキ

蘭香今夜爲君添。　蘭香、今夜、君の爲に添ふ。
烏棲黃昏烏起曙。　烏は黃昏に棲み、烏は曙に起つ。
纔見道來還道去。　纔に見て來ると道へば還た去ると道ふ。

【題義】　青樓怨は、樂府遺聲に「怨思曲」とあつて、唐人以後の新題である。その內容は、青樓に居る妓女の情思を詠出したのである。

【詩意】　玉を象眼にせる小さな箱から、香を取り出して、金メッキせる香爐で焚くと、蘭の如きえならぬ匂を發する。これが、今夜、御出でになつた吾が情郎に對する待遇である。烏は黃昏の頃に塒に入り、曙に起きて啼き立てる。それと同じく、わが情郎は、わづかに相見て、來たといつたばかりだのに、又ぞろ歸らうといふ、見はてぬ夢に夜も短く覺ゆるは、まことに、呆氣ないことである。

【餘論】　後半二句、情思纏綿として盡きず、巧に妓女の口吻を摸し得たものである。

する。【二】鏤玉奩　玉を象眼にした香箱。【三】蘭香　蘭の如き匂を發する香料。【四】還道去　還は又と讀す、循環する意、又ぞろ。

聞角吟

聞角吟

驚起黃楡塞下鴻。　驚起す、黃楡塞下の鴻、
一聲嗚軋戍樓空。　一聲嗚軋、戍樓空し。

【字解】【一】黃楡塞　楡塞は長城、前に見ゆ。子貢の詩に北別黃楡塞とある。【二】嗚軋　角の聲をい

此時吹動關山意。　この時吹き動かす關山の意、
十萬征人歸夢中。　十萬の征人、歸夢の中。
玉帳尋弓夜初起。　玉帳弓を尋ねて、夜、初めて起つ、
月白不知霜似水。　月白くして、知らず霜水に似たるを。
餘聲散作滿天愁。　餘聲散じて、滿天の愁となり、
風吹不入單于壘。　風吹けども入らず、單于の壘。

【題義】　聞角吟も、青邱創意の新題である。角は前にも見えたが、喇叭形をして居る樂器で、元と胡人の吹くもの。その角を聞いた時の感想を述べたのである。

【詩意】　角聲一たび吹き出づれば、黃い楡の葉の落つる長城附近の雁は、驚いて飛び起ち、一聲嗚軋、未だ止まざるに、戍樓の上、人もなく、皆聞くに堪へずして、立ち去つたものと見える。やがて、關山萬里の悲しき思を吹き動かすと、故鄕の夢を見て居た十萬の征人も、忽然として眠より醒め、スワヤ、敵こそ御ざんなれといふので、弓を引きしぼりつつ、玉帳の中から飛び出す。その時しも、月は白く冴えわたり、霜氣の水に似たるも見え分かぬ位。やがて、餘韻は、散じて、滿天の愁となるが、角は、舊と漢兵に限つて哀れに聞かれるものと見え、風に吹かれて、匈奴單于の壘に入ることは

ふ。杜牧の詩に嗚軋江樓角一聲とある。【三】關山意　長途の旅の悲しき思ひ。【四】玉帳　大將の居る陣營。

ない。

【餘論】風吹不レ入單于壘は、決して單于の壘に入らぬといふ譯でもないが、匈奴は、聞き慣れて居るから、格別哀れとも思はぬといふ意を、極端に具體化して言つたのであらう。通篇、ただ角聲の悲しいことを側面的に描出したので、その筆致に於て、一種の新らしみを感ずる。

刺促行

刺(一)促復刺促。天高白日速。　刺促、復た刺促、天高くして白日速かなり。
黄(二)鵠長苦レ飢。烏(三)鳶飛食レ肉。　黄鵠は長く飢に苦しみ、烏鳶は飛んで肉を食ふ。
促刺復促(四)刺。長途多二荊棘一。　促刺、復た促刺、長途、荊棘多し。
但見二今人行一。不レ見二古人跡一。　但だ今人の行くを見て、古人の跡を見ず。

【字解】【一】刺促　障害に遇うて意の如くならぬ貌。【二】黄鵠　鵠は雁の屬、屈原の卜居に「むしろ、黄鵠と翼を比せむや、將た雞鶩と食を爭はむや」とある。【三】烏鳶　漢書黄覇傳に「吏出でて道傍に食すれば、烏、その肉を攫む」とあり、隋書崔彭傳に「可汗、善く射るもの數十人を召し、因つて、肉を野に擲ち、以て飛鳶を集め、命じて之を射るに、多く中らず、彭、速りに數矢を發す、皆、弦に應じて落つ」とある。【四】促刺　刺促に同じ。

【題義】刺促行は、樂府詩集にも見えぬが、金檀の注に「樂府詩集、新樂府雜題、唐の李益に、促促行あり、王建・張籍に、促促詞あり、意、亦た相同じ」とある。仍つて、試みに其詩を左に掲載すると、

促促何促促。黄河九回曲。嫁與棹船郎。空牀將レ影宿。不レ道君心不レ如レ石。那教二妾貌長如一レ玉。
（促促曲、李益）

促促復刺刺。水中無レ魚山無レ石。少年雖レ嫁不二將歸一。白頭猶著父母衣。四邊田宅非レ所レ有。我身不レ及二逐レ雞飛一。出門若有二歸死處一。猛虎當レ衢向レ前去。百年不レ遣レ踏二君門一。在レ家誰喚爲二新婦一。豈不レ見他鄰舍娘。嫁來長在二舅姑傍一。（促促詞、王建）

促促復促促。家貧夫婦歡不レ足。今年爲レ人送二租船一。去年捕レ魚在二江邊一。家中姑老子復小。自執二吳綃一輸二稅錢一。家家桑麻滿地黑。念君一身空努力。乍敎二牛蹄團團羊角直一。君身長在應レ不レ得。（促促詞、張籍）

この三首は、いづれも、新婦の不滿足を敍して居るが、靑邱のは、丸で違つて居て、丈夫世に在つて未だ志を遂せず、空しく、古人を思慕することを述べて居る。なほ、刺促の二字は、何處から來たかといふと、晉書潘岳傳に「岳、王濟・裴楷等、帝に親遇せらるるを見、岳、內、これを非とし、閣道に題し、謠を爲つて曰く、閣道東、有二大牛一、王濟鞅、裴楷鞦、和嶠刺促不レ得レ休とあるのに本づいたの

であらう。

【詩意】刺促復た刺促、天は高くして、白日の運行ただ速に、人は志を遂せぬ内に、早くも老い朽ちる。身は、黃鵠の常に飢に苦しむが如く、得意の羣少輩は、烏鳶の飛んで肉を食ふが如くである。促刺復た促刺、人の一生は長途であつて、しかも、荊棘が叢生して居る。そこを眺めると、今の羣小輩が、どういふ樣にするか、格別の差し障りもなく、しづしづと行くのが見えるが、有道の古人の踐んだ跡には、決して遇はぬ。して見ると、吾輩の如きものは、到底、この世に持て囃されず、むなしく、羣小輩に每每一著を輸する外はない。

【餘論】滿腔の不平を吐露したものであるが、譬喩的であり、象徵的である爲に、いささか痛切を缺いて居りはせぬかと思はれる。

牧牛詞

牧牛の詞

爾牛角彎環。(一)　爾の牛は角彎環たり、
我牛尾禿速。(二)　我が牛は尾禿速たり。
共拈(三)短笛與長鞭。　共に短笛と長鞭とを拈し、
南隴(四)東岡去相逐。　南隴東岡、去つて相逐ふ。
日斜草遠牛行遲。　日は斜に、草は遠くして、牛行遲し、
牛勞牛飢唯我知。　牛は勞し、牛は飢ゑて、唯だ我知る。
牛上唱歌牛下坐。　牛上に唱歌し、牛下に坐し、
夜歸還向牛邊臥。　夜歸つて、還た牛邊に向つて臥す。
長年牧牛百不憂。(五)　長年、牛を牧して、百、憂へず、
但恐輸租賣我牛。　但だ恐る、租を輸せむとして、我が牛を賣るを。

【字解】【一】彎環　曲つて居る。李賀の詩に、長眉對月鬪彎環とある。【二】禿速　短いこと、元好問の詩に禿蔽餘淸簾とあつて、蔽は速に同じ。【三】拈　ひねくる、手に執る。【四】南隴　隴は小さい岡。【五】百不憂　すこしも心配しない。

【題義】牧牛詞より以下、照鏡詞に至るまで、凡そ十二首は、すべて、靑邱創意の新題である。爾後、一一これを注記せぬから、豫め記淸を望む次第である。牧牛詞は、牛を牧することに就いて述べたので、卽ち牧者の詞である。

【詩意】汝の牛は、角が曲つて居るし、我が牛は、尾が短い。汝と我と、共に短笛長鞭を手に執つて、南隴東岡の間に追ひつ追はれつして居る。夕日影、西に斜にして、草が遠くにのみ靑く見ゆる折から、牛の步みは、遲遲として、懶げであつて、牛の疲れたのも、牛の飢ゑたのも、唯だ我のみ之を知つて

居る。われは、或時、牛の背の上に居て歌を唱へ、或時、牛の下に坐し、そして、夜、家に還ると、又ぞろ牛の側で寐て居る。長い年月の間、牛を牧して、少しも心配せぬが、ただ、主人が租税を納めて足らず、それを補充する爲に、わが牛を賣る樣なことがあつては困ると、唯だ、それのみを苦にして居る。

【餘論】牧豎の極めて暢氣なる生活を敍し、これを誦すれば、人をして、この世を脫出するの想あらしめる。結末二句は、居然、世事を離れず、取り越し苦勞の樣ではあるが、牧豎その人に取つては、まことに痛切である。

捕魚詞

捕魚の詞

後網初沈前網起。(一)　後網、初めて沈んで、前網起つ、

夫婦生來業淘水。(二)　夫婦、生來、淘水を業とす。

忽驚網重力難牽。　忽ち驚く、網重くして力牽き難きを、

打得長魚滿船喜。(三)　長魚を打し得て、滿船喜ぶ。

不敎持賣去南津。(四)　持つて賣つて、南津に去らしめず、

且向江頭祭水神。　且つ江頭に向つて水神を祭る。

願得年年神作主。(五)　願はくは、年年、神、主となり、

無事全家臥煙雨。　無事に全家煙雨に臥するを得む。

不論城中魚貴賤。　論せず、城中魚の貴賤、

換得酒歸儂不怨。　酒に換へ得て歸れば、儂、怨みず。

【字解】(一) 後網初沈前網起　この網は、如何なる種類か知らぬが、もしかすると、さし網といふ樣なもので、水中に下垂して、魚の自然に來てかかるのを引き上げるのであらう。(二) 淘水　淘はゆすぶる、水をゆすぶるといへば、水を攪き廻はすことで、つまり網を水中に入れること。(三) 長魚　大きな魚。(四) 南津　南方に在る舟つきの港。(五) 神爲主　水神が主となつて、自分達を助ける。

【題義】これは、魚を捕へる、卽ち漁夫の生活を歌つたのである。

【詩意】漁家の夫婦は、網を水に投げ入れることを職業とし、二人で舟に乘つて、魚を捕へむとし、後の網を水に沈めたかと思ふと、前の網を引き上げ、なかなか忙しい。その內に、網が重くて、力一ぱい遣つて見ても、容易に引き上げられない。どうしたことかと驚いて居ると、大きな魚を網し得たので、船中の人人は、一齊に喜んだ。しかし、この魚は南方の港に持つて往つて賣らず、江頭に出かけて、水神の祠に參詣し、これを御供へ物として、祭を爲し、さて神に祈つて云ふには、願はくは、水神、わが主となつて、神助を垂れ、年年魚が澤山取れて、全家無事、煙雨の中に起臥する樣にして下さい。城中に於ける魚價の高い廉いは、どうでも宜しいが、唯だ酒と交換し得る位に、魚が取れれば、それで十分なので、私どもは、決して不滿には思ひませぬといつた。

【餘論】結二句、漁夫の生活の極めて簡易なるを寫し、人をして、いかにもと頷かしめる。

養蠶詞

東家西家罷來往。（一）
晴日深窗風雨響。（二）
（三）二眠蠶起食葉多。
（四）陌頭桑樹空枝柯。（五）
新婦守箔女執筐。（六）（七）
頭髮不梳一月忙。
（八）三姑祭後今年好。
（九）滿簇如雲繭成早。
檐前繅車急作絲。
又是夏稅相催時。

養蠶の詞

東家西家、來往を罷め、
晴日深窗、風雨響く。
二眠、蠶起きて、葉を食ふこと多く、
陌頭の桑樹、空しく枝柯。
新婦は箔を守つて、女は筐を執り、
頭髮梳らず、一月忙し。
三姑祭後、今年好し、
滿簇雲の如く、繭成ること早し。
檐前の繅車、急に絲を作す、
又是れ夏稅相催すの時。

【字解】【一】罷來往　各家ともに忙しから、しばらくの間、往來をしない。范成大の田園雜興に、三旬蠶忌閉門中、鄰曲都無步往蹤とある。【二】風雨響　蠶の葉を食ふ音が風雨の如く響く、陸游の詩に食葉蠶聲白雨來とある。【三】二眠　蠶書に「蠶、生まれて、明日、桑、或は柘葉、風戾以て之に食ましむ。寸二十分、晝夜五食、九日食はず、一日一夜、これを初眠といふ。又七日再眠、初の如し、又七日三眠、再の如し。又七日、これを大眠といふ」とある。つまり、蠶がかへつてから、九日たつと、一日一夜、何も食はずに眠つて居るのが初眠、それから後は七日目ごとに一問宛、さういふことがあつて、二眠三眠を經、大眠になると、繭を作る。【四】陌頭　この陌は阡陌の陌で、野田の區劃をいふ。【五】枝柯　柯は枝條。【六】守箔　箔は蠶を飼ふ席。【七】執筐　筐は桑の葉を入れる箱。【八】三姑　三眠すでに終りし蠶をいふ。馬臻の詩に、蠶婦の江村行に、桑村桺黑蠶再眠、小姑採桑不向田とある。村婦相逢遲笑問、把蠶今歲是三姑とある。【九】滿簇　一ぱいに簇る。

【題義】これは、蠶を飼ふ、卽ち蠶婦の極めて忙しい有樣を歌つたのである。

【詩意】養蠶の最も盛な時になつたから、東の家でも、西の家でも、互に往來することを罷めて、專心、これに從事して居る。晴日、深窗を射り、室中には、蠶が葉を食ふ音が風雨の如く聞こえる。今しも、蠶は二眠から起きて、葉を食ふこと愈よ多く、そこで野田の桑の木は、すつかり葉を摘まれて、唯だ枝のみが殘つて居る。家の新婦は、葉を與へる役になつて、蠶の席を守り、娘は、桑を摘む役になつて、筐を抱へて出て行く。三眠の後、三姑の祭をも畢り、今年は出來が善いといふ豫想違はず、やがて、蠶が殘らず起き上ると、一ぱいに簇つて、その色、白きこと雪の如く、早くも繭が出來上つた。それから、檐前に繅車を用意し、今度は絲を取るといふので、今しも、夏の稅を收めよといつて、役人が催促に來る時に成つた。

【餘論】この首は、敍述が秩序立つて居て、例の靑邱得意の筆墨である。結末四句は、繭、すでに成りしをいひ、夏稅相催と相俟つて、題意を完うしたのである。

射鴨詞

射鴨の詞

射鴨去清江曙。
射鴨返回塘晚。
秋菱葉爛煙雨晴。
鴨羣未下媒先鳴。
草(一)翳低遮竹(二)弓彀。
水冷田空鴨多瘦。
行舟莫來使鴨驚。
得食忘(三)猜正相鬪。
(四)唼唼毛(五)褷褷。
(六)潛機一發那得知。

鴨を射て去る、淸江の曙。
鴨を射て返る、回塘の晚。
秋菱葉爛して煙雨晴れ、
鴨羣未だ下らず、媒、先づ鳴く。
草は翳し低く遮りて竹弓彀く、
水冷かに田空しくして鴨多く瘦す。
行舟、來つて鴨をして驚かしむる莫れ、
食を得ては猜を忘れて正に相鬪ふ。
唼は唼唼、毛は褷褷たり、
潛機一發、那ぞ知るを得む。

【字解】【一】草翳　草がかぶさる。【二】竹弓彀　竹で造つた弓を引き搾つて置く。【三】忘猜　疑猜の念を忘れる。【四】唼唼　玉篇に「鴨の食ふ貌」とある、温庭筠の詩に塘水汪汪鳧唼唼とある。【五】褷褷　韻會に「毛羽の衣の貌」とあつて、鳧の羽毛のもぢやもぢやして居るをいふ。【六】潛機　ひそめて匿してある機械、卽ち前の竹弓彀を指す。

【題義】これは、鴨を射ることを詠じたのであるが、射る人のことではなくて、射られる鳥の方から趣向を設けたのである。なほ、姑蘇志、鶴媒の注に「吳中の弋人、かつて一馴鶴を養ひ、草木を以て盾となし、弓矢を挾んで以て之を伺ふ。鳥、鶴の同類なるを見、これに狎れて、嫌疑なく、遂に矢に中てらる、而して鴨を射るも、亦た此法を用ふ」とある。

【詩意】曉早く鴨を射むが爲に、淸江の邊に向ひ、日暮、獲物を攜へて、回塘の處を歸つて來る。今しも、秋の末、菱の葉は靑に爛れて、煙雨初めて晴れたとき、鴨の羣がまだ下りて來ない內に、囮鳥の鶴が頻りに鳴いて居る。それから、茂れる草を盾として、竹弓を張り詰めて待ち構へて居るが、野水すでに冷かに、田を刈つた後で落穗も乏しい處から、鴨は、大抵瘦せて見える。そこへ、舟が來て、折角聚まつた鴨を驚かして起たしめることがあるので、これが第一に閉口な事であるが、鴨は、食物を得さへすれば、囮鳥に對して、猜疑の念を起さず、互に鬪ふ樣にして、その餌を食つて居る。その觜は唼唼として働き、毛は褷褷として亂れる。かくて、潛機一發、見事に射中てられることも知らずに居るので、おもへば、まことに可哀想な事である。

【餘論】この詩は敍述極めて巧妙、觜唼唼以下三句、多少の諷意ある樣にも見られるが、單に實況を詠出したものとする方が、無論趣がある。

伐木詞

伐木の詞

竹(一)擔挑多兩肩赤。

竹擔、挑くること多くして、兩肩赤し、

【字解】【一】竹擔　竹で造つた

礪斧時尋澗邊石。　斧を礪かむとして、時に尋ぬ澗邊の石。

老夫氣力秋漸衰。　老夫の氣力、秋漸く衰ふ、

易斫喜有枯林枝。　斫り易く、枯林の枝あるを喜ぶ。

白雲無人暗空谷。　白雲人なく、空谷暗し、

遠聲(三)丁丁如(四)啄木。　遠聲丁丁、啄木の如し。

暮歸待伴不獨行。　暮に歸らむとし、伴を待つて、獨り行「かず、」

前途虎多荊棘生。　前途虎多くして、荊棘生ず。

長年不曾到城府。　長年、かつて城府に到らず、

聞比山中路(五)尤阻。　聞く山中に比すれば、路尤も阻なりと。

【題義】これは、木を伐ること、卽ち樵夫の生活を詠出したのである。

【詩意】樵夫は、竹で造つた脊負梯子に、澤山薪などを載せて、とぼとぼと歩くから、兩方の肩が赤く腫れ上つて、その痛いので、難儀をする。それから、持つて居る斧を礪かむとして、時時谷間の石を尋ねて歩く。しかし、年の所爲か、この秋に成つてから、めつきり氣力が衰へた爲に、斫り易きを喜んで、林中の枯枝ばかり打ち落して居る。眺めやれば、白雲蓬勃、空谷の中、暗くして、人ありとも見えぬのに、遠くで斧を揮つて、丁丁の響を爲せるは、さながら、啄木鳥の様である。それから、日暮に我が家に歸るのには、同伴を待ち合せて、決して獨りでは行かない。聞けば、行く手の道には、荊棘叢生し、殊に虎が多いからといふことである。おもへば長い年月の間、城府に往つたことはないが、城中は、まことに恐ろしい處で、この山中に比較して、世路の特に險阻なることは、云ふまでもない。

【餘論】白雲の二句、傍觀者から言つたので、斧聲を啄木に比した處などは、殊に境地に相應しい。結末二句は、卷一、猛虎行に猛虎雖猛猶可喜、横行只在深山裏といへると同じく、世路の險を道うて、反照的に樵夫の生活の安穩なることを寫し出したのである。

脊負梯子、わが國ではオホコといふ處もある。雲窗雜記に「浚倚、衡山に隱れ、往來自ら書劍を負ひ、竹を削つて擔となし、裹むに烏氈を以てす」とある。【二】兩肩赤　兩方の肩が赤く腫れ上る、謝翺の樵歌に樵斧丁丁響翠微、赬肩半脫汗身衣とある。【三】丁丁　詩經に伐木丁丁とある。【四】啄木　鳥の名、きつつき、左貫嶺の詩に南山有鳥、自名啄木、飢則啄樹、暮則巢宿とある。【五】尤阻　特別に險阻で歩き惡い。

打麥詞

打麥の詞

(一)雉雛高飛夏(二)風煖。　雉雛、高く飛んで、夏風煖かなり、

行割(三)黃雲隨手斷。　行く〳〵黃雲を割いて、手に隨つて斷つ。

疎莖短若(四)牛尾垂。　疎莖、短くして、牛尾の垂るるが若し、

【字解】【一】雉雛高飛　李白の雉朝飛に麥隴青青三月時、白雉朝飛挾兩雌とある。【二】夏風　夏の風、この字面は斬新で、青邱の創意

去冬無雪不相宜。　去冬雪なくして相宜しからず。
場頭負歸日色白。　場頭、負うて歸れば、日色白し、
穗落連枷聲拍拍。　穗落ちて、連枷聲拍拍。
呼兒打曬當及晴。　兒を呼んで打曬、當に晴に及ぶべし、
雨來怕有飛蛾生。　雨來らば怕らくは飛蛾の生ずるあらむ。
臥驅鳥雀非愛惜。　臥して鳥雀を驅る、愛惜するに非ず、
明年好收從爾食。　明年好收、爾の食ふに從せむ。

に係るものであらう。【五】黃雲　麥の熟したるを形容して云ふ。陸游の詞に壓車麥穗黃雲卷とある。【四】牛尾垂　前の湖州歌に、中田有麥牛尾稀とあるを見よ。【五】無雪不相宜　朝野食載に「麥に宜しきを要すれば、三白を見よ」とあつて、その注に「雪なり」とある。【六】場頭　場は家の前の廣い空地。【七】日色白　今まで黃雲と見まがふ熟麥の畑に居たから、ここに來ると、日色が白くなつた樣な氣がするといふ意。【八】連枷　からさを、玉篇に「連枷は打穀の具」とあり、釋名に「枷は加なり、杖を柄頭に加へ、以て穗を撾つて其穀を出すなり」とあり、范成大の田園雜興に笑歌聲裏輕雷動、一夜連枷響到明とある。【九】打曬　たたいて日に曝らす。【一〇】飛蛾生　述異記に「晉の永嘉中、梁州雨ふること七旬、麥、化して飛蛾となる」とあり、陸游の詩に雨長禾頭蒸耳出、潤憂麥粒化蛾飛とある。雨が降ると、麥の粒が化して蛾となつて仕舞ふといふ俗說があつたと見える。【一一】好收　よき收穫。

【題義】これは、刈り取つた麥の穗を曝らす、卽ち農家行事の一を詠出したのである。

【詩意】雉の雛が稍や長じて高く飛び、夏の煖かい風の吹き度る頃、麥が熟したといふので、これを刈り取ると、さながら黃雲を割くが如く、手に隨つて斷たれて仕舞ふ。見ると、麥の莖は、密生せずして疎生し、おまけに、穗が短くて、牛尾の垂れたるが如く、これは、去年、雪が降らなかつた爲に、出來が惡いのである。やがて、これを家に搬び入れて、廣い空地に卸す。黃雲の地に布ける畑から、ここに來ると、日の色が白くなつた樣な氣がする。からさをの聲の拍拍たるにつれて、穗から麥粒が出て來る、そこで、兒童等を呼んで、丁度晴天であるから、早く之を拂つて、日に曝らせ、まごまごして居て雨が降ると、麥粒は、皆腐敗して、中から蛾が涌いて出るかも知れぬといつて、嚴しく命ずる。かくて、一仕事終ると、自分は、橫になつて、鳥雀を追ひ拂ふ、それは、何も麥を愛惜する譯ではないが、今年は、出來が惡いから、仕方がないので、もし、明年、大收穫があつたならば、その時は、汝の食ふ儘にして、鳥雀に大振舞をして遣らう。

【餘論】敍述の精工は例の如くであるが、文字は洗錬聊か足らず、他の諸作に比して、どうやら劣つて居る樣である。

采茶詞　采茶の詞

雷過溪山碧雲暖。　雷は過ぎて、溪山碧雲暖かなり、
幽叢半吐槍旗短。　幽叢、半ば槍旗を吐いて短し。

【字解】【一】雷過　試茶錄に「民間、常に驚蟄を以て候となし、春陰を以て采茶時を得たりと爲す」とあ

(四)銀釵女兒相應歌。　銀釵の女兒、相應じて歌ふ、
筐中摘得誰最多。　筐中摘み得て、誰か最も多き。
歸來清香猶在手。　歸り來つて、清香猶ほ手に在り、
(五)高品先將呈太守。　高品先づ將に太守に呈せむとす。
竹爐新(六)焙未得嘗。　竹爐、新に焙して、未だ嘗むるを得ず、
(七)籠盛販與湖南商。　籠に盛つて販與す湖南の商。
山家不解種禾(八)黍。　山家、禾黍を種うるを解せず、
衣食年年在春雨。　衣食、年年、春雨に在り。

【題義】 これは、茶を摘むこと、卽ち山家の生業を詠出したのである。

【詩意】 初雷、一たび鳴つて啓蟄を報じ、溪山の間なる茶畑は、若芽が出揃つた爲に、碧雲の如く、そして煖氣を含んで居る。よく見ると、こんもりと叢をなせる處は、やつと、短い芽を吐いた位、今が茶を摘む好期節だといふので、銀釵を斜に差した娘どもは、相和して歌を唱へながら、誰が一番多いかと、競爭の氣味で、しきりに箱の中に摘み入れて居る。一日、せつせと働いて、家に歸ると、茶の清香が、ちやんと手に殘つて居る。その摘んだものを擇り分けて、最上品は、第一に知事公に獻ずる積り。やがて新に焙じた茶は出來たが、竹爐で之を煎つて、その味を試すといふ樣な暢氣な事は、する暇もなく、出來上ると、すぐに籠に入れて、湖南から來た行商に賣り渡す。元來、山家は、地味磽确にして、穀物を作ることが出來ないから、年年、衣食の本は、製茶に限られて、春雨が芽を發生せしむる其季節を待ち構へて居るのである。

【餘論】 自分で製造したものを賞玩することも出來ずして、直に賣り渡す、それが卽ち職業で、結末二句は、卽ち之を説明して居る。

る。【二】碧雲　茶の若芽の簇生したる樣を形容して云ふ。【三】搶旗　茶の若芽、茶餘に「茶の芽は、鷹爪雀舌の如きものを上となし、一旗一槍、これに次ぐ」とあり、陸游の煎茶詩に紅絲小磑破旗槍とある。【四】銀釵女兒　杜甫の詩に、野花山葉銀釵竝とある。【五】高品　最上品。【六】新焙　新に焙じて出來た茶。【七】籠盛　籠に入れる。【八】禾黍。穀物。

賣花詞

(一)綠盆小樹枝枝好。　綠盆の小樹、枝枝好し、
花比人家別(二)開早。　花は、人家に比して、別に開くこと早し。
(三)陌頭擔得春風行。　陌頭、春風を擔ひ得て行く、
美人出簾聞叫聲。　美人、簾を出でて叫聲を聞く。
移去莫愁花不活。　移し去つて、愁ふる莫れ、花の活きざるを、

【字解】【一】綠盆　綠色の磁盆、白居易の詩に珠寫綠盆中とある。【二】別開早　格別に開くことが早い。【三】陌頭　街頭。【四】種花訣　花を養成する祕訣。【五】朱門　富貴の家。

賣與還傳種(四)花訣。　賣與して、還た傳ふ花を種うるの訣。
餘香滿路日暮歸。　餘香滿路、日暮に歸る、
猶有蜂蝶相隨飛。　猶ほ蜂蝶の相隨つて飛ぶあり。
買花(五)朱門幾回改。　花を買ふの朱門、幾回か改まる、
不如擔上花長在。　如かず擔上花長しへに在るに。

【題義】これは、花を賣る、卽ち花賣商の生活を詠出したのである。

【詩意】綠色の鉢に樣樣の花木を植ゑて培養する。木は小さいながら、枝ぶりが好く、そして、花を開くことは、世間竝よりも、はるかに早い。そこで、春風に咲き矜れる其花の鉢を擔いで、街頭に賣り歩くと、誰が家の美人か知らぬが、簾から半身を現はして、その叫聲を聞いて居る。その鉢の木を移して、花が凋む樣なことがあつては不本意な極だといふので、これを賣る時には、併せて、栽培の祕訣をも傳授して行く。かくて、日暮に家に歸ると、路すがら、餘香吹き滿ちて、蜂だの蝶だのが、その後を追ひ、相隨つて飛んで來る。花を買ひ取る富貴の家は、幾回も其主人を換へ、浮世の榮華は、決して長くは續かぬが、花賣の翁の擔の上には、花は長しへに在つて、決して改まることはない。

【餘論】陌頭の二句は、極めて風情があつて面白い。買花朱門幾回改は、世上得意の人、長く在らざるを道うて、賣花翁の安穩の生活を贊稱したのである。

洞房曲　　洞房の曲

洞(一)房香吐合昏(二)花。　洞房、香は吐く合昏花、
月轉勾欄(三)啼乳鴉(四)。　月は勾欄に轉じて、乳鴉を啼かしむ。
今宵有酒留君醉。　今宵酒あり、君を留めて醉はしむ、
不信娼家勝妾家。　信せず、娼家の妾が家に勝るを。

【字解】【一】洞房　閨房、その奥深きより洞といふ。【二】合昏花　ねむの花、本草に「合歡、一名合昏、暮に至れば卽ち合す、故に云ふ」とあり、杜甫の詩に合昏亦知時、鴛鴦不獨宿とある。【三】勾欄　通雅に「宋に京瓦あり、通じて勾欄といふ、その始の名は、猶ほ欄干のごときなり」とあつて、本義は、欄干と同じであるが、後には、戲場妓家などと稱する樣に成つた。【四】乳鴉　雛を育てる親鴉。

【題義】これは、閨者にしてある女の光景を描き出したので、自然情思に富んで居る。

【詩意】深深たる洞房の中には、名さへ相應しい合歡花の鉢があつて、靜けき香を吐き、勾欄の外には、月が次第に移り行き、時時、親鴉の落ち付かずして騷ぐのが聞こえる。今夜は、十分に酒を用意してあるから、ゆつくりして、御醉ひなさるが宜しい。さうすると、娼家が私の家よりも居心地が善いとは、決して思はれますまい。

【餘論】結末二句は、小妾の口吻を寫し出し、その言葉に魅せられた男の顏が見える樣である。

待月詞

(一)漏板敲愁夜驚冷。
(二)露井桃花濕無影。
海風吹星銷碧煙。
(三)羿妃妝遲鏡未懸。
(四)素鸞不來桂香死。(五)
雲外紫篁呼夢起。(六)
(七)瓊樓欲開天半紅。
徘徊望拜娥池東。(八)
(九)蘭闈未返燈寒後。
恰似前宵待郎久。

月を待つの詞

漏板、愁を敲いて、夜、冷に驚く、
露井の桃花、濕うて影なし。
海風、星を吹いて、碧煙を銷し、
羿妃、妝遲くして、鏡、未だ懸らず。
素鸞來らず、桂香死し、
雲外の紫篁、夢を呼んで起たしむ。
瓊樓、開かむと欲して、天半紅なり、
徘徊望んで拜す娥池の東。
蘭閨、未だ返らず、燈寒きの後、
恰も似たり、前宵郎を待つこと久しきに。

【字解】【一】漏板　漏は水時計、その知らせた時を更に板を拍いて報ずるもの、李賀の詩に七星挂城聞漏板とある。【二】露井　上に掩ひの無い井戸、王昌齡の詩に昨夜風開露井桃、未央前殿月輪高とある。【三】羿妃　卽ち嫦娥、淮南子に「羿、不死の藥を西王母に請ふ。嫦娥、これを竊み、以て月に奔る」とある。【四】素鸞　白色の鸞、月中に棲む。龍城錄に「明皇、申天師・洪都客と術を作し、夙して月中に遊ぶ、素娥十餘人、白鸞に乘じて廣庭桂樹の下に舞ふを見る」とある。【五】桂香死　月中に桂樹があるが、その桂の花が散つて香が無くなつたといふこと。杜甫の詩に、斫却月中桂、扶疎萬古間とある。【六】紫篁　竹の叢を成せるをいふ。盧綸に「甘露、宵に紫篁に零つ」とある。【七】瓊樓　月中の宮殿、王子年の拾遺記に「翟天師乾祐、かつて江岸に于て月を玩ぶ。或は問ふ、この中、竟に何かある。翟笑つて曰く、吾が指に隨つて之を視るべし、と。俄にして、月規半天、瓊樓玉宇、爛然たるを見る。數息の間、復た見えず」とある。【八】娥池　影娥池の略、西京雜記に「漢武、望鵠臺西に於て俯月臺を起し、臺西に影娥池を穿つ。登眺する每に、月影、池中に入る、因つて、影娥と名づく」とある。【九】蘭闈　後漢書后妃傳の贊に「政を蘭闈に班し、體を椒屋に宣ぶ」とあつて、その注に「西都賦に曰く、後宮則掖庭椒房后妃之室、蘭林蕙草、披香發越、蘭林は殿の名、故に蘭闈といふ」とある。しかし、ここのは、そんな六づかしい事ではなく、唯だ香閨と同じである。

【題義】これは、少婦が月の上るのを待つて居る其間の感想を寫したのである。

【詩意】漏刻を報ずる拍板は、さながら愁を敲くが如く、夜は更けて、寒氣身にしむばかり、屋根なき井戸の邊なる桃花は、溼うて影なく、まだ月は上らない。やがて、東海より來る風は、星を吹いて碧煙を拂ひ退けたが、嫦娥の妝、太だ遲くして、明鏡の天上に懸るを見ない。月中の素鸞は、ここまで飛び來らず、桂花香滅すること、すでに久しく、紫竹の鳴り騷ぐ聲は、雲外より聞こゆるが如く、やがて、わが夢を呼び醒まして起つた。かくて、月は初めて出さうになり、瓊樓は眼前に幻出せむとし、天半の空色が、ほんのりと赤くなつた。そこで、步を影娥池の東に移し、影の映るを見て、月を拜せむとして居る。ここに佇立すること、すでに久しく、未だ返つて香閨に入らず、閨中には、殘燈焰なくして寒く、さながら、昨夜久しく郎の來るを待つて居た其時に似て居る。

【餘論】起首より以下六句は、月の未だ出でざるをいひ、瓊樓の二句は、月の將に出でむとするをいひ、これで、題意を全うし、闌闠未返の二句は、更に一轉語を下し、餘意綿綿として、盡きず、一誦、人をして魂銷せしめる。

惜花歎

惜花不是愛花嬌。
賴得花開伴寂寥。
樹樹長懸（一）鈴索護。
叢叢頻引（二）鹿盧澆。
幾回欲折花枝嗅。
心恐花傷復停手。
每來花下每題詩。
不到花前不持酒。
（三）準擬看花直盡春。

花を惜むの歎

花を惜むは是れ花の嬌を愛するにあら「ず、」
花の開くに賴り得て、寂寥を伴ふ。
樹樹、長く鈴索を懸けて護し、
叢叢、頻りに鹿盧を引いて澆ぐ。
幾回か、花枝を折つて嗅がむと欲し、
心に花の傷くを恐れて、復た手を停む。
每に花下に來つて、每に詩を題し、
花前に至らざれば、酒を持せず。
準擬す、花を看て直に春を盡すを、

【字解】【一】鈴索護　天寶遺事に「寧王、春時に至り、後園中に于て、紅絲を糾して繩となし、密に金鈴を綴つて、花梢の上に繋ぎ、鳥雀の翔集するある每に、園吏をして鈴を掣し、以て之を驚かしめ、因つて護花鈴と名づく」とある。【二】鹿盧　車井戸から水を汲み上げて灑ぎかける。【三】準擬　用意する、心がまへする。【四】片蘀　一片の花。【五】前砌　前なる階。【六】千英　千點の花。【七】別鄰　わが家ならぬ近鄰。【八】懊惱　おもひ

春今未盡已愁人。
纔留（四）片蘀依（五）前砌。
全落（六）千英過（七）別鄰。
（八）懊惱園中妒花女。
（九）畫旛不禁狂風雨。
流水殘香一夜空。
（一〇）黃鸝魂斷渾無語。
縱有（一一）星星在（一二）蘚衣。
拾來已覺損光輝。
只應獨背東窗臥。
夢裏相隨高下飛。

春、今未だ盡きず、すでに人を愁へしむ。
わづかに片蘀を留めて、前砌に依り、
全く千英を落して別鄰を過ぐ。
懊惱、園中、花を妒むの女、
畫旛、禁せず、狂風雨。
流水殘香、一夜空しく、
黃鸝魂斷え、渾て語なし。
たとひ、星星の蘚衣に在るあるも、
拾ひ來れば、已に覺ゆ、光輝を損ずるを。
只だ應に獨り東窗に背して臥し、
夢裏相隨うて、高下に飛ぶべし。

惱む。【九】畫旛不禁狂風雨　傳異記に「崔玄徽、月夜、女伴を見る。曰く、楊氏・李氏・陶氏と。又緋衣の小女を阿措といふ。曰く、諸女伴、苑中に在つて、每に惡風に相撓煩せらる。處士、歲旦ごとに、一旛を作り、上に日月五星を畫いて、苑東に立てよと。崔、爲に旛を立つ。東風、地を刮り、木を折り、花を流す、しかも苑中は動かず。崔、乃ち女郎は卽ち衆花精なるを悟るなり」とある。【一〇】黃鸝　うぐひす。【一一】星星　點點として白き貌、謝靈運の詩に星星白髮垂とある。【一二】蘚衣　苔は土を覆ふ、故に衣に比して云ふ。王勃の龍懷寺碑に綠苔翠蘚、是不盡之蘚衣とあり、韻會に「蘚は垣衣」とある。

【題義】これは、字面の通り、花の散るを惜む歎惋の情思を敍したのである。

【詩意】花の散るを惜むのは、必ずしも、花が嬌冶艷麗だからといつて之を愛惜する譯ではないが、花の開くに賴つて、わが寂寥に伴ひ、大に相慰めて居て、離れ難き一段の因緣があつたからである。されば、花の咲いて居る間は、木と木との間に、鈴を付けた繩を引き渡して、鳥雀に踏み散らされぬ樣にし、又叢を爲せる處處には、車井戸の水を汲んで注ぎかけ、花の命の一日も長からむことを望んで居た。それのみか、幾たびか、花の枝を折つて、えならぬ其香を嗅がうと思つたが、心に花の傷はれむことを掛念して、折りかけた手を停めた位。そこで、花の下に來る度ごとに、必ず花を賞する詩を題し、又花の前でなければ、酒を飮まぬといふことにしてあつた。かくて、花を看畢つて、それで春を盡す、つまり、春の存する限りは、花を眺めたいと思つて居た處が、今や、春は盡きず、彌生三月は大分日が殘つて居るのに、花は、旣に散り出して、人を愁へしめる、まことに、情ない始末。花は大抵散り切つて、前なる階に半片を留め、千點の艷なるは、全く落ちて、風のまにまに、鄰家に飛んで往つて仕舞つた。園中に在つて、花の美しきを妬んで居た女どもも、かうなると、只管思ひ惱み、畫旛を立てて、暴れ狂ふ風雨を止めやうとしても、最早間に合はず、流水滔滔、花を流し去り、一夜の中に、餘香も全く無い樣になり、鶯も魂消たものと見えて、最早聲を出さない。無論、花片は、白く點點として、苔の上に散りかかつて居るが、これを拾つて見た處で、光輝すでに損じて、最早前日の俤だにない。止むなくんば、東窗に背中を向けて獨り臥し、そして、夢の中に落花を追うて、或は高く、或は低く、飛び廻るより外はない。

【餘論】一往情深く、すこしも、拔け目の無い樣に巧者に出來て居る。幾回欲下折二花枝一嗅上の二句は、道學先生に見せたならば、仁人の心とでもいつて、大に賞める處。準擬看レ花直盡レ春の二句は、花を愛するの情、死に抵るべく、しかも春の早く盡くるを怨む心で、極めて凄惋である。流水殘香一夜空の二句は、春盡の光景を手短に且つ遺憾なく道ひ盡して居る。結末、只應獨背二東窗一臥の二句は、今一息といふ樣な工合で、いささか物足らぬ想のするのが遺憾である。

照レ鏡詞　　鏡に照らすの詞

君家青銅鏡（一）。價（二）重比二黃金一。　　君が家の青銅鏡、價は重くして、黃金に比す。

空持照二人面一。不三持照二人心一。　　空しく持して人面を照らす、持して人心を照らさず。

【字解】【一】青銅鏡　青銅で鑄た鏡、前に美人磨鏡辭に粉鉛和レ汞拭二青銅一とある。【二】價重　價の貴いこと。

【題義】これは、鏡の物を照らすことに就いて構想したのである。

【詩意】君の家の青銅鏡は、まことに、由緒ある結構な品で、その價の貴きこと、黃金に比すべき程である。しかし、矢張、普通の鏡であつて、これを手に持つて人の顏を映すことは出來るが、これで

人の心を寫し取るといふことは出來ない。私の心は、唯だ一片の誠のみであるが、これを寫し取つて、貴方に見せることの出來ないのは、まことに殘念である。

【餘論】むかし、秦の始皇の宮中に照膽鏡といふものがあつて、胸の中まで、すつかり映すことが出來たといふ傳説がある。作者は、これを思ひ合せて、構想を試みたのではあるまいか。

田家行

草茫茫。水汨汨。
上田蕪。下田沒。
中田有禾穗不長。
狼藉(一)只供鳧雁糧。
雨中摘歸半生(二)溼。
新婦春(三)炊兒夜泣。

田家行

草茫茫、水汨汨、
上田は蕪し、下田は沒す。
中田禾あるも、穗長からず、
狼藉只だ供す鳧雁の糧。
雨中、摘み歸つて、半は溼を生ず、
新婦春炊して、兒、夜泣く。

【題義】田家行は、樂府詩集に「新樂府雜題」とあつて、王建・元稹などの作がある。青邱の此作は、主として、凶荒に苦んで居る田家の實況を寫したのである。

【字解】【一】狼藉　ごたごたに散亂して居る貌。狼は元來寐ざうの惡いもので、草を藉いて寐ると、その跡太だ荒穢なるより云ふ。【二】生溼　溼氣を帶びて居る。【三】春炊　舂き且つ炊ぐ。

【詩意】上方の田は、荒蕪に歸し、草茫茫として茂り、下方の田は、淪沒し、水汨汨としてひたし、唯だ中間の田のみ、わづかに、稻を作つてあるが、凶年の事とて、穗も長くなく、碌碌取り入れもせずに棄ててあつて、狼藉として散亂し、唯だ鴨や雁の餌となつて居る。貧家では、食ふ物も無いといふので、雨中、その穗を摘んで歸り、半ば溼氣を帶びて居るにも拘らず、新婦は之を舂いて炊がむとし、その傍には、子供等が、夜、飢に堪へずして泣き、まことに目もあてられぬ慘狀である。

【餘論】凶年貧家の實況には相違ないが、この詩の起首五句は、前に出て居た湖州歌、送陳太守の破題、草茫茫、水汨汨、上田蕪、下田沒、中田有麥牛尾稀と、わづかに數字を違へるに過ぎない。かくの如く、同じ事を再び言ふのは、一時の間に合せでもあらうが、作者その人の名譽に關することである。尤も青邱の全集は、その死後、編輯者が、その詩の多きを貪つて、矢鱈に搔き集め、動もすれば、玉石同架の嫌ひがある位、この首などは、もと青邱の棄てて置いたのを拾ひ上げたものであらう。

憶遠曲

揚子(一)津頭風(二)色起。
郎帆(三)一開三百里。
江橋(四)水柵多(五)酒爐。

遠きを憶ふの曲

揚子津頭、風色起り、
郎が帆、一たび開く三百里。
江橋水柵、酒爐多し、

【字解】【一】揚子津　一統志に「揚子江は、儀眞縣南に在り、通泰二州を經て海に入る」とあり、李白の横江詞に「横江西望阻西秦、漢水

女兒解歌山鷓鴣(六)。　女兒歌ふを解す山鷓鴣。
(七)武昌西上巴陵道。　武昌西に上れば巴陵の道、
聞郎處處經過好。　聞く郎が處處經過好しと。
(八)櫻桃熟時郎不歸。　櫻桃熟する時、郎歸らず、
客中誰爲縫春衣。　客中誰か爲に春衣を縫ふ。
(九)陌頭空問琵琶卜(一〇)。　陌頭空しく問ふ琵琶の卜、
欲歸不歸在郎足。　歸らむと欲し、歸らず、郎が足に在り。
郎心重利輕風波。　郎が心、利を重んじて風波を輕んず、
在家日少行路多。　家に在るの日は少くして、行路は多し。
妾今能使烏頭白(一一)。　妾、今能く烏頭をして白からしむるも、
不能使郎休作客。　郎をして、客となるを休めしむる能はず。

東連揚子津とあつて、その注に胡三省の通鑑注「今の眞州揚子縣南に在り」といふのを引いてある。【三】風色起　風の氣が立つ。【三】一開　一たび帆を擧げる。【四】江橋水柵　白居易の詩に、紅板江橋青酒旗とあり、張籍の江南行に、娼樓兩岸臨水柵、夜唱竹枝留北客とある。江邊に橋ある處、水邊に柵を設けたる處。【五】酒壚　酒を賣る家。【六】山鷓鴣　樂府類に唐曲とある。李白の詩にも山鷓鴣詞といふ七言十句の詩があつて、王琦の說に「この詩は、當に南姬嫁して北人の婦となるものあり、悲啼死を誓つて肯て去らず、太白見て之を悲み、遂に此詩を作るなるべし」とあるが、大方、さうであらうと思はれ、その後、この詩は、大に世に行はれ、遺音長く存して居たものと見える。許渾は、南國多情多艶詞、鷓鴣清怨繞梁飛といひ、鄭谷は、座中又有江南客、莫向淸風唱鷓鴣といつて居る。【七】武昌西上巴陵道　武昌は漢口の對岸、一統志に「武昌府は、湖廣省、巴陵に治す、今の岳州」とあり、岑參の送費子歸武昌詩に秋來倍思武昌魚、夢著只在巴陵道とある。【八】櫻桃　今のさくらんぼう、夏初に熟する、范成大の詩に牡丹破萼櫻桃熟、未許飛花減却春とある。【九】陌頭　都大路。【一〇】琵琶卜　妖巫傳に「淮南、鬼神を好み、邪多し。俗、病めば卽ち之を祀る。醫人なし。張鶯、かつて江南洪州に于て停まること數日、土人何婆琵琶の卜を善くすと聞き、同行人郭司法に質す。その家、士女門を塡め、餉遺路に滿つ」とある。【一一】烏頭白　史記刺客傳の注に「燕丹、歸るを求む、秦王曰く、烏頭白く、馬に角を生ずれば許さむのみ、と。丹、乃ち天を仰いで歎ずれば、烏頭乃ち白く、馬亦た角を生ず」とある。

【題義】　憶遠曲は、樂府詩集に「新樂府雜題」とあつて、亦た張籍・元稹の作が殘つて居る。そして、思遠人・望遠曲なども、大抵類似したものと見える。

【詩意】　揚子津のあたり、俄に風氣立つて、わが郎が、一たび帆を開くと、三百里の江程を一飛びに飛ばして、はるかに、ここ故鄕と隔つた。大江の兩岸、江橋水柵の相接する處には、酒を賣る家が多く、そこに居る女どもは、山鷓鴣の曲を歌ふことが、至極上手である。武昌から西に行けば、巴陵に通ずる道で、わが郎は、途すがら、到る處で、隨分持てるといふことである。今しも、櫻桃の熟する初夏になつたが、郎は歸り來らず、旅をした間に、誰が春衣を縫つて吳れるだらうか。そこで都大路に出かけて、琵琶の卜をして貰つたが、無論、はつきりした事は分からず、歸るも、歸らぬも、わが郎の足次第である。元來、わが郎は、行商を事とし、唯だ利のみを重んじて、大江の風波などは、何とも思つて居らず、始終旅にばかり出て居て、家に居る日は極めて少い。そこで、今、私の一念、烏の頭を白くすることが出來るにしても、郎をして、客となるを休め、家に居るやうにすることは出

來ない。

【餘論】通篇、輕薄なる行商に對する思婦の情緒を述べたので、唐人以來、その作、頗る多く、決して、珍らしいものではないが、新婉巧麗の致を曲盡せるは、さすがに、靑邱である。櫻桃熟時郎不歸の二句は、その客中の不自由を想像して云つたもので、さすがに、柔婉なる女らしき心情である。結末二句は絕望の語で、李白が蒼梧山崩湘水絕、竹上之淚乃可滅といひ、白居易が天長地久有時盡、此恨綿綿無絕期といつたのと、洪纖の別はあるが、略ぼ其歸著を同じうして居る。

金井怨

照水羞見影。汲水嫌手冷。　水に照らしては影を見るを羞ぢ、水を汲んでは手の冷かなるを嫌ふ。

閒立(一)梧桐陰。烏啼秋夜永。　閒に立つ梧桐の陰、烏啼いて秋夜永し。

【字解】【一】梧桐陰　桐の木の陰。

【題義】金井は、黃金の欄を繞らした井戶、金井怨は、その井戶に就いて情懷を寄せたのである。これには曹鄴の一首があつて、無論、靑邱は之に依傍したのである。西風吹急景。美人照金井。不見面上花。却恨井中影。

【詩意】金井の邊に立ち、下を覗いて水を見ると、瘦せた我が形の映ることを羞ぢ、水を汲むと、水が冷たくて堪まらない。そこで、井戶端を立ち退いて、その傍なる桐の木影に佇立して居ると、秋の夜の長きに、烏が數ば驚いて啼き出す。まことに、滿目凄涼の有樣である。

【餘論】第一句、照水羞見影は、夜景としては、聊か相應しからぬ樣で、要するに、無理に作つた詩と見える。

送客曲

送客車在門。　客を送つて、車、門に在り、

勸客杯在手。　客に勸めて、杯、手に在り。

明日長安花。　明日は長安の花、

今夜(一)宜城酒。　今夜は宜城の酒。

願客飲此勿復辭。　願はくは、客、これを飲んで、復た辭する勿れ、

我無(二)黃金爲客壽。　我に黃金、客の壽を爲すなし。

人生無處無弟兄。　人生、處として弟兄なきはなし、

【字解】【一】宜城酒　卷一、行路難第三首の條に注して置いた。【二】黃金爲客壽　史記魯仲連傳に「平原君、千金を以て魯仲連の壽を爲す」とある。【三】刺促　前に刺促行の條に詳しく述べて置いた、意の如くならざること。【四】兩轂　轂は車の軸。【五】躑躅　躑躅する。【六】赤日旭　旭は形容と見るべし、詩經にも旭兮出日とある。

鄕里刺(三)促誰知名。　鄕里刺促、誰か名を知らむ。
賣書買得百金劍。　書を賣つて、買ひ得たり百金の劍、
有身須向關山行。　身あり、須らく關山に向つて行くべし。
馬四蹄。車兩(四)轂。　馬は四蹄、車は兩轂、
行人欲發休(五)躑躅。　行人發せむと欲す、躑躅するを休めよ、
嘐嘐雞鳴赤(六)日旭。　嘐嘐雞鳴いて、赤日旭たり。

【題義】 送客行は、樂府遺聲に「別離曲」とあり、樂府詩集に「雜曲歌辭」とある。もと客の遠行を餞する意味であつて、前人の作には、これぞといふものも見當らない。

【詩意】 客の遠行を送らむとし、車は既に來て、門前に待つて居るが、ここでは、客に酒を勸めむとし、杯は手中に在る。君よ、明日は長安の花を見られることであらうが、今夜は、ここ宜城の美酒を痛飮せられよ。願はくは、君、わが差す杯の酒を飮んで、決して、遠慮致されるな。われに黃金あらば、これを捧げて君の壽を爲すべきであるが、貧乏だから仕方がないので、せめては、酒を進めるのである。おもへば、四海皆同胞、人生往く處として、兄弟の交を爲すものはあるが、却つて鄕里に於ては、平生不遇で、名を知つて吳れる人だにない。そこで、藏書を賣りこかして、百金を値する寶劍を買ひ、これを佩びて、關山萬里の旅路に上るので、いづれ、何處かで、大に持てることであらう。馬は四蹄、車は兩轂、卽ち一頭立の馬車であるが、路を行くこと極めて輕快。今しも、嘐嘐として、雞の聲、いとも花やかに啼きわたり、やがて、旭として、赤日將に上らむとする時、君よ、すでに出發しかかつた上は、躑躅せずに早く行けば善いので、ここに、心から、首途を御祝する次第である。

【餘論】 いささか、長短句を交へて、調子を取つた處は善いが、全體に於て、精彩太だ缺如して居る。

里巫行

里人有病不飮藥。　里人病あるも、藥を飮まず、
神(一)君一來疫鬼却。　神君一たび來れば、疫鬼却く。
走迎老(二)巫夜降(三)神。　走つて老巫を迎へ、夜、神を降す、
白(四)羊赤鯉縱橫陳。　白羊赤鯉、縱橫に陳す。
男女殷勤案(五)前拜。　男女殷勤、案前に拜す、
家貧無肴神勿怪。　家貧にして肴なく、神、怪む勿れ。

【字解】【一】 神君　史記に「上、神君を求め、これを上林中の蹏氏觀に舍す。神君は長陵の女子、子死し、神を先後宛若に見はすを以て、宛若、これを其室に祠る、その言を聞いて、その人を見ずといふ」とあり、又「游水の發根言ふ、上郡に巫あり、病んで鬼神これに下ると。上、召し置い

老巫撃ㇾ鼓舞且歌。　老巫、鼓を撃つて、舞ひ且つ歌ふ、

（六）紙錢（七）索索陰風多。　紙錢索索として、陰風多し。「べしと。

巫言汝壽當ㇾ止ㇾ此。　巫は言ふ、汝の壽當に此に止まるべし、

神念二汝（八）虔一賖（九）二汝死一。　神、汝の虔を念うて、汝の死を賖くす」

送ㇾ神上ㇾ馬巫出ㇾ門。　神を送つて、馬に上り、巫は門を出づ、

家人登（一〇）ㇾ屋啼招ㇾ魂。　家人、屋に登つて、啼いて魂を招く。

て、これを甘泉に祠る。天子、甘泉に幸するに及び、酒を壽宮の神君に置く、壽宮の神君、最も貴きものは太一、その佐を大禁といふ。司命の屬、皆これに從ふ。時に查言ふ、然れども、常に夜を以てす。又壽宮北宮を置き、羽旗を張り、供具を設け、以て神君に禮す。神君の言ふところは、上、人をして、受けて其言を書せしめ、これを命じて書法といふ」とある。神君は、一種不思議な神様で、形は分からず、唯だ時時託宣を下すものと見える。【二】老巫　說文に「巫は祝なり、女、能く無形に事へ、舞を以て神を降すなり」とある、みこ。【三】降神　神おろしをする、卽ち上に云つた神君を招き下すこと。【四】白羊赤鯉　東坡の黃牛廟の詩に廟前行客拜且舞、擊ㇾ鼓吹ㇾ笙屠二白羊一とあり、又杜甫の詩に赤鯉騰出如ㇾ有ㇾ神とある。【五】案前　案は供物を載せる机。【六】紙錢　紙を錢の形に剪つて神前に供へ、最後に之を焚く。【七】索索　紙錢が相觸れて鳴る。李賀の神絃曲に紙錢窸窣鳴二旋風一とある。【八】汝虔　汝の敬虔、信心の篤いこと。【九】賖汝死　汝の死を遲くす、命を延ばす。【一〇】登屋啼招魂　屋は屋根、禮運に「その死に及ぶや、屋に升つて號び、告げて曰く、皋、某復れ」とあつて、その注に「屋に升るは、魂氣の上に在るを以てなり。皋は引聲の言。某は、死者の名。この魂を招き、それをして、復た體魄を合せしめむと欲す」とある。

【題義】里巫行より新絃曲に至るまで、凡そ四首は、又ぞろ靑邱創意の新題である。里巫行は、人の臨終に際して、巫女を呼び、神おろしをして、その命を延べて貰ふといふ一種特異なる田舍の風俗を寫し出したのである。

【詩意】里人が病氣に罹つても、決して藥を呑まず、神君が一たび來さへすれば、疫病神も、恐れ入つて引退き、やがて忽ち平癒すると信じて居る。そこで、大急ぎで、老いたる巫女を迎へ來り、夜、神おろしをして貰はうといふので、白羊だの、赤鯉だの、くさぐさの供物を縱橫に竝べた。それから、一族中の男女ども、丁寧に供物の前で拜をなし、何分にも、貧乏な家で、格別の供物もありませぬが、怪しみ給ふなといつて居る。すると、巫女は、鼓を鳴らし、やがて、起つて舞ひながら歌つたが、陰風颯として吹き起り、錢形の紙は索索として、あたりに散亂した。巫女が云ふには、汝の命は、これまでであるが、われ神君は、汝の敬虔にして信心の念篤きを思ふが故に、特に汝の死を遲くして、命を延べて遣すといつた。疑もなく、神君が巫女に乘り移つて、かく仰せられたのである。巫女は、もう御役が濟んだといふので、神君を送る爲に、馬に乘つて門から出て行つた。この時、病人は、すでに息が絕えて居たが、一族の者どもは、老巫の言を信じ、屋根に匍ひ上つて、號哭しつつ、亡き魂を招き返さうとして居る。

【餘論】かういふ題目は、比較的に其作少く、且つ事、神靈に關して、自然超世的である處から、さのみ苦心せずとも、好詩が得られるので、これを見つけ出したのは、流石に、作者の慧眼である。全篇、例の得意の筆致で、略ぼ遺憾なく出來て居り、就中、老巫撃ㇾ鼓舞且歌より以下六句は、殊に面白

く、老巫の所作は、さながら、眼前に見る樣であつて、かくまで巧者に之を短幅の中に描き出したのは、もとより其手腕に依るのである。

主客行

(一)主人楚歌客楚舞。　主人楚歌し、客楚舞す、
落日黃(二)雲雁聲苦。　落日黃雲、雁聲苦なり。
笑拂腰間寶劍光。　笑うて拂ふ、腰間寶劍の光、
美人滿堂色如土。　美人滿堂、色土の如し。
(三)大兒北海人中奇。　大兒は北海人中の奇、
(四)小兒能讀曹娥碑。　小兒は能く讀む曹娥の碑。
相逢且莫歎貧賤。　相逢ふ、且つ貧賤を歎ずる莫れ、
但願有酒無別離。　但だ願ふ、酒あつて別離なきを。
君不見(五)平原墓上生秋草。　君見ずや、平原墓上、秋草を生じ、
(六)國士無窮道傍老。　國士無窮、道傍に老ゆ。

【字解】【一】主人楚歌客楚舞　漢書張良傳に「戚夫人泣く。上曰く、我が爲に楚舞せよ。吾、若の爲に楚歌せむ」とある。楚舞楚歌、ともに悲哀の調あるを特色とする。【二】黃雲　夕の雲。【三】大兒北海人中奇　大兒は、北海太守に成つて人中の奇傑たる彼の孔融だといふ意。後漢書禰衡傳に「衡唯だ魯國の孔融及び弘農の楊修と善し。かつて稱して曰く、大兒は孔文擧、小兒は楊德祖、餘子碌碌、數ふるに足るなきなり」とあり、又同書孔融傳に「融、字は文擧、河南尹李膺を見て曰く、先君孔子、君の先人李老君と相師友たり、すなはち、融は君と累世の通家と。衆坐、歎息せざるなし。大中大夫陳煒、後れて至る、坐中以て煒に告ぐ。煒曰く、夫れ人小にして聰了、大、未だ必ずしも奇ならずと。融、聲に應じて曰く、君の言ふところを見れば、將た蚤慧ならざるかと。煒大に笑つて曰く、高明、必ず偉器とならむ、と。後、北海太守となる」とある。【四】小兒能讀曹娥碑　小兒は、曹娥の碑文を讀みこなした彼の楊修だといふ意。世說に「魏武、かつて曹娥の碑下を過ぐ。楊修、碑背の上を見るに、黃絹幼婦、外孫齏臼の八字を題す。魏武、修に問ふ。解するや否や、と。答へて曰く、解す。魏武曰く、卿、未だ之を言ふべからず、わが之を思ふを待て、と。行くこと三十里、魏武乃ち曰く、吾すでに得たり、と。修をして別に知るところを記せしむ。修曰く、黃絹は色絲なり。字に於て絕たり。幼婦は少女なり、字に於て妙たり。外孫は女子なり、字に於て好たり。齏臼は受辛なり、字に於て辭たり。謂はゆる絕妙好辭なりと。魏武の記、修と同じ。歎じて曰く、わが才、卿に及ばず、乃ち三十里なるを覺ゆ」とある。【五】平原　史記平原君傳に「平原君趙勝は、趙の諸公子なり、賓客を喜び、賓客蓋し至るもの數千人」とある。【六】國士無窮　數かぎりなき國士。國士は前に見ゆ、一國に冠たる士。

【題義】主客行は、主客の意氣相感じたる趣を詠出したのである。

【詩意】主人たる吾は楚歌すべきに因り、客たる汝は、宜しく起つて楚舞すべし。折から、日は西に沈まむとし、夕の雲深く立ちこめ、雁の聲、悲しげに聞こえ、天地凄寥、せめては、歌舞して、氣ばらしをせねば、とても遣り切れない。やがて笑ひつつ、腰間の寶刀を引き拔いて、一振り振ると、爛たる光彩、人目を眩さむばかり、滿堂の美人、これを見て、色を失はぬものはない。むかし、禰衡は、

相許せしもの極めて少く、大兒は北海太守に成つて人中の奇傑と稱せらるる彼の孔融、小兒は曹娥の碑を讀みこなした彼の楊修、この二人の外には、碌なものもないといつたが、今、われも亦た眼中に在るものは君だけで、自然、深く相許して居る。されば、相逢うた時、お互に貧賤で、十分に歡を盡すことが出來ぬといつて嘆息するに及ばず、唯だ酒あつて會飮し、長しへに、別離の無い樣にありたいと願ふのみである。むかし、趙の平原君は、賢にして賓客を喜んだといふが、平原君死して、すでに久しく、その墓上には、秋草離離たるばかり、數かぎりもない國士輩は、寄るところなく、皆道傍に在つて、風塵の中に老い朽ちて行くので、われと君と、剋下の不遇も、亦た止むを得ぬことである。

【餘論】一誦極めて痛快、三斗の溜飮の下るを覺える。笑拂腰間寶劍光の二句は、光焰萬丈、君不見の二句は、悲慨の極、まことに古今同一嘆である。

春夜詞

(一)杏煙淫鬢秋(二)千下。
(三)銀蠟光寒曲屛畫。
(四)數漏閒過每(五)睡時。
月明微見墮游(六)絲。
欲歸自踏娉(七)婷影。
風動玉釵花亦冷。
(八)屋貯嬌愁鎖幔紗。
(九)靑絲嘶騎醉誰家。
管絃不動空臺榭。
夢與烏(一〇)衣語中夜。

春夜の詞

杏煙鬢を淫す秋千の下、
銀蠟光は寒し曲屛の畫。
漏を數へて、閒に過ぐ每に睡るの時、
月明、微に見る、游絲を墮すを。
歸らむと欲して自ら踏む娉婷の影、
風は玉釵を動かして、花亦た冷かなり。
屋に嬌愁を貯へて、幔紗を鎖し、
靑絲嘶騎、誰が家にか醉ふ。
管絃動かず、空しく臺榭、
夢に烏衣と中夜に語る。

【字解】【一】杏煙　杏花を立ち罩めた煙。【二】秋千　高無際の鞦韆賦の序に「漢の武帝、後庭の戲、本と千秋といふ、祝壽の語なり。語、倒轉して秋千となる。後人、その意に本づかずして、鞦韆の二字を造る」とある。秋千は即ちブランコ、婦人遊戲の具で、高貴の家の奥庭などに設けられてある。【三】銀蠟　精選したる白色の蠟燭、宋无の公子家詩に「娼將銀蠟燒明月、犬帶金鈴臥落花」とある。【四】數漏　水時計の音を數へる。【五】每睡時　每每眠に就く時。【六】游絲　かげろふ、陽炎。沈約の詩に游絲映空轉とある。【七】娉婷　集韻に「美好の貌」とある。【八】屋貯嬌愁　漢の武帝「もし阿嬌を得ば、當に金屋を營つて之を貯ふべし」といつた其語を暗用したので、その辭は、卷一長門怨の條に見ゆ。【九】靑絲嘶騎　靑絲は靑い絲を綯つた手綱。その手綱で御する馬が嘶きつつ、勢よく跳する騎士といふ義であらうが、どうも、字面が聊か無理な樣である。【一〇】烏衣　燕をいふ。拾遺に「王榭、夢に烏衣國に抵り、宴して歸る。王、命じて、飛玄の軒を取らしめ、榭、その中に入り、目を閉ぢて、しばらく息めば、家に至る、梁上の雙燕呢喃たり、乃ち止まるところは燕子國たるを悟るなり」とある。

【題義】春夜詞は、花咲き匂ふ朧夜に際して、朱門姬妾の慵げなる憂思を詠出したのである。

【詩意】女伴輩が終日游戲して居た秋千の下に佇めば、匂ひこめたる杏花の煙が、露を含みてか、鬢

の毛が、しとどに濡れ、一寸見ると、室中には、白い蠟燭の光が寒げに、六曲屛風の上なる畫を照らして居る。その時しも、水時計の鳴る音が聞こえたので、試に之を數へると、大分ふけて、いつも寐る刻限を過ぎ、月明の中には、かげろふの吹き落ちるのが、ありありと見えて、夜は、極めて靜かである。やがて、歸つて洞房に入らむとし、美しい自分の影を踏みつつ、徐に歩を移せば、風は頭上の玉釵を搖すつて、それに映ずる花が、冷かに見える。金屋は、唯だ嬌愁を貯へて、四面には窗かけの紗を垂れ下し、ひとり、つくねんとして居るが、靑絲の手綱で馬を走らす我が郞は、今宵、誰が家で醉臥して居るか。ここには、管絃も響かぬ故に、さしもの臺榭は、空しうして人なく、夜半すぐる後、おもひ寢の夢の中には、烏衣の燕と相語らふのみである。

【餘論】先づ中庭の景色を寫し、それから歸つて洞房に入ることに及び、敍述は、例の如く秩序立つて居る。欲歸自踏娉婷影の二句は、流麗芊眠、まことに愛誦すべきを覺える。

新絃曲

新絃の曲

舊絃解新絃張。　舊絃は解け、新絃は張る、

氷（一）絲牽愁六（二）尺長。　氷絲愁を牽いて六尺長し。

寬急頻從指邊聽。　寬急、頻りに指邊より聽く、

金（三）雁參（四）差移不定。　金雁參差、移つて定まらず。

新絃響高調易（五）促。　新絃響高くして調促し易し、

不如舊絃彈（六）已熟。　如かず、舊絃の彈じて已に熟するに。

憐新厭舊妾恨深。　新を憐み、舊を厭ふ、妾が恨深し、

爲君試奏白（七）頭吟。　君が爲に、試に奏す白頭吟。

他日愁如舊絃棄。　他日舊絃の如く棄てられむことを愁ふ、

泣向羅（八）裙帶頭繫。　泣いて羅裙の帶頭に向つて繫ぐ。

【字解】【一】氷絲　すき透る様な絲、方干の詩に氷絲織絡經心久とある。【二】六尺長　六尺は箏の長さで、阮瑀の箏賦に「身の長六尺、律數に應ずるなり」とある。【三】金雁　箏の柱、雁の形を模し、金で塗つてある故に云ふのであらう。溫庭筠の贈彈箏人に鋼蟬金雁皆零落、一曲伊州涙萬行とある。【四】參差　不揃なること。【五】調易促　調子が急でつまる、のびやかならぬこと。【六】彈已熟　よく手馴れて、わが思ふ通りになる。【七】白頭吟　西京雜記に「相如、將に茂陵の人を聘して妾と爲さむとす。卓文君、白頭吟を作り、以て自ら絶つ。乃ち止む」とある。【八】羅裙帶頭　羅の下裳の帶の端。

【題義】新絃曲は、新に張り換へた箏の絃に託して、可憐なる女子の情緒を詠出したのである。

【詩意】古い絃を取り外して、新しい絃を張つた。その絃は、透きとほる樣で、箏の長さと同じく六尺もあつて、わが愁を牽いて居る。さて絃を張つて畢りし後、調子の寬急は如何であらうといつて、頻りに指で加減して、その音を聞き澄まし、金雁の箏柱をあちこち動かすと、參差として、不揃に成る。兎角新絃は、響が高すぎて、調子が促まり易く、舊絃の從來久しく手にかけて慣れたるに及ばぬ

樣である。しかし、新しい方が善くて、古るいのは惡いといつて、特に命せられて、換へて見たので、私の恨は、深くして除くことが出來ず、そこで、君の爲に、かの新らし好みを諷した卓文君の白頭吟を、一曲試に奏でて見た。おもへば、この身も、いつか又舊絃の如く棄てられることもあらうといふので、自分に思ひ比べて、憐惜の念に堪へず、かの取り外した舊絃を棄てもあへず、羅裙の帶の端に繋いで置くことにした。

【餘論】新を憐み舊を厭ふは、移り易い男心の常で、絃を張り換へるにつけて、愈よ、痛切に其事を思ひ浮べたのである。通篇、情思綿綿、まことに諷諭の妙を盡して居る。

竹枝歌六首

竹枝の歌　六首

(一)蜀山消雪(二)蜀江深。　蜀山雪を消して、蜀江深し。

郎來妾去鬪歌吟。　郎は來り、妾は去つて、歌吟を鬪はす。

(三)峽中自古多情地。　峽中、古しへより多情の地。

(四)楚王神女在山陰。　楚王の神女は山陰に在り。

【字解】〔一〕蜀山　蜀地、即ち今の四川省境内の山を稱す。〔二〕蜀江　揚子江の上流。〔三〕峽中　宜昌より西は即ち峽江で、水が兩岸の山に遮ぎられて狹くなつて居る。〔四〕楚王神女　卷一巫山高の條に述べて置いた、宋玉の高唐賦の序に「むかし、先王、かつて高唐に游び、怠つて晝寢ぬ。夢に一婦人を見る、曰く、妾は巫山の女なり、高唐の客となる、君が高唐に游ぶを聞く、願はくは、枕席を薦めむ、と。王、因つて之を幸す」とある。

【題義】竹枝歌、略して竹枝ともいふ。樂府詩集に「近代曲辭、本と巴渝に出づ。唐の貞元中、劉禹錫、沅湘に在り、俚歌鄙陋なるを以て、乃ち騷人の九歌に依り、竹枝新詞九章を作り、巴兒聯歌といふ。短笛を吹き、鼓を擊ち、以て節に赴き、歌ふものは、袂を揚げて睢舞す。その音、黃鐘羽に協ふ」とある。すると、竹枝は、元と巴渝の俚歌で、初めには、歌ふものが竹枝を手にしたといふこともあるし、後には、合の手に竹枝の二字を入れたりするに因つて、竹枝と稱した。しかし、劉禹錫は、その文句が下劣で、面白くないといふ處から、新に其曲詞を作つたのである。その内容は無論、ある地の土俗に限られて居るから、後世では、音律上の面倒な事は、一切拔きにして、ある地の土俗を歌つたものを竹枝と稱する。某竹枝といへば、某地土俗詞といふと同じである。その土俗の中でも、兩性間の關係は、殊に詩的であるから、自然、多く取り入れられて居るが、あくまで、重きを土俗に置いて、主從の別を誤つてはならぬ。頃ろ、我が邦人の竹枝といふのは、一地方の狹斜、即ち花柳界の事に限つて居るが、まさしく、竹枝の原始的意義を忘却したものといはねばならぬ。青邱の竹枝詞は主として、峽江の土俗に關したものである。

【詩意】萬疊の蜀山に積んだ雪も、春になると解け出し、その水が流れ込むから、江流は、愈よ深くなつた。その江岸の上を、男女來往して歌吟を鬪はせ、竹枝の曲を歌つて居る。揚子江の上流といへ

ば、多情の地として知られ、現に楚王の夢に入つた陽臺の神女は、巫山の陰に居て、朝雲暮雨、今に名殘を留めて居る位。次次と歌ふ竹枝は、自然面白くなるべき筈である。

(一)魚復浦上石(二)纍纍。　魚復浦上、石纍纍たり、

恰似儂心無(三)轉廻。　恰も似たり、儂が心の轉廻なきに。

船歸莫道上(四)灘惡。　船歸つて、道ふ莫れ、灘を上ること惡しと、

自牽(五)百丈取郎來。　自ら百丈を牽いて、郎を取つて來らむ。

【字解】【一】魚復浦　一統志に「夔州府城の東南に在り」と見ゆ。【二】纍纍　重なり合ふ。【三】無轉廻　詩經に我心匪石、不可轉也とある。【四】上灘　急流を漕ぎ上る。【五】百丈　峽中の船を引き上げる互い綱で、水の勢く切れる樣に竹のへいだのを綯つたのである。東坡の詩に百丈休牽上瀨船とある。

【詩意】夔州府城の近くには、魚復浦があり、そこには、亂石纍纍、しかも、その轉廻せざることは、我が心と同じく、まことに危險至極である。しかし、蜀への歸船は、この灘を漕ぎ上ることが六つかしいといふな、私が手傳つて、かの百丈の綱を牽いて、一番にわが郎を取つて此方に來させやう。

江水出峽過夔州。　江水、峽を出でて夔州を過ぐ、

長流直到海東(一)頭。　長流直に到る海東の頭。

【字解】【一】海東頭　頭は邊に同じ。

郎行若有思家日。　郎行いて、若し家を思ふの日あらば、

應教江水復西流。　應に江水をして復た西流せしむべし。

【詩意】江水滔滔、峽を出で、夔州を過ぎ、長流萬里、やがて海東の邊までも屆いて居る。ここを下つて、吳楚に出かけると、その地の繁華を愛でて、なかなか歸らないのが普通である。郎、もし彼地に往つて、此方を思ふ日があつたならば、まことに希有の事で、この江水をして、再び西に向つて逆流せしむるであらう。

(一)躑躅花紅(二)鵯鵊飛。　躑躅花紅に鵯鵊飛ぶ、

(三)黃牛廟下見郎稀。　黃牛廟下、郎を見ること稀なり。

(四)大艑(五)攤錢(六)賣鹽去。　大艑、錢を攤げて、鹽を賣つて去り、

(七)短釵簪葉負薪歸。　短釵、葉を簪して、薪を負うて歸る。

【字解】【一】躑躅花紅　赤つつじ、古今注に「羊躑躅花黃なり、羊、これを食へば、躑躅して分散す。故に名づく」とあり、王建の宮詞に敕賜一窠紅躑躅、謝恩未了奏花開とある。【二】鵯鵊　ひよどり、歐陽修の鵯鵊詞に紅紗蠟燭愁夜短、綠窗鵯鵊催天明とあつて、その注に「鵯鵊は催明の鳥、京師、これを夏雞といふ」とある。【三】黃牛廟　一統志に「黃牛峽は、荊州府夷陵州西に在り。崎壁に石あり、色、人、牛を牽くの狀の如し。人は黑く、牛は黃、山、すでに高く、江復た紆廻す、これを望めば、早く見はる。行くもの謠うて曰く、朝發黃牛、暮發黃牛、三朝三暮、黃牛如故」とある。廟は

矢蜑、峽中に在つて黃陵廟といふ。【四】大艑　艑は大船、荊州記に「湘州七郡、大船皆萬斛を受く、艑に非ざれば皆淺船なり」とある。【五】擲錢　錢を賭けて戲となす、後漢書梁冀傳に「少にして貴戚となり、逸遊自ら恣にす、挽滿・彈棊・格五・六博・蹴踘・擲錢の戲を能くす」とあり、杜甫の詩に長年三老長歌裏、白晝擲錢高浪中とある。【六】鹽井　四川省の南部には、鹽井が多く、地下から鹽水を吹き出す故に、之を煮て鹽とする。今でも自流井の附近が、最も有名である。【七】短釵簪葉　葉を頭上に簪して短釵に代へる。杜甫の負薪行に、夔州處女髮半華、四十五十無夫家、更遭喪亂嫁不售、一生抱恨堪咨嗟、土風坐男使女立、應當門戶女出入、十有八九負薪歸、賣薪得錢應供給、不老雙鬟只垂頸、野花山葉銀釵竝とあつて、その風俗を窺ふことが出來る。

【詩意】赤い躑躅が咲いて、朝ほがらかに、鵯の鳴く初夏の頃、黃牛廟下に於て、我が郎を見ることは太だ稀で、もつと遠くに往つて仕舞つたことと思ふ。峽中の風俗として、蜀地の官鹽を載せて賣りに出る大船の中では、船頭どもが、博奕に耽つて錢を賭け、そして峽中の若い女どもは、葉を頭上に簪して短釵に代へ、御苦勞にも、薪を背負つて山から出て來る。

妾愛看花下渚宮。　妾は、花を看て渚宮に下らむことを愛す。
郎思沽酒醉臨邛。　郎は、酒を沽うて、臨邛に醉はむことを思ふ。
春衣未織機中錦。　春衣、未だ織らず機中の錦。
只是長絲那得縫。　只だ是れ、長絲、那ぞ縫ふを得む。

【字解】【一】渚宮　卷一白紵詞に見ゆ。荊州江陵に在つて、楚の襄王の建てた離宮。【二】臨邛　卷一富壚曲に見ゆ。一統志に「今の邛州、秦には臨邛といふ」とある。司馬相如が、卓文君と共に酒を賣つた處。【三】機中錦　機に掛けた錦。

【詩意】私は花を看むが爲に、東、はるかに荊州の渚宮までも下らうと思ふが、郎は、これと反對に、臨邛に往つて、おもふ存分、酒を沽うて飮みたいといつて居る。どつちへ往くにしても、支度が第一であるが、春著として機にかけた錦は、まだ織り上げてないから、いくら長絲でも、これを縫ひ上げることが出來ない。マア、著物の出來た上で、改めて、相談することに致さう。

楓林樹樹有猨啼。　楓林、樹樹、猨の啼くあり、
若箇聽來不慘悽。　若箇か聽き來つて慘悽たらざらむ。
今夜郎舟宿何處。　今夜、郎の舟、何の處にか宿する、
巴東不在定巴西。　巴東在らざれば、定めて巴西。

【字解】【一】若箇　誰かに同じ。【二】巴東不在定巴西　一統志に「巴江は重慶府城の東に在り、閬水、白水と合流し、曲折三廻、巴字の如し。秦、巴郡を置く、卽ち重慶府、又順慶府、隋には巴西といふ。夔州府、漢には巴東といふ」とある。

【詩意】峽中到る處、楓林であつて、林中の樹樹には、猿が止まつて啼いて居る。その聲の悲しげなる、聞き來つて、誰か慘悽の念を起さざるべき。今夜、わが郎は何處に宿するか、もし巴東の重慶でなければ、屹度巴西の夔州、何にせよ、早く歸つて來れば善いがと思つて居る。

【餘論】以上六首の中、第一首は總敍とも見るべく、第二首は魚復浦を云ひ、第三首は、下江の者が

吳楚の繁華を喜びて、容易に歸らざるを云ひ、第四首は、峽中の風俗を云ひ、第五首は、ここより渚宮臨邛の雨處に通ずるをいひ、第六首は、峽中に猿啼多きをいひ、務めて、切實にして虛泛に失せざる樣、特に注意し、聲調も亦た流暢爽利であるが、これを劉禹錫・白居易の作に比すれば、例の古色古味、到底相若かず、つまり、時代の遞降は、青邱の才を以てするも、奈何ともする能はざるものと見える。

轉應詞。二首　轉應の詞　二首

雙燕。雙燕。　雙燕、雙燕、
（一）去歲今年相見。　去歲今年相見る。
往來東舍西家。　往來す東舍、西家、
（二）銜得泥中落花。　銜み得たり泥中の落花。
花落。花落。　花落つ、花落つ、
人在暮寒池閣。　人は暮寒の池閣に在り。

【題義】轉應詞は、樂府詩集に「近代曲辭」とあり、樂苑に「調笑商調曲なり、戴叔倫、これを轉應詞といふ」とある。この詩形は、はじめ、韋應物が作つて調笑令といひ、後に戴叔倫は轉應詞といひ、その後、詞、卽ち塡詞の一として知られて居る。調笑といひ、轉應といふのは、その當時に於てこそ、意義があつたらうが、今では、唯だ詞體の名たるに過ぎぬ。されば、これを樂府といはむよりは、詞の中に收めるのが至當と思ふ。青邱の此作は、二首ともに暮春の情景を詠出したのである。

【詩意】雙燕よ、雙燕よ、汝とは、去年も今年も相見て、棄て難き馴染である。汝も亦た少しも遠慮せずに、東舍西家の間を往來して居る。見れば口に銜みたる新泥には、落花が交つて居る。世は、今、春の末、花は落ち、花は落ち、いたく心を惱ましむる折から、われは、暮寒、水の如き池上の小閣に倚つて、徐に景色を眺めて居る。

【字解】【一】去歲今年相見　去年と今年と、打ちつづけて二度、雙燕と相見たといふ意。【二】銜得　口に銜へる。

疏雨。疏雨。　疏雨、疏雨、
（一）綠滿蘼蕪洲渚。　綠は滿つ蘼蕪の洲渚。
江南相憶故人。　江南に故人を相憶ふ、
遠水遙山暮春。　遠水遙山、暮春。
春暮。春暮。　春暮、春暮、

【字解】【一】蘼蕪　草の茂れるをいふ。【二】畫船　飾りを施したる遊山船。

風急畫[一]船難ㇾ渡。 風は急にして畫船渡り難し。

【詩意】 疎雨、疎雨、そぼふる雨の中に、洲渚の上の草は綠いやまし、これを見るにつけても、江南なる故人を思ひ出すが、山も、水も、遠く黃昏がれて、春は、今、暮れなむとして居る。春暮、春暮、せめては、舟を浮べて、江上の景色を吟賞しようと思ふが、何分にも、風が急で、とても渡れない。

【餘論】 二首、ともに塡詞としては、精錬を缺き、到底、詩人の詞に過ぎぬ樣に思はれる。

五雜組二首 五雜組 二首

五雜組。駝[一]背䩞。 五雜組、蛇背の䩞。

往復還。渡口船。 往いて復た還る、渡口の船。

不ㇾ獲ㇾ已。非二少年一。 已むを獲ず、少年に非ず。

【字解】【一】駝背䩞 駱駝の背に䩞を置いて之に乘る。䩞は下鞍、卽ち鞍下の被。

【題義】 五雜組は、樂府遺聲に「雜體曲」とあり、その古いのは、王融の作は、

五雜組。岡頭草。往復還。車馬道。不ㇾ獲ㇾ已。人將ㇾ老。

五雜組。慶雲發。往復還。經ㇾ天月。不ㇾ獲ㇾ已。生二胡越一。

それから、後人にも往往擬作がある。破題、五雜組の三字は、殆んど意味がない樣であるが、往復還、不ㇾ獲ㇾ已には意味がある。そして、この三字三句は、動かすべからざるものとなり、他の三句を塡入するに過ぎぬ。

【詩意】 駱駝の背に下鞍を置き、それに荷物を載せて、鄕里から出發した。渡し場には、舟が往還して居て、矢張、これに乘るより外はない。旅は隨分難儀であるが、われ既に少年に非ず、止むを得ず、今次奮發した次第で、もとより、うかうかして居ることは出來ない。

五雜組。錦繡旗。 五雜組、錦繡の旗。

往復還。更[一]戍兒。 往いて復た還る、更戍の兒。

不ㇾ獲ㇾ已。遭二亂[二]離一。 已むを獲ず、亂離に遭ふ。

【字解】【一】更戍兒 交代して征戍する軍卒。【二】亂離 爭亂の爲に一家離散する。

【詩意】 錦繡の旗を押し立てて、出かけるのは、征戍の軍卒どもで、交代の爲に往復するのである。何も好んで出かけるのではないが、亂離の日に遭うて、止むを得ず、此に及んだのである。

【餘論】 かういふ詩は、意味が略ぼ一貫して居れば、先づ大抵善いので、區區たる短章零句の中、構

想だの、措辭だのと、やかましく論ずるだけの餘地もない。それから、生半熟の似而非詩人は、一寸珍らしいので、かういふ題を喜ぶが、實は無意味であつて、好んで爲すべきものではない。無論、青邱も、唯だ練習の爲め、一寸試みたに過ぎぬであらう。

五噫歌弔梁伯鸞墓　五噫の歌、梁伯鸞の墓を弔ふ

顧瞻(一)亭皐兮噫。　顧みて亭皐を瞻る、噫。
邱(二)墳有蒿兮噫。　邱墳に蒿あり、噫。
鬻(三)春亦勞兮噫。　鬻春亦た勞す、噫。
危(四)邦可逃兮噫。　危邦逃るべし、噫。
先生何高兮噫。　先生何ぞ高き、噫。

【字解】【一】亭皐　亭は亭堠の亭で、宿次の在るところ。皐は澤地、又轉じて平地。すると、驛路の通ずる平原といふこと。【二】邱墳　岡で墳墓の在るところ、墓地。【三】鬻春　賃錢を貰つて米を舂く。後漢書の本傳に「吳に至り、大姓皐伯通に依り、廡下に居り、人の爲に賃舂す」とある。【四】危邦　騷亂將に生ぜむとし、そこに居ると甚い目に遇ふ邦。

【題義】五噫歌は、舊と後漢の梁伯鸞が作つたので、今青邱が其墓を過ぎて之を弔ふに因り、その人の作つた五噫の歌に擬したのである、原注に「秦伯廟の西、金昌亭の傍に在り。伯鸞、かつて五噫歌を作る。余、因つて之に效ひ、以て其墓を弔ふ」とある。なほ、梁伯鸞の事は、卷三、詠隱逸十六首の中で詳述することにする。梁伯鸞の伯鸞は字で、本名を鴻といひ、後漢書逸民傳に「梁鴻、京師を過ぎ、五噫歌を作る、曰く」として、その歌は、左の通りである。

陟彼北邙兮噫。顧覽帝京兮噫。宮室崔嵬兮噫。人之劬勞兮噫。遼遼未央兮噫。

これを五噫歌といふのは、噫の字が五つあるからで、樂府詩集には「雜歌謠辭」としてある。

【詩意】ここに顧みて、驛路の通ずる平原を望めば、茫茫として際なく、梁伯鸞は、よくも遠方から流浪して、この地に來たものである。邱上には、彼の墓があるが、蓬蒿の中に埋沒して、わづかに、形ばかり殘つて居る。梁伯鸞は、米春をして賃錢を取り、それで、やつと生活して居たといふが、定めて骨の折れたことであつたらう。しかし、かくてこそ、危邦を逃れて、その生を聊んずることが出來たので、先生の人物は、いかにも高尙にして、一寸他に比類なき程である。

【餘論】巧に原作を摸擬し、格別新しみもないが、その古調古意は、まことに題に相應しいのである。

疊韻吳宮詞　疊韻吳宮の詞

筵(一)前憐(二)嬋(三)娟醉媚睡(四)翠被。　筵前に嬋娟を憐む、醉媚、翠被に睡る。
精兵驚升(五)城棄(六)避愧墜淚。　精兵驚いて城に升る。棄避して、涙を墜さむことを愧づ。

【字解】【一】筵前　筵は酒宴の席。【二】憐　愛する。【三】嬋娟　西施を指す。【四】翠被　翡翠の羽毛をつけた夜具。【五】

升堞　城壁に搔き上る。【六】棄避　宮を棄てて避け匿れる。

【題義】 疊韻吳宮詞とは、舊と吳宮詞で、吳王夫差が西施に惑溺した其事實を詠じたのであるが、每句の字を皆疊韻にしたから、特に斷つたのである。原注に「皮陸、かつて此作あり、因つて、戲れに之に效ふ」とある。皮陸は、晚唐の皮日休と陸龜蒙、元來皮陸は、種種の新しい試みを遣つたので、五律に五仄五平體などもあるが、これは五絕で、各句を疊韻にしたのである。疊韻とは何かといふと、南史謝莊傳に「王元謨、莊に問ふ、何者をか雙聲となし、何者をか疊韻となす、答へて云ふ、互護を雙聲となし、磝碻を疊韻となす」とあり、學林新編に「古人、四聲を以て切韻となし、必ず五音を以て定となす。蓋し、東方喉聲を木音となし、西方舌聲を金音となし、南方齒聲を火音となし、北方脣聲を水音となし、中央牙聲を土音となす。雙聲とは、音を同じうして韻を同じうせざるなり。疊韻とは、同音にして又同韻なり。互護は同じく脣音なれども、韻を同じうせず、故に之を雙聲といふ。磝碻は、同じく牙音にして、又韻を同じうす。故に之を疊韻といふ」とあり、又韻語陽秋に「陸龜蒙の詩の序に曰く、疊韻は、梁の武帝より起る。云ふ、后牖有朽柳、と。當時、侍從唱和す。劉孝綽云ふ、梁王長康强、と。沈休文云ふ、載戴每礙硋、と。自後、それを用ひて小詩を作るもの多し、戲諧の語、往往史冊に載す」とある。この詩でいふと、第一句は五字ともに一先の韻に屬し、第三句は五字ともに八庚の韻に屬し、第二第四の兩句は五字ともに去聲四寘の韻に屬するものである。

【詩意】 吳王夫差は、姑蘇臺に在つて、長夜の飮を縱にし、筵前に西施が嬋娟の容を爲せるを愛でた。やがて、西施が一醉して百媚生じ、はては、坐に勝へず、翠被を擁して眠る樣のいぢらしさ。しかし、越國の軍は、容赦なく、俄に襲ひ來り、精兵が城壁に搔き上るといふ騷ぎ。夫差は、宮を棄てて避け匿れむとし、淚を落すことは、流石に愧ぢて爲さぬが、その周章狼狽は、何とも言へぬ程で、亡國の末路は、まことに憐むべきことである。

【餘論】 疊韻などは、つまらぬ拘束を設けたもので、かういふ事は、小家數に限られ居る。世に青邱ともあらうものが、好んで之を爲す筈もなく、これは、屹度、少年の頃、練習の爲に一寸試みたものに過ぎぬであらう。何にしても、運筆、聊か自由を缺けるは、必然の勢で、彼の才を以てしても、免れ得なかつたのであらう。

鶴媒歌

鶴媒の歌

（一）鶴媒獨歩（二）荒陂水。　鶴媒、ひとり步す荒陂の水、
仰望雲間不飛起。　仰いで雲間を望んで飛び起たず。
遠呼（三）過鳥下南汀。　遠く過鳥を呼んで南汀に下らしめ、

【字解】【一】鶴媒　囮の鶴。
【二】荒陂　陂は隄防。
【三】過鳥　飛んで行く鳥。

鼓翼相迎似相喜。　翼を鼓して相迎へ、相喜ぶに似たり。
共爲(四)羽族生水鄉。　ともに羽族となつて、水鄉に生まれ、
暫從飮啄無猜防。　暫く飮啄に從せて猜防なし。
(五)草盾俄開中(六)潛弩。　草盾、俄に開いて、潛弩を中つ、
(七)弋師讙笑媒矜舞。　弋師は讙笑して、媒は矜舞す。
嗟爾高潔非凡禽。　嗟、爾、高潔にして凡禽に非ず、
胡爲(八)徇食移此心。　胡すれぞ、食に徇つて此心を移す。
受人馴養忘(九)遠擧。　人の馴養を受けて、遠擧を忘れ、
好陷同類(一〇)機腸深。　好んで、同類を陷れて、機腸深し。
嗚呼世間幾人號
　君子。　嗚呼、世間幾人か君子と號す、
得利相傾亦如此。　利を得て、相傾くること亦た此の如し。

(四) 羽族　禽鳥。
(五) 草盾　釋名に「盾は遁なり。その後に竄き、避けて以て隱遁するなり」とある、掩ひとなつて居る草。
(六) 潛弩　匿してある弓。
(七) 弋師　弓で鳥を射る人、卽ち獵師。
(八) 徇食　食物に自由にされる。
(九) 遠擧　遠く飛び去る。
(一〇) 機腸　企みある腹、腹黑き心。

【題義】　これから照田鷺詞に至る三首は、又ぞろ、靑邱創意の新題である。鶴媒歌は、原注に「吳人、鳥を弋するに鶴を以て媒となす」とあり、又前の射鴨詞の處に、姑蘇志、鶴媒の注「吳中の弋人、かつて一馴鶴を養ひ、弓矢を挾み、以て之を伺ふ。鳥、鶴の同類なるを以て、これに狎れて嫌疑なく、遂に矢に中てらる。而して、射鴨、亦た此法を用ふ」とあるを引いて置いた。この詩は、純ら鶴媒を詠出したのである。

【詩意】　囮の鶴は、ひとりで、のそのそと、秋後荒廢した陂塘の水中を歩み、仰いで雲間を望めども、決して飛び起たず、そして、空を飛び度る鳥を見ては、遠くから呼びかけて南汀に下らしめ、羽ばたきをして、これを迎へ、さながら、嬉しく思ふ樣な氣色である。いかさま、ともに禽鳥となつて、水鄉に生れたものであるから、暫時、一緒に水を飮み餌を啄んで、少しも猜疑防備の心なきも、尤も千萬な次第。その內に、盾に代用せる草むらが俄に開いて、匿したる弓を放つと、見事に其鳥に中り、獵師は歡笑し、そして囮の鶴までもが、おのが手柄を矜り貌に舞つて居る。汝、鶴は、元と高潔の本性、決して凡禽ではないのに、如何なれば、食物に自由にされて、本來の此心を移したのであるか。かくては、人に馴らされ養はれて、一擧千里、遠く大空を翔けることをも忘れ、好んで、同類を陷れ、腹黑き企みが甚だ深い。しかし、これは、區區たる鳥のみではなく、世間で君子と號する手合が、利を得れば、相傾けて仇をなすことは、大抵、こんな風である。

【餘論】　鶴媒獨步荒陂水より弋師讙笑媒矜舞に至るまでは、鶴媒の動作を寫し、嗟爾高潔非凡禽よ

り得利相傾亦如此に至るまでは、鶴媒に對する感慨を敍し、殊に結末四句は、季世の惡俗を諷して、極めて痛切である。

牛宮詞

牛宮の詞

豕豢于苙、雞棲于塒。　豕は苙に豢はれ、雞は塒に棲む。
嗟爾烏犍、何所止斯。　嗟、爾、烏犍、何の止まるところ。
歲聿云暮、雨霜以風。　歲聿に云に暮る、霜を雨らして以て風ふく。
乃築環堵、以爲爾宮。　乃ち環堵を築き、以て爾の宮と爲す。
既用爾力、宜恤爾寒。　すでに、爾の力を用ふ、宜しく、爾の寒を恤ふべし。
庇處密固、我心孔安。　庇する處、密にして固く、我が心孔だ安し。

【字解】【一】豢于苙　苙は圂、卽ち厠、厠中に飼はる。【二】棲于塒　ねぐらに棲む。【三】烏犍　說文に「犍は犗牛なり」とある。乘用の黑牛。【四】環堵　牆を環らした一構、小屋。【五】孔安　孔は甚だ。

【題義】牛宮は牛小屋、原注に「吳地下溼、冬寒きときは、牛、卽ち欄に入る。唐人これを牛宮といふ」とある。この詩は、卽ち牛宮を詠出したのである。

【詩意】豕は圂に飼はれ、雞は塒に住み、汚くむさくるしいけれども、各〻その居るところがあるのに、汝、牛のみ、何處といつて、止まるところなきは、氣の毒である。今しも、年將に暮れむとし、天、霜を降らして、北風も甚だ寒い。そこで、環堵の小室を築いて、汝の居る處とした。すでに、汝の力を用ひて、これまで、散散使つたから、この天寒に際し、汝をいたはつてやるのは當然の事である。汝を庇うて居らしむる牛小屋が密にして固ければ、汝も滿足であらうし、われも亦た甚だ安心である。

【餘論】四言の古體を以て之を行り、故らに、人の意表に出でむとした。その旨意は、もとより仁人の言で、流石に面白い處がある。

照田蠶詞

照田蠶の詞

東村西村作除夕。　東村西村、除夕を作す、
高炬千竿照田赤。　高炬千竿、田を照らして赤し。
老人笑祝小兒歌。　老人は笑ひ祝して、小兒は歌ふ、「得む。
願得宜蠶又宜麥。　願はくは蠶に宜しく、又麥に宜しきを」

【字解】【一】笑祝　笑つて祈りなする。「祝は將來の多幸を祈る意。【二】白屋　草小屋。【三】可卜　豫期すべしといふ意。

明星影亂棲烏驚。
火光辟レ寒春已生。
夜深然罷歸二(二)白屋一。
共說豐年眞可(三)レ卜。

明星影亂れて、棲烏驚く、
火光、寒を辟けて、春、すでに生ず。
夜深く、然やし罷んで、白屋に歸る、
ともに說く、豐年、眞に卜すべしと。

【題義】原注に「吳俗、除夜、田間に高炬を燃やす、これを照田蠶といふ」とあり。范成大の村田樂府の序に「照田蠶詞、燒火盆と同日、村落は、禿帚、もしくは麻藍、竹枝輩を以て火炬を燃やし、長竿の杪に縛して、以て田を照らし、爛然野に徧ねく、以て絲穀を祈る」とあつて、その詞は、左の通りである。

鄉村臘月二十五。長竿然レ炬照二南畝一。近似二雲開森列一レ星。遠如三風起飄二流螢一。今春雨雹繭絲少。秋日雷鳴稻堆小。儂家今夜火最明。的知新歲田蠶好。夜闌風焰西復東。此占二最吉一餘難レ同。不三惟桑賤穀芃芃一。仍更苧麻無レ節菜無レ蟲。

青邱の作も、無論石湖の此詩に依據したものであらう。

【詩意】東西の村落、ともに除夜に際し、千竿の高炬は、赤く田の面を照らすばかり、老人は笑ひながら祈を爲し、小兒は歌ひつれて、どうか蠶も出來、麥も出來るやうしたいといつて居る。遠く望めば、その炬火は、明星の如く、影亂るれば、棲鴉も驚いて飛び起ち、火光は寒氣を消して、春が既に生じた樣な心持がする。やがて、夜が更けて、愈よ炬火を燃やし切ると、打連れて草小屋に歸り、そして、豐年を豫期することが出來ると、語り合つて喜んで居る。

【餘論】この題は、范石湖以後、誰も試みたものが無かつたから、靑邱が、我こそといふので、遣つて見たものらしいが、その構想措辭、兩つながら、石湖に一籌を輸することを免れない。

妾薄命

悠悠(一)長門(二)月。流影入レ宮深。
但照二嬋娟影一。不レ照二貞素(三)心一。
君恩無(四)二日廻一。妾貌有レ時老。
但願他人歡事レ君。
千年萬年色長好。

妾薄命

悠悠たり長門の月、流影、宮に入つて深し。
但だ嬋娟の影を照らして、貞素の心を照らさず。
君恩、日として廻るなし、妾が貌、時あつて老ゆ。
但だ願ふ、他人歡んで君に事へ、
千年萬年、色長しへに好きを。

【字解】【一】悠悠　物靜かなる貌。【二】長門　漢宮の名、班婕妤の退居せし處。【三】貞素　貞節純潔。【四】無日廻　何日といつて元と通りに歸る日はない。

【題義】これより病駝行に至る四首は、高太史大全集に見えず、金檀が注を作る時に、博搜旁羅して、他書から補入したのである。妾薄命は、卷一にも見え、その條に於て詳しく解釋して置いた。

【詩意】長門宮前の月は、悠悠として、物靜かに天に上り、流るる光は、深く宮中までさし込んで居る。しかし、月は、嬋娟たる我が影を照らすばかりで、貞節純潔なる此心を照らさぬから、物足らぬ心持がする。君の恩は、再び元に還る日とてはなく、加ふるに、私の姿は、老衰する時があつて、いかにも、致し方がない。この上は、決して、往日の寵眷を得たいなどとは申さぬが、誰でも善いから、機嫌よく君王に事へ、そして、千年萬年の後までも、色衰へずして、御奉公する樣にと願ふばかりである。

【餘論】全篇、謂はゆる悲んで傷らざるの意を得、そして、結二句は、詩人忠厚の旨を失はざるものである。

出門行

貧賤去鄉里。四方何所之。
欲游淮陰市（一）。恐爲少年（二）欺。
少年勿相欺。人實未可知。
纖莖蔭高岡。弱翮（三）翔天池（四）。
丈夫懷遠志（五）。奮發寧無時。

出門行

貧賤にして鄉里を去る、四方何の之くところ。
淮陰の市に游ばむと欲す、恐らくは、少年に欺かれむ、
少年、相欺く勿れ、人、實に未だ知るべからず。
纖莖、高岡に蔭し、弱翮、天池に翔る。
丈夫、遠志を懷く、奮發、寧ろ時なからむや。

【字解】【一】淮陰市　韓信の故里。【二】少年欺　欺は壓倒する、ここでは少年に馬鹿にされるといふ意。史記淮陰侯傳に「屠中の少年、信を侮るものあり、因つて之を衆辱し、信をして、俛して袴下より出でしむ」とある。【三】弱翮　弱い翼。【四】天池　莊子に「南溟は天池なり」とある。【五】遠志　遠大な志。

【題義】出門行は、樂府詩集に「雜曲歌辭」とあつて、孟郊・元稹の作を擧げてある。ともに、門を出づれば、すでに旅路、おまけに、志を得ず、悲慨自ら禁せざる趣を敍して居る。念の爲め、孟郊の二首を擧げると、

長河悠悠去無極。百齡同此可歎息。秋風白露沾人衣。壯心凋落奪顏色。少年出門將訴誰。川無梁兮路無歧。一聞陌上苦寒奏。使我佇立驚且悲。君今得意厭粱肉。豈復念我貧賤時。
海風蕭蕭天雨霜。窮愁獨坐夜何長。驅車舊憶太行險。始知游子悲故鄉。美人相思隔天闕。長望雲端不可越。手持琅玕欲有贈。愛而不見心斷絕。南山峩峩白石爛。碧海之波浩漫漫。參辰出沒不相待。我欲橫天無羽翰。

次に元稹のは五古で、篇幅が太だ長い。靑邱のは、純ら孟郊を學んで、且つ少しく變化したのである。

【詩意】われ貧賤にして鄉里を去らむとし、これから、四方、いづれの方へ向はうか。さしあたり、淮

陰の市に往かうと思ふが、例の少年輩に馬鹿にされはしまいかといふ虞がある。さはれ、少年輩よ、決して馬鹿にするな。人の運命は分からぬもので、この先、榮達しないものでもない。現に、細い莖の草でも、高岡に蔭すべく、弱い翼の鳥でも、南溟の天池に翔けることが出來る、苟くも、大丈夫が遠大の志を懷いたからには、いつかは、奮發する時があるので、その折こそ、目に物を見せて吳れやう。

【餘論】頗る自奮の意があつて、一誦、人の胸を透かす樣な氣がする。しかし、措辭上から見ると、決して、至れるものではない。

田家行

去年大雨漂我麥。　去年、大雨、我が麥を漂はし、
今年桑柘（一）軸無帛。　今年、桑柘、軸して帛なし。
身隨（二）簿吏到縣門。　身、簿吏に隨つて、縣門に到る、
田少稅多那免責。　田は少く、稅多く、那ぞ責を免れむ。
聞道長征未罷兵。　聞くならく、長征未だ兵を罷めず、
（三）轉輸日日向邊城。　轉輸、日日、邊城に向ふと。
老少田中竭筋力。　老少、田中、筋力を竭くす、
願爲（四）官家足軍食。　願はくは官家の爲に軍食を足らしめむ。
但得官家（五）風雨時。　但だ官家、風雨時あるを得ば、
盡供（六）徵賦儂不辭。　盡く徵賦を供するも、儂は辭せず。

【字解】【一】軸　病んで行く能はずといふ意味で、ここでは、桑が霜に痛められて芽が碌に出なかつたことであらう。【二】簿吏　收稅の帳簿を持ち步く役人、卽ち收稅吏。【三】轉輸　兵粮を運搬する。【四】官家　天子をいふ　湘山野錄に「五帝は天下を官とし、三王は天下を家とす、故に官家といふ」とある。【五】風雨時　五風十雨、卽ち五日に一回風吹き、十日に一回雨ふるといふ樣に、風雨が其時に違はずして至り、從つて、豐年なること。【六】徵賦　上納、進上、臨時の課稅を幷せていふ。

【題義】田家行は、前に見えて居たから、ここで重ねて說明はせぬことにする。

【詩意】去年は、大雨が降り續いて、我が麥を漂ひ去らしめ、今年は、桑や野桑が霜に痛められて、養蠶が不出來であつたから、帛を織る譯に行かぬ。そこで、自分は、收稅吏に連れられて、縣の役所に出頭したが、何分、田は少く、稅は多く、到底責を免れることは出來ない。聞けば、征伐久しきに亙つて、未だ兵を罷めず、日日、兵粮を運搬して、邊塞に向ふとのことで、老少、ともに田に出て、筋力の續く限りを盡し、天子の爲に、軍食に不足の無い樣に致したいと、それのみを念じて居る。しかし、天子、民を憐み、五風十雨、豐年になつたならば、いかに多くとも、租稅をすつかり差出すことは、決して、否まぬ積りである。

【餘論】起首四句は、連年の荒凶に際して、租稅を拂へぬことをいひ、次の四句は、征戍久しきに

亙り、專ら軍食を足す覺悟で居ることをいひ、結二句は、豐年でありさへすれば、いくらでも上納するといひ、まさしく、農民の意中を忖度したのである。

病駝行

病駝行

駝(一)峰黃、駝(二)茸紫。　駝峰は黃、駝茸は紫、
曾馱(三)黃金獻天子。　かつて黃金を馱して天子に獻ず。
(四)燕山雪深沒駝耳。　燕山、雪は深くして、駝耳を沒す、
(五)錦韉模糊駝不死。　錦韉模糊として、駝は死せず。
去年從軍下南(六)粵。　去年軍に從つて南粵に下る、
粵江水渾沙(七)草熱。　粵江水渾つて沙草熱す。
毛焦肉枯骨欲折。　毛は焦げ、肉は枯れて、骨折れむと欲す、
回頭却憶燕山雪。　頭を回らして、却つて憶ふ燕山の雪。
燕山雪、不得歸。　燕山の雪、歸るを得ず、

【字解】(一) 駝峰　駱駝の脊の瘤、杜甫の詩に紫駝之峰出翠釜とある。(二) 駝茸　駱駝の毛、陸游の詩に狐腋裘駝茸とある。(三) 馱　脊に積み載せる。(四) 燕山　一統志に「順天府、宋には燕山といふ」とあつて、後の北京。(五) 錦韉　下鞍。(六) 南粵　一統志に「廣東廣州府は春秋の南粵」とある。(七) 沙草　沙地に生える草。(八) 伶仃　韻會に「獨行の貌」とある。(九) 生馬　新に使用する馬。(一〇) 欺　壓倒する。

駝飢駝渴誰與知。　駝は飢ゑ、駝は渴して、誰か與に知らむ。
(八)伶仃反被(九)生馬欺(一〇)。　伶仃、反つて生馬に欺かる、
嗚呼駝兮寧勿悲。　嗚呼駝や、寧ろ悲む勿れ。
峰可食、茸可衣。　峰は食ふべし、茸は衣るべし、
利爾衣食孰爾醫。　爾の衣食を利して、孰れか爾を醫せむ。

【題義】 病駝行は、病める駱駝を詠じたのである。

【詩意】 駱駝の瘤は黃色で、その毛は紫色をして居る。この駱駝は、かつて、黃金を積み載せて、天子に獻ずる爲め、北方に往つたことがあるが、燕山の地、積雪深くして、駱駝の耳をも埋むるばかり。そして、錦の下鞍の色褪せて、模糊となつて仕舞つたが、幸にして、駱駝は死ななかつた。それから、去年は、遠征軍に從つて、はるばる南越に下つたが、粵江の水は渾り、兩岸の沙草は、熱を帶びて、草いきれが堪へられず、毛は焦げ、肉は枯れて、骨も折れるばかり。この分では、燕山の雪の方が却つて善いと思つた。しかし、燕山は遠くして、一寸歸ることも出來ず、やがて飢渴に迫つても、それと察して同情を寄せる人もなく、ひよろひよろしながら獨行すると、新に來た軍馬にさへ負かされる。ああ、駱駝よ、いくら悲んでも無益であるから、諦めて悲まぬが善い。汝の瘤は美味で食へる

し、汝の毛は織つて著ることが出來る。しかし、汝を衣食とすることを利とする人ばかりで、いくら汝が病み疲れても、療治して呉れるものも無く、まことに、情ないことだが、今さら、どうにも成らぬ。

【餘論】憐むべき病畜に對して無限の同情を寄せたのは、さすがに詩人で、毛焦肉枯骨欲折の二句は、殊に痛切人を刺すを覺える。なほ題下の注に「偶ま武孟の乾坤清氣より補ふ、一に楊基と刻す」とあるから、この詩は、ひよつとすると、青邱の手筆ではないかも知れぬ。

琴操

風樹操

風樹操

朝風之飄飄(一)兮。朝風の飄飄たる、

維樹之搖搖(二)兮。維れ樹の搖搖たる、

吾思親之翹翹(三)兮。吾が親を思ふの翹翹たる。

夕風之烈烈(四)兮。夕風の烈烈たる、

【字解】【一】飄飄　飄然として俄に吹き至ること。

【二】搖搖　ゆすれ動く。

【三】翹翹　俄に思ひ悩む貌。

【四】烈烈　勁急にして劇しきこと。

維樹之揭揭(五)兮。維れ樹の揭揭たる、

吾思親之惙惙(六)兮。吾が親を思ふの惙惙たる。

樹之有風猶可(七)息兮。樹の風あるは猶ほ息むべし、

吾之無親終不可復得兮。吾の親なきは終に復た得べからず。

【五】揭揭　上に向つて動く。

【六】惙惙　愁思の絶えざること。

【七】可息　やめることが出來る。

【題義】琴操は琴曲の一、樂府詩集に「伏羲制作の後より、瓠巴・師文・師襄・成連・伯牙・方子春・鍾子期あり、皆善く琴を鼓す。而して、その曲には暢あり、操あり、引あり、弄あり。琴論に曰く、和樂して作る、これを命じて暢といふ、達すれば天下を兼濟して、その道を美暢するを言ふなり。憂愁して作る、これを命じて操といふ、窮すれば、獨り其身を善くして其操を失はざるを言ふなり。引とは、徳を進み業を修む、申達の名なり。弄とは、情性和暢、寛泰の名なり。その後、西漢の時、慶安世といふものあり、成帝の侍郎となり、善く雙鳳離鸞の曲を爲し、聱人劉道彊、能く單鳧寡鶴の弄を作し、

趙飛燕、亦た善く歸風送遠の操を爲す、皆當時に妙絶し、後世に稱せらる。若し夫れ、心意感發、聲調諧應、大絃は寛和にして溫、小絃は清廉にして亂れず、これを攫めば深く、これを醳れば愉、これを善を盡せりと爲す」とある。して見ると、操は、主として逆境の產出に係る琴曲で、韓愈の琴操十首の如きは、その好適例である。この風樹操は、原注に「予、自ら早く怙恃を失ふを傷んで作る」とある。そこで試に年譜を見ると「父一元、字は順翁、兄沓、先生は其次なり。少にして孤」とあり、その自作の詩に嗟予少已失庭闈とある通り、何年か分からぬが、父母ともに早く歿し、仍つて、之を追想して、この詩を作つたのである。それから、風樹は、韓詩外傳に「孔子、行いて哭聲の甚だ悲しきを聞く、孔子曰く、驅れ、驅れ、前に賢者あり、と。至れば、皐魚なり。褐を被り、鎌を擁して、道傍に哭す。孔子車を避けて、これに言うて曰く、子は喪あるものに非ず、何ぞ哭するの悲しきや。皐魚曰く、吾、これを失ふこと三なり。吾、少にして學を好み、天下を周流す、而して、吾が親死す、一失なり。その志を高尚にし、庸君に事へず、而して、晩に成るなし、二失なり。少にして交游を失ひ、親友に寡し、三失なり。樹靜ならむと欲するも風息まず、子養はむと欲するも親逮ばず、往いて見るを得ざるものは親なり。吾、請ふ、これより辭せむ、と。立ちながら哭して死す。孔子曰く、弟子これを識るせ、以て誡むるに足る、と。ここに于て、門人辭して、歸つて親を養ふもの十有三人」とあつて、卽ち亡き親を思ふことの故事である。

【詩意】 朝風の飄然として吹き至るにつけて、木の搖すれるを見ると、われも自然と親を思ふ心を起す。夕風の烈烈として吹きすさび、木が逆に動くを見ると、われも自然と親を思ふ心の彌增さるを覺える。かくの如く、わが親を思ふことは、朝夕絶えない。さはれ、木の風あるは、猶ほ止む時あるも、わが親なきは、再び得ることも出來ず、まことに、便ないことである。

【餘論】 通篇、すべて至情に本づき、その特質上、敢て工拙を論すべきものではないが、琴曲として見ると、韓愈などと比較することも出來ぬから、いかにも、慊らず、以下三首いづれも同樣である。

之荊操

之荊操

(一)粤我有土。岐山之下。
ここに我土あり、岐山の下。

執是營之。維我考(二)祖。
孰れか是れ之を營む、維れ我が考祖。

今我于(三)邁。自岐徂荊。
今我れ于に邁き、岐より荊に徂く。

豈不懷歸。念我弟兄。
豈に歸るを懷はざらむや、我が弟兄を念ふ。

民勿我思。我斯(四)安只。
民、我を思ふ勿れ、我斯れ安し。

國已有後。先(五)君季子。
國、すでに後あり、先君の季子。

【字解】【一】寧　ここにと訓すべし。【二】考祖　父と祖父、太王と古公亶父とを云ふ。【三】于邁　ここに往く。【四】斯安　平安無事なること。【五】先君　亡父に同じ。

【題義】原注に「至德廟は、閶門內に在り、泰伯を祀るなり。余、その德を思うて之荊操を作る」とある。泰伯の事實は、史記吳太伯世家に「吳の太伯、太伯の弟仲雍は、皆、周の太王の子にして、季歷の兄なり。季歷、賢にして、聖子昌あり。太王、季歷を立てて、以て昌に及ぼさむと欲す。ここに于て、太伯・仲雍、荊蠻に奔り、文身斷髮、用ふべからざるを示す」とある。

【詩意】ここに、我が周家は、岐山の下に領土を持つて居る。誰か之を經營したかといへば、我が祖父古公と我が父太公と、二人の大功績である。今我等兄弟、ここを立ち去り、岐山の麓から、遠く南方荊蠻の地に赴いた。もとより、故國に歸りたく無い譯でもなく、わが弟の事は、決して忘れぬ。しかし、故國の人民どもよ、わが事を案じるにも及ばず、われは、荊蠻の地に來つて、至極安泰無事である。それから、故國では、ちやんと相續する人があるので、先君の末子季歷こそ、實に其人である。

【餘論】太伯廟が岐山の下に在つて、そこで作るのならば、これでも善いが、生憎、吳地で作つたのであるから、その弟を避けたことは、あつさり片づけて、吳地に於ける開拓の功績を歌つた方が、至當ではあるまいか。

登丘操

驅車兮與馬。
蹇君行兮胡爲乎在中野。
登彼兮崇丘。下茫茫兮九州。
思君子兮不得與駕以遊。
山有出雲兮木亦有柯。
我將歸兮憂之如何。

登丘操

車と馬とを驅れ、
蹇として、君行いて胡すれぞ中野に在る。
彼の崇丘に登れば、下は茫茫たる九州、
君子を思へども、與に駕して以て遊ぶことを得ず。
山には出雲あり、木にも亦た柯あり、
我、將に歸らむとして、憂を如何。

【字解】【一】蹇　足なへといふが本義で、步行の困難なること、楚辭の九歌に蹇將憺兮壽宮とある。【二】中野　野中に同じ。【三】崇丘　高い岡。【四】九州　支那全土、左傳に「茫茫たる禹蹟、畫して九州となす」とある。【五】與駕　同車する。【六】出雲　湧き出づる雲。

【題義】原注に「靑邱に登り、懷ふことあつて作る」とある。靑邱は、作者二十三歲の時から居た處で、地は吳淞江上に在り、甫里志に「鄕村の西北境の靑邱、高翰林の居宅あり」とある。

【詩意】車馬を驅つて、快走したら善からう。如何なれば、君は、とぼとぼと、さも步き惡い樣な風をして、野中にうろついて居るのか。傍人から見たら、どんな樣子であつたらう。やがて、彼の靑邱

と呼ぶ高い岡に登つて四顧すれば、茫茫たる九州は、脚下に見える。われは、同心の友を得、同車して、この九州各地を遍歷したいと思ふが、それも出來ない。山には湧き出づる雲あり、木木は、枝あつて、始終相伴うて居るのに、われのみは、孤獨である。そこで、今山を下つて歸らうとしても、憂思悄然として、自ら之を消遣することが出來ない。

【餘論】通篇、その身の孤寂伴なきを嘆嗟したのである。

望歸操

（望歸操）

兒旦(一)而出于山之麓兮。
兒旦にして出づ、山の麓に。

兒夕不歸。在虎之腹兮。
兒夕にして歸らず、虎の腹に在り。

我往無所。榛(二)蒙(三)蘢被谷兮。
我往くに所なし、榛蒙蘢として谷に被る。

嗟爾耽(四)耽。已飽我豕(五)犢兮。
嗟、爾耽耽、すでに我が豕犢に飽く。

穴(六)亦有子。胡(七)寧使我獨兮。
穴にも亦た子あり、なんぞ我をして獨ならしむる。

【字解】【一】且而出　朝早く出かける。【二】榛　はんの樹。【三】蒙蘢　木の茂る貌。【四】耽耽　睨らまへて居る貌、易に虎視耽耽、其欲逐逐とある。【五】豕犢　豚と小牛。【六】穴亦有子　穴の中には虎の子が居る。後漢書班超傳に「虎穴に入らざれば虎子を得ず」とある。【七】胡寧　二字で何ぞと訓すべし。

【題義】原注に「里人周復の子、虎に死せしを哀んで作る」とある。望歸とは、其子の歸るを待ちぼけて居るといふ義。この詩は、周復に代つて作つた樣になつて居る。

【詩意】わが兒は、朝早く山の麓に出かけたが、日暮に成つても歸らず、虎に食はれて、その腹中に葬られたといふことである。されば、これを尋ねることも出來ず、見わたす限り、榛の木が生ひ茂つて、谷に一ぱいになつて居る。ああ、汝、虎は、八方を睨めまはし、從來わが豚や牛に飽き、そして今度は、我が兒を取つて食つたものと見える。しかし、汝の穴の中には子が居て、汝とても、親子の恩愛は知つて居るであらうに、如何なれば、わが子を食つて、われを孤獨にしたのであるか。

【餘論】結末二句は、恩愛の上から、虎を詰責したので、いかにも理義剴切である。

辭

望虞山辭

（虞山を望むの辭）

虞(一)山峩(二)峩兮出雲油(三)油。
虞山峩峩として、出雲油油たり。

胡斂(四)其施兮弗雨九州。
胡ぞ其施を斂めて九州に雨らさざる。

下有蛟龍兮海波橫流。
下に蛟龍あり、海波橫流す。

誰使子來兮從(五)伯氏以游　誰か、子をして來り、伯氏に從つて以て游ばしむる。

(六)朝于隮兮望(七)岐周。　朝にここに隮つて、岐周を望む。

國有(八)祀兮又何求。　國に祀あり、又何をか求めむ。

(九)唐虞逝兮道阻修。　唐虞逝いて道阻修。

(一〇)慚德興兮干戈日休。　慚德興つて、干戈日に休す。

我思(一一)夫人兮心(一二)焉孔憂。　我、かの人を思ひ、心焉に孔だ憂ふ。

【字解】【一】虞山　題義の條を見よ。【二】峩峩　險しく聳ゆる貌。【三】油油　もくもくと湧き出づる貌。【四】斂其施　易に雲行雨施とある。雲から下土に施すのが雨、その施すことを止めて、雨が降らぬといふ意。【五】伯氏　兄、卽ち泰伯を指す。【六】朝于隮　朝早く虞山に登る。【七】岐周　岐山の麓なる周國。【八】有祀　後繼者がある。【九】唐虞　帝堯陶唐氏と帝舜有虞氏、卽ち堯舜。【一〇】慚德　心中自ら慚づる樣な所行、書の仲虺之誥に「成湯、桀を南巢に放ち、惟れ慚德あり」と見ゆ。【一一】夫人　かの人、虞仲を指す。【一二】焉孔憂　ここに甚だ憂ふと訓すべし。

【題義】辭は楚辭、これは南方の原始的詩形たる楚辭に擬したのである。原注に「常熟縣北に在り、虞仲の隱處なり、爲に望虞山辭を作る」とあり、一統志に「一名海隅山」とある。虞仲は卽ち泰伯の弟仲雍で、後に虞の地を有せしが故に虞仲といつた。なほ、その詳は、前の之荆操を參看して貰ひたい。

【詩意】虞山は、峩峩として、高く險しく、雲油油として湧き出でる。しかも、その雲は、下土に施すことをせず、支那の全土に雨を降らさない。丁度、虞仲に盛德あるも、この一小地方に感化を與へただけで、天下の廣きと絕えて相關せざるが如きものである。山頂より下を覗くと、海波橫流し、そこには蛟龍が出沒して居る。誰か、子をして此に來り、兄の泰伯に從つて一緖に居らしめたのであるか。おもふに、朝に此山に登り、顧みて岐山の麓なる故國を望んだであらうが、周には、れッきとした後繼者があつて、その國家は、愈よ盛に成つて行くから、何も外に希望することはない。堯舜は、すでに逝いて、幽冥相隔り、路遠くして之に卽くことは出來ない。次に、成湯は、其君の桀を放逐して、慚德はじめて興つたが、それでも、干戈は直に止んで、太平の世と成つた。ここに、吾は、これ等の古聖人を思ひ、末俗の澆薄を見て、心中甚だ憂慮に堪へられない。

【餘論】前の之荆操に比すると、その構想は、まさしく一境を進めて居るし、誰使子來兮從伯氏以游の一句がある爲に、愈よ虞仲その人に適切に成つて來た。これ等は、流石に意を用ひた處で、さうでもしないと、太伯と區別するところが無いといふ虞がある。

放鶴辭

放鶴辭

放鶴去、當高飛。
鶴を放つて去る、當に高く飛ぶべし。

啄莫爭雞（一）鶩食。
啄むも、雞鶩の食を爭ふ莫れ。

游莫近虞（二）羅機。
游ぶも、虞羅の機に近づく莫れ。

雲（三）山海嶠堪來往。
雲山海嶠、來往するに堪へたり。

明月千秋待爾歸。
明月千秋、爾の歸るを待たむ。

【字解】【一】雞鶩　鶩はあひる。【二】虞羅機　虞羅は、卷一空城雀に見ゆ。虞人と羅氏、ともに鳥か捕ることを掌るもので、今でいへば主獵官、機は鳥を捕ふる仕掛。【三】雲山海嶠　雲に聳ゆる山や、海邊に峙つ岡。

【題義】原注に「支遁の放鶴亭に登つて作る」とあり、姑蘇志に「放鶴亭は、支硎山の高峰に在り、晉の高僧支遁、鶴を放つ處」とある。元來、放鶴とは、鶴を飼ひ慣らして時時これを籠中より放つと、やがて又歸つて來るのであるが、ここのは、今まで飼つて置いたのを放ち遣つたものと見える。

【詩意】籠中の鶴を放つて去らしめたから、その心の儘に、高く飛ぶが善い。そして、啄むにしても、雞や鶩の食を爭つてはならぬし、游ぶにしても、虞人羅氏の設けて置く機械に近づいてはならぬ。汝は、もとより高潔の鳥であるから、雲山海嶠を往來すべく、そして、千秋の後、明月皎皎たる夜、汝の歸つて來るのを待つて居るから、それまでは、心長閑に、その身を傷けぬ樣に翺翔して居るが善い。

【餘論】結二句は、杳然として神遠く、まさしく、題に相應しい。

弔伍子胥辭

弔伍子胥辭
伍子胥を弔ふの辭

覽勾（一）吳之故（二）墟兮。
勾吳の故墟を覽れば、

灌（三）莽鬱其蘢（四）蔥。
灌莽鬱として蘢蔥たり。

館（五）娃廢而（六）爲沼兮。
館娃、廢して沼となり、

歸（七）伍胥之遺宮。
歸たる伍胥の遺宮あり。

奚（八）千祀而勿毀兮。
奚ぞ、千祀にして毀つなき、

緊（九）若（一〇）人之死忠。
緊、若人の忠に死すればなり。

昔窮（一一）逋而渡江兮。
むかし、窮逋して江を渡り、

奮（一二）孤跡於羇旅。
孤跡を羇旅に奮ふ。

既入（一三）郢而雪恥兮。
すでに郢に入つて恥を雪ぎ、

又棲（一四）越而攘侮。
又越を棲まして侮を攘ふ。

【字解】【一】勾吳　史記吳世家に「太伯の荊蠻に走る、自ら勾吳と號す」とあつて、注に「勾吳は、太伯、はじめて居るところの地名」とある。【二】故墟　古りたる跡。【三】灌莽　灌木と雜草と交つた藪。【四】蘢蔥　こんもりせる貌、揭傒斯の詩に草樹香蘢蔥とある。【五】館娃　宮名、蘇州府志に「館娃宮は、靈巖山上に在り、前は姑蘇臺に臨む。吳人、美人を謂うて娃となす、蓋し西施を以て名を得たり」とあつて、西施を入れて置く宮殿の義。【六】廢而爲沼　左傳に「吳王夫差、越を夫椒に

使彼吳之強大兮。
彼の吳を強大ならしむる、

非夫子而孰爲。
夫子に非ずして、孰れか爲さむ。

何夫差之自喜兮。
何ぞ夫差の自ら喜ぶ、

遽忽(一五)戒而荒娭。
遽に戒を忽にして、荒娭する。

陳昌(一六)言之悃(一七)款兮。
昌言の悃款を陳ぶるは、

寔不忍視國之阽(一八)危。
寔に國の阽危を視るに忍びざればなり。

衆以子爲巨(一九)信兮。
衆、子を以て信じがたしと爲し、

肆讒辭之詆欺。
讒辭の詆欺を肆にす。

夫豈不能全身遠適以自庇兮。
夫れ豈に身を全うして遠く適き、以て自ら庇する能はざらむや。

顧先王之舊德。
先王の舊德を顧る、

卒待隕(二〇)而抗(二一)言兮。
卒に隕を待つて抗言し、

恨終不能悟君之變(二二)惑。
恨むらくは、終に君の變惑を悟す能はず。

載(二三)鴟夷兮浮游。
鴟夷を載せて浮游し、

魂惸(二四)惸兮在中流。
魂惸惸として中流に在り。

江(二五)神念子兮哀憤。
江神、子が哀憤を念ひ、

鼓(二六)洪濤於高秋。
洪濤を高秋に鼓す。

嗟君子之出(二七)輔兮。
嗟、君子の出でて輔くる、

孰不願爲伊(二八)皐。
孰れか伊皐たるを願はざらむ。

使言從而志行兮。
言從ひ志行はしめば、

致雍(二九)熙之陶陶。
雍熙の陶陶たるを致さむ。

何齟(三〇)齬而多患兮。
何ぞ齟齬して患多き、

惟重(三一)華之不可以屢遭。
惟だ重華の以て屢ば遭ふべからず。

敗る。越子、大夫種をして成を行はしむ、伍員諫むれども聽かず、退いて人に告げて曰く、越、十年生聚、十年敎訓、二十年の外、吳は其れ沼とならむか」とある。【七】歸伍胥之遺宮　伍子胥の故廟だけが巍然として殘つて居る。【八】千祀　千年に同じ。【九】緊　嗚呼と訓ずべし。【一〇】若人　かくの如き人。【一一】窮迫　命窮して逃亡する。史記伍子胥傳に「鄭の定公、子產と太子建を誅殺す。建、子あり、名は勝。伍胥懼れ、乃ち勝と倶と吳に奔る。昭關に至る。これを執へむと欲す。伍胥、遂に勝と獨身步走、幾んど脫するを得ず、追ふもの後に在り、江に至る。江上に一漁夫あり、船に乘せて、乃ち伍胥を渡す。すでに渡る。その劍を解いて曰く、この劍、直百金、以て父に與へむ。父曰く、楚國の法、伍胥を得るものは、粟五萬石、爵執珪を賜ふ、豈に徒だ百金の劍のみならむや、と。受けず」とある。【一二】脊孤跡於羈旅　羈旅の人でありながら、獨り用ひられて、成り上つたといふ意。本傳に「闔閭、すでに立ち、伍員を召して行人となし、ともに國事を謀る」とある。【一三】入郢而雪恥　本傳に「吳兵の郢に入るに及び、子胥、昭王を求む、すでに得ず、乃ち楚の平王の墓を掘つて、その尸を出し、これを鞭つこと三百」とある、郢は楚の都、昭王は平王の子。【一四】棲越而擯侮　擯侮とは、兵力の盛なることを示して曩に侮られたる恥を除く。本傳に「二年の後、越を伐ち、越を夫椒に敗る。越王勾踐、乃ち餘兵五千を以て、會稽の上に棲む」とある。【一五】忽戒而荒娭　戒を忽にして勝手に游び喜

(三二)鄂侯諍而就醢兮。
(三三)龍逢諫而見屠。
蓋自古而有之兮。
匪夫子獨罹(三四)乎此辜。
身雖歿而義安兮。
又舍是將焉適。
彼循(三五)默而苟容兮。
寧獲免乎泚(三六)顙。
想子猶念夫(三七)故都兮。
或乘雲而來歸。
顧荊棘之多露兮。

鄂侯は、諍うて醢に就き、
龍逢は、諫めて屠らる。
蓋し古しへより之あり、
夫子獨り此辜に罹るに匪ず。
身歿すと雖も義安く、
又これを舍てて將た焉くにか適かむ。
彼の循默して苟くも容るる、
むしろ顙に泚するを免るるを得むや。
想ふ、子が猶ほ夫の故都を念ふ、
或は雲に乘じて來り歸る。
荊棘の露多きを顧みては、

ぶ。六書故に「婡・嫛・婗・誒、過ず」とあつて、婡は嬉むといふ意。左傳に「呉、將に齊を伐たむとす。越子、その衆を率ゐて、以て王に朝し、列士に及ぶまで、皆饋賂あり、呉人皆喜ぶ、子胥懼れて曰く、これ呉を豢ふなり」とある。【一六】昌言　道理ある言辭、爲になる言葉。【一七】悃款　誠心誠意。【一八】阽危　危急。【一九】巨信　信じがたし。【二〇】待隕　身の亡ぶるを豫期してといふ意。【二一】抗言　君の意に戻つて諫を進める。【二二】嬖忞　嬖人に忞溺する、嬖人は太宰伯嚭等を指す。【二三】載鴟夷　卷一行路難の第二に見ゆ、呉越春秋に「子胥、劍に伏して死す。呉王、盛るに鴟夷の器を以てし、これを江中に投ず」とある。鴟夷は革囊。【二四】悰悰　よるべなき貌。【二五】江神　水神。【二六】鼓洪濤于高秋　呉越春秋に「子胥死す。呉王、これを江中に投ず。因つて、流に隨つて波を揚げ、潮に隨つて來往し、蕩激して岸を崩す」とあり、范成大の夫差廟詩に千齡只有忠臣恨、化作濤江雪浪堆とある。【二七】出輔　出でて君を輔佐する。【二八】伊皐　伊尹と皐陶。【二九】雍熙之陶陶　太平の世の陶陶たる樂。【三〇】齟齬　說文に「齒の相値はざるを齟齬といふ」とあつて、くひ違ふ。【三一】重華　舜の字、離騷に就重華而陳詞とある。【三二】鄂侯諍而就醢　史記殷本紀に「九侯女あり、好し、これを紂に入る。九侯の女、淫を意ばず。紂、怒つて之を殺し、九侯を醢にす。鄂侯、これを爭ふこと彊く、これを辨ずること疾し、幷せて鄂侯を脯にす」とある。醢は醬漬、脯は乾物、この文で見ると、鄂侯は脯に成つたのであつて、醢に就くといつたのは、蓋し青邱誤記の失であらう。尤も、ここに脯の字を使ふと、あとの屠辜と韻が協ふ樣になつて、あまり、こちたくなるから、わざと之を避ける爲にしたのかも知れない。【三三】龍逢諫而見居　史記夏本紀に「關龍逢、進んで諫めて曰く、人心すでに去り、天命祐けず、盍んぞ少しく悛めざる。桀曰く、吾、天下を有す、天の日あるが如し。日亡ぶれば吾乃ち亡びむのみ、と。龍逢立つて去らず、桀、怒つて遂に之を殺す」とある。【三四】罹乎此辜　この無實の罪に罹る。【三五】循默而苟容　君命といへば、御無理御尤もで、これに循從し、決して反抗せず、以て苟くも容れられむことを求める。【三六】泚顙　泚は汗の滲み出る貌、額に汗をかく。【三七】夫故都　むかしの呉都、卽ち蘇州を指す。【三八】攬涕　涙を拂ふ。【三九】歔欷　欷歔に同じ、すすり泣きをする。【四〇】直道　正直の道。【四一】陳詞而表烈　言葉を陳べて、伍子胥の忠烈無雙なるを表出する。

兮。

應攬(三八)涕而歔欷(三九)。
余亦何爲而感慨
兮。
懼直(四〇)道之墜也。
聊陳(四一)詞而表烈兮。
亦邦(四二)人之志也。

應に涕を攬うて歔欷せしなるべし。
余、亦た何すれぞして感慨する、
直道の墜つるを懼るるなり。
聊か詞を陳べて烈を表す、
亦た邦人の志なり。

【三】 郡人　吳地の人。

【題義】 原注に「子胥の廟は、盤門内に在り、余、その忠を哀んで、弔伍胥辭を作る」とある。伍子胥は、史記にも本傳があるから、ここに縷述するまでもないが、一寸概要だけを述べる。伍員、字は子胥、父を奢、兄を尙といつた。伍奢は、太子建の傅であつたが、平王に殺され、次いで、兄の尙も誅せられた。そこで、子胥は、楚より走り、諸國を流浪せし後、太子建の子の勝と吳國に入つた。この時の吳は、楚と年來不和であつたから、その國の力を借りて、仇を楚に報じやうと思つて居た。この時の吳王は僚といふ人であつたが、公子光といふものが、立たむことを冀うて居たから、子胥は之を知り、專諸を公子光に進め、やがて公子光は、專諸をして吳王僚を殺さしめて、自ら卽位した。これが卽ち吳王闔閭。そこで、闔閭は、子胥を登用し、その言を聽いて楚を討ち、大軍郢に入り、昭王出奔し、子胥は、平王の墓を發いて、その屍を鞭つこと三百、以て其仇を報いた。その後、吳は越と難を構へ、闔閭は創を被つて死んだから、子胥は、その子の夫差を助けて越を討ち、越王勾踐を會稽に追ひ込んだ。この時、子胥は越を滅ぼす積りであつたが、越王は、西施といふ美人を獻じ、仍つて、和を結んで其國に歸つた。その後、越王は、膽を嘗め、薪に臥し、范蠡・大夫種等を用ひて、必ず吳を滅ぼさうとしたが、夫差は、宴游日を送り、子胥の諫を聽かず、はては、子胥に死を賜ひ、やがて遠からずして、吳は亡びて仕舞つた。伍子胥が楚に報いたのは、あまり手きびしいが、終生、夫差に忠ならむとし、却つて讒者の爲に身を喪ふ樣になつたのは、まことに氣の毒の至、ここが後人の同情を寄するところで、靑邱の此詩も、矢張、さういふ考で作つたのである。

【詩意】 ここに、勾吳の古りたる遺跡を尋ねると、灌木雜草が、こんもりとして、何處とも分からず、さしも美美しかりし館娃宮も、荒廢の餘、沼となつて仕舞つたが、伍子胥の廟のみは、巋然として殘つて居る。何故に、千年の末になつても、毀つことなく、かくの如く存在して居るかといへば、子胥が忠義の爲に死んだといふ其點が、後人の同情を得て居るからである。おもへば、その初、子胥が散散ひどい目に遭つて、楚から逃げ出した後に、江を渡つて、この吳國に來り、羇旅の身を以て、獨り登用せられて、次第に立身し、はては、吳の力を借りて楚を討ち、郢に攻め入り、平王の屍を鞭つて、往日の恥を雪ぎ、又越王勾踐を會稽山に追ひ込んで、從來の侮を拂ひ淸めた。かくの如く、吳國をして俄に强大ならしめたのは、夫子の力に非ずして、誰が爲したのであらう。然るに夫差の驕傲、自ら喜べる、遽に宴安鴆毒、容易に國を亡ぼすといふ戒をも忘れて、終日嬉游、丸で前日とは打つて變つた樣に成つて仕舞つた。そこで、子胥が誠心誠意から昌言を陳べたのは、家國の危急に迫まれるを視るに忍びずして、此に及んだのであるが、衆人の昏愚なる、子胥の言を以て信ずるに足らぬものとし、さまざまに讒言を構へ、子胥を詆つて追ひ退けやうとした。この時に當つて、子胥たるもの、早く吳國に見きりをつけて、身を全うし、遠くに去つて、自ら其身を庇ふことが出來なかつたのでも

ないが、先王闔閭の舊德を懷へば、さうも成らず、遂に其身を亡ぼす覺悟で、極力抗言して、夫差に諫を納れたが、恨むらくは、嬖人どもに荒惑されて、性根の腐りはてた夫差をして、自ら悟らしめることが出來なかつた。かくて、子胥が死せし後は、鴟夷の革囊に屍を盛られて、波のまにまに、江水に浮游し、さしもの英魂、よるべなく中流に漂つて居た。すると、江神も、臨終の際に於ける子胥の哀激悲痛を氣の毒に思ひ、秋闌なる頃、江中に大浪を捲き起し、その餘憤は、今に盡きない。ああ、君子たるもの、出でて其君を輔佐するに際しては、誰か古しへの伊尹皐陶の如くなるを願はざるべき。もし言從はれ、志行はるるを得ば、太平の世の陶陶たる樂を致すことは、申すまでもない。然るに、事、志と齟齬する場合に於ては、憂患頻りに生じ、加ふるに、舜の如き聖主は、屢ば遭ふに由なく、世は概ね闇君であるから、多くの場合には、その身の破滅となるので、鄂侯は、紂と爭うて鹽漬にされ、關龍逢は、桀を諫めて殺されて仕舞つた。君に忠でありながら、身を殺すといふことは、古しへより、いくらも、その例のあることで、何も子胥ひとりが、この無實の罪に罹つたといふ譯でもない。しかし、身は死んでも、大節儼然として存する上は、この外に取るべき道なく、これを舍てて、何處へ往くことも出來ず、かの君の仰せといへば、御無理御尤もで、恐れ入つて服從し、苟くも容れられむことを求める樣な手合は、子胥の風を聞くと、愧ぢ入つて、額に汗することを免れぬであらう。子胥の精靈は、古しへの吳都を懷かしく思ひ、或は雲に乘つて歸り來ることもあらうが

滿目の荊棘、露を帶び、ひどく四邊の荒廢して居るのを見ると、定めて、涙を拂ひつつ、啜り泣きをするであらう。予も亦た此に來つて感慨自ら禁せざるは、何の爲めかといへば、正直の道が地に墜ち、末世唯だ虛僞を事として居るからである。又、聊か此につまらぬ言詞を陳べて、子胥の忠烈を表出したのは、吳人の志に從つて、崇拜敬虔の餘に出でたのである。

【餘論】覽㆓勾吳之故墟㆒兮より緊若人之死㆑忠に至るまでは、その廟の儼存をいひ、昔窮逋而渡㆑江兮より肆㆓讒辭之詆欺㆒に至るまでは、子胥の生涯を簡潔に敍し、夫豈不㆑能㆓全㆑身遠適以自庇㆒兮の四句は、子胥の吳國を去らざりし苦衷を述べて、反照的に其心事を忖度したので、波瀾橫生の妙がある。載㆓鴟夷㆒兮浮游の四句は、子胥の死後をいひ、嗟君子之出輔兮より匪㆔夫子獨罹㆓乎此辜㆒に至るまでは、忠臣の禍を免れざるを以て世の常態となし、ひとり、子胥にのみ限らざることを言ひ、身雖㆑歿而義安兮の四句に接して、否運に泣ける子胥を慰め、想子猶念㆓夫故都㆒兮の四句は、子胥の英靈長しへに泯びず、しかも故都の荒廢を見ては、悽愴の想に堪へぬだらうといひ、余亦何爲而感慨兮の四句は、此作の決して徒爾ならざるを言うて收束としたのである。全篇かくの如く、段落分明、層層遞下し、竪說橫論、表裏より子胥の心事を寫し出し、些の遺漏なく、人をして成程と頷首せしめるは、作者の手腕である。殊に其體の古きは、自然その內容と調和して、一層の妙趣を覺えしめる。

三言

梧桐園

梧桐園

桐花香。桐葉冷。　桐花香し、桐葉冷かに、

生宮園。覆宮井。　宮園に生じ、宮井を覆ふ。

雨滴夜。(一)風驚秋。(二)　雨は夜に滴り、風は秋に驚く、

(三)鳳不來。君王愁。(四)　鳳來らず、君王愁ふ。

【字解】【一】雨滴夜　梧桐の雨が夜中滴りて聲を爲す。孟浩然の詩に微雲淡河漢、疏雨滴梧桐、とある。【二】風驚秋　桐の一葉を吹き落す風が秋を驚かす、李中の詩に門巷涼秋至、高梧一葉驚とある。【三】鳳不來　鳳凰は梧桐の實でなければ食はないといふので、桐に鳳はつき物である。【四】君王愁　當時の童謠に、梧宮秋、吳王愁といへるを轉用す。

【題義】三言は、毎句三字で出來て居る詩といふ義。梧桐園は、原注に「吳宮に在り、夫差の園なり」とある。いづれ、蘇州城内に在ると見えるが、作者は、その遺跡を過ぎて、古しへを弔つたのである。

【詩意】桐の花は香ばしく、桐の葉は冷かである。この桐は、吳王の宮園に生じ、宮中の井の上に覆ひ被さつて居る。秋になると、葉を打つ音がして、雨は夜もすがら滴り、又一葉が落ちると、風の音が秋を驚かす樣である。しかも、桐にはつき物と稱せらるる鳳凰は、遂に來らず、君王も、流石に愁に堪へなかつたが、これは、やがて亡國の兆候であつた。

【餘論】四句づつで韻を換へ、前四句は總說、後四句は暗に吳國の末運に及んで、憑弔の意を寓したのである。通篇、悽惋の趣を以て勝つて居る。

三四言

王敬伯歌

王敬伯の歌

舟初維。(一)琴始薦。(二)　舟、初めて維ぎ、琴、始めて薦む。

(三)驛亭邊。夜相見。　驛亭の邊、夜相見る。

歌宛轉。(四)情綢繆。(五)　歌宛轉、情綢繆。

(六)解環珮。彈箜篌。　環珮を解いて、箜篌を彈ず。

歌易闌。(七)情難歇。　歌は闌なり易く、情は歇み難し。

江波寒。墮明月。　江波寒くして、明月墮つ。

(八)綠壺再傾。芳音欲違。　綠壺再び傾く、芳音違はむと欲す。

譬彼林鳥。逢晨各飛。　かの林鳥の、晨に逢うて各〻飛ぶに譬ふ。

(九)羅衣沾レ霜。(一〇)城烏忽起。
明日相思。孤棹千(一一)里。

羅衣、霜に沾ひ、城烏忽ち起つ。
明日相思ふ、孤棹千里。

【字解】【一】初緒　緒は繫ぐ。【二】始薦　薦は進む、ここでは琴を彈じ始めるといふ意、謝莊の月賦に芳酒登、鳴琴薦とある。【三】驛亭　驛中の亭子、ここでは通波亭を指す。【四】宛轉　前に見ゆ、歌の調の巧なること、ここでは歌の題名にかけて云ふ。【五】綢繆　綿綿としてまとひ合ふ。【六】解環珮　腰の飾を解き去る。韓愈の華山女に抽レ釵脱レ釧彈二箜篌一とある。【七】易闌　闌は盛りを過ぎて終に近づくこと。【八】綠壺　綠酒の壺。【九】羅衣沾霜　謝莊の月賦に微霜沾二人衣一とある。【一〇】城烏忽起　柳宗元の楊白花に哀歌未レ斷城烏起とある。【一一】千里　世說に「嵇康、呂安と善し、一たび相思ふ毎に、千里駕を命ず」とある。

【題義】三四言は、三言の句と四言の句とが交つて出來て居る詩。原注に「敬伯は、晉時の人。かつて、舟を通波亭下に泊して琴を理む。美人あり、來つて共に飮み、小婢に命じ、箜篌を彈じて宛轉詞を歌ふ。將に曉ならむとし、各〻物を贈つて別る。後に、是れ鄰船吳令の亡女麗華たるを知るなり」とある。なほ、その詳は、卷一宛轉行・神女宛轉歌の條に注して置いたから、參照して貰ひたい。

【詩意】王敬伯が船を繫ぎ、琴を彈じ始めたのは、通波亭であつたが、やがて、美人が來て夜相見え、先づ宛轉の歌を唱へて、綢繆の情を寄せ、又侍女に命じ、環佩を解いて箜篌を彈せしめた。歌は終り易きも、情は歇み難く、忽ちにして江波曉に寒く、殘月西に沈む頃になつた。そこで、綠酒の壺を再び傾けたが、逢ふは今宵かぎり、これから芳音長しへに違ふことになり、たとへば、彼の林中の鳥が、朝になると、各〻東西に分飛すると同じである。羅衣は霜に溼され、城上の烏が啼き出して、愈よ別れとなつた。明日相思ふとも、孤棹千里、なかなか尋ねて行くことも出來ず、まことに呆氣ないことである。

【餘論】結末四句は、殊に餘情に富み、神韻綿渺として盡きざる底の趣がある。

309
65

終

續國譯漢文大成

文學部　七十五

309
65

帙入

始

吉田待郎氏 寄贈本

續國譯漢文大成

文學部第七十五册（第十九帙の三）

高靑邱詩集 一の三

309
65

高青邱集　巻三

五言古詩

擬古十二首

(一)蔓蔓牆下李。芃芃(二)陂(三)中麥。
浩浩望遠(四)塗。悠悠思行客。
客行歳(五)已盈。紆(六)鬱傷我情。
始知失羣鴻。不若求(七)友鶯。
登山知天高。臨流識川(八)阻。
不遣(九)懷同心。那知別離苦。
別離不可久。寂寞不可守。
自傷紅顏子。相思成皓(一〇)首。

擬古　十二首

蔓蔓たる牆下の李、芃芃たる陂中の麥。
浩浩として遠塗を望み、悠悠として行客を思ふ。
客行、歳、すでに盈ち、紆鬱として我が情を傷ましむ。
始めて知る、羣を失ふの鴻は、友を求むるの鶯に若ざるを。
山に登つては天の高きを知り、流に臨んでは「川の阻たる」を識る。
懷を同心に遣らざれば、那ぞ別離の苦を知らむ。
別離久しくすべからず、寂寞守るべからず。
自ら傷む紅顏の子、相思、皓首を成すを。

朝日如不レ晩、行人會當レ返。　朝日、もし晩れずんば、行人、會ず當に返るべし。

【字解】【一】蓁蓁　潘岳の笙賦に歌二棗下之蓁蓁一とあつて、その注に「蓁蓁は聚まる貌」とある。【二】芃芃　詩經に芃芃其麥とあつて、芃芃は茂る貌。【三】陂中　陂は隄。【四】遠塗　塗は途、即ち遠道、遠路。【五】歲已敍　すでに一年に成つた。【六】紆鬱　もやもやとして晴れやらぬ貌。【七】求友鶯　詩經に嚶其鳴矣、求二其友一聲とある。【八】川阻　川が隔つ、即ち障害となる。【九】遣懷同心　易に二人同レ心、其利斷レ金、同心之言、其臭如レ蘭とある。同心の友に因つて、我が愁情を消す。【一〇】皓首　白頭に同じ、白髮頭。

【題義】以下、すべて五言古詩。擬古は、古詩に擬することで、古詩とは漢の古詩十九首を指す。文選を見ると、陸機・陶潛等、古詩十九首に擬して、擬古詩と稱して居る。その注に「擬は比なり、古志に比し、以て、今情を擬す」とある。勿論、この詩は十九首中、どの詩に擬したといふ樣に、首首、判然する譯に行かぬが、大體に於て、その構想と風調とを眞似たのである。

【詩意】牆の近くに在る李も、花が落ちて實が出來、蓁蓁として、數多く聚まつて居るのが見えるし、隄で圍まれた畑地の麥も、芃芃として茂り合ひ、今にも穗が出さうになつた。時しも、初夏の季節。ここに、われは、目を放ちて、浩浩として遠路を望み、心悠悠として、行客を思つて居る。わが友は、旅に出て最早一年にもなり　全く便りの無い處から、わが情を傷ましめて、晴れやらぬ思に惱ましめる。されば、羣を失へる獨りぼツちの雁よりは、友を求めて鳴く鶯の方が、なほ希望に滿ちて居るだけ、賴母しい樣である。山に登れば、天の高きを知るべく、流に臨んでは、川の隔てを爲すを識るべく、その初、同心の友として、我が懷を遣つたればこそ、今日別離の苦痛を知つた譯で、こんな苦痛をする位ならば、むしろ、初めから逢はざらましかばと思ふ位。別れるも善いが、かくの如く久しくなつては、とても遣れ切れないし、寂寞として、ひとり我が身を守るも、殆んど堪へ難い。されば、今まで年若くして紅顏の美を矜つて居たのが、相思の極、一朝にして白髮頭になつて仕舞つた。かの朝に上る太陽にして、暮れることが無かつたならば、行人は、屹度歸るであらう。今の處では、何時歸つて來るといふあてもなく、まことに嘆息に堪へぬ次第である。

【餘論】これを親友を思ふとするも可、遠行の夫を思ふとするも亦た可、いづれにしても、相思絕えずして、愈よ殷なるを寫し出したのである。登レ山知二天高一の四句は、詩經でいふと、賦にして興、天高、行阻、望中の實景であると同時に、語勢の上より、知二天高一識二川阻一に因んで、那知二別離苦一を引き出したので、ここらは、即ち情景融合の妙である。結二句、朝日如不レ晩、行人會當レ返は、絕望の語で、その中に萬斛の痛涙を含んで居る。

(一)嵯峨(二)雲間樓。俯視二(三)層城陰一。　嵯峨たり雲間の樓、俯して層城の陰を視る。

(四)綺戶相(五)洞開。(六)清飈拂二羅襟一。　綺戶、相洞開し、清飈、羅襟を拂ふ。

上有離(七)居婦。哀歌撫絃(八)琴。　上に離居の婦あり、哀歌して絃琴を撫す。

不知中(九)怨誰。掩(一〇)抑一何深。　知らず、中に誰を怨むかを、掩抑一に何ぞ深き。

初爲郢(一一)中唱再奏邯(一二)鄲吟。　初めは郢中の唱を爲し、再び邯鄲の吟を奏す。

不惜努力歌。寫作絕代音。　惜まず、努力して歌うて、寫して絕代の音を作すを。

風吹落君耳。萬里知愁心。　風吹いて、君の耳に落つれば、萬里、愁心を知らむ。

曲盡思寂寥。靑天日西沈。　曲盡きて思寂寥、靑天、日、西に沈む。

安得化彩鳳。飛去巫(一三)山岑。　安んぞ彩鳳に化して、巫山の岑に飛び去るを得む。

【字解】【一】嵯峨　高く聳ゆる貌。【二】雲間樓　雲間に屹立する高樓。【三】層城陰　城壁が幾層にも高くなつて居る其物かげ、杜甫の詩に層城償三華屋一とある。【四】綺戶　雕飾を施した立派な扉。【五】洞開　洞然として開く。【六】淸颸　說文に「颸は扶搖、風なり」とある。扶搖二字の音を促めると颸となり、つむじ風、飄風といふのが本義であるが、又單に風の意味にも用ひてある。【七】離居婦　夫と別れて獨り居る女。【八】絃琴　琴絃に同じ。押韻の都合で、已むを得ず、倒用したのであらう。【九】中怨誰　中は心中。【一〇】掩抑　白居易の琵琶行に絃絃掩抑聲聲思とある。絃を掩ひ抑へる、十分に放つて音を出さぬこと。【一一】郢中唱　宋玉が楚の襄王に答へて「客、郢中に歌ふものあり、その始を下里巴人といふ、國中屬して和するもの數千人」といつた。郢は楚の都。【一二】邯鄲吟　樂府類に「齊二十二曲、邯鄲行あり」と見ゆ。邯鄲は趙の都であるから、その地の歌であらう。【一三】巫山岑　岑は峯に同じ。卷一、巫山高の條に見ゆ。

【詩意】高樓、嵯峨として雲間に聳え、俯して眺むれば、高い城壁の物かげまでも見える位。その樓には、雕飾したる立派な扉があつて、今しも、洞然として豁開し、淸風遠く吹き入つて、羅衣の襟を拂つて居る。この女は、夫に別れた爲に獨居し、悲しい歌を唱へつつ、琴絃を搔き鳴らして居る。その心中、誰を怨むか知らぬが、絃絃掩抑、その聲、低くして咽び入るが如く、思の深いことは、いふまでもない。はじめには、楚地の歌を爲し、二回目には趙都の曲を奏した。もとより、努力を惜まず、おもひ切つて、聲高高と歌ひ出し、世にも類なき音調を爲したが、幸にして、吹く風が持つて往つて、その夫の耳に落ちたならば、萬里の遠きに居ても、此方では心中の愁に堪へずして居るといふことを知るであらう。かくて、數曲を奏し畢れば、寂寥の思、いや增して堪へず、折から、渺渺たる靑天、日は西に沈み、黃昏の景色、一しほ淋しい。あはれ彩鳳に化して、わが夫と共に飛んで、巫山の峯に至り、朝雲暮雨の樂を極めたならばと思ふが、それも及びなき願であらう。

【餘論】不惜努力歌の四句、安得化彩鳳の二句は、極めて巧妙であるが、やや古色を缺きはせぬかと危ぶまれる。

出(一)郭見丘(二)墓。纍(三)纍滿山(四)阿。　郭を出でて丘墓を見る、纍纍として山阿に滿つ。

四海能幾人。逝者何其多。　四海能く幾人ぞ、逝くもの何ぞ其れ多き。

(五)封樹日蕭條。狐狸走(六)蓬科。　封樹日に蕭條、狐狸、蓬科に走る。
英靈無人弔。牧兒暮來歌。　英靈、人の弔ふなく、牧兒、暮に來り歌ふ。
(七)浮華一世中。(八)倏若飛鳥過。　浮華一世の中、倏として飛鳥の過ぐるが若し。
生時不肯飮。死沒將如何。　生時、肯て飮まず、死沒、將に如何せむとする。

【字解】【一】出郭　城郭を出る。【二】丘墓　岡に在る墳墓。【三】纍纍　重なり合ふ、その多きをいふ。【四】山阿　卷一、南山有鳥に見ゆ、山邊に同じ。【五】封樹　封は境界、墓地の境界に植ゑた樹。【六】蓬科　卷一、神仙曲に見ゆ、雜草の生えた土饅頭。【七】浮華　表面ばかり華美なること。【八】倏　忽然。

【詩意】城郭を出づると墓地で、そこには、古い墓が纍纍として重なり合ひ、山邊に一ぱいである。天下の廣き、能く幾人が不死であるか、そして、逝くものは、如何なれば、かくも多いのであるか。墓地の界に植ゑた木木は、日日に蕭條として物さびしく、土饅頭の上には、雜草が生えて、狐狸の類が勝手に走つて居る。ここに埋葬された人の英靈は、誰も來て弔ふものなく、唯だ牧童が日暮に此を通り過ぎて歌ふだけである。おもへば、一生の榮華は、表面だけ立派であるが、倏忽の間に消え去ることは、さながら、飛鳥の過ぐると同じである。されば、誰にしても、生きて居る内に、酒を飮まなければ、死んでから、いくら悔やんでも仕方がない。

【餘論】起四句は、何人も死を免るる能はざるをいひ、次の四句は、墳墓の淒寥たる實況を描き出し、次の四句は、この世に在る間、時に及んで行樂すべしといふ意を述べたので、實は淺薄なる現世快樂主義に過ぎぬが、人人意中の語である處から、一讀感を催し易い。

(一)離離白雲翔。(二)悠悠清川逝。(三)　離離として、白雲翔り、悠悠として、清川逝く。
天地如傳(四)郵。閱人以爲世。　天地、傳郵の如く、人を閱して以て世と爲す。
良時難再得。游樂(五)咸陽中。　良時、再び得がたく、游樂す咸陽の中。
咸陽名都會。衣冠集王公。　咸陽は名都會、衣冠、王公を集む。
(六)南山對(七)魏闕。嘉樹何蘢蔥。　南山、魏闕に對し、嘉樹、何ぞ蘢蔥たる。
(八)九衢(九)十二城。(一〇)逶迤迴相通。　九衢十二城、逶迤迴に相通ず。
(一一)衛霍開(一二)上第。車馬爭春風。　衛霍、上第を開き、車馬、春風を爭ふ。
娛意勿自惜。當至百年終。　意を娛んで、自ら惜む勿れ、當に百年に至つて終るべし。

【字解】【一】離離　詩傳に「離離は、垂るるなり」とあり、何中の詩に所見天離離とある。【二】悠悠　はるかに長き貌。【三】

逝　流れ去る。【五】傳郵　宿つぎ、驛傳に同じ。【六】咸陽　長安の北に在るところから、或は兩地を一緒にして言ふこともある。【七】南山　終南山、長安の南方に在つて、その餘脈、西は太白に在り、東は藍關に至る。【八】魏闕　魏は巍と通じ、長安の帝城を指す。【九】九衢　長安の大道が九條ある、宋之問の長安道に樓開九衢春とある。【十】十二城　十二の子城、卽ち出丸。范成大の詩に燕樹新高十二城とある。【十一】逶迤　めぐりめぐる。【十二】衞霍　衞青と霍去病、漢の武帝の時、ともに功を邊塞に立てて、列侯に封ぜられた。【十三】上第　本邸。

【詩意】仰ぎ望めば、白雲は垂れかかつて空中を飛翔しつつ、その行方を知らず、俯して見れば、淸川の水は、滔滔として流れて居るが、決して返らぬ。人の命の果敢なきも、矢張、この雲、この水と同じである。茫茫たる天地は、さながら、宿つぎの如く、世世人を閱して、決して休む時がない。されば、良時は、二度と得がたいもので、その折だにあらば、咸陽市中に於て、游樂を恣にするが善い。咸陽は、もとより名都會、衣冠をつけたる王公輩を聚め、終南の山は帝城に對し、見わたす限り、見事なる木木は、蘢葱として茂り合ひ、九條の大道、十二の子城は、めぐりめぐつて、はるかに連接して居るし、衞靑・霍去病の如き武功に矜る面面も、ここに本邸を設け、その車馬は、春風の中に爭つて馳逐して居る。かくの如き繁華なる都に在つては、意を娛ましめて十分に滿足し、決して、物惜みをせぬが宜しく、いくら遣つた處で、長くて百年の命、その時が最期で、決して、永續するものではない。

【餘論】天地如二傳郵一の十字は、まさしく名句である。しかし、游樂咸陽中といひながら、その下には、咸陽の帝居侯第を述べただけで、游樂に就いて、少しも具體的に列記しないから、やや物足らぬ心地するのみならず、これでは、筋道が通らぬ樣に成りはせぬか。娛レ意勿二自惜一の二句は、游樂自ら限りあつて、いくら求めても、決して、長く享受すべからざるを言ひ、人をして覺えず、太息せしめる。

東井不レ可レ飲。(一)威弧執能張。(二)　東井、飲むべからず、威弧、孰れか能く張らむ。
虛名竟何用。千古同悲傷。　虛名、竟に何の用ぞ、千古、同じく悲傷。
與レ君初結レ歡。(三)金石比二中腸一。(四)　君と初めて歡を結ぶ、金石、中腸に比す。
恩情忽乖分。(五)相望阻二川梁一。(六)　恩情、忽ち乖分、相望んで川梁を阻つ。
閶門尙難レ越。況彼道路長。　閶門、尙ほ越え難し、況んや、彼の道路の長きをや。
不レ如雲中雁。廻飛自隨レ陽。(七)　如かず雲中の雁、廻飛して自ら陽に隨ふ。

【字解】【一】東井　星の名、史記天官書の注に「東井の八星は、水衡を主るなり」とある。【二】威弧　星の名、漢書に「狼の下四星あり、弧といふ」とあり、杜甫の詩に威弧不レ能レ弦とある。【三】結歡　情交を爲す。【四】金石比中腸　金石を以て中腸に比す、卽ち心腸堅く、決して違變せぬこと。【五】乖分　そむき分れる。【六】川梁　梁は橋。【七】隨陽　書の禹貢に「陽鳥の居る

ところ」とあつて、その傳に「鴻雁は陽に隨ふ」とある。つまり、雁は陽氣を追うて其方へ徙つて行くといふこと。

【詩意】天上に在る星の中で、東井は、井戸てふ名あれども、それを汲んで飮むことも出來ず、威弧は、弓てふ名あれども、弦をかけて引きしぼることも出來ず、つまり虛名の效果なきことは、千歲に亙つて同じく悲傷すべきところである。君と初めて情交を結び、心腸の堅きこと、金石の如く、決して違變せぬといつて誓つたが、それも、あてには成らず、さしもの恩情、忽ちにして、乖き分れるやうに成つて仕舞ひ、夫といふも名ばかりで、君は遠くに旅をして居る。その間には、川や橋が邪魔をして、何處といつて、相望むことも出來ない。加ふるに、自分は女の身で、閨門を越えて一寸外に出ることさへ六づかしい位、長い旅路を如何して行くことが出來やうぞ。雲井を渡る雁は、陽氣に隨つて廻り飛ぶが、まことに、羨ましいことの限りである。

【餘論】これも思婦の詩で、夫の遠行を怨んだのである。起首二句は、虛名の益なきことをいひ、今日の境涯、夫といふも名ばかりで、絕えて同棲する機會がないといふ意を暗に逗露したのである。閨門尙難越の二句は、女子が遠行を憚り、到底その處へ往くことの出來ないことを嗟嘆したのである。

促織（一）何嘖嘖（二）。空庭寒露白。　促織、何ぞ嘖嘖たる、空庭、寒露白し。

蘭蕙（三）辭（四）故芳。高梧銷（五）華澤。　蘭蕙、故芳を辭し、高梧、華澤を銷す。

閨中覽物（六）變。感歎（七）當此夕。　閨中に物の變を覽、感歎、この夕に當る。

引（八）領望遠人（九）。天河（一〇）西南隔。　領を引いて遠人を望めば、天河、西南に隔つ。

舟行詎離水。針（一一）運恆依石。　舟行詎ぞ水を離れむ、針運、恆に石に依る。

君雖有棄捐。妾心誓無易。　君に棄捐ありと雖も、妾が心、誓つて易はるなからむ。

【字解】【一】促織　爾雅の蟋蟀蛬の注に「今の促織なり」とあつて、その疏に「幽州の人、これを趨織といふ。里語に曰く、趨織鳴、嬾婦驚と、是れなり」とあり、古詩に明月皎夜光、促織鳴東壁」とある。普通、きりぎりすといふが、こほろぎといふ方が正しい樣である。【二】嘖嘖　鳴く蟲の聲。【三】蘭蕙　同じ類であるが、蘭は一莖數花、蕙は一莖一花といふのが、普通の區別である。【四】辭故芳　さきに咲いた花は落ちて仕舞ふ。【五】銷華澤　桐の葉の艷やかさが無くなり、やがて黃色に枯れて、やがて落ちる。【六】物變　節物の變化。【七】感歎　これに感じて歎息する。【八】引領　首を伸ばす。【九】遠人　遠地に居る人。【一〇】天河　天の河、卽ち銀河、詩經に倬彼雲漢、爲章于天」とあつて、その箋に「雲漢は天河を謂ふなり」とあり、博物志に「舊說に云ふ、天河は海と通ず。近世、人の海渚に居るものあり、槎に乘じて一處に至る。城郭の狀あり、屋舍甚だ嚴、はるかに宮中を望めば、織女多し。一丈夫の牛を渚次に牽いて之に飮ふを見る。問ふ、これは是れ何の處かと。答へて曰く、君、還つて蜀都に至り、嚴君平を訪はば之を知らむと。後、蜀に至つて、君平に問ふ。曰く、某年月日、客星あり、牽牛の宿を犯す、と。年月を計るに、正に是れその人、天河に到るの時なり」とある。【一一】針運恆依石　針の運行に因つて、航海中、方位を知る。そして、その針は、もと磁石で造つたので、能く鐵を引くといふ義、王充論衡に「頓牟は芥を掇ひ、磁石は鍼を引く」とあり、本草に「磁石の鐵を引くは、慈母の子を召すが如し、故に名づく」とある。

【詩意】こほろぎが嘖嘖として、夜もすがら鳴く頃となり、人なき庭もせには、白露が冷かに光つて居る。蘭や蕙の古い花は、殘らず落ちて仕舞ひ、丈高い桐の木の葉も、いつしか光澤が無くなつて、黄ばんで飄る。身は深閨の中に在つて、節候の推移變化を觀、この夕、感嘆して、傷心の至りに堪へず、首を延ばして遠行の人の居る方を望むと、銀河は、影皎皎として、はるかに西南に隔つて居る。舟の行く時は、決して水を離れることなく、そして、その方位を見極めるのは、磁石に依るのである。私は、矢張、磁石が鐵に引かれると同じく、始終夫の方に心が引かれて居るので、萬一、夫の方で棄てて顧みない樣な薄情な仕打があつても、私の心は、誓つて變ることは無い。

【餘論】前の八句は、秋夜の淋しい光景を敍し、後の四句は、その心の決して變易せぬことをいひ、磁石を以て比としたのは、極めて新警である。

置酒(一)北堂上。(二)歡言宴佳賓。　酒を北堂の上に置き、歡言して佳賓を宴す。
佳賓復爲誰。相過盡(三)朱輪。　佳賓復た誰とか爲す、相過ぐるは盡く朱輪。
(四)中庖炙肥牛。(五)登俎悉(六)異珍。　中庖に肥牛を炙り、俎に登るは悉く異珍。
左右(七)燕趙姝。(八)羅綺嬌青春。　左右燕趙の姝、羅綺、青春よりも嬌なり。
(九)清謳(一〇)雜(一一)哀吹。響激廻(一二)高旻。　清謳、哀吹に雜はり、響激して、高旻を廻る。
主勸客復酬。(一三)中抱各以伸。　主勸めて客復た酬ゆ、中抱各〻以て伸ぶ。
盛年易(一四)傾謝。爲樂願(一五)及辰。　盛年は傾謝し易く、樂を爲す、願はくは辰に及ばむ。
請看舊同游。半作(一六)泉下人。　請ふ看よ舊同游、半ば泉下の人となるを。
無爲苦(一七)刺促。長憂賤與貧。　無爲にして刺促に苦まば、長く賤と貧とを憂へむ。

【字解】【一】北堂　家の奧、ここで宴をするのは、大方親故の諸人に限つて居ると見える。【二】歡言　喜ばしげに語る。【三】朱輪　漢書劉向傳に「王氏一姓、朱輪華轂に乘するもの三十三人」とあつて、立派な車輪といふ意。【四】中庖　庖中に同じ、廚所、曹植の箜篌引に中庖辦豐膳、烹羊宰肥牛とある。【五】登俎　俎は食器、皿につける。【六】異珍　世の常と異にして珍らしき好味。【七】燕趙姝　姝は美人、昭明太子の七召に燕姝絕世とあり、孟浩然の詩に玉參還趙姝とある。【八】羅綺嬌青春　羅綺は女の衣裳、春は五色に配當すると靑なるが故に靑春といふ。著かざれる衣裳は、春景色よりも艷めかしい。江淹の別賦に珠與玉兮艷暮秋、羅與綺兮嬌上春とある。【九】清謳　清き聲にて歌ふ。【一〇】雜　まじる。【一一】哀吹　笙笛の類を吹いて餘韻あること。【一二】高旻　爾雅に「秋を旻天となす」とあるが、ここでは高天、高空の義。【一三】中抱　抱は懷抱、中心といふに同じ。【一四】傾謝　傾いて盡きる。【一五】及辰　辰は時、時に及ぶ。【一六】泉下人　黄泉の客。【一七】刺促　卷二、刺促行の條に注して置いた、世事の相促るをいふ。

【詩意】奧深き北堂の上に置酒し、喜ばしげに語り合ひ、善き友を集めて宴を催した。その善き友と

いふのは、如何なる人かといふと、招に應じて來たのは、盡く朱輪の車に乘れる高い身分の人達である。庖中に於ては肥牛を炙り、皿につけるは世の常ならぬ珍味ばかり、左右に侍するは燕趙の美人で、その著かざれる綺羅は、艷なる春景色よりも媚かしい。その宴　酣なるに當つては、淸らかなる歌の聲が餘韻嫋嫋たる笙笛の音にまじり、その響激して、高い空の上を廻るかと覺ゆるばかり。主客迭に獻酬をなし、各〻ゆつたりと心を伸ばして、いかにも樂しさうである。おもへば、さかりの年は、兎角、傾いて盡き易く、若い時は、二度とないから、願はくは、時に及んで行樂を縱にしたいものである。むかし交際した人を見ると、半は死んで、黃泉の客となりはてて仕舞つた。何も爲すことなく、世事の刺促として相迫るに苦んで、いつまでも貧賤を憂へて居るのは、まことに愚の骨頂であらう。

【餘論】通篇、時に及んで行樂すべきことを言つたので、例の浮世三分五厘主義に本づき、漢代の古詩には屢ば見るところの常套の感想であるが、いつの世、いかなる處に於ても、この種の考は、人の胸中に潛んで居るから、一誦すると、なる程と頷く。淸謳雜哀吹の六句は、措辭遣詞、ともに其妙を極めて居る。

美人一相見。遺我白玉環。　美人一たび相見て、我に白玉の環を遺れり。

上有雙雕龍。游戲在雲閒。　上に雙雕龍あり、游戲して雲間に在り。

持此感深意。佩結無時閒。　これを持して深意を感じ、佩結、時として閒なるなし。

玉以比貞潔。環以明不絕。　玉は以て貞潔に比し、環は以て不絕を明かにす。

雲龍永相從。誰能使離別。　雲龍、永く相從ふ、誰か能く離別せしめむ。

【字解】【一】深意　深い意味。【二】佩結　腰に帶びて堅く結ぶ。【三】無時閒　しばらくも閒なる時なし。しばしも離さぬといふ意。【四】玉以比貞潔　禮の聘義に「君子、德を玉に比す」とある。【五】環以明不絕　元稹の會眞記に「玉は、その堅潤にして渝らざるを取り、環はその始終絕えざるを取る」とある。

【詩意】美人が一たび吾と相見たる時、約束のしるしだといつて、白玉で造つた一個の環を吾に贈つた。その玉環の上部には、二疋の龍が雲間に游戲して居る處が雕り出してある。われは、その玉環を貰つて、美人の深い意味を悟り、この上もなく、有り難いと思ひ、それを腰に佩び、堅く結んで、暫時も體から離したことがない。それは、どういふ意味かといふと、玉は純粹無垢で、美人が自分の貞潔に比したものであるし、環は循環して、どこが始ともなく終ともない處から、この契の永久に亙つて絕えぬことを示したものであるし、おまけに、雲と龍とは、長しへに相從ふもので、われと美人との情交を宛らに、誰が如何したとて、これを引き離すことが出來ない。かういふ意味が、籠つて居る

と思つたから、自分は、その玉環を大事にして居るのである。

【餘論】この詩は、僅僅十句であるが、情思纏綿として、且つ純潔なる處が極めて面白い。玉以比貞潔の四句は、取りも直さず、全幅精神の寄するところで、會眞記中の文句を詩化したものとはいへ、亦た以て靑邱の才を認むべきものである。

秋至衆芳歇。芙蓉(二)獨鮮妍(三)。　秋、至つて、衆芳歇み、芙蓉、ひとり鮮妍。
(四)朱華照綠水。日暮涼風前。　朱華、綠水を照らし、日は暮る、涼風の前。
采折難遠贈。相看自嬋娟。　采折するも、遠く贈り難く、相看て自ら嬋娟。
(五)孤豔豈足賞。後(六)凋良可憐。　孤豔、豈に賞するに足らむや、後凋、まことに憐むべし。

【字解】【一】衆芳歇　歇は凋落する、無くなる。【二】芙蓉　蓮の花。【三】鮮妍　その色あざやかに、その姿妍麗なること。【四】朱華　蓮の花の赤きをいふ。【五】孤豔　孤芳・孤花に同じ。【六】後凋　他の花よりも後れて凋萎する。

【詩意】秋になつて、多くの花どもが凋落して無くなり、蓮の花だけが、ひとり其色鮮かに其姿うるはしく咲き誇り、赤い花は、綠水を照らし、日の暮るる頃、涼風の前に亭亭として立つて居る。この蓮の花を折り取つた處で、遠くに居る意中の人に贈ることも出來ず、相見て唯だその嬋娟たるを覺ゆるばかり。すでに誰に贈るでもなければ、折角ながら、孤芳賞するに足らず、ひとり、咲き殘つて居るのは、まことに憐むべきを覺ゆる。

【餘論】この詩は、獨り其節を守つて世事と相關せざる高人を芙蓉に比して云つたので、實は自ら況したものと見るべく、結二句、頗る含蓄あるを覺える。

(一)明星爛東方。北斗亦已旋。　明星、東方に爛たり、北斗、亦た已に旋る。
獨宿悲夜徂(二)。空牀藉蘭荃(三)。　獨宿、夜の徂くを悲み、空牀に蘭荃を藉く。
雞鳴整環珮。思(四)奉君子筵。　雞鳴、環珮を整へ、君子の筵に奉せむことを思ふ。
君子行未歸。新妝爲誰妍。　君子、行いて未だ歸らず、新妝、誰が爲にか妍なる。
意疎覺去遙。咫(五)尺越與燕。　意疎にして、去ることの遙なるを覺ゆ、咫尺越と燕と。
含情乏彤管。何以寫中悁(六)。　情を含むも、彤管に乏しく、何を以て中悁を寫さむ。
君如綆(七)上瓶。妾若井底泉。　君は綆上の瓶の如く、妾は井底の泉の若し。
不垂汲(八)引惠。澄瑩徒終年。　汲引の惠を垂れずんば、澄瑩、徒に年を終らむ。

【字解】【一】明星爛東方　あけの明星が爛然として東方に現はれた、明星は太白、卽ち金星、宵には西、あけには東に見える。【二】夜徂　夜の過ぎ行く間。【三】蘭莖　莖は、說文に「芥莖なり、亦た香草なり」とある。【四】奉　傍に侍する。【五】彤管　詩經に「貽我彤管」とあつて、その箋に「彤管は赤管なり、必ず赤を以てするは、女史をして、赤心を以て人を正さしむ」とある。又後漢書后紀紀の序に「女史彤管、功を記し、過を記す」とある。後世では筆の義に用ひて居る。【六】中悁　詩經に中心悁悁とある。【七】綆上瓶　綱の先端に付いて居る釣瓶、莊子に「綆短くして深きを汲むべからず」とある。【八】汲引　水を汲み上げる。

【詩意】あけの明星は爛然として東の空に現はれ、北斗は既に廻つて、その影が斜になつた。この時しも、私は獨り寐の淋しき儘、夜もすがら悲んで居たので、空牀の上には、蘭莖の如き香草を藉きならべてあるが、誰も此に眠る人もない。やがて、雞が鳴いたから、衣裳を著かへ、環珮を整へ、本來ならば、君子の席に奉侍する筈であるが、その君子は遠行して、未だ歸らざるが故に、折角、新妝を凝らして、あでやかにした處で、誰の爲めといふこともなく、まことに詰まらぬ。私は、心おろそかにして、君子の去ること遠く、到底、消息を通ずることは出來まいと思つて居たが、わが居る越と、君子の居る燕とは、同じ國の內で、咫尺の間にある。さりながら、私には文筆が扱へないから、無限の情思を含むも、どうして、悁悁たる中心を寫し出すことが出來やう。殘念ながら、まことに致し方もない。おもへば、君は綱の端に在る釣瓶の如く、私は井戸の底に涌く泉の如きものである。君にして、私の心を汲み取つて下さらぬならば、泉水は、いつまでも、空しく澄んだ儘で居る外はない。

【餘論】これも思婦の情を述べたので、大體の構想は、有りふれて居るが、君如綆上瓶の四句は、いつもながら、新奇で、面白い。

人生一漚水。所欲乃無涯。
志意苦未畢。容華忽然衰。
天地有終壞。誰能待其期。
聊爲一日歡。勿作千載悲。
神仙倶好飮。得醉復何疑。

人生は一漚の水、欲するところは乃ち涯なし。
志意、未だ畢らざるに苦み、容華、忽然として衰ふ。
天地、終壞あり、誰か能く其期を待たむ。
聊か一日の歡を爲して、千載の悲を作す勿れ。
神仙、ともに飮を好む、醉ふを得ば、復た何ぞ疑はむ。

【字解】【一】一漚水　一つの水泡、楞嚴經に空生大覺中、如海一漚發」とある。【二】所欲乃無涯　慾望には際限がない、莊子に「吾が生や涯あり、而して、知や涯なし」とあるを轉用す。【三】容華　容色・容貌に同じ。【四】終壞　最後の破滅。

【詩意】人の命は、水上の泡の如きものでありながら、その慾望には、際限もない。そこで、志意の未だ十分に達せざる間に、容色は、忽然として衰へて仕舞ふ。天地の大と雖も、いづれは最終の破滅といふことがあるが、誰か其時を待つて、生きながらへて居やうか。されば、生きて居る間は、その日ごとの歡樂を極めれば善いので、千載の後を思うて、無益な心配をするにも及ばぬ。神仙の輩、皆酒が好きであつて、現に醉ひさへすれば、それで足れりとして、復た何も疑ふことはない。

【餘論】人生の果敢なさより、延いて眼前の享樂に及び、それには、酒といふものであるといつたので、まさしく、現世快樂主義の宣傳である。その落想は、例の常套ながら、聊爲㆓一日歡㆒の四句は、用筆極めて爽利である。

（一）黄鳥鳴㆓（二）春陽㆒。（三）流芳滿㆓（四）西園㆒。　黄鳥、春陽に鳴き、流芳、西園に滿つ。

（五）攀㆑條日已暮。（六）悵惋不㆑能㆑言。　條を攀ぢて、日、すでに暮れ、悵惋、言ふ能はず。

（七）禦㆑寒必重裘。涉㆑道須㆓（八）雙轅㆒。　寒を禦ぐ、必ず重裘、道を涉る、雙轅を須ふ。

離居非㆓君子㆒。何以解㆓憂煩㆒。　離居、君子に非ずんば、何を以て、憂煩を解かむ。

煩憂日已積。佳期日已失。　煩憂、日に已に積み、佳期日に已に失ふ。

思㆑君如㆓蓬萊㆒。可㆑望（九）不㆑可㆑卽。　君を思うて蓬萊の如く、望むべくして卽くべからず。

（一〇）區區儻見㆑察。憔悴甘㆓自畢㆒。　區區、もし察せらるれば、憔悴、自ら畢るに甘んせむ。

【字解】【一】黄鳥　うぐひす。【二】春陽　春の日。【三】流芳　漾うて流るる花の香。【四】西園　西は、すべて奥向であり、且つ陰に當る。その西園にも、花が咲き滿ちたといふので、春の最も盛なる時を指す。【五】攀條　花の枝を攀ぢる、これを折らうとしたのであらう。【六】悵惋　悵然として惜しいと思ふ。【七】禦寒　魏志王昶傳に「諺に曰く、寒を禦ぐは重裘に如くはなく、謗を止むるは自修に如くはなし」とある。【八】須雙轅　須は用ふ。雙轅は二條のながえ、卽ち車。【九】不可卽　その處へ行くことが出來ない。【一〇】區區　中心の誠をいふ。

【詩意】うぐひすが麗かなる春の日影の中に鳴き、漾うて流るる花の香は、西園にも滿つる位。そこで、花を折らうと思つて、枝を攀ぢて見たが、わが身の獨り居ることに比較し、悵然として、惜しく思ふ心は、自ら口で言ふことも出來ず、兎角する内に、日は暮れて仕舞つた。寒氣を禦ぐには、厚い皮衣が必要であるし、遠道を涉つて旅をするには、車に限る。それと同じく、私に取つては、貴方に是非居て貰はなければならないので、今しも、離居して留守する折柄、貴方以外に、どうして この思ひ煩ふ憂愁を解くことが出來やうか。その煩憂は、日に日に積み、再會の佳期は、日に日に失ひ、まことに、便りなく情ない始末。君を思へば蓬萊の如く、望むことは出來るが、自ら其處へ往くことは出來ない。しかし、君にして千里の遠きを隔てながら、私の區區の誠を察して下さるならば、たとひ憔悴して瘦せはてても、別に情ないとも思はず、いつまででも待つて居ります。

【餘論】これも、思婦の詩で、起四句は、花を折らむとするに因つて興を起し、次の六句、重裘雙轅と同じく、君子は、私に取つて必要缺くべからざるものであるが、佳期日に失うて、何時遇へるとも分からないから、仕方がないといひ、思㆑君如㆓蓬萊㆒の四句は、構想措辭、兩つながら其妙を極めたものので、この誠心を察して下さらば、いくら憔悴しても、かまはぬといひ、癡絶、嬌絶、しかも性情の

正を失はぬものである。

寓感二十首

(一)天旋海(二)水運。日月馳(三)奔輝。　天旋つて、海水運し、日月、奔輝を馳す。
不知此往來。伊(四)誰斡(五)其機。　知らず、ここ往來する、伊れ誰か其機を斡する。
諒由任(六)元氣。推遷不能違。　まことに、元氣に任かすに由つて、推遷、違ふ能はず。
人生處(七)宇內。行(八)止無定(九)依。　人生、宇內に處る、行止、定依なし。
唯當乘(一〇)大化。逍遙隨所歸。　唯だ當に大化に乘じ、逍遙、歸るところに隨ふべし。

【字解】【一】天旋　蔡邕の月令章句に「天は左に旋り、地上に出でて西し、地下に入つて東す」とある。むかしの思想では、大地は不動不易にして、天の方が絕えず運行するものとしてあつた。【二】海水運　博物志に「天地四方、皆海水相通ず」とあつて、天の旋轉するにつれて、海水にも潮汐の差引が出來る。【三】馳奔輝　走る光彩を馳せる。つまり、耀きながら奔馳する。【四】伊誰　これ誰かと訓ずべし。【五】斡其機　その機關を誰が斡旋するか。【六】元氣　宇宙の動力、幽通賦に「渾元、物を運らす」とあつて、その注に「渾元は天地の氣」とある。【七】宇內　宇は空間。【八】行止　或は行き、或は止まる。擧止動靜に同じ。【九】定依　定まり依るところの標準、卽ち法則。【一〇】大化　宇宙現象變化の大法則、陶淵明の歸去來辭に聊乘化以歸盡、樂夫天命復奚疑とある。

【題義】寓感とは、感慨を寓した詩といふこと。どうせ、詩は、感慨があればこそ出來るのであるが、ここには、適切な題がない處から、聊か漠然として居るが、假りに之を以て題としたので、これを併せ觀れば、作者の宇宙觀乃至人生觀が遺憾なく分かる。

【詩意】天は絕えず旋轉し、そして、海水は、それにつれて潮汐の運行を爲し、日月も亦た光り耀きながら、馳せ奔つて居る。かくの如く往來して居るのは、如何にも不思議で、誰が其機關を斡旋して居るのであるか。それは、元氣と稱する宇宙の動力に任かせるからであつて、推移遷轉するも、その間、一定の法則があつて、決して之に違ふことは出來ない。しかし、人生の宇內に在る間は、私慾の衝動を受けて、その行止起臥に一定の標準なく、全く盲目的に働いて居るに過ぎない。かういふ事では、宜しくないから、大化、卽ち宇宙現象變化の法則に循從し、逍遙自在、やがて、その歸著するところに向ふべき筈である。

【餘論】起首六句は、宇宙間には、自然の大法則あるを論斷し、以下四句、人生も亦た之に循從すべく、さうすれば、逍遙自在、亦た決して其歸宿を誤らぬといふ意を述べたのである。

雞鳴一(一)警旦。陽(二)烏已東升。　雞鳴、一たび旦を警むれば、陽烏、すでに東に升る。
(三)羣動紛自起。各欲(四)赴其生。　羣動、紛として自ら起り、各〻その生に赴かむと欲す。

(五)飢蠖土中出。棲禽林(六)外驚。
蒼蠅一何微。(七)䦨羮亦飛鳴。
人生信(八)多故。安得免(九)營營。

飢蠖は土中より出で、棲禽は林外に驚く。
蒼蠅、一に何ぞ微なる、䦨羮、亦た飛鳴。
人生信に多故、安んぞ營營を免るるを得む。

【字解】【一】警且　且は夜あけ、夜あけを警告する。【二】陽烏　太陽、張衡の靈憲に「日は陽精の宗、積んで烏の象を成す、烏にして三趾あり、陽の精、その數奇」とある。つまり、太陽は陽精が固まつて烏の形を成して居るので、その烏には足が三本あつて、その奇數たることは、卽ち陽精たる所以だといふ義。【三】羣動　萬物の活動。【四】赴其生　その生活に向つて進む。【五】飢蠖　蠖は尺取蟲、說文に「蠖は屈伸の蟲なり」とあり、易の繫辭に「尺蠖の屈するは、以て伸ぶるを求むるなり」とある。【六】林外驚　林の外に飛び起つ。【七】䦨羮　蠅の羽音をいふ。【八】多故　事故が多い。【九】營營　せつせと働く。

【詩意】雞が花やかに一たび鳴いて、夜あけを警告すると、太陽が既に東方に差し上り、そして、萬物の活動は、紛然として起り、各自に其生活に向つて進んで行く。そこで飢ゑた尺取蟲も、土中から出るし、塒に居た烏も、林の外に飛び出す。青蠅は、まことに微微たるものであるが、矢張、羽音を立てて飛鳴する。加ふるに、人生は、まことに多事なものであるから、どうして、せつせと働くことを免れやう、無論、禽蟲以上に、活動せねばならぬ筈である。

【餘論】結二句が、全篇趣旨の歸著するところで、生命あるものは必ず活動あるべく、そして、人生は、更に多故で、愈よ以て此の如くであると論斷したのである。

盛衰迭(一)乘運。天道果誰(二)親。
自古爭中(三)原。白骨遍荆榛。
乾坤動(四)殺機。流禍及(五)烝民。
(六)生聚亦已艱。一朝忽胥(七)淪。
(八)陽和既代(九)序。嚴霜變肅(一〇)晨。
(一一)大運有自然。彼(一二)蒼非不仁。
(一三)咄咄堪嘆嗟。(一四)滄溟亦沙塵。

盛衰、迭に運に乘じ、天道、果して誰と親む。
古しへより、中原を爭ひ、白骨、荆榛に遍し。
乾坤、殺機を動かし、禍を流して、烝民に及ぶ。
生聚、亦た已に艱む、一朝、忽ち胥淪む。
陽和、すでに代序、嚴霜、肅晨に變す。
大運、自然あり、彼の蒼、不仁に非ず。
咄咄、嘆嗟するに堪へたり、滄溟、亦た沙塵。

【字解】【一】迭乘運　交互に其運に乘じて遣つて來る。【二】誰親　誰と親密であるか、特別に親密なるものはなく、極めて公平無私なること。【三】中原　支那本部の眞中。【四】動殺機　殺伐の氣運が兆す。【五】烝民　一般の人民。【六】生聚　團結して生業を營す。【七】胥淪　相率ゐて淪沒する。【八】陽和　萬物を生育する春の和氣。【九】代序　代り合つて其次序に就く。【一〇】肅晨　秋冬の際の寒き朝。【一一】大運　宇宙の運行。【一二】彼蒼　天をいふ。【一三】咄咄　卷一、東門行に見ゆ、世說に「殷中軍、廢せらる、終日恆に空に書して咄咄怪事の四字を作すのみ」とある、怪訝の辭。【一四】滄溟亦沙塵　卷一、神仙曲に見ゆ、海が乾いて、陸地となつて沙塵を揚げる。神仙傳に「麻姑、自ら說いて曰く、すでに東海の三たび桑田と作りしを見る、さきに蓬萊に到りしに水淺く、往きに會せし時よりも淺く、略ぼ半なり、豈に將に復た陵陸とならむとするか」とある。

【詩意】盛衰といふものは、交互に其運に乘じて遣つて來るもので、天道は、公平無私、特別に誰と

親密にするといふこともない。古しへより、中原の地を爭ひし後は、白骨縱横、荊榛の間に一ぱいになる位。乾坤の間、殺伐の氣運が一たび動くと、その禍は、瀰漫して、一般の人民に及び、團結して生業を成すことも、六づかしくなり、一朝、相率ゐて淪沒し、盡く其生命を喪ふことになる。顧みれば、萬物を生育する春の和氣が、既に交代して、その次序に就くと、今度は、きびしい霜が降つて、忽ちにして、秋冬間の寒い朝となつて仕舞ふ。宇宙の運行には、自然の法則があつて、物盛なれば必ず衰ふと決つて居るし、何も、彼の天なるものが不仁といふ譯ではない。まことに、咄咄怪訝に堪へず、人をして嘆嗟せしめるが、今さら致し方なく、滄溟の闊くして深きも、いつしか乾いて陸となり、やがて、沙ほこりを揚げることさへあるので、有爲轉變は、ひとり人生のみでない。

【餘論】この首は、盛衰時を以て迭に至り、決して避くべからざることを道破したので、大運有二自然一、彼蒼非二不仁一の二句が、その究極の落想である。

美女生二貧家一。(一)光豔人未レ識。　美女、貧家に生まれ、光豔、人、未だ識らず。
(二)遠聘入二楚宮一。(三)揚レ蛾欲(四)傾レ國。　遠く聘せれて楚宮に入り、蛾を揚げて國を傾けむと欲す。
朝遊二(五)瓊臺上一。夕侍二(六)金輿側一。　朝に瓊臺の上に遊び、夕に金輿の側に侍す。
(七)奉レ歡擬二(八)千齡一。秋風失二顏色一。　歡を奉じて、千齡に擬し、秋風、顏色を失ふ。
銜レ恩歸二(九)永巷一。(一〇)貞意徒寂默。　恩を銜んで永巷に歸り、貞意、徒に寂默。
高高天上星。(一一)墮作二水底石一。　高高たる天上の星、墮ちて水底の石となる。
人事盡如レ斯。推移歎何極。　人事盡く斯の如し、推移、歎ずるも何の極かあらむ。

【字解】【一】光豔　光彩に同じ、その容貌の絶美なるをいふ。【二】遠聘　わざわざ遠方から召し出される。【三】揚蛾　眉を揚げる。【四】傾國　卷一、李夫人歌に見ゆ、漢書外戚傳に「李夫人、本と倡を以て進む。はじめ、夫人の兄延年、性、音を知り、歌舞を善くす。武帝、これを愛す。上に侍し、起つて舞うて曰く、北方有二佳人一、絕世而獨立、一顧傾二人城一、再顧傾二人國一云云」とある。【五】瓊臺　玉で飾つた立派な高臺、但し固有名詞ではない。孫綽の天台山賦に瓊臺中天而懸レ秀とある。【六】金輿　天子の駕、庾肩吾の詩に入レ徑轉二金輿一とあり、杜甫の詩に嘗時侍二金輿一、故物唯石馬とある。【七】奉歡　天子の愛寵を承ける。【八】千齡　千年に同じ。【九】永巷　宮中の御局。【一〇】貞意　品行を愼んで貞淑に餘生を送らうといふ決心。【一一】墮作水底石　星の落ちることは、數ば有るので、左傳に「石を宋に隕す五、隕星なり」とある。

【詩意】美女は貧家に生まれ、その門地太だ賤しい爲に、折角の標致も人に知られずに居たが、その内に、人君の御耳に入つたものと見え、遠く聘せられて楚宮に入り、粧成れば一段と美しく、眉を揚げると、容易に人の國をも傾けむばかり。かくて、朝には瓊臺の上に遊び、夕には金輿の側に侍し、常に君の愛寵を承け、千年の久しき、いつでも此の如くであらうと思つて居た處が、よる年波にかな

はず、時過ぐれば、秋風落寞、さしもの顔色も、既に無くなつて仕舞つた。そこで、恩命を拜して、御局に引き下り、一意、貞淑を守つて、いたづらに寂默として居る。たとへば、高い高い御空に輝いて居た星が、忽ち落ちて水底の石となつた樣な次第。人間の事は、すべて此通り、富貴榮華は、決して永續せず、その推移して止まざるは、いくら、歎息しても、到底極まるところがない。

【餘論】これは、前首を承けて、人生の推移を云はむが爲に、架空的に一美人を描き出し、その寵を得、寵を失ひたる次第を述べて、これに假託したのである。

(一)叢蘭生路隅。馥馥有奇香。　叢蘭、路隅に生じ、馥馥として奇香あり。

路隅多行人。(二)采掇成摧傷。　路隅に行人多く、采掇して摧傷を成す。

深林雖幽獨。秋至靄(三)餘芳。　深林は幽獨と雖も、秋至つて餘芳靄たり。

托根在得所。君子(四)蹈其常。　根を托するは、所を得るに在り、君子は其常を蹈む。

【字解】【一】叢蘭　一叢の蘭。【二】采掇　採り拾ふ。【三】靄餘芳　餘香が立ちこめて、散り失せぬこと。【四】蹈其常　常は常道。

【詩意】一叢の蘭が路の傍に生じ、馥郁たる奇香を放つて居る。すると、路隅には、行人多きが故に、自然それを見つけて、その花を摘み、はては、摧傷されて、散散な辛き目に遇ふやうになる。この蘭は、まさしく、場所が惡かつたので、もし深林の中に生えたならば、人にも見つからず、境涯は幽獨である代りに、その花は、いつまでも咲いて居て、秋に成つても、餘香は林の中に立ちこめるばかりであらう。蘭が根を託して安全で居ることは、その所を得るに限る。これにつけても、君子は、その常道を蹈むべく、矢鱈に出鯱張つて、禍を受ける樣なことは、斷じて爲てはならぬ。

【餘論】結二句が、作者本意の在るところで、君子は幽獨に甘んずべく、世の中に出で禍を受けては、詰まらぬといつて、深く之を訓戒したのである。

(一)蚩蚩此羣氓。幾人出(二)其儔。　蚩蚩たる此羣氓、幾人か其儔を出づる。

誰云抱智慮。乃足(三)資勞憂。　誰か云ふ、智慮を抱くと、乃ち勞憂に資するに足る。

(四)晨秣思遠騁。(五)宵披務(六)窮搜。　晨に秣うて遠く騁せむことを思ひ、宵に披いて窮搜を務む。

懷古復慨今。百念(七)紛相投。　古しへを懷ひ、復た今を慨し、百念、紛として相投ず。

(八)膠擾得(九)喪間。若與(一〇)方寸仇。　膠擾す得喪の間、方寸と仇するが若し。

安知(一一)廣成子。(一二)冥臥(一三)崑崙丘。　安んぞ知らむ廣成子、冥臥す崑崙の丘。

無營亦無想。八表(一四)獨神遊(一五)。　營むなく、亦た想ふなく、八表、ひとり神遊。

【字解】【一】蚩蚩此羣氓　詩に氓之蚩蚩とあつて、愚かな此民人どもといふ意。【二】出其儔　同類から拔き出る。【三】營勞憂　勞擾煩憂の原因となる。【四】晨秣　朝に馬に秣ふ。【五】宵披　夜になると書卷を披く。【六】窮搜　古今東西の事を研究し且つ穿鑿する。【七】紛相投　紛然として其中に投げ合ふ。【八】膠擾　こびり付いて擾き亂される。【九】得喪　得失に同じ。【一〇】方寸　心をいふ、その大さ方寸餘と考へられて居たのである。【一一】廣成子　卷一、圓閭篇に見ゆ、莊子に「黄帝、廣成子が空同の山に在るを聞き、故に往いて之を見る」とある。【一二】冥臥　何を思ふともなくして臥す。【一三】崑崙丘　西極の仙境、今の崑崙山と混同されて居る、莊子に「黄帝、赤水の北に游び、崑崙の邱に上る」とある。すると、廣成子は空同に居たので、崑崙ではないが、崑崙は想像上の仙境であるから、必ずしも拘泥するに及ばぬ。【一四】八表　宇宙をいふ。【一五】神遊　身は其處に往かず、精神を飛ばして遊ぶ。

【詩意】この多くの蚩蚩として愚なる人どもの中で、超然として拔き出でたものは幾人あるか。その幾人の者どもは、智慮を抱いて居て、まことに偉らいと云はれ居るが、何の甲斐もなく、その智慮てふものは、偶ま以て勞擾煩憂の原因たるに過ぎぬ。この者ども、朝には、馬に秣うて遠い土地に往つて見たいと思ひ、夕には、書物を披いて、樣樣の事を研究したり、搜索したりし、古しへの至治を懷ひ、今の澆季の俗を慨し、百種の念慮は、紛然相投じて、こんがらかつて居る。かくて、區區たる世上得失の事が、胸中にへばり付いて亂れ合ひ、方寸の此心と互に仇を爲す樣な次第。そこへ行くと、廣成子などは、大したもので、崑崙の仙境に在つて、さながら其身を忘れたやうに、冥然として打臥し、何を營むでもなく、何を想ふでもなく、ひとり精神を宇宙の間に遊ばせて居た。

【餘論】この首は、世俗の謂はゆる智慮てふものは、毫も稱するに足らざるを云ひ、廣成子を以て理想的聖者となし、かくの如くありたいといふ意を逗出したのである。

大道本夷直(一)。末路(二)生險巇。　大道、本と夷直、末路、險巇を生ず。

杯酒出肺肝(三)。須臾起相疑。　杯酒、肺肝を出し、須臾にして、起つて相疑ふ。

田蚡排竇嬰(四)。趙高(五)誣李斯。　田蚡は竇嬰を排し、趙高は李斯を誣ふ。

傾擠(六)不少假。權寵實禍(七)基。　傾擠、少しも假さず、權寵は、實に禍の基。

鑿井當得泉。種桑會成絲。　井を鑿てば當に泉を得べく、桑を種うれば、會ず絲を成す。

禍福皆自致。天道信難欺。　禍福、皆自ら致す、天道、信に欺き難し。

出亡(八)無所舍。千載使人悲。　出亡、舍するところなく、千載、人をして悲ましむ。

【字解】【一】夷直　平坦にして且つ迂曲せざること。【二】末路　末端の小路。【三】出肺肝　殘らず心中をさらけ出す。【四】田蚡排竇嬰　史記魏其列傳に「魏其侯竇嬰は、孝文后の從兄の子なり、武安君田蚡は、孝景后の同母弟なり。竇太后崩ず、魏其、勢を失ふ。田蚡、丞相となり、籍福をして、魏其に城南の田を請はしむ。魏其、許さず。灌夫、酒を使ひ、罪を丞相に得たり。丞相論じ

て棄市す。魏其、灌夫を救ふ。丞相、魏其が先帝の詔を矯めたるを劾して、亦た渭城に棄市す。その春、武安病む、巫の鬼を視るものをして之を視せしむ。魏其灌夫の共に守るを見、これを殺さむと欲す、竟に死す」とある。【五】趙高讒李斯　史記李斯傳に「趙高、丞相を誣ふ。長男李由、三川の守となる。楚盜、陳勝等、皆丞相旁縣の子、故に楚盜公行、三川を過ぐるや、城守して肯て擊たず、その文書相往來するを聞くと。ここに於て、二世、趙高をして、斯を治せしめ、榜掠千餘、斯に五刑を具ふ」とある。【六】傾擠　傾け且つ推す。【七】禍基　禍の根本。【八】出亡無所舍　史記商君傳に「秦の孝公卒す、太子立つ、公子虔の徒、商君反せむと欲するを告ぐ、吏を發して、商君を捕へむとす。商君、亡げて關下に至り、客舍に舍らむとす。舍人、その是れ商君たるを知らざるなり、曰く、商君の法、人の驗なきものを舍すれば、これに坐す、と。商君、喟然として嘆じて曰く、嗟乎、法を爲すの弊、一に此に至るか、と。秦、兵を發して、これを攻め殺す」とある。

【詩意】大道は、平坦にして紆曲せず、末端の橫路には、險阻な處が多い。人と交際するにしても、正しい道に於てすれば、先づ善いが、さうでないと、飛んでもないことになるので、杯酒歡を爲し、互に肺肝をさらけ出し、打解けて居た間柄でも、しばらくして、起つて相疑ひ、やがて、構陷を事とする樣になる。さればこそ、田蚡は竇嬰を排斥し、趙高は李斯を讒誣する樣になつたのである。かくて、互に相傾けて推し倒し、少しも容赦せず、ぎゆうぎゆうの目に合はさなければ、決して承知せぬのは、權寵を得たいといつて相爭ふからで、ここに至れば、權寵は、實に禍の根本である。井戶を掘れば水が出るし、桑を種ゑると蠶を飼つて絲を取るといふ樣に、權寵を爭へば、やがて禍を得るに決まつて居る。元來、禍福は誰が致したのでもなく、實は皆自ら致したので、天道照臨して、決して之を欺くことは出來ぬ。その權寵を爭つて、悲慘の最期を爲したのは、商君その人で、出奔しても宿を貸す者もなく、遂に殺されたといふので、千載の後までも、人をして悲ましめる。

【餘論】はじめには、交際の六づかしいことより、あまり親密に過ぎると、猜疑を生ずる樣になることを言ひ、かくの如き爭を爲すのも、結局は、權寵の爲めであつて、權勢は實に禍の本、權勢の爲に身を亡ぼした好適例は、商君その人であるといふのである。かくの如く、層層遞下し、しかも、遂に此世を離れず、排斥讒誣の甚しきを述ぶるに至りては、覺えず人をして嗟嘆せしめる。鑿井當得泉の四句は、例の慣用の筆法であるが、その數ば見ても飽かざる處は、流石に靑邱である。

(一)志士(二)徇功業。(三)貪夫詫(四)輕肥。　志士は功業に徇し、貪夫は輕肥を詫る。
亦有(五)逃羣子。(六)嬌嬌與時違。　亦た逃羣の子あり、嬌嬌として時と違ふ。
彼此更共笑。不知誰是非。　彼此、更る〳〵共に笑ふ、知らず、誰か是非。
(七)達人(八)體自然。(九)出處兩(一〇)忘機。　達人は自然を體し、出處兩つながら機を忘る。
浮雲遊(一一)天表。舒卷有(一二)餘輝。　浮雲、天表に遊び、舒卷、餘輝あり。

【字解】【一】志士　この世を救濟せむと志す人。【二】徇　殉と通ず、身を以て之に從ふ、打ち込む。【三】貪夫　物質上の慾

富を貪る人。【三】輕肥　輕裘肥馬。【五】逃羣子　人並みの社會から脱出した人、隱者の類。【六】矯矯　並みはづれて偉らく拂へる。【七】達人　大道に達したる人。【八】體自然　宇宙自然の法則を其身に體得する。【九】出處　世間を出ると俗に混ずると。【一〇】忘機　機は世上の機略。【一一】天表　天外に同じ。【一二】餘輝　餘光に同じ。

【詩意】この世を救濟したいといふ樣な志士は、身を以て功業に殉し、貪夫は、格別遠大の考もなく、唯だ輕裘肥馬等の富饒に誇つて居る。外に世俗の羣を脱出した、謂はゆる隱者の類があつて、超然高踏、何でも世俗と違ふことを偉らいと思つて居る。これ等の手合は、彼此、互に他の所行を笑つて居るが、本當に誰が是で、誰が非か、そんな事は分からない。唯だ大道を究めた達人のみは、宇宙自然の法則を其身に體得し、世を出づるにしても、世に居るにしても、毎に世上の機略を忘れて居る。これを譬ふれば、浮雲一片、天外に飄り、舒びても、卷いても、毎に餘光を放つて居る樣なものである。

【餘論】はじめに、三種の階級を列擧し、その是非を知らずといひ、最後に達人を掲げ、出處兩つながら機を忘れ、これこそ、間然するところなく、卽ち吾人の學ぶべきものであると斷定したのである。

(一)攬轡登(二)太行。遙望(三)洛北州。　轡を攬つて太行に登り、遙に洛北の州を望む。
(四)崤函正西峙。黄河復東流。　崤函、正に西に峙ち、荒河、復た東に流る。
(五)百城無(六)遺堵。雲煙莽(七)相繆。　百城、遺堵なく、雲煙、莽として相繆はる。
朝作(八)冠蓋場。暮爲狐兎丘。　朝には冠蓋の場となり、暮には狐兎の丘となる。
昔人爭此地。干戈迭相讎。　昔人、この地を爭ひ、干戈、迭に相讎す。
當其得意時。(九)連陌擁鳴騶。　その得意の時に當つては、連陌、鳴騶を擁す。
(一〇)百年(一一)奄忽盡。魂魄空來游。　百年、奄忽として盡き、魂魄、空しく來り游ぶ。
曷見(一二)采芝叟。(一三)冥棲無所求。　曷ぞ見む采芝の叟、冥棲、求むるところなきを。

【字解】【一】攬轡　手綱を手に執る。【二】太行　山名、述征記に「太行山は、首、河内に始まり、北、幽州に至る、凡そ百嶺、十三州の界に連亙す、八陘あり」と見え、一統志に「懷慶府に在り」と記し、魏の武帝の苦寒行に北上太行山、艱哉何巍巍とある。【三】洛北州　洛水の北なる諸州、卽ち洛陽一帶の地。【四】崤函　崤山と函谷、洛陽より西に通ずる要隘。【五】百城　多くの城塞。【六】遺堵　殘れる牆。【七】相繆　互にまつはる。【八】冠蓋場　冠は大官の冠、蓋は車上に差し翳す天蓋。高位高官の人人が聚がる處。【九】連陌擁鳴騶　都大路の町町に連なる程、多くの騎馬の士卒を從へる。【一〇】百年　人の一生。【一一】奄忽　倏忽に同じ、古詩に人生寄一世、奄忽若飆塵とある。【一二】采芝叟　芝は靈芝、これを刻んで服用すると、長生が出來るといふので、山中に隱れて仙術を學ぶもの。【一三】冥棲　無事無爲に隱れ住む。

【詩意】しかと手綱を握り、しづしづと太行の山に登り、峠の頂に立つて、洛陽一帶の地を望むと、平原廣闊、崤山函關は、正西に峙ち、黄河の水は、滔滔として、相變らず東流して居る。この間に

は、多くの城塞があつたが、今は殘らず荒廢して、殘れる牆だになく、雲煙莽莽として、相まつはるばかり、朝には、高位高官の人人羣れ集ふ處であつたが、暮には、狐や兎の飛びはねる岡となりはて仕舞つた。ここは、四方必爭の要衝であるから、むかしの人は、動もすれば、この地を爭ひ、干戈を以て互に相仇とし、攻戰、しばらくも止まなかつた。うまく此地を取つて帝王と稱せしものは、得意滿面、町町に引き續く位、多くの騎士を從へて練り歩いて居たが、百年の命は、奄忽の間に盡きて、その人、すでに墓中に入り、今は唯だ魂魄が昔を戀うて、時たま、來り游ぶだけである。それよりも、深山に潛んで靈芝を采り、心のどかに仙術を學び、無事無爲に求むるところなき隱者の方が、どれだけ善いか、ここを篤と見ねばならぬ。

(一)桃李初不語。(二)鳳凰豈長喧。　桃李初め語らず、鳳凰豈に長く喧しからむや。
(三)末俗矜(四)辯議。(五)窮口禍之源。　末俗、辯議に矜る、口を窮むるは禍の源。
所以(六)國武子。殺身由盡言。　所以に國武子、身を殺すは言を盡すに由る。
妙哉(七)無爲謂。(八)默默道斯存。　妙なるかな、無爲の謂、默默として道斯に存す。

【字解】【一】桃李初不語　史記李將軍傳贊に「桃李言はず、下、自ら蹊を成す」とある。【二】鳳凰豈長喧　白虎通に「鳳凰は、雄鳴節あり、雌鳴足る、游ぶ必ず地を擇び、飢うるも妄りに食はず」とある。【三】末俗　澆季の世の風俗。【四】辯議　辯說議論。【五】窮口　出來るだけ饒舌る、易に「口を竊べば乃ち窮するなり」とある。【六】國武子　左傳成公十八年に「齊、慶氏の難の爲に、齊侯、士華免をして、戈を以て國佐子を內宮の朝に殺さしむ」とあり、韓愈の諍臣論に「盡言を好み、以て人の過を招ぐ、國武子の齊に殺さるる所以なり」とある。【七】無爲　老子に「我、無爲にして物自ら化す」とある。【八】默默道斯存　莊子に「至道の極は、昏昏默默」とある。

【詩意】桃李は、初めから物いはず、鳳凰は、決して喧しいことはなく、すべて世の中の優れたものは、矢鱈にしやべらない。末世の風俗として、辯說議論に矜つて居るが、出來るだけ饒舌るといふことは、禍の源である。されば、齊の國武子の如きも、その身を喪ひしは、言を盡して人の過を招げたからである。老子の謂はゆる無爲てふものは、まことに玄妙至極、默默たる間に、至道は長しへに存して居るのである。

【餘論】多言禍を招くことを延べて、世俗を戒めたので、まさしく、頂門の一針である。

人雖異草木。不若松柏壽。　人は草木に異なりと雖も、松柏の壽に若かず。
欲於百年間。辛苦圖(一)不朽。　百年の間に於て、辛苦して不朽を圖らむと欲す。
(二)形質天所畀。(三)名姓吾自取。　形質は、天の畀ふるところ、名姓は、吾、自ら取る。

（四）形名兩未立。（五）誰我竟何有。　形名、兩つながら未だ立たず、誰我竟に何か有らむ。

不能知（六）吾先。奚暇（七）恤我後。　吾が先を知る能はざれば、奚ぞ我が後を恤ふるに暇あらむ。

（八）遺臭與流芳。冥然（九）付杯酒。　遺臭と流芳と、冥然として杯酒に付す。

【字解】【一】不朽　後世に其名を傳ふること。【二】形質　この肉體をいふ。【三】名姓　ここでは名譽の義。【四】形名　おのが肉體と名譽。【五】誰我　我は誰か、おのが本體は如何なるものかといふ義。【六】吾先　吾が生まれぬ前の事。【七】恤我後　わが身後の事を心配する。【八】遺臭與流芳　晉書桓溫傳に「大丈夫、すでに芳を百世に流す能はざれば、復た臭を萬歳に遺すに足らざるか」とある。【九】付杯酒　晉書張翰傳に「我をして身後の名あらしむるも、卽時一杯の酒に如かず」とある。

【詩意】人は草木と異なりと雖も、松柏の長壽を享くるには及ばない。そこで、僅々たる百年の間に於て、辛苦經營、その名を不朽に傳へやうと思つて居る。元來、この形體は、天の與へたものであるが、名譽は、自分で取るのである。今形體も、名譽も、兩つながら、未だ十分に成立せず、抑も我が本體は如何なるものか、そんな事は、いくら考へたとて、仕方がない。すでに我が未生の前だに知ることが出來ぬ上は、死後の事など、考へる暇さへ無い筈である。或は臭を萬世に遺し、或は芳を百世に流す、そんな事は、どうでも善いので、唯だ冥然として、この世を遺れ、萬事を杯酒に付するに限る。

【餘論】この世に於ける名譽は、絶えて價値なく、それよりも、萬事を抛擲して、杯酒に親んだ方が善いといふので、名走利奔の輩は、これを誦して、少しく考ふべきである。

（一）裋褐乘（二）蓽輅。（三）狐裘駕（四）文車。　裋褐、蓽輅に乘じ、狐裘、文車に駕す。

（五）西門與北宮。窮達一何殊。　西門と北宮と、窮達、一に何ぞ殊なる。

彼達矜己智。此窮愧身愚。　彼は達して己の智に矜り、此は窮して身の愚を愧づ。

東郭發至言。兩惑各（六）以袪。　東郭、至言を發し、兩惑、各以て袪く。

厚薄有定命。巧拙果誰歟。　厚薄、定命あり、巧拙、果して誰ぞや。

歸臥掩（七）蓬室。道存何所吁。　歸臥、蓬室を掩ふ、道存す、何の吁するところぞ。

【字解】【一】裋褐　つぎの當つて居る短衣。【二】蓽輅　破れた車。【三】狐裘　狐の皮を綴り合せた上衣。【四】文車　飾を施した立派な車。【五】西門與北宮　列子の力命に「北宮子、西門子に謂つて曰く、朕、衣は裋褐、食は粢糲、居は蓬室、出づれば徒歩す。子の衣は文錦、食は粱肉、居は欕を連れ、出づれば駟を連ぬ。子、自ら德朕に過ぎたりと以爲へるか。西門子曰ふ、汝は事を造して窮し、予は事を造して達す、これ厚薄の驗か、と。北宮子、以て應ふるなし。東郭先生に過うて、その狀を言ふ。東郭先生曰く、汝と更に西門氏に之かむと。之に問うて曰く、汝の厚薄を言ふは、才德の差を言ふに過ぎず。吾の厚薄を言ふは、これに異なり。夫れ、北宮子は、德に厚くして命に薄し。汝は、命に厚くして德に薄し。汝の達は、智の得に非ざるなり。北宮子の窮は、愚の失に非ざるなり。皆天なり、人に非ざるなり。而して、汝は命の厚きを以て自ら矜り、北宮子は德の厚きを以て自ら愧づ、皆、かの固然

の理を知らず。西門子曰く、先生止めよ、予、敢て言はず、と。北宮子、すでに歸る。その裋褐を衣れば狐貉の温あり、その戎菽を進むれば稻粱の味あり、その蓬室を庇すれば廣厦の蔭の若く、その蓽輅に乘ずれば、文軒の飾の若く、終身逌然として、榮辱の彼に在り、我に在るを知らざるなり。東郭先生、これを聞いて曰く、北宮子の寐ぬる久し、一言にして能く悟る、怛し易きかな」とある。【六】各以袪　袪は說文に「摂却なり」とある。はらひ除く。北史に「魏の王肅、劉芳に謂つて曰く、吾少にして意を三禮に留む、今注釋を聞いて盡く平生の惑を袪く」とある。【七】蓬室　雜草が四面に生えて居る小家。

【詩意】一人は、ぼろの短衣を著て破れ車に乘り、一人は、狐の皮衣を著て立派な車に乘つて居る。前者は北宮子、後者は西門子、その窮達は、かくまで相異なつて居る。そこで、西門子は、達して、おのが智慮に矜り、北宮子は、窮して、その身の愚鈍を愧ぢて居る。その時、東郭先生は、至理ある名言を發し、北宮子は、德に厚くして命に薄く、西門子は、命に厚くして德に薄く、北宮子の窮は愚の失に非ず、西門子の達は智の得に非ずといつて、態態之を諭したから、二人とも、その惑を除くことが出來た。元來、命の厚薄は、定まつた運命であるし、世わたりの巧拙といふものも、さう役に立つものでない。されば、歸臥して草小屋に閉ぢ籠つて居ても善いので、苟くも、道の此に存するを悟らば、決して嘆息することはない。

【餘論】列子の一條を引き來りて敍述し、結末四句を論贊的に附記して、その眞意を明かにしたのである。かういふ筆法は、次の隱逸を詠じたる諸作に於ても、數ば見るところである。

（一）駑馬放二田野一。志本在二豐草一。　駑馬、田野に放たる、志、本と豐草に在り。

偶遇二執（二）策人一。驅上二千里道一。　偶ま策を執るの人に遇ひ、驅られて千里の道に上る。

顧非二乘（三）黃姿一。豈足レ辱二君（四）皁一。　顧るに乘黃の姿に非ず、豈に君の皁を辱しむるに足らむや。

負レ重力不レ任。哀鳴望二穹（五）昊一。　重きを負ふも、力任へず、哀鳴して穹昊を望む。

奈何相逢者。猶羨二羈（六）絡好一。　奈何か、相逢ふ者、猶ほ羈絡の好きを羨む。

【字解】【一】駑馬　やくざ馬。【二】執策人　鞭を手に持つた人。【三】乘黃　天馬の稱、杜甫の丹青引に、將軍得レ名三十載、人間復見眞乘黃とある。【四】君皁　史記鄒陽傳に「牛驥皁を同じうす」とあつて、注に「牛馬に食ます器」とある、卽ち飼料の容器。【五】穹昊　青天。【六】羈絡　韁など、首に卷きつけたものをいふ。

【詩意】やくざ馬が田野に放たれて居たが、その志は、豐かに生える草に食ひ飽きたいといふ丈である。然るに、料らずも、鞭を手に持つ御者が來て、どこかに見處ありと思つたのか、これを驅つて、千里の道に上り、やがて、自分の家に連れて往かうとして居る。馬の身になると、自分は、もとより乘黃などいふ天馬の姿でもなく、君の厩の末班を汚すべきものではなく、せめて重い物でも荷はうとしても、力任へず、折角の恩遇に酬ゆることが出來ない處から、天を仰いで悲しげに鳴いて居る。それだのに、道すがら相逢ふものは、くつわなどの見事なるを羨み、いづれ大した馬だらうといつて

居るが、まことに、愧ぢ入るばかりである。

【餘論】格別の才藝なく、誤って登庸された人の意中を忖度し、駑馬を以て之に擬したのである。世の儌倖を冀ふものは、宜しく、これを見て愧死すべきである。

(一)頽陽在川上。(二)玄蟬夕鳴悲。　頽陽は川上に在り、玄蟬、夕に鳴き悲む。
(三)娟娟風起波。(四)翻翻葉辭枝。　娟娟として、風、波を起し、翻翻として、葉、枝を辭す。
曠望天宇(五)內。(六)泬寥此何時。　曠望す天宇の內、泬寥これ何の時。
(七)朱火已盈謝。(八)清商屆其期。　朱火すでに盈謝、清商その期に屆る。
覽鏡忽自嗟。綠鬢生素(九)絲。　鏡を覽て忽ち自ら嗟す、綠鬢に素絲を生ず。
萬物有榮悴。造化豈吾私。　萬物に榮悴あり、造化、豈に吾を私せむや。

【字解】【一】頽陽　沈みかかつた太陽、卽ち夕日、王冷然の初月賦に望頽陽之初落、見微月之孤生とある。【二】玄蟬　法師蟬の類。【三】娟娟　そよそよと吹く。【四】翻翻　ひらひらと飄る。【五】天宇　宇は屋蓋、天が屋根の如く覆うて居る。【六】泬寥　さびしき貌。【七】朱火　火星、夏を司る。【八】清商　商は、音律上、秋に當り、その聲が極めて淸い。【九】素絲　白髮。

【詩意】殘る日は川原の上に落ちかかり、法師蟬は夕に當つて悲鳴し、風、そよそよと吹いて、江上に波を起し、ひらひらとして、木の葉は枝から離れて落ちる。天宇の內を曠望すると、一氣泬寥として、いかにも物さびしく見えるが、今は、何の時であるか、夏を司る火星は、その極點を過ぎて、西の空に流れ去り、涼しい商聲が頻りに聞こえ、世はまさしく秋である。鏡を見ると、わが綠鬢にも、ちよいちよい白髮が生えて來て、覺えず、嘆息する位。しかし、榮悴は、萬物ともに免れず、造化は自分にだけ私することも出來ず、かう成るのも、今さら致方のないことである。

【餘論】この首は、秋の來るを傷み、自分も亦た自然衰老することを云つたので、結二句が、全篇の本旨である。

(一)躑躅遠遊子。驅車上高山。　躑躅、遠遊の子、車を驅つて高山に上る。
高山多(二)隴坂。悲哉路何艱。　高山に隴坂多く、悲しいかな、路何ぞ艱なる。
(三)其顚摩(四)蒼穹。欲上不可攀。　その顚、蒼穹を摩し、上らむと欲するも攀づべからず。
日暮牛力疲。(五)前征(六)未能閒。　日暮れて、牛力疲れ、前征、未だ閒なる能はず。
雙輪忽中摧。一墮深谷間。　雙輪、忽ち中より摧け、一たび深谷の間に墮つ。
(七)引領望(八)黃鵠。失路何當還。　領を引いて、黃鵠を望む、失路、何ぞ當に還るべき。

【字解】【一】蹐跼　歩行困難の貌。【二】隴坂　隴も坂の義。【三】其顚　顚は巓に同じ。【四】蒼穹　青天。【五】前征　前に進み行く。【六】未能閒　休んで居ることが出來ぬ。【七】引領　首を延ばす。【八】黃鵠　黃い鵠の鳥、翼の力が强くて、一擧千里といはれて居る。

【詩意】とぼとぼと長旅する人が、車を驅つて高山に登りかけた。高山には、坂が多くて、路の險しいことは、悲むべく、そして峠の絕頂は天を摩する位、登らうと思つても、攀づることが出來ない。日は暮れかかつて、車を引く牛も、力が疲れたが、途中には宿かる處もないから、是非、ここを越えねばならぬので、決して、休んで居ることは出來ない。兎角する中に、車の兩輪は、中程より碎け、そして、車は自分を載せた儘、千仞の谷底に轉げ落ちて仕舞つた。さて如何したら善いか、首を差し伸ばして、黃鵠を目送し、一擧千里の翼を借らばやと思ふが、それも詮なく、かくの如く、不時の災難に罹つて、失路の厄に遇つた上は、どうして還ることが出來やうか、まことに、困り切つたことである。

【餘論】これは、行旅中、料らずも災厄に遇つたことを敍したので、この世に於ても、かういふことが、幾らもあるといふ意味を言外に含ませたものと見て差支は無い。

(一)蜀琴有奇紋。本是枯桐枝。　蜀琴に奇紋あり、本と是れ枯桐の枝。

(二)一彈舞鸞鶴。再彈下(三)靈祇。　一彈して鸞鶴を舞はし、再彈して靈祇を下す。

曾持薦黃帝。雲中(四)奏咸池。　かつて、持して黃帝に薦め、雲中に咸池を奏す。

棄置久(五)不調。(六)流塵被(七)朱絲。　棄置しく久しく調せず、流塵、朱絲に被る。

(八)終焉含妙響。未始有(九)成虧。　終焉、妙響を含む、未だ始より成虧あらず。

【字解】【一】蜀琴有奇紋　琴譜に「古琴、斷紋を以て徵となす、梅花紋・牛毛紋・蛇腹紋・龍紋・龜紋・氷裂紋あり」とある。古い琴には、紋樣の形が出て居る。【二】一彈舞鸞鶴　韓非子に「衛の靈公、晉に之く、師涓をして琴を鼓せしむ。師曠曰く、これ淸商なり、淸徵に如かず、と。師曠、琴を援つて鼓す。一たび之を奏すれば、玄鶴二八あり、南方より來り、再奏すれば列し、三たび之を奏すれば、頸を延べて鳴き、翼を舒べて舞ふ」とある。【三】靈祇　東征賦に「庶靈祇之鑒照」とある。祇は神祇・地祇の祇、矢張、神の義。【四】奏咸池　咸池は黃帝の樂、漢書に「黃帝、咸池を作る」とある。【五】不調　彈じない。【六】流塵　飛ぶ塵埃。【七】朱絲　卽ち朱絃、琴の絲。【八】終焉　永久の義。【九】成虧　損益・增損と同じ。

【詩意】蜀地から出た古琴には、珍らしい紋樣があつて、もとは、枯れた桐の材で造つたのである。その琴を一たび彈ずれば、鸞鶴、中天に舞ひ、再び彈ずれば、靈神、天より下り、自然の感應は、まことに大したものである。聞けば、ある時、これを黃帝に獻じ、仍つて、雲中に於て咸池の樂を奏したといふことである。かくの如き立派な琴を棄てツぽかした儘、久しく彈せず、その朱絃には、埃がかかつて居る。しかし、この琴は、永久に妙響を含んで居るので、はじめから、決して損益するとこ

ろなく、その特質は、依然として、今でも殘つて居る。

【餘論】これは、名だたる蜀琴が、いくら用ひられずに居ても、その本質は、決して變化しないといふので、材藝の士、世に用ひられずとも、眞價は依然として存する旨を暗諭したものと見ても善い。

達人貴(一)全生。外物等(二)秋草。　達人は、生を全うするを貴ぶ、外物は、秋草に等し。

顧此七尺軀。卽爲萬金寶。　顧るに、この七尺の軀、卽ち萬金の寶たり。

(三)昧者營所嗜。(四)棄捐不待老。　昧者は、嗜むところを營み、棄捐して、老を待たず。

豈無(五)室中貲。他人是來保。　豈に室中の貲なからむや、他人是れ來り保つ。

何如餌(六)金液。長令鬢顏好。　何ぞ如かむ、金液を餌し、長へに鬢顏をして好からしめむには。

【字解】【一】全生　生命を全うする。【二】等秋草　何等の價値なきこと。【三】昧者　道理を解知せざるもの。【四】棄捐　生命を棄てる。【五】室中貲　家の中に貯へてある財產。【六】金液　仙藥、列仙傳に「馬明生、安期生に從つて、金液神丹方を受く。乃ち華陰山に於て、金液を合す、天に升るを樂まず、但だ半劑を服して地仙となる」とある。

【詩意】至道に達したる人は、この生命を全うすることを第一とし、外物は、どんな貴いものでも、これを觀ること秋草の如く、唯だおのが七尺の身が卽ち萬金の寶だと思つて居る。これに反して、道理に昧いものは、心を外物に馳せ、その嗜むところの者を得やうといふので、せつせと働き、あたら、老年にも成らないのに、その生命を棄てて仕舞ふ。そこで、家の中には財產があつても、他人が來て之を占領する。されば、仙藥を服して、いつまでも、頭の毛や顏の色の艷艷しい樣に有りたいものである。

【餘論】達人は、生命を全うし、昧者は之を棄捐するといつて、兩兩對比した處は善いが、一轉して、金液を服することを勸めたのは、如何したものか。但し、その金液は、養生の方を具體的に、象徵的に指したので、必ずしも、普通道家の謂はる不死の藥では無いとすれば、先づ筋道は立つことに成らう。

(一)千秋取丞相。一語悟君衷。　千秋は丞相を取り、一語、君の衷を悟らしむ。

(二)長孺多讜言。白頭(三)擯居東。　長孺は讜言多く、白頭擯けられて東に居る。

(四)人命有通塞。(五)主聽無(六)違從。　人命、通塞あり、主聽、違從なし。

失如魚去波。得若雲遇龍。　失へば、魚の波を去るが如く、得れば、雲の龍に遇ふが若し。

會合感(七)冥相。佳期諒難逢。　會合、冥相を感じ、佳期、まことに逢ひ難し。

（八）卞生未聞道。（九）無事涕沾胸。　卞生、未だ道を聞かず、事なくして、涕、胸を沾す。

【字解】【一】千秋取丞相　漢書田千秋傳に「千秋、高寢郎たり。會ま、衞太子、江充に譖せられて敗る。これに久しうして、千秋、急變を上り、太子の寃を訴へて曰く、子、父の兵を弄す、罪、當に笞つべし。天子の子、過誤、人を殺す、何の罪に當るか。臣、かつて夢に一白頭翁を見る。臣に敎へて言はしむ、と。上、大に感悟し、召し見て之を說ぶ。謂うて曰く、これ高廟の神靈、公をして我に敎へしむ、公、當に遂に我が輔佐と爲るべし、と。立どころに千秋を拜して大鴻臚となす」とある。【二】長孺多讜言　漢書汲黯傳に「汲黯、字は長孺。はじめ、黯、九卿に列す。而して、公孫弘、張湯、小吏たり。弘の丞相に至り、侯に封ぜらるるに及び、湯、御史大夫たり、黯の時の丞史、皆同列たり、或は尊用これに過ぐ。黯、褊心、少望なき能はず、上を見て言つて曰く、陛下、羣臣を用ふる、薪を積むが如きのみ、後に來るもの上に居る、と。黯、淮陽太守に終る」とある。讜言は正しき言葉。【三】擯居東朝　朝廷より出されて淮陽太守となりしことを指す。【四】人命　人の運命。【五】主聽　人主の聽納。【六】無違從　その識見に因つて之に違ふとか從ふとかいふことなく、その折折の御機嫌次第で、決して一定しないといふ意。【七】感冥相　冥冥の中の相貌を以て、意氣互に相感ずといふこと。【八】卞生　卽ち卞和、韓非子に「楚人和氏、玉璞を楚山の中に得、厲王に獻ず。玉人をして之を相せしむ、曰く、石なり、と。玉、和を以て誑となし、その左足を刖る。武王卽位、又これを獻ず。相せしむ、曰く、石なり、と。その右足を刖る。文王卽位するに及び、和、乃ち其璞を抱いて、楚山に哭すること三日三夜、涙盡き、これに繼ぐに血を以てす。王、玉人をして其璞を理めしめて、寶を得たり、遂に命じて和氏の寶といふ」とある。【九】無事　玉を受け納められざりしこと。

【詩意】田千秋は、唯だの一語で、武帝をして中心自ら悟らしめて、丞相の位を取つたが、汲黯は、同じ武帝に對し、數ば正しき言葉を進めて諍論せしに因つて、老年に成つてから、朝廷から擯斥されて、東方の地方官となつて仕舞つた。人の運命には、通ずるあり、塞がるあり。人主の聽納は、その時の御機嫌次第で、定まつたる違從ある譯でもない。されば、一たび其處を失へば、魚の水を離れたるが如く、一たび其好運にめぐり合へば、雲の龍に遇ふが如くである。面と向つて逢ふ時には、冥冥の中なる相貌で、互に相感ずることもあるが、善き機會は、まことに逢ひ難いもので、君臣遇合、魚水の歡を爲すことは、先づ六づかしい。卞和の如きは、未だ道を聞かざりしが故に、君に聽納されざりしを苦にし、慟哭して、涙が胸を霑したが、さてさて氣の毒な事である。

【餘論】人命有通塞、主聽無違從は、千古不磨の名言で、君臣の關係は、決して、この外に出でない。會合感冥相、佳期諒難逢は、更に君臣遇合の難きを云つたので、人をして覺えず嗟嘆せしめる。

南山多浮雲。北山有高樹。　南山に浮雲多く、北山に高樹あり。
因風暫（一）來依。風回復飛去。　風に因つて暫く來り依り、風回れば復た飛び去る。
兄弟滿四海。幾人此相遇。　兄弟、四海に滿ち、幾人か、此に相遇ふ。
握手交百歡。（二）分襟滋千慮。　手を握つて百歡を交へ、襟を分つて千慮を滋くす。
踪跡（三）不可常。無（四）爲嗟去住。　踪跡、常とすべからず、無爲にして去住を嗟す。

【字解】【一】來依 雲が飛んで來て木に依る。【二】分襟 袂を分つといふに同じ。【三】不可常 一定して居らぬ。【四】無爲 何を爲すともなく。

【詩意】南山には浮雲多く、北山には高い木がある。そこで、風が吹くと、雲は飛んで來て木に依るが、風が逆に吹くと、再び飛び去つて仕舞ふ。四海の中は皆兄弟で、ここに相逢ひしものは、幾人といつて數へ切れぬ位。その相見て、手を握るに當つては、百歡を交へるが、相別れて、袂を分つときには、千慮が滋く生ずる。そして我と彼とは、前に云つた南山の雲と北山の樹とのやうなもので、彼は蹤跡常ならず、はては、何處に居るか分からぬ位。われは、爲すべき便だになく、唯だ彼の去住の忽然たるを嗟嘆するのみである。

【餘論】この首は、交友の聚散常ならざるを云つたので、雲樹の喩も、稍や面白く、結末二句、まことに哀惋を極めて居る。

鴻鵠橫四海。鷦鷯戀蓬榛。　鴻鵠は四海を橫ぎり、鷦鷯は蓬榛を戀ふ。

長松凌風煙。小草亦自春。　長松は風煙を凌ぎ、小草亦た自ら春。

各稟造化育。逍遙適其眞。　各〻造化の育を稟け、逍遙その眞に適す。

無將赫赫者。下比棲棲人。　赫赫の者を將て、下、棲棲の人に比する無かれ。

【字解】【一】鴻鵠 鴻は雁の大なるもの、鵠は白鳥、漢書張良傳に「高帝歌うて曰く、鴻鵠高飛、一擧千里、羽翼已就、橫絕四海」とある。【二】鷦鷯 みそさざい、說文に「俗、黃脰雀と呼ぶ。喙、銳くして針の如し」とあり、莊子の逍遙游に「鷦鷯は深林に巢ふも、一枝に過ぎず」とある。【三】稟 受ける。【四】造化育 天地自然の化育。【五】逍遙 自ら滿足して居る。【六】適其眞 その本來の特性に適合す。【七】赫赫 功名の盛なること。【八】棲棲 こせこせと働いて居るもの。

【詩意】鴻鵠は、一擧千里、四海を橫絕するが、鷦鷯は、草藪を戀ひ慕うて、決して、其處から離れない。長松は、亭亭と高く聳えて、風煙を凌ぐが、小さい草は、それ相應に花を咲いて居る。かくの如く、あらゆる物は、各自に天地自然の化育を受けて、自ら滿足し、その本來の特性に適合して居る。されば、赫赫の功名ある者を以て、下、こせこせと働いて居るものに比較して、枉げて、その是非を云うてはならぬ。

【餘論】この首は、萬物、たとひ表面上、大小の別ありとも、各〻天地の化育を受けて、逍遙自在、その適を適とする上から云へば、全然同一であるといつて、普通謂はゆる是非高下の別を抹殺したのである。

詠隱逸十六首

向長

(一)子平謝(二)(三)累辟。(四)雅志在隱居。
家貧或有(五)饋。取足反其餘。
讀易深自悟。謂賤貴不如。
(六)敕言嫁娶畢。家事無關余。
同好有(七)禽生。肆意相與娛。
(八)茫茫(九)五嶽去。孰得回其車。

隱逸を詠ず　十六首

向長

子平、累辟を謝し、雅志、隱居に在り。
家貧にして或は饋るあり、足るを取つて、その餘を反す。
易を讀んで、深く自ら悟り、謂ふ、賤は貴も如かずと。
敕して言ふ、嫁娶畢れり、家事、余に關する無かれと。
同好に禽生あり、意を肆にして相與に娛む。
茫茫として五嶽に去る、孰れか其車を回すを得む。

【字解】【一】子平　向長の字。【二】謝　謝絕、拒絕。【三】累辟　打ちつづけて召し出す。【四】雅志　宿志に同じ、本來の志望。【五】有饋　物を贈る。【六】敕言　敕して言ふ、嚴しく言ひつける。【七】禽生　漢書の注に「禽慶、字は子夏」とある。【八】茫茫　その行の遠きをいふ。【九】五嶽　卷一、將進酒に見ゆ、泰山・衡山・華山・恒山・嵩山で、支那本土の堆鎭となれる名山五座を合稱す。

【題義】ここに謂はゆる隱逸は、後漢と唐との兩時代を限り、盡く正史に見えたものばかりである。後漢の前にも、唐以後にも、無論、その人は有るが、正史には見えないから、すべて省略に從つたのである。元來、隱逸者流は、出世間的願望を有し、世事と相關せず、全く無用の者らしくも見えるが、世が次第に澆季に流れ、錙銖の利を漁り、攻伐鬪爭を事とするといふ樣な時代に方りて、その淸節高操は、まさしく、一服の淸涼劑に當つべく、貪夫をして廉に、懦夫をして起たしめ、風敎の助けにも成る處から、東漢でも、殊に之を尊崇し、從つて、はじめて正史に其傳を載せるやうに成つた。靑邱が此に之を詠出したのも、同じ趣旨に本づいたものであらうし、又、彼の居たのは、元明交替の世で、愈よその標榜の必要を認めたからであらう。以下、題目となつた其人の略傳を述べ、每首これに倣ふことにする。向長の事は、後漢書逸民傳に「向長、字は子平、河內朝歌の人なり、隱居して仕へず、性、中和を尙び、好んで老易に通ず、貧にして資食なし、好事者、更る〻饋る、これを受くる、足るを取つて、その餘を反す。王莽の大司空王邑、これを辟し、莽に薦めむと欲す、固辭して、乃ち止み、ひそかに家に隱る。易を讀んで、損益の卦に至り、喟然として歎じて曰く、吾、すでに富の貧に如かず、貴の賤に如かざるを知る　但だ未だ死の生に如何を知らざるのみ、と。建武中、男女嫁娶すでに畢り、敕すらく、家事を斷つて相關するなからしむること、當に我が死の如くなるべしと。ここに于て、遂に意を肆にし、同好北海の禽慶と俱に、五嶽名山に遊び、竟に終るところを知らず」とあり、高士傳には、向を尙に作つてある。

【詩意】向子平は、しきりに徵し出されたが、固く之を謝絕し、その本志は、隱居して其性命を全う

するに在つた。その家の貧しい處から、或は衣食物品などを贈る人もあつたが、必要なる最小限だけを受け取つて、餘れるをば歸して仕舞つた。平生、易を讀んで、深く其理を悟り、賤は貴も及ばずといつて居た。かくて、堅く家人どもに言ひつけ、一家の事は、然るべく取り賄つて、自分を煩はすなといひ、同好の士 禽慶と共に、意を肆にして相娛み、はては、遙に五嶽に出かけて仕舞つたが、誰も其車を引き戾すことが出來なかつた。

【餘論】唯だ事實を敍述したに過ぎぬが、その間、自然に論賛の意味もあつて、絕えて、平板に失せぬ處が面白い。この題十有六首、大抵、同一の筆法である。

周黨

(一)世祖初厭武。(二)開觀在(三)東都。
(四)使者遍巖藪。(五)旌帛召賢儒。
(六)伯況亦暫起。(七)綃頭詣尙書。
引見伏自陳。始願不敢渝。
(八)周興有恥食。(九)堯禪或羞汗。
士固有本志。聖主焉能拘。
(一〇)范生乃見毀。咄爾何其愚。

周黨

世祖、初めて武を厭ひ、觀を開いて、東都に在り。
使者、巖藪に遍ねく、旌帛、賢儒を召す。
伯況、亦た暫く起ち、綃頭、尙書に詣る。
引見せられ、伏して自ら陳ず、始願敢て渝らず。
周興つて食を恥るあり、堯禪つて或は汗されむことを羞づ。
士、もとより本志あり、聖主、焉んぞ能く拘せむ。
范生、乃ち毀らる、咄、爾、何ぞ其れ愚なる。

【字解】【一】世祖　光武帝。【二】開觀　太學を創設する、通鑑に「建武五年、はじめて太學を起す」とある。【三】東都　卽ち洛陽、一統志に「成王、洛邑を營んで東都となし、東漢、ここに都す、今の河南府」とある。【四】遍巖藪　巖谷林藪の間を殘らず尋ね廻る。【五】旌帛　旗を樹て幣物を用意して之を迎へる。【六】伯況　周黨の字。【七】綃頭　頭巾。【八】周興有恥食　史記伯夷傳に「ここに於て、伯夷叔齊、之を恥ぢ、義として周の粟を食はず、首陽山に隱れ、薇を采つて之を食ふ」とある。【九】堯禪或羞汗　高士傳に「堯、許由を召して、九州の長となす。由、これを聞くを欲せず、耳を潁水の濱に洗ふ。時に、其友巢父、犢を牽いて之に飲はむと欲す。由の耳を洗ふを見て、その故を問ふ。由、以て告ぐ。巢父曰く、子、もし高岸深谷に處らば、人道通ぜず、誰か能く子を見む。子、もと名譽を求めむと欲す。吾、犢の口を汙す、と。犢を上流に牽いて之に飲ましむ」とある。【一〇】范生　卽ち范升、題義の條を見よ。

【題義】周黨の事は、後漢書逸民傳に「周黨、字は伯況、太原廣武の人なり。王莽、位を竊む、疾に託して門を杜ぐ。建武中、徵されて議郞となる、病を以て職を去り、遂に妻子を將ゐて黽池に居る。復た徵さる、已むを得ず、乃ち短布の單衣、穀皮の綃頭を著け、尙書に待見す。光武の引見するに及び、黨、伏して謁せず、自ら陳ぶ、願はくは、志ざすところを守らむ、と。帝、乃ち許す。博士范升、奏して黨を毀り、私に虛名を竊み、上に誇り、高きを求む、大不敬なりといふ。書、奏す。天子、以て公卿に示し、召して曰く、古しへより、明王聖主、必ず不賓の士あり。伯夷叔齊、周の粟を食は

す、太原の周黨、朕の祿を受けず、亦た各〻志あり、其れ帛四十匹を賜へ、と。黨、遂に黽池に隱居し、書上下篇を著して終る」とある。

【詩意】後漢の光武帝は、卽位の後、武を厭ひ、文敎を以て天下を治めむとし、東、洛陽に於て太學を創設した。次いで使者を遣して、遍ねく巖谷林藪の間を詮索せしめ、旌旗を押し立て、幣帛を用意して、當時の賢儒を召し出させた。そこで、わが伯況も、止むを得ず、しばらく其身を起し、頭巾の儘で、尙書の處に往き、やがて御前に引見されると、伏して自ら志望を陳し、本來の願は、敢て渝らぬから、どうか故鄕に還して下さいといつた。むかし、周の始めて興つた時、伯夷叔齊は、その粟を食ふを恥とし、堯が位を禪らうといつたので、許由は、耳を汚されたことを羞ぢたといひ、士たるものは、固より本志ある以上、如何なる聖主でも、どうして之を拘束することが出來やうか。光武帝が周黨の志を諒として、これを放ち還されたのは、まことに宜しい。ここに、博士范升といふもの、周黨を以て虛名を竊むものとし、非常に惡口を言つたが、咄、咄、汝は如何なれば、かくの如く愚であるか、丸で御話にも成らぬ次第である。

【餘論】周興有恥食の四句、光武の意中を忖度したので、事實に沿うて議論を行り、范生は、更に其餘波である。

王霸

（一）儒仲有清節。始一應徵命（二）。
儒仲、清節あり、はじめ、一たび徵命に應ず。

（三）造廷抗（四）高辭。不肯臣（五）萬乘。
廷に造つて、高辭を抗げ、萬乘に臣たるを肯んぜず。

歸來自耕野。（六）蓬藋掩門逕。
歸り來つて、自ら野に耕し、蓬藋、門逕を掩ふ。

（七）翩翩故人子。相過（八）容服盛。
翩翩たる故人の子、相過ぎて容服盛なり。

一念（九）兒曹羞。客去臥如病。
一たび兒曹の羞を念ひ、客去つて臥する、病むが如し。

賴有賢婦言。不失（一〇）初守正。
賴に賢婦の言あり、初めの守正を失はず。

（一一）嘉遯遂終身。（一二）清輝兩相映。
嘉遯、遂に身を終り、清輝、兩つながら相映ず。

【字解】【一】儒仲　王霸の字。【二】徵命　召し出しの敕命。【三】造廷　朝廷に至る。【四】抗高辭　立派な言葉を聲高に述べる。【五】萬乘　天子を指す。【六】蓬藋　よもぎ等の雜草。【七】翩翩　凡近を拔き出でた貌。【八】容服　儀容服飾。【九】兒曹　おのが子息。【一〇】初守正　初めの守正と訓ずべし。初めから正義を守つて居た其本志。【一一】嘉遯　易に嘉遯貞吉とあつて、その身を全うして隱遯すること。【一二】清輝兩相映　兩は王霸の夫妻をいふ。

【題義】王霸の事は、後漢書逸民傳に「王霸、字は儒仲、太原廣武の人なり。少にして淸節あり、王莽、位を簒するや、冠帶を棄て、交宦を絶つ。建武中、徵されて尙書に到る、拜するに名を稱して、

臣と稱せず。有司、その故を問ふ。霸曰く、天子、臣とせざるところあり、諸侯、友とせざるところあり、と。病を以て歸り、隱居志を守り、茅屋蓬戶、連りに徵せども至らず」とあり、又、列女傳に「はじめ、霸、同郡の令狐子伯と友たり、後、子伯、楚の相となり、而して、その子、郡の功曹となる。子伯、乃ち子をして書を霸に奉せしむ。車馬服從、雍容如たり。霸の子、方に野に耕す、賓の至るを聞き、耒を投じて歸り、令狐の子を見るや、沮怍して、仰ぎ視ること能はず。霸、これを目して愧容あり。客去つて、久臥して起たず。妻、怪んで其故を問ふ。はじめ、肯て言はず。妻、罪を請ふ。而して後、言うて曰く、吾、子伯と、もとより相若かず。さきに、その子を見るに、容服甚だ光り、擧措適するあり、而して、我が兒、蓬髮歷齒、未だ禮を知らず、すなはち客を見て慚色あり。父子恩深し、覺えず、自失するのみ。妻曰く、君、少にして清節を修め、榮祿を顧みず、今子伯の貴きも、君の高きに孰れぞや。奈何ぞ、宿志を忘れて、兒女子に慚づるや、と。霸、屈起して笑うて曰く、これある哉、と。遂に共に終身隱遯す」とある。

【詩意】王霸は、清節を身に體し、その初、一たび徵命に應じて上京したが、朝廷に至つて、立派なる言葉を聲高に述べ、萬乘の天子に臣たることを承諾せず、やがて、故鄉に歸つて來て、野に耕し、その住居は、よもぎ等の雜草が門徑を掩うて居た。ここに、舊友令狐子伯の子息は、翩翩として、まことに容子が善く、儀容車服を立派にして、訪問した。すると、王霸の倅は、自分の賤しく且つ田舍臭きを顧みて、ひどく、羞ぢ入つたので、王霸は、客去りし後、それを苦にして、橫に成つた儘、久しく起きず、丸で病氣の樣であつたが、幸にして、賢婦の言葉の爲に、すつかり思ひかへし、正を守るといふ本來の初志を失はず、終生、その身を全うして隱遯し、夫妻、打揃つて、淸い光輝は、互に相映ずるばかりであつた。

【餘論】翩翩故人子の四句は、波瀾抑揚の妙を添へ、全篇をして平板に失することなからしめたので、その事實が、旣に文章の妙を爲して居る。

梁鴻

(一)伯鸞古賢人。乃在二(二)杵臼間一。
夫婦共守レ志。逃レ名入二深山一。
凄涼(三)五噫歌。東出過二(四)帝關一。
齊魯復荊吳。長往遂不レ還。
爲レ(五)傭豈無レ勞。顧レ己少二外患一。
終葬二(六)烈士旁一。高風邈誰攀。

梁鴻

伯鸞は、古しへの賢人、乃ち杵臼の間に在り。
夫婦、ともに志を守り、名を逃れて深山に入る。
凄涼たり、五噫の歌、東に出でて、帝闕を過ぐ。
齊魯、復た荊吳、長往、遂に還らず。
傭となる、豈に勞なからむや、己を顧みて、外患少し。
終に烈士の旁に葬り、高風、邈として誰か攀ぢむ。

【字解】【一】伯鸞　梁鴻の字。【二】杵臼　きねと臼、米舂の道具。梁鴻は、呉に來りし後、雇はれて、米を舂くことを職業として居た。【三】五噫歌　卷二、五噫歌の條に見ゆ。【四】帝闕　函谷關を指す。【五】傭　日雇取。【六】烈士　要離を指す、呉王闔閭の爲に、呉の公子慶忌を刺し殺し、その後、自殺した。その詳は、呉越春秋に見ゆ。

【題義】梁鴻の事は、卷二、五噫歌の條にも略述したが、後漢書逸民傳に「梁鴻、字は伯鸞、扶風平陵の人なり。家貧にして節介を尚ぶ。同縣の孟氏に女あり、狀、肥醜にして黒く、力、石臼を擧ぐ。對を擇んで嫁せず、年三十に至る。父母、その故を問ふ。女曰く、賢、梁伯鸞の如きものを得むと欲すと。鴻聞いて之を聘す。女、布衣・麻屨・織作筐・緝績の具を作るを求む。嫁するに及び、はじめ裝飾を以て門に入る。七日にして、鴻、答へず。妻、乃ち牀下に跪いて罪を乞ふ。鴻曰く、吾、裘褐の人、與に倶に深山に隱るべきものを欲す。爾、今、綺縞を衣、粉墨を傅く、豈に鴻の願ふところならむや。妻曰く、以て夫子の志を觀むと欲するのみ、妾、自ら隱居の服あり、と。乃ち更めて椎髻を爲し、布衣を著け、操作して前む。鴻、大に喜んで曰く、これ眞に梁鴻の妻なり、能く我に奉せよ、と。これを字して德曜といひ、孟光と名づく。霸陵山中に入り、耕織を以て業となし、詩書を詠じ、琴を彈じて、以て自ら娛む。東、關を出でて、京師を過ぐるや、五噫の歌を作る、肅宗、聞いて之を非とし、鴻を求むれども得ず。乃ち姓名を易へて、齊魯の間に居り、又去つて呉に適き、大家皐伯通に依り、廡下に居り、人の爲に賃舂す。歸る每に、妻、爲に食を具へ、敢て鴻の前に於て仰視せず、案を擧げて眉に齊しうす。伯通、察して、之を異んで曰く、かの傭、その妻をして之を敬せしむること、此の如し、凡人に非ざるなり、と。乃ち方に之を家に舍す。鴻、ひそかに閉ぢ、書十餘篇を著す。疾んで且つ困むや、主人に告げて曰く、むかし、延陵の季子、子を嬴博の間に葬つて、鄕里に歸らず、愼んで、我が子をして、喪を持して歸り去らしむる勿れ、と。卒するに及び、伯通等、爲に葬地を呉の要離の冢傍に求む。咸な曰く、要離は烈士、而して、伯鸞は淸高、相近づかしむべしと。葬畢るや、妻子扶風に歸る」とある。

【詩意】梁伯鸞は、古しへの賢人であるが、人の爲に、賃舂をして、杵や臼の間に踞つて居た。その初、妻の孟光と共に、隱居の志を守り、名譽を逃れて、深山に入つた。やがて、東に出でむとして、函谷關を過ぐるとき、五噫の歌を作り、その音調は、極めて凄涼であつた。その後、齊魯より荊呉に赴き、そこへ往つたなり、遂に北に歸らなかつた。人の爲に賃仕事をするのは、隨分骨の折れることであつたらうが、己を顧みて、外患少きことを喜んだ。それから、伯鸞が死ぬと、烈士要離の墓側に葬つたといふが、その高風は、邈然として、高く世を出で、到底眞似の出來ぬ位である。

【餘論】「爲㆑傭豈無㆑勞、願㆑己少㆓外患㆒」は梁伯鸞の晚年を盡して、復た餘蘊なく、まことに、簡警の極である。

法眞

(一)高卿關西儒。好學賤榮祿。
閉門不交世。弟子相誦讀。
太守者何人。欲(二)以吏見錄。
誓在南山南。胡肯勞案牘。
連徵終不就。(三)皦皦離垢俗。
(四)郭子有頌詞。(五)玄德久愈暴。(六)

法眞

高卿は、關西の儒、學を好んで、榮祿を賤む。
門を閉ぢて、世に交はらず、弟子、相誦讀。
太守は何人ぞ、吏を以て錄せられむとす。
誓つて南山の南に在り、胡ぞ肯て案牘を勞せむ。
連りに徵せども、終に就かず、皦皦として垢俗を離る。
郭子、頌詞あり、玄德、久しうして愈よ暴はる。

【字解】【一】高卿　法眞の字。【二】欲以吏見錄　錄して官吏に登庸する。【三】皦皦　潔白なること。【四】郭子　郭正を指す、題義の條を見よ。【五】玄德　法眞の號とある處から、特に之を用ふ、玄妙なる德。【六】暴　あらはる。

【題義】法眞の事は、後漢書逸民傳に「法眞、字は高卿、扶風、郿の人、南郡太守雄の子なり。學を好んで、常家なく、博く內外の圖典に通じ、關西の大儒たり。弟子、遠方より至るもの、陳留の范冉等、數百人。性恬靜寡欲、人間の事に交らず。太守、これを見むことを請ふ。眞、乃ち幅巾、詣り謁す。太守、功曹を以て相屈せむとす。眞曰く、明府待たるるに禮あるを以てす、故に敢て自ら賓末に同じうす。もし之を吏にせむと欲せば、直に將に北山の北、南山の南に在らむ、と。太守矍然として、敢て復た言はず。公府に辟され、賢良に擧げられしが、皆就かず。同郡の田羽、眞を薦む。帝、心を虛しうして致さむと欲し、前後四たび徵されしが、終に降屈せず。友人郭正、これを稱して曰く、法眞、名は聞くを得べきも、身は得て見がたし、名を逃れて名我に隨ひ、名を避けて名我を追ふ、百世の師たるものと謂ふべし、と。乃ち共に石を刋つて之を頌し、號して、玄德先生といふ」とある。

【詩意】法眞は、關西の儒者、學問を好んで榮華利祿を賤み、門を閉ぢて閒居し、決して、世人と交際しなかつたが、弟子どもは、遠方より至り、互に誦讀をして、業を受けて居た。その地の太守は、如何なる人ぞ、愚にも、この法眞を屈して、役人に登用しやうとしたが、法眞は、さういふ事ならば、南山の南に往つて隱れて仕舞ふといひ、決して、案牘に煩はされることはなかつた。その後も、天子から連りに徵されたが、遂に之に就かず、皦皦として、世の塵垢鄙俗を離れ、生涯、その身を淸くした。友人の郭正といふものが頌詞を作つて、これを石に刻した爲に、その玄德は、時を經て後、愈よ世に著聞するやうに成つた。

【餘論】誓在南山南は、法眞の語を其儘に用ひたのであるが、渾然融化、絕えて痕跡を露はさぬ處は、例の慣用手段で、數ば見るも倦かざるものである。

韓康

(一)伯休始賣藥。志將晦當時。
(二)如何不二名。乃爲女子知。
(三)玄纁强見聘。使至焉得辭。
(四)淩晨自先發。不駕(五)安車馳。
(六)亭長遠迎候。未識(七)徵君誰。
(八)修道奪其牛。解與不復疑。
(九)中途遂長遁。蹤跡竟莫追。
乃知(一〇)超雲驥。(一一)塵轡何由羈。(一二)

韓康

伯休、はじめ藥を賣る、志、將に當時に晦まさむとす。
如何か、名を二にせず、乃ち女子に知らるるや。
玄纁、强ひて聘せらる、使至る、焉ぞ辭するを得む。
淩晨、自ら先づ發し、安車に駕して馳せず。
亭長、遠く迎へ候し、未だ識らず徵君は誰なるかを。
道を修して其牛を奪ふ、解き與へて復た疑はず。
中途、遂に長遁、蹤跡、竟に追ふ莫し。
乃ち知る、超雲の驥、塵轡、何に由つてか羈せむ。

【字解】〔一〕伯休　韓康の字。〔二〕不二名　名は價、かけ値をいはぬ。〔三〕玄纁　黒い絹、それを幣物として賜ふ。〔四〕淩晨　早朝に同じ。〔五〕安車　ひどく動揺せぬ様にした車。今なら護謨輪であるが、この頃は、蒲輪といつて車輪を蒲の穂で包んであつた。〔六〕亭長　驛長に同じ。〔七〕徵君　天子より徵し出された人。〔八〕修道　路を修繕する。〔九〕中途　卽ち途中。〔一〇〕超雲驥　雲を飛び越える名馬。〔一一〕塵轡　世間なみの手綱。〔一二〕羈　縛る、つなぐ。

【題義】韓康の事は、後漢書逸民傳に「韓康、字は伯休、京兆霸陵の人。常に藥を名山に采つて、長安の市に賣り、口、價を二にせざること三十餘年。時に女子あり、康に從つて藥を買ふ。康、價を守つて移らず。女子怒つて曰く、公は是れ韓伯休、那んぞ乃ち價を二にせざるか。康、歎じて曰く、我本と名を避けむと欲す、今、少女子、皆我あるを知る、何ぞ藥を用ふるを爲さむ、と。乃ち遯れて霸陵山中に入る。博士公車、連りに徵せども至らず。桓帝、乃ち玄纁の禮を備へ、安車を以て之を聘す。使者、詔を奉じて康に造る。康、已むを得ずして乃ち許諾し、安車を辭し、自ら柴車に乘じ、晨を冒し、使者に先つて發し、亭に至る。亭長、韓徵君、當に過ぐべきを以て、方に人牛を發して道橋を修す。康が柴車幅巾を見るに及び、以て田叟と爲すなり、その牛を奪はしむ。康、卽ち駕を釋いて之に與ふ。頃らくあつて使者至る。牛を奪ふ翁は、乃ち徵君なり。使者、奏して、亭長を殺さむと欲す。康曰く、これ老子より之を與ふ、亭長、何の罪かあらむ、と。乃ち止む。康、因つて道より逃遁し、壽を以て終る」とある。

【詩意】韓伯休は、はじめ、長安市中に於て藥を賣り、その身を當世に晦ますことを本志として居た。然るに、かけ値をしないといふので、女子にまで、その姓名を知られて仕舞つた。そこで、天子は、玄纁の禮を備へて、無理にも、これを招聘せむとして、使者が態態遣つて來たから、どうしても斷ることが出來ず、朝早く使者に先つて、出發したが、自分の柴車に乘つて、安車には乘らなかつた。亭長は、遠く出迎へに來て居たが、韓徵君の何人なるかを知らず、道路を修繕しつつ、その車を引く牛

を奪はうとすると、韓伯休は、大人しく牛を解き與へて、少しも踟躕しなかつた。かくて、途中から逃げ出し、何處へ往つたか、その蹤跡は、つき止めることが出來なかつた。それも其筈、雲を飛び越す様な名馬は、世間なみの手綱で縛りつけて置くことが出來ぬからである。

【餘論】結二句は、論賛的に附け加へたので、これが爲に、韓伯休の人物氣節は、一層明かに成つて居る。

陳留老父

漢衰黨(一)獄起。朝柄在(二)刑(三)餘。　漢衰へて、黨獄起り、朝柄、刑餘に在り。

(四)皇皇外黃令。去官返鄉閭。　皇皇たる外黃の令、官を去つて鄉閭に返る。

(五)班草逢故人。涕泣語路隅。　草を班つて、故人に逢ひ、涕泣して路隅に語る。

邦危德無援。忠良恐遭誅。　邦、危くして、德、援なし、忠良、恐らくは誅に遭はむ。

有叟過其傍。植(六)杖爲踟躕。　叟あり、その傍を過ぎ、杖を植てて爲に踟躕。

(七)睨之歎且言。何悲二大夫。　これを睨て、歎じ且つ言ふ、何を悲む二大夫。

鸞鳳不隱羽。安能免罝(八)罦。　鸞凰羽を隱さざれば、安んぞ能く罝罦を免れむ。

欲問不肯顧。飄然邁(九)長途。　問はむと欲するも、肯て顧みず、飄然として長途を邁く。

賢哉此老翁。嗟嗟乃誰歟。　賢なるかな此老翁、嗟嗟、乃ち誰か。

【字解】【一】黨獄　朋黨の獄。桓帝の時、宦官が權を專らにして、李膺・陳蕃等、當時の名士を一網に打ち盡し、それから天下騷擾し、やがて、黃巾の亂となり、漢祚遂に亡ぶる樣に成つた。【二】朝柄　朝廷の大柄。【三】刑餘　宋史天文志に「宦者四星、刑餘の臣なり」とある。宦者は、もと宮刑に處せられ、生殖本能を斷絕されたものなるが故に云ふ。【四】皇皇　あわてて落ちつかぬ貌。【五】班草　草を分つて道傍に憩ふ。【六】植杖　杖を立てる。【七】睨之　なつかしげに之を見る。【八】罝罦　詩經に肅肅兎罝とあり、雉離于罦とある。說文に「罝は兎罔なり」とあり、爾雅に「罦は覆車なり」とあつて、その注に「今の翻車なり、兩轅あり、中に罥を施し、以て鳥を捕へ、展轉して相解く」とある。すると、罝は兎網、罦は其構造稍や不明ではあるが鳥を捕ふる車。【九】邁　行く。

【題義】陳留老父は、姓名不詳、その事は、後漢書逸民傳に「陳留老父は、何許の人たるを知らざるなり。桓帝の世、黨錮の事起る。守外黃令陳留の張升、官を去つて鄉里に歸らむとし、道に友人に逢ひ、ともに草を班つて言ふ。升曰く、吾聞く、趙、鳴犢を殺す、仲尼、河に臨んで反る。巢を覆し淵を竭せば、龍鳳逝いて至らず。今、宦豎日に亂れ、忠良を陷害す、賢人君子、其れ朝を去るか。夫れ德の建たざる、人の援なき、將に性命の免れざらむとす、奈何、と。因つて、相抱いて泣く。老夫、趨つて之を過ぎ、その杖を植て、太息して言うて曰く、吁、二大夫、何ぞ泣くことの悲しきや。夫れ龍は鱗を隱さず、鳳は羽を藏さず、網羅高く懸る。去つて將に安くにか處らむとする。泣くと雖

も、何ぞ及ばむや、と。二人、これと語らむと欲す、顧みずして去り、終るところを知るなし」とある。

【詩意】東漢の世も、次第に衰へかかり、朋黨の獄が起り、朝廷の大柄は、刑餘の人たる宦官輩の手に歸して仕舞つた。ここに、外黃の令の張升といふもの、皇皇として官を辭し、一先づ其故郷に歸らうとして、旅をして居る内に、ゆくりなくも、その友人に遇ひ、草を分つて藉き、涕泣しつつ路隅に於て相語り、刻下の狀況、邦、愈よ危く、そして、折角德があつても、援けるものなく、やがて、忠良の士は、誅戮に遇ふかも知れないといつて居ると、一人の老叟が其傍を通りかかり、これを聞くと、杖を地に立てて、去りもあへず、なつかしげに見下しつつ、さて嘆息して云ふには、二大夫は何を悲むか、鸞鳳にしても、その羽を隱さなければ、どうして網を免れやう、いづれ、ひどい目に遇ふ。この際、才德あるものは、韜晦して、人に知られぬ樣にするのが肝腎であるといつた。二大夫、これを聞いて、成程と思ひ、これに問はむとしたが、敢て顧みず、飄然長途を經て、どこかへ往つて仕舞つた。賢なるかな、この老翁、いづれ然るべき人の成れの果であらうが、かくまで悟り切つて居れば、決して禍を受けることもなく、徒に嗟嘆するものは誰か、要するに、隱居以て其身を全うすることを解せぬものである。

【餘論】後漢書の原文には「德の建たざる、人の援なき」とあるのを、ここでは、簡約にして「德の援なき」といつたのは、聊か盡して居らぬ樣であるが、大體に於ては、差支なからう。結末二句は、例の論贊で、かの氣節を賣つて、爲に其身を喪ひしものどもを嘲笑したのである。

龐公

南陽有龍鳳。乘時各飛翻。
鴻鵠獨深棲。不肯居籠樊。
皤皤隴上耕。遠辱刺史軒。
豈不念子孫。遺安乃名言。
采藥不復返。亭亭空鹿門。

龐公

南陽に龍鳳あり、時に乘じて各〻飛翻。
鴻鵠、獨り深く棲み、肯て籠樊に居らず。
皤皤として隴上に耕し、遠く刺史の軒を辱うす。
豈に子孫を念はざらむや、安を遺す、乃ち名言。
藥を采つて復た返らず、亭亭として空しく鹿門。

【字解】【一】南陽　荊州に在る。【二】龍鳳　諸葛亮・龐統の二人を竝稱す。龐德公傳に「諸葛亮・司馬徽及び從子統を賞器す。かつて云ふ、孔明は臥龍なり、士元は鳳雛なり、德操は水鏡なり」とある。孔明は亮の字、士元は統の字、德操は徽の字。【三】籠樊　樊はかこひ。【四】皤皤　頭髮の白き貌。【五】刺史軒　軒は車、荊州刺史劉表が襄陽車で訪問した。【六】遺安　龐公の言に「今、ひとり、之に遺すに安を以てす」とある。なほ其詳は、題義の條を見よ。【七】鹿門　山の名、一統志に「襄陽城の東南に在り」と見ゆ。

【題義】龐公の事は、後漢書逸民傳に「龐公は、南郡襄陽の人なり、峴山の南に居り、未だ嘗て城市に入らず、夫妻相敬すること賓の如し。荊州刺史劉表、數ば延請するも、屈する能はず、乃ち就いて之を候して曰く、夫れ一身を保全するは、天下を保全するに孰れぞや、と。龐公笑つて曰く、鴻鵠は高林の上に巣ひ、暮にして棲むところを得、黿鼉は深淵の下に穴し、夕にして宿するところを得。夫れ趣舍行止、亦た人の巣穴なり、且つ各〻その棲宿を得るのみ、天下は保つところに非ざるなり、と。因つて、釋てて隴上に耕し、妻子前に耘る、表、指して問うて曰く、先生、苦に畎畝に居つて、官祿を肯んせず、後世、何を以て子孫に遺すか、龐公曰く、世人皆之に遺すに危きを以てす、今獨り之に遺すに安きを以てす、遺すところ同じからずと雖も、未だ嘗て遺すところなくんばあらざるなり、と。表、歎息して去る。後、遂に其妻子を攜へ、鹿門山に登り、藥を采つて反らず」とある。

【詩意】南陽には、臥龍鳳雛と稱せられた諸葛亮・龐統の二人が居て、時に乘じて、各〻天上に飛翻し、ともに劉備を助けて、西川平定の大事業を爲した。しかし、鴻鵠に比すべき龐公は、ひとり深く山林に棲んで、籠の中に養はることを屑しとせず、頭が白くなつても、畑に耕して居た。ある時、刺史の劉表が車に乘つて態態尋ねて來ると、龐公は、劉表に答へて、われとても、子孫を念はない譯ではなく、子孫に遺すに安きを以てしたといつたが、これこそ千古の名言である。その後、龐公は、藥を采らむが爲に、深く山中に分け入つて、再び還らず、今でも、鹿門の山が亭亭として聳ゆるだけである。

【餘論】この首は、初めに龍鳳を傭ひ來つて鴻鵠に對し、龐公の人物は、宛然として見るが如く、まことに阿堵傳神の妙がある。その他は、全く敍事で、論贊を著けないが、その意味は、自然籠つて居る。

漢濱老父

漢濱の老父

(一)漢濱有老翁。初不語鄉里。
漢濱に老翁あり、初め鄉里を語らず。

天子雲夢遊。盼望臨汚水。
天子、雲夢に遊び、盼望して汚水に臨む。

居人悉縱觀。翁獨耕不已。
居人、悉く縱觀、翁、獨り耕して已まず。

(二)郎官下道問。答言野人耳。
郎官、道を下つて問ふ、答へて言ふ、野人のみ。

借問世立君。固將使爲理。(四)
借問す、世、君を立つ、固より將に理を爲さしめむとす。

奈何從遊佚(五)勞人奉諸己。
奈何ぞ、遊佚に從ひ、人を勞して、これを己に奉ず。

尚忍令人觀吾實爲子恥。
尚ほ忍んで人をして觀せしむ、吾、實に子の爲に恥づと。

忽如驚鴻騫(六)孰能躡(七)其軌。
忽ち驚鴻の騫がるが如く、孰れか、能く其軌を躡まむ。

名姓且莫知。超哉隱君子。　名姓且つ知る莫し、超なるかな隱君子。

【字解】【一】漢濱　漢水の沿岸。【二】郎官　即ち尚書郎。【三】下道　御幸の道より引き下る。【四】理　治に同じ、唐の高宗の諱を避けて、毎に此字を用ひる。【五】遊佚　佚は逸に同じ、遊觀逸豫。【六】驚鴻鶱　物に驚いた雁が飛び上る。【七】跡其軌　軌は車輪の跡、その跡を追尋する。

【題義】漢濱老父は姓名不詳、その事は、後漢書逸民傳に「漢陰老父は、何許の人たるを知らざるなり。桓帝の延熹中、竟陵に幸し、雲夢を過ぎ、沔水に臨む、百姓觀ざるものなし。老父あり、獨り耕して輟まず。尚書郎南陽の張溫、これを異とし、問はしめて曰く、人皆來り觀る、老父獨り輟まざるは何ぞや、と。老父笑つて對へず。溫、道より下ること百歩、自ら與に言ふ。老父曰く、我は野人のみ、この語に達せず。請ふ問はむ、天下亂れて天子を立つるか、理まつて天子を立つるか。天子を立て、以て天下に父とするか、天下を役し、以て天子を奉ずるか。むかし、聖王、世を宰す、茅茨采椽、しかも萬人以て寧し。今、子の君、人を勞して自ら縱にし、逸游忌むなし。吾、子の爲に之を羞づ。子、何ぞ忍んで人の之を觀るを欲するか、と。溫、大に慙ぢ、その姓名を問ふも、告げずして去る」とある。

【詩意】漢水沿岸の地に、一人の老翁が居たが、はじめから、その鄕里を語らなかつた。ある時、天子が巡狩して、雲夢に遊び、顧望しつつ沔水の邊に來られた。居民どもは、悉く之を縱觀したが、この老翁のみは、獨り耕して居て止めない。そこで、尚書郎張溫といふもの、御幸の道より引き下つて、之に問ふと、老翁答へて、私は物を知らぬ野人であるから、無禮の段は御赦しを願ひたい。抑も、世に君を立てるのは、その君をして治を爲さしめむが爲めでは御座らぬか。如何なれば、天子の游觀逸豫の御相伴を致さねばならぬか。すると、天子は、人を勞して、己が爲に奉仕させると云ふことになる。それでさへ澤山なのに、かてて加へて、無理にも人をして見物を爲せるといふのは、貴方の前だが、まことに、譯の分からぬことであるといつた。かくて、老翁は、驚鴻の飛び起つが如く、立ち去つたが、どこへ往つたか、その跡を尋ねることも出來ず、姓名さへも分からなかつた。何にしても、超然たる隱君子である。

【餘論】結二句は、例の筆法で、論贊として見るべきものである。

王績

(一)無功始亦仕。(二)季代遘(三)亂屯。　無功、はじめ亦た仕ふ、季代、亂屯に遘ふ。
(四)投劾乃徑歸。不作(五)嬰網鱗。　劾を投じて、乃ち徑に歸り、網に嬰るの鱗と作らず。
結廬河(六)渚北。喜與(七)隱士鄰。　廬を結ぶ河渚の北、喜んで隱士と鄰る。

相逢雖多言。不若無語眞。　相逢ふ、多言すと雖も、語なきの眞に若かず。

種黍養鳧雁。逍遙度秋春。　黍を種ゑて鳧雁を養ひ、逍遙、秋春を度る。

乘牛過酒家。留連或經旬。　牛に乘じて酒家を過ぎ、留連或は旬を經。

嗜飮豈沈湎。醉鄕可逃身。　飮を嗜むも豈に沈湎せむや、醉鄕、身を逃るべし。

北門與樂署。暫屈誠此因。　北門と樂署と、暫く屈するは、誠に此に因る。

賢哉焦史妻。相饋不厭勤。　賢なるかな、焦史の妻、相饋つて勤を厭はず。

酣歌自遺世。嵇阮其能倫。　酣歌自ら世を遣る、嵇阮其れ能く倫たり。

【字解】【一】無功　王績の字。【二】季代　澆季の世。【三】亂屯　屯は易の卦名。この卦は運命の非にして窮困することを示したのである。つまり、世亂れて運命窮まるといふ義。【四】投劾　自己の不能を彈劾して辭職する。【五】嬰網鱗　網に引つかかつた魚、梁の武帝の詔敕に「網に嬰り、辟に陷り、日夜相尋ぬ」とある。【六】河渚北　黃河の北岸。【七】痦士　痦は啞、仲長子光といふ人、その詳は題義の條に見ゆ。【八】沈湎　酒に沈溺して身を忘れる。【九】醉鄕　醉中の天地、王績は醉鄕記を著した。【一〇】北門　唐書元萬頃傳に「武后、帝を眞し、諸儒を召して禁中に論撰せしめ、朝廷の疑議表疏、皆密に參處せしめ、以て宰相の權を分つ、故に時に北門學士といふ」とあつて、後世の稱であるが、ここでは、門下省を指す。【一一】樂署　太樂署。【一二】暫屈　しばらく身を屈して官に居る。【一三】此因　酒の爲めである。【一四】焦史　焦姓の史、史は役人、太樂署の史で焦革といふもの。【一五】相饋　酒を供給するも。【一六】不厭勤　勤は面倒なこと。【一七】嵇阮　嵇康と阮籍、晉書に「嵇康、字は叔夜、譙國の人。阮籍、字は嗣宗、陳留の人。皆酒を縱にし、山濤・向秀・劉伶・阮咸・王戎と竹林の七賢と爲す」とある。

【題義】後漢の隱逸は、上の漢濱老父に終り、以下皆唐人、その第一は王績で、その事は、唐書隱逸傳に「王績、字は無功、絳州龍門の人、性簡放、拜揖を喜ばず。大業中、孝悌廉潔に擧げられ、祕書正字を授けらる。朝に在るを樂まず、六合丞たるを求む。酒を嗜むを以て事に任せず。時に天下亦た亂る、因つて劾して遂に解き去る。歎じて曰く、羅網天に在り、吾、且つ之に安んせむと。乃ち鄕里に還る。田十六頃あり、河渚の間に在り。仲長子光といふもの、亦た隱者なり、妻子なく、廬を北渚に結ぶ。績、その眞を愛し、徙つて與に相近づく。子光は瘖、未だ嘗て交語せず、ともに對して酒を酌み、懽甚し。績、奴婢數人あり、黍を種ゑて、春秋に酒を釀さしめ、鳧雁を養ひ、藥を蒔いて自ら供す。北山の東皐に游び、書を著はして、自ら東皐子と號す。牛に乘じて酒肆を經、留まること或は數日。高祖武德の初、門下省に待詔たり。故事、官、酒を給する日に三升、或は問ふ、待詔、何か樂しき。答へて曰く、良醞戀ふべきのみ、と。侍中陳叔達、これを聞いて、日に一斗を給し、時に斗酒學士と稱す。貞觀の初、疾を以て罷む。復た有司に調せらる。時に太樂署史焦革の家、善く釀す。績、丞たるを求む。吏部、非流を以て許さず。績、固く請うて曰く、深意あり、と。竟に之に除せらる。革死す。妻、酒を送つて絕えず、歲餘又死す。績曰く、天、我をして美酒に酣ならしめざるか、と。官を棄てて去る。これより、太樂丞、淸職たり。革の酒法を追述して、經を爲り、又杜康・儀狄以來、酒を善くするものを采つて、譜を爲る。李淳風曰く、君は酒家の南董なりと。居ると

ころの東南に盤石あり、杜康祠を立てて之を祭り、尊んで師となし、革を以て配す。醉鄕記を著し、以て劉伶の酒德頌に次ぐ。その飲むや、五斗に至つて亂れず、五斗先生傳を著す。豫め終日を知り、命じて薄葬せしめ、自ら其墓に誌す」とある。

【詩意】王無功も、その初は、矢張仕官したが、澆季の世、騷亂甚しく運命愈よ窮まれるに遇ひ、自らおのが無能を彈劾して、直に歸鄕し、網にかかつた魚の樣な、ひどい目に遇はずに濟んだ。それから、草廬を黃河の北渚に結び、隠の仲長子光といふものと鄰り合つて居た。元來、友人に遇ふと、兎角口數が多くなるが、それよりも、一語なくして天眞を發揮する方が善いといふ考であつた。かくて、黍を種ゑて酒を造り、鳧雁を養ひ、心のどかに逍遙して春秋を送り、時たま、牛に乘つて酒家に立ち寄り、氣に入ると、十日あまりも其處に留連して居た。王無功は、酒を嗜めども、決して之に沈湎した譯ではなく、醉中の天地は、この身を逃れて安泰に世を送ることが出來ると思つて居たのである。それで、或時は、門下省だの、太樂署だのに奉職して、しばらく、その身を屈したが、それも、全く此酒の爲であつた。ここに、太樂署史焦革の妻は、まことに賢婦で、夫の死後、相變らず、酒を贈つて、すこしも面倒がらなかつた。そこで、王無功は、酣醉放歌して、自然、この世を遺れて居たので、まさしく、嵇康・阮籍と相竝ぶべき高人である。

【餘論】例の筆致であつて、相逢雖多言の二句、醉鄕豈沈湎の二句は、聊か面白く、取り離して見ても、至理を含める名句である。

朱桃椎

(一)祭酒絕俗者。(二)曳索復被裘。
自匿(三)林莽間。不入成都遊。
(四)織屩易米茗。於人又何求。
(五)偲偲高長史。延見禮甚修。
(六)瞪視雖不言。默敎意已周。
欲使如(七)曹參。無事治一州。
忽去返山谷。避(八)寢安可留。

朱桃椎

祭酒は絕俗の者、索を曳き、復た裘を被る。
自ら林莽の間に匿れ、成都に入つて遊ばず。
屩を織つて、米茗に易へ、人に於て又何をか求めむ。
偲偲たる高長史、延見、禮、甚だ修す。
瞪視、言はずと雖も、默敎、意、すでに周ねし。
曹參の如く、無事、一州を治めしめむと欲す。
忽ち去つて山谷に返り、寢を避くるも、安んぞ留むべけむ。

【字解】【一】祭酒　ここでは長老の義、史記荀卿傳に「齊の襄王の時、荀卿最も老師たり。齊、尙ほ列大夫の缺を修し、而して、荀卿、三たび祭酒となる」とあつて、その注に「禮、食するに必ず先を祭る。酒を飲むにも亦た然り、必ず席中の尊者を以て祭に當つるのみ。後、因つて、以て官名となす」とある。【二】曳索　繩を帶にして引きずる。【三】林莽　莽は灌莽、卽ち藪。【四】織屩　屩は草で編んだ履。【五】偲偲　親切丁寧の貌。【六】瞪視　目を開いて見張る。【七】如曹參　史記曹相國世家の贊に「百姓、

秦の酷を離れし後、参、ともに休息無爲、故に天下ともに其美を稱す」とある。【八】避寢　正寢を避けて客を引き入れる。曹相國世家に「膠西に蓋生あり、善く黃老の言を修むと聞き、人をして、幣を厚うして之を請はしむ。すでに見ゆ。爲に治道は淸靜を貴んで、民、自ら定まるを謂ふ。参、ここに於て、正堂を避けて蓋公を舍す」とある。

【題義】朱桃椎の事は、唐書隱逸傳に「朱桃椎は、益州成都の人、澹泊絕倫、裘を被り、索を曳き、人、その爲を測るなし。長史竇軌、これを見て、遺るに衣服鹿幘麑韡を以てし、逼つて鄕正に署す。これを地に委して、肯て服せず。更に廬を山中に結び、夏は羸、冬は木の皮葉を緝めて自ら蔽ひ、贈遺、受くるところなし。かつて十芒屩を織つて、道上に置く、見るもの曰く、居士の屩なり、と。爲に米茗を驚いで之に易へ、その處に置けば、輒ち取り去り、終に人と接せず。その屩たる、草柔細、環結促密、人、爭うて之を躡む。高士廉、長史となり、禮を備へて以て請ふ。階を降つて之と語るも、答へず、瞪視して去る。士廉拜して曰く、祭酒、其れ我をして無事を以て蜀を治めしめむとするか、と。乃ち條目を簡にし、賦斂を薄くす。州、大に治まる。屢ば人を遣して存問せしむ、見れば、輒ち林草に走つて自ら匿るといふ」とある。

【詩意】朱桃椎は、一鄕の奪者であつて、浮世離れのして居る人物、繩の帶を引きずり、そして、皮衣を著て居た。平生、林莽の間に匿れて居て、成都の市に出て來ることもなく、草の履を造り、これを米や茶に易へ、他人に向つては、決して求むるところがなかつた。ここに、長史の高士廉は、極めて眞面目な人で、禮を厚うして延見した。その時、朱桃椎は、目を見張つた儘、何も言はなかつたが、一州不言の教は、その意の周到なるを知るべく、さながら、古しへの曹參の如く、無事を旨として、一州を治めしめやうといふ考であつた。かくて、忽ち山谷の間に歸つて仕舞ひ、正寢を避けても、これを引き留めることが出來なかつた。

【餘論】曹參云云は、唐書の本文には無いが、朱桃椎と高士廉との關係を曹參・蓋公に比し、故事を拈出して、その趣旨を明白にしたので、ここらは、作者の巧思である。

武攸緒

(一)孽后(二)移寶鼎。同姓咸(三)析珪。
獨去謝親寵。(四)龍門事(五)冥棲。
澹泊(六)如素嘗。(七)衣褐復(八)茹藜。
(九)賜器不肯御。牀頭委塵泥。
族人(一〇)豈不華。回首已(一一)粉蠱。
(一二)苟榮禍必集。達識乃弗迷。

武攸緒

孽后、寶鼎を移し、同姓、咸な珪を析つ。
ひとり去つて親寵を謝し、龍門、冥棲を事とす。
澹泊、素より嘗むるが如く、褐を衣、復た藜を茹ふ。
賜器、肯て御せず、牀頭、塵泥に委す。
族人、豈に華ならざらむや、首を回らせば、すでに粉蠱。
苟榮、禍、必ず集まり、達識、乃ち迷はず。

(一三)蟬蛻衆濁中。名與(一四)嵩高齊。　衆濁の中に蟬蛻し、名は嵩高と齊し。

【字解】【一】蘖后　蘖はひこばえ、切り株から芽を出すこと。則天武后は、もと太宗の宮人で、太宗の崩後、寺に入つて尼となつて居たが、後、高宗に見そめられ、還俗して皇后となりし故に云ふ。【二】移寶鼎　鼎は周室の寶であつたので、後世、これを國寶の義に用ひて居る。武后は、一時唐を簒し、自ら帝位に登り、國を周と號した。【三】析珪　珪は諸侯たる象徵で、土を分つ時に合せて賜はる。揚雄の解嘲に析二人之珪一、儋二人之爵一とあつて、その注に「析は分つなり」とある。【四】龍門　地名、なほ題義の條を見よ。【五】冥棲　無念無想で止まり住んで居る。【六】如素嘗　もとより隱居を試みたことがある樣である。【七】衣褐　褐は短衣。【八】茹藜　あかざを食ふ。【九】賜器　武后より賜はつた種種の品物。【一〇】豈不華　立派で無いことはない。【一一】粉𪋝　粉微塵になる。【一二】苟榮　かりそめの榮華。【一三】蟬蛻　蟬が殼から脫け出づる如く、全く離れる。史記屈原傳に「濁穢に蟬蛻し、以て塵埃の外に浮游す」とある。【一四】嵩高　嵩山、その山高きが故に云ふ。武攸緒の居たのは少室で、卽ち嵩山の一峰である。

【題義】武攸緒の事は、唐書隱逸傳に「武攸緒は、則天皇后の兄惟良の子なり。恬淡寡慾、易・莊周の書を好む。少にして姓名を變じて、長安の市に賣卜し、錢を得れば、輒ち委ね去る。后、革命、安平郡王に封じ、從つて、中岳に封ず。固く官を辭し、隱居せむことを願ふ。后、その詐を疑ひ、これを許し、以て爲すところを觀る。攸緒、巖下に廬し、素遁の者の如し。后、その兄攸宜を遣して、敦く諭さしむ。卒に起たず。后、乃ち之を異とす。龍門少室の間に盤桓し、冬は茅椒を蔽ひ、夏は石室に居り、賜ふところの金銀鐺鬲野服、王公遺るところの鹿裘素障癭栝、塵皆流積するも御せざるなり。俄にして、諸韋誅せられ、武氏連禍、唯だ攸緒のみ及ばず」とある。

【詩意】武后が唐室を簒して國を奪ひし時、同姓の者は、皆珪を分つて、封土を賜はつたが、攸緒のみは、ひとり、武后の寵遇を謝絕し、龍門に隱れて、無念無想の生活をしてゐた。その澹泊なることは、もともと、隱遁を試みたことがあるものの如く、短衣を著け、あかざを食ひ、頂戴した品品は、決して用ひず、牀頭に堆積して、塵泥に委する位。一族の者ども、一時は榮華を極めたが、首を回せば、皆誅滅せられて、粉微塵に成つて仕舞つた。元來、かりそめの榮華には、禍が必ず集まるが、唯だ達識の士のみは、決して、心に迷ふことはない。かくて、攸緒は、多くの汙穢の中より全く隔離して、その名は、嵩山の如く高く、後世までも傳はつた。

【餘論】結二句は、絕好の贊辭で、攸緒その人をして、鼎呂より重からしめる。

盧鴻

(一)顥然守(二)秦一。(三)高臥在(四)幽壤。　顥然、泰一を守り、高臥して幽壤に在り。
(五)開元始求治。賢哲勞夢想。　開元、はじめて治を求む、賢哲、夢想を勞す。
詔書赴(六)巖扃。宸意勤挹仰。　詔書、巖扃に赴き、宸意、勤めて挹仰。

入京遽還山。孰得縻(七)以鞅。　京に入つて遽に山に還る、孰か縻するに鞅を以てするを得む。
天子遂(八)其高。營室致安養。　天子その高きを遂げしめ、室を營んで安養を致す。
爵祿不可加。貪士應泚(九)顙。　爵祿加ふべからず、貪士は、應に顙に泚すべし。

【字解】【一】顥然　盧鴻の字。【二】泰一　太一に同じ、一貫する大道。【三】高臥　隱居して起たざること。【四】幽邃　風光幽邃なる土地。【五】開元　唐の玄宗の年號。【六】巖扃　扃はとぼそ、扉に同じ。【七】縻以鞅　皮帶で縛りつける。【八】遂其高　その高節を遂げしめる。【九】泚顙　前に見ゆ、額に汗ばむ。

【題義】盧鴻の事は、唐書隱逸傳に「盧鴻、字は顥然、その先は幽州范陽の人、洛陽に徙る。博學にして善く籀を書す。嵩山に廬す。玄宗開元の初、禮を備へて徵すこと再、至らず。五年、詔して曰く、鴻に泰一の道、中庸の德あり、深を鈎し、微に詣り、確乎として自ら高うし、詔書屢ば下るも、每に輒ち辭託し、朕をして虛心傾を引かしむ。今に數年、素履幽人の介を得と雖も、考父滋恭の誼を失ふ。禮に大倫あり、君臣の義、廢すべからざるなり。有司其れ束帛の具を賷して、重ねて玆旨を宣せよ。想ふに、以て翻然節を易へ、朕の意に副ふあらむ、と。鴻、東都に至る。謁見すれども、拜せず。帝、召して內殿に升らしめて置酒し、諫議大夫に拜せしが固辭す。復た制を下して、山に還るを許し、歲ごとに米百斛絹五十を給し、府縣爲に其家に致し、朝廷の得失は、其れ狀を以て聞せよといふ。將に行かむとするや、隱居の服を賜ひ、草堂を官營して、恩禮殊に渥し。鴻、山中に到り、學廬を廣め、徒を聚むる五百人に至る。卒するに及び、帝、萬錢を賜ふ。鴻の居るところの室、自ら寧極と號すと云ふ」とある。

【詩意】盧鴻は、太一の道を守り、風光幽邃なる地に高臥して起たなかつた。開元の初年、玄宗は、いつしか上聞に達せしに因り、詔書を下して、巖扉に赴かしめた。玄宗の思召は、あくまで盧鴻の德を標榜し、且つ之を欽仰するに在つた。そこで、盧鴻は、一たび、京に入つたが、留まること未だ久しからずして、又遽に山に歸ることと成つた。もとより、世外の隱者であるから、皮帶で之を縛つて置くといふことも出來ない。玄宗も、亦た其願を容れて、その高節を遂げしめむとし、態態居室を築いて安養を致さしめた。この人の如き、爵祿も加ふること能はず、その高潔なることは、慾張りどもをして、額に汗をかかせるであらう。

【餘論】結二句は、例の論贊であるが、暴露に過ぎて、含蓄に乏しきを遺憾とする。

秦系

公緒避(一)時亂。不駕(二)戎府車。　公緒、時の亂を避け、戎府の車に駕せず。
南(三)安大松間。卜(四)築聊可居。　南安大松の間、卜築、聊か居るべし。

穴石爲巨硯。坐衍老氏書。　石に穴して巨硯となし、坐して衍す老氏の書。

刺史致羊酒。歲時造其廬。　刺史、羊酒を致し、歲時、その廬に造る。

不拒亦不謝。偃息每自如。　拒まず、亦た謝せず、偃息每に自如。

懷道誠可稱。工詩乃其餘。　道を懷くは、誠に稱すべし、詩に工なるは乃ち其餘。

【字解】【一】時亂　天寶の末年、安史の亂を指す。【二】戎府　軍府に同じ。【三】南安　地名。【四】卜築　地を卜して室を築く。【五】巨硯　大なる硯。【六】衍　敷衍する、意義を解釋する。【七】歲時　一年中時時。【八】偃息　臥して憩ふ。【九】懷道　道を其身に體得する。

【題義】秦系の事は、唐書隱逸傳に「秦系、字は公緒、越州會稽の人、天寶の末、亂を剡溪に避く。北都留守薛兼訓、奏して參軍と爲せしが就かず。泉州に客たり。南安に九日山あり、大松百餘章、俗に傳ふ、東晉の時植うるところ、と。系、廬を其上に結び、石に穴して硯となし、老子を注し、彌年出でず。刺史薛播、時に往いて之を見、歲餘、羊酒を致す、而して、系、未だ嘗て城門に至らず。劉長卿と善し、詩を以て相贈答す。權德輿曰く、長卿自ら以て五言長城となす、系、偏師を以て之を攻む、老と雖も益す壯、と。その後、東、秣陵を度り、年八十にして卒す。南安の人、これを思ひ、爲に亭を立て、その山を號して高士峰と爲すといふ」とある。

【詩意】秦系は、安史の亂を避け、軍府から招聘されたが、その車に駕して行かなかつた。南安の九日山には、大松林立し、その間に地を卜し、室を築いて、聊か以て其居に當て、それから、石を窪めて自然の大硯となし、その側に坐して、老子の注釋を書いた。刺史薛播といふもの、羊酒を贈つて存問し、年中時時、その廬を過訪した。これに對して、秦系は、拒絶もせず、禮も云はず、橫になつて休んだ儘、平氣で打澄まして居た。秦系が道を體得せしことは、誠に稱異すべく、詩が上手だといふのは、ほんの緒餘に過ぎない。

【餘論】結末、四句、一氣流注、好個の論贊と稱すべく、唯だ秦系にして、初めて之に當ることが出來る。

陸龜蒙

魯望好任散。心與太古期。　魯望、任散を好み、心、太古と期す。

俗夫晨叩門。不肯一見之。　俗夫、晨に門を叩くも、肯て一たびも之を見ず。

下田與江通。終歲恆苦飢。　下田、江と通じ、終歲、恆に飢に苦む。

茠刺不告勞。常師禹胼胝。　茠刺、勞を告げず、常に禹の胼胝を師とす。

酒酣發長歌。猶有憤亂悲。　酒酣にして長歌を發し、猶ほ亂を憤るの悲あり。

寧不念(六)枯槁行哉豈其時。　寧ろ枯槁を念はざらむや、行かむかな、豈に其時。

【字解】【一】魯望　陸龜蒙の字。【二】任散　心まかせにして閒散なること。【三】下田　低い處に在る田。【四】茠剌　唐韻に「茠は薅に同じ」とあり、詩經に以薅荼蓼とある、卽ち草ぎること。剌は、田畑を掘り起すこと。故に耕耘と同じ。【五】胼胝　ひび赤ぎれ。【六】枯槁　屈原の漁父辭に、形容枯槁とある、血の氣なく、油氣なく、干からびた樣になる。

【題義】陸龜蒙の事は、唐書隱逸傳に「陸龜蒙、字は魯望、少にして高放、六經の大義に通じ、尤も春秋に明かなり。進士に擧げられしが、一たびして中らず。往いて、湖州刺史張摶に從つて游ぶ。摶、湖蘇二州を經、辟して以て自ら佐とす。かつて、饒州に至り、三日詣るところなし。刺史蔡京、官屬を率ゐ、就いて之を見る。龜蒙樂まず、衣を拂つて去り、松江甫里に居る。田數百畝、屋三十楹あり、田、はなはだ下く、雨潦には江と通ず、故に常に飢に苦み、身、畚鍤茠剌、休む時なし。或は其勞を譏る。答へて曰く、堯舜は黴瘠、禹は胼胝、彼は聖人なり、吾、一褐衣、敢て勤めざらむや、と。はじめ酒を病み、再期乃ち已む。その後、客至る。壺を挈へ、酒を置き、復た飲まず。流俗と交るを喜ばず、門に造ると雖も、肯て見ず。馬に乘らず、舟に升り、蓬席を設け、束書茶竈筆牀釣具を齎らして往來し、時に江湖散人といひ、或は天隨子・甫里先生と號し、自ら涪翁・漁父・江上丈人に比す」とある。

【詩意】陸龜蒙は、その心に任かせて閒散なることを好み、その心には、太古の時の樣にありたいと思つて居た。そこで、俗人どもが朝に門を叩いても、決して之に遇はなかつた。その所有に係る低い田は、江水と通じ、收穫極めて少く、年中飢餓に苦んで居た處から、晨夕耕耘して、骨が折れるとは云はず、ひび赤ぎれを切らして、頻りに苦勞し、古しへの大禹を師とするといつて居た。しかし、酒酣なる時には、長歌を發し、隱者に似合はず、なほ世の騷亂を憤る悲慨の念があつた。かくて、形容枯槁することを念はぬでもなく、出かけて一仕事遣らうと思つたが、不幸にして、その時に非ざるが故に、矢張、引ッ込んで、その高節を保つて居た。

【餘論】酒酣發長歌の二句は、傳中には見えぬが、陸龜蒙の詩集を見ると、いくらもあるので、特に之を插入し、彼が決して家國を忘れぬことを表示し、併せて、その人物を重からしめたので、ひとり、波瀾橫生の妙を添へたばかりではない。

張志和

超超(一)玄眞子。游浪(二)煙水中。
歛舟以爲家。來往無定(三)蹤。
自言處太(四)虛。四海長相從。

張志和

超超たり玄眞子、游浪す煙水の中。
歛舟、以て家となし、來往、定蹤なし。
自ら言ふ、太虛に處り、四海長く相從ふと。

(五)奴婢兩夫婦。耕織粗可供。　奴婢兩つながら夫婦、耕織、粗ぼ供すべし。
天子不得見。(六)丹青繪其容。　天子、見るを得ず、丹青、その容を繪く。
漁歌復(七)識聞。山水邈其重。　漁歌復た識聞、山水、邈として其れ重る。

【字解】【一】超超　世外に超然たること。【二】玄眞子　張志和の別號。【三】定蹤　一定せる蹤跡。【四】太虛　大虛空。【五】奴婢兩夫婦　奴婢兩人を配して夫婦とした。漁童樵青を指す。その詳は、題義の條を見よ。【六】丹青　繪の具。【七】識聞　知って聞く、張志和の作たることを知って聞く。

【題義】張志和の事は、唐書隱逸傳に「張志和、字は子同、婺州金華の人、十六にして明經に擢んでられ、命じて、翰林に待詔し、左金吾衞錄事參軍を授けられしが、親の喪を以て復た仕へず、江湖に居り、自ら煙波釣叟と號し、玄眞子を著し、亦た以て自ら號とす。兄鶴齡、爲に室を越州の東郭に築き、茨くに生草を以てし、椽棟斤斧を施さず、豹席椶屩、每に釣を垂れて餌を設けず、志、魚に在らざればなり。帝、かつて、奴婢各一を賜ふ。志和、配して夫婦となし、漁童樵青と號す。陸羽、かつて問ふ、孰れか往來する者となす、と。對へて曰く、太虛を室となし、明月を燭となし、四海の諸公と共に處り、未だ嘗て少らくも別れざるなり、何ぞ往來あらむ、と。顏眞卿、湖州刺史となる。志和、眞卿に謁す。舟敝漏するを以て、これを更めむことを請ふ。志和曰く、願はくは、浮家泛宅を爲りて、苕霅の間に往來せむ、と。辨捷、類ね此の如し。憲宗、その像を圖し、これを求むれども得べからず。李德裕、稱して嚴光の比となすと云ふ」とある。

【詩意】玄眞子は、世外に超然として、平生、煙水の中に優游飄浪し、水の漏る舟を家として、その來往するに、一定の蹤跡なく、勝手に漕ぎ廻り、自ら、身は大虛空の中に居て、四海の諸公と長しへに一處に居るといつて居た。かつて、天子より賜はつた奴婢を配して、夫婦にして置いたが、耕織、卽ち衣食の事は、略ぼ差支が無かつた。憲宗は、これを見むと欲するも得ず、丹青を以て其容貌を畫かしめ、その高名は、早くより、聖聽に達して居た。玄眞子の作つた漁歌は、殘つて居るから、それと知つて聞くことも出來るが、山水は、邈然として相重り、その高蹤は、遂に尋ねることが出來ない。

【餘論】この首は、格別の者ではなく、最後の打出しとしては、今少し、振つた佳作の欲しい處である。

吳越紀遊十五首

始發南門晚行道中

吳越紀遊　十五首
始めて南門を發する晚行道中

歲暮寒亦行。征人有(一)常期。　歲暮、寒けれども亦た行く、征人、常期あり。
辭我家鄉樂。(二)適彼道路危。　我が家鄉の樂を辭して、彼の道路の危きに適く。
(三)酒闌別(四)賓親。驅車出(五)郊歧。　酒闌にして賓親に別れ、車を驅つて郊歧を出づ。

我馬力未(六)痛。已越山與陂。　我が馬、力、未だ痛せず、すでに越ゆ山と陂と。

回頭望高城(七)。落日雲樹滋。　頭を回らして、高城を望めば、落日、雲樹滋し。

遭亂既少(八)安。謀(九)生復多飢。　亂に遭うて、既に安きこと少く、生を謀つて、復た飢多し。

途逢往來人。孰不爲(一〇)此馳。　途に往來の人に逢ふ、孰れか此が爲に馳せざらむ。

遠遊亦吾志。去矣何勞悲。　遠遊亦た吾が志、去れ何ぞ悲むを勞せむ。

【字解】【一】常期　豫定の行程。【二】適　往く。【三】酒闌　闌は盛りを過ぎたること。【四】賓親　賓客親戚。【五】郊歧　城外で路の分かれる處。【六】未痛　詩經に我馬瘏矣とあつて、瘏は疲れる。【七】高城　蘇州の高い城壁。【八】少安　安全なることが少い、つまり危險が多い。【九】謀生　生活の道を講ずる。【一〇】爲此　此とは前の少安と多飢とを指す。

【題義】高青邱の年譜を見ると、至正十八年戊戌、二十三歲の條に「先生、この年、饒介の幕に往來し、北郭の諸友と互に相酬唱す。すでにして外舅に依り、吳淞江の青邱に居り、自ら青邱子と號す。冬に至つて吳越に出游す」とあり、又朱紹の刻に係る三先生詩集から、金檀が引抄した吳越紀遊詩の自序に「至正戊戌庚子の間、余、かつて東南諸郡に游び、顧みて山川を覽、賦するところ甚だ夥し。久しうして散失す。暇日、篋中を理して、數紙を得たり。しかも壞爛破闕、多くは、完章に非ず。因つて、その存すべきものを擇び、當日の意を追賦し、以て之を足成す、凡そ一十五首。未だ、北、大河を遡り、西、嵩華を涉り、以てその險遐絕特の狀を賦する能はずと雖も、然れども、此は行役の情を寫し、游歷の蹟を紀する所以、夫の賢を懷ひ古しへを弔ふの意と、亦た往往にして在り、もとより、得て棄てざるなり。因つて、錄して以て自ら覽る」とある。青邱の吳越に游んだのは、至正十八年のみではなく、十九年、二十年と、凡そ三年引續いて、その地に往つたので、何の爲めだか、よくは分からぬが、亂を避け、生を謀ることが、その目的であつたらしい。これは、その第一首で、蘇州城の南門を發して、日暮、路を急ぐ時に作つたのである。

【詩意】今年も、暮に近く、寒氣いや增す折柄なれども、豫定の行程もあるから、愈よ出發することに成り、わが家鄉の樂を辭して、かの道路の危きに適かねばならぬ。祖道の席に於て、酒の闌なる時、賓客親戚に別れ、やがて、車を驅つて、城外の追分に來た。わが馬は、まだ疲れず、すでに山や陂を越えたのである。ここで、一寸ふり向いて、蘇州の高い城壁を眺めると、折しも、日は落ちかかり、城邊には、雲と見まがふ木木が、こんもりとして居る。今しも、騷亂に遭うて、兎角、安全を缺き、生活の爲に色色遣つて見るが、うまく行かず、飢に苦むことが多い。途すがら、往來の旅客に遇つたが、矢張、亂を避け生を謀るが爲に、奔走して居るらしい。但し、その目的は兎に角、遠遊といふは、わが本來の宿志であるから、自ら奮つて、此處を去るべく、何も悲むにも及ばぬことである。

【餘論】起首八句、南門より發して、驛路の分歧點まで來た經過を敍したのであるが、聊か冗長の

嫌は無からうか。回レ頭望二高城一の十字は、宛ら畫の如く、一段の精彩を添へる。以下、亂を避け、生を謀るが爲めではあるが、遠游は夙志だから、何も悲むには及ばぬといつて、一應尤もらしいが、稍や氣魄の缺けたるを遺憾とする。

渡二浙江一宿二西興民家一

浙江を渡りて西興の民家に宿す

挂レ帆無二(一)天風一。到レ岸日已夕。
捨レ舟理二輕裝一。欲レ問二(二)古鎭驛一。
(三)渢渢灘聲廻。(四)莽莽山氣積。
僕夫夜畏レ虎。告レ我勿二遠適一。
望レ林投二人家一。炊レ黍旋(五)敲レ石。
寒眠多二(六)虛警一。我體(七)若レ畏レ席。
誰云別レ家遙。數日已在レ客。
今宵始驚歎。東西(八)大江隔。

帆を挂くるに天風なし、岸に到れば、日、すでに夕なり。
舟を捨てて輕裝を理し、問はむと欲す、古鎭驛。
渢渢として灘聲廻り、莽莽として山氣積む。
僕夫、夜、虎を畏れ、我に告げて遠く適くなからしむ。
林を望んで人家に投じ、黍を炊がむとして、旋ち石を敲く。
寒眠、虛警多く、わが體、席を畏るるが若し。
誰か云ふ、家に別るること遙なりと、數日、すでに客に在り。
今宵、はじめて驚歎、東西、大江隔つ。

【字解】【一】天風　天より吹き下す强風。【二】古鎭驛　軍鎭の有つた古驛、ここでは西興を指す。【三】渢渢　大聲をいふ。【四】莽莽　むくむくと湧き上る。【五】敲石　火を鑽り出すこと、韋應物の詩に「敲レ石軍中傳二夜火一」とある。【六】虛警　さうでも無い事の爲に、びつくりと不意に驚いて眼の醒めること。【七】若畏席　敷物となじまず、寢心地の惡きをいふ。【八】大江　浙江を指す。

【題義】浙江を渡り、日暮になつたから、西興といふ故驛の民家に投宿し、仍つて、この詩を作つたのである。一統志に「西興驛は、蕭山縣に屬す」とある。

【詩意】浙江を渡らむとして、帆を挂けたが、折惡しく、强い風がなかつた爲に、大分手間取つて、對岸に到著すると、日、將に夕ならむとする頃であつた。そこで、舟から上陸して、身輕に支度を爲し、むかし、兵營の有つた西興驛まで行かうとした。早瀬の音は、凄じく轟いて、逆卷く樣に聞こえ、山氣は、むくむくして、大地に積み重つて居る。從僕どもは、夜になると、虎が出るかも知れぬから、遠くに行かぬ方が善からうといひ、林を望んで人家を認めた儘、そこに投宿し、石を鑽つて火を出し、それで黍を炊いで、夕げに充てた。それから、寢た處が、寒氣甚しき爲め、さうでも無い事に驚いて眠を醒まし、その上、わが身體は、敷物となじまず、どうも、寢心地が惡くて仕方がない。家を別れて、まだ遠くはなく、やつと數日を客中に送つただけであるが、浙江の流が、東西を隔斷するに因り、今夜、はじめて、旅路の慵さを覺えた。

【餘論】この首も、層層遞下し、旅況を詳述して居るが、割合に振はない。但し、渢渢灘聲廻の二

句は、山川荒涼の景を敍し、寒眠多虛警の二句は、客舍岑寂の況を寫し、ともに、簡警にして切當である。

早過蕭山歷白鶴柯亭諸郵

客起何太早。村荒絕鷄鳴。　客、起くる、何ぞ太だ早き、村、荒れて鷄鳴を絕つ。
況時江雨晦。不得見啓明。（一）　況んや、時に江雨晦く、啓明を見るを得ず。
（二）淩兢度高關。山空縣無城。　淩兢、高關を度り、山、空しく縣に城なし。
隔林聞人呼。已有先我行。　林を隔てて、人の呼ぶを聞く、すでに我に先つて行くあり。
（三）側身避徑滑。（四）聚足防厓傾。　身を側てて徑の滑なるを避け、足を聚めて厓の傾くを防ぐ。
衣寒復多風。濄濄遠水聲。　衣寒くして、復た風多し、濄濄たり遠水の聲。
千峰霧中過。不識狀與名。　千峰、霧中に過ぐ、狀と名とを識らず。
（五）嵐開見前郵。（六）始覺歷數程。（七）　嵐開いて、前郵を見、はじめて覺ゆ、數程を歷たるを。
（八）越禽啼楓篁。冷日傍午晴。　越禽、楓篁に啼き、冷日、午に傍うて晴る。
煙生沙墟寂。（九）葉落澗寺清。　煙、生じて沙墟寂たり、葉、落ちて澗寺清し。
登臨亦可悅。但恨時非平。　登臨、亦た悅ぶべく、但だ恨む、時平かに非ざるを。

【字解】（一）啓明　太白、卽ち金星、あけの明星。（二）淩兢　揚雄の甘泉賦に「馳閶闔而入凌兢」とあつて、その注に「凌兢とは、寒涼戰栗の意をいふ」とある。ぞつと寒氣だつ。（三）側身　身體を横にする。（四）聚足　小きざみに歩く、禮記に「級を拾ひ、足を聚め、歩を連ねて、以て上る」とある。（五）嵐開　嵐は山氣。（六）前郵　前方の驛舍。（七）數程　若干の道程。（八）越禽　越地の鳥。（九）沙墟　沙上の村里。

【題義】水陸路程に「蕭山縣より、三十里にして白鶴舖に至り、又十里にして錢清塔に至る」とあり、一統志に、柯亭は「山陰の西北に在り、蔡邕、難を柯亭に避け、仰いで、椽竹を見、奇音あるを知り、それを取つて笛を作る」とある。この詩は、朝早く、蕭山縣を過ぎ、白鶴・柯亭等の諸郵亭を經、仍つて旅中の感慨を敍したのである。

【詩意】朝早く起きたが、村は荒廢して、鷄の聲だに聞こえぬ。まして、江天雨晦ければ、あけの明星を見ることも出來ない。そこで、さむけ立つて、高い處に在る關所を度つて行くと、空山寂歷として、小さな縣には、城郭だにない。林を隔てて、人の呼ばはる聲が聞こえるので、自分より先に發足した者のあることを知つた。山路は、細くして險しいから、身體を横にして、徑の滑る處を避け、小刻みに歩いて、崖の崩れるのに用心して居る。衣は薄くて寒きが上に、風多く、遠くには、水音が活

活として聞こえる。千峰は、霧の中に眺め過ごし、如何なる形をして居るか、何といふ名か、そんな事は、さつぱり分からない。その内に、濛濛たる山氣が消えて、前方には宿場が見えたので、ここまで、いくらかの道程を歷て來たことを始めて覺つた。聞き慣れぬ越地の鳥は、楓や竹の紛亂せる藪の中に鳴き、冷たい冬の日は、亭午近き頃、やつと晴れた。江沙の上なる村里には、午炊の煙が淋しげに立ちのぼり、木木の葉は落ち盡して、澗邊の寺は、さつぱりして見えた。高い處から眺め下す景色は、まことに我が心を喜ばすべきも、太平の御世でないから、賊警を恐れて、緩ッくり吟賞することの出來ないのは、まことに遺憾である。

【餘論】隔レ林聞二人呼一の二句は、數ば過ふところの山路の實況である。千峰霧中過の四句は、敍述簡淨、他人ならば、もつと多くの文字を要する處であるのに、かくまで手短に言ひおほせたのは、流石に靑邱だと頷かれる。結二句は、時を悲み生を傷む意を寓して、收束太だ力あるを覺える。

次二錢清一謁二劉寵廟一

錢清に次して劉寵廟に謁す

(一)亭亭樹間祠。落日(二)小江口。　亭亭たる樹間の祠、落日、小江の口。

停レ舟拜二孤像一。(三)開レ幔(四)蒼鼠走。　舟を停めて孤像を拜し、幔を開けば蒼鼠走る。

憶公治レ邦時。德感山谷叟。　憶ふ、公が邦を治むるの時、德は感ず山谷の叟。

臨レ行(五)謝二其饋一。(六)清風在レ茲久。　行くに臨んで、その饋を謝す、淸風茲に在つて久し。

我方東征急。不レ得レ(七)奠二杯酒一。　我、方に東征急なり、杯酒を奠するを得ず。

惆悵出二(八)煙扉一。(九)殘村夜聞レ狗。　惆悵、煙扉を出づれば、殘村、夜、狗を聞く。

【字解】【一】亭亭　高き貌。【二】小江口　小さい江の落ち口。【三】開幔　幔は神前の帳。【四】蒼鼠　灰色の大鼠。【五】謝其饋　贈り物に對して挨拶する。【六】淸風　淸き遺風。【七】奠　すすめる、供へる。【八】煙扉　煙の籠著せる門扉、陳師道の詩に山門開二煙扉一とある。【九】殘村　兵亂の爲に殘破せし村落。

【題義】次は、やどる。舟を停めて一宿すること。一統志に「錢淸江は、紹興府城の西に在り、漢守劉寵一錢の事を以て名を得たり」とある。その劉寵の事は、卷二、野老行送二陳大尹一の詩に見えて居たが、念の爲め、重ねて注すると、華嶠の後漢書に「劉寵、會稽太守に拜せらる。徵されて、將作大匠となる。山陰に五六の老叟あり、人ごとに百錢を賫らし、寵を送つて曰く、鄙生、未だ嘗て郡朝を識らず、明府より以來、狗、夜、吠えず、人、吏を見ず、今當に棄て去らるべきを聞く、故に自ら扶けて送る、と。寵、爲に人ごとに一大錢を選んで、これを受く」とある。この詩は、錢淸江に泊し、上陸して劉寵の祠廟に參詣した時に作つたのである。

【詩意】亭亭として高く樹間に聳ゆるは、劉寵の古廟であつて、今しも、錢淸江の落口には、入日が

將に沈まむとして居る。そこで、舟を停めて廟に詣で、劉寵の像を拜せむが爲に、幔を掲げると、灰色なせる大鼠が、驚いて飛び出した。劉寵が太守として、この會稽の地を治めし時、その德は、山谷に住む野老輩を感ぜしめ、その轉任に際しては、野老から贈り物を受けて、挨拶をしたといふ程で、その清高なる遺德は、いつまでも此處に殘つて居る。われ今、急いで東方に旅行する途中、杯酒を供へることも出來ず、悵然として、煙に暗む廟扉を開いて出づれば、殘破せる瘦せ村では、夜を警むる狗の聲が聞こえた。

【餘論】起首四句は、廟に詣でた時の光景、中間四句は、劉寵の遺德を追頌し、結四句は、廟を辭して出る時の晩景、惆悵の二句、殊に淒寥極まりなきを覺える。

登蓬萊閣望雲門秦望諸山

蓬萊閣に登りて雲門・秦望の諸山を望む

(一)旅思(二)曠然釋。置身蒼林(三)杪。　旅思、曠然として釋け、身を置く蒼林の杪。

羣山爲誰來。歷歷散清曉。　羣山誰が爲にか來り、歷歷として清曉に散す。

奇姿脫霧雨。奮首爭欲(四)嬌。　奇姿、霧雨を脫し、首を奮つて、爭つて嬌がらむと欲す。

氣通海煙長。色帶州郭小。　氣は海煙に通じて長く、色は州郭を帶びて小なり。

(五)曲疑藏啼猿。(六)橫恐截歸鳥。　曲は啼猿を藏するかと疑ひ、橫は歸鳥を截たむことを恐る。

(七)流暉互蕩激。下有湖壑繞。　流暉、互に蕩激、下に湖壑の繞るあり。

佳處未遍經。一覽心(八)頗了。　佳處、未だ遍ねく經ず、一覽心頗る了る。

(九)秦皇遺跡泯。(一〇)晉士流風杳。　秦皇、遺跡泯び、晉士、流風杳かなり。

願探(一一)金匱篇。振袂翔(一二)塵表。　願はくは、金匱の篇を探り、袂を振つて塵表に翔らむ。

【字解】【一】旅思　旅中の愁思。【二】曠然　ひろき貌。【三】蒼林杪　杪は樹の頂。【四】欲嬌　嬌は擧がる。【五】曲　山勢屈曲して疊合する。【六】橫　橫ざまに長く延く。【七】流暉　流るる日の光。【八】心頗了　心中に十分と思ふ。【九】秦皇　秦望山は秦の始皇が此に登つたといふ處から名づけたのである。【一〇】晉士　雲門山は晉の王獻之が居た處。【一一】金匱　漢書晁錯傳に「玉版に刻し、金匱に藏す」とあり、金屬製の櫃、一統志に「紹興府の東南に石匱山あり、形、匱の如し、相傳ふ、禹、水を治めて畢り、書を此に藏す」とあつて、暗に之を用ひたのであらう。【一二】塵表　風塵の外。

【題義】蓬萊閣は、一統志に「紹興府内臥龍山上に在り、五代の時、錢武肅建つ。舊說、蓬萊山、正に會稽に屬す、閣、蓬萊と名づくるは、此を以てす」とあり、雲門秦望は、同じく一統志に「雲門山は、府城の南に在り、晉の王獻之、ここに居る、舊と子敬の山亭、永禪師の臨書閣あり。秦望山は、府城の東南に在り、衆峰の標たり」とあり、又史記に「始皇、かつて此に登り、以て東海を望む、故に名づく」とある。この詩は、紹興府に至つて蓬萊閣に登り、近く雲門・秦望の諸山を望んで作つた

のである。

【詩意】 ここに、蓬萊閣頂に登れば、旅中の愁思も、曠然として釋け、身を蒼林の樹梢に置いた樣な心持がする。羣山は、誰が爲に來りしか知らねど、歷歷として、淸き朝空に散點し、その奇姿は、霧雨の中より出で、首を奮つて、各〻擧がらむとし、山氣は、長く棚引く海煙に通じ、山色は、小なる州郭を圍繞して居る。その屈曲して疊合したる處には、悲しげに啼く猿が棲んで居るかと疑はれ、橫ざまに長く延いては、歸鳥の路を截ち切りはせぬかと思はれ、流るる日光は、山氣山色と共に、互に蕩激し、その下には、湖水だの谷だのが繞つて居る。この鷄山の間なる勝地は、殘りなく經めぐつたといふ譯ではないが、ここに來て一覽すれば、心に十分だと思つた位。むかし、秦の始皇が登臨した跡は、すでに泯滅し、晉の王獻之の遺風も、杳然として、今は尋ねることが出來ない。願はくは、金匱の中に祕めてある仙書を探り出し、これを以て淸修した後に、仙術を會得し、そして、袂を振つて、風塵の外に翺翔したいと思ふ。

【餘論】 起首八句は一氣呵成で、措辭聲調、ともに其妙を極めて居る。その下四句、なほ羣山の遠景を寫し、一轉して、秦皇晉士の遺跡、今尋ぬるに由なきをいひ、然る後、求仙の事に及んだので、語を出すこと、唐突ならず、自然に工妙である。

聞長槍兵至出越城夜投龕山

長槍兵の至るを聞き、越城を出でて、夜、龕山に投ず

列(一)藩遏(二)戎亂、駐(三)鉞實此州。　列藩、戎亂を遏め、鉞を駐むるは實に此州。
如(四)何殺大將、王師自相讎。　如何ぞ、大將を殺し、王師自ら相讎とする。
我來亂始定、城郭氣尙愁。　我來つて、亂、はじめて定まり、城郭、氣、尙ほ愁ふ。
又聞有鄰(五)兵、倉(六)卒豈敢留。　又聞く、鄰兵ありと、倉卒、豈に敢て留まらむや。
促還出西門、天寒絕行輈(七)。　促し還つて西門を出づ、天寒くして行輈を絕つ。
古(八)戍暗雨雪、旌旗暮悠悠。　古戍、雨雪暗く、旌旗、暮に悠悠。
野屋閉不守、澤田棄誰收。　野屋、閉ちて守らず、澤田、棄てて誰か收めむ。
居人且奔逃、游子安得休。　居人且つ奔逃、游子安んぞ休むを得む。
逶(九)迤蒼山去、泱(一〇)漭玄雲浮。　逶迤として蒼山に去り、泱漭として玄雲浮ぶ。
人虎爭夜行、風榛嘯巖幽。　人虎、夜を爭うて行く、風榛、巖に嘯いて幽なり。
我徒戒相親、一失未(一一)易求。　わが徒、戒めて相親む、一失、未だ求め易からず。

饑拾谷口栗。寒燒澗(一二)中櫪。　饑ゑては谷口の栗を拾ひ、寒には澗中の櫪を燒く。
神(一三)迷路(一四)多迂。再宿達海陬。　神迷うて路迂多し、再宿して海陬に達す。
雖嘗登頓勞。幸免迫(一五)辱憂。　登頓の勞を嘗むと雖も、幸に迫辱の憂を免る。
聖(一六)尼畏於匡。嗟我敢有尤(一七)。　聖尼は匡に畏る、嗟、我敢て尤あらむや。
但慙去越早。不遂名山遊。　但だ慙づ、越を去ること早くして、名山の遊を遂げず。

【字解】【一】列藩　重要なる各地の藩鎭。【二】遏戎亂　兵亂を平定する。【三】駐鉞　節鉞を駐める、總大將が居る、唐書渾瑊傳に「帝、軒に臨んで鉞を授く」とある。【四】如何穀大將　元史邁里古思傳に「邁里古思は、寧夏の人、至正の進士、紹興路錄事司達魯花赤を授けらる。苗軍の主將楊完といふもの、杭に在るや、軍を縱つて抄掠し、紹興城中に至り、强ひて人馬を奪ふものあり。邁里古思、數人を擒殺す、苗軍懼れて敢て境に入らず。兵を提げて處州の山賊を平らげ、江東廉訪使司經歷に擢んでられ、仍ほ紹興に留まる。民、これを愛すること、父母の如し。浙江省の臣、制を承けて、行樞密院判官を授け、院を分つて紹興に治す。會ま、方國珍、兵を遣して、紹興の屬縣を侵す、邁里古思曰く、國珍は本と海賊、すでに降つて大官となり、復た來つて吾が民を害す、可ならむや、と。兵を率ゐて、往いて罪を問はむと欲し、先づ部將黃中を遣し、上虞を取る。中、還つて兵を益さむことを請ふ。この時、朝廷方に國珍に倚重し、その舟に資して、以て糧を運ぶ。而して、御史大夫拜住哥、素より賄賂を通じ、情好甚だ厚し。邁里古思が擅に兵を舉ぐるを聞き、卽ち人をして、召して私第に至らしめ、與に事を計り、左右に命じ、鐵槌を以て之を撾殺し、その首を斷つて廁溷中に擲つ。城中の民、これを聞いて、男女老幼、慟哭せざるなし。中、乃ち其衆を率ゐて讐を復し、盡く其家人を殺し、ひとり拜住哥を留めて殺さず、以て蠻士誠に告ぐ。士誠、乃ち其將を遣し、兵を將ゐて紹興を守らしむ。拜住哥、尋いで行宣政院に還る。監察御史貢童、糾言す、拜住哥、陰に帥臣を害す、宜しく典刑に寘くべし、と。ここに于て、始めて拜住哥の官職を削つて、潮州に安置す。而して、邁里古思の寃、はじめて白す」とある。【五】郡兵　長鎗兵を指す。【六】倉卒　あわてる。【七】行幹　幹は轅、車の義に用ふ。【八】古戍　戍は兵營。【九】逶迤　めぐる。【一〇】泱漭　司馬相如の上林賦に過乎泱漭之野」とあり、正韻に「曠色明かならざるの貌」とある。【一一】未易求　囘復することが出來ない。【一二】澗中櫪　櫪は粗朶。【一三】神迷　神は精神。【一四】路多迂　迂曲する路が多い。【一五】迫辱　賊に迫られ且つ辱かしめられる。【一六】聖尼畏于匡　聖人たる仲尼、卽ち孔子が、陽虎と間違へられて匡といふ處で大に困められた、その詳は、史記孔子世家に見ゆ。【一七】敢有尤　尤はとが、過失、罪科。

【題義】明史概大政記に「至正十七年、上、兵を大通江に閲し、繆大亨に命じて揚州を取らしむ。元帥張明鑑、長槍兵を以て降る」とあつて、その注に「乙未の歲、明鑑、衆を淮西に聚め、青布を以て號となし、青軍と名づけ、又呼んで一片瓦となす。その黨張監、驍勇にして善く槍を用ひ、又長槍軍と號す。黨衆暴悍、含山より轉掠して揚州に至る。人、皆之に苦む。時に元の鎭南王孛羅普化、揚州を鎭し、明鑑等を招降し、以て濠泗の義兵となす。元帥、揚州に駐まり、分屯して守禦す。丙申三月、明鑑等、鎭南王に逼つて反せしむ。從はず。これを逐ひ、趙均用等に殺さる。城に據つて、兇暴日に甚しく、日ごとに城中の居民を屠つて食となす。ここに至つて、大亨の兵至り、支ふる能はず、遂に降る」とある。又明紀に「至正十六年十二月、長槍軍謝元帥、廣德に寇す。守將鄧愈、擊つて之を敗る。又十七年、徐達、常州に克つ。四月、寧國を攻む、長槍軍、來り援く、復た險を扼して之を敗る」とある。これで見ると、長槍軍は、至正十五年に初めて起り、十七年の夏には明に降參したのであるが、その後、なほ暴行を止めなかつたのであらう。青邱の吳越に遊んだのは、十七年の冬が始め

てであるから、この詩は、矢張、その時の事と思はれる。但し、この時、長槍兵は、如何なる行動をしたのか、史傳には明かでない。又本隊でなくして、その支隊であつたかも知れぬ。越城は紹興府治。龕山は、陳善の海塘考に、「海寧縣塘西南數十里、赭山あり、その南に龕山あり、相對し、夾んで海門を爲す。龕山は、紹興蕭山縣に屬す」とある。この詩は、靑邱が紹興府に在りしとき、長槍兵が押し寄せて來るといふ風聞を耳にし、仍つて、府城を出で、夜、龕山の民家に投宿した時に作つたのである。

【詩意】剡下、騷擾愈よ甚しき折柄、列藩は、兵亂を防ぎ止めむとし、そして、紹興府城には、主將が節鉞を駐めて居守して居た。然るに、その主將たる邁里古思は、御史大夫拜住哥といふものに殺され、王師は互に讎として攻め合つて居た。わが此に來たのは、その騷亂が、やつと平定した時であつたが、城郭の內には、愁氣が閉ぢこめて、兎角物騷な有樣。その時、鄰國に居る長槍兵が押し寄せるといふ風聞があつたので、あわてて立ち去ることにし、しばらくも此に留まらず、故鄕の方へ還る積りで、西門を出たが、折しも冬の寒い時分なのに、旅をする車だにない。眺めやれば、古りたる屯營には、雨雪しきりに降り注いで、暮色ほの暗く、旌旗は悠悠として飄り、野人の家などは閉ぢた儘で、これを守る人なく、平郊一帶の田畑も、棄てツぽかしで誰も始末をするものがない。居民が奔つて逃れる位だから、旅客は、どうして落ち付いて居られやう。そこで、めぐりめぐつて蒼山の中に迷ひ入ると、黑雲地に低れ、泱漭として物も見えず、人は虎と共に爭つて夜行し、風に搖らめく雜樹は、巖を繞つて、その聲、嘯くが如く聞こえる。わが一行は、相戒めて援け合ひ、一たび過があれば、取りかへしが付かぬ、そこで、飢うれば、谷間に落ちて居る栗を拾うて、わづかに腹を充たし、寒さ甚しければ、澗中の粗朶を搔き集めて、焚き火をする。到る處、迂路多くして、心迷ひ易く、二宿を重ねて、やつとの事で、海岸の地に達した。險路を上つたり下つたりする其辛苦は、飽くまで嘗めたが、幸にして、賊に迫られたり辱しめられたりする憂だけは、どうやら免れた。むかし、孔子の聖を以てして、匡の地に困まれたといふが、われは、格別罪過ある譯でもないのに、これも、時運の廻り合せで仕方がない。唯だ心に慙かしく遺憾なるは、折角越まで來たのに、これを去ること早くして、天台・雁蕩等、名山の遊を成し遂げずして、引きかへしたことである。

【餘論】敍述に次第があつて、周匝精緻、些の遺憾なきは、例の筆致である。その中、古戍暗二雨雪一の四句は、居民、亂を避けた後の光景で、悲酸の極といふべく、人虎爭夜行の二句は、簡切奇警、古今多く見ざるところである。

夜抵江上候船至曉始行

夜、江上に抵りて船の至るを候ひ、曉に始めて行く

夜辭西陵館。(一)霜谷猿叫歇。(二)　夜、西陵館を辭し、霜谷、猿叫び歇む。

(三)津卒未具舟、天險不可越。　津卒未だ舟を具へず、天險越ゆべからず。
漁商雜候(四)渡。寒立沙上月。　漁商、雜つて渡を候し、寒くして立つ沙上の月。
蒼煙隱遙汀。益覺潮漲闊。　蒼煙、遙汀を隱し、益す潮の漲闊するを覺ゆ。
(五)開棹散(六)鳧鷖。海色(七)曙初發。　棹を開いて、鳧鷖を散じ、海色、曙、初めて發す。
曨曨前山來。稍稍後嶺沒。　曨曨として前山より來り、稍稍として後嶺に沒す。
中流聞鼓角(八)隔岸見城闕(九)。　中流に鼓角を聞き、岸を隔てて城闕を見る。
客路得奇觀。臨風悶(一〇)俱豁。　客路、奇觀を得たり、風に臨んで、悶、俱に豁。

【字解】【一】西陵館　一統志に「蕭山の西陵渡は、卽ち西興。錢鏐王、陵の字を忌み、名を西興と易ふ」とある。【二】霜谷　霜の降り鋪いた深谷。【三】津卒　渡し場の番人。【四】候渡　渡し舟の來るのを待つ。【五】開棹　舟を漕ぎ出す。【六】鳧鷖　鷖はあひる。【七】海色　晴れた朝げしき。【八】鼓角　唐書百官志に「節度使、境に入る、州縣、節樓を築き、迎ふるに鼓角を以てす、今の鼓角樓、ここに始まる」とある。【九】城闕　闕は門。【10】悶俱豁　煩悶の念が豁然として開く。

【題義】　この首は、夜、浙江の邊に至つて、渡し船の來るを待ち、あけ方に成つて、はじめて舟が出たので、その時の光景を敍したのである。

【詩意】　夜、西興の旅館を辭して出たのは、霜の降り鋪いた谷の中に、猿が叫び罷んだ時であつた。渡守は、舟の用意をせず、この天險は、とても越えられないから、ぢつと待つて居る外は無かつた。すると、漁師だの、商人だのが、追追やつて來て、一緒に渡しを待ち、月の照る沙上に寒げに立つて居た。見わたせば、灰色の煙は、ぼんやりと遙汀を隱して、江中には、潮が漲つて、愈よ濶くなつた樣である。やがて舟を漕ぎ出すと、鳧だの、あひるだのが驚いて飛び起ち、曙になつて、晴れた朝げしきが、やつと見え出し、前山の方から段段と明るくなつて、次第に後嶺の方に沒して仕舞ふ。その內に、江の眞中まで乘り出すと、鼓角の聲が聞こえ、對岸には、城門の聳えて居るのが認められた。客中、この奇觀を恣にするを得、煩悶の念も、風に臨んで、乍ち豁然たるを覺えた。

【餘論】　いささか平淺に失した感もあるが、漁商雜候渡の四句は、光景睹るが如く、畫手なほ及ばざる底の妙趣がある。

登鳳凰山尋故宮遺跡　鳳凰山に登りて故宮の遺跡を尋ぬ

茲山勢將飛。宮殿壓其上。　この山、勢、將に飛ばむとす、宮殿、その上を壓す。
江潮正東來。朝夕似(一)奔響。　江潮、正東より來り、朝夕、奔響するに似たり。
當時結(二)構意。欲敵(三)汴都壯。　當時、結構の意、汴都の壯に敵せむと欲す。

我來百年後。紫氣(四)愁不(五)王。
烏啼壁門(六)空。落葉滿陰障(七)。
風悲度(八)遺樂。樹古羅(九)嚴仗。
行人悼降(一〇)王。故老怨姦(一一)相。
蒼天何悠悠。未得問興喪。
世運今復衰。淒涼一回望。

われ來る百年の後、紫氣愁へて王ならず。
烏は啼いて壁門空しく、落葉、陰障に滿つ。
風は悲んで遺樂を度し、樹は古くして嚴仗を羅ぬ。
行人、降王を悼み、故老、姦相を怨む。
蒼天、何ぞ悠悠、未だ興喪を問ふを得ず。
世運、今復た衰ふ、淒涼、一たび回望。

【字解】【一】奔嚮　奔つて此に向ふ。【二】結構意　この宮殿を築いた時の考へ。【三】汴都　即ち汴梁、今の河南省開封府、一統志に「宋は汴に都す」とあり、林參井の遊湖山詩に直把₌杭州₋作₌汴州₋とある。【四】紫氣　盛なる氣。【五】不王　王は旺に同じ、盛ならず。【六】壁門　城壁の門。【七】陰障　物かげ。【八】度遺樂　當時の遺曲を奏する。【九】羅嚴仗　物物しき兵仗を羅列する。【一〇】降王　宋史紀事本末に「帝㬎德祐二年、春正月、伯顏、進んで皐亭山に次す、太后、監察御史楊應奎を遣し、傳國の璽・降表を上る」とある。【一一】姦相　賈似道を云ふ、宋史の本傳に「理宗、その姉を寵して貴妃となす、寵を恃んで檢せず　日に妓館に游び、夜、湖上に敖る。上、かつて、夜、高きに憑つて望むに、西湖中の燈火、常時に異なれり。左右に語つて曰く、これ必ず似道ならむ、と。度宗三年、太師平章軍國重事に除し、第を葛嶺に賜ひ、樓閣亭榭を起し、宮人娼尼の美色なるものを取つて妾となし、その中に淫樂し、羣妾と地に踞して蟋蟀を闘はす。度宗崩ず、督府を臨安に開く。揚州、兵潰ゆるに至つて、平章を罷む。都督王爚、入つて太后に見えて曰く、本朝權臣の稔惡、未だ似道の烈しきが如きものあらず、縉紳草茅、幾疏なるを知らず　皆抑へて行はず、何を以て天下に謝せむ、と。はじめて婺州に徙す。婺州の人、爲に露布これを逐ふ。御史孫嶸叟等、以て罰輕しと爲し、建寧に徙す。翁合奏す、建寧は故名儒里、三尺の童子その名を聞くも皆嘔惡す。況んや、その人を見るをや、と。乃ち高州團練使に謫し、循州に安置す、漳州木綿菴に至り、鄭虎臣に拉殺せらる」とある。

【題義】鳳凰山は、杭州府志に「山は府城の南に在り、南宋建都、かつて環つて內苑に入る」とある。杭州は、その頃、臨安と稱し、西湖を控へ、鳳凰山は、その東南角に當り、全體が內苑の中に取りこめられて、樓臺亭榭が多くあつた。この詩は、作者が鳳凰山に登り、南宋故宮の遺跡を尋ぬるに因つて、感慨を寄せたのである。

【詩意】この山は、鳳凰の名に負かず、その勢、將に飛舞せむとし、幾多の宮殿が其上を壓して列峙して居た。錢塘江の潮は、正東より來り、朝夕奔つて此に向はむとするが如く、まことに形勝を極めて居る。その初、皇居を設けた時の考へでは、汴梁の舊都の壯麗にも負けぬ樣にしたいといふことであつた。しかし、百年の後、今ここに來て見ると、紫氣すでに旺ならず、烏は淋しげに啼いて、城門空しく、落葉は物かげに堆積し、悲風の聲は、遺樂を奏するが如く、古木は、儼然たる兵仗を羅列するが如く、覧る者をして、愈よ傷心せしめる。宋の末路、むなしく國璽降表を上つて元に降服したので、行人は、降王の否運を悼み、又その亡國の原因は、主として、賈似道が大柄を竊んで、勝手な眞似をしたからであるから、故老は、長しへに姦相を怨んで居る。蒼天は、悠悠として上に在まし、萬事その心次第であるが、興廢何に由つて然りや、未だ問ふことも出來ない。今の元室も、頃ろは上下

亂を爲し、世運が又ぞろ衰へて來たので、滿目淒涼、覺えず、首を回して、顧望することを禁じ得なかつた。

【餘論】破題四句は、山河の形勝を寫し、簡勁にして、頗る面白い。烏啼壁門空以下四句は、現在荒涼の景を敍し、行人悼降王の二句は、宋の末路を嗟嘆し、結構の上から見て、至極尤もではあるが、措辭やや陳套にして、折角の起首と相副はぬのを遺憾とする。但し、結四句、世運の循環を言うて、刻下の騷亂に及び、その感慨の一しほ深いのは、尤も妙である。

宿湯氏江樓夜起觀潮　　湯氏の江樓に宿し、夜、起きて潮を觀る

舟師夜驚呼。隔浦亂燈集。(一)
舟師、夜、驚いて呼ぶ、浦を隔てて亂燈集まる。

潮聲若萬騎。怒奪海門入。
潮聲は、萬騎、怒つて海門を奪つて入るが若く、

初來聽猶遠。忽過顧無及。
初め來つて、聽いて猶ほ遠く、忽ち過ぎて、顧るに及ぶなし。

震搖高山動。噴灑(二)明月溼。
震搖して高山動き、噴灑して明月溼ふ。

霜風助翻(三)江。蛟龍苦難蟄。
霜風、助けて江を翻し、蛟龍、苦んで蟄し難し。

應知陰陽氣(四)。來往此呼吸(五)。
應に知るべし、陰陽の氣、來往ここに呼吸するを。

登樓覺神壯。涉險方迴立。
樓に登つて、神の壯なるを覺え、險に涉つて、方に迴に立つ。

何處望靈旗(六)。煙中去波急。
何の處か、靈旗を望む、煙中、去波急なり。

【字解】(一) 亂燈　風にゆらめく燈火。(二) 噴灑　潮の氣が噴出して注ぐ。(三) 翻江　江水を翻へす。(四) 陰陽氣　高麗舊經に「一晝一夜、陰陽の氣を合せ、凡そ再び升降す、故に一日の間、潮汐皆再びす」とある。(五) 呼吸　李白の詩に呼吸走百川とある。(六) 靈旗　前に弔伍子胥辭の條にも引いて置いたが、吳越春秋に「子胥、劍に伏す。吳王、その屍を棄てて、これを江中に投ず。子胥、因つて流に隨つて波を揚げ、潮に依つて來往し、蕩激岸を崩す」とあつて、子胥の靈魂は、素車白馬、靈旗を建てて波頭に現はれると傳へられて居る。

【題義】この詩は、錢塘江の邊なる湯氏の樓に宿し、夜中に起きて潮を觀て作つたのである。錢塘の潮は、むかしから有名で、方輿勝覽に「錢塘、晝夜ごとに、潮、再び上る。八月十八日に至つて、尤も大なり」とあり、錢塘侯潮圖に「八月十五日、獨り常潮よりも大、遠く觀れば、數百里、素練の江に横ふが若く、近く見れば、潮頭高さ數丈、雲を捲き、雪を擁し、混混庵庵、聲、雷鼓の如く、以て之を形容するに足らず」とある。青邱の往つたのは、冬であるから、さまででは無かつたらうが、それでも、十五夜らしいから、かなり盛であつたらうと思はれる。

【詩意】夜半の頃、樓下に泊する舟師どもは、頻りに驚き、向ふ岸では、ゆらめく燈火が集まつて、最早、潮が差し初めたと云ふ間もあらせず、潮聲の砰訇として囂しきことは、萬騎の兵、海門を奪つ

て進入したやうである。初めて來たときは、潮聲なほ遠くに在つて聞こえたが、やがて岸を拍つて過ぎ去ると、顧みても既に及ばない。その聲の震撼するにつけては、高山も動くべく、その氣の噴薄するは、明月を溼はしむるばかり。おまけに、霜を帶びたる寒風は、その勢を助けて、江水を翻盪せしめ、水底に潛める蛟龍も、ぢつと蟄して居ることは出來ぬ位。これは、陰陽兩氣が來往して、呼吸をするからで、その勢の壯なるも、宜べこそと頷かれる。ここに樓に登つて、潮の押し寄するを望めば、神氣極めて壯にして、自ら抑遏すべからず、おまけに、ここは海山の天險に當り、迥然として長立するに宜しい。伍子胥の靈魂は、往往、潮に乘つて出現するといふが、その靈旗は、何處とも分からず、寄せてはかへす波は、煙の中で、勢凄まじく廻つて居る。

【餘論】錢塘の觀潮は、絶好の題目で、古來筆を著けた人も少くない。靑邱は、折角來たものの、その時を得ずして、十分の壯觀を爲さざりしは、遺憾であるが、潮聲若萬騎の二句、震撼高山動の四句は、略ぼ其光景を彷彿せしめる。

過奉口戰場

奉口の戰場を過ぐ

(一)路廻荒山開。如出(二)古塞門。
路、廻つて荒山開け、古塞門を出づるが如し。

(三)驚沙四邊起。寒日慘欲昏。
驚沙、四邊に起り、寒日、慘として昏からむと欲す。

上有飢鳶聲。下有枯蓬根。
上に飢鳶の聲あり、下に枯蓬の根あり。

白骨橫馬前。貴賤寧復論。
白骨、馬前に橫はり、貴賤、寧ろ復た論せむや。

不知將軍誰。此地昔戰(四)奔。
知らず、將軍は誰ぞ、この地、むかし戰奔。

我欲問路人。前行盡空村。
われ路人に問はむと欲す、前行盡く空村。

登高望廢壘。鬼結愁雲(五)屯。
高きに登つて廢壘を望む、鬼は愁雲を結んで屯す。

當時十萬師。(六)覆沒能幾存。
當時十萬の師、覆沒能く幾ばくか存する。

應有獨老翁。來此哭子孫。
應に有るべし、獨り老翁、ここに來つて子孫を哭する。

年來未休兵。强弱事倂呑。
年來未だ兵を休めず、强弱、倂呑を事とす。

功名竟誰成。殺人遍乾坤。
功名、竟に誰か成さむ、人を殺して乾坤に遍ねし。

愧無拯亂術。佇立空傷魂。
愧づらくは亂を拯ふの術なきを、佇立して空しく魂を傷ましむ。

【字解】【一】路廻　路が紆廻する。【二】古塞門　古りたる邊塞、卽ち長城の門。【三】驚沙　飛び起つ沙。【四】戰奔　接戰して敗北する。【五】屯　あつまる。【六】覆沒　全軍殘りなく戰歿する。

【題義】奉口は、湖州府志に「德淸縣の疆域、南、仁和縣界に至る、一十五里、奉口斗門を以て界と

なす」とある。その奉口は、戰場であるといふが、誰と誰とが戰つたか、一寸分からない。しかし、元末の事で、王師が此に敗北して、全軍覆滅したといふことで、青邱は、特に憑弔の意を寄せたのである。

【詩意】驛路は紆廻し、荒山は忽ち開け、前は一帶の平原になつて居て、さながら、北方なる長城の門を出ると、眼前に廣い平地が展開される樣である。時しも、風が急で、沙は四邊より飛び起ち、凍れる日影は、慘然として、昏く成りかかつた。仰げば、上には飢ゑた鳶が鳴いて居るし、俯せば、下には枯れた蓬の根が、あらはになつて居るし、馬前には、白骨縱橫、まだ始末もせず、死後に於ては、貴賤の別だにない。その時の將軍は、何といふ人であつたか知らぬが、ここで戰つて、敗北したのである。そこで、路行く人に問ひ尋ねやうと思ふが、行く先先は、無人の荒村で、誰にも遇はぬから、仕方がない。小高い處に登つて、廢壘を望むと、鬼氣は、自然に凝結して、愁雲となり、此に聚まつて、かつて散じない。當時、十萬の兵士が居たといふが、全軍覆沒、果して、幾人が生き殘つたか。今でも、此に來て、陣歿した其子孫を哭する孤獨の老翁が有らうと思ふ。刻下、騷亂愈よ甚しく、年年、兵を休むることなく、强弱互に倂呑を事として居る。そして、功名を成し遂げるは、誰とも分からず、唯だ多くの人を死なして、天地の間に滿たしめるばかり。われに、亂を拯ふ術あらば、起つて、一肌ぬぐ處であるが、それも出來ず、唯だ茫然佇立して、心魂を傷ましむるのみである。

【餘論】破題四句、忽然として廣い平野に出たことを敍し、驚沙四邊起の二句は、荒寒の景、さながら見るが如くである。我欲問路人の四句は、刦後の淒寥を寫し、簡にして盡して居る。應有獨老翁の二句は、波瀾橫生。功名竟誰成の四句は、收束力あり、題意、はじめて全きを覺える。

泊徳清縣前、望金鷲玉塵二峰　徳清縣前に泊し、金鷲・玉塵の二峰を望む

(一)歸遠行不緩。頗失眺山水。　歸ること遠くして行緩かならず、頗る山水を眺むるを失ふ。

獨憐茲峰秀。欲去舟且檥。(二)　獨り憐む、茲峰の秀づるを、去らむと欲して舟且く檥す。

層巒廻長溪。日落蒼(三)霧起。　層巒、長溪を廻り、日落ちて蒼霧起る。

寒城動遙(四)炊。晩渡罷孤(五)市。　寒城、遙炊を動かし、晩渡、孤市を罷む。

豈唯地景幽。況乃民俗美。　豈に唯だ地景の幽なるのみならむや、況んや、乃ち民俗の美なるをや。

牛羊散樹下。曖(六)曖舊墟里。　牛羊は樹下に散ず、曖曖たる舊墟里。

(七)田腴收穫富。縣靜爭(八)訟止。　田は腴にして、收穫富み、縣は靜にして、爭訟止む。

(九)畏途遇樂境。我意方一喜。　畏途、樂境に遇ひ、我が意、方に一たび喜ぶ。

嘯歌逐漁翁。暫宿浦煙裏。　嘯歌、漁翁を逐ひ、暫く宿す浦煙の裏。

篠(一〇)疎風翛翛(一一)、月偃(一二)波瀰瀰(一三)。　篠は疎にして風翛翛、月は偃して波瀰瀰たり。

旅顏在塵中、逢人固多恥。　旅顏、塵中に在り、人に逢うて、もとより恥多し。

安得託此居、長年(一四)息行李(一五)。　安んぞ、此に託して居り、長年、行李を息ふを得む。

【字解】【一】歸遠　歸り路が遠い。【二】且艤　艤は類篇に「舟を附けて岸に著するなり」とある。【三】蒼靄　蒼は灰白色。【四】遙炊　遙に見ゆる炊煙。【五】孤市　市は市場。【六】曖曖舊墟里　潘嶽に時曖曖其將昏分とあつて、その注に「曖曖は、昏昧の貌」とある、又陶淵明の詩に曖曖遠人村、依依墟里煙とある。【七】田腴　田畑の地味膏腴なること。【八】爭訟　爭論訴訟。【九】長途　險阻なる途。【一〇】篠疎　篠は竹林。【一一】翛翛　そよそよと吹く。【一二】月偃　月が水に映る。【一三】瀰瀰　ひろき貌。【一四】長年　いつまでも。【一五】行李　泊宅編に「李理義通ず。人、將に行あらむとすれば、必ず先づ裝を治む」とある。旅支度をするといふのが本義で、後には、荷物を指す樣になつた。

【題義】湖州府志に「金鵞山は、德淸縣の西南に在り。相傳ふ、古しへ金鵞あり、その處に出沒す、毎に或は其聲を聞く、故に名づく。玉塵山は、德淸縣西に在り、白石洞あり」と見え、二山ともに相當の勝地と思はれる。この詩は、德淸縣の前に船を泊し、日暮、金鵞・玉塵の二峰を望み、その地の幽靜なるを愛でて作つたのである。

【詩意】歸り路の遠い爲に、緩ツくりとして居ることも出來ず、途すがら、隨分勝地もあつたが、山水を眺める機會だになかつた。しかし、金鵞・玉塵二峰の秀絕なる樣は、まことに氣に入つたから、一たび立ち去らうとしたが、思ひかへして、舟を岸に泊することに成つた。眺めやれば、重なる峰巒は、長い溪流に從つて廻り、夕日が沈むと、白霧が溪谷の間から立ち上つた。德淸の縣城には、炊煙遙に登り、江邊の渡し場に開かれた市も、晩に成つて解散した。唯だ土地の景色の幽邃なるばかりではなく、住民の風俗も、どうやら美しげに見え、放し飼にしてある牛羊は、樹下に散じ、古りたる村里は、曖曖として霞みこめて居る。田畑は、地味膏腴にして、收穫多く、一縣極めて靜にして、爭論訴訟の沙汰もない。險阻つづきの途中で、好個の樂境を發見したから、心に初めて喜ばしく、やがて、漁翁の眞似をして嘯歌し、棚引く浦煙の中に宿した。あたりは、竹林まばらにして、風、そよそよと吹き度り、月、水面に映れば、波のうねうね、さも廣さうに見える。身は風塵中に旅をして、顏色いたく煤ぶり、人に逢ふのも恥かしい位、この處に我が居を占め、長しへに旅を止めることが出來れば、至極結構な事だと思つた。

【餘論】秩序あつて散漫ならず、周匝にして遺漏なきは、例の得意の筆法であつて、その中、寒城動遙炊の二句は、二謝に近く、牛羊散樹下の二句は、陶淵明乃至王孟に酷似して居る。

舟次敢山阻風累日登近岸荒岡僧舍

舟、敢山に次し、風に阻まること累日、近岸荒岡の僧舍に登る

高岸鳴枯桑。湖陰北風厲。　高岸、枯桑を鳴らし、湖陰、北風厲し。
寒濤洶(一)我前。幾日不得濟。　寒濤、我が前に洶き、幾日も濟るを得ず。
孤舟恐漂(二)蕩。石(三)根暮牢繫。　孤舟、漂蕩を恐れ、石根、暮に牢く繫ぐ。
憂來厭閒臥。近寺聊獨詣。　憂來つて、閒臥を厭ひ、近寺、聊か獨り詣づ。
雀飢殘林空。人倦危磴(四)細。　雀飢ゑて殘林空しく、人倦んで危磴細なり。
年荒無居僧。樹死石門閉。　年荒れて居僧なく、樹死して石門閉づ。
神傷却欲返。微霰灑征袂。　神傷んで、却つて返らむと欲すれば、微霰、征袂に灑ぐ。
窮冬已崢(五)嶸。故國尙迢遞。　窮冬、すでに崢嶸、故國、尙ほ迢遞。
仰看浮雲馳。東路阻(六)歸計。　仰いで浮雲の馳するを看、東路、歸計を阻む。
長歎復何言。吾生信多(七)滯。　長歎、復た何をか言はむ、吾が生、信に滯多し。

【字解】【一】洶我前　洶は湧く。【二】漂蕩　漂うて動く。【三】石根　石の根元。【四】危磴　危げに崩れた石段。【五】崢嶸　迫る、ここでは年の盡くること。【六】阻歸計　歸國の計畫を妨げられる。【七】多滯　停滯することが多い。

【題義】一統志に「敢三山は、德清縣東に在り、山、敢村に在るを以て故に名づく」とある。この詩は、前首に次いで愈よ德清を出發し、敢山の下に停泊した處が、連日風に妨げられて、航行することが出來ず、退屈の餘りに、岸に近き、荒れた小山に在る寺に參詣して作つたのである。

【詩意】高岸に立ちならぶ枯れた桑の樹は、颯として鳴り、湖の南岸は、まともに受ける北風の勢すさまじく、眼前には、寒濤洶湧し、幾日も湖を濟ることが出來ない。孤舟は、風の爲に漂はされ、動き出して困まるといふので、日暮、しつかりと石の根元に繫ぎ留めた。客愁、しきりに相催し、閑臥して居ると、愈よ淋しく懶げなる儘、ひとりで、近くの寺に一寸參詣して見た。林は伐りすかされて淋しければ、雀は食なくして飢ゑ、危い石段は幅狹く、歩くと、ぢきに疲れる。寺は猶ほ殘つて居るが、凶年が續いた爲に、居僧なく、あたりの木は、みんな枯れ盡し、石門は閉ぢて、一寸往來も出來ない樣になつて居る。この景色を見て、覺えず心神を傷ましめ、すぐに引きかへさうとすると、衣手さむく、霰が降りかかつた。今年も將に暮れむとするのに、故鄕は猶ほ遠く隔つて居る。仰いで浮雲の自在に馳するを望み、東方への路は、兎角物騷で、わが歸計を妨ぐることを怨めしく思つた。かくて長嘆した處で、仕方がないから、最早何も言ふまい、隨處に停滯して、兎角、おもふ樣に成らぬのが、わが生涯の本分だと思つて諦める外はない。

【餘論】客中無聊の情味、盡さざるなく、就中、雀飢殘林空の四句は、廢寺を描き出して、畫圖以上の活趣がある。

過硤石

硤石を過ぐ

硤石頗奇壯。長河出連山。
絕壁兩岸開。行舟過其間。
高處誰解登。陰藤(一)裊(二)難攀。
旁垂雨痕古。仰露天光慳(三)。
不知眞宰(四)意。隨地設險艱。
(五)一夫據蜀閣。(六)二世憑秦關。
賴此非要區。爭奪得少閒。
徘徊佇望久。日暮飛雲還。

硤石、頗る奇壯、長河、連山を出づ。
絕壁、兩岸開け、行舟、その間を過ぐ。
高處、誰か登るを解せむ、陰藤、裊として攀ぢ難し。
旁に雨痕を垂れて古く、仰げば天光を露はして慳なり。
知らず、眞宰の意、地に隨つて險艱を設く。
一夫、蜀閣に據り、二世、秦關に憑る。
賴に此は要區に非ず、爭奪、少しく閒なるを得む。
徘徊して、佇望久しく、日暮、飛雲還る。

【字解】〔一〕陰藤　藤かげに生えた藤。〔二〕裊　たをやかなること、しなふ。〔三〕慳　意地惡い、吝む。〔四〕眞宰　造物主、老子に「眞宰あり、以て萬物を制するに足る」とある。〔五〕一夫據蜀閣　蜀閣は蜀の劍閣を指したのであらう。李白の蜀道難に、劍閣崢嶸而崔嵬、一夫當關、萬夫莫開とある。〔六〕二世憑秦關　秦は、二代の間、關中の要地を恃みとして居た。史記項羽本紀に「關中は山河を阻てて四塞す」とあつて、その注に「東は函谷、南は武關、西は散關、北は蕭關」とある。

【題義】杭州府志に「海寧縣硤石山は、卽ち紫微山なり、兩山相峙ち、中に河流を通す、故に名づく」とある。この詩は、作者が硤石を過ぎた時に作つたのである。

【詩意】硤石の山は、頗る奇壯で、長河が連山の間より流れ出で、兩岸は絕壁で、舟は其間を通つて行く。その絕壁の高い處には、誰か登られやう、手がかりになる藤蔓は、しなしなして、攀づること六づかしい。絕壁の巖面は、その藤の側に雨の垂れて流れた痕が、色づいて古く、仰げば、天光線の如く、意地わるくも、少し露はれて見えるだけである。造物主は、如何なる考で、地上隨處に、歩むにも辛い樣な險阻を設けたのであるか。蜀の劍閣は、一夫以て防ぐべく、秦關は、暴主でも、二世の間、恃として居ることが出來たので、羣雄割據の場合には、成程必要かも知れない。しかし、この硤石の如きは、幸にして、重要な區域に非ざるが故に、爭奪の場合も、さう多くはなく、唯だ行人の遊賞に任かしても、善からうと思ふ。ここに來つて、去りもあへず、佇立凝望、すでに久しく、やがて日暮れなむとして、飛ぶ雲が還つて行き、一段と幽邃の趣を添へて來た。

【餘論】旁垂雨痕古の二句は、絕壁夾立の有樣を描き出し、對偶を以て之を行つた爲に、更に簡警である。以下八句は、作者の感慨であるが、一夫據蜀閣の二句は、造句の上から見ても、稍や切當を缺いた樣な嫌がある。極言すれば、この二句は、刪つても、格別の影響も無い樣に思はれるが、如何か。

謁雙廟

維昔天寶末(一)、君王寵姦虜(二)。
雄邊(三)委強兵(四)、遺患同養虎(五)。
叛聞(六)遽西幸(七)、骨肉(八)棄榛莽。
河北二十州、義士誰禦侮(九)。
兩公(一〇)起誓衆(一一)、慟哭告玄祖(一二)。
橫身遏其衝(一三)、江淮(一四)保安土。
孤城無全堞(一五)、百戰(一六)霜月苦。
力窮(一七)援不來、嚙齒(一八)罵益怒。
殘兵(一九)日飢疲、秋風仆旗鼓。
男兒(二〇)不生降、一死冠今古。
故鄕有遺廟、俗祭(二一)巫屢舞。
丹青(二二)網塵(二三)中、爽氣(二四)猶可覩。
嗟今屬喪亂、戎馬(二五)正旁午(二六)。
臨危肯捐軀、如公未多數。
獨立爲悲傷、斜陽下寒楚(二七)。

雙廟に謁す

維れ昔、天寶の末、君王、姦虜を寵す。
雄邊、強兵を委し、患を遺すこと、虎を養ふに同じ。
叛、聞こえて、遽に西幸、骨肉、榛莽に棄つ。
河北二十州、義士、誰か侮を禦がむ。
兩公、起つて衆に誓ひ、慟哭して玄祖に告ぐ。
身を横へて其衝を遏め、江淮、土を保安す。
孤城、全堞なく、百戰、霜月苦なり。
力窮まつて援來らず、齒を嚙み、罵つて益す怒る。
殘兵、日に飢疲、秋風、旗鼓を仆す。
男兒、生き降らず、一死、今古に冠たり。
故鄕、遺廟あり、俗祭、巫、屢ば舞ふ。
丹青、網塵の中、爽氣、猶は覩るべし。
嗟、今、喪亂に屬し、戎馬正に旁午。
危きに臨んで、軀を捐つるを肯んず、公の如き、未だ多「數ならず。
獨立、爲に悲傷、斜陽、寒楚に下る。

【字解】【一】天寶末　天寶は唐の玄宗の年號。【二】寵姦虜　安祿山は元と胡虜で、その性姦猾なるより、姦虜といふ。唐書の本傳に「時に、楊貴妃、寵あり。祿山、請うて、妃の養兒となり、その拜する、必ず妃を先にして、帝を後にす。帝、これを怪む。答へて曰く、蕃人、母を先にして父を後にす、と。帝、大に悅ぶ。命じて楊銛及び三夫人と約して兄弟たらしめ、爲に第を京師に起す。帝、勤政樓に登り、幄坐の左に金雞大障を張り、前に特榻を置き、祿山に詔し、坐して其幄を褰げ、以て尊寵を示す。太子諫めて曰く、古しへより、幄坐は、人臣の當に得べきに非ず、陛下、祿山を寵し、過ぎたること甚し、必ず驕らむ。帝曰く、胡、異相あり、我、これを厭せむと欲す」とある。【三】雄邊　兵力精强なる邊庭。【四】委強兵　通鑑に「天寶元年春正月、安祿山を以て平盧節度使となし、三載三月、安祿山を以て范陽節度使を兼れしめ、六載、御史大夫を兼れしめ、七載、鐵券を賜ひ、九載、爵、東平郡王を賜ひ、十載、第を親仁坊に起し、河東節度使を兼れしめ、十三載、祿山に左僕射を加へ、閑廐羣牧使となす」とあり、唐書の本傳に「祿山、すでに阿布思の衆を得、兵、天下に雄たり」とある。【五】遺患同養虎　史記の項羽本紀に「項王、すでに約し、乃ち兵を引き、解いて東に歸る。漢、西に歸らむと欲す。張良・陳平、說いて曰く、楚、兵罷れ、食盡く。今、釋して擊たず、謂はゆる虎を養うて、自ら患を遺すなり」とある。【六】叛聞　通鑑に「祿山、陰に異志を蓄ふること、殆んど將に十年ならむとす。上、これを待つこと厚きを以て、上の晏駕を俟つて、然る後に、亂を作さむと欲す。會ま、楊國忠、祿山と相悅ばず、數ば事を以て之を激す、祿山、意を決し、遽に反し、兵を引いて南す」とある。【七】遽西幸　通鑑に「天寶十五年六月、哥舒翰、祿山と靈寶の西原に戰つて敗績す。上、はじめて懼れ、宰相を召して之を謀る。楊國忠、首として蜀に幸するの策を倡ふ。上、これを然りとす。乃ち龍武大將軍陳玄禮に命じて、六軍を整比せしめ、厚く錢帛を賜ひ、閑廐の馬九萬餘匹を選ぶ。黎明、上、ひとり、貴妃の姉妹皇子妃主皇孫、

及び親近宦官宮人と延秋門を出づ。妃主皇孫の外に在るもの、皆、これを委して去る。上、馬嵬驛に至る、將士飢ゑ疲れて、皆憤怨す。會ゝ、吐蕃の使者二十餘人、國忠の馬を遮り、訴ふるに食なきを以てす。國忠、未だ答ふるに及ばず、軍士、追うて之を殺す。上、杖屨、驛門を出でて、軍士を慰勞し、隊を收めしむ。軍士、應ぜず。上、高力士をして之に問はしむ。玄禮、對へて曰く、國忠、叛を謀る。貴妃、宜しく供奉すべからず。願はくは、陛下、恩を割いて法を正せ、と。上、已むを得ず、妃と訣別して去らしめ、路祠の下に縊り、尸を輿して驛庭に寘く。玄禮等、はじめて部伍を整へて、行計を爲す」とある。【八】骨肉案榛莽　榛莽は藪。唐書安祿山傳に「祿山、慶宗の死せしを怨み、乃ち帝の近屬、霍國長公主より、諸王妃妾子孫姻眷等百餘人を取つて、これを害し、以て慶宗を祭る」とある。【九】竄伏　賊の侮りを禦ぐ。【一〇】兩公　張巡・許遠の二人をいふ。【一一】起誓衆　唐書張巡傳に「天寶十五載正月、賊將張通晤、宋曹等の州を陷る。譙郡太守楊萬石、賊に降り、巡に逼つて長史となし、西、賊軍を迎へしむ。巡、吏を率ゐて玄元皇帝の廟に哭し、遂に兵を起して賊を討つ、從ふもの千餘」とある。【一二】玄祖　卽ち玄元皇帝、老子の追號、唐は老子を以て其祖として居た。【一三】遏其衝　賊の攻擊を防遏する。【一四】江淮保安土　張巡傳に「賊、外援の絕ゆるを知り、圍、益す急なり。衆、東奔を議す。巡遠、議して以へらく、睢陽は江淮の保障なり、もし之を棄つれば、賊、勝に乘じ、鼓して南し、江淮必ず亡びむ、且つ飢衆を帥ゐ、行くも必ず達せず」とある。【一五】全壊　完全なる城壁。【一六】百戰　張巡傳に「巡、令狐潮及び尹子琦と大小四百戰、將を斬ること三百、卒十餘萬」とある。【一七】力窮援不來　張巡傳に「御史大夫賀蘭進明、互に代つて節度たり、臨淮に屯す。許叔冀・尙衡、彭城に次す。皆、觀望して、肯て救ふなし。巡、霽雲をして、叔冀に如いて師を請はしむ。應ぜず。布、數千端を遺る。霽雲、嫚罵し、馬上、死を決して闘はむことを請ふ。叔冀、敢て應ぜず。巡、復た遣して、臨淮に如いて、急を告げしむ。精騎三千を引き、圍を冒して出づ。賊萬衆、これを遮る。霽雲、左右に射る、皆披靡す。すでに進明を見る。進明曰く、睢陽の存亡、すでに決す、兵出づるも、何の益かあらむ。霽雲曰く、城、或は未だ下らず、もし已に亡ぶれば、請ふ、死を以て大夫に謝せむ、と。進明、巡の聲威を忌み、功を成さむことを恐れ、師を出すの意なし。又霽雲の壯士なるを愛して、これを留めむと欲し、大樂を爲す。樂作る。霽雲泣いて曰く、昨、睢陽を出づる時、將士粒食せざること、すでに彌月、今、大夫、兵出でず、しかも、廣く聲樂を設く、義、ひとり享くるに忍びず、食すと雖も、咽に下らず。今主將の命、達せず、霽雲、請ふ、一指を留いて以て信を示し、歸つて、中丞に報ぜむ、と。因つて佩刀を拔いて指を斷つ。一座、大に驚き、爲に涕を出す。卒に食はずして去り、矢を抽いて、回つて佛寺の浮屠を射り、甎に著けて曰く、吾、賊を破つて還らば、必ず賀蘭を滅さむ、この矢、志るす所以なり、と。眞源に至る。李賁、馬百匹を遺る、寧陵に次す。城使廉坦の兵三千を得、夜、圍を冒して入る。賊、覺つて之を拒ぐ。且つ戰ひ、且つ引き、兵多く死し、至るところ、わづかに千人。方に大霧。巡、戰聲を聞いて曰く、これ霽雲等の聲なり、と。乃ち門を啓き、賊牛數百を驅つて入る、將士相持して泣く」とある。【一八】嚙齒罵盆怒　張巡傳に「城陷る、遠と倶に執へらる。巡の衆、これを見て起ち、且つ哭す。巡曰く、これを安んぜよ、怖るる勿れ。死せば、乃ち命なり、と。衆仰ぎ視ること能はず。子琦、巡に謂つて曰く、聞く、公、戰を督して大呼すれば、輒ち眥裂け、面に血し、齒を嚙めば皆碎くと、何ぞ是に至る。答へて曰く、吾、氣、逆賊を吞まむと欲す、顧るに力屈するのみ、と。子琦怒り、刀を以て其口を抉す、齒存するもの三四。巡、罵つて曰く、我、君父の爲に死す、爾、賊に附く、乃ち犬彘なり、安んぞ久しきを得むや」とある。【一九】羸兵日飢疲　張巡傳に「巡の士、多く餓死し、存するもの皆痍傷、氣乏し。巡、愛妾を出して曰く、諸君、年を經て、食に乏し、しかも、忠義少しも衰へず、吾、恨むらくは、肌を割いて以て衆に啖はしめざるを。むしろ、一妾を惜んで、坐ながら、士の飢うるを視むやと。乃ち殺して以て大饗す。坐者皆泣く。巡、强ひて之を食はしむ。遠、亦た奴僮を殺して、以て哺し、卒に雀を羅し、鼠を掘り、鎧弩を煮て以て食ふに至る」とある。【二〇】男兒不生降　張巡傳に「刃を以て脅し降らしむ。巡屈せず。又霽雲を降らしむ。未だ應ぜず。巡、呼んで曰く、南八、男兒死せむのみ、不義の爲に屈すべからずと。霽雲笑つて曰く、將に爲すあらむと欲するなり、公は我を知るもの、敢て死せざらむや、と。亦た降るを肯んぜず。乃ち姚誾・雷萬春等三十六人と害に遇ふ」とある。【二一】俗祭　俗間の私祭。【二二】丹靑　彩色したる畫像。【二三】網塵　蛛網と塵埃。【二四】爽氣　精爽の氣。【二五】戎馬　兵馬に同じ。【二六】旁午　韻會に「一縱一橫を旁午といふ、猶ほ交横といふがごときなり」とある。【二七】寥楚　高適の詩に寥楚渺千里とある、冬枯れの野原。

【題義】杭州府志に「許遠は、鹽官の人、廟は海寧縣西に在り、梁の開平二年建つ。後、張巡を增祀

して、雙廟と號す。宋の紹興八年、邑人禮部侍郎張九成、朝に請ひ、南霽雲・雷萬春・姚誾を増祀す。詔して、之を許す」とある。この詩は、作者が呉越に游びし時、雙廟に詣でて作つたのである。

【詩意】むかし、唐の天寶の末年に當り、玄宗皇帝は、奸猾なる胡虜の安祿山を寵し、これを邊帥に任じて、精強なる兵士を委ね、後日の患を遺せしことは、さながら、虎を養ふと同じであつた。果然、祿山叛をなせし由、聞こえると、玄宗は、俄に亂を避けて、西、蜀に幸するの策を決し、多くの骨肉どもの榛莽に棄てられて、胡人の爲に殺害せらるるをも顧る暇だになかつた。河北二十州の地、誰が義士として兵を起し、胡賊の侮を禦いだか。ここに、張巡・許遠の二公は、起つて、衆に誓ひ、玄元皇帝の廟に慟哭し、身を横へて、賊兵の衝擊を防遏し、江淮の間、幸に土を保安することが出來た。しかし、孤城は、散散に破壞されて、完全なる城壁も殘つて居らず、霜夜の月冴えたる淒秋の候に當り、百戰して屈せず、やがて、力窮まつて、援兵來らず、その戰を督するに際しては、齒を嚙み、罵つて益す怒つた。殘兵は、日に日に飢ゑて疲れ、秋風は旗鼓を吹き倒して、さしもの睢陽も、遂に落城して仕舞つたが、張巡は、もとより男兒を以て自ら任じ、生きて賊に降らず、壯烈なる死は、今古に類なき程であつた。ここは許遠の故里だといふので、遺廟なほ存し、俗間の私祭として、巫女どもが屢ば舞を爲し、畫像は、蜘蛛の網や塵埃の中に埋沒して居るが、精爽の氣、凜然として、なほ覩ることが出來る。今しも、喪亂の世、兵馬縱橫に入り亂れたる折から、危急に臨んで、その軀を捐てて顧みざること、張巡・許遠の二公の如きものは、數へ立てても、まだ多くはなく、末世に義人少きは、まことに嘆息すべきことである。ひとり廟前に立てば、傷心の至りに堪へず、看る看る、夕日は、冬がれの平野に落ちて、一しほ淒涼の趣を添へた。

【餘論】ここは、許遠を主として張巡を配祀したのであるが、すでに雙廟とさへ云ふ位だから、もとより、甲乙するところは無い。詩中詠ずるところは、大概、張巡の事であるが、許遠は、もと才の張巡に若かざるを知つて、萬事を之に任かせ、且つ純然たる一體の人であるから、張巡を寫すは、併せて許遠を寫す所以である。この詩は、聲調高亮、敍事亦た簡淨、就中、孤城無全堞以下八句、竝に嗟今屬喪亂の六句は、殊に面白く、一誦、人をして起舞せしむるばかり、先づ完璧に近いと云つても善からう。靑邱は、別に張中丞廟に謁する七古があるが、この詩と相俟つて、雙璧の觀がある。

登海昌城樓望海　海昌城樓に登つて海を望む

百(一)川浩皆東。元(二)氣流不(三)息。　百川、浩として皆東し、元氣、流れて息まず。
混(四)茫自太古。於此見容(五)德。　混茫、太古よりし、ここに於て、容德を見る。
積(六)陰漲玄(七)濤。萬里失空(八)色。　積陰、玄濤を漲らし、萬里、空色を失ふ。

鴻鵠去不窮。魚龍變莫測。　鴻鵠、去つて窮まらず、魚龍、變、測るなし。

朝登茲樓望。動盪（九）豁胸臆。　朝に茲樓に登つて望めば、動盪、胸臆豁たり。

始知滄溟大。外絡九州域（一〇）。　はじめて知る、滄溟の大、外は九州の域を絡ふを。

日出水底宮（一一）。煙生島中國。　日は水底の宮を出で、煙は島中の國に生ず。

寛疑浸（一二）天爛。怒欲吹（一三）地昃。　寛は、天を浸して爛たるを疑ひ、怒つては、地を吹いて昃せむと欲す。

常時烈風興。海若（一四）不受職。　常時、烈風興れば、海若、職を受けず。

長隄此宵潰。頻勞負（一五）薪塞。　長隄、この宵に潰え、頻りに薪を負うて塞ぐことを勞す。

況今艱危際。民苦在墊溺（一六）。　況んや。今、艱危の際、民の苦は、墊溺に在り。

有地不可居。澒洞（一七）風塵黑。　地あるも、居るべからず、澒洞、風塵黑し。

安得撃（一八）水游。圖南（一九）附鵬翼。　安んぞ水を撃つて遊び、圖南、鵬翼に附するを得む。

【字解】【一】百川浩皆東　尙書大傳に「百川、東、海に赴く」とある、浩は廣き貌。【二】元氣　宇宙の動力。【三】流不息　梁の簡文帝の大壑賦に滔滔不息とある。【四】混茫　海の際涯なく廣きをいふ。【五】容德　易林に「海は水の宗なり、百流德を歸す」とあり、陸贄の論諫に「海の水を歸する、洪涓必ず容る」とある。海の衆流を受納して決して之を拒まざる德。【六】積陰　淮南子に「積陰の氣、水となる」とある。【七】玄濤　黑い波、郭璞の詩に黑水鼓玄濤」とある。【八】空色　天空の碧色。【九】動盪　海が自然に搖動する。【一〇】九州域　史記孟荀列傳に鄒衍の言を記して「中國を赤縣神州となす。中國の外、赤縣神州の如きもの九、これを九州といふ」とある。普通の九州は、禹貢に據つて、支那本土を指すが、ここの九州は、世界全體を總稱したのである。【一一】水底宮　海底の龍宮。【一二】浸天爛　天を浸して爛然と輝く。【一三】吹地昃　地を吹いて暗くならしめる。【一四】海若不受職　六帖に「海若は海神、天吳と名づく」とある。海若が自己の職務を受けて働くことが出來ない。【一五】負薪塞　史記河渠書に「天子、乃ち汲仁郭昌をして、卒數萬人を發して瓠子の決を塞がしめ、羣臣從官、將軍より已下をして、皆薪を負うて河を決せしむ」とある。【一六】墊溺　墊は書經に「下民昏墊」とあつて、矢張、溺れること。【一七】澒洞　杜甫の詩に澒洞不可掇とあつて、集韻に「澒洞は相連る貌」とある。【一八】撃水游　莊子に「鵬の南冥に徙るや、水撃つこと三千里」とある。【一九】圖南　同じく莊子に「背に靑天を負うて、これを夭閼するものなし、而して後、乃ち今將に南を圖らむとす」とある。

【題義】この詩は、作者が海昌縣の城門の樓に登り、東海を曠望して作つたのである。

【詩意】百川は、浩浩として、皆東に赴き、宇宙の元氣は、流動して止む時はない。海は、太古の時から、混茫として際涯なく、物を容れる德は、明かに認められる。海水は、元と積陰の凝結するところで、黑い浪を漲らし、天空萬里の碧も、忽ち其色を失つて仕舞ふ。鴻鵠は、一擧千里の翼を以て之を橫絕し、どこが終ひといふこともなく、頻りに飛び行き、魚龍の變化は、豫め測ることが出來ない。朝に此樓に登つて眺めると、海水の動盪するにつれ、豁然として胸臆開け、滄溟の大なる、世界の九州を外から包絡して居ることが分かつた。日は、水底の龍宮より出で、煙は、島中の國に生じ、海の廣きは、天を浸して爛爛たるかと疑はれ、その怒るときは、地を吹いて日暮とならしめる。平常の時

でも、烈風一たび起れば、海若も其職を受けて働くことが出來なくなり、百里の長隄も、一夜の中に崩れ、そして、人民どもを驅り出し、薪を負うて、その切れ口を塞がしめねばならぬことになる。それは、まだしも、剋下騷亂の世、艱危愈よ甚しきに際し、人民は、水に溺れる樣な苦痛をなし、地あれども居ることが出來す、見わたす限り、風塵黑く立ちこめて居る。されば、水を擊つこと三千里、かの鵬翼に附して、遠く南冥に向つて立ち去りたいと願ふばかりである。

【餘論】 始知滄溟大の六句は、海洋の鉅觀を敍して、雄渾を極めて居るが、その前後は、どうやら、相及ばざるの感がある。

春日懷十友詩

余司馬堯臣

列（一）戟衞嚴關。應無休（二）沐暇。
羣（三）英罷追游。餘香掩空（四）樹。
飛花北（五）郭晚。華（六）月南（七）園夜。
清景不（八）能同。蹉（九）跎恐年謝。

春日十友を懷ふの詩

余司馬堯臣

列戟、嚴關を衞り、應に休沐の暇なかるべし。
羣英、追游を罷め、餘香、空樹を掩ふ。
飛花北郭の晚、華月南園の夜。
清景、同じうする能はす、蹉跎、年の謝せむことを恐る。

【字解】【一】列戟衞嚴關 堯臣は、職、司馬に居るから、戟を列れて、軍門を守衞して居たのであらう。【二】休沐 初學記に「漢律、吏、五日に一たび休休するを得、言ふは、休息以て洗沐するなり」とあり、王維の詩に氷明少休沐とある。【三】羣英 諸才子を指す。【四】空樹 人なき臺榭。【五】北郭 蘇州府城の北隅。【六】華月 明月に同じ。【七】南園 姑蘇志に「南園は、子城の西南に在り、安寧廳・思玄堂・淸風・綠波・迎仙等の三閣、淸速・湧泉・淸暑・碧雲・流杯・沿波・惹雲・白雲等の八亭あり、又樹亭二あり、樹に就いて楹柱と爲し、及び迎春・百花等の三亭。西池は、閶闔の西に在り、龜首・旋螺の二亭あり」と見え、續記に「廣陵王、吳に帥たり、南園を治め、島嶼峰巒を爲り、巧思に出づ。錢氏、國を去る、この園、毀たず、その間の臺榭、歲久しくして摧圮す。今存するところの亭、わづかに流杯・四照・百花・豐樂・惹雲あり、每春、士女を縱つて游覽せしむ」とある。【八】不能同 同け共に賞する。【九】蹉跎 事、志と違ふこと。

【題義】 錢謙益の列朝詩集に「余堯臣、字は唐卿、永嘉の人、早く文學を以て著はる。會稽に客居す。越の鎭帥院判邁善卿・參政呂珍羅、幕下に致し、與に越を保つの功あり。剡に薦めて、交も上る。仕進に意なし。越の桂桐里に於て、圃を治め、茅を結び、署して菜薖といふ。すでにして、吳に入つて、北郭に居り、高啓張羽諸人と北郭十友たり。卽ち謂はゆる十才子なり。啓の唐肅を送る序に、余、世〻吳の北郭に居る、同里の交善きものは、惟だ王止仲一人のみ。十餘年來、徐幼文は毘陵よりし、高士敏は河南よりし、唐處敬は會稽よりし、余唐卿は永嘉よりし、張來儀は潯陽よりし、各〻故を以て來つて吳に居り、皆余と鄰る。ここに於て、北郭の文物、遂に盛なりと。羽の續懷友詩の序に曰く、余、吳城の圍中に在つて、余唐卿諸君と游ぶ、皆落魄して事に任せず、故に詩酒に留連するを得たり。吳亡ぶるの後、楊基・徐賁と同じく徵さる。濠に謫せられ、洪武二年、放ち還らしめ、新鄭丞を授け

らると。これ高啓の答詩に見ゆるものなり。曰く司馬、曰く左司、必ず東越鎭將版授の職銜、今考ふべからず」とある。抑も北郭の十才子といふのは、靑邱の外、王行・徐賁・張羽・宋克・余堯臣・呂敏・陳則・唐肅・高遜志であつて、ここの十友は、その中の二人、唐肅・高遜志を缺き、その代りに楊基・王彝・釋道衍の三人を加へてある。すると、楊基等は、十才子以後に仲間に入つたものと見える。靑邱・楊基に、前の張羽・徐賁を加へて、高・楊・張・徐といひ、これを初唐の四傑に比し、張・習は「惟だ文の似たるのみならず、その終るところ、亦た遠からず。盧駱と盈川とは、終を同じうせしこと、一の如し。太史の斃は賓王に同じく、北郭は海に溺れずと雖も、わづかに首領を全うせしのみ、首邱に非ず、司丞は龍江に投ず、又照鄰と異なるなし」といつて居る。この詩は、十友の首として余堯臣に寄せたのである。

【詩意】君は司馬の職に居り、列戟いかめしく、軍門を守衞して居るから、五日に一回の休沐の暇だに無からうと思はれる。頃ろは、諸才子ども、相追うて會することなく、風流雲散、當日の臺榭は、人なくして、餘香を掩うて居る。春の末、落花飛びかふ北郭の晩、秋半にして明月澄み上る南園の夜、折角の淸景も、共に吟賞することが出來ず、事、志と違うて、歲月の移り行くを恐れるのみである。

【餘論】體をいへば八句の五古であつて、その中、飛花の十字は、對偶巧警、大に精彩を增したものである。

張校理羽

(一)端居養(二)恬素、獨詠(三)聖人篇。
(四)夕景臨池酌、春寒掩閣眠。
(五)芳藥初翻雨、(六)新篠稍披煙。
(七)累日虧幽訪、慙余(八)塵務牽。

張校理羽

端居して、恬素を養ひ、獨り聖人の篇を詠ず。
夕景、池に臨んで酌み、春寒、閣を掩うて眠る。
芳藥、はじめて雨に翻り、新篠稍く煙を披く。
累日、幽訪を虧く、慙づ余が塵務に牽かるるを。

【字解】【一】端居　端然身を修めて閑居する、孟浩然の詩に「端居愧聖明」とある。【二】恬素　恬淡朴素。【三】聖人篇　張羽の作つた詩題であらうか、その全集を見れば存否の程は分からぬ。【四】夕景　夕日。【五】芳藥　芍藥。【六】新篠　若竹。【七】累日　連日。【八】塵務　世事。

【題義】列朝詩集に「張羽、字は來儀、潯陽の人、すでに壯、その父の官游に從ひ、江を泝り、淛を踰え、易を山陰の夏仲善に受く。文を爲るに、歐陽子を學び、縝密婉轉、前人と雖も、自ら及ばずと謂ふなり。兵に阻まれて歸るを得ず、因つて、武林に僑す。吳に來つて、吳興の山水を喜び、徐賁と約して、居を戴山の東にトす。元末、安定書院の山長を授けらる。國初、賢良に擧げられしが、出です。徵起して、廷對、旨に稱ひ、太常司丞に擢んでられ、翰林院同掌文淵閣事を兼ぬ。十六年、上、親ら滁陽王の事實を褻し、來儀に命じて廟碑を撰せしむ。當時大制作を以て推任せらるること、かくの如し。事を以て、嶺表に竄せられ、未だ半道ならず、召し還されて、京に抵る。信宿、免れざるを

知り、自ら龍江に投じて以て死す。歸つて、九里岡に葬る。靜居集あり」とある。校理は、韓愈の送鄭十校理序に「祕書は御府なり。天子、猶ほ以て外且つ遠、朝夕視るを得ずとなし、はじめて、更めて書を集賢殿に聚め、別に校讎官を置く。曰く學士、曰く校理、校理は天下の文學を能くするに名あるものを用ふ。苟くも選に在らば、その秩次を計らず、惟だ之を用ふるところ」とあつて、今でいへば、圖書寮の役員といつた樣なものであらう。張羽の仕官したのは、よく分からぬが、いづれ元末であつたらう。

【詩意】端然獨居して、恬淡朴素の修養を爲し、ひとり、聖人の篇を高詠して居る。張君の人物は、これを以て、その一斑を知ることが出來る。夕日の舂く頃、池に臨みて酒を酌み、春の餘寒の時節には、閣を鎖して、獨り眠つて居る。その閒適の境涯は、ざつと此通り。今しも、芍藥の花は、初めて雨に散り、若竹の梢は、漸く煙を披いて、初夏沖澹の景物、最も人に可なるの折柄、連日、君を訪ふことが出來ないのは、予が世事に牽かれて居るからで、まことに、心に愧づかしいと思ふ。

【餘論】この詩は、純然たる五律で、一句として合拍ならざるはなく、これを五古の中に入れて置くのは、稍や不當であるが、連作だから致方もないのであらう。夕景、春寒の一聯は、明瑩にして殊に愛誦すべきを覺える。

楊署令基

詞苑擅(一)高步。早歲許追隨。
詞苑、高步を擅にし、早歲、追隨を許す。

屢枉瑤華句(二)。長依瓊樹姿(三)。
屢ば瑤華の句を枉げ、長く瓊樹の姿に依る。

齋居(四)積沖抱(五)。園賞過芳時。
齋居、沖抱を積み、園賞、芳時を過ぐ。

暫闕今朝(六)會。勞人耿耿思(七)。
暫く今朝の會を闕き、人の耿耿の思を勞す。

【字解】【一】擅高步　大威張りに歩く。【二】瑤華句　瑤華は美しき花、それにも比すべき新麗なる名句。【三】瓊樹姿　瓊樹は玉樹、杜甫の飲中八仙歌に「皎如玉樹臨風前」とある。【四】齋居　物いみなする樣に謹愼して閉居する。【五】沖抱　沖澹なる懷抱。【六】今朝　今日に同じ。【七】耿耿思　忘るべからざる思。

【題義】列朝詩集に「楊基、字は孟載、先世、蜀の嘉州の人。大父、江左に任じ、吳中に生まれ、天平山南赤城の下に家す。幼にして、穎敏人に絶つ。九歲、六經を背誦し、書十餘萬言を著し、名づけて論鑑といふ。儀曹に試みられしが利あらず。會ま天下亂るるや、歸つて赤山に隱る。淮張、丞相府記室に辟す、未だ幾ならずして謝して去る。又饒介の所に客たり。王師、姑蘇を下すや、饒氏の客を以て臨濠に安置し、旋つて、河南に移り、洪武二年、放ち歸らしむ。尋いで、起つて、滎陽に知たり。鍾離の間に謫居し、秣陵に居る。これに久しうして、薦を用つて、江西行省幕官となりしが、

省臣の罪を得たるに坐して落職す。四年、句曲山中に居る。六年、又起つて、使を湖南廣右に奉じ、召し還されて、兵部員外郎を授けられ、出でて山西按察使となる。後、讒を被つて職を奪はれ、供役して、工所に卒す。孟載、少にして詩名を負ひ、高啓・張羽・徐賁と詩友と爲り、人、吳中の四傑と稱す。著すところの詩、眉菴集と名づく」とある。署令は、多分、丞相府記室の事であらう。

【詩意】君は、詞苑に於て、擅に高歩する樣な大才子であるが、早歲、交を結びて追隨することを許された。そこで、數ば瑤花に似たる名句を寄せられ、又玉樹の姿なせる君に依ることを以て榮として居た。君は、平生、物いみをする樣に謹愼して、冲澹なる懷抱を積み、又風流自適、名園に游賞して、春の時節を過ごすを例として居た。今日、君と逢ふに由なく、仍つて、耿耿たる相思の情を勞する次第である。

【餘論】この詩も、矢張、五律の聲調を存すること多く、五古として、純なるものではない。

王隱君行

(一)共此一里居。誰令阻(二)良覿。
惆悵歩芳園。山櫻還獨摘。

王隱君行

この一里の居を共にし、誰か良覿を阻ましむ。
惆悵、芳園に歩し、山櫻、還た獨り摘む。

風含駐花意。雨散流池跡。
尊酒不來(三)同。(四)茲晨(五)端可惜。

風は花を駐むるの意を含み、雨は池に流るるの跡を散す。
尊酒、來同せず、この晨、端に惜むべし。

【字解】【一】共此一里居　同じ里中に居る。【二】阻良覿　面會を妨げる。【三】來同　ここに來て共にする。【四】茲晨　今日に同じ。【五】端　まさにと訓ずべし。

【題義】列朝詩集に「王行、字は止仲、長洲の人、髫時、その父に從ひ、閶門南市の人の爲に藥を市り、應對流るるが如し。晩に迨びて、主嫗の爲に稗官詞話を演說し、背誦數十本に至る。主人の翁、これを異とし、魯論を授く。翌日、すでに誦を成す。乃ち庋ふるところの書を遍ねく閱せしむ。年、未だ弱冠ならざるに、辭して去り、徒に城北望齊門に授く。議論踔厲、古今を貫穿す。家ただ壁立、几に留冊なし。學ぶところを詢へば、曰く、これを藥肆の翁に得たるのみ、と。張氏、吳に據るや、隱居して敎授す。洪武の初、郡庠、延いて經師となす。弟子、五經を以て問難を雜進す、肆應して窮せず、皆舌を吐いて歎服す。晩年、生徒に謝し、石湖の濱に居る。郡守魏觀、徒行して之を訪ふ、出づるを肯んせず」とある。

【詩意】同じ里中に居りながら、いかなれば、面會する折が無いのであるか。惆悵として、春の花園を歩くと、今しも、山櫻の眞盛りであつたから、ひとりで之を摘んだ。風も流石に花を駐めむとする心を含める如く、雨は、池に流れ込んだ行潦の跡を殘して居る。君が此に來て、吾と樽酒を同じうせ

ぬ處から、折角の此日を殘念に思ひながら打過ごした。

【餘論】用筆、頗る輕妙であるが、どうも貫目に乏しく、堂堂の風趣は、ここに認められない。それ獨り此首のみでなく、連作十首、大抵かくの如く、そして、佳作の極めて寥寥たるは、端に惜むべしである。

呂道士敏

呂道士敏

同謂在塵境。獨能依道門(一)。　同じく塵境に在りと謂ひ、獨り能く道門に依る。

(二)園齋坐永日。庭綠(三)靄初繁。　園齋、永日に坐し、庭綠、靄として初めて繁し。

(四)觀妙夙有契。悟(五)靜自無煩。　妙を觀て、夙に契あり、靜を悟つて自ら煩なし。

(六)晨策思頻往。聆(七)君超(八)世言。　晨策、頻りに往くを思ふ、君が超世の言を聆く。

【字解】【一】道門　道家の門。【二】園齋　園中の小齋。【三】靄　靄然、煙る貌。【四】觀妙　大道の至妙を觀る、韋應物の詩に「依僧欲觀妙」とある。【五】悟靜　世外の靜寂なる味を悟る。【六】晨策　朝早く杖を引いて出かける、謝靈運の詩に「晨策尋絕壁」とある。【七】聆　聞く。【八】超世言　濁世を超越したる清言。

【題義】列朝詩集に「呂敏、字は志學、無錫の人。元、胡服を偁び、惟だ道士のみ深衣幅巾を許す。志學、乃ち服を易へて道士となる。洪武の初、無錫の敎諭となり、十三年、人才に擧げらる。王止仲、文あり、行を贈る」とある。

【詩意】同じく風塵の境に居るといひながら、君は獨り道家の門に依つて、その敎義を研究された。園中の小齋に居て、日長き折から、庭樹の新綠は、靄然として煙れるが如く、次第に繁くなつて來た。君は、大道の至妙を觀じて、夙に冥契するところがあるし、寂靜の味を悟つて、心中、自然に煩悶もなく、まことに其道に滲透したものである。われは、朝早く杖を引いて出かけ、頻繁に君の處に往き、濁世を超越したる清言を拜聽して、おのが修養の資としたいと思つて居る。

【餘論】園齋の二句は、冲澹の境、恰も其人と相得たるに因つて、次の觀妙、悟靜の二句が、自然に引き出される。そして起結照應して、極めて、約やかに出來て居る。

宋軍咨克

宋軍咨克

看花西澗寺。憶子昔同行。　花を看る、西澗の寺、憶ふ、子がむかし同行せしを。

(一)蘭入華觴氣。波(二)泛綠琴聲。　蘭は華觴の氣に入り、波は綠琴の聲を泛ぶ。

茲歡隨節逝。離恨坐相嬰。　この歡、節に隨つて逝き、離恨坐に相嬰る。

安得重聯(三)騎。射(四)雉出(五)東城。　安んぞ、重ねて騎を聯ね、雉を射て東城を出づるを得む。

【字解】【一】蘭入華觴氣　華觴は立派な杯、その杯の氣といへば卽ち酒氣、蘭の香が酒氣に交る。【二】波泛綠琴聲　波の上を琴の聲が亙つて行く。綠琴は綠綺琴の略であらう。李白の詩に風吹綠琴去とある。【三】聯騎　馬を竝べて一緒に出かける。【四】射雉　魏志武帝紀の注に「太祖、才力人に絕つ、かつて、南皮に于て、一日雉を射て、三十六頭を獲たり」とあり、庾信の春賦に協射都尉、射雉中郞とある。【五】出東城　東方の城門を出る。

【題義】列朝詩集に「宋克、字は仲溫、吳人。軀幹に偉、博く書傳に涉る。少にして、任俠、劍を擊ち、馬を走らし、飛鳥を彈下す。天下の亂るるを見、握奇の陣法を學び、將に、北、中原に走り、豪傑に從つて、事を計らむとす、道梗つて周流し、合ふところなし。張氏、吳に據り、これを致さむと欲せしが、得る能はず。門を闔ぢて却掃す。草隷に工に、時に詩を賦して志を見はす。國初、徵して侍書となし、出でて鳳翔府同知となし、南宮里に家す。高啓、南宮生傳を作る」とある。軍咨とは、說文に「事を謀るを咨といふ」とあるから、參謀とでも云ふ樣なものであらう。すると、張士誠から參謀を以て徵し出されたことがあつたものと思はれる。

【詩意】むかし、君と同行して、花を西澗の寺に賞したことがあつたが、蘭の香は酒氣に交り、綠琴の聲は波の上を亙り、一日の勝游、興味は極めて深かつた。しかも、この喜は、歲月に隨つて去り、その跡、すでに尋ぬべからず、今は別離の恨が相嬰つて離れない。願はくは、再び騎を聯ね、城の東門より出で、春の野に雉を射て、愉快に遊び暮したいと思ふが、如何であらう。

【餘論】この首は、純ら前日の看花を追憶し、併せて、城東の射雉を約したので、情思宛轉であるが、その措辭は、極めて粗笨である。

徐記室賁

晨興理櫛罷。禽聲悅清旭。
雨餘嘉樹新。色映春塘綠。
閱景感幽悰。步陰思往躅。
攜手此逍遙。須君慰心曲。

徐記室賁

晨興、櫛を理めて罷めば、禽聲、清旭を悅ぶ。
雨餘、嘉樹新に、色は映ず春塘の綠なるに。
景を閱して幽悰を感じ、陰を步して往躅を思ふ。
手を攜へて、此に逍遙、君を須つて心曲を慰めむ。

【字解】【一】晨興　朝早く起きる、陶淵明の詩に晨興理荒穢とある。【二】理櫛　頭を梳る。【三】清旭　晴れやかな朝日。【四】嘉樹　勢の善き木、左傳に「季氏、嘉樹あり、宣子、これを譽む」とある。【五】春塘綠　春の堤の草の綠なること。【六】幽悰　悰は樂、浮世を離れた怡樂の念。【七】步陰　前の嘉樹のかげであらう。【八】往躅　むかしの跡。【九】須君　君を用ひてといふ意。【一〇】心曲　心の奧。

【題義】列朝詩集に「徐賁、字は幼文、その先は蜀人、毘陵より徙つて吳に居り、城北望齊門外に家し、時に十才子と稱す、幼文は其一なり。詩に工に、善く山水を畫く。淮張、閫を開く、辟して屬となす。張羽と俱に避け、去つて吳興に之き、張は菁山に居り、徐は蜀山に居り、蜀山精舍を建つ。洪武七年、薦を用ひて、家より起し、晉冀を廉訪せしむ。その槖を簡すれば、惟だ紀行の詩數首のみ。

給事中を授けられ、廣西參政河南左布政使に陞る。大將軍の兵、洮岷に出づ、中原に往返し、所司の犒勞を缺くを訴ふ。上、賁が迂疎の儒者たるを以て、獄に下して死す。詩、北郭集と名づく」とある。記室は、續事始に「漢百官の制、諸王三公、及び大將軍幕府、皆記室あり、章表書記文檄を掌る」とあり、魏志王粲傳に「太祖、竝に陳琳・阮瑀を以て司空軍謀祭酒となし、記室を掌らしむ」とある。これは、張士誠が辟し出した時の官名であらう。

【詩意】朝早く起き出で、櫛で頭髮を梳り畢ると、鳥の聲、花やかに、晴れやかな朝日を喜ぶ樣に聞こえた。雨あがりの木木は、葉さへ新らしく見え、その色は、春塘の芳草に映じて居る。この景を見ては、心中に、浮世を離れた一種の怡樂を感じ、それから、木かげを歩くと、前日の游跡を回想する。願はくは、手を攜へて此に逍遙し、君に依つて、わが心を慰めたいものである。

【餘論】前半は敍景、後半は抒情、情景融合、且つ今昔を俯仰する處に於て、一段の活趣がある。

陳孝廉則

（一）徂春易為感。復此棲（二）孤寂。
鶯啼遠林雨。悵望鄉園隔。

陳孝廉則

徂春、感を爲し易く、復た此に孤寂に棲む。
鶯は啼く遠林の雨、悵望すれば鄉園隔つ。

客舍換（三）衣晨。僧齋聽鐘夕。
知君思正紛。雜（四）英共如積。

客舍、衣を換ふるの晨、僧齋、鐘を聞くの夕。
知る、君が思、正に紛たるを、雜英共に積むが如し。

【字解】【一】徂春　ゆく春、晩春。【二】棲孤寂　孤寂の中に棲む、つれもなく獨り寂然として居る。【三】換衣晨　衣がへの朝、冬の衣を脫いで薄い衣に著かへる。【四】雜英　雜花、さまざまの花。

【題義】列朝詩集に「陳則、字は文度、崑山の人。洪武六年、秀才を以て擧げられ、應天府治中に任す。俄にして、侍郎戶部に進み、以て戶口を閱實す。大同府同知に調せられ、復た還つて守となる。則、文辭清麗、元季、屋を僦うて徒に授く。詩に工なるを以て、吳下に名あり、高啓北郭十友の一なり」とある。孝廉は、その行狀を以て鄉に擧げられた科目の名である。

【詩意】行く春の物さびしき景色に對しては、感慨をなし易く、その上、君は此に孤寂の中に住んで居る。鶯の啼く處は、遠林一帶、雨を帶び、そして、故鄉の方は遠く隔り、悵然として、望めども及ばない。朝に客舍に於て衣がへをなし、夕に僧齋に在りて鐘を聽く、朝夕、ともに君の愁思は、紛紛として多く、定めて地に散り布く雜花と共に積ることであらう。

【餘論】この首は、陳孝廉その人の境遇を想像して、慰藉の意を寄せたのである。

僧道衍

(一)楞伽曾往問。(二)緣澗冒嵐深。
殘雪寒山暮。幽扉閉竹林。
欲寄(三)棲禪跡。尙違(四)捐俗心。
別後空遙念。迢迢(五)雙樹陰。

僧道衍

楞伽、かつて往いて問ふ、澗に緣つて嵐の深きを冒す。殘雪寒山の暮、幽扉、竹林に閉す。棲禪の跡を寄せむと欲するも、尙ほ捐俗の心に違ふ。別後、空しく遙に念ふ、迢迢たる雙樹の陰。

【字解】【一】楞伽　山名、姑蘇志に「一名、上方山」とある。【二】緣澗　澗谷に傍うて溯る。【三】棲禪跡　坐禪をして靜居する身跡。【四】捐俗心　世俗を捐棄する心、出世間的願望。【五】雙樹陰　陰鏗の巴陵空寺の詩に綢交雙樹葉、輪斷七燈輝とある、卽ち娑羅雙樹。

【題義】列朝詩集に「少師、釋名道衍、字は斯道、族姓は姚氏、長洲の人。本と醫家の子、顧るに少にして醫を學ぶを肯んせず、喜んで、儒者の學を爲す。至正の間、髮を削つて相城の妙智菴に居る。里中の靈應觀の道士席應眞といふもの、兵家の言に通じ、尤も機事に深し。公、これに師事して、盡く其學を得たり。然れども、深く自ら退藏し、人、知るものなし。かつて、嵩山寺に寓す。袁珙、その相を見、これを異として曰く、公は常僧に非ず、劉秉忠の儔なり、と。洪武の初、高僧を以て召さる。十五年、十王、國に之く、太祖、命じて、各一高僧を選ばしむ。公、燕府の籍中に在つて、慶壽寺に住持たり。靖亂兵起る。妙に機先を識り、祕密を贊助す。太宗卽位、これを官せむと欲せしが固辭し、僧錄左善世となる。東宮を立つるや、特に資善大夫太子少師を授けられ、姚姓に復し、名を廣孝と賜ふ。命じて、髮を蓄へしむること再三、終に肯んせず。兩宮人を賜ふ、近づけず、亦た辭せず、月を踰えて、乃ち召し還す。かつて賑濟を以て吳に歸り、閭里を徒歩し、賜金を以て之を宗黨に散ず。永樂六年、來つて北京に朝し、仍ほ慶壽寺に居る。病篤し、諸門人を召し、告ぐるに去期を以てし、袂を斂め、端坐して逝く、夏八十有四。榮國公に追封し、恭靖公と諡す。吳に居るとき、高啓北郭十友の一たり、その詩文を逃虛子集といふ」とある。道衍は、成祖の帷幄に參して、靖難の功を建てた傑僧であるが、靑邱在世の當時は、單に文事ある高僧として知られ、仍つて、共に唱和などをしたのである。

【詩意】君が曩に楞伽山に居た時、一たび行いて訪問したことがあるが、一路高低、澗に沿うて上り、そして、嵐氣深き間をたどつて往つた。眺めやれば、寒山殘雪を戴いた儘、將に暮れむとし、竹林の中、幽扉が閉ぢてあるのが、卽ち君の菴であつた。その山中の景色の幽邃なるを愛でて、自分も、此に棲んで坐禪を試みたいと思つたが、何分、塵事牽纏せる爲め、出世間的願望に違うて、つい其儘に成つて仕舞つた。今しも、別後、遙に相思へども、雙樹の茂れる方は、迢迢として遠く隔り、容易に相見ることの出來ないのは、如何にも殘念である。

【餘論】この首に於ては、殘雪寒山暮の十字が、一きわ、目立つて面白い。これを流水の對と見れば四十字は、純然たる五律で、聲調合拍、且つ連作中に於て、まさしく佳作と稱すべきものである。

王徵士彝

(一)遠客歎(二)留滯。對雨臥空房。
江上歸舟阻。(三)蘼蕪春自芳。
(四)微痾偶見侵。(五)勝賞坐成妨。
(六)斯章亦何取。持擬(七)釋離腸。

王徵士彝

遠客、留滯を歎ず、雨に對して空房に臥す。
江上、歸舟阻り、蘼蕪、春、自ら芳し。
微痾、偶ま侵さる、勝賞、坐に妨を成す。
斯章、亦た何をか取らむ、持して、離腸を釋かむと擬す。

【字解】【一】遠客　故鄕の遠き人。【二】留滯　異鄕に久しく止まつて居る。【三】蘼蕪　草の茂み。【四】微痾　輕い病氣。【五】勝賞　すぐれた愉快なる遊。【六】斯章　この詩。【七】釋離腸　離人の愁腸を消釋する。

【題義】列朝詩集に「王彝、字は常宗、その先は蜀人。父、崑山敎授に官し、遂に嘉定に遷り、自ら嬀蜼子と號す。布衣を以て召されて元史を修し、金幣を賜うて遣歸す。又薦めて翰林に入りしが、母の老いたるを以て、乞うて歸る。洪武七年、太守魏觀の事に坐して法に伏す。常宗、少にして孤貧、書を天台山中に讀み、王貞文に師事し、蘭谿金文安の傳を得たり、その學、遠く端緒あり、三近齋稿あり」と見ゆ。徵士は、蓋し元の時代に徵し出されたことがあるから云ふのであらう。

【詩意】君は故鄕を遠く離れた孤客として、この吳中に留滯すること、すでに久しく、折から、そぼふる雨に對して、空房の中に偃臥して居る。江上には、歸舟の乘ずべきものなく、一帶の蘼蕪は、草色靑靑として、春は自ら香ばしい。君が輕い病に侵されたのは、平生勝賞を縱にし、攝生に注意しなかつた其一事が妨げを爲したのであらう。わが此詩の如きは、もとより取るに足らぬものであるが、君に示して、離人の愁腸を消釋したいと思ふのである。

【餘論】王彝は、靑邱の親友で、これに贈つた嬀蜼子歌といふ長短句の可なり長い一篇は、後卷に見えて居る。この首は、王彝その人、遠地の孤客として、留滯すでに久しく、且つ頃ろ小病に罹つたのを慰藉したのである。但し、全篇淺露に失し、結末の如きは、口頭の挨拶に類し、その振はざることも、亦た甚しい。

秋懷十首

(一)少時(二)志氣壯。不識秋氣悲。
(三)呼儔射鳴雁。(四)深騖東山(五)陂。

秋懷十首

少時にして志氣壯、秋氣の悲しきを識らず。
儔を呼んで鳴雁を射、深く騖す東山の陂。

(六)中年漸多懷。(七)惻惻當此時。　中年、漸く懷多く、惻惻として此時に當る。

登高望(八)原陸。不見車馬馳。　高きに登つて、原陸を望むも、車馬の馳するを見ず。

思我(九)平生歡。高墳鬱纍纍。　わが平生の歡を思へば、高墳鬱として纍纍たり。

世人非(一〇)羨門。誰能久(一一)華滋。　世人は羨門に非ず、誰か能く久しく華滋。

惟有(一二)盈觴酒。可以(一三)持自怡。　惟だ盈觴の酒あり、以て持して自ら怡ぶべし。

【字解】【一】少時　大抵二十以前をいふ。【二】志氣　志操氣概。【三】呼儔　仲間を呼び集める。【四】深驚　驚はかける。【五】東山陂　陂は隄防。【六】中年　三十前後をいふ。【七】惻惻　心に痛ましく思ふ。【八】原陸　平原。【九】平生歡　平生ともに歡をなせし熟友。【一〇】羨門　仙人の名、史記封禪書に「羨門子高は、燕人、爲に仙道を方ふ」とある。【一一】華滋　花やかに艶艶しきこと。【一二】盈觴　杯に滿つる。【一三】持自怡　これを持つて自ら喜ぶ。

【題義】秋懷とは秋の思ひ、秋に成つて景物の淒寥たるに感じた淋しい思ひを敍述したのである。韓退之にも同題の五古があつて、或は、それに擬したのかも知れぬ。

【詩意】二十以前、年の若い時には、志氣も壯であつて、外界の風物に感ずることなく、秋の氣の身に沁むをも識別せず、同好の友を呼びあつめ、北地から新に飛んで來た雁を射る爲に、東山の麓なる隄の間に深くかけ入つて、終日狩り暮らした。それから、三十前後の中年になると、世故にも慣れ、わが身の境遇につまされて、次第に心中に感ずることが多くなり、惻惻として心に痛ましく思ふのは、秋といふ此時が第一であつた。そこで、高い處に登つて、一帶の平原を望むと、樂しげに車馬を馳せて遊びまはる人もない。從來、ともに歡をなした親友などは、追追に死んで仕舞ひ、墳墓は、こんもりとして高く、纍纍として重なり合つて居る。一般の世人は、羨門の樣な仙人でないから、どうして、永久に亙つて、容貌花やかに、みづみづしくして居られやう。いづれ、年を取つて、死ぬるものと決つて居る。して見ると、この浮世は、まことに果敢なく、詰まらないもので、唯だ杯中の酒があるから、これを以て自ら怡び、醉中には有爲轉變を忘れることが出來る。

【餘論】起首、少時より中年と次第に回憶を爲し、頃ろ秋を悲むことの切なるに及び、更に進んで、平生の所歡、皆墳墓に歸せしをいひ、悲惋の極は、やがて酒に歸著したので、その構想は、陳套であるが、猶ほ且つ人を棖觸する。

明月出遠林。(一)流輝(二)鑒牀幃。　明月、遠林を出で、流輝、牀幃を鑒す。

(三)促促草下蟲。(四)催我(五)索故衣。　促促たり草下の蟲、我を催して故衣を索めしむ。

起嘆秋夜長。欲取鳴琴揮。　起つて秋夜の長きを嘆じ、鳴琴を取つて揮はむと欲す。

(六)掩抑(七)不成弄。中心復(八)乖違。　掩抑、弄を成さず、中心、復た乖違。

有懷難（九）自宣。勿謂知音（一〇）稀。　懷あるも、自ら宣べ難し、謂ふ勿れ、知音稀なりと。

【字解】【一】流輝　流るる光。【二】照牀幃　臥牀の幃に映る、阮籍の詩に薄帷鑒二明月一とある。【三】促促　聲の絕えざるをいふ。【四】催我　催は促す。【五】索故衣　衣は厚い綿入。【六】掩抑　絃が塞つて其音の發越せざること、白居易の琵琶行に絃絃掩抑聲聲思とある。【七】不成弄　弄は曲と同じ。【八】乖違　そむき違ふ、思ふ樣に成らぬ。【九】難自宣　宣はのべる。【一〇】知音　敍は前に見ゆ。

【詩意】明月が遠い林の上に出ると、流るる光は、臥牀の幃に映つて、いとも寒げに見える。促促として絕えずすだく草下の蟲は、さながら我を催促して、寒氣を防ぐ爲に、古りたる綿入を探せといふ樣である。寐られぬままに、起つて秋の夜の長きを嘆き詫びつつ、琴を取つて彈じて見やうとした處が、絃絃掩抑、絕えて曲調を成さず、折角思つたことが、自然はづれて仕舞つた。今しも、胸中に思ひ詰めたことがあるが、鬱結せし儘、自ら宣べ難く、もとより知音の人が稀で、彈じても何の甲斐もないといふ爲めではなく、悲慨の念を曲中に表出することが出來ないのである。

【餘論】起首四句は、秋夜の景、以下六句は、琴を彈じて幽懷を寄せやうとしても、思ふ樣に成らぬといふので、その悲傷の尋常ならぬことを側面から寫し出したのである。

搴（一）荷荷已老。采蘭蘭亦摧。　荷を搴ぐれば、荷、すでに老い、蘭を采れば、蘭も亦た摧く。

無由玩芳物（二）。悵望江之隈（三）。　芳物を玩ぶに由なく、悵望す、江の隈。

木落山更空。猿聲有餘哀。　木、落ちて、山、更に空しく、猿聲、餘哀あり。

所思（四）去我遠。佳期（五）邈悠哉。　思ふところ、我を去ること遠く、佳期、邈として悠なるかな。

被垢尙可澣。抹漆（六）猶難開。　垢を被る、尙ほ澣ふべし、漆を抹する、猶ほ開き難し。

我愁亦何來。當秋鬱（七）難裁（八）。　我が愁、亦た何より來る、秋に當つて、鬱として裁し難し。

棄置（九）勿歎息。多愁損顏衰（一〇）。　棄置、歎息すれ勿れ、多愁、顏を損じて衰へしむ。

【字解】【一】搴荷　蓮の花を折り取る。【二】芳物　草木の花。【三】江之隈　隈は側邊。【四】所思　わが意中の人。【五】佳期　再會の期。【六】抹漆　漆を塗りこめて一面に黑くなつて居る、盧仝の月蝕詩に其初猶朦朧、旣久如レ抹レ漆とある。【七】鬱　結ぼれて居る。【八】難裁　たち切ることが出來ない。【九】棄置　自分の身が棄て置かれる。【一〇】損顏衰　顏色を損じて、忽ち衰老の如くならしめる。

【詩意】蓮の花を折り取らうとすれば、すでに老いて散りかかつて居るし、蘭の花を采らうとすれば、すでに摧けて仕舞つた。頃しも、秋闌けて　花を玩ぶ由もなく、江上に立つて、獨り悵望して居る。あたりに近き山は、木が皆落葉して、一しほ空寂となり、たださへ悲しき猿の聲は、餘哀の甚しきを覺える。わが思ふところの人は、ここを去つて、すでに遠く、再會の佳期は、邈として、何時とも

分からぬ。垢を被つたのならば、滌へば綺麗になるが、漆で塗りこめたのは、開くことが六づかしい。わが愁は、何處より來りしか知らねども、この秋に當つて鬱結し、なかなか裁ち切ることが出來ない。その身は、棄置された處で、おもひ諦めて歎息せぬが善いので、愁が多く積れば、顏色を變じて衰老に赴かしめる。

【餘論】 寧レ荷・采レ蘭から無レ由レ玩二芳物一といひ、被レ垢・抹レ漆から我愁亦何來といふのは、ともに、作者が好んで用ふるところの筆法である。木落山更空の二句は、一寸面白い。棄置の二句は、わが身の孤寂を強ひて自ら慰めたのである。

(一)志士憂二(二)歳晩一。(三)羇人感二秋早一。
志士は歳の晩るるを憂へ、羇人は秋の早きを感ず。

(四)騷騷(五)鬢絲垂。(六)索索(七)枯葉槁。
騷騷として鬢絲垂れ、索索として枯葉槁る。

誰言(八)衆芳歇。(九)時菊正(一〇)鮮好。
誰か言ふ、衆芳歇むと、時菊、正に鮮好。

日暮(一一)餐二其英一。聊開二我懷抱一。
日暮、その英を餐し、聊か我が懷抱を開く。

貧賤難二久居一。欲レ去恐レ違レ道。
貧賤、久しく居り難し、去らむと欲して、道に違はむを恐る。

(一二)時命恐未レ通。(一三)徜徉以終老。
時命、恐らくは未だ通せず、徜徉、以て終老。

【字解】【一】志士　志ある士、何か一仕事やり出さうと思つて居る人。【二】歳晩　今年も暮に近づく。【三】羇人　旅人。【四】騷騷　亂るる貌。【五】鬢絲　鬢の白髮。【六】索索　さわさわと音する。【七】枯葉槁　槁も枯れるといふ字だが、ここでは枯れきつて枝を辭することを云つたのであらう。【八】衆芳歇　多くの花どもが濟んで仕舞つた。【九】時菊　時を得た菊の花。【一〇】鮮好　その色鮮にして姿の好きこと。【一一】餐其英　楚辭に夕餐二秋菊之落英一とある、菊の花を摘んで食ふ。【一二】時命　わが剋下の運命。【一三】徜徉　逍遙と同義。

【詩意】 一仕事やり出さうといふ志士は、秋になると、今年の暮に近きを憂へ、羇旅の人は、誰よりも先に、さびしさを感ずるもので、秋は、愁の種である。鬢邊の白髮は、騷騷として亂れ、枝上の枯葉は、ざわざわと音して落ちる。秋になれば、草木の花も皆濟んだといふが、ひとり、菊のみは、時を得がほに、その色を鮮にし、その姿を好くして咲き出でた。そこで、日暮、その花を摘んで食し、聊か我が懷抱を開いた。貧賤の苦境には、久しく居り難いが、さりとて、これを去らうと欲すれば、道義に違ふ虞がある。剋下の我が運命は、未だ通せず、まさしく窮困に居るべき筈だと思へば、仕方が無いから、すべて思ひ諦め、逍遙して、老年になるのを待つ外はない。

【餘論】 起首二句は、陳套であるが、どうやら、格言めいて聞こえる。衆芳歇みし中に、菊があるといふのは、窮困の中にも、いささか樂境があるといふことを暗諭したので、その以下を引き出したのである。貧賤難二久居一の四句は、慰藉の語で、分に安んじ命を樂むの意に外ならぬものである。

秋風夜颸颸。秋色日瀟灑。　秋風、夜、颸颸たり、秋色、日に瀟灑。

觀人心亦驚。況乃居愁者。　觀人、心亦た驚く、況んや、乃ち愁に居るものをや。

塊處厭空宇。命駕聊適野。　塊として處り、空宇を厭ひ、駕を命じて聊か野に適く。

征鴻暮相呼。牛羊亦同下。　征鴻、暮に相呼び、牛羊、亦た同じく下る。

我居久離羣。憂襟向誰寫。　我が居、久しく離羣、憂襟、誰に向つて、寫かむ。

【字解】〔一〕颸颸　ざわざわと音する。〔二〕瀟灑　さつぱりして汚れなき貌。〔三〕觀人　これを觀た人。〔四〕塊處　塊然として居る、この五體を持て餘まして居る。〔五〕空宇　人もなき屋宇、韋應物の詩に空宇澹無情とある。〔六〕命駕　車を命ずる。〔七〕適野　郭外の野に出かける。〔八〕牛羊亦同下　牛羊も亦た同じく其小屋の方に歸る。〔九〕離羣　親舊と分れて獨り居る。〔一〇〕向誰寫　寫は除く。

【詩意】秋風は、夜になると、ざわざわと音して、勢すさまじく、秋色は、瀟灑として、日に日に深く成つて行く。唯だ之を觀たばかりでも、心を驚かすこと、必定であるのに、愁に居るものに於ては、猶更の事である。われは、塊然として、この五體を持て餘して居るが、人なき屋宇に籠ることを厭ひ、車を命じて、郭外の野に出かけて見た。すると、日暮の空に、征雁は互に呼びかはし、牛羊の羣も、野を去つて家路に急いで行く。すべて、物は同類を以て羣を作り、そして、助け合つて居るのに、われのみは、久しく羣を離れ、ひとり、つくねんとして、淋しく暮らして居るので、憂に閉ぢたる此襟懐は、誰に向つて、除くことが出來やうか。

【餘論】起首四句、秋の漸く深きを敍し、以下、野に出かけて、征鴻や牛羊が各〻羣を爲せるを見て興を起し、おのが孤寂に反折したのである。

涼風動幽幔。高堂夜空虛。　涼風、幽幔を動かし、高堂、夜、空虛。

明燈無與語。聊讀古人書。　明燈、ともに語るなし、聊か古人の書を讀む。

古人亦何人。使我不得如。　古人、亦た何人ぞ、我をして如くを得ざらしむ。

棄卷輒還臥。終宵自欷歔。　卷を棄てて輒ち還た臥す、終宵自ら欷歔。

【字解】〔一〕幽幔　奥深き幔。〔二〕高堂　高い堂宇。〔三〕棄卷　書物を下に置く。〔四〕終宵　夜もすがら。〔五〕欷歔　すすり泣きをする。

【詩意】涼しい風は、幽幔に吹き入り、高堂の中は、人なくして、夜になれば全く空虛である。ここに、われ一人、明燈に對して坐すれども、燈火は、話し相手にもならず、そこで、古人の書を讀んで見た。古人は、如何なる人か、その人物は、とても及ぶことは出來ぬ。そこで、其書を下に置いて、又ぞろ臥したが、物思ひの切なるに堪へず、夜もすがら、啜り泣きをして居た。

【餘論】空堂の中、伴侶なく、古人の書物を讀み、古人には到底及ぶことが出來ないといふことを述べたので、俯仰感慨、岑寂の極である。

鳴蟲入我戶。落葉覆我井。　鳴蟲、我が戶に入り、落葉、わが井を覆ふ。
何無四方（一）志。戀此一室靜。　何ぞ四方の志なくして、この一室の靜を戀ふる。
問途欲晨（二）征。畏踐霜露冷。　途を問うて、晨征せむと欲するも、霜露の冷を踐まむことを畏る。
濁（三）醪幸方（四）熟。夕飲燭可（五）炳。　濁醪、幸に方に熟す、夕飲、燭、炳にすべし。
勿憂去日多。但願來日永。　憂ふる勿れ、去日の多きを、但だ願ふ、來日の永きを。
不知苦（六）驅馳。孰若長酩（七）酊。　知らず、苦に驅馳するは、長く酩酊するに孰れぞや。

【字解】【一】四方志　遠く四方に出かける志。【二】晨征　朝早く發程する。【三】濁醪　にごり酒。【四】幸方熟　熟は醱酵が畢つたこと。【五】燭可炳　燈火を明かにする。【六】苦驅馳　苦んで驅け廻はる。【七】酩酊　醉つ拂ふ。晉書山簡傳に「習氏に佳園池あり、簡、出でて游嬉する毎に、多く池上に之き、酒を置いて輒ち醉ひ、これを高陽池と名づく。時に童兒あり、歌うて曰く、山公出何許、往至高陽池、日夕倒載歸、酩酊無所知、とある。

【詩意】鳴く蟲は飛んで我が戶に入り、落葉は我が井を覆ひ被せる位。如何なれば、われは四方の雄志なく、この一室の靜かなるを眷戀して、立ち去らずに居るのであるか。途の由るところを問ひ、朝早く發程しやうと思つても、秋深く、霜露の冷かなるを踐んで、病氣にでも成りはせぬかと、それが苦に成つて、止めて仕舞つた。今しも、濁酒は恰も熟し、夜酌の際は、燈火を明かに點ずることが出來る。過ぎ去りし日は、多くとも、今さら憂ふるに及ばず、唯だ來む日の長く、從つて、わが齡が短くなければ、それで先づ宜しい。功名富貴をあせつて、御苦勞にも、驅けずり廻はるのは、長しへに酩酊するのと、どつちが善いか、そは、言はずとも、分かつた事である。

【餘論】この首は、例の現世快樂主義に本づき、殊に飲酒の樂を謳歌したので、その構想の淺薄なることは、到底、辯護の餘地だにないと思はれる。

（一）弱齡弄（二）篇翰。出門結（三）羣賢。　弱齡、篇翰を弄し、門を出でて羣賢に結ぶ。
（四）俛仰幾何時。已有好新年。　俛仰幾何時ぞ、已に好新年あり。
歡娛雖常逢。憂患亦屢牽。　歡娛、常に逢ふと雖も、憂患、亦た屢ば牽く。
（五）世故逐人老。髮鬢能（六）久玄。　世故、人を逐うて老いしむ、髮鬢、能く久しく玄ならむや。
沈思復何爲。省（七）我既往愆。　沈思、復た何をか爲さむ、我が既往の愆を省る。

問レ道行已歟。（八）中途曷歸旋。　道を問うて行く、すでに歇むも、中途曷ぞ歸旋せむや。

【字解】【一】弱齡　少年に同じ。【二】篇翰　篇章翰墨、鮑照の擬古詩に十五諷二詩書一篇翰靡レ不レ通とある。【三】結羣賢　多くの賢達の士と交際する。【四】俛仰　俯仰に同じ。【五】世故　世上の事故。【六】能久玄　どうして何時までも黒くて居やうか。【七】省我既往愆　既往の過失を反省する。【八】行已歟　せつせと急いで行き、そして時時休憩する。

【詩意】少年の頃には、篇章翰墨を弄くり、仍つて、詞名を得、門を出でては、當代賢達の士と交際して居た。俯仰すれば、幾何の時を過ぐしたか、その中には、愉快な希望多き新年もあつたが、今は、さうも行かぬ。歡娯には、平生よく出合つたが、憂患にも、亦た屢ば牽纏せられた。紛紛たる世上の事故は、人を逐ひ立てて、次第に老年とならしめ、鬢髮は、どうして、いつまでも黒くて居やうか、つくづく考へれば、最早、仕方がないが、おのが既往の過失は、歷歷として、反省を値する。しかし、道の由るところを問うて、一たび出かけ、せつせと急いで、時時休憩して居るので、今さら、中途で引きかへすといふ譯にも行かず、この儘、押し通して進む外はない。

【餘論】この首は、少年の得意より始めて、世途の艱難、往往意の如くならざることに及び、すでに此まで出かけた上は、この儘、押し通す外はないといふ意を述べたのである。歡娯雖二常逢一の二句は、平淺ながら、世上の狀態を道ひ盡し、世故逐レ人老は、卽ち歲月人を待たざるの意。以下四句は、作者の閱歷に本づいた苦言である。

朝游二荒岡陲一（一）暮行二空潭側一。　朝に荒岡の陲に遊び、暮に空潭の側を行く。

我非二楚大夫一（二）何有二憔悴色一（三）。　我は楚の大夫に非ず、何ぞ憔悴の色あらむ。

良辰（四）思二遠騁一（五）周道廣且直。　良辰、遠く騁せむことを思ふ、周道、廣くして且つ直。

我馬力不レ前。（六）回レ駕任二偃息一（七）。　我が馬、力、前まず、駕を回して偃息に任かす。

踟躕阻二修程一（八）日夕睇二西北一（九）。　踟躕して、修程を阻り、日の夕、西北を睇る。

（一〇）苟安非二予志一所レ懼時未レ識（一一）。　苟安は、予が志に非ず、懼るるところは、時、未だ識らず。

【字解】【一】荒岡陲　陲はほとり。【二】楚大夫　屈原。【三】憔悴色　屈原の漁父に「屈原、すでに放たれ、江潭に遊び、澤畔に行吟す。顏色憔悴、形容枯槁。漁父、見て之に問うて曰く、子は三閭大夫に非ざるか、何が故に斯に至る」とある。【四】良辰　良き時。【五】周道　周時代の道路。【六】回駕　馬車を引きもどす。【七】偃息　休息。【八】阻修程　長い道程を隔つ。【九】睇西北　睇は眺める。【一〇】苟安　かりそめに安穩にして居る。【一一】時未識　當時の人がまだ自分を知らぬといふ意。

【詩意】朝に荒れたる岡の邊に游び、暮には深い淵の側を歩む、われは、屈原では無いのに、如何なれば、顏色憔悴して居るか。ここに好き折から、遠くに馳せて見やうと思ひ、おまけに、周道坦坦として、幅も廣く且つ眞直である。しかし、折角乘り出して見たものの、わが馬は、力、弱くして、進むことが出來ず、仕方がないから、車を引きもどして、休息することにした。踟躕して去りもあへず、わが行かうと思ふ處は、この先、長い道程に隔てて居て、日の將に夕ならむとする頃、西北の方を眺

めて居る。唯だかりそめに安逸を貪るは、わが本志に非ず、慍るるところは、名もなくして、當時に知られぬことである。

【餘論】日夕歸西北といつて、特に西北を限つたのは、古詩十九首に、西北有高樓、上與浮雲齊とあるに本づき、理想の境地を指したのである。折角出かけたが、馬の力が續かずして、引きかへしたといふのは、自分が何か一仕事を遣つて見る積りで、世間に出て見たが、矢張、おもふ樣に成らず、直に又元の處に還つて高臥して居るといふことに暗諭したので、踟蹰阻修程以下は、卽ち其意を重說したのである。

（一）弭櫂望（二）江涘。日落青楓林。
驚波駛（三）且廣。蕩漾浮雲陰。
靡靡皐（四）蘭衰。噰噰渚（五）鴻吟。
顧此凜（六）節謝。憂來忽傷心。
（七）宋子悲已多。（八）潘生歎彌深。
自古有此愁。誰云獨吾今。

櫂を弭めて江涘を望む、日は落つ青楓林。
驚波、駛せて且つ廣く、蕩漾して浮雲陰る。
靡靡として皐蘭衰へ、噰噰として渚鴻吟ず。
顧るに、此に凜節を謝し、憂、來つて忽ち心を傷ましむ。
宋子、悲すでに多く、潘生、歎、彌よ深し。
古しへより、此愁あり、誰か云ふ、獨り吾今のみと。

【字解】【一】弭櫂　かいを停める、陳子良の宿江渚詩に我行逢日暮、弭櫂莫維舟とある。【二】江涘　江岸に同じ。【三】駛且廣　駛は玉篇に「疾きなり」とある。【四】皐蘭　澤地に生えた蘭。【五】渚鴻　汀に下つた雁。【六】凜節謝　さむき秋の季節に挨拶する。【七】宋子　宋玉、その作に係る九辨に皇天平分四時兮、竊獨悲此凜秋とあり、悲哉秋之爲氣也蕭瑟兮、草木搖落而變衰とある。【八】潘生　潘岳、字は安仁、その作つた秋興賦は文選に載せてある。

【詩意】漕ぎ行く舟の棹を停めて、江岸を眺めると、まだ紅葉せずして、青青と茂りたる楓林に、夕日さしこみ、江面には、波立ち騷いで、流は早く且つ廣やかであつて、浮雲の陰れる影を映し、ひたと蕩漾して居る。澤地に咲き出でた蘭の花は、靡靡として衰へ、渚に下りた雁は、噰噰として鳴いて居る。蘭も、雁も、秋の季節に應じたものであつて、これを見ると、憂來つて、覺えず心を傷ましめる。宋玉は、九辨に於て、秋の悲の多きことを述べ、潘岳は、秋興の賦に於て、浩嘆愈よ深き想を寫して居る。して見れば、秋に對して愁を爲すは、むかしからの事であつて、何も今日、われ獨りではないが、これを消遣する術が無いから、どうにも仕方がない。

【餘論】弭櫂望江涘の八句は、江上の秋景を寫し、宋玉・潘岳を倩ひ來り、その愁、古しへよりし、ひとり今の吾のみに非ざるをいひ、悲秋の情緒の毎に淒涼たることを敍し、それで連作の收束としたのである。

出レ郊抵二東屯一五首
郊を出でて東屯に抵る　五首

(一)故郷(二)一區田。自二我(三)先人一遺。
故郷一區の田、わが先人より遺す。

(四)頼レ此容二我懶一。不レ耕坐待レ炊。
これに頼つて、我が懶を容れ、耕さず、坐して炊ぐを待つ。

霜露被二寒野一。屬レ當二斂穫時一。
霜露、寒野に被り、當に斂穫すべきの時に屬す。

年來(五)徵薄入。(六)税レ駕宿二(七)東陂一。
年來、徵、薄く入る、税駕、東陂に宿す。

今年雖レ未レ豐。亦足レ療二我飢一。
今年、未だ豐ならずと雖も、亦た我が飢を療するに足る。

(八)萬鍾知レ難レ稱。保レ此復何辭。
萬鍾、知る稱ひ難きを、此を保たば、復た何ぞ辭せむ。

【字解】【一】故郷　蘇州の北郭であらう。【二】一區田　一區劃の田。【三】先人　亡父。【四】頼此　この田のある御蔭でといふ意。【五】徵薄入　小作料を十分に徵集することが出來ぬ。【六】税駕　車を停める。【七】東陂　即ち東屯。【八】萬鍾　鍾は升目の名、左傳襄公二十九年の條に「國人に粟を餼る、戸ごとに一鍾」とあつて、その注に「六斛四斗を鍾といふ」とあり、又漢書食貨志に「穀、千鍾を藏す」小爾雅に「二缶、これを鍾といふ」とあつて、その注に「八斛なり」とあり、又淮南子要略篇に「一朝三千鍾の贛を用ふ」とあつて、その注に「鍾は十斛」とあり、どうやら一定しないが、萬鍾といへば、非常に多い俸祿である。

【題義】出レ郊の郊は城外。東屯は村名であらう。靑邱の槎軒集には、題を「秋日、東屯の農舍に寓す」としてある。この詩は、靑邱の所有に係る田が城外の東屯といふ處に在つて、秋の末、小作料を徵集旁その地に赴いて留宿した間の作である。

【詩意】わが故鄕なる一區劃の田は、亡父が我に遺して吳れたので、これが有るばッかりに、わが疎懶に任せ、自分で耕さず、坐して炊ぐを待つて居られるのである。今しも、霜露が秋の野に被り、丁度、取り入れの時に成つて來た。近年は、小作料の入りも不十分である處から、實地を檢分がてら、城外に出で、やがて車を停めて東陂に宿した。なる程、今年は、豐穰といふでもないが、わが飢を療するには、不足はない。萬鍾の高祿が、もと菲才の此身に不相當であることは分かつて居るので、この田さへ保持して行くことが出來れば、それで澤山、何も此地を辭して遠く去るにも及ばぬことである。

【餘論】この詩は、何時作つたかといふと、第四首に朝服久已解とあるから、靑邱が官を罷めた後、即ち洪武三年七月、金を賜うて放ち歸され、はじめは、江上の靑邱に居たが、四年、居を城南に移し、六年、夏侯里に徙居した、其秋の事に相違ないので、現に年譜に於ても、この年に繫いである。そして、靑邱は、翌七年に棄市されて仕舞つたので、即ち死ぬる一年前の作である。これに頼つて、作者の生活狀態は、直に推測されるので、官を罷めし後、先人の賜を有り難く思つて、これを保全する外、他意なきは、偶ま以て其高操の一斑を窺ふことが出來る。

(一)喌喌雞(二)登場。(三)秋稼稍狼藉。　喌喌として、雞、場に登り、秋稼稍く狼藉。
(四)疎楡蔭門巷。(五)景暗(六)煙火夕。　疎楡、門巷に蔭し、景暗くして煙火夕なり。
田家雖作苦。於世寡憂戚。　田家、苦を作すと雖も、世に於て、憂戚寡し。
況當收穫景。(七)斗酒復可適。　況んや、收穫の景に當つて、斗酒、復た適すべし。
所以(八)沮溺徒。躬耕不辭劇。　所以に沮溺の徒、躬耕して劇を辭せず。

【字解】〔一〕喌喌　説文に「雞を呼び、之を重言す、讀んで祝の若し」とある。〔二〕登場　場は、屋外の廣い空地で、稻などを取り入れる處。〔三〕秋稼　刈り取つた稻。〔四〕疎楡　落葉して疎になつた楡の木。〔五〕景暗　夕日が暗くなる。〔六〕煙火　飯を炊く煙と燈火。〔七〕斗酒　一斗は、日本でいへば一升位。〔八〕沮溺　長沮・桀溺の二人、耦耕し、孔子が之を見やうとしても、故らに相避けしこと、論語に見ゆ。

【詩意】喌喌と續けざまに呼ぶと、雞は場に登り、取り入れた稻は踏まれ、仍つて狼藉として、あたりに散らばつた。半ば落葉した楡の木は、門巷に蔭を投げ、入日ほの暗く、炊煙や燈火は、まさしく夕ならむとして居る。田家は、仕事に骨が折れて、隨分苦痛ではあるが、世間の事に對しては、心配もなく、まして、この收穫の有様を見て、斗酒を酌んで相樂むことも出來る。さればこそ、長沮・桀溺などいふ古しへの隱者は、躬耕以て活をなし、その煩劇を苦にしなかつたのである。

【餘論】田家雖作苦の六句は一氣流注、簡切素朴、まさしく田園生活の福音である。

(一)我本東皐氓。偶往住(二)州城。　我、本と東皐の氓、偶ま往いて、州城に住す。
茲來臥農舍。頓愜田野情。　ここに來つて農舍に臥し、頓に田野の情に愜ふ。
如魚反故淵。悠然樂其生。　魚の故淵に反るが如く、悠然として其生を樂む。
臨去(三)謝(四)主嫗。重來自(五)藜羹。　去るに臨んで、主嫗に謝す、重ねて來れば、自ら藜羹。
我非(六)催租吏。叩門勿相驚。　我は租を催すの吏に非ず、門を叩くも相驚く勿れ。

【字解】〔一〕東皐氓　東皐は城東の澤地、氓は民、卽ち住人。〔二〕州城　蘇州の城中。〔三〕謝　挨拶をする。〔四〕主嫗　漢書高帝紀に「高帝、かつて主嫗武負に隨つて酒を貰る。この兩家、常に折券して貰を棄つ」とある。〔五〕藜羹　あかざの羹。〔六〕催租吏　租税を責めはたる官吏、卽ち收税吏。

【詩意】われは、元と城東の住人であつたが、ふと其處を去つて、今は城中に寓居して居る。この頃、ここに立ち歸つて、農舍に起臥すると、頓に田野の情に愜うて、まことに愉快である。たとへば、魚が昔の淵に還つたと同じく、心のどかに其生を樂むことが出來る。そこで、去るに臨んで、主人の嫗に挨拶して云ふには、その內又來るが、その時は、藜の羹で十分である。われは、もとより租税を責めはたる役人ではないから、門を叩いて、呼び音なふとも、決して驚くには及ばぬぞといつた。

【餘論】東皐の故地、田園の樂多く、はるかに、城中に勝るを云ひ、やがて、主嫗に向つて、重ね

て來宿せむことを約束したのである。

(一)朝服久已解。儼然山澤(二)臞。　朝服、久しく已に解く、儼然たる山澤の臞。
欲狎林野人。相歡混賢愚。　林野の人に狎れ、相歡んで賢愚を混せむと欲す。
朝來此水濱。高歌歩踟蹰。　朝に此水濱に來り、高歌、歩して踟蹰。
忽逢一田父。舍(三)耕拜路隅。　忽ち一田父に逢ふ、耕を舍いて路隅に拜す。
疑我是長官。怪我體貌殊。　われは是れ長官なるを疑ひ、わが體貌の殊なるを怪む。
我已忘所有。彼我未忘歟。　われ已に有するところを忘る、彼は我を未だ忘れざるか。
不能使爭(四)席。心愧禦(五)寇徒。　席を爭はしむる能はず、心、禦寇の徒に愧づ。

【字解】【一】朝服　朝廷に出仕する時の禮服。【二】山澤臞　山澤の間に居て、形貌の痩せたる隱者、史記司馬相如傳に「列仙の傳、山澤の間に居り、形容甚だ臞す」とある。【三】舍耕　耕すことを止める。【四】爭席　莊子に「陽子居、老子に遇ふ。老子曰く、而、睢睢盱盱として、誰と與にか居る。太白は辱の若く、盛德は足らざるが若し、と。陽子居、蹵然として、容を變じて曰く、敬んで命を聞くと。その往くや、舍者迎將し、その家公、席を執り、妻、巾櫛を執り、舍者席を避け、煬者竈を避く。その反るや、舍者、これと席を爭ふ」とある。【五】禦寇徒　莊子に「列禦寇、齊に之かむとし、中道にして反り、伯昏瞀人に遇ふ。曰く、奚の方にして反る。曰く、吾、驚きたり。曰く、烏くにか驚く。曰く、吾、かつて十漿に食して、五漿先づ饋る。伯昏瞀人曰く、かくの如き、汝、何すれぞして驚く。曰く、夫れ內誠解けず、形諜光を成す、外を以て人心を鎭し、人をして貴老に輕んぜしめて、その患ふるところを齎す、吾、これを以て驚く」とあつて、その注に「謂ふは、人の敬、すでに他人より過ぐ、患を致す所以なり」とある。

【詩意】身は、既に久しく朝服を脫ぎ棄てて、儼然たる山澤の間の隱者である。されば、林野の人に狎れ睦み、日夕相歡んで、賢愚を混じて仕舞はうと思つて居る。然るに、朝に、この水濱に來り、高歌しつつ、しばらく去りがてにして居ると、忽ち一人の田父に逢つたが、耕す手を止め、路隅に立つて慇懃に拜をした。そは、我こそ、この地方の長官であると思つたからで、そして、我が風體の一種特別なるを怪んで居た。われは、既に自ら有するところの者を忘れて、全く林野の人に成り澄ました積りであるのに、彼は、却つて、我が近ごろまで出仕して居た事などを忘れずに居るのであらうか。かくの如くして、高德が身に行き亙り、容貌愚なるが若く、賢愚を混じ、衆人をして、われと席を爭はしむる樣にすることの出來ないのは、まだ自己の修爲の工夫が足らぬからであつて、列禦寇の徒に對して、その及ばざるを愧づる外はない。

【餘論】この首は、林野の人に混せむと心がけ、しかも、まだ修爲の足らざりしを慙恨して云つたので、青邱の人物・理想等は、容易に此に臆想することが出來る。

坐久體(一)不適。卷書出柴(二)關。　坐、久しうして、體、適せず、書を卷いて柴關を出づ。

臨レ流偶西望。正見二(三)秦餘山一。

野淨(四)寒木疏。(五)川長(六)暝禽還。

此中忽(七)有レ得。怡然(八)散二襟顏一。

遂同二(九)樵牧一歸。歌笑落日間。

流に臨んで、偶ま西望、正に秦餘山を見る。

野は淨くして寒木疏なり、川は長くして暝禽還る。

この中、忽ち得るあり、怡然として、襟顏を散す。

遂に樵牧と同じく歸り、歌笑す落日の間。

【字解】【一】體不適　身體の工合が惡い。【二】柴關　柴門に同じ。【三】秦餘山　姑蘇志に「陽山、一名秦餘杭山」とある。【四】寒木　冬の木、落葉した木。【五】川長　川は江上の平原。【六】暝禽　夕方に飛ぶ鳥。【七】有得　悟るところがあつた。【八】散襟顏　結ぼれた胸襟顏色を解いて樂しげになる。【九】樵牧　樵夫と牧童。

【詩意】屋中に獨坐すること、すでに久しく、どうも、身體が窮屈で、工合が惡い處から、書物を片づけて、柴門から出かけた。流に臨んで、ふと西の方を望むと、秦餘山が、目のあたりに見える。冬がれの野は、さつぱりとして、落葉した木木は、疎であるし、江上の平原は、長く續いて、塒に急ぐ鳥の飛び歸るのが見える。この景色の中に立ち、忽然として心に悟るところがあつて、今まで結ぼれて居た胸襟顏色を解きほごし、物とはなしに嬉しくて堪まらず、夕日影の中に歌笑しつつ、樵夫牧童輩と一緒に歸つて來た。

【餘論】此中忽有レ得、怡然散二襟顏一は、陶淵明の此中有二眞意一、欲レ辯已忘レ言と同じく、まさしく宇宙の玄機に觸れ、天我冥契の境地に到達したことを云つたのであらう。結末二十字は、王孟一派の好文字で、卽ち陶家の藩籬に傍ふものである。

309
65

終

續國譯漢文大成

文學部　七十六

309
65

缺 入

吉田侍郎氏
寄贈本

續國譯漢文大成

文學部 第七十六册（第十九帙の四）

高靑邱詩集 一の四

309
65

高青邱集巻四

五言古詩

感舊酬宋軍沓見寄

我酒且(一)緩傾。聽君(二)放歌行。
君歌意何苦。慷慨(三)陳平生。
少爲(四)鬭雞兒。(五)鮮裘(六)奪春明。
走馬出飛彈。(七)撇捩誇身輕。
氣(八)服諸俠徒。(九)不倚父與兄。
落花(一〇)錦坊南。美人理妝迎。
(一一)綠雲晩不度。樓上鳴(一二)瑤箏。
酒酣(一三)迸五木。(一四)脱帽呼輸贏。

感舊、宋軍沓の寄せらるるに酬ゆ

わが酒、しばらく緩く傾けて、君が放歌行を聽かむ。
君が歌、意、何ぞ苦なる、慷慨、平生を陳ぶ。
少にして、鬭雞の兒となり、鮮裘、春明を奪ふ。
馬を走らし、出でて彈を飛ばし、撇捩、身の輕きを誇る。
氣は諸俠徒を服し、父と兄とに倚らず。
落花、錦坊の南、美人、妝を理めて迎ふ。
綠雲、晩に度らず、樓上に瑤箏を鳴らす。
酒、酣にして、五木を迸らし、帽を脱して、輸贏を呼ぶ。

及壯家已破。狂遊恥無成。　壯に及んで、家、すでに破れ、狂遊、成るなきを恥づ。
(一五)太白犯紫微。(一六)三辰晦光精。　太白、紫微を犯し、三辰、光精晦し。
(一七)金鏡偶淪照。干戈起紛爭。　金鏡、偶ま淪照、干戈、紛爭を起す。
中原未失鹿。(一八)東海方橫鯨。(一九)　中原、未だ鹿を失はず、東海、方に鯨を橫ふ。
遂尋鬼谷師。(二〇)從之學言兵。　遂に鬼谷師を尋ね、これに從つて兵を言ふを學ぶ。
(二一)石室得陰符。(二二)龍虎隨權衡。(二三)　石室、陰符を得、龍虎、權衡に隨ふ。
業成事燕將。(二五)遠戍三關營。(二六)　業成つて、燕將に事へ、遠く三關の營を戍す。
巖谷雨雪霏。哀獸常夜鳴。　巖谷、雨雪霏たり、哀獸、常に夜鳴く。
撫劍起流涕。軍中未知名。　劍を撫して、起つて流涕、軍中、未だ名を知らず。
奇勳竟難圖。(二七)迴臨石頭城。(二八)　奇勳、竟に圖り難く、迴に臨む石頭城。
石頭何壯哉。山盤大江橫。　石頭、何ぞ壯なるや、山は盤つて大江橫はる。
(二九)黃旗遏王氣。(三〇)玉樹沈歌聲。(三一)　黃旗、王氣を遏め、玉樹、歌聲を沈む。
(三二)晚登臨滄觀。惻愴懷古情。　晚に臨滄觀に登り、惻愴、懷古の情。
覽時識禍機。(三三)不因憶蓴羹。(三四)　時を覽て、禍機を識り、蓴羹を憶ふに因らず。
飄然別戎府。(三五)溧水還東征。(三六)　飄然として戎府に別れ、溧水、還た東征。
(三七)裸衣佐刺船。臨危釋猜萌。(三八)　裸衣、船を刺すを佐け、危きに臨んで、猜萌を釋く。
歸來訪鄉閭。亂餘掩蓬荊。　歸り來つて、鄉閭を訪へば、亂餘、蓬荊を掩ふ。
舊宅人已改。荒池泉尙淸。　舊宅、人、すでに改まり、荒池、泉、尙ほ淸し。
瘦妻倚寒機。(三九)正嘆伊威盈。(四〇)　瘦妻、寒機に倚り、正に嘆ず伊威の盈つるを。
相迎不相笑。伏雌爲重烹。(四一)　相迎へて相笑はず、伏雌、爲に重ねて烹る。
從茲謝行役。(四二)閒園事躬耕。　これより、行役を謝し、閒園、躬耕を事とす。
昔同徒步人。(四三)十年擁麾旌。(四四)　むかしは、徒步の人に同じく、十年、麾旌を擁す。
(四五)鴻毛獨未順。蹭蹬違霄程。(四六)　鴻毛、獨り未だ順ならず、蹭蹬、霄程に違ふ。
(四七)知音竟爲誰。四海嗟惸惸。(四八)　知音、竟に誰とか爲す、四海、惸惸を嗟す。
(四九)齊竽不解奏。(五〇)楚璞何由呈。　齊竽、奏するを解せず、楚璞、何に由つてか呈せむ。
懶求薦辟書。(五一)傲然揖公卿。(五二)　薦辟の書を求むるに懶く、傲然として公卿を揖す。

(五三)衰蕙弔蟋蟀。柔桑(五四)喚鶬鶊(五五)。
閉門節(五六)屢變。壯魄空潛驚。
顧余雖腐儒(五七)。當年亦崢嶸(五八)。
小將說諸侯。捧槃(五九)定從盟。
大欲干(六〇)萬乘。獻策(六一)登蓬瀛(六二)。
洪瀾阻川途。浮雲蔽天京(六三)。
終焉(六四)困澤畔(六五)。日暮吟蘺蘅(六六)。
賤貧此時居。復與喪亂幷。
何殊九月中。嚴霜折枯莖。
頗聞君子心。道窮貴益貞(六七)。
已志未獲施。安用軒裳(六八)榮。
所以苟不出。出則時當平。
(六九)今晨喜逢君。有壺對前楹(七〇)。

衰蕙、蟋蟀を弔ひ、柔桑、鶬鶊を喚ぶ。
門を閉ぢて、節、屢ば變じ、壯魄、空しく潛に驚く。
顧みるに、余、腐儒と雖も、當年亦た崢嶸。
小は、將に諸侯に說き、槃を捧げて從盟を定めむとす。
大は、萬乘を干し、策を獻じて蓬瀛に登らむと欲す。
洪瀾、川途を阻て、浮雲、天京を蔽ふ。
終焉、澤畔に困み、日暮、蘺蘅を吟ず。
賤貧、この時に居り、復た喪亂と幷す。
何ぞ殊ならむ、九月の中、嚴霜、枯莖を折るに。
頗る聞く、君子の心、道窮して益す貞なるを貴ぶを。
己の志、未だ施すを獲す、安んぞ、軒裳の榮を用ひむ。
苟くも、出でざる所以、出づれば、時當に平かなるべし。
今晨、君に逢ふを喜ぶ、壺あり、前楹に對す。

風日初澹淹(七一)。櫻桃(七二)作繁英。
適意不一醉。屑屑(七三)徒悲榮(七四)。
(七五)達人若相遇。大笑絕冠纓(七六)。

風日、はじめて澹淹、櫻桃、繁英を作す。
適意、一醉せず、屑屑として徒に悲榮。
達人、もし相遇はば、大笑、冠纓を絕たむ。

【字解】【一】 緩傾 ゆるゆると傾ける。【二】 放歌行 卷一の同題の條に注して置いたが、樂府題解に「鮑照の放歌行に云ふ、蓼蟲避葵堇」と。言ふは、朝廷方に盛にして、君上、才を好む、何すれぞ、鼓に臨んで相將ゐて去るや」とある。そこで全の爲め、その全篇を下に掲げることにする。蓼蟲避葵堇、習苦不言非、小人自齷齪、安知曠士懷、雞鳴洛城裏、禁門平旦開、冠蓋縱橫至、車騎四方來、素帶曳長飆、華纓結遠埃、日中安能止、鐘鳴猶未歸、夷世不可逢、賢君信愛才、明廬自天斷、不受外嫌猜、一言分珪爵、片善辭草萊、豈伊白璧賜、將起黃金臺、今君有何疾、臨路獨遲回。【三】 陳平生 これまでの事を詳しく述べる。【四】 鬪雞兒 前に卷一、游俠篇の中の袁盎の處に注して置いたが、全の爲め、再び其文を引くと、漢書袁盎傳に「袁盎、病んで、免して家居し、閭里に浮沈し、相隨つて鬪雞走馬を行ふ。洛陽の劇孟、かつて、袁盎を過ぐ、盎、善く之を待つ」とある。【五】 鮮衣 色澤鮮にして立派なる皮衣。【六】 奪春明 明かなる春景色を押し退ける。【七】 撇捩 身體を扭つて撚る、司空曙の杜鵑行に撇捩雄圖雄とある。【八】 諸俠徒 多くの游俠の仲間ども。【九】 不倚父與兄 父兄の勢力に倚賴しない。【一〇】 錦坊 碎錦坊の略、曹鄴の異林に「裴晉公の午橋莊に文杏百樹あり、碎錦坊を立つ」とある。【一一】 綠雲晚不度 綠雲は、晴れた日の雲。その雲が、日暮に動かずして停まつて居る。つまり、行雲を遏めるといふ義。【一二】 瑤箏 箏は琴の一種、瑤は美稱。【一三】 迸五木 五木經に「摴蒱は古戲、その投ずる五あり、故に呼んで五木と爲す。木を以て之を爲る、因つて之を木といふ。今、牙角を以てするは飾を尙ぶなり」とある、博奕。【一四】 脫幘 幘子を脫ぐ、頭が熱するからであらう。【一五】 太白犯紫微 天官星占に「太白は、金の精、白帝の子、大將の象なり」とあり、晉書天文志に「紫微は天帝の座、天子の帝居なり」とある。天子が武將の爲に抑壓せらるる兆。【一六】 三辰 日月星を總稱す。【一七】 金鏡 太陽を指す、劉峻の廣絕交論に「聖人、金鏡を擢り、風烈を闡く」とある。【一八】

未失鹿　鹿は獵物の目的物。故に中原の鹿といへば、誰でも得たいと思ふもので、帝位、或は國家を指す。それを未だ失ふに至らずといふので、殷亂に成つたばかりの狀態を云ふ。【一九】橫鯨　木華の海賦に魚則橫海之鯨とあつて、大きな怪物がのさ張つて居ること。【二〇】鬼谷師　史記蘇秦傳に「東、師に齊に事へて、これを鬼谷先生に習ふ」とある。【二一】石室　洞窟中の室。【二二】陰符　太公望が作つたといふ兵法の書。【二三】龍虎　六韜といふ兵書があつて、文韜・武韜・龍韜・虎韜・豹韜・犬韜の六部に分れ、就中、龍虎の二韜が最も重要視されて居る。【二四】權衡　秤、自分の思ふ樣にする。【二五】燕將　北方燕地の將帥。【二六】三關釁　後漢書の馮衍傳に「上黨に四塞の固あり、東、三關を帶び、西、國蔽となる」とあつて、その注に「上黨・壺口・石陘を謂ふなり」とある。【二七】覓鹿圖　どうしても計畫することが出來ぬ。【二八】石頭城　卷二小長干曲に見ゆ。建業、卽ち今の南京の西に在つて、吳の孫權が築いた。【二九】黃旗　吳書に「陳化、魏に使す。文帝、嘲り問うて曰く、吳魏峙立、誰か將に海內を平一せむとする。對へて曰く、先哲、命を知る、舊說に、紫蓋黃旗、運東南に在り」と見ゆ。【三〇】王氣　帝王の氣、郁天挺の鼓吹注に「楚の威王、その地に王氣あるを以て、金を埋めて之を鎭す、故に金陵と名づく」とあり、許渾の金陵懷古に玉樹歌殘王氣終、景陽兵合戍樓空とある。【三一】玉樹　卷二、春江花月夜の條に見ゆ。詳くは玉樹後庭花といひ、陳の後主が狎客に作らせた樂章の名。【三二】臨滄觀　一統志に「勞勞亭は、應天府治の西南に在り、吳の時建つ、一名臨滄觀」とある。【三三】禍機　禍の起る機會。【三四】憶蓴羹　晉書張翰傳に「齊王冏、辟して大司馬東曹掾となす。翰、秋風の起るを見、吳中の菰菜蓴羹鱸魚の膾を思うて曰く、人生、適意を貴ぶ、何ぞ能く羈宦數千里にして、名爵を要せむや、と。遂に駕を命じて歸る」とある。【三五】戎府　軍府に同じ。【三六】溧水　江寧府に屬す、戰國策に「伍子胥、橐載して昭關を出で、溧水に至る、以て其口を餬するなし」とある。【三七】裸衣佐刺船　衣を脫いで裸體になり、舟を漕ぐ爲に加勢する。陳平の故事、卷一の空侯引の條に注して置いたが、念の爲め、再び引抄すると、漢書の本傳に「平亡げて河を渡る、船人、その美丈夫の獨行するを見、その亡將にして、腰下當に金玉寶器あるべきを疑ひ、これを目して平を殺さむと欲す。平、心に恐れ、乃ち衣を解き、裸となつて、船を刺すを佐く。船人、その有るなきを知つて、乃ち止む」とある。刺船は、船を漕ぐこと。【三八】猜萌　推測して惡心を萌す。【三九】寒機　こはれかかつた機。【四〇】伊威　詩經に伊威在レ室とある、おめむし、わらじ蟲。【四一】

伏雌爲重烹　百里奚の歌に、百里奚、五羊皮、臨レ別時、烹二伏雌一、炊二扊扅一とある。勢なき雌の雞を殺して其肉を烹る。【四二】謝行役　職務の爲に出張することを斷る。【四三】徒步人　貧賤にして車馬に乘り得ざる人。【四四】麾旌　采配を手にして旗を押し立てる、天晴の大將となりしことを云ふ、隋書音樂志に戀軒消レ轍、麾旌復レ路とある。【四五】鴻毛獨未順　王褒の聖主得賢臣頌に翼乎如二鴻毛遇一レ順風一とあつて、ここでは、反對に、鴻毛がまだ順風に遇はないといふこと。【四六】蹭蹬遂霄程　木華の海賦に或乃蹭二蹬窮波一とあつて、蹭蹬は、勢を失ひし貌。霄程は、皮日休悼鶴の詩に銜龍休レ濯九霄程とあつて、飛び行く空中の路程。勢を失して空を飛ぶことが出來ぬといふ意。【四七】知音　前に數ば見ゆ。【四八】悄悄　孤獨にして伴侶なきこと。【四九】齊竽　韓愈の文に「王、竽を好んで、子、瑟を鼓す、工と雖も、其れ好まざるを如何」とある。竽は樂器の名。【五〇】楚璞　卷三、寓感第十八首に見ゆ、卞和の故事。【五一】薦辟　推薦したり徵し出したりする書狀。【五二】拚　捨棄する。【五三】哀蕙　蕙は蘭の屬、一莖一花。【五四】柔桑　桑の軟かき葉。【五五】鸝鶊　鸝は黃鸝、鶊は倉庚、ともに鶯。【五六】節屢變　時節が數ば遷り變る、卽ち歲月の過ぐること。【五七】腐儒　史記黥布傳に「上、隨何の功を折き、何を謂つて腐儒となす、天下を爲むる、安んぞ腐儒を用ひむ」とある。【五八】崢嶸　氣象の高きこと。【五九】捧槃定從置　史記平原君傳に「毛遂、劍を按じて前む。楚王、唯唯す。毛遂、楚王の左右に謂つて曰く、雞狗馬の血を取り來れ、と。毛遂、銅盤を捧げて、跪いて之を楚王に進めて曰く、王、當に血を歃つて從を定むべし、次は吾が君、次は遂、と。遂に從を殿上に定む」とある。【六〇】千萬乘　天子に說く。【六一】獻策　經國の方策を進める。【六二】登蓬瀛　唐書褚良傳に「武德四年、太宗、天策上將軍となり、文學館を作つて賢才を敎聘す。杜如晦等を以て、竝に本官を以て學士たらしめ、閻立本に命じて圖畫せしめ、亮をして之が贊を爲らしめ、名字爵里を題して、十八學士と號す。この時、選中に在るものは、天下の慕向するところ、これを登瀛洲といふ」とある。【六三】天京　天子の居る都。【六四】終將　はては、最後に。【六五】困澤畔　屈原の漁父に「屈原、すでに放たれて、澤畔に行吟す」とある。【六六】蘺　說文に「江蘺は蘼蕪」とあり、玉篇に「蘅は香草なり」とあり、又離騷に雜二杜蘅與一芳芷一とある。【六七】益貞　貞は節を守つて移らざること。【六八】軒裳　軒は車、裳は衣裳、大官の乘る車と禮裝。【六九】劍俠傳に「虬髯、李靖に謂つて曰く、妹、天人の姿を以て、不世の藝を蘊み、夫の貴に從つて、榮、軒裳に及ぶ」とある。【六九】

今晨　今日に同じ。【七〇】前楹　楹は軒端。【七一】澹沲　のどかなること、杜甫の詩に春光澹沲秦東亭とある。【七二】櫻桃　ゆすら梅、白い細かな花が咲く。【七三】屑屑　こせこせする。【七四】悲縈　悲哀の情が纒ひつく。【七五】達人　至道に達したる人。【七六】絶冠纓　あまり、大きな口を開いて笑ふ爲に、冠の紐が切れる、史記滑稽傳に「淳于髡、天を仰いで大に笑ひ、冠纓、索、絶ゆ」とある。

【題義】宋軍沓は、卷三懷十友の詩にも見えて居た人で、名は克、かつて參謀を以て張士誠から徵されたことがあつたが、これに就かず、門を閣ぢて隱れて居た。ある時、その宋克が、會晤の後、詩を寄せて來た故に、靑邱は、乃ち此詩を作つて酬い、且つ宋克竝に自己の往年の經歷を述べたから、感舊を以て題としたのである。金檀の注に「この詩、五十韻、大全集中、脫訛多し、今、鐵網珊瑚より補正す」とある。そこで、兩者を對照して子細に吟味すると、大全集の方は、數句を脫し、且つ順序の錯亂した處もあつて、金檀注本に載せた方が、文義はるかに順なるを覺える。

【詩意】われは、今酒を飮んで居るが、成るべく、緩ツくり杯を傾け、そして、君の作られた放歌行を歌はせて聞くと致さう。さて篤ツくり聞いて居ると、君の歌は、その意、まことに痛み、そして、慷慨の餘、從來の經歷を敍したものであつた。君は、少年の頃より、游俠を事とし、鬪雞の兒を以て目せられ、色合鮮かな立派な衣は、艶なる春色をも奪ふべく、そして、馬を走らして城外に出で、彈き玉を飛ばして、ねらひ違はず、小鳥を打ち落し、その體を扭つて撚ねる樣は、さながら、輕捷を矜るが如くであつた。それはまだしも、豪氣堂堂として、多くの俠客輩を屈服せしめ、もとより、父兄の餘威に倚賴することは無かつた。碎錦坊南に落花亂るる夕、美人は、粧を凝らして、慇懃に相迎へ、樓上に於て、もてなし振りに瑤箏を彈ずれば、その聲淸越、天上の綠雲を遏めて度らしめず、それから、酒酣なるときには、五つの賽ころを擲つて、博奕の游に耽り、頭熱すれば、帽子をかなぐり棄てて、勝敗を呼ばはり、まことに、大した元氣であつた。壯年の頃、家は旣に破產し、これまで勝手に游蕩をしたものの、一事も成功せざりしを愧づるばかり。時しも、太白星は紫微なる天帝の居を犯し、武臣、權を弄して、天子が勢を失するといふ兆候が顯はれ、果然、日月星辰は光精を晦まし、太陽も、いつしか淪み、到る處、干戈紛然として爭鬪を事とするやうに成り、中原に於ては、未だ鹿を失ふに至らざれども、東海は、長鯨の跋扈するに任かせ、世は愈よ多事に成つて來た。そこで、君は一擧して功名を建てむと志ざし、古しへの鬼谷先生といつた樣な人を尋ね、これに從游して、兵を言ふことを學び、石室の中に祕めて彼の陰符にも比すべき奇書を發見し、これを硏究した結果、すつかり、龍虎兩韜を會得して、自分の思ふ樣に之を運用することが出來るやうになつた。かくて、業成りし後は、燕地に駐箚する大帥に事へ、遠く去つて、三關の屯營に戍役して居た。もとより、窮北の地であるから、巖谷の間には、雨雪霏霏として降り灑ぎ、獸類は悲しげな聲を出して、每每夜もすがら鳴いて居る。在役中、劍を撫して、慷慨の餘りに淚を流したが、軍中に於て、名を知られることもな

く、奇勳も、遂に企圖し難きに因り、こんな處に居ても仕方がないと諦めて、南に歸つて、石頭城の近くに遣つて來た。石頭城は、要害堅固にして、形勢頗る壯、四方には山丘圍繞し、前面には大江が横はつて居る。しかし、吳國の末路、黃旗、一たび去りし後は、王氣頓に歇み、六朝紛奢の名殘として、亡國の遺曲たる彼の玉樹後庭花を唱へる聲も、全く沈んで聞こえた。日暮に臨滄觀に登つて、四邊を顧望すると、江山依然たれども、歲月すでに移り、懷古の情は、惻愴自ら堪へず、この間、時勢の向ふところを察して、禍機の近づくを認め、格別、故鄕の蓴羹を憶ふ譯でもないが、うかうかして居て、騷亂の渦中に卷き込まれては、それこそ大變だといふので、飄然として軍府に別れ、溧水を渡つて東行した。すると、惡い船頭などに付け覘はれたこともあつて、例の氣轉を利かし、衣を脫いで裸體になり、一緒に舟を漕いで、惡棍の出來心を解きほごし、どうやら無事に濟ますことが出來たのは、まことに物怪の幸であつた。さて愈よ立ち歸つて、故鄕の里門に入つて見ると、ここは、戰亂の餘、雜草あたりを掩ひ、舊宅は、住む人も換つて仕舞ひ、園中の池も荒廢したが、そこに注ぐ泉のみは、依然として淸冽である。と見れば、妻は瘦せ衰へて、破れ機の上に坐し、わらじ蟲の家の中に滿ちたるを如何しやうかといつて、頻りに嘆息して居る處であつた。夫の歸つたのを見て、出迎へはしたものの、先つものは淚で、笑顏を見するにも及ばず、わづかに殘りし豕を煮直して、食を進めるといふ始末。天下の事、日に非にして、家園寥落、かくの如く、おまけに、時運未だ會せざる上は、しばらく引ッ込んで居る方が善からうといふので、これより行役を止めて、靜かなる田園の中に、自ら耕して居た。むかし、一緒に徒步でてくッた連中で、拍子よく往つたものは、十年の間に、立身目ざましく、麾旌を擁して、大道せましと濶步するに反し、君は、鴻毛未だ順風に遇はず、一たび勢を失して、九霄の程を飛び度ることも出來ず、世に知音を以て稱すべき人だになく、四海の廣きも、孤獨にして寄る邊なきを嘆ずるばかり。齊門に立つて竽を奏すれば、暫時なりとも、食祿に有り付くが、それも、自分には出來ず、卞和の玉に比すべき才能を持ちながら、どうして之を有力者に捧呈しやうか。かうなれば、人に賴んで推薦して貰つたり、徵し出される樣に取計つて貰ふことも、厭である處から、傲然として、公卿輩に會釋するだけで、自分は世外の隱者だといつて威張つて居る。秋になれば、蕙花凋みて、こほろぎの聲、いとも悲しく、春になれば、桑が若芽を萌して、鶯が聲高に呼ばはる。門を閉ぢて閒居する間、歲月しきりに移り、壯心ひそかに驚くを禁せず、君が詩に作つて、詳しく述べられた自己の經歷は、ざつと此通り。かく申す小生も、矢張御多分に洩れず、今こそ、腐儒として無用の者であるが、これでも、むかしは、意氣崢嶸として、自ら任するところも、亦た素張らしく、これを小にしては、諸侯に遊說し、かの毛遂が銅盤を捧げて、楚王と合從の盟を締結したやうな事を遣らうと思ひ、これを大にしては、萬乘の天子を干し、經世の奇策を獻じ、登瀛洲といはれた唐初の十八學士の如く、像を畫かれたいと思つて居た處が、ままに成らぬは浮世の常、大浪は洶湧として、川原

の途を遮り、浮雲は幾重にも重なつて、帝京は何處とも分かず、はては、困んで屈原の如く、澤畔に行吟し、日暮、薜蘅の香草を摘み、それに思を寄せて、わづかに感懐を漏らして居る。今しも、自分は、貧賤であつて、かてて加へて喪亂の世に遇ひ、たださへ搖落の秋九月、きびしい霜が俄に下りて、枯れた幹莖をへし折るといふ樣な安排。さはれ、君子の心では、おのが道窮まつて、轗軻不遇であれば、愈よ其身を愼んで、その節を變せず、おのが志を世に施すことが出來ぬ上は、軒裳などは、何の必要もない。かりそめに草廬を出ぬは、全く此操守の爲めであつて、もし一たび出たならば、見事、天下を統一して、再び昇平の世とすることに決まつて居る。今朝、君に逢つたのは、まことに嬉しく、幸ひ酒ありしに因り、前楹に對して、獻酬した。折しも、風日はじめて澹沲、のどけき春も、漸く氣色立ち、櫻桃は細かな花を一ぱい著けて居た。おのが意に愜へるにも拘はらず、一醉だにせず、こせこせとして、悲愁に纏はるのは、まことに愚なことで、萬一、至道に達した人が見たならば、大笑して、冠の紐をも切ることであらう。

【餘論】 我酒且緩傾の四句は總敍で、全篇を提起し、以下宋克その人の經歷を述べた。少爲二鬪雞兒一より脫レ帽呼二輸贏一に至るまでは、少年時代の事。及レ壯家已破より迴臨石頭城に至るまでは、兵を學びし後、一たび燕地に至り、やがて志を得ずして南旋したことで、前に引いた列朝詩集所載の小傳に「天下の亂るるを見、握奇の陣法を學び、將に、北、中原に走り、豪傑に從つて事を計らむとし、道梗がつて、周流合ふところなし」とあるに符合する。石頭何壯哉より臨レ危釋二猜萌一に至るまでは、金陵、卽ち南京に遊び、遂に飄零して歸里したことで、青邱の作れる南宮生傳に「遂に大江を溯つて、金陵に遊び、金華・會稽の諸山に入り、瓌怪を蒐覽し、浙江を渡り、具區に汎んで歸る」とあるのと同じ事柄を述べたのである。歸來訪二鄉閭一より壯魄空潛蟄に至るまでは、家居岑寂の境で、南宮生傳には「家居、氣節を以て聞こゆ。衣冠、これを慕ひ、爭ひ往いて迎候す。門に車を止む、日に數十兩、生、亦た善く交はり、貴賤となく、皆身を傾けて與に相接す」とあるのと、互に表裏を爲し、なほ壯心の鬱勃たるを見るべきである。顧余雖二腐儒一より嚴霜折二枯莖一に至るまでは、青邱自身の閱歷を述べ、顧聞君子心の六句は、爾我二人の志望を寫し、所二以苟不一レ出、出則時當レ平の十字は、その抱負の尋常ならざるを察し得る。今晨喜レ逢レ君の八句は、今日の良會を追記し、あとから詩を寄せて來たから、それに酬いて此篇を作つたといふことも、直に推測される。この詩は、青邱の五古中、稀に見るところの長篇であつて、句烹字鍊、まさしく、その絕技を逞しうしたものである。

蕭鍊師鷹窠絕頂丹房

蕭鍊師、鷹窠絕頂の丹房

人間不レ可レ住。混濁同二腐腥一。　人間、住すべからず、混濁、腐腥を同じうす。

（一）一落三十年。塵夢無由醒。　一たび落つ三十年、塵夢、醒むるに由なし。

（二）稍聞方士說。恍惚通仙靈。　稍く方士の說を聞けば、恍惚として、仙靈に通す。

（三）羨門與（四）偓佺。相期餌（五）芝苓。　羨門と偓佺と、相期して芝苓を餌す。

自顧眞病鶴。秋風墮（六）疎翎。　自ら顧るに、眞に病鶴、秋風、疎翎を墮す。

碧海不得渡。煙霧愁冥冥。　碧海、渡るを得ず、煙霧、冥冥を愁ふ。

（七）師從（八）天姥來。身佩（九）豁落經。　師、天姥より來り、身に豁落經を佩ぶ。

不邀（一〇）五利寵。深棲鍊（一一）神形。　五利の寵を邀へず、深棲、神形を鍊る。

東觀（一二）鷹窠峰。中天挿（一三）孤青。　東、鷹窠峰を觀れば、中天に孤青を挿む。

其下（一四）吐浴日。其高（一五）罣飛星。　その下、浴日を吐き、その高きこと、飛星を罣く。

昔有（一六）學道侶。（一七）井臼遺（一八）巖扃。　むかし道を學ぶの侶あり、井臼、巖扃に遺す。

愛茲絶俗地。遂爾留（一九）軒轔。　この絶俗の地を愛し、遂に爾かく軒轔を留む。

太鼎生紫煙。丹成衞（二〇）天丁。　太鼎、紫煙を生じ、丹成つて、天丁衞る。

（二一）金骨坐可蛻。騎（二二）龍駕風霆。　金骨、坐して蛻すべく、龍に騎して、風霆に駕す。

積水浮（二三）方壺。東望類（二四）點萍。　積水、方壺に浮び、東望、點萍に類す。

（二五）紫臺白玉榜。中有（二六）眞人庭。　紫臺白玉の榜、中に眞人の庭あり。

（二七）飛遊願從師。往讀（二八）新宮銘。　飛遊、願はくは師に從ひ、往いて讀まむ、新宮の銘。

【字解】【一】一落三十年　一たび此世に落ち來つてから三十年になる。【二】稍聞　次第に聞く。【三】羨門　卷三、秋懷に見ゆ、古しへの仙人羨門高。【四】偓佺　仙人の名、搜神記に「偓佺は、槐山採藥の父なり、好んで松實を食し、能く飛行して走馬に逮ぶ」とある。【五】芝苓　靈芝と茯苓、抱朴子に「鄴芝は、赤蓋白莖、上に兩葉三實あり、これを服すれば長生す」とあり、神仙傳に「黃初起、妻子を棄て、初平に就いて學び、ともに松脂茯苓を服し、五百歲に至つて、能く坐在立亡、日中を行くに影なし」とある。【六】疎翎　まばらに成つた羽。【七】師　舊錬師を指す。【八】天姥　山名、方輿勝覽に「台州に天姥山あり」と見ゆ、李白に夢游天姥吟といふ一篇がある。【九】豁落經　李白の訪道安陵詩に七元洞豁落とあつて、その注に「按ずるに、筆乃ち豁落と書するもの、道家の謂はゆる豁落斗なり」とあり、金檀の按に「雲素紫文、豁落流金の章あり」と記してある。これだけでは、聊か不明であるが、豁落は、道家の咒文の樣なもので、豁落經は、道家の常に諷誦する經文といふことであらう。【一〇】五利　史記武帝本紀に「天子、欒大を見て大に悅び、先づ小方を驗し、棊を鬪はしむ、棊、自ら相觸擊す、乃ち拜して五利將軍となす」とある。【一一】神形　心神と形骸。【一二】鷹窠峰　題義の條を見よ。【一三】孤青　孤立せる一堆の青。【一四】吐浴日　水に浴する日を吐き出す。【一五】罣飛星　星は挂ける。【一六】學道侶　攜李詩繫考に「紫霄眞人譚峭、幼にして道を好み、名山に游び、辟穀養氣の術を得たり。酒を飲んで醉ひ、杖に扶けられて獨游し、夏は烏裘を服し、冬は絺布衫を衣、或は風雪中に臥す。かつて、化書を著して、宋齊邱に授く。邱、竊んで己の有と爲さむと欲し、醉うて革囊中に縫ひ、これを江に投ず。金山の漁者、得て之を剖く。峭が方に醒めて、目を張るを見る。曰く、齊邱、わが化書を奪ふ、今盛に行はれむ。後、廬山の棲隱洞に住す。李後主、果りに辟して建康に至らしめ、號を紫霄眞人と賜ふ。又南嶽に居て、丹を鍊る。丹成る。青城山に入つて、化して去る。海鹽に譚仙嶺あり、相傳ふ、是れその藥を採り道

を得る處」とある。【一七】井臼　水を汲む井と米を搗く臼、即ち生活の要具。【一八】巖扃　扃はとぼそ、とびら。巖室に同じ。【一九】軒軿　釋名に「軿は屛なり、四面屛蔽、輧に同じ」とある、ともに車。【二〇】衞天丁　天上の仙丁が来て番をする。雲笈七籤に仙眞列侍、衞丁衞レ軒とある。【二一】金骨坐可蛻　金骨は堅い骨、蛻は拔殼となつて出る。李白の感興に西山玉童子、使三我鍊二金骨一とあり、神仙傳に「王方平死す、三日夜、忽ち其屍を失ふ、衣冠解けず、蛇の蛻するが如きのみ」とある。【二二】騎龍　集仙錄に「天使降るとき、鸞鶴千萬、衆仙畢く集る、高きものは鸞に乘じ、次は麒麟に乘じ、次は龍に乘ず」とある。【二三】方壺　卷一、將進酒に見ゆ、海上三山の一。【二四】點萍　一點の浮萍。【二五】紫臺白玉榜　江淹の恨賦に紫臺稍遠とあり、王勃の白鶴寺碑に玉榜晨舒とある。仙人の居る樓臺で、その前に白玉の立札がある。【二六】眞人　仙人に同じ。【二七】飛遊　空中を飛行する。【二八】新宮銘　蘇軾の游羅浮山詩に聚仙正草新宮銘とあつて、その注に「夢に新宮銘を書するものあり、云ふ、紫陽眞人山玄卿撰」とある、仙人の書いた銘辭。

【題義】蕭鍊師は、有德の道士であらうが、その傳などは、全く分からぬ。鷹窠は山名、沈季友の檇李詩繫考に「鷹窠山は、海鹽縣南に在り、前は瀲湖に臨み、後は大海に枕す、上に菴あり、雲岫といふ」とある。丹房は、仙丹を鍊るところの室。すると、この詩は、鷹窠山の絶頂に在る蕭鍊師の仙丹を鍊る室に題したのである。

【詩意】この世は、どうも住まふ價値がないので、混濁の者が、一處に居て、腐敗腥羶の氣を蒸し出して、まことに堪まらない。予は、生まれてから三十年の久しきを經、依然塵土の夢を見つづけて、まだ醒める便もない。だんだん、方士の話を聞くと、恍惚として、神仙靈妙の城に通じたやうな氣がして、羨門高の如き、偓佺の如き、古しへの仙人と相期して、靈芝茯苓を食し、長生を得ることが出來さうに思はれた。しかし、自ら顧れば、病鶴が秋風に遭うて疎翮を落したるが如く、仙山を尋ねむと欲するも、碧海渺漫として渡るを得ず、ただ煙霧が愁を籠めて冥冥たるばかりである。近ごろ、蕭鍊師は、天姥山から此地に來られ、身には尊い道家常用の御經を佩びて居られるし、その人と爲り、高潔にして、むかしの五利將軍の如く、帝寵を邀ふることを爲さず、深く引ッ込んで、心神形骸を鍊つて居られる。鍊師が初めて此に來られた時、東に向つて、鷹窠峰を見ると、中天に一堆の靑を揷むが如く、山は巍然として獨立し、その下からは、東海に浴した出日を吐き、その高い處は、流星を挂ける位。むかし、仙道を學んで仲間の譚峭といふものが、此に住んで居たとかいふので、日常生活の要具は、その儘、巖室に殘つて居る。鍊師は、その絶俗の地たるを愛し、遂に其車を駐めて、そこに住まふことになつた。かくて、太鼎には紫煙を生じて、仙丹が漸く出來上ると、天上よりは、神丁を遣して、その番を致させられ、これを服すると、さしもの堅い骨も容易に蛻出し、やがて龍に跨つて、風雷を自由に驅使すべく、見わたせば、萬里の積水には、三神山の一たる方壺が浮び出で、東望すれば、さながら、一點の浮萍かと疑ふばかり。その方壺には、立派な樓閣が竝び峙ち、前に白玉の立札があつて、その中は卽ち眞人の居るところである。願はくは、天上を飛行して、わが鍊師に隨ひ、そして、その地に在る新宮の銘を讀みたいものである。

【餘論】趙甌北が云へる如く、靑邱に神仙の風骨ありしことは、李白に類似し、この詩の如きは、ま

さしく道家の有り難きを鼓吹して、はるかに、その響を接するものである。はじめには、おのれ、仙を學ぶ志あるも、未だ其便を得ざるを云ひ、次に蕭鍊師の道德を詳述し、結二句、又自己を拉して鍊師に結びつけ、その結構は、極めて緊健である。その中、太鼎生紫煙の四句は、鍊丹の祕を道ひ得て、復た餘蘊なきものである。

隨月圖

月に隨ふの圖

空齋無短檠。愁度新涼夜。　空齋、短檠なく、愁へて新涼の夜を度る。

青天素娥出。餘輝獨堪借。　青天、素娥出で、餘輝、獨り借るに堪へたり。

達曙願徘徊。莫逐秋河下。　曙に達するまで、願はくは徘徊し、秋河を逐うて下る莫れ。

【字解】【一】空齋　人なき書齋。【二】短檠　檠は燭臺。【三】素娥　月を云ふ、李商隱の詩に青女素娥俱耐冷、月中霜裏鬪嬋娟とある。【四】餘輝　餘光に同じ。【五】徘徊　いざよう立ち去らずに居る。【六】秋河　銀河に同じ。

【題義】南史に「齊の江泌、月に隨つて書を讀み、月光斜なれば、書を握つて屋に升る」とあつて、隨月とは、月の移り行くに隨つて、おのが居る處を易へ、月光で書を讀むといふことで、この詩は、卽ち其狀を畫いた圖に題したものである。

【詩意】家貧にして、空齋の中、短檠だになく、折角讀書に適したる新涼の夜を如何にして過ごさうかと心配して居た處が、幸にも、青天の上に、明月高くさし上り、その餘光を借りて、どうやら、書物を讀むことが出來た。願はくは、曉天に達するまで、月は、いざようて徘徊し、天の河の斜なるを逐うて沈み落つる樣なこともなく、同じ處に居て欲しいものである。

【餘論】結二句は、多少の新らし味もあるが、全體に於ては、未だ好詩を以て許すべきものではない。

映雪圖

雪に映ずるの圖

簷雪不能掃。留映寒牕白。　簷雪、掃ふ能はず、留めて、寒牕に映じて白し。

書字細如蠅。坐看還歷歷。　書字、細、蠅の如きも、坐し看れば、還た歷歷たり。

華燈照歌帳。誰似南隣客。　華燈、歌帳を照らす、誰か南隣の客に似たる。

【字解】【一】簷雪　軒に積りし雪。【二】不能掃　掃は拂ひ落す。【三】書字　書物の文字。【四】還歷歷　どうやらはつきりと見える。【五】華燈照歌帳　綺麗に飾り立てた燈火が、佳人が倚り添うて歌つて居る銷金帳を照らすといふこと。富貴の家の有樣をいふ。事文類聚に「陶穀、党家の姬を得たり、冬日、雪水を取つて茶を煎る。姬に謂つて曰く、党家、この風味を識るや否や。姬曰く、彼粗人、安んぞ此を得む、但だ能く銷金帳底、淺斟低唱、羊羔の美酒を飲むのみ」とある。【六】南隣客　卽ち孫康を指す。

【題義】これも同じく南史に「梁の孫康、家貧にして、油なく、常に冬月雪に映じて書を讀む」とあ

る其故事を畫いた圖に題したのである。

【詩意】軒端に積つた雪は、なかなか掃ひ落す譯には行かず、これを殘して置くと、寒窻に映じて、極めて明るい。されば、書物の文字は、蠅の如く細小であつても、その窻下に就いて見ると、どうやら、はつきりして讀むことが出來る。富貴の家では、この夜、華燈煌煌として、銷金の帳を照らし、佳人が歌を唱へて豪興を縦にして居て、南鄕の窮客の此有樣とは、丸で似てもつかぬことである。

【餘論】これは、前首と相對し、その畫は、まさしく雙幅を爲すべく、詩品も、亦た伯仲の間に在る。

顧榮廟　　顧榮の廟

晉侍中顧彥先有墓幷祠。在長洲之東。久而廢爲淫祀。縣令周君復之。爲賦此詩。

【訓讀】晉の侍中顧彥先、墓幷に祠あり、長洲の東に在り、久しうして廢して淫祀と爲る。縣令周君、之を復す。爲に此の詩を賦す。

(一)軍司(二)吳國秀。(三)機神夙超朗。　軍司、吳國の秀、機神、夙に超朗。
(四)弱冠遊(五)洛師。已蒙(六)南金賞。　弱冠にして洛師に遊び、すでに南金の賞を蒙る。
(七)崎嶇諸王幕。(八)沈湎務(九)遵養。　諸王の幕に崎嶇し、沈湎、遵養を務む。
中罹(一〇)廣陵艱。(一一)計服匪誠枉。　中ごろ、廣陵の艱に罹り、服を計る、誠に枉げたるに匪す。
風雲一揮扇。(一二)義旅(一三)臻同響。　風雲、一たび揮扇、義旅、同響に臻る。
(一四)事成恥言勳。飄然理歸鞅。　事成つて、勳を言ふを恥ぢ、飄然として歸鞅を理む。
(一五)晉社始東遷。(一六)羣賢悉收獎。　晉社、はじめて東遷、羣賢、悉く收獎。
(一七)道謁眞感會。(一八)矯翼(一九)丹霄上。　道謁、眞に感會、翼を矯ぐ丹霄の上。
(二〇)德聞一代稱。跡泯(二一)千齡往。　德は聞こえて、一代に稱せられ、跡は泯びて、千齡往く。
(二二)時屯乏(二三)良佐。(二四)英謨益堪想。　時屯にして、良佐に乏しく、英謨、益す想ふに堪へたり。
墳祠託荒郊。蕭條竝榛莽。　墳祠、荒郊に託し、蕭條、竝に榛莽。
(二五)蕘童侵(二六)雨隧。(二七)淫巫(二八)闖(二九)塵幌。　蕘童、雨隧を侵し、淫巫、塵幌に闖す。
(三〇)大夫過(三一)停轅。(三二)式瞻爲(三三)含愴。　大夫、過ぎて轅を停め、式瞻、爲に愴を含む。
衣冠復故貌。(三四)筵几陳(三五)新享。　衣冠、故貌に復し、筵几、新享を陳す。
(三六)寡劣忝鄕人。因歌表(三七)遐仰。　寡劣、鄕人を忝うす、因つて、歌うて遐仰を表す。

【字解】【一】軍司　晉書顧榮傳に「元帝、江東に鎭し、榮を以て軍司となし、散騎常侍を加へ、凡そ謀畫するところ、皆以て諮る」とある。【二】吳國秀　吳地の秀才。【三】機神朗悟　同傳に「榮、機神朗悟」とある、心の働きが高超瑩朗なること。【四】弱冠　少年の頃。【五】洛師　洛陽の師、張華を指す。【六】南金貴　南方の黃金で、まことに貴いものだといつて賞せられた。晉書薛兼傳に「兼少にして、紀瞻・閔鴻・顧榮、賀循と名を齊しうし、號して五儁と爲す。はじめ、洛に入る。司空張華、見て之を奇として曰く、皆南金なり」とある。【七】倚幄諸王幕　諸王は、惠帝の時の八王、榮は其幕に入つたが、兎角數奇で、志を得なかつたといふこと。晉書顧榮傳に「趙王倫、位を篡し、榮を以て長史となす。倫の敗るるに及び、榮、執へられ、將に誅せられむとす。かつて、炙を執るに昭はせしもの、督率となるに因つて、遂に之を救ふ。齊王冏、召して大司馬主簿となす。冏、權を擅にして驕恣、榮、禍を懼れ、終日昏酣、府事を綜せず。冏の誅せらるるに及び、長沙王乂、驃騎となり、復た榮を以て長史となす。乂敗る。成都王穎の丞相從事に轉す。帝、西、長安に遷るや、徵して、散騎常侍となす、世亂を以て應ぜず、遂に吳に還る」とある。【八】沈湎　酒に耽ること、顧榮傳に「恒に酒を縱にして酣暢、友人張翰に謂つて曰く、惟だ酒、以て憂を忘るべし、但だ病を作すを如何ともし難きのみ、と。冏、以て中書侍郎となす、職に在つて復た酒を飮ます。人或は之を問うて曰く、何ぞ前に醉うて後に醒むるや、と。榮、罪を懼れ、乃ち復た更に飮む」とある。【九】務遜養　詩經に遜榮時晦とあつて、世に順適して一身の安全を謀ること。【一〇】廣陵艱　廣陵の相陳敏が反を爲せしこと、その詳は、後に注す。【一一】詭服匪誠任　顧榮が陳敏に服從したのは、一時の權宜で、衷心から其節を枉げたのではない。【一二】義旅　義軍に同じ。【一三】躡同轡　その至ること轡の響に應ずるが如しといふ意。【一四】事成　顧榮傳に「東海王越、兵を徐州に聚め、榮を以て軍諮祭酒屬となす。廣陵の相陳敏、反し、南、江を渡り、刺史劉機・丹陽內史王曠を逐ひ、兵を阻てて州に據り、子弟を分置して列郡となし、豪傑を收禮し、孫氏鼎峙の勢あり。榮に丹陽內史を假す。榮、周玘・甘卓・紀瞻と潛に謀り、兵を起して敏を攻む。敏、萬餘人を率ゐて出でしが、濟ることを獲す。榮、揮ふに羽扇を以てす。その衆潰散す。事平らいで吳に還る」とある。【一五】晉社始東遷　晉の社稷が東南に遷つた、卽ち元帝が江東に鎭せしことを云ふ。【一六】羣賢悉收奬　羣賢を收錄推奬して、これを登庸せむことを元帝に請うた。顧榮傳に「元帝、江東に鎭す。榮言ふ、陸士光・甘季思・殷慶元・榮の族兄公讓・會稽の楊彥明・謝行言・賀生・陶恭兄弟、諸人は皆南金なりと。書奏す、皆これを納る」とある。【一七】遭際眞感會　途中で元帝に拜謁したのは、眞に風雲の感會と稱すべきものであるといふ意。【一八】矯翼　翅を揚げて飛び起つ。【一九】丹霄　大空の上。【二〇】德聞一代稱　顧榮傳に「吳郡內史殷浩の牋に曰く、故の散騎常侍安東軍司嘉興伯顧榮、德を經し、道を體し、謀猷弘遠、忠貞の節、困に在つて逾よ厲、毎に社稷を惟ひ、密に腹心に結び、謀を同じうして計を致す。信、羣士に著はれ、名、東夏に冠たり、德聲振ふところ、響應せざるなし。榮、躬、矢石に當り、衆の爲に率先し、歷年の逋寇、一朝土崩、兵刃に血ぬらずして六州を蕩平す、勳、上代よりも茂に、義、天下に彰はる」とある。【二一】千齡往　千年を經過した。【二二】時屯　剝下の時勢窮迫せしこと。【二三】良佐　よき輔佐。【二四】英謨　謨は謀に同じ。【二五】蕘童　草刈りの童。【二六】雨隧　隧は墓道、地を穿つてトンネルの如くなつて居る。そこに雨が漏るから、雨隧と云つたのである。【二七】淫巫　淫祠の巫女。【二八】闐　亂入する。【二九】塵幌　塵に塗れた神前の帳。【三〇】大夫　縣令周君を指す。【三一】停轅　轅はながえ、車を停める。【三二】式瞻　式は禮をする、瞻は見上げる。參詣する。【三三】含愴　感慨愴然たること。【三四】薦几　神前の數物と祭器。【三五】新享　新しき供物。【三六】寡劣　德寡く才劣る、作者自ら謙して云ふ。【三七】遐仰　はるかに仰止する、世を隔てて仰慕する。

【題意】引の意味は晉の侍中顧榮、字は彥先といふ人の墓と祠とは、長洲の東に在つたが、歲月すでに久しく、いつしか廢して淫祠となつて仕舞つたのを、今次、縣令の周某といふものが、これを古しへに復したから、爲に此詩を作つた——といふのである。顧榮の事は、詩中に見え、從つて字解の中に詳しく述べてあるから、ここに再び贅するに及ばぬことと思ふ。

【詩意】軍司の職に居た顧榮は、もと吳地の秀才であつて、早くより機神超朗、もとより尋常に度越して居た。少年の頃、洛陽に遊び、張華に師事した時、南金の如く貴いものだといつて褒められた。

その後、諸王の戎幕に入つたが、毎毎數奇で、意の如くならず、わざと酒に沈湎し、時勢に順適して其身を全うせむことを務めて居た。中ごろ、廣陵の叛亂に際し、服從を計つたのは、一時の權宜で、まことに、中心から其節を枉げた譯でもなく、やがて、兵を起し、羽扇を揮つて、風雲を叱咤すれば、義軍の爭ひ至ること、響の聲に應ずるが如くであつた。しかし、事成りし後は、功勳を言ひ立てることを恥ぢ、飄然車に乘つて、故國に歸つて仕舞つた。次いで、晉の社稷が東遷せし時は、しきりに羣賢を收錄推奬し、又道に於て元帝に拜謁し、君臣の感會、世に類なく、はては、翼を大空の上に揚げて雄飛した。その德は、世に聞こえて、一代に稱せられたが、遺跡泯滅して、すでに千年を經過した。今しも時勢窮迫、然るべき輔弼の眞相に乏しき折柄、公の英謀は、益す追想するに堪へる。公の墓や祠は、荒れた岡に倚り添うて居たが、いつしか蕭條として、榛莽に埋もれ、草刈りの童は、雨の漏る墓道に侵し入り、淫祀の巫女は、塵に染みたる神前の戶ばりを揭げて、勝手な事をするといふ始末で、まことに歎はしい事であつた。さきに、縣令の周君は、ここを過ぎて、墳廟に參拜し、まのあたり、荒廢せる有樣を見ると、愴然として悲を含み、乃ち改めて元の通にし、廟中の遺像の衣冠も、むかしの姿に復し、筵几には新しい供物を列ねて、祭を修せられた。予は、德寡く才劣ではあるが、忝くも、顧公と同鄕の生まれだといふ緣故に因り、この歌を作つて、隔世仰止の誠を表する次第である。

【餘論】起首より英謨益堪想に至るまでは、顧榮の閱歷人物を敍し、墳祠託荒郊以下は、縣令周某の修治より、ここに歌を作つた次第を述べ、仍つて、題意を完うしたのである。李舒章は「謝康樂に似たり」といつて居るが、その感慨淋漓の處を稱したのであらう。

停君白玉卮
君が白玉卮を停む

停君白玉卮。聽我前致辭。
君が白玉の卮を停めて、聽け我が前んで辭を致すを。

家本吳門市。英風慕要離。
家は本と吳門の市、英風、要離を慕ふ。

少年貧無行。鄕里不相推。
少年、貧にして行なく、鄕里、相推さず。

喜過毛公舍。懶下董子帷。
喜んで、毛公の舍を過ぐるも、董子の帷を下すに懶し。

偶從岸頭侯。跨鞍赴邊陲。
偶ま岸頭侯に從ひ、鞍に跨つて邊陲に赴く。

欲邀深入勳。終然計無奇。
深入の勳を邀へむと欲するも、終然、計、奇なし。

歸來冠側注。始學窺書詩。
歸り來つて、側注を冠し、はじめて、書詩を窺ふを學ぶ。

稍通鄒魯生。盡謝燕趙兒。
稍く鄒魯の生に通じ、盡く燕趙の兒に謝す。

焉知事益謬。空言竟難施。
焉んぞ知らむ、事、益す謬り、空言竟に施し難きを。

布衣走路傍。但爲衆所嗤。
布衣、路傍に走り、但だ衆に嗤はる。

廷中忌(一三)賈誼。門下誣(一四)張儀。
廷中、賈誼を忌み、門下、張儀を誣ふ。

(一五)二子豈不辯。未能免讒疑。
二子、豈に辯ならざらむや、未だ讒疑を免るる能はず。

嗚呼今之人。孰解容不羈。
嗚呼、今の人、孰れか不羈を容るるを解せむ。

我將棄浮名。垂釣東海湄。
我、將に浮名を棄て、釣を東海の湄に垂れ、

長笑調(一六)魯連。高歌酌(一七)安期。
長笑、魯連を調し、高歌、安期に酌まむとす。

素心儻有合。豈要餘子知。
素心、もし合ふあらば、豈に餘子の知を要せむや。

【字解】【一】白玉巵　白玉で造つた酒盃。【二】要離　吳越春秋に「要離は吳人。闔廬、慶忌が鄰國に在つて、萬人の勇あるを懼り、諸侯を合して、以て吳を害せむことを恐る。伍子胥、要離を進む。要離、乃ち詐つて罪を得て出奔す。吳王、その妻を取つて、市に焚棄す。要離、途に衞に如き、慶忌を見て曰く、闔閭の無道、王子の知るところ。今、吾が妻子を戮して、これを市に焚き、罪なくして誅せらる。吳國の事、吾、その情を知る。願はくは、王子の勇に因つて、闔閭得べきなり、と。慶忌、その謀を信じ、士卒を練り、遂に吳に之く。將に江を渡らむとす、中流に于て、要離、力微なり、慶忌を上風に坐せしめ、風勢に因り、矛を以て其冠を鉤し、風に順つて慶忌を刺す。慶忌、顧みて之を揮ひ、三たび其頭を水中に捽し、乃ち膝上に加へて曰く、天下の勇士なり、乃ち敢て兵を我に加ふ、と。左右、これを殺さむと欲す。慶忌、これを止めて曰く、豈に一日にして、天下の勇士二人を殺すべけむや。吳に還り、以て其忠を旌せしむべし、と。ここに于て、慶忌死す。要離、江を渡り、慭然として行かず、從者に謂つて曰く、吾が妻子を殺して以て吾が君に事ふ、仁に非ざるなり。新君の爲にして故君の子を殺す、義に非ざるなり、と。乃ち自ら手足を斷ち、劍に伏して死す」とある。【三】無行　行狀の宜しからざること。【四】鄕里不相推　同じ鄕里の者が推賞しない。【五】毛公舍　史記信陵君傳に「公子、趙に處士毛公あつて博徒に藏れ、薛公は賣漿の家に藏ると聞き、乃ち間歩し、兩人に從つて游ぶこと、甚だ歡ぶ」とある。【六】董子帷　漢書に「董仲舒、博士となり、帷を下して講誦し、三年、園を窺はず」とある。【七】岸頭侯　漢書に「張次公、勇悍軍に從ひ、深く入つて功あり、岸頭侯に封ぜらる」とある。【八】深入勳　史記李將軍傳に「李陵、善く射り、士卒を愛す。天子以爲へらく、李氏、世、將たり、と。而して、八百騎に將たらしむ。かつて深く匈奴に入ること二千餘里、居延を過ぎ、地形を視、見るところなくして還る」とある。【九】計無奇　奇は人の思ひつかぬこと。工合よく有效的にすることが出來なかつた。【一〇】冠側注　史記朱建傳に「沛公、兵を引いて陳留を過ぐ。酈生、軍門に踵りて上謁す。使者入つて通ず。沛公曰く、何如なる人ぞや。曰く、狀貌、大儒に類す、儒衣を衣、側注を冠す。沛公曰く、わが爲に之に謝して言へ、われ方に天下を以て事と爲す、未だ儒人を見るに暇あらざるなり」とあつて、その注に「側注冠、一名高山冠、齊王の服して以て謁者に賜ふところ」とある。【一一】鄒魯生　鄒は孟子の故里、魯は孔子の生まれた處、兩地とも、後世でも儒學が盛であつた。鄒魯の書生といへば卽ち儒士、庾信の哀江南賦に里爲冠蓋、門成鄒魯とある。【一二】燕趙兒　韓愈の送董邵南序に「燕趙は古しへ感慨悲歌の士多しと稱す」とある。【一三】忌賈誼　卷一、放歌行の條にも見えて居たが、史記賈誼傳に「賈生、年二十餘、最も少しとなす。詔令の議下る每に、諸老先生、言ふ能はず、賈生、盡く之が對を爲す。天子、公卿の位に任ぜむことを議す。絳灌・東陽侯・馮敬の屬、盡く之を害とし、乃ち賈生を短つて曰く、洛陽の人、年少初學、專ら權を擅にし、諸事を紛亂せむと欲す、と。ここに于て、天子、亦た之を疏んじ、乃ち以て長沙王の太傅となす」とある。【一四】誣張儀　史記張儀傳に「かつて、楚相に從つて飲む。すでにして、楚相、璧を亡ふ。門下、張儀を意うて曰く、儀、貧にして行なし、必ず此れ相君の璧を盜みしならむ、と。ともに張儀を執へ、掠笞數百、服せず、これを釋るす。その妻曰く、嘻、子、書を讀んで游說する毋くば、安んぞ、この辱を得むや。張儀、その妻に謂つて曰く、わが舌を視よ、尙ほ在りや不や。その妻笑つて曰く、舌在る

なり。儀曰く、足れり」とある。【二五】二子　賈誼と張儀とを指す。【二六】調魯連　調は戯れる、からかふ、史記魯仲連傳に「魯連、逃れて海上に隱れて曰く、吾、富貴にして人に屈せむよりは、むしろ貧賤にして世を輕んじ、志を肆にせむ」とある。【二七】酌安期　安期は仙人の名、漢書郊祀志に「李少君曰く、臣、かつて海上に游んで安期生を見る、安期生、臣に棗を食はしむ、大、瓜の如し、安期生は仙者、蓬萊に通ず、中合へば見はれ、合はざれば隱る」とあり、曹唐の小游仙に侍女親擎二玉酒巵一、滿巵傾レ酒勸二安期一とある。

【題義】停二君白玉巵一は、この詩の起句を取つて假りに題としたので、大體は、少壯の頃、游俠從軍に次いで學を修めたが、不幸にして成功せず、どうも、この世界は面白くないから、東海の濱に隱遯しやうかといふ意を述べたのである。

【詩意】君が手にする白玉の巵を暫く停めて、予が今進んで辭を致すを聽いて呉れろ。わが家は、本と呉門の市に在つて、夙に要離の英風を慕つて居た。少年の頃は貧乏で、從つて行狀宜しからざるに因り、郷里の者どもも、決して推賞して呉れず、毎に喜んで毛公の如き隱れたる名士を訪問し、そして、董仲舒の如く、帷を垂れて勉學することは、どうも厭であつた。兎角する内、偶然にも、岸頭侯の如き偉い將軍に從ひ、鞍に跨つて、邊庭に出かけ、深く敵地に入つて、偵察の功勳を立てむとし、有效的で、うまく行くやうに計畫したが、矢張失敗して仕舞つた。それから、歸つて來ると、儒者の被る側注冠を戴いて、はじめて詩書の片端を窺ひ、次第に、鄒魯の書生と交際し、燕趙悲歌の士とは、あまり往復せぬやうに成つた。かくの如く、儒を業として、この身を立てやうと志ざしたものの、世事益す謬り、空言遂に施し難く、止むなく、布衣を著て、路傍に奔走し、衆人に笑はれることを免れなかつた。むかし、賈誼は、新進の少年を以て、在廷の老臣輩に排斥せられ、張儀は、璧を盗んだらうといつて、楚相の門下に讒せられた。賈誼といひ、張儀といひ、濡れ衣を乾さうとして、辯解したには相違ないが、それでも、讒誣の爲に、退けられるといふ始末。ああ、今日擧世の人は、誰か不羈の俊才を容れることを理解して居るか、さういふ人は全く無いから、仕方がない。そこで、予は、實と相副はざる浮名を棄て、東海の濱に赴いて釣を垂れ、長笑して魯仲連にからかひ、高歌して安期生に酒を注いで遣り、全く此世を忘れて居たいと思ふ。そこで、萬が一、素心相合ふ様な眞正の知音があつたならば、それで澤山、あとの人人からは知られるにも及ばない。

【餘論】起首四句は總提、少年貧無レ行より終然計無レ奇に至るまでは、はじめ游俠を事とし、次いで邊塞に從軍せしことを敍し、歸來冠二側注一より孰解レ容二不羈一に至るまでは、一旦決然、儒を學び、しかも、遂に世に容れられざるを述べ、我將レ棄二浮名一以下の六句は、超然高踏、全く世外に遨遊したいといふ其志望を逗露したのである。その中、焉知事益謬の四句は、士の不遇に道及し、感慨淋漓、結末數句の杳然として神遠きと相俟ち、自然映照の妙を極めて居る。

讀レ史　史を讀む

周衰禮樂廢。大道成二榛[一]菅一。　周衰へて、禮樂廢し、大道、榛菅を成す。

嬴秦任商君。王制欲盡刪。　嬴秦は商君に任じ、王制、盡く刪らむと欲す。

厚賦山澤空。亟戰原野殷。　厚賦、山澤空しく、亟戰、原野殷なり。

頽波自茲靡。千秋去無還。　頽波、これより靡け、千秋去つて還るなし。

誰云重華駕。邈矣難仰攀。　誰か云ふ、重華の駕、邈たり、仰ぎ攀ぢ難しと。

於焉誦其書。如造揖讓班。　ここに其書を誦すれば、揖讓の班に造るが如し。

安得鳳凰鳥。飛下浮雲間。　安んぞ得む、鳳凰の鳥、浮雲の間より飛び下るを。

【字解】【一】榛菅　雜木をいふ、韓愈の詩に登料幽桂遺榛菅とある。【二】嬴秦　秦は嬴姓なるが故に云ふ。【三】商君　名は鞅、衞の人、秦の孝公に說いて、新法を行ひ、秦をして初めて富國强兵の實を擧げしめた。その詳は、史記の本傳に見ゆ。【四】王制欲盡刪　王制は、周室の制度で、卽ち周公の創意に係るもの、商鞅は、盡く之を刪り去らうとした。史記商君傳に「小都鄕邑聚を集めて縣となし、令と丞とを置く、凡そ三十一縣、田の爲に阡陌封疆を開く」とある。商君の新法の根本は、從來の封建を廢して、新に郡縣の制度を布くことに在つた。【五】厚賦　租稅を重くする。【六】山澤空　山澤の間が無一物となる。【七】亟戰　屢ば戰ふ、戰爭の打續くこと。【八】原野殷　左傳成公二年に「左輪朱殷」とあつて、その杜注に「血の色、久しければ殷」とある。殷は赤黑い色。戰爭の爲に、血が原野に流り、赤黑い色に見える。【九】頽波　世運頽敗の風潮。【一〇】重華　舜の本名。【一一】誦其書　舜の書といふから、卽ち書經の舜典を指すのであらう。【一二】如造揖讓班　拜讓して禮を爲す、當時の大臣輩の班列に交つた樣な氣がする

【題義】ここの史は、三代より戰國に至る間、つまり先秦の歷史であつて、或は史記の中なる其部分を指したのかも知れない。

【詩意】周室が衰微して、禮樂いつしか廢し、大道も埋れて、滿目の榛菅となつて仕舞つた。秦では、商君を任用して、從前の王制を盡く刪り去るが爲に、新に郡縣の制を布き、租稅を重くせし爲に、山澤の間、無一物となり、戰爭絕えずして、原野は血で赤黑く成つて仕舞つた。これより、世の風潮は、頽れた波の靡くが如く、千年の後まで、一去して、再び還ることはなかつた。しかし、王道を古しへに復することは、必ずしも望ない事でも無いので、舜の車は、邈として、仰いで攀づることも出來ないといふものの、ここに、虞書を讀んで見ると、さながら、この身、當時揖讓せる大臣輩の班列に厠つた樣な想がする。されば、再び太平の治に復し、鳳凰が浮雲の間より下つて、王廷に來儀する樣な至治の世の祥瑞を見たいものである。

【餘論】起首より千秋去無還に至るまでは、新法の弊、長しへに後世に被及せることを痛嘆し、誰云重華駕以下は、亂世を濟ふこと、必ずしも不可能ではないといつて、一縷の希望を其間に繫いだのである。

雜詩

朝臨高堂上。俯視崇岡(一)下。　朝に高堂の上に臨み、俯して崇岡の下を視る。
(二)春暉何悠悠。清川自東瀉。　春暉何ぞ悠悠たる、清川、自ら東に瀉ぐ。
(三)陽和發卉(四)物。時(五)澤均(六)播灑。　陽和、卉物を發し、時澤、均しく播灑。
如何及芳(七)辰。蕭條但空野。　如何か、芳辰に及び、蕭條、但だ空野。
(八)願言釋拘(九)局。登高騁吾馬。　願はくは、言に拘局を釋て、高きに登つて吾が馬を騁せむ。
曠途不見人。憂心何由(一〇)寫。　曠途、人を見ず、憂心、何に由つてか寫かむ。
(一一)興謝固其常。吾將尤(一二)誰者。　興謝、もとより其常、吾、將に誰者を尤めむとする。

【字解】【一】崇岡　高い岡。【二】春暉　春の日影。【三】陽和　春の氣。【四】卉物　植物。【五】時澤　時を得た潤澤、うるほひ。【六】均播灑　平均して播き亙つて居る。【七】芳辰　よき季節。【八】願言　言はここにと訓すべし。【九】拘局　拘束局促、束縛に同じ。【一〇】何由寫　寫は除く。【一一】興謝　興亡榮枯に同じ。【一二】尤誰者　何人を咎める。

【題義】この首は、格別、題を設ける必要がないから、雜詩としたのであるが、槎軒集には、春日言懷に作つてあつて、その方が、兎に角、明確である。

【詩意】朝に高堂の上に立つて、高い岡の下なる平郊一帶の地を眺め下すと、春の日影は、悠悠として長閑けく、清川の流は、東に向つて注いで居る。陽和の春の氣は、草木を發生せしめ、時を得たる滋潤は、偏頗なく行き亙つて居るのに、如何なれば、この好季節に際し、野は空しくして、物さびしげに見えるのか。願はくは、ここに束縛を釋き棄て、吾が馬を走らして、高きに登つて見たい。しかし、その路すがら、徒に廣漠として、人の往來するものなく、憂心を除くことも出來まい。元來、榮枯盛衰は、この世の常で、今さら驚くに及ばず、誰をといつて咎めることも出來ない。

【餘論】空野の蕭條は、まさしく劫後の光景であつて、治亂は世の常、どうにも仕方がないといふ意を述べたものと見るが至當であらう。

池上雁

池上の雁

(一)野性不受(二)畜。逍遙戀江渚。　野性、畜を受けず、逍遙して江渚を戀ふ。
(三)冥飛惜未高。偶爲弋(四)者取。　冥飛、惜むらくは、未だ高からず、偶ま弋者に取らる。
幸來君園中。華(五)沼得遊(六)處。　幸に君が園中に來り、華沼、遊處を得たり。
雖蒙惠養恩。飽飼貸庖(七)煮。　惠養の恩を蒙ると雖も、飽飼、庖煮を貸す。
終焉懷慙驚。不復少容(八)與。　終焉、慙驚を懷き、復た少らくも容與ならず。
耿耿宵(九)光遲。槭槭(一〇)寒響聚。　耿耿として宵光遲く、槭槭として寒響聚まる。

風露秋叢陰。孤宿斂二殘羽一。　風露、秋叢の陰、孤宿、殘羽を斂む。
豈無二鳬與一レ鷲。相顧非二舊侶一。　豈に鳬と鷲となからむや、相顧るに舊侶に非ず。
朔漠饒二燕雲一。夢澤多二楚雨一。　朔漠、燕雲饒く、夢澤、楚雨多し。
遐鄕萬里外。哀鳴每延佇。　遐鄕、萬里の外、哀鳴、每に延佇。
猶懷二主恩深一。未レ忍二輕遠擧一。　猶ほ主恩の深きを懷うて、未だ輕しく遠擧するに忍びず。
儻令レ寄二邊音一。申報聊自許。　もし邊音を寄せしむれば、申報、聊か自ら許す。

【字解】【一】野性　自然の儘の性質。【二】不受畜　人に飼養されない。【三】冥飛　空を飛ぶ。【四】弋者　射ぐるみで鳥を捕る人、この二句は揚子法言に「鴻、冥冥に飛ぶ、弋者其れ何ぞ慕はむ」とあるを轉用す。【五】華沼　立派な池。【六】遊處　遊び且つ居る。【七】貸庖煮　やがて厨で料理される迄の命を貸して置く。【八】容與　落ち付いてのんきに居る。【九】宵光　夜の光、卽ち月を指す。【一〇】槭槭　六書故に「槭槭は、借りて以て落葉の聲を狀す」とあり、杜甫の詩に蕭槭寒籜聚とあり、正韻に「蕭槭は卽ち蕭瑟なり、古しへ、瑟の字を借用す、蕭瑟は卽ち槭槭なり」とある。【一一】鳬與鷲　鴨とあひる。【一二】朔漠　朔北の沙漠。【一三】燕雲　燕地の雲。【一四】夢澤　書經集傳に「雲夢の澤は、江南に在り」と見ゆ。【一五】楚雨　楚天の雨。【一六】遐鄕　遙なる地域。【一七】延佇　首を延ばして佇み眺める。【一八】遠擧　遠くに飛び去る。【一九】寄邊音　邊地の音信を寄せる。漢書蘇武傳に「常惠、使者に敎へて言はしむ、天子、上林中に射て雁を得たり、足に帛書を繫ぐあり、言ふ、武等、某の澤中に在り」と記し、輟耕錄に「零落風高恣レ所レ如、歸期回レ首是春初、上林天子援二弓繳一、窮海纍臣有二帛書一。中統十五年九月一日放レ雁、獲者勿レ殺、國信大使郝經、書二于眞州忠勇軍營新館一、親繫二雁足一而縱レ之。虞人、これを苑中に獲て以聞す、上、惻然たり、遂に師を進めて、南、越を伐つ、二年、宋亡ぶ、今に至つて、祕監帛書、倘ほ存す」とある。【二〇】申報　報を申べる、報告を傳へる。

【題義】池上に飼はれて居る雁を詠じたのである。

【詩意】雁は、もと自然の野性の儘で、決して、人に飼はれるものでなく、天水の間に逍遙して、江水の渚を特に眷戀して居た。しかし、天上に飛行することが高くなかつたばッかりに、偶ま、弋者に生捕られ、幸に君の園中に來て、立派な池で游んで居る。かくの如く、惠養の恩を蒙つて居るのは、まことに有り難いが、實は、十分に餌を與へて之を飼養し、やがて、臺所で料理するといふので、それまでの命を貸してあるに過ぎぬ。おもうて、此に至れば、甄かしく又驚く念慮のみが、いや增して、しばらくも落ち付いて居ることが出來ない。耿耿たる月は、遲く照らし、槭槭として寒げなる響は、此に聚まり、秋の末、殊に淒涼なる折しも、風露蕭蕭たる草陰に、獨り宿して、殘れる羽を疊んで、睡つて居る。同じ池の中には、鳬だの、鷲だのが居るが、相顧るに、皆舊日の仲間ではない。朔北の沙漠には、燕地の雲深く立ちこめ、雲夢の澤中には、楚天の雨多く降りしきり、一は北、一は南、ともに住み慣れた處であるが、今は、なかなか萬里の外なる遠境となり、再び往かうと思つても、六づかしく、悲しげに鳴き叫びつつ、首を延ばして、その方を眺めるのみである。しかし、今日まで飼養して具れた主恩の厚きを思ひ、輕しく飛び去るに忍びず、矢張、愚圖愚圖して居る。もし邊地へ音信を寄せられるならば、それを傳へることは、屹度、相違なく致す積りである。

【餘論】池上の雁の窮苦なる境涯を憐んで、これに同情を寄せたので、風露秋叢陰の四句は、阿堵傳神の妙がある。結末二句は、どうか自分に出來ることを命せられたいといつて矚望し、反照的に、刻下の境涯を寫し出したのである。

題綠綺軒

綠綺軒に題す

(一)幽抱時欲寫。帷中有鳴絃。　幽抱、時に寫さむと欲す、帷中に鳴絃あり。

一彈落一葉。庭樹坐蕭然。　一彈、一葉を落し、庭樹、坐に蕭然。

寂寂山水夜。迢迢河(二)漢天。　寂寂たり山水の夜、迢迢たり河漢の天。

憶聽鳥啼起。南軒人未眠。　憶ふ鳥の啼き起つを聽いて、南軒、人、未だ眠らざりしを。

【字解】【一】幽抱　清幽なる懷抱、幽思に同じ。【二】河漢　銀河、天の河。

【題義】古琴疏に「司馬相如、玉如意賦を作る、梁王、これを悅び、賜ふに綠綺の琴を以てす」とあつて、軒は卽ち此意を取つて名づけたのである。

【詩意】時に淸幽なる懷抱を寫さうと思ふと、幸にして、紗帷の中には、搔き鳴らすべき十三絃の琴があつたから、取り敢へず、之を彈じた。すると、一彈ごとに一葉が飄り落ち、庭の木も、見る間に淋しくなつて仕舞つた。山水は寂寂、銀河は迢迢たる秋の夜の淋しきにつけ、かつて、烏が啼いて起ち、南軒に倚つて半宵眠らず、矢張、琴を彈じて居た人ありしことを思ひ出して、轉た情に勝へなかつた。

【餘論】この詩は、五言八句、極めて簡單であるから、よく纏まつて居るが、稍や平板に失した嫌は無からうか。

答張山人憲

張山人憲に答ふ

聽君辛(一)苦詞。感我艱(二)難情。　君が辛苦の詞を聽いて、わが艱難の情を感ず。

(三)百年自有爲。安用文章名。　百年自ら爲すあり、安んぞ、文章の名を用ひむ。

雞鳴海(四)光動。車馬塵滿城。　雞鳴いて海光動き、車馬、塵、城に滿つ。

相逢無新舊。言(五)合意自傾。　相逢うて新舊なし、言合へば意自ら傾く。

奉觴置君前。長歌發哀聲。　觴を奉じて君の前に置き、長歌、哀聲を發す。

時乎苟未得。飮(六)此全其生。　時か、苟くも未だ得ず、此を飮んで、その生を全うせよ。

【字解】【一】辛苦詞　身生の辛苦を訴へた詩、戎昱の詩に且莫奏短歌、聽我辛苦詞とある。【二】艱難情　世途の艱難に

惱む我が心情。【三】百年　生涯。【四】海光　曉色に同じ。夜があけると、東海の方が第一に白むが故に云ふ【五】言合　雙方の言葉が合ふ。【六】飲此　此は上の觴を指す。

【題義】張山人は、列朝詩集に「張憲、字は思廉、山陰の人、才を負うて不羈、四方に薄游し、誓つて娶らず、郷里に歸らず。かつて、京師に走り、天下の事を創言す。衆、その狂に駭く。還つて、富春山中に入り、緇黃を混じ、以て自ら放にす、一日、高きに升つて遠きを望み、所親を呼んで曰く、亟に去れ、と。三日にして、外寇猝に至り、兵死する五百餘、家、はじめて生の言を用ひざるを悔ゆ。淮張、吳に據る、禮致して樞密院都事と爲す。吳亡ぶ、姓名を變じて杭州に走り、報國寺に寄食す。旦暮、一編を手にす、人、窺ふを得ず。死後、これを視れば、その生平作るところの詩なり」とある。この首は、張憲が詩を寄せたるに因つて、乃ち之に答へたのである。

【詩意】君の詩は、身生の辛苦を述べた文詞で、これを拜聽すると、同じく、世途の艱難に惱む我が心情を感發せしめる。しかし、人生百年、自然爲すことあるべく、區區たる文章の名譽などは、何にもならぬ。雞が鳴いて、曙光一たび動けば、車馬が往來し、紅塵は城中に滿つる。かくの如き多くの人の中でも、知己は極めて寥寥、唯だ相逢うて、新舊を論せす、互に話し合ふ言葉が逆ふなければ、意、自ら傾き、そこで、親友となる譯である。今しも、酒杯を奉じて、君の前に置き、君の詩に答へたる長歌を吟じて、覺えす、悲しげな聲を發した。しかし、風雲に際會する樣な時は、未だ得られぬから、せめて、この杯を傾けて、その生を全うし、そして、氣長に待つて居る外はなからう。

【餘論】百年自有レ爲の十字は、爾我二人、ともに當世に志あるをいひ、相逢無二新舊一の二句は、その莫逆の交を敍し、結末は、慰勉の意を述べ、起首に呼應して、酬答を全うしたのである。

澄景閣夜宴

王孫喜留宴。(一)(二) 開閣望明河。(三)(四)
是夕月微暈。(五) 涼風池上多。
棲禽翻暗叢。(六) 駭魚動圓波。
淸景厭絲竹。(七) 雅詠答高歌。(八)
尊酌願勿閒。(九) 良宵易蹉跎。(一〇)
預憂別在旦。(一一) 車馬層城阿。(一二)

澄景閣夜宴

王孫、喜んで留宴し、閣を開いて明河を望む。
この夕、月、微に暈し、涼風、池上に多し。
棲禽は暗叢に翻り、駭魚は圓波を動かす。
淸景、絲竹を厭ひ、雅詠、高歌に答ふ。
尊酌、願はくは閒なる勿れ、良宵、蹉跎し易し。
預め憂ふ、別、旦に在るを、車馬層城の阿。

【字解】【一】王孫　その人を尊んで云ふ、いくらか門地清要の意味もある。【二】留宴　留別の宴。【三】開閣　閣は高どの。【四】明河　銀河に同じ、歐陽修の秋聲賦に星月皎潔、明河在レ天と見ゆ。【五】微暈　うすく笠を被る。【六】暗叢　暗い藪。【七】淸景　涼秋月夜の景致淸絕なるをいふ。【八】雅詠　風流の題詠。【九】勿閒　休んで居てはならぬ。【一〇】蹉跎　事、志と違ふを

いふ。【二】在旦　旦は明朝。【三】層城阿　高き城壁の邊。

【題義】澄景閣は何處か、夜宴を催したのは誰か、ともに分からぬ。しかし、詩意を按ずるに、作者の相知れる貴公子が、遠遊の爲に留別の宴を催したから、その席上で賦したものであらう。

【詩意】王孫は、喜んで此に留別の宴を催された。時しも秋で、高どのを明け放しにすると、天の河さへ近く見える位。この夜、月は薄い笠を被り、涼風は池上を度つて、斷えず吹きわたり、宿禽は、時たま、飛び起つて、暗い藪に翻り、魚が駭いて跳ねると、波は圓い輪を爲して、岸の方に廣がつて行く。この清夜の景に對して、豪絲哀竹、人間の俗樂を弄するは、却つて、相應しくなからうと思はれ、ここに、雅詠を試みて、主人の高歌に奉答する次第。良宵は、兎角、差し障りの多いものであるのに、この團欒を爲せるは、まことに、嬉しい事で、どしどし、尊中の酒を酌んで、しばしも休まずに飲むが善い。唯だ愁に堪へないのは、明朝は、厭でも、お別れをせねばならず、君は、車馬を高い城壁の下に用意して、そこから、發程されるであらう。

【餘論】その內容は、極めて平凡なことで、格別面白い構想を試むる餘地もないが、是夕月微暈の四句は、敍景の語として、正に其妙を極めて居る。

贈馬冠軍

馬冠軍に贈る

一騎東方來。相逢新豐市。　一騎、東方より來り、相逢ふ、新豐の市。

自言讀父書。出身良家子。　自ら言ふ、父の書を讀み、出身、良家の子。

名在佽飛籍。蘭纓懸鹿盧。　名は佽飛の籍に在り、蘭纓、鹿盧を懸く。

曾爲魏其客。不作平陽奴。　かつて、魏其の客となり、平陽の奴とならず。

欲行渡狼河。直擒射鵰將。　行いて狼河を渡り、直に鵰を射るの將を擒にせむと欲す。

壯志忽蹉跎。秋風臥孤障。　壯志忽ち蹉跎、秋風、孤障に臥すと。

解裝出我筑。歌作變徵聲。　裝を解いて、我が筑を出さしめ、歌は變徵の聲を作す。

壚頭落日在。歌罷酒再行。　壚頭、落日在り、歌、罷んで、酒、再び行る。

相君本鳶肩。豈是沈淪者。　君を相するに、本と鳶肩、豈に是れ沈淪の者ならむや。

我亦方薄遊。低頭向人下。　我亦た方に薄遊、頭を低れて、人の下に向ふ。

有志事竟成。古人不欺余。　志あれば、事、竟に成ると、古人、余を欺かず。

留將一白羽。待射魯連書。　一白羽を留め將つて、魯連の書を射るを待て。

【字解】【一】東方來　鼙鼓行に東方千餘騎、夫壻居上頭とある。【二】新豐市　卷一、放歌行に見えて居たが、三輔舊事に「太上

畏、關中を樂まずして鄕里を思慕す。高祖、豐沛の屠兒沽酒煮餠の商人を徙し、立てて新豐となす」とある。その地は、長安の東に當り、相去ること遠からず、漢唐の間は、游俠の少年などが、毎毎貴游を事とした處である。【三】讀父書　史記趙奢傳に「趙括、徒に能く其父の書傳を讀み、變に合ふを知らず」とある。【四】出身　王昌齡の少年行に出身仕レ漢羽林郞とある。【五】良家子　漢書李廣傳に「廣、良家の子を以て、軍に從つて胡を擊つ」とある。【六】佽飛簿　漢書宣帝紀に「應募の佽飛射士を發して、金城に詣らしむ」とあつて、その注に「呂氏春秋、荊に茲非あり、寶劍を干將に得、江を渡る、中流にして、兩蛟、船を夾む、茲非、寶劍を拔き、江に赴き、兩蛟を刺して之を殺す。荊王、これを聞き、仕へしめ、以て珪を執らしむ。後世、以て勇力の官となす。茲、佽、音相近し」とあり、臣瓚注に「本と秦の左弋官なり、武帝、改めて佽飛となす」とある。いづれにしても、材武を以て仕ふる宮中護衞の武官と見える。【七】蘭纓　蘭の如き香氣を燒きこめたる紐、李賀の申胡子觱篥歌に朔客騎二白馬一、劍把懸二蘭纓一とある。【八】鹿盧　羅敷行に腰間鹿盧劍、可レ値二千萬餘一とある、劍の柄に鹿盧形の裝飾がある。【九】魏其客　卷一、結客少年場行に見えて居たが、史記列傳に「魏其侯竇嬰は、孝文后從兄の子なり、賓客を喜ぶ。建元六年、竇太后崩じ、魏其、勢を失ひ、諸客稍稍自ら引いて怠傲、唯だ灌將軍、ひとり故を失はず、魏其、日に默默として志を得ず、而して、獨り厚く灌將軍を遇す」とある。【一〇】平陽奴　卷一、行路難に見えて居たが、史記衞青傳に「青は平陽の人、その父鄭季、吏となつて、平陽侯の家に給事し、侯の妾衞媼と通じて青を生む。青の同母兄は衞長子、而して、姉は衞子夫、平陽公主の家、幸を天子に得てより、故に姓衞氏を冒す。少にして、その父に歸し、羊を牧せしむ。先母の子、皆これを奴畜し、以て兄弟の數と爲さず」とある。【一一】狼河　白狼河の略、李嶠の文に「遼東の壯傑、名、狼河を蓋ふ」とある。【一二】射鵰將　卷一、將軍行に見えて居たが、史記李將軍傳に「匈奴三人、中貴人を射傷す。廣曰く、これ必ず鵰を射るものならむ、と。乃ち三人に馳す。三人、馬を亡うて步行す、行くこと數十里、廣、身自ら二人を射殺し、一人を生得す、果して鵰を射るものなり」とある。【一三】解裝出我筑　卷二、擊筑吟に見えて居たが、史記刺客傳に「易水の上に至り、すでに祖して道を取る、高漸離、筑を擊つ、荊軻、和して歌ひ、變徵の聲を爲す、士、皆淚を垂れて涕泣す」とある。【一四】壚頭　壚は酒壚。【一五】再行　再びめぐる。【一六】相君本鳶肩　唐書馬周傳に「岑文本、所親に謂つて曰く、馬君は鳶肩火色、騰上必ず速に、恐らくは久しうすること能はざらむ」とあり、後漢書梁冀傳鳶肩の注に「鳶肩とは、上に竦するなり」とある。【一七】沈淪　窮境に沈む。【一八】薄遊　旅費不十分にして行游すること。【一九】有志事竟成　後漢書に「光武、耿弇を勞して曰く、將軍、前に南陽に在つて、この大策を建つ、常に以爲へらく、落落合ひ難し、と。志あるものは、事、竟に成るなり」とある。【二〇】一白羽　國語に「吳王、士卒萬人を陳し、以て方陣を爲す、皆白常白旍素甲白羽の矰、これを望めば荼の如し」とあつて、その注に「矰は矢の名、白羽を以て衞となす」とある。【二一】魯連書　史記魯仲連傳に「齊の田單、聊城を攻む、歲餘にして士卒多く死し、しかも、聊城下らず。魯連、乃ち書を爲り、これを矢に約し、以て城中に射り、燕將に書を遺る。燕將、魯連の書を見、泣くこと三日にして自殺す」とあり、李白の詩に仍留二一隻箭一、未レ射二魯連書一とある。

【題義】冠軍は、史記項羽本紀に「宋義、號して卿子冠軍となす」とあつて、その注に「卿子は、猶ほ公子と言ふがごとし。上將軍、故に冠軍と言ふ」とある。すると、馬冠軍は上將軍馬某であるが、その名字閲歷等は分からぬ。この詩は、靑邱が其人に贈つたので、これに依つて、その人物を知ることが出來る。

【詩意】一騎の武人が、東方から遣つて來て、新豐に比すべき小市に於て相逢うて面晤した。その人が自ら閲歷を述べて言ふには、少時、家に藏してある父親の遺書を讀んで、韜略を會得し、やがて、良家の子といふ資格を以て、出身して仕官した。そこで、宮禁護衞の武臣の名簿に記入せられ、腰間の鹿盧劍には、蘭纓を結んで、堂堂たる打扮である。かつて、魏其侯の樣な貴人の食客となり、その落ち目をさへ見屆ける覺悟であつて、平陽公主の家の奴僕が、偶然に立身する樣な眞似は爲なかつた。

次いで、塞外に從軍し、白狼河を渡つて、直に鵰を射る胡兵を生捕にしやうといふ意氣込であつたが、折角の壯志も、忽ち蹉跎して、おもふ様に成らず、今しも、秋風の吹く頃、孤障の中に獨り臥して、その身の不遇を嘆き詫びて居るとのことであつた。やがて、予に命じ、旅の荷物を解きほごして、筑を取り出さしめ、これを彈じ始めると、自分では、變徵の聲を出して、これに和する歌を唱へ出し、歌、すでに畢つて、酒が重ねて行る時、酒壚の邊には、夕日影が淋しく殘つて居た。ここに君の人相を見ると、肩は怒つて鳶の如く、決して、いつまでも、下僚に沈淪すべき人ではないし、予も亦た薄游を事とし、頭を低れて他人の下風に拜し、止むを得ず身を屈して居るものの、この儘、一生を終る積りではない。志あるものは、事、竟に成るといつた古人の言葉は、決して予を欺くものではない。されば、ここに、一本の白羽の征矢を留め置き、他日、魯仲連の如く、一書を以て容易に敵城を擧げ、不世の大功を立てる時もあらうと、それを心待にして居る。

【餘論】結末四句が、その本志の在るところで、予の如きものさへ、魯連の書を射て大功を立てむことを待つて居るから、君の壯圖、もとより知るべく、他日、雲蒸龍變、必ず大事業をするに相違ないから、兎に角、自重が肝腎であるといふのが、言外の餘意で、慰藉勸勉の意を逗露したのである。

送劉明府

劉明府を送る

賤士(一)寡諧世。放居(二)江海邊。
賤士、世に諧ふこと寡く、放たれて江海の邊に居る。

(三)朋儔漸(四)乖睽。憔悴不自妍。
朋儔漸く乖睽、憔悴、自ら妍ならず。

顧影鮮(五)歡趣。(六)惡離倍當年。
影を顧みて、歡趣鮮く、惡離、當年に倍す。

他人亦以悲。況復如子賢。
他人、亦た以て悲む、況んや、復た子の賢の如きをや。

(七)荒途(八)風霜交。(九)歲晏增慨然。
荒途、風霜交り、歲晏くして、增す慨然。

(一〇)亂雀噪叢棘。驚鴻(一一)逝長天。
亂雀、叢棘に噪ぎ、驚鴻、長天に逝く。

斗酒豈足陳。薄意聊以宣。
斗酒、豈に陳するに足らむや、薄意聊か以て宣ぶ。

出處道既殊。不得長(一二)周旋。
出處、道、すでに殊に、長しへに周旋するを得ず。

誰謂非(一三)遐方。浮雲阻山川。
誰か謂ふ、遐方に非すと、浮雲、山川を阻つ。

何以慰飢渴。(一四)令名期可傳。
何を以て飢渴を慰めむ、令名、期して傳ふべし。

【字解】【一】寡諧世　世間に持てることが少い。【二】江海邊　江湖上などいふに同じ、都を離れた僻境。【三】朋儔　仲間・同類。【四】乖睽　二字ともに、そむく。【五】歡趣　喜ばしき事柄。【六】惡離　都合の惡い別れ。【七】荒途　荒れはてた長途、亂後でもあり且つ秋冬の頃なるが故に云ふ。【八】風霜交　寒い風と霜とが一處に來る。【九】歲晏　歲が暮れる。【一〇】亂雀　飛び亂れる雀。【一一】逝長天　長天を飛び亙つて遠くに行く。【一二】周旋　盡力する。【一三】遐方　遠方に同じ。【一四】令名

立派な名譽。

【語義】容齋隨筆に「唐、縣令を呼んで明府となし、丞を贊府となし、尉を少府となす」とあつて、ここのも同義である。この首は、縣令劉某の赴任を送つて作つたのであるが、劉某の名字閲歴、及び任地等は、さつぱり分からぬ。

【詩意】予は貧賤の士で、世間に持てることが少く、放たれて江海の邊に居り、朋友輩も、次第に疎遠になり、顏色憔悴、紅顏の妍なるものでは無い。獨り淋しく、我が影を顧みて、愉快な事柄の少きを喞ち、反對に、都合の惡い別離は、昔日に倍して、愈よ多い。されば、他人であつても、別は悲しいのに、君の如き賢者に對しては、猾吏の事、悵然として殆んど堪へられない。君の行く手は、荒途の上、風霜相雜つて至り、歲、將に暮れむとして、一しほ悲慨を增すであらう。現に飛び亂る群雀は、藪の中に噪ぎ、驚いて叫ぶ征雁は、長天を亙つて、遠くに飛んで行く。斗酒は、陳するに足らず、そこで、いささか、詩を作つて、薄意を宣べ、それを以て、君を送るのである。君は仕官して、榮達したるに反し、おのれは、不遇にして田舍に燻つて居て、出處進退、その道、すでに殊なる上は、君の爲に、末長く盡力することも出來ない。君の赴任地は、遠方でないといふものの、浮雲は幾山川を阻てて、容易に行かれぬ。別後の相思は、飢渴の如く、何を以て之を慰めやうか、唯だ君が當代に雄飛して、立派な名譽を天下後世に傳へられることが出來るといふ其一事が、予に取つて、聊か滿足である。

【餘論】用筆周匝、旨意暢達、些の遺憾なきは、例の筆致であるが、相手は高が一縣令で、令名といつた處で、大したものではなく、全篇、辭令の妙を極めて居るが、煎じ詰めれば、尋常一樣口頭の辭に過ぎず、從つて、その存亡、必ずしも相關せざる底の作である。

暮歸

朝出雞始啼。暮歸烏欲棲。
我身本無(一)役。胡爲亦東(二)西。
徒步二十年。風埃(三)面空(四)黧。
入門聞鄰(五)杵。秋氣凜以淒。
芙蓉墜古沼。絡緯(六)鳴中(七)閨。
有(八)無了不問。歌吟夜燈(九)低。
富貴固有日。我志焉能迷。

暮歸

朝に出でて、雞始めて啼き、暮に歸つて、烏棲まむと欲す。
我が身、本と役なく、胡すれぞ、亦た東西。
徒步二十年、風埃、面、空しく黧す。
門に入つて鄰杵を聞けば、秋氣、凜以て淒たり。
芙蓉は古沼に墜ち、絡緯は中閨に鳴く。
有無、了に問はず、歌吟、夜燈低る。
富貴、もとより日あり、わが志、焉んぞ能く迷はむ。

笑向細君道。勿爲翁子妻。　笑つて、細君に向つて道ふ、翁子の妻と爲る勿れと。

【字解】【一】無役　役は行役、職務で旅行すること。【二】東西　あちらこちらを旅行する。【三】風埃　風塵に同じ。【四】面空黧　戰國策に「面目黧黑」とある。【五】鄰杵　鄰家の杵の聲、卽ち米を搗く聲。【六】絡緯　古今注に「莎雞に靑褐兩種あり、一名梭雞、一名絡緯。その聲、紡績織緯の如きを以てなり、一名促寒娘」とある、卽ちきりぎりす。李白の詩に絡緯秋啼金井闌とある。【七】中閨　閨中に同じ。【八】有無　財產の多寡。【九】夜燈低　燈火の心が次第に低くなる。【一〇】細君　漢書東方朔傳に「劍を拔き、肉を割く、亦た何ぞ壯なるや。歸つて細君に遺る、又何ぞ仁なるや」とある。おのが妻を呼ぶの稱。【一一】翁子妻　漢書朱買臣傳に「買臣、字は翁子、吳人なり。家、貧にして、讀書を好み、產業を治めず、常に薪樵を刈り、賣つて以て食を給し、束薪を擔ひ、行く〻且つ書を誦す。その妻、亦た負戴して相隨ふ。數ば買臣を止め、道中に歌嘔するなからしむ。買臣、愈よ益す疾く歌ふ。妻、これを羞ぢて、去らむことを求む。買臣笑つて曰く、われ年五十、當に富貴なるべし。今すでに四十餘、汝苦む日久し、わが富貴にして汝の功に報ずるを待て、と。妻、恚怒して曰く、公等の如きは、終に溝中に餓死せむのみ、何ぞ能く富貴ならむ、と。買臣留むる能はず、卽ち去るを聽るす」とある。

【題義】暮歸は、その字の通り、日暮おのが家に歸りし後の感想を敍したのである。

【詩意】朝に家を出たのは、雞の初めて啼く頃であつたが、暮に家に歸ると、烏が塒に宿らうとして居た。わが身には、もとより行役もないのに、如何なれば、かくも忙しげに、東西に驅け廻はつて居るのか。この身、徒步して活を爲すこと二十年、風塵の爲に、顏の色も黑くなつて仕舞つた。わが家の門に入ると、鄰家で米を舂く音が聞こえ、秋の氣は、凜然として、淒涼を極めて居る。今しも、蓮の花は古池に落ち、きりぎりすは閨中に鳴き、殊に物淋しい折から、われは、貧賤に甘んじて、物の有無などは、決して問ふことなく、夜もすがら、歌吟しつつ、燈火の低くうなだれる頃に及んだ。富貴は、もとより來るべき日もあるので、わが志は、決して迷はない。そこで、笑つて山妻を顧み、古しへの朱買臣の妻の如くなつては成らぬ、わが富貴にして汝の功に報ゆる其日を氣長に待つて居て吳れろといつた。

【餘論】芙蓉墜古沼の四句は、篇中の精彩である。靑邱の作は、每每、かういふ風に、起筆極めて平易であつても、中間に佳句を挾んで、その勢を振起する。笑向細君道の二句は、その妻を慰勉すると同時に、確乎たる自信に本づいたものと見える。

澹室爲吳君賦

澹室、吳君の爲に賦す

素士脫紈綺。澹然怡道心。　素士、紈綺を脫し、澹然として道心を怡ばしむ。

窮廬車馬絕。寒鳥下庭陰。　窮廬、車馬絕え、寒鳥、庭陰に下る。

酒外寡眞趣。琴中多古音。　酒外、眞趣寡く、琴中に古音多し。

閉門三日臥。風雪滿城深。　門を閉ぢて三日臥すれば、風雪、滿城深し。

【字解】【一】素士　純潔な尙ぶ人。【二】紈綺　紈は練り絹、綺は綾、ともに美服の材料。【三】道心　道を修むる心。【四】

窮廬　窮屈なる菴。【五】**多古音**　むかしの純雅なる清韻が多い、黄庭堅の詩に弾レ琴聞二古音一とある。【六】**閉門三日臥**　晁市曾の詩に袁公方臥レ雪、尺素及二柴荊一とあつて、これも、袁安の故事を暗用したのであらう。

【題意】呉君の名字閲歷は、例の通り分からぬ。この詩は、澹廬と號する呉某の幽居に題した詩である。

【詩意】呉君は、純潔を倘ぶ人で、今までは、紈綺の美服を著けて、世人に立ちまじつて居たが、一朝それを脱ぎ棄てると、澹然として、自ら道心に愜うて、喜ばしきを覺えた。その菴は、澹室と號し、狹くて窮屈ではあるが、門巷蕭條として、車馬の響も絕え、唯だ寒鳥が庭かげに下るのみである。平生他の樂なく、唯だ酒を飮み、琴を彈ずるだけで、酒外には眞の趣味なく、琴中には太古の雅音が多い。風雪、城中に深き時など、門を閉ぢて、偃臥すること三日の久しきに及び、絕えて來り妨ぐることもない。

【餘論】この首は、窮廬車馬絕の二句を流水の對と見れば、純然たる五律で、聲調全く諧合して居るし、殊に酒外の十字は、隱者に相應しき名聯である。なほ起結照應して、その結構は、極めて緊密である。

空明道人詩

空明道人の詩

我聞赤城東。仙嶠名委羽。
われ聞く赤城の東、仙嶠、委羽と名づく。

煙霞閉深洞。絕壁飛玉鼠。
煙霞、深洞を閉ざし、絕壁、玉鼠を飛ばしむ。

空明中有天。日月照瓊宇。
空明、中に天あり、日月、瓊宇を照らす。

昔人鍊丹成。自駕黃鶴擧。
昔人、丹を鍊つて成り、自ら黃鶴に駕して擧がる。

陳翁夙慕道。棲此求眞侶。
陳翁、夙に道を慕ひ、ここに棲んで眞侶を求む。

玄文夜長披。靈藥朝每茹。
玄文、夜、長しへに披き、靈藥、朝に每に茹ふ。

石室人不來。閒眠青蘿雨。
石室、人來らず、閒に眠る青蘿の雨。

于今定非死。飛游去何許。
今に定めて死せしに非ず、飛游して何許にか去る。

海上幾秋風。誰傳令威語。
海上幾秋風、誰か傳へむ令威の語。

【字解】【一】**赤城**　一統志に「台州府、梁には赤城と名づく。又赤城山は天台山に在り、石皆赤色、聳立して城の如し。孫綽の賦、赤城霞起以建レ標、卽ち此れ道書第六洞天」とある。【二】**仙嶠**　仙人の居さうな山。【三】**委羽**　山名、一統志に「委羽山は、黃巖縣南一十里に在り。山の東北に洞あり、世傳ふ、仙人劉奉林、ここに于て鶴を控へて輕く擧がる。鶴、かつて翮を墜す、故に名づく。道書、第三洞天となし、大有空明の地と號す」とある。【四】**玉鼠**　白い蝙蝠、李白の詩の序に「荊州玉泉寺山洞の白蝙蝠、大さ鴉の如し、仙鼠と名づく、千歲體白くして、雪の如し」とあり、又その詩に仙鼠如二白鴉一、倒挂二青溪月一とある。【五】**空明中有天**　委羽山を大有空明之地と號せしより云ふ。【六】**瓊宇**　字は堂宇、玉樓といふに同じ。【七】**慕道**　仙家の道を慕ふ。【八】**眞侶**　仙人

仲間。【九】玄文　仙家の經典。【一〇】羽毎茹　茹は食ふ。【一一】石室　洞窟。【一二】飛游　飛んで空中を游行する。【一三】令威語　洞仙傳に「丁令威は、遼東の人、少にして師に隨つて學び、仙道を得、分身して意の欲するところに任かす。かつて暫く歸り、化して白鶴となり、郡城門華表の柱頭に集まり、言うて曰く、我是丁令威、去レ家千載今來歸、城郭如レ舊人民非、何不レ學レ仙冢纍纍」とある。

【題義】空明道人は、委羽山に棲み、山を大有空明之地と號するに因り、それを取つて、自ら稱したものと見える。そして、詩を觀ると、陳姓なることは知れるが、名字等は一切分からぬ。この人は、仙を學び、やがて、死んだのであるが、青邱は、その跡を弔うて、特に此詩を作つたのである。

【詩意】聞けば、赤城山の東に、もう一つ委羽と稱する仙山があつて、煙霞深く立ちこめて、深洞を閉ざし、絶壁の間には、白い蝙蝠が飛んで居る。ここは、空明と號し、その中、別に一天を開き、日月は玉樓を照らして居る。かくの如き仙境であるから、むかし、劉奉林といふ人は、此處で仙丹を錬り、やがて、黄鶴に跨つて昇天したといふことである。陳翁も、亦た早くより仙家の道を慕ひ、ここに住んで、仙人仲間を求め、夜は更くるまで、仙家の經典を披讀し、朝は、いつでも靈藥を食ひ、ひたすら清修を事とし、巖洞には人の來るなく、靜に青蘿に雨の降り注ぐを見て眠つて居た。陳翁、すでに逝きしと雖も、定めて、死せしには非ざるべく、天上を飛行して、何處かへ往つたのであらう。その後、海上では、幾たび秋風の吹くに遇うたか、そして、彼の鶴に化せし丁令威の語を誰が態態傳へるであらうか。

【餘論】起首八句は、委羽山の勝概より延いて、むかし、劉奉林が此に仙を得たることを敍し、陳翁夙慕レ道の六句は、その相繼いで、此地に清修したることを述べ、于レ今定非レ死の四句は、その死、もとより死に非ず、早晩、その消息を得べきを豫期して居るといつて收束したのである。

九日無レ酒。歩至二西汀一閒眺

九日酒なし、歩して西汀に至りて閒眺す

高天無二游氛一（一）。秋氣自激肅（二）。
高天、游氛なく、秋氣、自ら激肅。

（三）離居時節變。霜降未レ授レ服（四）。
離居、時節變じ、霜降るも、未だ服を授けず。

蕭條野田間。（五）晨歩聊遠矚。
蕭條たる野田の間、晨歩、聊か遠矚。

（六）悠悠寒（七）川駛。（八）靡靡晴（九）巒矗。
悠悠として寒川駛せ、靡靡として晴巒矗たり。

菊叢有二清香一。木葉無二故綠（一〇）一。
菊叢に清香あり、木葉に故綠なし。

親朋去レ我遠。登レ高且連レ躅（一一）。
親朋、われを去つて遠く、高きに登つて、且つ躅を連ぬ。

孤懷誰知音。惆悵臨二水曲（一二）一。
孤懷、誰か知音、惆悵、水曲に臨む。

(一三)名酒不(一四)可尋。歸來掩茅屋。　名酒、尋ぬべからず、歸り來つて茅屋を掩ふ。

【字解】【一】遊氛　飄遊して居る氣、卽ち白雲。【二】激肅　冷氣極めて激に、人をして肅然たらしめること。【三】離居　故園を離れて獨居する。【四】未授服　詩經に九月授衣とある。ここでは、押韻の都合で、衣の字を服に換へたので、服は卽ち御冬の衣服。【五】晨步　朝早く散步する。【六】悠悠　長く盡きざる貌。【七】寒川駛　駛は急走する、尸子に「黃河龍門、駛流、竹箭の如し」とある。【八】瞭瞭　はつきり見える貌。【九】晴巒矗　司馬相如の上林賦に崇山矗矗とある。【一〇】故綠　むかしながらの綠色。【一一】遂躅　躅は跡。前年の跡を繼ぐ、卽ち前年と同じ處に往く。【一二】水曲　河の屈曲して居る處。【一三】名酒　茱萸の酒を指す。【一四】不可尋　得られぬこと。

【題義】九月九日には、高きに登り、茱萸を地に挿み、そして、酒を飲むので、さうすれば、一年中の災難を避けることが出來るといふのが、むかしからの言ひ傳へである。この首は、作者が客中に居て、九日、酒を得るに由なく、從つて、登高の興も催さぬ處から、ひとり步して河の西汀に至り、靜に四邊の風景を眺めて、その感慨を敍したのである。

【詩意】空は高く晴れて、飛び迷ふ一片の雲だになく、秋の氣は、自然冷かに、且つ人をして覺えず肅然たらしめる。身は、故國を離れて獨居し、そして、時節の推移に遇ひ、もう九月になつても、まだ冬を防ぐ綿入の用意だにない。この日、朝早く散步して、蕭條たる野田の間を過ぎつつ、遠く眺めやれば、寒江は、悠悠として、勢すさまじく流れ、晴れた山山は、くつきりして峙つて居る。あたりの草むらには、菊が咲き出でて、淸香を放ち、木の葉は、黃に枯れて、むかしながらの綠の色は、全く認められない。わが親友どもは、遠く相離れ、そして、例の如く、高きに登り、前年と同じ場所に往つて、酒を酌みかはして居るであらう。われは、客中に居て、孤懷寂寂、絕えて知音なく、ひとり惆悵として、河の屈曲して居る所に立ちつつ、水の深い處を眺め下して居る。名にしおふ茱萸の酒は、遂に手に入らねば、折角の佳辰も今さら詮なく、そこで歸つて來ると、茅屋を鎖して偃臥する外はなかつた。

【餘論】悠悠寒川駛の四句は、敍景の語として、かなり巧妙に出來て居て、いはば、この詩の生命である。

題倪雲林所畫義興山水圖　倪雲林畫く所の義興山水圖に題す

嘗(一)啜(二)陽羨茗。不遊陽羨山。　かつて、陽羨の茗を啜るも、陽羨の山に遊ばず。

(三)銅官結秀色。都在畫圖間。　銅官、秀色を結び、すべて、畫圖の間に在り。

(四)樊川醉遊處。(五)水榭依(六)沙樹。　樊川醉遊の處、水榭、沙樹に依る。

雲入縣城來。(七)溪流太湖去。　雲は縣城に入つて來り、溪は太湖を流れて去る。

我愛(八)雲林生。高歌無俗情。　我は愛す雲林生、高歌、俗情なし。

（九）石庭梅欲ㇾ發。須ㇾ放二酒（一〇）船一行。　石庭、梅發せむと欲す、須らく、酒船を放つて行くべし。

【字解】【一】暇　すする。【二】陽羨茗　一統志に「宜興の銅官山は、即ち古しへの陽羨、その地、茶を產す」とあり、茶譜に「唐の茶品、陽羨を以て上となし、建溪北苑は、未だ著はれざるなり」とある。【三】銅官　山名、一統志に「池州銅官の治、南唐に銅陵縣を置く、常州と形勢岡阜相屬し、林麓鬱然」とあり、李白の銅官山醉後詩に我愛銅官樂、千年未ㇾ擬ㇾ還とある。【四】樊川醉遊處　杜牧、字は牧之、樊川と號して居た。その樊川集に「李侍郎、陽羨に于て、泉石を富有す、牧、亦た陽羨に于て粗ぼ薄產あり」と記してある。【五】水樹　一統志に「荊溪の北に水榭あり、唐の杜牧、かつて此に寓し、詩あり、云ふ、一壑風煙陽羨里、解ㇾ龜歸去路非ㇾ賒」とある。【六】沙樹　江岸の木。【七】溪流太湖去　一統志に「宜興縣に百瀆あり、昔人、荊溪數郡の下流に居るを以て、太湖の口に於て百派を疏し、以て其勢を分ち、又橫塘を開いて之を貫き、荊溪を導いて、下、太湖に入る」とある。【八】雲林生　生は先生の略、雲林は即ち倪瓚、題畫の餘に注して置く。【九】石庭　石の多い庭、石は太湖石の屬であらう。【一〇】酒船　酒を載せた船、即ち游山船、李白の詩に稽山無二賀老一、却棹二酒船一回とある。

【題義】列朝詩集に「倪瓚、字は元鎭、雲林と號す、無錫の人。その先、貲を以て一郡に雄たり。元鎭、生產を事とせず、學を强め、好んで居るところを修す、閣あり、清閟と名づく、藏書數千卷、手自ら勘定す。性、潔を好み、盥類には水を易へ、冠服振拂、日に數十を以て計る。齋居前後の樹石、頻りに洗拭を煩はす。俗士を見れば、避け去つて、汙されむことを恐るるが如し。至正の初、天下無事、忽ち盡く其家產を鬻いで錢を得、盡く推して知舊に與ふ。人皆竊に笑ふ。兵、興るに及び、富豪盡く剽掠せらる。元鎭、扁舟箬笠、湖泖の間に往來す。人、はじめて、その前識に服するなり。洪武七年、元鎭年七十有四、はじめて鄉里に還り、その姻、鄒惟高の家に寓し、遂に鄒氏に死す」とある。雲林は、元代に於ける屈指の畫家であつた。また一統志に「常州府宜興縣は、秦の陽羨、晉の義興」とある。すると、この首は、倪雲林の畫いた義興山水の圖に題したので、雲林は、靑邱同時の先輩であるが、どうも、面識は無かつたらしい。

【詩意】かつて、陽羨に產する名茶を啜つたことはあるが、まだ陽羨の山に游んだことはない。陽羨の近傍には、銅官山があつて、林麓鬱然として、秀色凝結し、それが、すべて畫中に描き出されて居る。陽羨は、むかし杜牧が醉游した處で、その水樓は、江邊の樹に倚り添うて居る。かくの如く、陽羨の周圍には、山岡が聳えて居るから、雲は飛んで縣城に入ることもある。又縣內には、溪流が多く、その勢を分つ爲に、皆疏導して太湖に落ち込む樣になつて居る。雲林先生は、當代の畫手、その人物も自然超脫し、平生高歌して、毫も俗情なく、從つて、この畫も頗る面白く出來て居る。今しも、春の初、石多き庭の梅も將に綻びむとして居る頃で、これから、扁舟に酒を載せて、その地に往つて見たいものである。

【餘論】起首二句は、おのれ、未だ陽羨に遊ばず、仍つて、畫圖に於て之を見るといつて、徐徐に題に入つた處は、極めて宜しい。銅官結二秀色一の六句は、即ち畫中に描き出されたる陽羨の風光である。しかし、筆者倪雲林に就いて、高歌無二俗情一と云つただけでは、その畫が、どれだけの價値があるか、

毫も分からず、折角の名手に對する品隲が甚だ不十分であつて、とても、これをして九鼎太呂より重からしめるといふ樣な譯には行かぬ。石庭梅欲發の二句、平凡ではあるが、實際、その地に往つて見たいといつて、卽ち、一歩を拓開したものである。

錢孝子廬墓

錢孝子、墓に廬す

颯颯黃竹嶺。蕭蕭白楊村。
颯颯たり黃竹嶺、蕭蕭たり白楊の村。

行人亦悲哀。何況父母恩。
行人亦た悲哀、何ぞ況んや父母の恩をや。

不忍返華屋。結廬傍孤墳。
華屋に返るに忍びず、廬を結んで、孤墳に傍ふ。

啼猿應哭聲。日暮空山昏。
啼猿、哭聲に應じ、日暮、空山昏し。

無鄰與誰語。獨宿傷精神。
鄰なく、誰と語らむ、獨宿、精神を傷ましむ。

仰聞松柏吟。俛見狐兎奔。
仰いで松柏の吟ずるを聞き、俛して狐兎の奔るを見る。

淚灑墓前草。當春死芳根。
淚は灑ぐ墓前の草、春に當つて芳根を死せしむ。

至性有如斯。不愧忠孝門。
至性、かくの如きあり、忠孝の門に愧ぢず。

【字解】【一】颯颯　風の音をいふ。【二】白楊村　墓畔には多く白楊を植ゑるので、卽ち墓地をいふ、地名ではない。古詩に白楊多悲風、蕭蕭愁殺人とある。【三】華屋　立派な家。【四】死芳根　根から枯れて仕舞ふ。【五】忠孝門　題義の條を見よ。

【題義】錢孝子は、名字ともに不詳。原注に「錢吳越忠孝王の後なり」とある。萬姓統譜に「錢端禮は、俶が六世の孫。祖景臻、仁宗の公主を尙す、父忱、高宗の時、檢校少保に拜せらる。かつて、忠孝之家の四字を御書せらる。端禮、嘉定の初、左丞相となる」とあるから、孝子は、錢端禮の何代かの孫であつて、その人至孝、父母の歿後、その墓の側に廬を結んで、三年の喪を過ごしたといふので、青邱は、末世の今に奇特なる事として、乃ち此詩を作つたのである。

【詩意】名にしおふ黃竹嶺には、風颯颯として聞こえ、墓畔の白楊も、蕭蕭として打ち靡いて居る。この景色を見れば、路行く人だに、自然、悲哀の情を起すべく、父母の恩を感ずること深き者に於ては、猶更の事である。されば、錢孝子は、父母の葬を送りし後、立派な其家に歸る氣に成れず、廬を孤墳の側に結び、そこで、三年の喪を送ることにした。その哭聲の悲しきにつれて、啼猿、これに應じ、やがて、日暮るれば、空山昏くして、一しほに淋しい。しかし、鄰近處に家とてもなければ、語り合ふ人の有らう筈もなく、獨り此に宿して、精神を傷ましめ、その間、仰いでは、松柏の風に吟ずるを聞き、俯しては狐兎の走るを見るばかり。淚が斷えず墓前の草に注ぐと、春になつても、草は芽を出さず、その儘、根から枯れて仕舞ふ。錢孝子の至性、かくの如く、かつて、御書、その忠孝を

貫せられた名門の後裔たるに愧ぢず、まことに奇特な事である。

【餘論】仰聞松柏吟の四句は、悲痛の極、これが爲に、全篇が振起することは、言ふまでもない。

送蜀山人歸吳興。兼簡菁山靜者

蜀山人の吳興に歸るを送り、兼ねて菁山靜者に簡す

(一)南浦無碧草(二)。征鴻晨稍飛。　南浦、碧草なく、征鴻、晨に稍く飛ぶ。

何當杪秋(三)節。臨水送將歸。　何ぞ杪秋の節に當り、水に臨んで將に歸らむとするを送る。

既來不能淹(四)。君心應好違(五)。　既に來つて淹まる能はず、君が心應に違ふを好むなるべし。

(六)惻惻袂始判(七)。遙遙帆已微。　惻惻として袂始めて判ち、遙遙として帆すでに微なり。

天高桂樹落(八)。人在山中稀。　天高くして桂樹落ち、人は山中に在ること稀れなり。

還尋同袍者(九)。更製薜蘿衣(一〇)。　還た同袍の者を尋ね、更に薜蘿の衣を製せよ。

【字解】【一】南浦　江淹の別賦に送君南浦傷如之何とある。【二】碧草　綠草に同じ。【三】杪秋　杪は木の末端、即ち季秋。【四】不能淹　淹は滯留。【五】應好違　夙約に違ふ。【六】惻惻　心を傷ましむる貌。【七】袂始判　判は分かれる。【八】桂樹落　桂の花が散る。【九】同袍者　詩經に與子同袍とあつて、親友の義。【一〇】薜蘿衣　隱者の服、孟浩然の詩に翳山從此別、淚濕薜蘿衣とある。

【題義】蜀山人は徐賁、蜀山に居りしが故に云ふ。菁山靜者は張羽、菁山に隱れて居たのである。二人の事は、前に春日懷十友詩の條に、各その略傳を載せて置いた。元來、張羽は武林より吳に來り、吳興の山水を喜び、徐賁と共に、その地に卜居したのである。その頃、靑邱は吳淞江上に居たのであるが、ある時、徐賁が來訪し、そして、未だ幾ならざるに、歸つて仕舞つたから、この詩を作つて之を送り、且つ便を以て張羽に寄せたのである。簡は、書翰に代へて其人に寄する意。

【詩意】南浦の碧草、盡く黃ばみ、征雁は、朝から、ぼつぼつ飛んで行く。如何なれば、この晚秋の物さびしい期節に當り、水に臨んで、君の歸るを送らねばならぬか。君は、折角ここに來たのに、逗留することが出來ぬといへば、どうやら、違約を好まれるのであらうか。惻惻として、ここに袂を分てば、遙遙として、帆影は既にかすかに成つて仕舞つた。今しも、秋天高くして、桂花盡く散じ、山中に居る人も、至つて稀であるが、幸に親友の張羽が居るから、君は之を尋ねた上で、隱士に相應しい樣な、例の薜蘿の衣を調製されることであらう。

【餘論】起四句は、別時の光景。次の四句は、別に就いての感想。末の四句は、今後、徐賁が再び張羽と共に、高臥して居るだらうといつて、その歸後を想像したのである。

幼文約余與止仲同宿士明鶴瓢山房。爲試茶之會。余既入郭。而幼文已歸山中。士明亦往海上。止仲復以事不赴。士明姪元修。留余夜話。因賦是詩。以書耿耿

幼文、余と止仲と、同じく士明の鶴瓢山房に宿し、試茶の會を爲さむことを約し、余は既に郭に入り、而して、幼文は已に山中に歸る、士明も亦た海上に往き、止仲、復た事を以て赴かず、士明の姪元修、余を留めて夜話す、因つて是詩を賦して、以て耿耿を書す

(一)道人出未歸。(二)高士來復去。　道人、出でて未だ歸らず、高士、來つて復た去る。

(三)試茗失幽期。(四)寒齋成獨住。　茗を試みむとして、幽期を失し、寒齋、獨住を成す。

氷生(五)洗藥池。風動(六)懸瓢樹。　氷は生ず藥を洗ふの池、風は動く瓢を懸くるの樹。

賴有(七)阿咸賢。(八)玄談到天曙。　賴に阿咸の賢あり、玄談、天の曙なるに到る。

【字解】【一】道人　道敎を修行する人、ここでは止仲を指す。【二】高士　幼文を指す。【三】試茗　茶を試飲する、陸游の詩に試茗初看白乳新とある。【四】寒齋　鶴瓢山房を指す。【五】洗藥池　摘んで來た藥草を洗ふ池、趙師秀の詩に雲覆燒丹竈、花浮洗藥泉とある。【六】懸瓢樹　逸士傳に「許由、手に水を捧げて飲む。人、一瓢を遺る。飲み訖つて、木上に挂く、風吹いて聲あり、由、以て煩はしとなし、これを去る」とあり、錢起の謁許由廟詩に松上挂瓢枝幾變、石間洗耳水空流とある。【七】阿咸　阮咸。晉書阮籍傳に「咸、字は仲容、叔父籍と竹林の游を爲す」とあり、杜甫の詩に守歲阿咸家、椒盤已頌花とある。元修は、士明の姪なるが故に、阮籍の姪阮咸を以て之に擬したのである。【八】玄談　玄は道敎の根本。玄談は、卽ち道家の敎理に關する談話。李白の詩に淸論旣抵掌、玄談又絕倒とある。

【題義】　幼文は徐賁の字、止仲は王行の字。この二人は、前に春日懷十友詩に見えて居た。士明は李睿の字、王行に鶴齡山房記といふ一篇の文章があつて、その大要、吳城の東北に老氏の居あり、寧眞といふ。主者李君、名は睿、字は士明、淸愼、學を好む。その祖開翁の時、堂館を開く、その徒の四方より至るもの、戶外の屨、恒に數十兩。黃老師といふものあり、蜀の靑城山より來る、道氣崑峭、一堂盡く傾く。君、これを遇すること殊に謹む。居ること數月にして、去るを告ぐ、君、爲學の要を以て之に叩く。黃、歎じて曰く、子、誠に道に志ざすか、と。因つて之に語る云云。曁び一瓢を出して曰く、是れ我に從ふ幾百年、地を行くこと萬里に餘る。今以て汝に遺る。これを見ること、われを見るが如くせよ。これを勉めよ、と。君敬愛す。瓢の形、鶴に類す、遂に鶴を以て之に名づけ、幷せて、その室に題して鶴瓢山房といひ、仍つて以て自ら號とす、黃師を尊信するの意なり」とある。元修は、士明の姪だから、同じく李姓であらうが、これは字で、本名は分からない。この題の意味は——徐賁は予と王行との二人に約し、李睿といふ人の鶴瓢山房に一宿して、試茶の會を催さうではないかとい

つた。そこで、予は、その期日に、蘇州城に入つたが、徐賁は、すでに吳興の山中に歸つて仕舞ひ、主人の李睿も、何か所用があつたと見えて、海邊に至り、王行も事故の爲に遣つて來ない。すると、李睿の姪の元修といふものが、氣を利かして、予を山房に留宿せしめ、相手となつて、一夜を語り明かした。そこで、この詩を賦して、予が友を思ふ耿耿の誠心を書きしるしたのである。

【詩意】山房の主たる道人は、出たッ切り、未だ歸らず、吳興の高士は、折角この地に來たが、又立ち去つて仕舞ひ、折角の試茗會も、幽期を失し、約束も、ふいに成つて仕舞つた。予は之を知らなかつたから、ここに來て、淋しい山房に獨り住まつて居た。庭上を眺めると、藥草を洗ふ池にも、氷が張り詰め、瓢を懸けて置く木は、風に搖られて居る。幸にして、彼の阮咸に比すべき主人の姪が居て、心を盡して歡待し、玄を談じて天明に及び、孤寂の想を爲さずに濟んだのは、まことに、感謝すべき事である。

【餘論】前半四句は、ひとり山房を訪ひしことを敍し、氷生洗レ藥池の二句は、庭上見るところで、對仗精當、五律の中に入れても、翩翩として、愛誦を値する。頼有二阿咸賢一の二句は、元修に謝すると共に、諸人にして來り會し、よく夙約を踏んだならば、その逸興、又一しほであつたらうといふ意味を言外に含ませたのである。

晩憩靈鷲院池上

微雨過祇樹(一)。寺齋(二)涼已多。
臨流一就(三)盥。搖動滿池荷。
風後扇力輕。爐(四)中爐氣和。
慙非許(五)玄度。吟臥每來過。

晩に靈鷲院の池上に憩ふ

微雨、祇樹を過ぎ、寺齋、涼、すでに多し。
流に臨んで、一たび盥に就けば、搖動す滿池の荷。
風後、扇力輕く、爐中、爐氣和らぐ。
慙づ、許玄度に非ずして、吟臥、每に來り過ぐるを。

【字解】【一】祇樹　經律異相に「須達多長者、佛に白して言ふ、弟子、精舍を營み、佛を請うて住せしめむと欲す、惟だ祇陀太子の園あるのみ、廣さ八十頃、林木鬱茂、居るべし、と。太子に白す。太子、戲れて曰く、滿たすに金布を以てすれば、便ち當に相與ふべし、と。長者、金を出して八十頃に布く。精舍成るを告ぐ、凡そ千三百區、故に祇樹給孤獨園といふ」とあつて、寺域の義。【二】寺齋　寺中の齋房、卽ち方丈。【三】就盥　漱をする。【四】爐氣和　香爐の氣が和らぐ。【五】許玄度　續晉陽秋に「許詢、字は玄度、高陽の人、風情簡素。劉眞長、その情旨及び襟懷の詠を說び、每に曰く、清風明月、恨むらくは玄度なし」とあり、晉書謝安傳に「會稽に寓居し、王羲之、及び高陽の許詢・桑門支遁と游處す」とある。支遁は、當時の高僧。

【題義】姑蘇志に「靈鷲敎寺は、城の東北隅に在り」と見えて居る。この首は、日暮、靈鷲院に詣り、池邊に休憩した時に作つたのである。

【詩意】微雨は、寺域を過ぎて、暑熱を洗ひ去りし爲め、方丈の中、涼味が極めて多い。そこで、池に臨んで、漱をしやうとすると、池中の蓮の花が自然に搖り動いた。涼風、すでに吹き度りし後は、

扇も力強く使ふにも及ばず、立ちのぼる煙の中には、沈香の匂が自然に和らいで混入して居る。われは、當年支遁の友たりし許玄度の如き才もない癖に、この寺の住持と心やすきに因り、毎毎來り過ぎて、詩を吟じたり、横になつたりして、慙かしくもなく、勝手に振舞つて居る。

【餘論】この首は、極めて淺近といふ外なく、青邱の才を以てして、今少し、どうか成らなかつたかと思はれる。

贈談鬼谷數瞽師金松隱

鬼谷の數を談ずるの瞽師金松隱に贈る

我聞(一)鬼谷子。乃是古(二)仙眞。　われ聞く鬼谷子、乃ち是れ古しへの仙眞。

避世(三)青谿中。不汗戰國塵。　世を青谿の中に避け、戰國の塵に汗されず。

(四)著書十三章。當年授(五)儀秦。　書十三章を著し、當年、儀秦に授く。

二子不善用。竟皆(六)殺其身。　二子、善く用ひず、竟に皆その身を殺す。

(七)瞽師得異傳。相去逾千春。　瞽師、異傳を得、相去ること千春に逾ゆ。

不爲(八)從横說。談(九)數妙入神。　從横の說を爲さず、數を談じて、妙、神に入る。

往年客(一〇)南都。蓬門集(一一)朱輪。　往年、南都に客たり、蓬門、朱輪を集む。

(一二)下簾論(一三)玄理。驚動金陵人。　簾を下して、玄理を論じ、驚動す金陵の人。

歸來隱虞山。繞廬樹(一四)松筠。　歸り來つて、虞山に隱れ、廬を繞つて松筠を樹う。

誰言目(一五)無覩。內照靈光新。　誰か言ふ、目覩るなしと、內に照らして靈光新なり。

(一六)緬思(一七)大化根。生此下土民。　緬思す、大化の根、この下土の民を生ず。

起滅(一八)千萬途。孰能(一九)究其因。　起滅千萬途、孰れか能く其因を究めむ。

或愚(二〇)騁結駟。或賢被(二一)懸鶉。　或は愚にして結駟を騁せ、或は賢にして懸鶉を被る。

命也可奈何。(二二)天道誰疎親。　命なり、奈何すべき、天道、誰とか疎親。

世事愼守常。毋使徒(二三)紛綸。　世事、愼んで常を守り、徒に紛綸せしむる毋れ。

【字解】【一】鬼谷子　戰國の初の隱士で、蘇秦・張儀の師であつた處から、普通に縱横家の元祖として考へられて居る。しかし、郭璞の游仙詩に靑谿千餘仞、中有二一道士一、雲生二梁棟間一、風出二窓戶裏一、借問此何誰、云是鬼谷子、云云の一首を見ると、仙人の様でもあるので、要するに、その人物の存否は不明である。【二】仙眞　仙人、眞人、ともに等級上の差別であるが、ここでは併せて仙人と見れば宜しい。【三】青谿　琴書に「蔡邕、嘉平の初、青谿に入つて、鬼谷先生の居りしところを訪ふ、山に五曲あり、曲ごとに一弄を製す」とある。【四】著書十三章　隋書經籍志に「鬼谷子三卷、皇甫謐注」とある。【五】儀秦　蘇秦・張儀の二人。【六】殺其身　史記蘇秦傳に「齊の大夫、多く蘇秦と寵を爭ひ、人をして刺死せしむ」とあり、張儀傳に「張儀、魏に相たること一年、魏に卒す」とある。すると、その身を殺したのは、蘇秦だけであるが、ここでは、わざと大ざつぱに、此の如く云つたのであらう。【七】瞽師　盲

目の術師、金松隱を指す。【八】從横說　從横は卽ち合從連衡、六國一になつて秦に抗すると、六國が秦に服するとの兩途であつて、蘇秦は主として合從を謀り、張儀は連衡を以て秦の爲にした。王充の論衡に「蘇秦・張儀の從横、これを鬼谷先生に習ふ」とある。【九】談數　數理を以て說明する。【一〇】南都　南京。【一一】朱輪　大官貴の乘る朱塗の車輪。【一二】下簾　漢書王貢傳の序に「嚴君平、成都の市に卜筮す、わづかに日に數人を閱し、百錢を得て自ら養ふに足れば、肆を閉ぢ、簾を下して老子を授く」とある。【一三】玄理　玄妙なる眞理。【一四】松筠　筠は竹。【一五】目無覩　盲者なるが故に云ふ。【一六】緬思　はるかに思ふと訓すべし。【一七】大化根　大化は宇宙現象の變化、根は其根本。雲笈七籤に「不名の名、亡功の功は化の根なり」とあつて、卽ち宇宙の本體。【一八】千萬途　その經過が千差萬別なるをいふ。【一九】究其因　その原因を探究する。【二〇】騁結駟　四頭引の馬車を幾輛も率ゐて、勢よく馳せしめる。史記仲尼弟子列傳に「子貢、衞に相たり、駟を結び、騎を連れ、藜藿を排し、窮閻に入つて、原憲を訪ふ」とある。【二一】被懸鶉　鶉の羽毛がぶら下つて居る樣な襤褸を著る。荀子に「子夏、家貧、衣、懸鶉の若し」とある。【二二】紛綸　絲のこんがらかる樣に亂れること。【二三】天道誰疎親　天道は誰と疎にして誰と親なるか。史記伯夷傳に「天道親なし、常に善人に與す」とある。

【題義】王行の金松隱に贈つた序に「海虞に瞽丈夫あり、金君松隱といふ、その術、甚だ驗あり、士大夫、咸な之を稱道す」とある。これと詩中に言ふところとを併觀すると、金松隱は、鬼谷子の眞傳を得たりと稱し、卽ち鬼谷子の本領は區區たる縱横の術に在らずといひ、專ら數理を以て宇宙の解說を試み、そして、それを占筮に應用して、屢ば奇驗ありしに因り、かつて、南京に至りし時など、非常に王公大人から信仰されたといふので、青邱は、卽ち此詩を贈つたのである。

【詩意】聞くところに據れば、鬼谷子は、取りも直さず、古しへの仙人であつて、騷亂の世を避けて、青谿の中に隱れ住み、戰國の風塵に汚されなかつた。鬼谷子は、書十三篇を著し、その當時、蘇秦・張儀の二人に授けたが、二人は、これを善用せず、矢鱈に之を振り廻はして、得意であつた爲に、二人とも、遂に其身を殺すやうな事に成つて仕舞つた。然るに、盲人の金松隱といふものは、千年を隔てたる後世に於て、鬼谷子の別傳を得たと稱し、蘇張の如き縱横の說を爲さず、數理を談じて、その妙、神に入る程であつた。そこで、前年、南京に客游せし時など、寓居の蓬茂れる門には、大官貴人輩の朱塗の車輪が簇る位。そして、松隱は、簾を下し、端坐して、宇宙の玄妙なる眞理を論じ、南京の人どもを驚動せしめた。それから、引きかへして、虞山に隱居し、草廬を繞つて松竹を種ゑ、まことに物外の高人たるに負かなかつた。松隱は盲目で、何も見えないといふものの、心の内には、靈光が明かに照らして、光明赫灼、つまり、どんな物でも、心眼で見えるといふ次第。おもへば、大化の根本、卽ち宇宙の本體は、この下土に住む幾千億の人民を生じたのであるが、その起滅間の進程は、千差萬別、各〻その途を異にして、誰も其原因を探究することは出來ない。或者は、愚にして富貴を矜り、駟馬の車を結び、それを走らせて得意がつて居るし、或者は、賢にして、貧窮に苦み、鶉の羽と見まがふ樣な襤褸を著て居るが、兩つながら、運命であつて、今更どうすることも出來ず、その上、天道は、公平無私、誰を疎んじ、誰を親むといふことも無い。松隱が未來の事を占つて、往往奇驗あるは、さることながら、もとより、天道を左右することは出來ない筈で、世事は、愼んで、その常道を守り、いたづらに紛雜せしめぬ樣にすることが、第一に肝要である。

【餘論】 我聞鬼谷子より覺皆殺二其身一に至るまでは、從前世人が普通に考へて居た鬼谷子その人を敍し、聲師得二異傳一より內照靈光新に至るまでは、鬼谷子の別傳を得たる松隱の術の甚だ靈驗あることを述べ、緬思大化根より以下は、作者の感慨で、折角の奇術も、究極、無用の物で、人は常道を守つて居さへすれば善いといひ、世事愼守レ常の一句は、好個の格言として、誰しも服膺すべく、從つて松隱並に其信徒の一考を煩はしたのであるが、その含蓄に富んで、暴露に失せぬ處は、自然、詩品を高からしめる。

贈二惠山醫僧東山一

惠山の醫僧東山に贈る

(一)九峰聚二(二)錫麓一。(三)一水回二梁谿一。
九峰、錫麓に聚まり、一水、梁谿を回る。

(四)之子修二(五)淨業一。(六)長年此幽棲。
之子、淨業を修し、長年、ここに幽棲。

曲彈二(七)白雪妙一。詩吟二(八)碧雲低一。
曲は白雪の妙なるを彈じ、詩は碧雲の低きを吟ず。

況有二(九)醫龍方一。(一〇)丹成重二刀圭一。
況んや、醫龍の方あるをや、丹成つて刀圭を重んず。

釆レ藥夜(一一)歸レ院。(一二)蘿月照二澗西一。
藥を釆つて、夜、院に歸れば、蘿月、澗西を照らす。

扁舟欲二相訪一。愁作二(一三)武陵迷一。
扁舟、相訪はむと欲するも、武陵の迷を作さむことを愁ふ。

【字解】【一】九峰　九龍山の峰、その高峰が九つあるから云つたのであらう。【二】錫麓　無錫の平野。【三】一水回梁谿　一統志に「梁谿は、源、慧山より出づ、梁時重れて濬す、故に名づく」とある。【四】之子　この子と訓すべし、詩經に之子于歸とある。男女ともに、通じて用ふ。【五】淨業　清淨なる學業、卽ち佛道。【六】長年　久しい年月。【七】白雪妙　宋玉の對楚王問に「その陽春白雪を爲す、國中屬して和するもの數十人」とある。【八】碧雲低　江淹の詩に、日暮碧雲合、佳人殊未レ來とある。【九】醫龍方　仙傳拾遺に「開元中、孫思邈、終南山に隱る。宣律師と相接し、每に來往して、宗旨を參請す。時に大旱、西域の僧、昆明池に于て、壇を結び、雨を祈らむことを請ふ。凡そ七日、水を縮むること數尺。忽ち老人あり、夜、宣律師に詣つて、救を求めて曰く、弟子は昆明池の龍なり、雨なき時久しきは、弟子に由るに匪ず。胡僧、弟子の腦を利して、將に藥と爲さむとし、天子を欺いて雨を祈るといふ。命、且夕に在り、和尙の法力救護を乞ふ、と。宣公辭して曰く、貧道、律を持するのみ、孫先生に求むべし、と。老人、因つて思邈に至り、謂つて曰く、われ、昆明龍宮に仙方三十首あるを知る、もし能く予に示さば、予、將に汝を救はむとす。老人曰く、この方、上帝、妄りに傳ふるを許さず、今急なり、もとより恡むところなし、と。頃らくあつて、方を捧げて至る。思邈曰く、爾、但だ還れ、胡僧を虞ること無かれ、と。これより、池水忽ち漲り、數日にして岸に溢る。胡僧、羞恚して死す」とある。【一〇】丹成重刀圭　神仙傳に「沈羲は吳郡の人、道を蜀に學ぶ。老君、玉女をして金案玉杯を持せしめ、藥を盛つて羲に賜うて曰く、これは是れ神丹、飲むものは死せず、夫婦各一刀圭」とあり、本草綱目の序例に「丸散に刀圭と云ふは、方寸匕を十分するの一、准ずるに梧桐の子の大さの如し。方寸匕とは、匕を作り、正方一寸、抄散するも落ちざるを以て度となす」とあり、又庾信の詩に量レ藥用二刀圭一とある。すると、刀圭は、藥の分量の單位で、極めて少量である。【一一】歸院　院は僧院。【一二】蘿月　薜蘿の間より差し上る月。【一三】武陵迷　陶淵明の桃花源記に「晉の太元中、武陵の人、魚を捕へ、溪に緣つて行き、桃花の林に逢ふ、岸を夾むこと數百步、便ち一山を得たり、山に小口あり、舟を舍てて口より入る。男女の衣著、悉く外人の如し。自ら云ふ、先世、秦を避けて此に至り、復た出でずと。停まること、數日にして辭して去る。太守、人を遣し、向きの誌せしところを尋ねしむ、迷うて復た路を得ず」とある。

【題義】 惠山は、卽ち慧山、一統志に「慧山は、無錫縣に屬す、舊名九龍山」とある。この首は、惠山に住んで、傍ら醫を業として居る僧で、名を東山といふものに贈つたのである。

【詩意】 九龍山は、無錫の平野に聚まり、梁谿の一水は、迂回して流れ、山水殊に雙絕。ここに、東山といへる僧は、佛道を修業し、多年、この間に幽棲して居る。この僧は、なかなか多能の人で、琴を彈ずれば、その曲の妙なること、白雪の如く、詩を作れば、江淹の碧雲の句の樣に立派である。それは未だしも、醫術を解して居る龍の處方を會得し、丹を鍊れば、極めて少量で效驗を奏する。終日、藥を山中に采つて、夜、僧院に歸れば、月は薜蘿の間より上り、皎皎として澗西を照らし、その景色、えも言はれず。われは、扁舟に乘じて、一たび往いて訪問しやうと思ふが、武陵の漁人が再び桃源を尋ねた樣に、路に迷つて往かれぬと困ると思つて、わざと差し控へて居る。

【餘論】 起首四句は、僧の幽棲、次の四句は、僧の多藝を敍し、殊に重きを醫に置いたのである。結末四句は、その境地の淸迴なることを想像し、さて行きたいが、路に迷つては困るといつて、愈よ世外の幽趣を發揮し、はるかに起首に照應したのである。

嬀蜼太史自海上入郭因得追游以敘舊好今日風雨偶闕晤言樓居早寒懷人尤甚想孤寓僧林同此岑寂賦是以寄瞻戀之意

嬀蜼太史、海上より郭に入る、因つて追游以て舊好を敍するを得たり、今日風雨、偶ま晤言を闕く、樓居早寒、人を懷ふこと尤も甚し。想ふに僧林に孤寓し、この岑寂を同じうするなり。これを賦して以て瞻戀の意を寄す

(一)良辰曠(二)清晤。(三)窮年秉(四)離憂。　良辰、清晤を曠しうし、窮年、離憂を秉る。
倏來自(五)海壖。諧我心所求。　倏ち海壖より來り、我が心の求むるところに諧ふ。
不殊雲中雁。和鳴得其儔。　雲中の雁の和鳴して、その儔を得るに殊ならず。
(六)宴閣既(七)連席。(八)行塘復同舟。　閣に宴して既に席を連ね、塘を行いて復た舟を同じうす。
(九)坐聆(一〇)金玉篇。鄙拙何以酬。　坐に金玉の篇を聆き、鄙拙、何を以て酬いむ。
風雨(一一)戒茲旦。(一二)居然阻從遊。　風雨、この旦を戒む、居然、從遊を阻む。
(一三)祇園念孤寓。(一四)微瘵苦未瘳。　祇園、孤寓を念ふ、微瘵、未だ瘳えざるに苦む。
落葉驚早寒。誰當慰淹留。　落葉、早寒に驚き、誰か當に淹留を慰むべき。
朋來(一五)不我館。(一六)願已良有由。　朋來つて、我に館せず、願已む、良に由あり。

徒茲睇停雲（一七）。夕倚城南樓。　徒に茲に停雲を睇し、夕に城南の樓に倚る。

在遠分難親。居近彌使愁。　遠きに在つて、分れて親み難く、近きに居て、彌よ愁へしむ。

信彼詩（一八）中言。一日如三秋。　かの詩中の言を信ず、一日、三秋の如し。

【字解】【一】良辰　善い時。【二】曠淸晤　淸い面晤をなすに緣遠い、即ち面晤を爲さぬこと。【三】窮年　年を窮めて、一年を通じて。【四】秉離憂　別離の憂を抱いて居る。【五】海壖　史記河渠書に「故に河壖を盡す」とあつて、その注に「岸邊の地なり、堧と通ず」とある。【六】宴闌　高閣の上で宴を開く。【七】連席　竝んで坐わる。【八】行塘　堤の上を行く。【九】坐聆　聆は聽く。【一〇】金玉篇　その價が金玉と相若く程貴いところの篇章。【一一】戒茲旦　この朝を警戒する、即ち外出を止める。【一二】居然　案の定、かたの如く。【一三】祇園　寺城の義、前に晩憩靈鷲院の詩に見ゆ。【一四】徼瘵　瘵は廣韻に病也とある。【一五】不我館　自分の家に宿らぬ。【一六】願巳　わが願の協はざりしこと。【一七】停雲　陶淵明に停雲と題する四言の詩があつて、その序に「停雲は、親友を思ふなり」とある。【一八】詩中言　詩經の王風采葛に一日不見如三月、一月不見如三秋とある。秋は三個月であるから、三秋といへば九個月になる。

【題義】嬀蜼太史は王彝、前に春日懷十友詩に見えて居た。そして、ここに太史とあるから、元史を修むるに與つた後の事と見える。この題の意味は——嬀蜼太史の王彝は、海上から引きかへして、蘇州の城郭に入り、そこで、一緒に游んで、舊好を敍することが出來た。今日は、生憎の風雨で、偶ま面晤して語り合ふことも出來ず、おまけに、樓上に居ると、早寒襲ひ至り、人を懷ふこと、殊に甚しい。王君は、今、ひとりで佛寺に假寓されて居るから、矢張、同じく、この淋しさに堪へられぬことであらう。そこで、この詩を賦して、瞻望眷戀の意を致すのである。

【詩意】良辰にも面晤を得ず、年中、別離の憂を抱いて居た處が、料らずも、君は海邊から此地に來られたので、わが心の欲求するところに諧うて、まことに喜ばしく、たとへば、雲井を渡る雁が、相和鳴して、その友を得たやうなものである。そこで、高閣に宴する時は、席を竝べ、長塘を行き盡しては、舟を同じうし、連日、一緒に周旋して居た。その間、金玉の篇とも稱すべき君の新作を拜聽すると、唯だ感に勝へず、われは、生來鄙拙で、どうして應酬することが出來やう。今日は、生憎の風雨で、朝から外出を見合せ、とうとう從遊することを妨げられて仕舞つた。君は、獨り佛寺に寓居されて居るが、微恙が未だ全癒せぬとのことで、早寒に驚いて落葉の飄る淋しき折から、誰が逗留中の客愁を慰めるであらうか。おもへば、折角、君が來ても、自分の處に泊まつて呉れず、わが願の盡餅に歸したのも、まことに、理由あることといへば、今さら仕方がない。ここに徒に停雲を眺めて、夕に城南の樓に倚つて居る。すでに遠きに在れば、各天涯に分かれて親み難く、近きに居ると、容易に遇へるが、今日の樣では、愈よ我が心を愁へしめる。詩經に、一日見ざれば三秋の如き長長しい心地がするとあるが、如何にも、その通りである。

【餘論】この篇は、段落截然として、層層相承け、敍述周匝、略ぼ遺憾なく出來て居るが、遂に名句に乏しく、從つて、讀者の耳目を動盪することが出來ないのは、佳作を以て目し難き所以である。

送徐七山人往蜀山書舍　徐七山人の蜀山書舍に往くを送る

(一)結客抱(二)狂志。(三)傾身通(四)俠交。　客に結んで狂志を抱き、身を傾けて俠交を通す。
東將觀(五)渤澥。西欲踰(六)函崤。　東、將に渤澥を觀むとし、西、函崤を踰えむと欲す。
(七)奔蹄脫(八)驚轡。(九)墮翮連(一〇)飛鏃。　奔蹄、驚轡を脫し、墮翮、飛鏃に連る。
(一一)酒具載車出。兵法(一二)篝燈鈔。　酒具、車に載せて出で、兵法、燈を篝して鈔す。
從軍願(一三)奮立。學儒恥(一四)譏嘲。　軍に從つて奮立を願ひ、儒を學んで譏嘲を恥づ。
寧期憂事集。頓使(一五)芳年拋。　寧ろ期せむや憂事の集まるを、頓に芳年をして拋たしむ。
(一六)塵衣(一七)曉城陌。雪帽(一八)寒江郊。　塵衣、曉城の陌、雪帽、寒江の郊。
客堂感蟋蟀。婦室悲(一九)蠨蛸。　客堂、蟋蟀を感じ、婦室、蠨蛸を悲む。
自笑失(二〇)水鮒。空慙得(二一)雲蛟。　自ら笑ふ、水を失ふの鮒、空しく慙づ、雲を得るの蛟。
獲君乃(二二)瑚璉。顧我猶(二三)斗筲。　君を獲れば乃ち瑚璉、顧るに我猶ほ斗筲。
(二四)高懷(二五)矯衰薄。(二六)雅音變(二七)哇咬。　高懷、衰薄を矯め、雅音、哇咬を變す。
(二八)談詩辨(二九)六義。讀易窮(三〇)諸爻。　詩を談じて六義を辨じ、易を讀んで諸爻を窮む。
情親豈殊意。氣合眞(三一)同胞。　情親めば豈に意を殊にせむや、氣合すれば眞に同胞。
(三二)因依像(三三)輪輻。暢(三四)和諧(三五)塤箎。　因依、輪輻に像り、暢和、塤箎に諧ふ。
(三六)妓席夜留宴。僧扉晝(三七)攜敲。　妓席、夜、留めて宴し、僧扉、晝、攜へて敲く。
(三八)循花縱(三九)步屧。映柳持(四〇)鳴鞘。　花に循つて步屧を縱にし、柳に映じて鳴鞘を持つ。
塘行月灩灩。林臥(四一)風梢梢。　塘を行けば月灩灩、林に臥せば風梢梢。
(四二)要眇送(四三)謳唱。(四四)瀾翻雜(四五)詼啁。　要眇、謳唱を送り、瀾翻、詼啁を雜ふ。
(四六)七滑炊(四七)野飯。盤香薦(四八)山肴。　七、滑にして、野飯を炊ぎ、盤、香しくして山肴を薦む。
遭時雖齟齬。處俗不混淆。　時に遭うて齟齬すと雖も、俗に處つて混淆せず。
曼游既(四九)相挈。(五〇)茲離竟(五一)誰敎。　曼游、すでに相挈へ、この離、竟に誰かせしむる。
浮湖理(五二)去榜。(五三)祖道移(五四)中庖。　湖に浮んで、去榜を理め、祖道、中庖に移る。
(五五)遐方未罷戍。近日猶(五六)被抄。　遐方、未だ戍を罷めず、近日、猶ほ抄せらる。
(五七)鹿驚互奔併。(五八)虎鬭仍咆哮。　鹿は驚いて互に奔併し、虎は鬭うて仍ほ咆哮。
(五九)荒墟少(六〇)砧杵。(六一)遠壘多(六二)笳鐃。　荒墟、砧杵少く、遠壘に笳鐃多し。

問往何土里。答云此巖嶅(六三)。　問ふ、何の土里に往く、答へて云ふ、この巖嶅。
人安地有阻(六四)。歲稔田(六五)無墝。　人安くして地に阻あり、歲稔つて田に墝なし。
牛羊可放牧。鷺鴨供燖炰(六六)。　牛羊、放牧すべし、鷺鴨、燖炰に供す。
湍(六七)長機碓(六八)激。石古窪樽(六九)坳(七〇)。　湍は長くして機碓激し、石は古くして窪樽坳す。
樵(七一)斤聽伐木。獵火(七二)看除茆(七三)。　樵斤、伐木を聽き、獵火、除茆を看る。
雨紅爛秋實。露紫舒(七四)夏苞。　雨紅にして秋實を爛し、露紫にして夏苞を舒ぶ。
谿晴雁拍拍(七五)。村曙鷄膠膠(七六)。　谿晴れて雁拍拍、村曙にして鷄膠膠。
書聲隱篁竹。櫂響穿蒲茭(七七)。　書聲、篁竹に隱れ、櫂響、蒲茭を穿つ。
聊將耦(七八)沮溺。誰敢儕夷巢(七九)。　聊か將に沮溺に耦せむとす、誰か敢て夷巢を儕とせむ。
末(八〇)事誠瑣瑣(八一)。大言匪嘐嘐(八二)。　末事、誠に瑣瑣、大言、嘐嘐に匪ず。
世險路生(八三)穽。名浮浪吹(八四)泡。　世險にして路に穽を生じ、名浮にして浪泡を吹く。
耰(八五)鋤擬共把。干戚(八六)行俱包。　耰鋤、共に把らむことを擬し、干戚、行く〱俱に包む。
社(八七)餔飲烹(八八)狗。臘(八九)祀歌迎(九〇)貓。　社餔、烹狗に飮し、臘祀、迎猫を歌ふ。
愼勿厭寂寞。長當謝紛嘵(九一)。　愼んで寂寞を厭ふ勿れ、長く當に紛嘵を謝すべし。

【字解】【一】結客　賓客を結合する。【二】狂志　狂者の志、狂は惡い意味でなく、尋常に度越せしをいふ。【三】傾身　一身を打ち込む。【四】俠交　俠者の交、卽ち意氣を重んじ、恩讎必ず爲に報ゆるといふ樣な交際。【五】渤澥　說文に「渤澥は海の別名なり」とあり、博物志に「東海を渤澥と稱し、又滄海といふ」とある。【六】函崤　函谷と崤山、洛陽より長安に通ずる間の險要。【七】奔蹄　かけ出す馬。【八】驚轡　ゆらめく手綱。【九】墮翮　射落された鳥。【一〇】飛鑣　飛び動くくつわ。【一一】酒具載車出　南史陶潛傳に「潛、かつて廬山に往く、王弘、龐通之をして酒具を齎し、半途栗里に于て之を要せしむ。潛、一門生二兒をして籃輿を舉げしむ。至るに及び、欣然として、便ち共に飲酌し、弘至るも、亦た忤ふなきなり」とある。【一二】篝燈鈔　篝燈とは、燈火を籠で蔽ふこと。宋史陳彭年傳に「彭年、幼にして學を好む。母、惟だ一子、これを愛して、その夜、書を讀むを禁ず。彭年、燈を密室に篝し、母をして知らしめず」とある、鈔は謄寫すること。【一三】奮立　北史崔昂傳に「昂、風調才識あり、奮つて堅正剛直の名を立て、深く文宣に知賞せらる」とある。【一四】恥譏嘲　人から謗り嘲けられることを恥ぢる、司馬光の詩に旣恥譏嘲地、誰爲長厚人とある。【一五】芳年拋　芳年は盛年、若い盛りの年を拋棄する。【一六】塵衣　塵に染まつた衣服。【一七】曉城陌　朝早き城中の街衢。【一八】寒江郊　寒い郭外江上の地。【一九】蟢蛸　小さい蜘蛛。【二〇】失水鮒　莊子に「車轍の中に鮒魚あり、曰く、我は東海の波臣なり、君、豈に斗升の水あつて我を活かさむや」とある。【二一】得雲蛟　吳志周瑜傳に「劉備、左將軍を以て荊州牧を領す。周瑜、上疏して曰く、劉備、梟雄の姿を以て、しかも、關羽・張飛、熊虎の將あり、必ず久しく屈して人の用を爲す者に非ず、恐らくは、蛟龍、雲雨を得ば、終に池中の物に非ざるなり」とある。【二二】瑚璉　宗廟祭器の名、論語に「子貢問うて曰く、賜や何如。子曰く、女は器なり。曰く、何の器ぞや。曰く、瑚璉なり」とある。【二三】斗筲　器の小なるをいふ、論語に「斗筲の人、何ぞ算するに足らむや」とある。【二四】高懷　高尚なる懷抱。【二五】矯衰薄　衰世の薄俗を矯正する。【二六】雅音　みやびやかなる聲調。【二七】哇咬　集韻に「哇咬は淫聲」とあり、柳宗元の弔屈原文に哇咬環觀兮蒙耳大呂とある。【二八】談詩　詩經の話をする。【二九】六義　詩の大序に「故に詩に六義あり、一に曰く風、二に曰く賦、三に曰く比、四に曰く興、五に曰く雅、六に曰く頌」とある。

【三〇】窮諸爻　爻は易の卦を構成するもので、一卦は六爻より成り、易には、卦辭に次いで爻辭がある。易は、本來、宇宙現象の變化を論じたものであるから、諸爻は、各現象の要素である。【三一】同胞　兄弟に同じ、王安石の詩に同胞苦二零落一、會合尚誰其とある。【三二】因依　二字ともに、よる。因緣依附。【三三】輪輻　輪は車の輪、輻は中央の轂より射出して居る矢で、卽ち輪を構成するもの。考工記に「輪輻三十、以て日月に象るなり」とある。【三四】龢和　音律の調びて諧和すること。【三五】塤匏　ともに樂器の名。塤は、韻會に「塤は樂器なり、土を燒いて之を爲り、上を鋭にし、下を平かにし、形、稱錘の如し」とあり、又、壎に同じで、詩經に伯氏吹レ塤、仲氏吹レ匏とある。匏は、爾雅に「匏は八音の一に在り、笙十三簧、竽三十六簧、皆管を匏内に列し、簧を管端に施す」とある。【三六】妓席　妓家の席。【三七】畫攔敲　畫は同行して敲く。【三八】循花　花の列んで居る道を行く。【三九】步屧　屧は足に穿つもの、卽ち下駄の類。【四〇】鳴鞘　鞘は鞭を入れる袋、李白の詩に金鞭拂レ雪揮二鳴鞘一、半醉呼レ鷹出二遠郊一とある。【四一】風悄悄　そよそよと風が吹く。【四二】要眇　集韻に「舒緩の貌」とある。【四三】謳唱　歌の聲。【四四】潺潺　騒がしく口口に罵る。【四五】詼嘲　滑稽、おどけ、漢書東方朔傳に「朔、かつて大中大夫に至り、後、かつて郎となり、枚皋・郭舍人と倶に左右に在つて、詼嘲するのみ」とある。【四六】匕滑　匕はさじ、食物を掬ふもの、說文に「匕は相與に比敍するなり、飯を取る所以」とあり、三國志劉先主傳に「先主、食に方つて匕箸を失ふ」とある。【四七】野飯　田畑で取れる穀類で造つた飯。【四八】山肴　山で採れる獸・獨活の類。【四九】相挈　一緒に成る。【五〇】茲離　この別れ。【五一】誰教　誰かせしむ、誰が此の如くならしめた。【五二】去榜　李舟の切韻に「榜は、船を進むるなり」とあり、楚辭の九章に齊二吳榜一以擊レ汰とあつて、その集注に「吳は吳國を謂ふ、榜は櫂なり」とある。すると、去榜は去舟に同じ。【五三】祖道　詩の大雅に仲山甫出祖とあつて、その箋に「祖は、將に行かむとして軷を犯すの祭なり」とある。出發の際、道祖神の祭をなして、その行の安全を祈ること。【五四】巾庖　庖中に同じ、庖は厨、卽ち臺所。【五五】遐方　遠方に同じ。【五六】被抄　掠奪される。後漢書郭伋傳に「伋、漁陽太守となる。はじめ、匈奴、數ば郡界を抄し、邊境、これに苦む。伋、士馬を整勒し、攻守の略を設く」とある。【五七】鹿戰　鹿は狩獵の目的物、ここでは天子を指す。李白の詩に秦鹿奔二野草一、逐レ之若二飛蓬一とある。【五八】虎鬭　強國が互に爭鬪する、史記春申君傳に「天下、秦楚より強きはなし、今聞く、大王楚を伐たむと欲すと。これ猶ほ兩虎相與に鬪つて、駑犬、その弊を受くるがごとし」とある。【五九】荒墟　墟は村里。【六〇】砧杵　きぬた、何遜の詩に砧杵鳴二四鄰一とある。【六一】遠壘　遠くに在る軍壘。【六二】笳鐃　笳は胡笳、もと蘆葉を卷いて吹いたが、後には金屬で作り、一に蘆管といふ。鐃は、說文に「小鉦なり、軍法、卒長、鐃を執る」とあり、玉篇に「鈴に似て舌なし、軍中用ふるところなり」とある。【六三】巖谿　谿は山間の地。【六四】地有阻　地には障害物、卽ち要害がある。【六五】田無墝　墝は、韻會に「磽薄、瘠土なり、薄田を墝といふ」とある。【六六】燖炮　むし燒にする、韓愈の詩に鵝鵰鴟鴉雉鵠鶡、燖炮煨爊誰飛奔とある。【六七】湍長　早瀨が長く續く。【六八】機礮　韻會に「礮は、物を碎くの器、古しへ、公輪班、礮を作る。晉の王戎、水礮あり、或は礮を訓して碓下の石となす」とある。すると、機礮は、機械で物を擣り潰すので、卽ち水車の類であらう。【六九】窪樽　窪んだ天然の石樽、顏眞卿の峴山石樽聯句に李公登飮處、因レ石爲二窪樽一とあり、一統志に「湖州峴山に石樽あり、酒を貯ふべし、唐の別駕李適之、かつて、此に飮む、後、顏眞卿復た過ぎて李相石樽の詩を作る」とある。【七〇】坳　凹に同じ、くぼむ。【七一】樵斤　木こりの斧。【七二】獵火　狩獵に際して禽獸を追ひ出す爲に野山を焚く火。【七三】除茀　雜草を燒いて除く、王維の詩に獵火燒二寒原一とある。【七四】舒夏苞　苞は花の蕾、夏から有つた蕾が開いた。【七五】拍拍　雁が羽ばたく聲。【七六】膠膠　鷄の叫ぶ聲。【七七】蒲荚　荚も水草。【七八】耦沮溺　長沮・桀溺などいふ隱者と一緒になる。【七九】夷巢　伯夷と巢父、巢父は堯から天下を譲られたのを辭した人。【八〇】末事　世俗の事。【八一】瑣瑣　小さな貌。【八二】嘐嘐　嘐は說文に「誇語なり」集韻に「大なり」とある。【八三】路生穿　路に陷し穴が用意してある。【八四】漚吹泡　漚の上の泡、白居易の詩に幻世如二泡影一、浮生抵二眼花一とある。【八五】耰鋤　耰鋤、ともに農具。【八六】干戚　盾と斧、舜の時、三苗來服したから、干戚を舞はしめたといふことがある。ここでは、兵器の儀に用ひ、世が太平になれば、兵器を押し包んで、深く藏して置くといふことにしてある。禮の樂記に「倒に干戈を載せ、これを包むに虎皮を以てす」とある。【八七】社餔　社は土地の神、卽ち鎭守。餔は祭禮の御馳走。【八八】烹狗　禮記に「狗を東方に烹る、陽氣の東方に發するを祖するなり」とあり、蘇軾の詩に東方烹レ狗陽初動とある。【八九】臘祀　冬の祭、田神を祀る。【九〇】迎猫　禮記に「迎猫は、その田鼠を食ふを謂ふなり」とある。【九一】紛嬈　喧しきこと。

【題義】徐七は卽ち徐賁、前に數ば見えて居た。かつて引いた列朝詩集の小傳に「淮張、閫を開き、辟して屬と爲す。張羽と倶に避け、去つて吳興に之き、張は菁山に居り、徐は蜀山に居り、蜀山精舍を建つ」とある。そして、徐賁は蜀山と蘇州との間を數ば往復して居たから、前にも、送㆔蜀山人歸㆓吳興㆒と題せる五古があつて、今又、ここに此首があるので、その孰れが先後なるかは、一寸分からない。

【詩意】徐君は少壯にして、功名の念、太だ盛であつた爲に、客を結合して、世の常ならぬ英志を抱き、身を傾けて、游俠の徒と交際を通じ、なほ廣く天下を巡つて、東は渤澥を觀、西は函嶠を踰えたいと思つて居た。その平生は、得意に馬を走らして、手綱の脫するをも顧みず、つづけ樣に鳥を射落して、馬のくつわに連る位。ある時は、酒具を車に載せて、出で遊び、ある時は、燈火に籠をかぶせ、人に知れぬやうにして兵法の書を寫した。かくて、軍に邊塞に從ひ、奮つて立身せむことを期し、儒を學んで、人から通用の利かぬものと譏り嘲られることを恥として居た。しかるに、料らずも、樣樣の心配事が來り集まり、あたら若い年の盛りを拋つて仕舞ふことになり、塵に染まつた衣を著けて、朝早く、城中の町町を經めぐり、雪の降り懸つた帽子を戴いた儘、寒き江上郭外の地を逍遙して居た。それから、客間には、こほろぎの鳴く聲が聞こえ、細君の居る部屋には、蜘蛛が出て來るといふ位に、閒居蕭條として、來り訪ふ人なきは勿論、そこで、水を離れた鮒の如き窮迫せる運命を笑ひ、雲雨を得れば池中の物に非ずといふ蛟龍に比して、深く慙ぢ入るばかり。しかし、君の人物は、天晴、瑚璉に比すべく、わが器小にして斗筲を以て目せられるとは、格段の相違である。すでに、世に立つて、一廉の仕事を成し遂げることも出來なかつたから、今度は、風流翰墨を事とし、高尚なる懷抱は、衰世の薄俗を矯正せむとし、その作るところの詞章は、雅音を旨として、世俗の淫聲を一變せむことを期した。そこで、詩を談じては六義の本旨を辨明し、易を讀んでは、諸爻を窮めて、宇宙現象の變化を考察した。君と僕とは、情、すでに親んで、意の殊なるなく、自然氣が合ふ處から、同胞の想をなし、互に依り添ひ、扶け合つて、車の輪輻に象り、兩心暢びやかにして、和らぐことは、塤箎が相諧うて調子よく鳴る樣であつた。夜は、妓家の席に留まつて宴し、晝は、一緒に行つて高僧の居を訪ひ、ある時は、花に路しるべをされて、步屧の向ふところに從ひ、ある時は、柳に映じて、馬上に鞭を振ひ、隄の上を行けば、月灔灔として、波のうねうね、金波を漾はし、林の下に臥せば、風そよそよと、極めて涼しさを覺え、歌を唱ふれば、その音、緩く舒やかにして長くつづき、詼謔を交へて語り合へば、自然騷がしくも聞こえる位。野飯を炊いでは、これを掬ふ匕も滑かであるし、山肴を薦むれば、これを盛つた盆まで、香しい樣な氣がした。君は、今の時に際し、事、志と齟齬せしものから、衆俗の間に居ても、決して混淆されることなく、曩には、ともに方方游び歩いたが、今は、愈よ別れとなり、一體に誰の所爲かと云ひたい位。これから、湖に浮ばむとして、舟の支度をなし、又門出に

道祖神を祀るといふので、その用意の爲め、廚に引きかへされた。今しも、遠境の地に於ては、未だ兵戎を罷めず、つい近ごろでも、亂賊の爲に掠奪されることがあるといふ位、官軍は、頻りに驚いて、奔り去つたり併せられたりして居るし、羣雄は、虎の如く鬪つて、吼え咆つて居る。かくの如き騷亂の世であるから、荒れはてた村里に於ては、砧うつ聲も、極めて稀であるし、反對に、遠處の軍壘に於ては、笳を吹いたり、鉦を鳴らしたりする聲が、非常にかしましい。これから、君はどこへ往くかと問へば、例の蜀山といふ巖山であつて、そこでは、人人安全にして、地に要害あるを恃み、幸に豐年に際して、瘠せた田も無い位、あたりの野に於ては、牛羊を放し飼にすることも出來るし、そこら近處の沼で捕へる鵞や鴨は、蒸し燒に供して、なかなか味が善い。菴の近くには、早瀨が長く續いて、水車は、勢よく廻轉して居るし、石の古くして、自然に窪めるは、酒尊に代用することが出來る。木こりは斧を揮つて、木を伐り倒し、獵火、山を燒けば、雜草も自然に除かれる。秋に成つて、果が熟すると、降りそそぐ雨までも赤く、夏からの蕾が咲き出でると、露の滴さへ紫に見える。流の處が晴れて居ると、下りて來る雁が羽ばたきを爲し、村は曙ならむとして、雞の聲、花やかに聞こえる。ある時は、書を讀んで、その聲、篁竹に籠つて聞こえ、ある時は、舟に棹し、ざわざわと蒲茭の間に分け入る響がする。かくて、古しへの長沮・桀溺と一緒になつて耦耕はするが、伯夷・巢父の仲間入りをして、全く此世に背くことを致さない。浮世の事は、まことに瑣瑣として、詰らぬものであるし、大言は、割合に聲高でない。世途の險なる、處處に陷し穴があつて、うかうかと歩くことは出來ず、浮名は、何等の實質もなく、浪の上の泡に過ぎない。やがて、ともに鋤鍬を把り、物物しき武器は追追包み込んで仕舞つて、世は再び太平になることもあらう。さうすると、鎭守の祭禮には、烹た狗を肴として酒を飮み、臘月、田神を祭る時には、田鼠を食ふところの猫を迎へる田舍節でも歌つて見やう。何は兎もあれ、愼んで寂寞を厭ふことなく、長しへに、世の騷擾を避けて、清平の世に復歸する日を待つて居れば善からう。

【餘論】結レ客抱二狂志一より讀レ易窮二諸爻一に至るまでは、徐賁の閱歷・人物・氣概を寫し、情親豈殊レ意より玆離竟誰敎に至るまでは、作者との交誼を敍し、浮レ湖理二去榜一より遠壘多二笳鐃一に至るまでは、今次の別を言ひ、問往二何土里一より長當レ謝二紛嘵一に至るまでは、蜀山隱宅の景趣を想像し、閒居樂多く、やがて、他日の清平を待つべき旨を言うて、これを慰勉したのである。その中、雨紅爛二秋實一の六句は、字字烹鍊して、極めて面白く、世險路生レ穽の二句は、季世の衰薄に道及し、人をして、覺えず、嗟嘆せしめる。

會二宿城西客樓一送二王太史一　城西の客樓に會宿し、王太史を送る

君來歡不レ足。君去憂何遽。（一）（二）　君來つて、歡、足らず、君去つて、憂、何ぞ遽かなる。

共聽(三)楓橋鐘。(四)留連恐將曙。　ともに楓橋の鐘を聽き、留連、將に曙ならむとするを恐る。
(五)蛩鳴胡苑草。鳥起(六)高城樹。　蛩は鳴く胡苑の草、鳥は起つ高城の樹。
明日獨登樓。歸帆渺何處。　明日ひとり樓に登る、歸帆、渺として何の處ぞ。

【字解】【一】歡不足　喜び樂むことが不十分である。【二】憂何遽　別離の憂を爲すことが洵にあわただしい。【三】楓橋　姑蘇志に「閶門の西七里」とあって、むかし、唐の張繼が例の月落烏啼霜滿天の詩を作つた處である。【四】留連　名殘を惜んで留まつて居る。【五】蛩鳴　蛩けきりぎりす、錢起の詩に寒露滿蛩鳴とある。【六】高城樹　高い城壁に倚り添うた木。

【題義】王太史は王彝、前に蘇州に來て居て、青邱は、追游以て舊好を敍するを得たが、風雨の爲め、今日は往かれぬといふ詩が見えて居た。この首は、定めて、その後の作で、王彝が愈よ嘉定に歸るに就いて、知人どもが、城西の旅館に集まりて、送別の宴を催し、多分夜が更けた爲めでもあらう、その儘、留宿した時に賦して示したのである。

【詩意】折角、君は、この蘇州に來られたが、十分に歡樂を極むるに及ばず、そして、君は、もう還られるといふので、別離の憂さへ、あわただしい。今夜、この城西の逆旅に會し、楓橋に近き例の寒山寺の鐘を聞き、留連、すでに時を移して、どうやら、夜明けに成りかかつて來た。故苑、草荒れて、寒蛩亂鳴し、城邊の樹は高くして、そろそろ、宿鳥が起きて鳴き出す。明日ひとり樓に登れば、君が行、すでに遠く、歸帆の影は、渺渺として、何處とも分かず、延佇低徊、定めて、傷心に堪へられぬことであらう。

【餘論】大體に於て、淺近に見えるが、破題は面白く、楓橋の鐘も、來歷があるので、一段の風情を添へ、蛩鳴鳥起、岑寂の感、愈よ加はり、結二句は、情に入つて更に新婉である。

題林居圖兼簡盧公武

林居の圖に題し、兼ねて盧公武に簡す

竹梧翳(一)苔石。知是幽人居。　竹梧、苔石に翳す、知る是れ幽人の居。
(二)林閒鳥鳴後。(三)亭空賓散餘。　林は閒なり、鳥鳴くの後、亭は空し、賓散ずるの餘。
聞有(四)盧鴻隱。長年留著書。　聞く盧鴻の隱るるあり、長年、著書を留むと。

【字解】【一】翳　かざす、かぶさる。【二】林閒　林の靜かなること。【三】亭空　他に人なきこと。【四】盧鴻　唐の玄宗時代の隱逸で、卷三、詠隱逸十六首の中に見えて居る。

【題義】林居圖は、高士が林中に幽居して居る樣を畫いた圖。この首は、それに題し、併せて盧公武といふ舊知に寄せたのである。姑蘇志に「盧熊、字は公武、崑山の人、楊維楨に從學し、博學にして文詞に工に、尤も篆籒に精し。元季、吳縣學敎諭となり、洪武の初、工部照磨となり、尋いで、善書を以て中書舍人に擢んでられ、兗州知府に遷る」とある。

【詩意】翠竹と碧梧と、互に交錯して、苔むす石の上に掩ひかぶさつて居る、ここは、言ふまでもなく、幽人の住宅である。鳥の鳴いた後は、林中更に靜に、客が散じ去りし後は、一亭がら明きで、全く人も居ない。盧鴻に比すべき君は、隱居の樂を縱にし、久しい間、著書を事として居るといふ評判であるが、定めて、かういふ樣な處に居ることであらう。

【餘論】竹梧翳苔石は、畫中見るところ。林閒鳥鳴後の二句は、畫手の筆、未だ到らざるところを補寫して、その淸幽の趣を明かにし、取りも直さず、題畫の妙境である。盧鴻は、この詩を箭する盧公武と恰も同姓なるに因り、特に意を用ひて點出したのである。

鴻山書舍圖。爲黃君伯淵賦

鴻山書舍の圖、黃君伯淵の爲に賦す

(一)伯(二)鸞舂地。井臼有遺跡。　伯鸞舂の地、井臼、遺跡あり。

(三)之子學幽棲。託蹤在林石。　之子、幽棲を學び、蹤を託して林石に在り。

淸風竹林曉。(四)片月(五)蘿徑夕。　淸風竹林の曉、片月蘿徑の夕。

遙想(六)一齋空。圖書(七)滿牀積。　遙に想ふ、一齋空しく、圖書、滿牀に積むを。

【字解】【一】伯鸞　梁鴻の字、後漢の隱逸、卷三、詠隱逸十六首の中に見えて居た。【二】鸞舂　人に雇はれて米舂をする、卽ち賃舂。【三】之子　前に見ゆ、この人に同じ。【四】片月　一片の月。【五】蘿徑　蔦のからみ合ふ細道。【六】一齋空　書齋に人が居ない。【七】滿牀　牀上に一ぱい。

【題義】鴻山は、何處に在るか、分からぬが、或は、梁鴻に因つて其名を得たものでは無からうかと思はれる。鴻山書舍は、黃伯淵の住宅である。伯淵は、多分、字であらうと思ふが、その本名竝に閱歷等は、一切分からぬ。伯淵は誰かに賴んで、鴻山書舍の圖を畫かせ、そして、その贊を靑邱に依賴したから、靑邱は、乃ち此詩を作つたのである。

【詩意】鴻山は、むかし、梁伯鸞が人の爲に米舂をした地であつて、その住宅の跡は、依然として殘つて居る。今、黃伯淵は、幽棲を學び、蹤を林石の間に託して、ここに住んで居る。竹林に淸風吹き入る朝、蘿徑に片月の照り度る夕など、殊の外、景色が好くて、定めて、幽懷に愜ふであらう。おまけに、空齋人なく、萬卷の圖書は、牀上に積み重ねてあつて、研學には、持つて來いといふ處で、予は、黃君が此に在つて、日夕卷冊に枕藉し、やがて、一段の進境を拓かむことを希望する次第である。

【餘論】前半は、梁伯鸞の遺跡に其跡を託したといふので、一段の因緣を敍し、五六二句は、山中の風物、七八兩句は、書舍に就いて言ひ、卽ち題義を完うしたのである。

詠三良

三良を詠す

(一)殉葬古所禁。秦國固戎(二)風。
殉葬は、古しへ禁するところ、秦國、もとより戎風。

穆公臨(三)棄朝。要(四)此三臣從。
穆公、朝を棄つるに臨み、この三臣を要して從はしむ。

三臣百(五)夫良。不與(六)親暱同。
三臣は百夫の良、親暱と同じからず。

一旦使俱斃。(七)無人國將空。
一旦俱に斃れしむ、人なくして、國、將に空しからむとす。

捐生豈不難。忠義感(八)素衷。
生を捐つる、豈に難からざらむや、忠義、素衷を感ず。

長恐(九)先朝露。無由(一〇)奉君終。
長く恐る、朝露に先ち、君の終を奉ずるに由なきを。

遺命(一一)凜在耳。焉能惜(一二)微躬。
遺命、凜として耳に在り、焉んぞ能く微躬を惜まむ。

但懼(一三)嗣主孤。誰當共成功。
但だ懼る、嗣主の孤なるを、誰か當に共に功を成すべき。

高墳荆棘間。(一四)玄雲閉(一五)幽宮。
高墳、荆棘の間、玄雲、幽宮を閉づ。

(一六)壯魄同此歸。冥冥路安通。
壯魄、同じく此に歸る、冥冥、路、安にか通せむ。

國人(一七)痛莫贖。灑涙呼(一八)彼穹。
國人、贖ふなきを痛む、涙を灑いで、彼の穹を呼ぶ。

傷哉(一九)黃鳥詩。(二〇)流哀竟無窮。
傷ましいかな、黃鳥の詩、流哀、竟に窮まりなし。

【字解】【一】殉葬　君の死後、自殺して一緒に葬られること。【二】戎風　野蠻の風俗。【三】棄朝　朝廷を棄てて後に遺す、卽ち死ぬること。【四】三臣　子車氏の三子を云ふ、題義の條を見よ。【五】百夫良　百人に冠たる純良の臣。【六】親暱　親愛されて居る昵近の侍臣。【七】無人　然るべき人物が居ない。【八】素衷　本來の衷心。【九】先朝露　漢書蘇武傳に「蘇武、匈奴に留まる。李陵曰く、人生、朝露の如し、何ぞ久しく自ら苦むこと、此の如き」とある。朝露よりも先に早く死ぬ。【一〇】奉君終　君の最期に御供をする。【一一】凜　凜然、きびしく、はつきりして居る貌。【一二】微躬　詰まらぬ此身。【一三】嗣主　あと嗣の國王。【一四】玄雲　黒雲。【一五】幽宮　墳墓をいふ。【一六】壯魄　壯烈なる魂魄。【一七】痛莫贖　三良の身命を贖ひ、死せずして濟む樣にすることの出來ぬを痛む。【一八】彼穹　穹は天。【一九】黃鳥詩　詩經の秦風に見ゆ、なほ題義の條に注して置く。【二〇】流哀　悲哀を後世に傳へる。

【題義】詩經の秦風交交黃鳥の注に「秦の穆公卒す、子車氏の子三人を以て殉となす、皆秦の良なり、國人これを哀み、これが爲に黃鳥を賦す」とあつて、この詩は、卽ち三良を詠じ、つまり、詠史の作である。この題は、次の詠荆軻と共に、陶淵明の集にも見えて居るので、靑邱は、もしかすると、それを見て、試に遣つたのかも知れない。仍つて、左に淵明の作を掲載して置かう。

彈冠乘通津。但懼時我遺。服勤盡歲月。常恐功愈微。忠情謬獲露。遂爲君所私。出則陪文輿。入必侍丹帷。箴規嚮已從。計議初無虧。一朝長逝後。願言同此歸。厚恩固難忘。君命安可違。臨穴罔惟疑。投義志攸希。荆棘籠高墳。黃鳥聲正悲。良人不可贖。泫然沾我衣。

靑邱の高墳荆棘間の如き、國人痛莫贖の如き、確に淵明の句を變化したたらうと思はれる。

【詩意】殉葬は、まことに慘酷なことで、むかしから禁じたのであるが、秦國は、まだ野蠻の風俗を存して居たから、矢張、これを止めず、穆公が薨去される際に、子車氏の三子を殉葬させよと命せられた。元來、この三臣は、百夫の良と稱すべき國家重要の臣下であつて、平生親愛されて居る昵近の侍臣輩とは異なつて居る。それだのに、一朝、これをして共に死せしむるは、まことに、ひどい事で、人物が無ければ、國は空しくなつて、やがて滅亡して仕舞ふ。それから、三良の身に成つて考へると、生を捐てることは、決して六づかしいことでもなく、忠義の念は、本來の衷心を激動して居る。唯だ朝露に先つて早く死し、君の最期の御供が出來ない樣なことがあつては成らぬと、それのみを苦にして居た位だから、むしろ有り難い位。遺命は、凜として耳の底に殘つて居て、區區たる此身は、惜むところではない。唯だ恐るるところは、後嗣の王樣が、然るべき輔佐の臣なくして孤立し、誰と共に成功されるかといふ一事だけである。穆公、すでに葬を終り、高墳は荊棘の間に聳え、疊疊たる黑雲は、兆域を閉ぢこめて居る。三良の壯烈なる魂魄も、同じく此中に歸宿したが、冥冥の間、路は、どこに通じて居るか。三良が死後に於て、その君の御供が出來たかどうか、まことに、覺束ない。されば、秦國の人どもは、三良の死を惜み、どうかして、その命を贖ひたいと思つたが、君の遺命で、今さら、どうすることも出來ないのを痛み、涙を注ぎつつ、彼の青天を仰いで慟哭した。そこで、黃鳥の詩が出來たので、その餘哀は、この世のあらむ限り、永久に亙つて、決して、窮まり盡くることはない。

【餘論】陶淵明の原作は、格別の者でもなく、青邱の此作も、矢張、伯仲の間に在つて、その平生の伎倆を認めることの出來ないのは、如何したことか。はじめに、三良の殉葬の不可なるを論じ、次に三良の心中に立ち入つて、一死もとより惜まざれども、死後の國事が心配になるといつて、その深衷を忖度し、頗る周匝ではあるが、翻つて聊か煩縟に失した嫌ひがある。

詠荊軻

荊軻を詠ず

(一)劫盟非(二)義擧。(三)曹沫已可羞。
劫盟は義擧に非ず、曹沫、すでに羞づべし。

(四)燕丹一何愚。(五)區區(六)祖遺謀。
燕丹、一に何ぞ愚なる、區區、遺謀を祖とす。

(七)千金養荊卿。誓將報强讎。
千金、荊卿を養ひ、誓つて、將に强讎に報いむとす。

(八)奉圖使入關。心知(九)絕回輈。
圖を奉じ、使して關に入らしめ、心に回輈を絕つを知る。

賓客盡白衣。相送(一〇)易水頭。
賓客、盡く衣を白くし、相送る易水の頭。

酒酣(一一)涕難落。(一二)筑聲和悲謳。
酒酣にして、涕、落し難く、筑聲、悲謳に和す。

(一三)猛氣激(一四)蒼旻。(一五)長虹爲西流。
猛氣、蒼旻を激し、長虹、爲に西に流る。

行行造秦庭。(一六)陛戟衛甚周。(一七)
臨機失始圖。(一八)利鋒竟虛投。(一九)
豪主一按劍。(二〇)社稷倏已丘。
先王禮樂生。(二一)破齊震諸侯。(二二)
苟能得此賢。(二三)伯業猶可修。(二四)
胡爲任輕易。(二五)自趣亡滅憂。
徒令後世人。歎惋餘千秋。(二六)

行行、秦庭に造り、陛戟、衞ること甚だ周ねし。
機に臨んで始圖を失ひ、利鋒、竟に虛しく投ず。
豪主、一たび劍を按ずれば、社稷、倏ち已に丘なり。
先王、樂生を禮し、齊を破つて諸侯を震ふ。
苟くも、能く此賢を得ば、伯業、猶ほ修むべし。
胡すれぞ、輕易に任せ、自ら亡滅の憂を趣す。
徒に後世の人をして、歎惋、千秋に餘らしむ。

【字解】【一】劫盟　おびやかして無理に盟はせる。【二】義擧　大義に協へる仕ぐさ。【三】曹沫　史記刺客傳に「曹沫、魯の將となり、齊と戰つて三たび敗北す。魯の莊公懼れ、乃ち遂邑の地を獻じて以て和し、猶ほ復た以て將となす。齊の桓公、魯と柯に會して盟ふを許す。桓公、莊公と既に壇上に盟ふ。曹沫、匕首を執つて、齊の桓公を劫す。桓公の左右、敢て動くなくして、問うて曰く、子、將た何をか欲す。曹沫曰く、齊は強く、魯は弱し、而して、大國魯を侵すこと、亦た以て甚し。今、魯城壞れ、卽ち齊境を壓す。君、其れ之を圖れ、と。桓公、乃ち盡く魯の侵地を歸すを許す。曹沫、三戰亡ふところ、盡く魯に復す」とある。【四】燕丹　燕の太子丹。【五】區區　こせこせとして。【六】祖遺謀　曹沫の遺謀を祖として、その眞似をする。史記刺客傳に「荊軻、坐定まる。太子、席を避け、頓首して曰く、まことに、秦王を劫し、悉く諸侯の侵地を反さしむること、曹沫の齊の桓公に於けるが若きを得ば、大に善し。不可ならば、因つて之を刺し殺さむ。これ丹の上願にして、命を委ぬるところを知らず。惟だ荊卿意を留めよ」とある。【七】千金養荊卿　千金を惜まず、何不足なく荊軻を扶持する。刺客傳に「荊卿を尊んで上客となし、上舍に舍せしめ、太子、日に門下に造り、太牢を供し、異物を具へ、間ま車騎美女を進め、荊軻の欲するところを恣にし、以て其意に順適す」とある。【八】奉圖使入闕　刺客傳に「荊軻曰く、今行いて信なくんば、秦、未だ親むべからざるなり。夫れ、樊將軍は、秦王、これを金千斤・邑萬戸に購ふ。まことに樊將軍の首と燕の督亢の地圖とを得て、秦王に奉獻せば、秦王、必ず説んで臣を見む、臣、乃ち以て報ずるあるを得む」とある。【九】絶回轍　轍は轍。歸る車を絶つ。一たび秦に入れば、もとより死ぬ覺悟で、決して再び歸らぬといふ義。【一〇】易水頭　刺客傳に「太子及び賓客その事を知るもの、皆衣冠を白うして之を送る」とある。【一一】涕離席　こらへて涙を落さぬ樣にして居る。【一二】筑聲和悲謳　刺客傳に「易水の上に至る、すでに祖して道を取る。高漸離、筑を擊つ。荊軻和して歌ひ、變徵の聲を爲す。士、皆涙を垂れて涕泣す。又前んで歌うて曰く、風蕭蕭兮易水寒、壯士一去兮不復還と。復た羽聲を爲して慷慨す。士、皆目を瞋らし、髮盡く上つて冠を指す」とある。【一三】猛氣　猛烈なる豪氣。【一四】蒼旻　蒼天に同じ。【一五】長虹　鄒陽が獄中より梁王に上つた書に「荊軻、燕丹の義を慕ひ、白虹、日を貫き、太子、これを畏る」とある。【一六】秦庭　秦の宮廷。【一七】陛戟衛甚周　殿陛の下には戟を執るものが護衛して、甚だ周到である。刺客傳に「諸郎中、兵を執つて、皆殿下に陳す」とある。【一八】失始圖　はじめの計畫が失敗した、豫想通りに行かなかつた。【一九】利鋒　卽ち匕首。刺客傳に「乃ち其匕首を引いて、以て秦王に擿つ、中らず、銅柱に中つ」とある。【二〇】豪主一按劍　この二句は、秦の始皇が大に腹を立て、一たび劍に手をかけると、燕の社稷は亡びて、邱墟に成つて仕舞つたといふ意。刺客傳に「ここに于て、秦王大に怒り、益す兵を發して趙に詣らしめ、王翦の軍に詔して、以て燕を伐たしめ、十月にして薊城を拔く」とある。【二一】先王禮樂生　先王は燕の昭王、樂生は樂毅。史記樂毅傳に「燕の昭王、齊を怨み、身を屈して士に下り、先づ郭隗を禮して、以て賢者を招く。樂毅、ここに于て、魏の昭王の爲に燕に使す。昭王、客禮を以て之を待つ。樂毅、辭讓せしが、遂に質を委して臣となる。燕の昭王、以て亞卿となす」とある。【二二】破齊　樂毅傳に「燕の昭王、悉く兵を起し、樂毅をして上將軍たらしむ。趙の惠文王、相國の印を以て樂毅に授く。樂毅、ここに于て、併せて趙楚韓魏燕の兵を護し、以て齊を伐ち、これを濟西に破り、齊の七十餘城を下す」とある。【二三】此賢　この樂毅の如き賢者。【二四】伯業　霸業に同じ。【二五】輕易　輕率にして簡易なる計らひ。【二六】歎惋　嘆き惜む。

【題義】荊軻は、史記刺客傳に「荊軻は、衞人なり。而して、燕に之く、燕人、これを荊卿といふ」とある。その秦王を刺さむとして、不成功に畢つた事實は、誰でも知つて居るし、且つ字解の中に分截して出て居るから、ここに詳述する必要はない。前詩の條に述べた通り、この題にも陶淵明の作があつて、卽ち左の通りである。

燕丹善養レ士。志在レ報二強嬴一。招二集百夫良一。歳暮得二荊卿一。君子死二知己一。提レ劍出二燕京一。素驥鳴二廣陌一。慷慨送レ我行。雄髮指二危冠一。猛氣衝二長纓一。飲餞易水上。四座列二羣英一。漸離擊二悲筑一。宋意唱二高聲一。蕭蕭哀風逝。淡淡寒波生。商音更流涕。羽奏壯士驚。心知去不レ歸。且有二後世名一。登レ車何時顧。飛蓋入二秦庭一。凌厲越二萬里一。逶迤過二千城一。圖窮事自至。豪主正怔營。惜哉劍術疎。奇功遂不レ成。其人雖二已沒一。千載有二餘情一。

兩篇を對照して見ると、青邱は、淵明の字面を切り出して使用して居るので、蓋し、その後塵に歩するものと云はれても仕方がない。

【詩意】脅迫して盟はせるといふことは、斷じて、義擧ではなく、たとひ曹沫が成功したにしろ、その事、もとより羞づべきものである。しかるに、燕の太子丹が、區區として、曹沫の遺謀を祖とし、その眞似をしやうといふのは、いかにも、愚の至りである。かくて、千金を惜ます、供給を十分にして荊卿を扶持し、誓つて、强い仇讐たる秦に對して仕かへしを爲やうと思つて居た。その督亢の地圖を奉じ、使として、西、函谷關に入らしむるや、荊軻は、心中に生きて歸らぬことを覺悟して居た。太子の賓客どもは、皆衣を白くして、これを易水の邊に送つたが、酒酣なるとき、涙を落すことを憚つて、ぢつと怺へて居ると、やがて、高漸離の擊つ筑の聲が、荊軻の悲壯なる歌に和して聞こえ、猛烈なる豪氣は、激して靑天をも衝かむばかり。その爲に、白虹一道、長く引いて、西の方に流れた。行き行きて、秦の宮廷に至れば、殿陛の下には執戟の者どもが居ならびて、警衞甚だ周到、荊軻は、折角の好機會に際して、豫期せる目論見通りに行かず、はては、鋭利なる匕首を投げつけたが、それも中らず、身、敵國に死して、遂に成功するところが無かつた。それのみか、始皇が大に怒つて、一たび劍を按ずれば、大軍、直に押し寄せて、社稷は、忽ち邱墟と化し、さしもの燕國は、ここに滅亡して仕舞つた。さきに、先代の昭王は、樂毅を禮し、その力に依つて齊を破り、餘威、諸侯を震はしめた位。この際、もし樂毅の如き賢者を得たならば、まだまだ覇業を修めることは出來たらうに、如何なれば、輕はずみの暴擧に任かせて、社稷滅亡の憂を促し、いたづらに、後世の人をして、千秋を經ても、なほ嘆惋の思に堪へざらしめたのであるか。太子丹の計らひは、如何にも向見ずで、遺憾の至である。

【餘論】劫盟非二義擧一の二句は、堂堂たる議論で、かの刺客輩を愧死せしめるに足るものである。燕丹一何愚より利鋒竟虛投に至るまでは、荊軻入秦の事實を敍したので、その敍述の簡潔精當なるは、極

めて宜しい。豪主一抜レ剣の二句は、燕の滅亡を敍し、先王禮二樂生一の八句は、賢者を得れば、なほ霸業を圖ることを得べきに、詰まらぬ暴擧の爲に、滅亡を早めたのは、かへすがへすも殘念だといふので、上の燕丹一何愚と遙に相呼應して居る。作者の云ふところは、一應尤もではあるが、當時果して樂毅の如き賢者ありしや否や、又然るべき人があつたにしても、曠日彌久、何の效果も無からうと危ぶまれるが如何か。それから、この首は、荊軻を詠ずと題せるものの、究極は、太子丹の無謀を攻撃したので、肝腎の荊軻は、いつの間にか、あらぬ方に吹き飛ばされて仕舞つた樣な感がある。荊軻が太子の知遇に酬ゆる爲に、一死を期し、匕首を懷にして虎狼の秦に入るといふことは、後人の同情を惹く所以で、さればこそ、陶淵明は、惜哉劍術疎、奇功遂不レ成、其人雖二已沒一、千載有二餘情一といつたので、その方が、善く題義にも協つて居る。靑邱の此詩の如き、折角ながら、迂儒の見解てふ譏を免れざるもので、且つ題義に合はぬは、まことに怪訝の至である。

魏使君見示呂忠肅公舊贈詩因賦

魏使君、呂忠肅公舊贈の詩を示さる、因つて賦す

（一）公昔隱（二）江夏。（三）巖棲避兵革。
公、むかし江夏に隱れ、巖棲、兵革を避く。

（四）遠挹（五）戴叔鸞。（六）清風灑泉石。
遠く戴叔鸞を挹し、清風、泉石に灑ぐ。

有時歌（七）梁甫。慷慨人未識。
時あつて、梁甫を歌ひ、慷慨、人、未だ識らず。

（八）左丞（九）中朝彦。（一〇）仗節任（一一）方伯。
左丞、中朝の彦、節に仗つて方伯に任ず。

北還（一二）駐巖程。（一三）造廬問（一四）籌策。
北に還つて巖程を駐め、廬に造つて籌策を問ふ。

知非（一五）山澤儒。期是（一六）廊廟客。
知る山澤の儒に非ず、期す是れ廊廟の客。

（一七）磯石繫（一八）官舫。猿叫月初夕。
磯石、官舫を繫ぎ、猿、叫んで、月、初めて夕なり。

秉燭題贈詩。（一九）蒲圻掩孤驛。
燭を秉つて贈詩を題し、蒲圻、孤驛を掩ふ。

欣欣得賢喜。耿耿憂國戚。
欣欣として、賢を得て喜び、耿耿として、國を憂へて戚ふ。

短章寄深情。（二〇）相投重（二一）珪璧。
短章、深情を寄せ、相投じて珪璧よりも重し。

邇來復幾年。（二二）淪落已（二三）陳跡。
邇來、復た幾年、淪落すでに陳跡。

公起佐（二四）興運。身名正輝赫。
公起つて、興運を佐け、身名正に輝赫。

（二五）侍誦肅（二六）春闈。（二七）専城森（二八）畫戟。
誦に侍して春闈肅たり、城を專にして畫戟森たり。

緬懷舊知己。永歎（二九）泉壤隔。
緬懷す、舊知己、永く歎ず泉壤の隔つるを。

難懸延陵劍。(三〇)空聽山陽笛。(三一)　懸け難し延陵の劍、空しく聽く山陽の笛。

遺篇篋中藏。每誦如再覿。(三二)　遺篇、篋中に藏し、每に誦すれば、再び覿るが如し。

眞能重友道。未許薄俗易。(三三)　眞に能く友道を重んじ、未だ薄俗に易ふるを許さず。

一言不忍忘。況乃膺(三四)寵錫。　一言、忘るるに忍びず、況んや、乃ち寵錫を膺くるをや。

小大固可知。令人義(三五)肝激。　小大、もとより知るべし、人をして、義肝を激せしむ。

【字解】【一】公　魏使君を指す、名は觀。その小傳は、題義の條に注して置く。【二】江夏　一統志に「武昌府に屬す」とある。【三】巖棲　山中に隱居する。【四】遠挹　挹は揖と音義ともに同じ。【五】龔叔鸞　後漢書逸民傳に「龔良、字は叔鸞、汝南愼陽の人。孝廉に擧げられしが就かず、再び司空府に辟されしが到らず、州郡、これに迫る、因つて、逃れて江夏山中に入り、優游して仕へず。はじめ、良、五女あり、竝に賢、姻を求むるものある每に、輒ち就いて嫁するを許し、疎裳布被、竹笥木屐、以て之を遣る。五女、能く其訓に遵ひ、皆隱者の風あり」と見ゆ。【六】清風濯泉石　その性行の高尙なることを形容して云ふ。【七】梁市　蜀志諸葛亮傳に「亮、躬づから隴畝に耕し、好んで梁父吟を爲し、每に自ら管仲樂毅に比す」とある。【八】左丞　呂忠肅を指す、名は思誠、その小傳は題義の條に注して置く。【九】中朝彥　朝廷で傑出せる人。【一〇】仗節　節は天子より賜はる節信、高適の郭代公の詩に「仗節歸有德」とある。【一一】方伯　一地方の旗頭で守令を總轄して支配する。鹽鐵論に「令守相親み、符を剖いて貫拜し、一郡の衆に莅むは、古しへの方伯の位なり」とある。【一二】駐數程　嚴重なる旅程の中で特に此中に一寸留まる。【一三】造廬　魏觀の菴居を訪ふ。【一四】綸策　天下を經綸する方策。【一五】山澤儒　隱遁せる儒者。【一六】廊廟客　中央政府の高官。【一七】磯石　磯は江海の邊の斷崖。【一八】官舫　官用の舟。【一九】蒲圻　地名。【二〇】相投　詩を贈りしこと。【二一】珪璧　ともに玉。【二二】淪落　呂思誠の死をいふ。【二三】陳跡　むかしの名殘。【二四】興運　明室隆興の氣運。【二五】侍講　侍讀に同じ。【二六】春闈　陸贄の文に「春闈を輔翼し、是れ教導に資す」とあつて、春闈は太子の宮。【二七】專城　一州の刺史となつて州城內に住すること、羅敷行に「四十專城居」とあり、孟浩然の詩に「前後賴專城」とある。【二八】畫戟　むかし、大官の家では、警護の意味で、玄關先に畫戟を竝べて置いた。【二九】泉壤　黃泉と黃土。【三〇】延陵劍　史記吳世家に「季札の初めて使するや、北、徐君を過ぐ。徐君、季札の劍を好めども、口敢て言はず。季札、心に之を知りしが、上國に使するが爲に、未だ獻ぜず。還つて徐に至る、徐君、すでに死す、札、乃ち其寶劍を解き、これを徐君の冢樹に繫いで去る」とある。【三一】山陽笛　魏氏春秋に「嵇康、河南の山陽縣に寓居し、河內の向秀と相友とし善し」とあり、晉書向秀傳に「秀、山陽の舊廬を經、鄰人笛を吹くものあり、聲を發すること寥亮、秀、乃ち思舊の賦を作る」とある。【三二】再覿　再び面晤する。【三三】薄俗易　輕薄なる風俗に化して仕舞ふ。【三四】膺寵錫　心を用ひたる寄贈を受ける。【三五】義肝　義氣に滿ちた肝膽。

【題義】使君は官職ある人の尊稱。過廷訓の人物考に「魏觀、字は杞山、蒲圻の人。書を蒲首山中に讀む。元の呂忠肅、朝に薦めしが、辭して就くことなし。國初徵され、青田の劉基・金華の宋濂諸儒と同じく謁す。上、ともに語つて大に之を奇とし、平江州學正を授け、國子助教浙江提刑僉事に遷る。吳の元年、兩淮都轉運使に改められ、入つて起居注となる。洪武の初、大本堂を建て、觀に命じて太子の說書に侍せしめ、及び秦晉諸王に經を授く。三年十二月、大明志を編集して成る。觀を以て國子祭酒となす。四年、進士を廷試するや、觀、讀卷官たり、乃ち吳伯宗等一百二十人を得たり。開科の始、人を得ること、最も盛なり。上、姑蘇が京輔の重地として、張士誠の亂を經、寧宇あるなきを念ふ。廷臣、咸な觀の治才あるを薦む。乃ち出でて蘇州府に知たり。すでに、事に莅む、課績、天下の最た

り。上、これを嘉し、陟せて四川行省參知政事となす。蘇の父老、上書して、留まらむことを願ふ。仍つて、觀に命じて郡に還らしむ。七年、觀、舊治制、張士誠に竊據せられ、且つ郡に水患多きを以て、乃ち府を修し、錦帆涇を浚ひ、以て士觀を壯にし、以て民利に資す。御史張度、その旣滅の基を興すを誣ひ、遂に高啓等と倶に罪を獲たり。上、これを悔い、所在に命じて祭を致さしめ、皇太子諸王、哀賻加ふるあり、歸つて、蒲圻の燈窩山に瘞む」とある。かくの如く、魏觀は、全く讒誣に因つて身を喪つたので、まことに、氣の毒の至。そして、青邱が其連累となつて棄市されたのは、慘酷吏に甚しく、明の太祖の猜忌は、殆んど、他に其比なき程である。魏觀は、亦た詩を善くし、誦すべきもの少からず、陳田の明詩紀事に「杞山の五古、質愨にして味あり。近體、亦た佳聯多し。青蟲懸レ絲不レ到レ地、黃鳥蹴レ花時近レ人。一葦載レ雲歸ニ晩一、百花吹レ雨入ニ春流一。竹樹晴煙浮ニ楚甸一、柳花春雨隔ニ樊城一。窓前峭壁懸ニ青雨一、屋上流泉繞ニ白雲一。松扉近挹橋邊翠、花島平分水上雲。鳥度ニ春陰一歸ニ漢甸一、江含ニ雲影一護ニ襄城一。皆誦すべきなり。杞山の治績、一時に擅絶す、ただ守邸を修し、城河を浚ふを以て、御史張度、誣ふるに、基、滅國を興し、涇、錦帆を浚ふを以てし、遂に慘戮に遭ひ、高季迪・王常宗、亦た牽連して以て死す、哀しいかな」とある。呂忠肅、名は思誠、元史の本傳に「思誠、字は仲實、平定州の人、泰定元年の進士、至正の初、僉浙西廉訪司事たり。浙江行省平章左吉の貪墨を劾奏して、海南に流す。思誠、尋いで集賢學士に拜せられしが、吏部尚書偰哲篤・左司都事武祺等と鈔法を議して合はず、湖廣行省左丞に左遷す。武昌城下に抵り、賊の不意に出でて城に入る。賊、盡く驚き走る。思誠、乃ち大に軍民官吏を會し、これに告げて曰く、賊去る、吾に弱を示すなり。規るに將に復た來らむとす、と。ここに于て、號令を申べ、職事を戒め、器械を修し、城郭を葺し、部伍を明かにし、先づ自守を謀り、徐に出征を議す。苗軍橫暴、省憲を侵辱す。思誠、色を正しうして、これを叱して曰く、若等、能く呂左丞を殺すかと。これより、敢て復た至るなし。かつて、未だ數日ならずして、召し還され、復た中書左丞となる。思誠、去つて二日、城、復た陷る。光祿大夫司農に移り、俄に疾を得て卒す、忠肅と謚す」とある。この首は、ある時、青邱が魏觀を訪問すると、むかし呂思誠が贈つたものだといつて、詩を見せて呉れたから、因つて、賦したのである。

【詩意】 魏公は、さきに江夏の蒲首山に隱れ、巖谷の間に居て、世の騷亂を避け、はるかに戴叔鸞の如き古しへの隱者に長揖し、その性行の洒脫なることは、清風が泉石に灑ぐが如くであつた。それでも、全く此世を思ひ切つた譯ではなく、時とすると、諸葛亮の如く、梁父吟を歌うて、その志を寄せたが、本來慷慨家であることは、誰も知らなかつた。ここに、湖廣行省左丞の呂思誠は、朝廷に於ける有數の人物で、天子より賜はりし節信に依つて、一方の旗頭たる方伯の顯職に任じ、ある時、北に還らむとする途すがら、特に嚴重なる日程を枉げて、江夏に駐まり、魏觀の菴を過ぎて、天下を經略する方策を問ひ、觀の人物を見拔いて、もとより區區として山澤の間に隱れて居る窮儒ではな

く、天晴、廊廟の大臣たるべきものとした。それから、引きかへして、江岸斷崖の下に官船を繫ぎ、猿聲一呼、月の初めて上る夕、舟中に於て、燭を秉り、魏觀に贈る詩を作らうとしたが、そは蒲圻の孤驛が夜色に掩はれて、ほの暗くなつた時分であつた。呂思誠は、一代の人物であるから、ここに賢人に遇つたといふので、欣欣として喜び、翻つて、國家の多難に就いては、耿耿として憂へ、仍つて、詩を作つて、短章の中に深情を寄せ、これを魏觀に贈つたので、まことに、珪璧よりも貴いものである。爾後幾年になるか知らぬが、呂思誠は、すでに死んで仕舞つて、唯だ陳跡が殘つて居るだけであるが、魏觀は、やがて、草廬より起ち、明室隆興の運を佐け、立身して聲譽を得、身名兩つながら赫赫として輝くばかり、さきには、太子の侍讀として、肅然たる東宮に參入し、今は蘇州の知府となつて、邸宅の前には、森然たる晝戟を竝べてある。ここに、むかしの知己たりし呂思誠を思へば、黃泉黃土、長しへに相隔り、延陵の季子に倣うて、劍を塚樹に懸けることも出來ず、ただ向秀が山陽の舊居を過ぎて、鄰人の吹笛を聞いた樣に、感慨に堪へぬのも、まことに御尤もな次第。その呂思誠が贈つた詩は、篋中に藏し、時たま取り出して之を誦する度ごとに、再び其人に遇つた樣な氣がするとのことで、魏觀その人、まことに能く友道を重んじ、末世輕薄の俗に全然化して仕舞はないのは、流石に偉い。それだの一言でも、忘れるに忍びないのに、贈詩の如き結構なる賜を受けては、猶更の事である。その一言と贈詩との小大は、もとより分かつたことで、兩人の遇合は、人の義肝を激發すべく、まことに、千古に傳ふるに足る話柄である。

【餘論】公昔隱江夏より慷慨人未識に至るまでは、魏觀の隱棲及び其人物を敍し、左丞中朝彥より淪落已陳跡に至るまでは、呂思誠の過訪贈詩を記し、公起佐興運より空聽山陽笛に至るまでは、魏觀の立身と呂思誠を追慕する至情とを寫し、遺篇篋中藏より令人義肝激に至るまでは、純ら遺詩に就いて云ひ、兼ねて、魏觀の高義を讚稱したのである。

題秋林高士圖

秋林高士の圖に題す

(一)二仲有(二)玄賞。(三)相攜在中林。　二仲、玄賞あり、相攜へて中林に在り。

(四)遐景(五)延迥步。(六)微言(七)諧素襟。　遐景、迥步を延き、微言、素襟に諧ふ。

天秋(八)谷響哀。日暝(九)川光陰。　天、秋にして、谷響哀しく、日、暝して、川光陰る。

風駛多(一〇)委葉。山空少歸禽。　風、駛つて、委葉多く、山、空しくして、歸禽少し。

(一一)威遲臨長岡。(一二)迢遞指遠岑。　威遲として、長岡に臨み、迢遞として、遠岑を指す。

(一三)諒非(一四)羇離客。詎用愁登臨。　まことに、羇離の客に非ず、詎ぞ登臨を愁ふるを用ひむ。

【字解】【一】二仲　三輔決錄に「蔣詡、字は元卿、舍中三徑あり、惟だ羊仲・求仲、これに從つて遊ぶ、二仲皆挫廉逃名の士」とある。

【二】玄賞 玄妙なる游賞、宋書高祖紀に「祗、玄賞を窮む」とある。【三】相攜 主人の蔣詡が二仲を攜へること。【四】遐景 遠景に同じ。【五】延迴步 遠くまで歩く。【六】微言 同行者の微妙なる言葉。【七】諧素襟 朴素たる懷抱に諧ふ。【八】谷響 谷中の風の響。【九】川光 川水の色。【一〇】委葉 落葉に同じ。【一一】威遲 險阻なる貌、潘岳の詩に綾阪路威遲とある。【一二】迢遞 遠き貌。【一三】諒 まことにと訓すべし。【一四】羇離客 ひとり離れたる旅客。

【題義】この首は、秋林に高士が友を連れて逍遙して居る樣を畫いた圖に題したのである。

【詩意】圖中に見えたる二人の客は、古しへの羊仲・求仲に比すべく、もとより玄妙なる游賞を喜んで居るので、蔣詡に比すべき主人は、これと相攜へて、林中を逍遙し、遠景を眺めつつ、はるばると歩を移し、互に語り合ふ微妙なる言葉は、朴素なる懷抱に諧うて、まことに愉快氣に見える。時しも、天、秋にして、谷中の風の聲、自ら哀しく、日、夕ならむとすれば、河水の色さへ曇つて見える。風の馳するときは、落葉多く、山は空しくして、ここに歸つて宿する鳥も少い。ある時は、險阻なる路をたどつて、長く續く山岡を見下ろし、ある時は、遙かなる天末を望んで、遠くの嶺を指すことがある。まことに獨り離れた旅人でないから、登臨しても、客愁を惹くことなく、翻つて、快適を覺える次第である。

【餘論】これは、三人が林中に逍遙して居る圖であつて、それは起首二句に盡き、以下は、すべて畫中に見えない景色を想像して敍述し、しかも、その景色は、主として動的であり、又連續的である。遐景延迴步の二句、諒非羇離客の二句は、ともに抽象的であつて、前者と相俟ち、一虚一實、相配して恰も好きを覺える。すべて、題畫の詩は、畫中に見ゆるものを解析的に述べた處で、何等の妙味もないので、畫中の見えない、卽ち畫手の畫かむと欲して能はざりしものを寫し出し、畫と兩兩相俟つて、更に趣を加へる樣にせねばならぬ。この意味に於て、今人題畫の作は、全然、その根本の趣旨を誤つて居て、丸で物に成らぬ。今、繪葉書に通信文を書くにしても、矢張、これを繪と看做し、如上の心得を以て遣つて貰ひたいと思ふ。

春草軒雨中懷王太史

春草軒に雨中、王太史を懷ふ

西軒罷琴坐。涼思欹白苧。
颯颯樹聲繁。秋風滿池雨。
蓮衰少暗馥。禽靜多幽語。
對此闕良儔。當懽反傷緒。

西軒、琴を罷めて坐すれば、涼思、白苧を欹く。
颯颯として樹聲繁く、秋風滿池の雨。
蓮は衰へて、暗馥少く、禽は靜にして、幽語多し。
これに對して、良儔を闕く、當に懽ぶべくして、反つて緒を傷ましむ。

【字解】【一】欹 馮倚する。【二】白苧 精選した麻布の單衣。【三】暗馥 暗香に同じ。【四】幽語 幽妙なる鳴き聲。【五】傷緒 心緒を傷ましめる。

【題義】春草軒は、何處に在るか分からぬが、いづれ、靑邱の書室であらう。王太史は、前に數ば見えた王彝。この首は、雨中、春草軒に獨坐して、王彝を懷ひ、仍つて之を寄せたのである。

【詩意】書齋に倚つて、琴を彈じて居たが、やがて、一曲を畢り、悄然として獨坐して居ると、涼しき氣は、薄い白苧の衣を壓倒して、一寸堪へられぬ位。折しも、颯颯として樹聲繁く、その秋風の吹き渡る池の面には、雨が頻りに降つて居る。蓮の花は、すでに散つて、暗香だに少く、鳥は靜にして、その鳴聲は、一しほ幽妙に聞こえる。この淸寂なる景色に對して、あたら良友の來り訪ふものなく、元來歡ぶべき筈であるのに、却つて、心緒を傷ましめる。

【餘論】中間の四句は、純ら敍景の語で、起首二句と相待ち、反つて心緒を傷ましめる所以も、明白である。それは、良儔を缺くからであつて、つまり、王彝その人の來訪を望んだのである。

始遷西齋
始めて西齋に遷る

乍(一)縣南樓榻。始布(二)西齋筵。
乍ち南樓の榻を縣け、はじめて西齋の筵を布く。

西齋非吾廬。幽淨亦可憐。
西齋は吾が廬に非ざるも、幽淨、亦た憐むべし。

風牖竹裊(三)裊。露庭菊鮮鮮。
風牖、竹裊裊、露庭、菊鮮鮮。

(四)圖史左右陳。永日坐一氈。
圖史、左右に陳し、永日、一氈に坐す。

(五)婉孌數童子。哦(六)誦當我前。
婉孌たる數童子、哦誦、我が前に當る。

爲爾竟寂寂。低回欲窮年。
爾が爲に、竟に寂寂、低回、年を窮めむと欲す。

讀書將何爲。乃與(七)始志愆。
讀書、將に何をか爲さむとす、乃ち始志と愆る。

進無適(八)時材。退乏負(九)郭田。
進んでは適時の材なく、退いては負郭の田に乏し。

我生非(一〇)匏瓜。謀(一一)食有道焉。
我が生、匏瓜に非ず、食を謀る、道あり。

苟得隨(一二)羣趨。顧此不稍賢。
苟くも羣に隨つて趨るを得ば、この稍や賢ならざるを顧る。

(一三)飮餘解衣臥。毋(一四)嘲腹便便。
飮餘衣を解いて臥す、嘲る毋れ腹便便。

【字解】【一】乍縣南樓榻　晉書庾亮傳に「亮、武昌に在り。諸佐吏、殷浩の徒、秋夜に乘じて、ともに南樓に登る。俄にして亮至る、諸人、將に起つて之を避けむとす。亮、徐に曰く、諸君、しばらく住まれ、老子、ここに於て興淺からず」とあり、後漢書徐穉傳に「太守陳蕃、郡に在り、賓客に接せず。唯だ穉來れば、特に一榻を設け、去れば之を懸く」とある。榻は腰かけ。今までは南樓に居たが、榻を懸けて之を片付けたといふこと。【二】始布西齋筵　はじめて、西齋に敷物を鋪いた。【三】裊裊　たをやかに風に靡く貌。【四】圖史左右陳　唐書楊綰傳に「性沈靖、ひとり一室に處り、左右圖史」とある。圖籍書史を共席の左右に列べて置く。【五】婉孌　容貌の美なるをいふ。【六】哦誦　詩を吟じたり本を讀んだりする。【七】與始志愆　本來の夙志に違ふ。【八】適時材　時勢に適應したる材器。【九】負郭田　郭は城壁、城壁を負うて之に近接したる城外の田、史記蘇秦傳に「我をして洛陽負郭の田二頃を

有せしむれば、豈に能く六國の相印を佩びむや」とある。【一〇】非匏瓜　論語に「吾、豈に匏瓜ならむや、焉んぞ能く繋つて食はざる」とあつて、瓢たんではないから、ぶら下つた儘、食はずに居る譯には行かぬ。【一一】謀食　生活を得る算段をする。【一二】隨衆趨　衆人に隨つて風塵中を走る。【一三】飲餘　酒を飲んだ揚句。【一四】毋嘲腹便便　後漢書邊韶傳に「韶、かつて晝日に假臥す。弟子、私に之を嘲つて曰く、邊孝先、腹便便、懶レ讀レ書、但欲レ眠と。韶、ひそかに之を聞き、時に應じて對へて曰く、邊爲レ姓、孝爲レ字、腹便便、五經笥、但欲レ眠、思二經事一、寐與二周公一通レ夢、靜與二孔子一同レ意、師而可レ嘲、出二何典記一」とある。

【題義】 西齋は、何處に在るか、分からぬが、非二吾廬一と斷つてある以上は、蘇州の故里ではなく、もしかすると、吳淞江上の靑邱に假寓して居た頃の僦宅に在るのではないかと思はれる。靑邱は、はじめに、南樓に居たが、後に西齋に遷つたから、乃ち此詩を作つたのである。

【詩意】 いささか、都合あつて、今まで居た南樓を俄に始末し、榻を懸けて仕舞ひ、それから、西齋を掃除して敷物を展べた。この西齋は、もとより、吾が廬に非ざれども、その風光の幽深淨潔なることは、まことに愛すべきばかり。風の吹き入る窓には、竹が裊裊として打靡き、露おき餘る庭もせには、菊が鮮鮮として新に咲き出でた。そこで、席の左右には書史を雜陳し、終日、毛氈の上に坐して、しきりに涉覽を務めて居る。容貌あでやかなる童子數人、わが前に居て、詩を吟じたり、本を讀んだりして居るから、その邪魔にならむことを氣遣ひ、汝の爲に、寂寂として物言はず、低回して、年を送るといふ始末。おもへば、何の爲に讀書をするのか、世事は、初志と違つて、おもふ樣に成らず、折角の讀書も、ここに至れば、何の役にも立たぬ。進んでは、時勢に適應したる材器なく、退いては、城外に近き田地を持つて居らず、進退兩つながら閉口の至である。われは、棚からぶら下つて居る瓢たんと違つて、飯を食はねばならず、生活の算段には、自然、その方法がある。まことに、衆人に隨つて、風塵中を驅け廻ることが出來れば、結構らしく見えるが、考へて見れば、それは、尋常人の事で、格別の賢人ではなく、自分は、そんな眞似はせぬ積りである。そこで、酒を飲んだ揚句に、衣を脫ぎ棄てて臥して居るが、腹便便として、まことに眠むさうであるといつて嘲つて吳れるな。

【餘論】 風隔竹裊裊の四句は、敍景敍事を倂せて、例の最得意の筆致である。通篇を一讀しても、作者の本志は、一寸摸索し惡いが、羣に隨つて趨るを恥とし、卽ち尋常に度越することを以て理想とし、仍つて、しばらく、その時を待つて居るといふのであらう。

次二徐山人與二倪雲林一贈答詩韻一

徐山人と倪雲林との贈答詩の韻に次す

昔遊二紫藤塢一。(一)空山鶴鳴秋。　むかし、紫藤塢に遊ぶ、空山鶴鳴くの秋。

相望隱人居。(二)興闌竟回レ舟。(三)(四)　相望む隱人の居、興闌にして竟に舟を回す。

邇來獲二晤賞一。(五)玄談劇風流。(六)　邇來、晤賞を獲たり、玄談、劇だ風流。

每欲開南軒。招我共偃休。（七）
毎に南軒を開き、我を招いて、共に偃休せむと欲す。

天寒鴻雁鳴。芰（八）荷落長洲。
天寒くして鴻雁鳴き、芰荷、長洲に落つ。

豈無一釣船。訪子溪水頭。
豈に一釣船、子を溪水の頭に訪ふなからむや。

終慙文（九）墨牽。咫尺成阻修。（一〇）
終に慙づ、文墨に牽かれ、咫尺、阻修を成すを。

徒聞竹林間。往來有羊求。（一一）
徒に聞く、竹林の間、往來、羊求あるを。

聽雨掩閣臥。觀泉上巖遊。
雨を聽いて、閣を掩うて臥し、泉を觀て、巖に上つて遊ぶ。

朝覽贈答篇。詞藻誇兩優。（一二）
朝に贈答の篇を覽、詞藻、兩優を誇る。

味之殊雋永。觸手虹光浮。
これを味へば、殊に雋永、手を觸るれば、虹光浮ぶ。

我本邱壑人。猿鶴肯見留。
われ本と邱壑の人、猿鶴肯て留めらる。

擬結歲（一三）晏期。壺觴展（一四）綢繆。
擬す、歲晏の期を結び、壺觴、綢繆を展ぶるを。

況聆西澗濱。禪（一五）宮閟清幽。
況んや聆く、西澗の濱、禪宮、清幽に閟ざすを。

夜看太湖月。遲我同登樓。
夜、太湖の月を看ば、我を遲つて、同じく樓に登れ。

【字解】【一】紫藤塢　塢は隄、姑蘇志に「穹窿山北に紫藤塢・百丈泉・海雲菴あり」と見ゆ。【二】隱人居　隱人は徐山人。【三】興闌　闌は盛りを過ぎて、稍や下火に成りかけたこと。【四】回舟　晉書王徽之傳に「かつて、山陰に居る、夜雪はじめて霽る。月色清朗、忽ち戴逵を憶ふ。逵、時に剡に在り、便ち、夜、小船に乘じて之に詣り、經宿方に至る。門に造り、前まずして返る。人、その故を問ふ。徽之曰く、本と興に乘じて來り、興盡きて返る、何ぞ必ずしも安道を見むや」とある。安道は戴逵の字。【五】晤賞　面會して吟賞する。【六】玄談　玄を談ず、玄は老莊の哲理。【七】偃休　偃臥して休息する。【八】芰荷　芰は菱、酉陽雜俎にて「今人、但だ菱芰といひ、諸解草木書、亦た未だ分別せず、唯だ王安貧の武陵記に云ふ、四角三角を芰といひ、兩角を菱といふ」とあり、本草注に「その葉支散、故に、字、支に从ふ」とある。【九】文墨牽　文事の爲に牽引せらる。【一〇】阻修　阻まつて隔たる、疎濶。【一一】羊求　羊仲・求仲の二人、前の題秋林高士圖の詩中に見ゆ。【一二】兩優　原作と和作と兩つながら優れて居る。【一三】歲晏期　歲暮を以て期となす。【一四】展綢繆　結ぼれて居た相思の情を展べる。【一五】禪宮　姑蘇志に「穹窿山の西址に白馬寺あり」と見え、大方、それを指したのであらう。

【題義】　徐山人は、金檀の注に「徐達左、字は良夫、吳縣の人、建寧訓導、雲林と贈答の詩あり」と見えて居る。倪雲林、名は瓚、其の小傳は、前に題倪雲林所畫義興山水圖の條に注して置いた。この首は、徐達左が倪雲林と贈答した詩に次韻して達左に贈つたのである。達左は、さのみ知名の人でもないから、その集は傳はつて居らぬし、諸種の選本にも、あまり其詩を抄出しないから致方ないことし、倪雲林には、立派な集があつて、今に傳はつて居るから、試に點檢した處が、多分散佚の結果でもあらうが、達左と唱和せし詩などは、丸で見えぬから、その原作を知ることが出來ない。

【詩意】　さきに、穹窿山北の紫藤塢に遊んだが、空山秋深くして、鶴の聲高く響く時であつた。そこで、隱者たる徐山人の宅を望み、是非、往つて尋ねやうと思つたが、興盡きかかりし爲め、竟に舟を

回して仕舞つた。その後、面晤して吟賞することを得、ともに、玄を談じて、風流自ら恣にした。山人は、毎毎南軒をしつらへ、われを招いて、一緒に偃臥休息したいといふ考であつた。今しも、天寒くして鴻雁鳴き度り、菱や蓮の花は、長洲に落ち、秋正に清き折から、一艘の釣舟を用意して、君を渓水の邊に訪ふことの出來ない譯でもないが、愧づらくは、區區たる文事に牽き付けられ、咫尺の間に居りながら、疎濶に打過ぎたのは、殘念至極、唯だ竹林の間に、羊仲・求仲に比すべき樣な人たちが日夕往來することを聞いて、羨ましく思ふばかり。われは、此に居て、或は雨を聞きつつ閤を閉ぢて臥し、或は泉を觀むが爲に巖に上つて游んで居るが、今日、君が倪雲林と贈答された詩篇を見ると、原作も、和作も、ともに詞藻が優れて居て、これを味ふと、愈よ雋永、手を觸るれば、虹が浮び出る樣な想がする。われは、元と邱壑に住むべき者であつて、山中の猿鶴も、承知で引き留めて居る位。されば、歲晚を期として、一たび君を訪ひ、杯酒以て綢繆の思を展べたいと思つて居る。まして、西澗の濱には、白馬寺といふ禪宮があつて、淸幽なる風物を閟ざして居るといふから、勿論、一緒に游ぶも宜しく、それから、夜、太湖からさし上る月を見るときには、われを待つて、共に樓に登り、幽賞を縱にしたら善からうと思ふ。

【餘論】昔遊紫藤塢より招我共偃休に至るまでは、徐山人との交誼を追思し、天寒鴻雁鳴より往來有羊求に至るまでは、頃ろ其居を訪はむとして未だ能はざるを云ひ、聽雨掩閤臥より觸手虹光浮に至るまでは、山人が倪雲林と贈答せし詩篇を見たことを敍し、我本邱壑人より遲我同登樓に至るまでは、いづれ近い内に訪問するから、その積りで待つて居て貰ひたい意を述べたので、その段落截然として明かに、敍述周匝なるは、例の事ながら、措辭の洗鍊、未だ足らざるは、聊か遺憾である。

因病不飲

病に因つて飲まず

我昔無所求。但愁酒盃空。
われ、むかし求むるところなく、但だ愁ふ酒盃の空しきを。

引滿先四座。醉豪壓春風。
滿を引いて、四座に先ち、醉、豪にして、春風を壓す。

年來病稍侵。積憂復相攻。
年來、病稍く侵し、積憂、復た相攻む。

擧觴不能呑。若有物梗胸。
觴を擧ぐるも呑むこと能はず、物あつて胸を梗ぐが若し。

歲晏風雨多。擁爐坐牕中。
歲晏くして風雨多く、爐を擁して牕中に坐す。

酒徒散去盡。歡呼與誰同。
酒徒、散去し盡し、歡呼、誰と同じき。

三盃卽頹然。憔顏映燈紅。
三盃、卽ち頹然、憔顏、燈に映じて紅なり。

後老當奈何。卽今已如翁。
後老、當に奈何すべき、卽今、すでに翁の如し。

斯味（八）禹所惡。攝生笑無功。　この味、禹の惡むところ、攝生、功なきを笑ふ。

從此便可止。賦詩（九）繼陶公。　これより、便ち止むべし、詩を賦して陶公に繼ぐ。

【字解】【一】引滿　盃に一ぱいになつて居るのを傾ける。【二】酣豪　酣態の豪快なること。【三】梗胸　胸を塞ぐ。【四】酒徒　飲み仲間。【五】頽然　醉ひつぶれる。【六】憔顏　憔悴せる顏色。【七】後老　後れて老ゆる、なかなか老衰せぬこと。【八】禹所惡　帝王世紀に「儀狄、酒を造る、禹、飲んで之を甘しとして曰く、後世、これを以て國を亡ぼすものあらむと、遂に儀狄を疏んず」とある。【九】繼陶公　陶淵明に止酒と題する詩があつて、その中に、始覺止爲ㇾ善、今朝眞止矣の二句がある。

【題意】病氣の爲に酒を飲ます、仍つて、之を賦したのである。

【詩意】われは、往年、何も外に求めるところなく、酒さへあれば、それで善かつたので、酒杯の空しきことだけを愁へて居た。酒を飲むときは、四座の羣客に先つて滿を引き、酣態の豪快なるは、春風を壓倒せむばかり、しかるに、年來、病氣が次第に侵し來り、かてて加へて、積憂が亦た內から攻め、杯を擧げても、呑むことが出來ず、さながら、物あつて胸を塞いで居る樣な氣がした。ここに、歲、將に暮れむとする頃、風雨、しきりに至り、寒くて堪まらぬ處から、爐を擁して、つくねんと、窓下に坐して居る。平生の飲み仲間は、盡く散じて仕舞ひ、誰と共に歡呼しやうか、丸で相手がない。無理に呑んで見ると、三杯で、ぐッたり參り、憔悴せる顏は、燈火に映じて紅くなつた。自分に取つて、容易に老衰しないといふことは、及びなき望であつて、今現に老翁の如く成りはてて仕舞つた。元來、酒の旨味は、むかし大禹が國を亡ぼす原因となるといつて、ひどく憎惡した位、いくら攝生した處で、その害毒を除くことは、全然無效である。これより、決然として酒を止むべく、仍つて、この詩を作つて、彼の陶淵明の止酒の一吟に繼ぐ次第である。

【餘論】この首も、敍述周匝ではあるが、到底、庸近の譏を免るること能はず、且つ、その意氣の消沈も、まことに甚しく、これを以て、かの將進酒に一杯一曲、我歌君續、明月自來、不ㇾ須ㇾ秉ㇾ燭、五岳既遠、三山亦空、欲ㇾ求神仙、在杯酒中と放歌せしに比すれば、誰しも、その差の啻に霄壤のみならざるに驚倒するであらう。

三鳥

三鳥生異（一）林。相逢偶同飛。
各矜好毛（二）羽。吟弄朝陽輝。
驚風動地至。羣飛各乖（三）違。
一翔入雲天。一落陷（四）虞機。
一止野田間。蓬蒿鬱相依。

三　鳥

三鳥は、異林に生まれ、相逢うて、偶ま同じく飛ぶ。
各好毛羽に矜り、吟弄す朝陽の輝くを。
驚風、地を動かして至り、羣飛、各乖違。
一は翔つて雲天に入り、一は落ちて虞機に陷る。
一は野田の間に止まつて、蓬蒿、鬱として相依る。

啄啄有餘粟。歲晏諒不飢。　啄啄、餘粟あり、歲晏くして、諒に飢ゑず。

猶懼雪霜侵。啁啾(五)獨鳴悲。　猶は懼る、雪霜の侵すを、啁啾、ひとり鳴悲。

我行見此鳥。相對發歎欷(六)。　われ行いて、この鳥を見、相對して歎欷を發す。

當知皇天仁。偏恤爾陋微(七)。　當に知るべし、皇天の仁、偏に爾の陋微を恤むを。

視陷(八)宜省畏(九)。瞻高勿貪希(一〇)。　陷を視ば宜しく省畏すべく、高を瞻るも貪希する勿れ。

田間適本性。舍此欲何歸。　田間、本性に適す、これを舍てて何にか歸せむと欲する。

【字解】【一】異林　別別の林。【二】朝陽暉　朝日の照り輝くこと。【三】乖逢　そむき逢ふ、離れ離れになる。【四】虞機　虞は虞人、主猟官員。その用意せる機械、わな、或は網であらう。【五】啁啾　鳥の囀る聲。【六】歎欷　歎息して歔欷する。【七】陋微　その本質の側陋幺微なること、賤しくして小さい。【八】視陷　陷は陷穽、卽ち落し穴。【九】省畏　自ら反省して畏れる。【一〇】貪希　貪り且つ希望する。

【題義】この首は、三羽の鳥の各〻異なる運命に出遇へるを見、これに託して、滿腔の感慨を敍したのである。

【詩意】三羽の鳥は、別別の林に生まれたが、相逢ひし後は、偶然に同じく飛び、そして、各〻その羽毛の美なるを矜つて、朝日の光り輝く中に鳴き囀つて居る。兎角する内に、驚風颯然、地を動かして至り、今まで羣飛したのが、離れ離れになつて仕舞つた。その一は、高く翔つて、雲井の空に入り、その一は、落ちて虞人の罠にかかつた。最後の一は、野田の間に止まり、蓬の鬱として生ひ茂れる處に身を寄せて仕舞つた。幸にして、啄むに餘る程の米粒があるので、年が暮れかかつても、飢ゑることはないが、霜雪の來り侵して、寒さの彌や增すことを憂へ、啁啾として、ひとりで鳴き悲んで居る。われ路を行きつつ、會ま此鳥を見、相對して、覺えず嘆息もし、歔欷もした。汝は皇天が至仁にして、汝の側陋幺微を憐み給へることを知らねばならぬ。落し穴を視れば、反省して用意すべく、高きを瞻ては、貪つて之を希望する樣な過分の了見を起してはならぬ。この田間こそ、汝の本性に適つて居るので、これを措いては、何處へも行くところが無い。

【餘論】三鳥を見て感慨を起したといふが、無論、これは暗に比擬するところがあるに相違ない。青邱には、一兄があるだけ、且つこの詩中には三鳥生異林とあるから、これは同胞ではなく、親友の事であらう。翔つて雲天に入るといふは、榮達して朝廷の臣僚となつたことであらうし、落ちて虞機に陷るといふは、誤つて騷亂の爲に其身を喪つたもので、或は張羽・余堯臣を指すかとも思はれる。第三の野田の間に止まるといふのは、卽ち作者自身に相違ないので、その寄託遙深なるも、宜こそと頷かれる。結末四句は、卽ち自覺の語で、且つ亂世に於て其身を全うする所以の要諦である。

題陳生畫

陳生の畫に題す

前村夕陽明。後嶺秋嵐(一)積。　前村、夕陽明かに、後嶺、秋嵐積む。

葉落露山村。潮來沒江石。　葉落ちて山村を露はし、潮來つて江石を沒す。

遙遙射雁子。慘慘聽猿客。　遙遙たり雁を射るの子、慘慘たり猿を聽くの客。

何事下征帆。西陵(二)渡頭驛。　何事ぞ、征帆を下す、西陵渡頭の驛。

【字解】(一) 秋嵐　嵐は山氣、卽ちもや。(二) 西陵　卷三、夜抵江上候船至曉始行の條に見えたが、一統志に「蕭山の西陵渡は、卽ち西興」とある。

【題義】この首は、陳某の作つた畫に題したので、いづれ山水畫と見えるが、陳某の名字等は分からぬ。

【詩意】前村には、夕日影明かであるが、後嶺には、秋の靄が積んで、すでに黃昏の景色である。萬木揺落すれば、山村が見え透く樣になり、晚潮が差し初めると、江中の石が隱れて仕舞ふ。雁を射る人は、遙遙として步を進め、猿を聽くの客は、慘慘として轉た悲に堪へない樣である。扁舟一葉、西興なる渡頭の驛に至つて、帆を下ろしたのは、如何なる故か、この地は、亂後殊に慘澹を極めて、とても、所用などあらう處ではない。

【餘論】題畫の詩であるから、なるべく、畫外の趣を寫し出さむことを試み、さうならぬ處は、說明を爲すに際して、成るべく、この趣旨に添ふやうにした。葉落露山村の十字の如きは、卽ち其例である。結末二句は、時事に牽引して、遙慨蒼茫、人をして自然に心傷せしめる。

靑邱道中

靑邱道中

霖(一)雨江暴溢(二)。奔流絕津涯(三)。　霖雨、江、暴に溢れ、奔流、津涯を絕つ。

茫茫野田白。何由見春華(四)。　茫茫として野田白く、何に由つてか、春華を見む。

居人久已亡。流萍(五)滿其家。　居人、久しく已に亡び、流萍、その家に滿つ。

昔我過此土。極目(六)桑與麻。　むかし、我、この土を過ぐ、極目、桑と麻と。

故道不可尋。舟行但蒹葭(七)。　故道、尋ぬべからず、舟行、但だ蒹葭。

歲凶豈宜客。四顧空長嗟。　歲凶にして、豈に客に宜しからむや、四顧、空しく長嗟。

【字解】(一) 霖雨　長雨、雨三日以上を霖といふ。(二) 暴溢　俄に溢れる。(三) 津涯　津は渡し場、涯は水際。(四) 春華　春景色。(五) 流萍　流れ藻。(六) 極目　見わたす限り。(七) 蒹葭　よし、かやの類。

【題義】靑邱は、卷二、靑邱操の條に注して置いたが、吳淞江上に在つて、作者が屢ば其蹤を寄せた

處である。この首は、ある年、靑邱に赴く途中、大水後の慘澹たる有樣を目睹して作つたのである。

【詩意】長雨が降りしきつたから、江水俄に漲り、奔流は際涯もない位、野田は、水につかり、茫茫として白く、どうして春景色を見ることが出來やうか。居民は、水災を避けて、散亡すでに久しく、その家には、流れ藻が一ぱいに成つて居る。往年、ここを通つた時には、見わたす限り、桑麻が生ひ茂つて、かなり富有らしい樣子であつたが、今日舟の行く處は、蒹葭ばかりで、その時、通つた路は、尋ねることが出來ない。もとより、凶年は、風來の客に都合が惡いので、折角來たが、これから、どうしたら善いか。四顧して、空しく長嘆するのみである。

【餘論】唯だ見るところを敍しただけであるが、中間に「昔我過此土」の數句を挿入した爲に、俯仰延佇、愈よ感慨を增し、歲凶豈宜客の二句も、決して偶然ではないと、能く讀者をして首肯せしめる。

送李用和提擧

李用和提擧を送る

(一)髯君孤直士。與世頗異(二)儔。
髯君は孤直の士、世と頗る儔を異にす。

不交(三)金張家。而獨與我遊。
金張の家に交らず、而して、獨り我と遊ぶ。

我居在君里。衡門閉深幽。
我が居、君の里に在り、衡門、深幽を閉ざす。

十年誦詩書。進取拙自謀。
十年、詩書を誦し、進取、拙、自ら謀る。

(四)名藩多英豪。光彩溢(五)道周。
名藩、英豪多く、光彩、道周に溢る。

朝逢將軍車。暮避刺史(六)騶。
朝に將軍の車に逢ひ、暮に刺史の騶を避けしむ。

皆云意氣盛。官高富(七)春秋。
皆云ふ、意氣盛に、官高くして春秋に富むと。

良辰競爲樂。(八)廣席羅(九)珍羞。
良辰、競うて樂を爲し、廣席、珍羞を羅す。

君獨日暮歸。貧乃與我侔。
君、ひとり日暮に歸り、貧、乃ち我と侔し。

(一〇)雪畦寒蔬茁。(一一)(一二)氷盎春蛆浮。
雪畦、寒蔬茁え、氷盎、春蛆浮ぶ。

空堂可燃燭。談詠相(一三)賡酬。
空堂、燭を燃やすべく、談詠、相賡酬。

中間阻淸歡。離別良有由。
中間、淸歡に阻てられ、離別、良に由あり。

我尋(一四)江干宅。君赴海上州。
われ、江干の宅を尋ぬれば、君は、海上の州に赴く。

老馬從瘦童。人皆識(一五)(一六)賢侯。
老馬、瘦童に從ひ、人、皆、賢侯を識る。

今年見(一七)歸旌。一笑忘積憂。
今年、歸旌を見、一笑、積憂を忘る。

那知遠方賈。復此待(一八)撫柔。
那ぞ知らむ、遠方の賈、復た此に撫柔を待つを。

雞鳴城東門。不得送行舟。　雞は鳴く城の東門、行舟を送るを得ず。

(一九)颶風常晝驚。洪濤極天流。　颶風、常に晝驚き、洪濤、天を極めて流る。

雖能征(二〇)重貨。可失沓嘉猷。　能く重貨を征すと雖も、嘉猷を沓るを失ふべけむや。

君子且在傍。願言毋久留。　君子且つ傍に在り、願はくは、言に久しく留まる毋れ。

【字解】【一】髯君　蜀志關羽傳に「書を諸葛亮に與へ、問ふ、超、誰と比類すべきか。亮、答へて曰く、當に益德と竝び驅つて先を爭ふべし、猶ほ未だ髯の絕倫逸羣に及ばざるなりと。羽、鬚髯に美なり、故に、亮、これを髯といふ」とある。李提擧も、亦た鬚髯美なるに因りて、これを借り用ひたのである。【二】異饌　類を異にする。【三】金張家　卷一、美女篇の條に注して置いたが、金は金日磾、張は張安世、ともに前漢の重臣。【四】名藩　藩は獨立したる諸王國。【五】道周　詩經に有₂杕之杜₁、生₂于道周₁とあり、謝朓の詩に桃李成₂蹊徑₁、桑楡蔭₂道周₁とあつて、道傍に同じ。【六】騶　乘馬。【七】富春秋　これから先の年に富む、即ち今猶ほ壯なること。【八】廣席　廣い筵席。【九】羅珍羞　御馳走を竝べる。【一〇】雪畦　雪に埋れた畑。【一一】茁　もえ出る、芽を出す。【一二】氷瓮春蟻浮　冷えた酒瓶の中に蟻が湧いた、卽ち新酒が醱酵したこと。歐陽修の詩に甕面浮蛆潑巳香とある。【一三】賡酬　二字ともに和作を爲すこと。【一四】江干　江上に同じ。【一五】識　識別する、見分ける。【一六】賢侯　侯は尊稱、公侯の侯ではない。ここでは、賢者・賢人に同じ。【一七】歸旌　旌旗を樹てて歸つて來る。【一八】擾柔　綏撫して懷柔する。【一九】颶風　正韻に「颶、音俱」とあり、南越志に「颶風は、四面の風を具ふるなり、常に五六月を以て發す、永嘉の人、これを風俱といふ」とある。【二〇】征重貨　價値ある物貨に稅をかける。

【題義】續文獻通考に「元の至元二十三年、鹽課市舶提擧司を立つ、每司提擧二員、同提擧二員、副提擧二員、知事一員」とある。提擧は卽ち稅務官で、各地の要津に派遣されたものと見える。李用和は、靑邱同鄉の人であるが、名字は不詳。この首は、その人が新に提擧に任せられて赴任するを送つたのである。

【詩意】鬚髯の美なる李君は、孤介剛直の士であつて、世人とは、餘程類を異にして居る。李君は、權勢ある金張輩の家とは交際せず、そして、獨り吾と游んで居た。わが居は、君の里に在つて、衡門は奧深く閉ぢこめ、平生詩書を誦して、進取の算段を講ずることは、太だ拙い。今しも、各地諸王の下に於ては、英豪の士、頗る多く、その往來する樣を見ると、爛たる光彩が道傍に溢れ、朝には、將軍の車に逢うて互に禮を爲し、暮には、刺史の乘馬をして道を避けしめる位。その意氣、方に盛に、まだ年の若いのに高官に登つて居ると、まことに偉いものだと人人に言はれ、良辰には、競うて歡樂を極め、廣い筵席には、御馳走を竝べてある。しかるに、君は、獨り悄然として、日暮、家に歸り、その貧乏は、丁度、われと相等しく、雪に埋れた畑には、菜が始めて芽を出し、冷えた瓶の中の酒は、恰も醱酵し、この菜を摘み、この酒を酌んで、それで滿足して居る。やがて、空堂に燭火を點じ、或は談話をしたり、或は吟詠したりして、互に賡酬したことは度度あつた。しかるに、中ごろ、この淸歡を妨げられて、別離を爲したのは、まことに、故あることで、どうにも、致方が無かつた。その時、われは、江邊なる君の宅を尋ねると、君は、將に海邊の州に赴かむとし、老馬に騎して瘦童を從へ、

いかにも、手輕な支度であつたが、相遇ふ人は、皆賢者たる君を見知つて居た。今年、君は、旗を押し立てて任地から歸られたので、再び面晤することを得、一笑歡然、積る憂愁をも忘れた位。處が遠方の商賈どもは、綏撫懷柔を要するとのことで、この度、稅務官に任じて赴任される。城東の門に於て、雞が鳴き出す頃、君は、發程されるが、遺憾ながら、事故あつて行舟を送ることは出來ない。君の任地に於ては、颶風が晝でも常に吹き、大濤は、天を極めて流れて居て、決して、結構な土地ではない。商賈どもの貴重なる貨物に稅を課するは、當然の事であるが、その檢査には手心を要するので、適當の標準を失つてはならぬ。今しも、君は我が傍に居られ、まことに再度の別に堪へぬ次第、赴任は仕方がないとして、どうか、あまり久しく其地に留まらず、然るべき時に、切り上げて、御歸鄉あらむことを切望する。

【餘論】 將君孤直士の四句は、李用和の人物を敍し、我居在君里の四句は、轉折して自己を寫し、名藩多英豪の八句は、當代得意の人を描き出し、君獨日暮歸の四句は李君の貧境、空堂可燃燭の四句は二人の交情、我尋江干宅の四句は前度の赴任、今年見歸旌の四句は、その歸鄉より再度の任官に及び、雞鳴城東門の四句は、發程より始めて任地の風土を想像し、雖能征重貨の四句は作者の囑望を記して、題意を全うしたのである。

贈銅臺李壯士

銅臺の李壯士に贈る

(一)我祖昔都鄴。(二)神武(三)爲世雄。(四)
わが祖、むかし鄴に都し、神武、世雄たり。

至今銅臺下。子弟習其風。
今に至つて、銅臺の下、子弟、その風に習ふ。

問君家何方。紫陌(五)遙相通。
君に問ふ、家は何の方か、紫陌遙に相通ず。

雖云此相遇。情與鄉里同。
ここに相遇ふと云ふと雖も、情は鄉里と同じ。

君有力振虎。(六)勇氣聞山東。
君、力あつて虎を振ひ、勇氣、山東に聞こゆ。

匹馬輕俠遊。刀環(七)綴纓(八)紅。
匹馬、俠遊を輕んじ、刀環、纓を綴つて紅なり。

正當兵塵起。思立尺寸(九)功。
正に兵塵の起るに當つて、尺寸の功を立てむことを思ふ。

不從董(一〇)健兒。欲縛蕭老公。(一一)
董健兒に從はず、蕭老公を縛せむと欲す。

(一二)凌厲越宋土。(一三)逶迤(一四)出齊中。(一五)
凌厲、宋土を越え、逶迤、齊中を出づ。

時人不相顧。棄之若秋蓬。(一六)
時人、相顧みず、これを棄つること秋蓬の若し。

我豈白(一七)面郎。少年亦困窮。
われ豈に白面の郎ならむや、少年、亦た困窮。

起爲壯士歌。迅商(一八)薄高穹。
起つて壯士の爲に歌へば、迅商、高穹に薄る。

初飲(一九)五斗盡。再飲(二〇)一石空。　初め飲んで五斗盡き、再び飲んで一石空し。
與君豈(二一)樂禍。西方見(二二)妖虹。　君と豈に禍を樂まむや、西方、妖虹を見る。
莫謂(二三)著鞭晚。艱難殊未終。　謂ふ莫れ、鞭を著くること晚しと、艱難、殊に未だ終らず。

【字解】【一】我祖　北齊の高歡を指す。北史齊本紀に「齊の高祖神武皇帝、姓は高、諱は歡、字は賀六渾、渤海蓨の人なり、武定四年、西征して疾あり、太原公洋を遣して鄴に鎭せしめ、世子澄を徵して晉陽に至らしむ」とある。【二】鄴　卽ち銅雀臺の在るところ、魏の曹操が初めて此に都を奠めた。【三】神武　高歡の諡であるが、ここでは神神しきまで勇武なること。神武、封陵之をして鄴を守らしめ、【四】世雄　一世の雄。【五】紫陌　都大路の義であるが、齊本紀に「永熙元年正月、十五、鄴都を拔いて之に據る。自ら出でて、紫陌に頓す」とあるを見れば、地名でもあらう。【六】搌虎　虎を振ひ退ける。【七】刀環　刀の柄につけてある粧飾の環。【八】殺襂紅　赤い紐を綴つてある。【九】尺寸功　わづかばかりの功績。【一〇】董健兒　董卓を云ふ。後漢書の本傳に「卓、性、麤猛にして謀あり、かつて、羌中に游び、盡く豪帥と相結ぶ。卓、爲に耕牛を殺して、與に共に宴樂す。豪帥、その意に感じ、歸つて相斂め、雜畜千餘頭を得て、以て之に贈る。これに由つて、健俠を以て名を知らる」とある。【一一】蕭老公　蕭衍、卽ち梁の高祖を云ふ。通鑑に「侯景、かつて高歡に言ふ、願はくは、兵三萬を得、天下を橫行し、須らく、江を濟り、蕭衍老公を縛して太平寺主となすべきを要す」とある。【一二】凌厲　氣象の盛なること。南史沈慶之傳に「慶之、游幸及び校獵に從ふ每に、鞍に據つて凌厲、少壯に異ならず」とある。【一三】宋土　周代の宋の故地。【一四】逶迤　めぐる、路の迂廻するをいふ。【一五】齊中　今の山東の東部。【一六】秋蓬　秋の蓬の轉。【一七】白面郞　生白い顏をして居る少年輩、卽ち青二才、沈慶之傳に「文帝、將に北伐せむとす、慶之、固く不可を陳して曰く、國を爲むる、たとへば家の如し、耕は當に奴に問ふべし、織は當に婢に問ふべし、陛下、今、國を伐たむと欲し、しかも、白面の書生輩と之を謀る、事、何に由つてか濟らむ」とある。【一八】迅商　謝瞻九月の詩に迅商薄二淸穹一とあつて、その注に「迅商は、秋風の迅疾なり」とある。【一九】五斗盡　史記滑稽傳に淳于髡が齊王に對へたる言を記して「もし朋友交游、久しく相見ず、卒然相覩、歡然として故を道ひ、私情相語る、飮むこと五六斗ばかり、徑に醉はむ」とある。【二〇】一石空　上文の續きに「日暮酒闌に、合尊坐を促し、男女席を同じうし、履舃交錯、杯盤狼藉、堂上燭滅し、主人髡を留めて客を送る、羅襦襟解け、微に薌澤を聞く、この時に當つて、髡の心、最も歡ぶ、能く一石を飮まむ」とある。【二一】樂禍　國家の禍亂を自己の好都合とする。【二二】妖虹　凶兆を示すところの虹、盧照鄰の詩に兵氣曉成レ虹とある。【二三】著鞭晚　晉書劉琨傳に「琨、少にして志氣あり、縱橫の才あり、祖逖と友たり、逖、用ひらる、琨故に書を與へて曰く、吾、戈を枕にして、旦を待つ、常に恐らくは、祖生の吾に先つて鞭を著けむことを」とある。

【題義】銅臺は、卽ち銅雀臺、普通に、略して云ふので、沈佺期の詩にも銅臺宮觀委二灰塵一、魏主園陵漳水濱とある。その地は、一統志に「今の彰德府臨漳縣」とあつて、卽ち古しへの鄴都、魏の曹操が此に都せし後、臺を築き、屋根の上に銅雀を置いたから、かく名づけたのである。李壯士は、名字不詳。この人は、鄴の生まれであるから、銅臺李壯士といつた。青邱は、ある時、吳中に於て其人に遇ひ、仍つて、この詩を贈つたのである。

【詩意】わが先祖たる北齊の高歡は、むかし、鄴に都し、その神神しき武勇は、一世の英雄と稱せられた。そこで、今日に至るまで、銅雀臺下に於ては、その地の子弟どもが、自然、その遺風に感化されて、銳進勇決を旨として居る。君の家は、何方と問へば、矢張、鄴都の中で、はるかに紫陌に通じて居る處だといふこと。ここに、吳中に於て、君と遇つたが、その情意は、矢張、鄕里に於けると同

じで、君の特性は、丸でむき出しである。君は、非常に力強くして、猛虎をさへ振ひ退けることが出來るといふので、その勇氣は、山東地方で大評判に成つて居る。君は、平生、四馬に跨つて、世の常の游俠輩を輕んじ、刀環には赤い紐をつけて、殊に目立つた樣である。今しも、天下騷擾、兵塵四方に起る時に當り、君は、どうかして、尺寸の功を立てむと決心し、かの董卓の如き橫暴な者には從はず、必ず齋老公を手取りにするといつた侯景の豪氣を負ひ、凌厲の氣象すさまじく、宋の地を過ぎ、迂回して齊中に出で、常に機會をつけ覘つて居たが、時人は、丸で相手にもせず、これを棄つること、さながら秋蓬の如くであつた。我は、もとより物を知らぬ靑二才ではなく、少年の頃、隨分困窮したものであるから、李君の話を聞くと、自然同情に堪へず、そこで、起つて壯士の爲に歌つたが、颯颯と勢すさまじく吹く秋風が、高い大空に逼るを覺えた。そこで、初めて飮んだ時には、五斗を盡し、再び飮んだ時には、一石を空しうし、興愈よ加はつて、いつ止むべしとも思はぬ位。おもへば、君と共に、國家の爭亂が自分に都合が善いと思ふでもないが、西方には、緣起の惡い虹が顯はれ、いづれ、只だ事では無いと思はれるので、起つて、一仕事遣つて見たいと思ふ矢先、ここに、鞭を著くること、すでに遲く、その爲に、艱難が容易に終らぬといふ譯でもない。何にせよ、自重して、無謀な眞似をせず、他日の成功を豫期して、ひと奮發するが肝要であらう。

【餘論】起首四句は、鄴都がおのが先祖の發祥の地なるをいひ、問㆑君家何方より來㆑之若㆓秋蓬㆒に至るまでは、李壯士の出身及び人物を寫し、我豈白面郞より艱難殊未㆑終に至るまでは、會飮の有樣を述べ、且つ李壯士の將來に囑望したのである。

題㆓春江送別圖㆒送㆓王使君彥强㆒

春江送別の圖に題して、王使君彥强に送る

歌徹小秦王。愁深第幾觴。
歌は徹す小秦王、愁は深し第幾觴。

飛花蕩㆓春影㆒。江水不㆑勝㆑長。
飛花、春影を蕩し、江水、長きに勝へず。

日暮東風急。離帆且緩張。
日暮、東風急なり、離帆、且つ緩く張れ。

【字解】【一】小秦王　陽關曲の一名。陽關曲は、卽ち王維の送㆓元二使㆓安西㆒の詩、渭城朝雨浥㆓輕塵㆒、客舍靑靑柳色新、勸㆑君更盡一杯酒、西出㆓陽關㆒無㆓故人㆒であつて、結句に陽關の字あるより、これを陽關曲といひ、起句を除いて、その他の句を再唱するに因り、これを陽關三疊ともいふのである。蘇軾の詩に樽前獨唱小秦王とある。【二】蕩春影　春の名殘を漂はす。

【題義】この首は、春江送別の圖に題し、王彥强といふ人を送つたのである。使君は、地方官の尊稱。

【詩意】陽關の曲を歌ひ畢り、酒も幾杯目かに成つて、愁愈よ深きを覺えた。頃しも、春の末、落花水に浮んで、春の名殘を漂はし、江流宛轉、長くして盡くるを覺えない。これは、圖中見るところで、王使君の行を送るも、矢張その通り、但し、日暮には、東風急にして、淒涼愈よ堪へねば、君が舟も、成るべく緩ッくり帆を張つて、さう急いで立ち去らぬが善い。

【餘論】前半四句は、有りふれた別離の光景で、圖中に畫いたのも、矢張その通り。結末二句、發程の太だ急ならざるを願ふは、卽ち別を惜むこと愈よ切なる所以である。

蘭室爲袁省郞賦

蘭室、袁省郞の爲に賦す

湘皐春水深。澧浦秋風早。　湘皐、春水深く、澧浦、秋風早し。
如何庭戶間。芳蕤獨姸好。　如何か、庭戶の間、芳蕤、獨り姸好。
不有君子心。憔悴同芳草。　君子の心あらざれば、憔悴、芳草に同じ。

【字解】【一】湘皐　一統志に「長沙府、吳晉には湘州といふ」とあり、離騷に歩余馬于蘭皐兮とある。卽ち湘江の岸邊の澤地で、そこには蘭が生えて居る。【二】澧浦　禹貢に「又東して澧に至る」とあり、一統志に「今の岳州」とあり、楚辭の九歌に遺余佩兮澧浦とある。湘皐よりは遙に北に當つて居る。【三】芳蕤　蕤は草木の茂み。【四】君子心　金檀の注に「宋の黃山谷、蘭を以て君子に比し、蕙を以て士大夫に比す」とある。

【題義】官制沿革に「東漢晉魏、尙書省、皆郞官を置く」とあつて、袁某は、矢張、尙書省郞官の筆頭に在職して居たものと見える。その人、名字不詳。そして、その居る處を蘭室と號したから、靑邱は、爲に此詩を作つて贈つたのである。

【詩意】湘江の澤地には、春の水、ひたひたと深く、澧水の入江には、秋の風、早く吹く。この湘澧の間は、蘭の產地で、春より秋にかけて、その花が咲き誇つて居るが、君の庭戶の間に於て、同じく芳蘭の茂みが姸好を誇つて居るのは、まことに、不思議である。しかし、その蘭にして、君子の心を有せざれば、尋常の草と同じく憔悴して仕舞ふので、卽ち似て非なるものである。

【餘論】袁省郞が蘭を愛し、これを以て、その室に名づけたのは、太だ宜しい。但し、蘭は、屈原が其思を託したものであるから、袁君も、矢張、君子の心を懷いて、忠讜以て其性を爲すに非ざれば、蘭室の名にも副はぬことに成るから、特に此點に注意して貰ひたいといふので、聊か規戒の意を寓したのであらう。

我愁從何來

我が愁何くより來る

我愁從何來。秋至忽見之。　わが愁、何くより來る、秋至つて、忽ち之を見る。
欲言竟難名。泯然聊自知。　言はむと欲するも竟に名づけ難く、泯然として聊か自ら知る。
汲汲豈畏老。悽悽詎嗟卑。　汲汲として豈に老を畏れむや、悽悽として詎ぞ卑きを嗟せむや。
既非貧士嘆。寧是遷客悲。　すでに貧士の嘆に非ず、むしろ是れ遷客の悲。
謂在念歸日。故鄉未曾離。　謂ふ、歸るを念ふの日に在つて、故鄉、未だ曾て離れず。

謂當送別處。親愛元無(五)暵。　謂ふ、別を送るの處に當つて、親愛、元と暵くなし。

初將比蔓草。夕露不可萎。　初め將に蔓草に比せむとす、夕露、萎むべからず。

又將比煙霧。秋風未能披。　又將に煙霧に比せむとす、秋風未だ披く能はず。

(六)藹然心目間。來速去苦遲。　藹然たる心目の間、來ること速に、去ること苦だ遲し。

借問有此愁。于今幾何時。　借問す、この愁あつて、今に幾ばく時ぞ。

昔宅西澗濱。尙樂山水奇。　むかし、西澗の濱に宅し、尙ほ樂む山水の奇なるを。

茲還東園中。重歎草木衰。　ここに東園の中に還り、重ねて歎ず草木の衰ふるを。

閒居誰我顧。惟有愁相隨。　閒居、誰か我を顧みむ、惟だ愁の相隨ふあり。

世人多自歡。遊宴方未疲。　世人多く自ら歡び、遊宴方に未だ疲れず。

而我獨懷此。徘徊自何爲。　而して、我、ひとり此を懷き、徘徊、自ら何をか爲す。

【字解】【一】覺截名　はつきりと名ざすことが出來ない。【二】泯然　泯びかかる、その微弱にして存在の不確實なるをいふ。【三】汲汲　せつせと勉める。【四】棲棲　こせこせと立ち廻る。【五】無暵　そむくなし、常に一緒に居る。【六】藹然　もやもやとして居る。

【題意】我愁從何來は、起句を取つて直に題を塡したので、通篇、その愁を形容して居る。大全集に題を我悲に作つたのは、決して、妥當でない。

【詩意】わが愁てふものは、何處から來たとも分からぬが、秋に成ると、忽然として之を見るので、これを說明しやうと思つても、はつきりと名づけることが出來ず、表面は泯然として、われ自ら聊か其存在を知つて居るだけである。汲汲として、わが次第に老い行くを嘆く譯でもなく、棲棲として、わが身分の何時までも賤しいのを嗟する次第でもない。されば、貧士の嘆でもなく、どうして又遷客の悲であらう。兩つながら、ともに、さうではない。唯だ歸るを念ふ時に在つて、未だ嘗て故鄉を離れなかつたならばと思ふ、それが、卽ち我が愁であるし、人の遠行を送る處に於て、親愛の情は、もとより背き違ふことなくあれかしと思ふ、それが、矢張わが愁である。その愁たるや、一たび生ずれば、決して消散しない。初めは、蔓草が彌やが上に生ひ茂つて、夕の露にも萎まざるに比すべく、又煙霧が有るが上にも重り、秋風が吹いても、披くことの出來ないのに比し得るやうである。その愁は、もやもやとして、心目の間に鬱積し、來ること速にして、去ること、太だ遲く、一たび之に罹れば、その儘、長く留まつて居る。おもへば、この愁あつてより今に至るまで、幾何の時を經過したか、われながら、これを料り知ることが出來ない。むかし、西澗の邊に居た頃には、それでも、猶ほ山水の珍らしき景色を樂んで居たが、ここに歸つて、東園の中に起臥すると、重ねて秋になつて、草木の衰へたるを嘆じた。この閒居を通じ、誰が我を顧みるかといへば、唯だ愁が相隨ふだけである。世間一

般の人は、自ら歡喜を爲し、日日游宴を事として、少しも疲れた樣子もないのに、われのみは、この愁てふものを抱くに因つて、徘徊して去りもあへず、自ら如何するといふでもなく、常に思ひ惱んで居る。

【餘論】起首八句、愁の何物たるかを云はむと欲し、故らに側面より筆を著け、謂在念歸日の十二句に至りて、はじめて愁その物を說明し、左搖右曳、細に之を描き出さむことを務めた。昔宅西澗濱の六句は、その身生を敍して、愁の嘗て相離れざるを云ひ、世人多自歡の四句は、おのれが世人と異にして徘徊爲すなきに及んだのである。通篇、用筆細緻、かなり力を用ひたものであるが、すべて分析的、說明的である爲に、自然煩瑣に失し、讀者の心を動盪することの出來ないのは、まことに遺憾の至で、空しく自ら勞するといふ樣な傾向を免れない。

賦得法華雨。送惠上人歸江上

法華雨を賦し得て、惠上人の江上に歸るを送る

慈雲起靈山。虛空寶花雨。　慈雲、靈山に起り、虛空、寶花の雨。

遙從天女手。零亂飄春曙。　遙に天女の手より、零亂して春曙に飄る。

香滋淨沼蓮。影拂祇園樹。　香は滋し淨沼の蓮、影は拂ふ祇園の樹。

高僧結習銷。衣上留不住。　高僧、結習銷え、衣上、留むれども住まらず。

唯隨一葦風。飛渡江南去。　唯だ一葦の風に隨ひ、飛渡して江南に去る。

【字解】【一】慈雲　雲が雨を起して大地を霑すことは慈悲であるから、慈雲慈雨といふので、雜阿集に「如來の慈心、かの大雲の如く、世界に灌注す」とあるを反用したのであらう。【二】靈山　神聖なる山、吳都賦に巨鼇贔屭、首冠靈山とある。【三】天女手　維摩詰經に「天女、天花を以て諸菩薩に散ずれば、即ち皆墮落す。大弟子に至りては、即ち著いて墮ちず。天女曰く、結習未だ盡きず、故に、花、身に著く、結習盡くるものは、花、身に著かず」とある。【四】淨沼蓮　劉兼の詩に蓮披淨沼幕香散とある。【五】祇園　前に晚憩靈鷲院の詩に見ゆ、寺城の義。【六】結習　結ぼれて未だ銷散せざる俗習。【七】一葦風　傳燈錄に「達磨、梁の武帝を見る、機語契はず、將に、北、嵩山に赴かむとし、江岸に至り、乃ち蘆を折つて渡る」とあり、詩經に一葦杭之とある。ここでは、折れた一本の葦を吹き動かす微風の義。

【題義】法華雨は、即ち天女の散ずる花雨。これを題として詩を賦し、乃ち惠上人の江邊に歸るを送つたのである。上人の名字閱歷等は、例の如く、さつぱり分からない。

【詩意】如來の慈悲心に似た樣な雲は、神聖なる御山より起り、虛空からは、見事な花が雨と降り注いだ。これは、天女の手から落ちて來たので、零亂して、春の曙に飄つて居る。その香氣は、淸き池の蓮花よりも滋く、その影は、寺城內の木木を拂つて亂れるばかり。ここに、惠上人は、流石に、當代の高僧、結習すべて銷え盡したものであるから、その花の雨は、衣を撲つても、決して附著したり

殘留したりしない。これから、上人は、一葦を吹き動かす微風に隨ひ、その花雨を後にして、江南の方に飛び渡られるさうである。

【餘論】前半六句は、法華雨を詠じ、その次に、惠上人を點出し、高僧の衣上に著かぬといふのは、維摩詰經に本づき、一葦風に隨ふは、傳燈錄を翻用し、まさしく、巧思を推すべきものである。

秋風

秋風屋外來。落葉紛(一)我傍。　秋風、屋外より來り、落葉、わが傍に紛たり。
不出門幾日。我樹如此黃。　門を出でざること幾日、わが樹、かくの如く黃なり。
但覺成(二)懶性。焉知逝(三)頹光。　但だ懶性を成すを覺ゆ、焉んぞ知らむ、頹光を逝かしむるを。
朝餐止(四)一盂。夕臥惟一牀。　朝餐止だ一盂、夕臥惟だ一牀。
(五)仲尼欲行道。(六)轍跡(七)環四方。　仲尼、道を行はむと欲し、轍跡、四方を環る。
而我何爲者。不與世相忘。　而して、我、何する者ぞ、世と相忘れず。

【字解】【一】紛我傍　紛紛として我が傍に落ちる。【二】懶性　疎懶なる性。【三】頹光　老後の歲月、李白の詩に富貴非所願、與人駐頹光とある。【四】一盂　盂は食器。【五】仲尼　孔子の字、叔梁紇の第二子であるから仲、その母顏氏が尼山に禱つて之を得たから尼と字したのである。【六】轍跡　車の轍の跡。【七】環四方　くるくる四方を周る。

【題義】秋風は、破題の二字を取つて篇に命じたので、もとより、秋風その物を詠じたのではないが、秋風に因つて興を發し、やがて、この詩を成したのである。

【詩意】秋風は、颯然として屋外より來り、落葉は、紛紛として、我が傍に飄つて居る。門を出でずして、家に籠つて居たことは、ここに幾日か、わが庭上の木の葉は、かくの如く、すつかり黃ばんで仕舞つた。身は疏懶以て性となすに至り、老後の歲月の過ぐるをも知らなかつた。朝食は唯だ一椀、夜臥には唯だ一牀、まことに、淋しく、物足らぬ生活をして居る。むかし、孔子は、その道を行はむが爲に、天下を周游し、車の轍跡は、ぐるぐる四方を環つた位、頗るまめに立ち働いて、少しも、ぢッとしては居られなかつた。しかるに、我は如何なる者なれば、かくの如く、意氣地なく、なまけて居ながら、この世と相忘るること能はず、なほ功名富貴に心がけて居るのであるか。

【餘論】秋風屋外來の四句は、見たままの實景、但覺成懶性の四句は、枯淡なる生活を寫し、仲尼欲行道の四句は、聖人の天下を救濟するに急なるを以て、おのが疎懶と對比し、聊か自奮の意を寓したのである。

秋雨

秋雨

秋雨亂我竹。堂上中（一）夜驚。　秋雨、わが竹を亂し、堂上、中夜に驚く。

昏昏起復臥。策策（二）止且鳴。　昏昏として起つて復た臥し、策策として止まつて且つ鳴る。

未分醉夢狀。寧辨竹雨聲。　未だ分たず醉夢の狀、むしろ辨せむや竹雨の聲。

初欣似張樂。終懼如聞（三）兵。　初は欣ぶ樂を張るに似たるを、終に懼る兵を聞くが如きを。

既覺兩皆非。古（四）檠耿自明。　既に覺むれば兩つながら皆非、古檠耿として自ら明かなり。

悟彼事亦然。胡爲勞我生。　悟る、彼が事、亦た然るを、胡すれぞ、我が生を勞する。

【字解】【一】中夜　夜半。【二】策策　ざわざわと音する、韓愈の詩に秋風一披拂、策策鳴不已とある。【三】聞兵　兵士が進行する時に鎧仗の響を聞く。【四】古檠　檠は燭臺。

【題義】この首は、矢張、秋雨を詠じたのではなく、秋雨の竹を亂すを聞いて、興を發したのである。

【詩意】秋の雨が、蕭蕭として、わが庭上の竹を搖り動かし、しきりに、物騷がしい處から、堂上に居ながら、眞夜中に、屢ば驚いた。うつらうつらとして、一たびは起きたが、やがて再び臥し、ざわざわする響も、一たびは歇んだが、しばらくすると、又鳴り出した。自分は、醉つて居て夢に入つたのであるが、その有樣は、至極ぼんやりして居るから、竹の雨に鳴る聲など、篤と聞き分けることは出來ない。そこで、初めは、喜んで、樂を奏して居ると思つたが、終には、懼れて、萬兵路を急ぐ爲に、鎧仗相觸れて響を爲すのではないかと思つた。兎角する內、眠が覺めて、頭がはツきりすると、樂を張ると思つたのも、兵を聞くと思つたのも、兩つながら、間違つて居たことが分かり、古燈のみが耿耿として明かであつた。雨が竹を亂るも、畢竟、自然の事で、格別怪むに足らざることを悟り、飜つて、この世に在つて、わが生を勞することの極めて愚なるに想到して、愈よ感慨を禁じ得られなかつた。

【餘論】秋雨亂我竹の四句は實況、未分醉夢狀の四句は、夢寐恍惚の境を寫し、既覺兩皆非の四句は、覺後更に我が生を勞するの愚を悟つたことに及んだのである。

題曹氏春江雲舍

曹氏の春江雲舍に題す

遙波靄（一）微雲。禽寒少相語。　遙波、微雲靄たり、禽、寒くして、相語ること少し。

君（二）家在空（三）濶。欲往迷洲渚。　君が家、空濶に在り、往かむと欲して洲渚に迷ふ。

紛紛樹離霧。稍（四）稍花（五）消雨。　紛紛として、樹、霧を離れ、稍稍として、花、雨に消ゆ。

日暮坐相思。江東渺何（六）許。　日暮、坐に相思ふ、江東、渺として何許ぞ。

【字解】【一】靄微雲　薄い雲が靄んで居る。【二】君家　曹氏の家。【三】空濶　からりとして眺望の開豁なる處。【四】稍稍　次第に。【五】花消雨　花が雨に落される。【六】何許　何處に同じ。

【題義】春江雲舍は、曹氏居宅の稱、靑邱は、これに寄題したので、親ら其處に至り、仍つて、この詩を題したのでは無い樣である。曹氏は如何なる人か、雲舍は何處に在るか、ともに分からぬ。

【詩意】波光遙遙、はては微雲が薄くかすみこめて居るし、小禽は、寒さを恐れて、相語ることも少い。曹氏の家は、天水空濶なる處に在つて、そこへ往かうと思つても、洲渚が屈曲して出入して居るから、甚だ迷ひ易い。やがて、紛紛として木は霧を離れ、次第に花は雨に落され、遠景もはッきりしかかつて來た。日暮になつて、相思愈よ切、しかも、君の家の在る江東は、渺然として何處とも分からず、愈よ心を傷ましめるのみである。

【餘論】この詩は、曹氏の家に往つて題したものとするると、君家の二字、歸著するところがないから、上の如く解したので、つまり、曹氏の家を懷ふといふ樣な意味である。すると、題が聊か不適當であつて、もしかすると、編者が、いい加減に直したのではあるまいかと思はれる。

燕客次蔡參軍韻

客を燕し、蔡參軍の韻に次す

（一）林旦未昇旭。巖深稍（二）祛霏。
林、旦にして未だ旭を昇らず、巖、深くして稍く霏を祛る。

（三）夙興達（四）仙署。（五）在公（六）遑告腓。
夙に興き仙署に達し、公に在つて腓を告ぐるに遑あらむや。

良儔信可懷。彌月曠容（七）微。
良儔、信に懷ふべし、月に彌つて、曠しく微を容る。

偶茲解華（八）轡。沽酒酬芳卮。
偶ま茲に華轡を解き、酒を沽うて芳卮を酬ゆ。

（九）鈴騶儼（一〇）衞齋。（一一）妓樂出房帷。
鈴騶、儼として齋を衞り、妓樂、房帷を出づ。

（一二）放吏命（一三）決漏。留賓敎闔扉。
吏を放つて決漏を命じ、賓を留めて扉を闔さしむ。

談笑竹下（一四）塵。賭（一五）墅花間棋。
談笑、竹下の麈、墅を賭す花間の棋。

歡罄展宿（一六）好。言長（一七）罄積思。
歡罄きて宿好を展べ、言長くして積思を罄く。

佳辰子所惜。高誼子攸希。
佳辰、子の惜むところ、高誼、子の希ふところ。

（一八）時難（一九）臘睽阻。（二〇）能此嗟爲誰。
時難くして睽阻を臘し、これを能くする、嗟、誰と爲す。

願各保（二一）太和。長年樂施施。
願はくは、各、太和を保ち、長年、樂、施施たらむ。

（二二）飛佩倘可接。東方候（二三）安期。
飛佩、倘し接すべくんば、東方に安期を候せむ。

【字解】【一】林旦　林が明けかかる。【二】祛霏　もやが剝がれる。【三】夙興　朝早く起きる。【四】仙署　白帖に「諸曹郎、紛署といひ、亦た仙署といふ」とある、ここでは參軍の出勤する役所。【五】在公　役所で仕事をする。【六】遑告腓　腓は手足の痛むこと、卽ち疲勞、疲勞を口にする暇だにない。【七】曠容微　多くの微賤の人人に接する折が無い。【八】華轡　立派な手綱。【九】鈴騶　鈴の著いて居る乘馬、范成大の詩に徵聞鈴下騶、竊識馬上郎とある。【一〇】衞齋　齋は自分の居宅。【一一】妓樂　妓人

の催す樂、劉寵の詩に「開レ筵妓樂陳」とある。【一二】放吏　吏は下僚、宴席の間に周旋する爲に態態來たのであらう。【一三】決漏　史記司馬穰苴傳に「穰苴、表を立て、漏を下して、莊賈を待つ。日中まで至らず。穰苴、すなはち表を仆し、漏を決し、入つて軍を行り、兵を勒し、約束を申明す、約束すでに定まり、夕時にして賈乃ち至る」とあつて、その注に「仆は、其表を臥すなり。漏を決すとは、壺中の水を去るなり」とある。卽ち水時計の水を取り棄てること。【一四】竹下塵　塵は拂子。話をする時には拂子を振ふので、黄庭堅の詩に毎來捉二談塵一風生歷竹枝とある。【一五】賭墅　晉書謝安傳に「苻堅、衆百萬を率ゐて、淮淝に次す。安、駕を命じて山墅に出で、謝玄と別墅を賭す。安、常に、棊、玄より劣る。この日、玄懼る、便ち敵手となつて、しかも又勝たず。安、顧みて、その甥羊曇に謂つて曰く、墅を以て汝に乞へむ」とある。【一六】宿好　從前のよしみ。【一七】綢繆思　積る相思の情を除く。【一八】時艱　騷亂の世。【一九】險暌阻　險は、嶮に同じ。暌阻は、齟齬して會面の難なること。【二〇】能此　今日ここに宴を開く。【二一】太和　易に「太和を保合す、乃ち利貞」とある。ここでは、身中至和の氣。【二二】施施　打續く貌。【二三】飛佩　佩は腰間に佩ぶる裝飾。辛棄疾の詞に西眞人醉憶二仙家一飛佩丹霞羽化とある。【二四】安期　仙人の名、前の俘君白玉巵の條に見ゆ。

【題義】蔡參軍、名は彥文、淮南行省參政饒介の下に在つて參軍となり、青邱は饒介に禮せられた故に、自然この人とも親密であつた。ある時、參軍が自宅に於て客を宴して詩を作つたから、青邱は其韻に次したので、青邱も、矢張、招かれた中の一人であつたらう。

【詩意】林が明けかかつたが、未だ朝日は上らず、四山は、巖石深く閉しながら、次第に靄が剝がれて行く。蔡參軍は、朝早く起き出でて、役所に出勤し、公事に攜はる間は、疲勞を告ぐる暇だに無い位。眞友は、信に懷ふべく、そして、月餘の久しきに亙り、あまり忙しかつた爲に、微賤なる知人に應接することさへ出來なかつた。ここに、偶ま我が家に歸つて、立派な手綱を解き、酒を買うて芳卮相獻酬せむが爲に、宴を催した。その場所は、自宅の後堂で、鈴を著けた乘馬は、儼然として、その前に竝がつて、さながら警衞するが如く、やがて、妓人は樂を奏しつつ、房帷の間から出て來た。參軍は、吏に命じて、緩ツくり飲まう、時間などにかまふなといふので、水時計の水を取り棄てさせ、やがて賓客を留めて、門の扉を固く鎖して仕舞つた。そこで、或は談笑しつつ、竹下に拂子を振ひ、或は花間に棊を闘はし、別莊を賭け物にして打ち興じ、十分に歡を盡くして、從前のよしみを展べ、長長と語りつづけて、積る相思の情を除いた。抑も、佳辰は、一同の愛惜するところであるし、參軍の高誼は、一同の希望するところである。生憎、刻下騷亂の世に際し、團欒對晤の機會は、兎角妨げられ勝であるのに、今日、ここに此會を催されたのは誰か、卽ち蔡參軍その人である。ここに參集せし人人は、各〻おのが身中至和の氣を保全し、いつまでも施施として樂を極められたく、もし飛佩を腰にせる仙人に接することが出來るならば、東方に往つて、安期生に見參し、長生不老の方を傳授して貰ふが善からう。

【餘論】この首は、四句一解で、段落の極めて截然たるは、作者の本色である。しかし、次韻である爲めか、幾分拘攣の氣味あるを免れず、筆が十分に伸びて居らぬし、その言ひ草も、尋常一樣の挨拶で、格別面白いものはない。つまり、この種の文字は、青邱の才を以てしても、窠臼に陷ることを免れないので、かの區區として、應酬を以て能事となせる手合は、これを見て、宜しく反省するところ

あるべき譯である。

退思齋爲蔡參軍賦

退思齋、蔡參軍の爲に賦す

雞鳴起趨府。事至紛善惑。
雞鳴いて、起つて府に趨り、事至つて、善惑紛たり。

應茲苟弗推。在理寧免忒。
茲に應じて苟くも推さず、理に在つて寧ろ忒ふを免れむや。

歸來坐深念。恆恐有慙德。
歸り來つて、坐に深く念ふ、恆に恐る慙德あらむことを。

缺政何以裨。厚責何以塞。
缺政、何を以てか裨はむ、厚責、何を以てか塞がむ。

豈徒省厥躬。庶用匡爾國。
豈に徒に厥躬を省るのみならむや、庶はくは、用て爾の國を匡さむ。

昔聞獨樂叟。中夜忘寢息。
むかし聞く、獨樂叟、中夜、寢息を忘ると。

願君守勿渝。明明此遺則。
願はくは、君、守つて渝はる勿れ、明明たり、この遺則。

【字解】【一】趨府　府は役所。【二】紛善惑　或は善いこと、或は惡いかと惑ふことの兩者が紛然混合して居る。【三】慙德　書經に「成湯、すでに桀を南巢に放ち、心、德に慙づるあり」とある。道德に違反する行爲。【四】省厥躬　論語に「吾、日に三たび吾が身を省る」とある。自分の身に就いて反省する。【五】獨樂叟　元城語錄に「司馬溫公、すでに洛に居り、國子監の側に於て故營の地を得、獨樂園を創む」とある。【六】寢息　寢て休息する。

【題義】退思齋は、前に見えた蔡參軍の書室の稱。青邱は、參軍の爲に、これに題したのである。

【詩意】雞が鳴いて、夜が明けると、大急ぎで起きて、役所に出勤する。そして、樣樣の事が一時に羣がつて來て、或は善いこと、或は惡いかと惑ふことの兩者が紛然混合して居る。そこで、事の性質を審にし、これに應じて、その處理策を講じなければ、道理上、惑ふことを免れない。その後、家に歸つて來て、兀坐した儘、深く考へると、每每、道德に違背せぬかと心配することがある。更に進んで、缺けたる政治は如何にして補ふか、厚い責任は如何にして塞ぐか、かくの如く考へることは、ひとり、その身を反省して過失を少くするのみではなく、これを用ひて、一國を匡正することが出來るので、退いて思ふといふことは、まことに必要缺くべからざるものである。むかし、獨樂叟と號した司馬溫公の如きも、每に思念を專らにし、夜中に、寢て休息することをさへ忘れたと云ふ位。願はくは君、これを守つて、決して渝へてはならぬ、これこそ明明たる古人の遺則に外ならぬものである。

【餘論】起首四句は、公事處決の困難を云ひ、歸來坐深念の六句は、退思の功を敍し、昔聞獨樂叟の四句は、これ實に古しへの司馬光の遺則であつて、斷じて確守すべきものたることを述べたのである。この首は、事柄が事柄だけに、勃窣理窟、到底、詩趣に乏しいといふ譏を免れぬことと思ふ。

遊師子林次倪雲林韻

師子林に遊び、倪雲林の韻に次す

吟策頻入院。道人知我閒。
吟策、頻りに院に入り、道人、わが閒を知る。

(二)尋幽到深處。鳥語竹(三)斑斑。　幽を尋ねて深處に至れば、鳥語竹斑斑。
林下不逢客。城中俄見山。　林下、客に逢はず、城中、俄に山を見る。
(四)牀敷有餘地。鐘動莫催還。　牀、敷くに餘地あり、鐘動いて、還るを催す莫れ。

【字解】【一】吟筇　吟行の時に攜ふる杖、杜甫の詩に「却攜吟筇立秋風」とある。【二】尋幽　幽邃なる風景を尋ねる。【三】竹斑斑　竹に斑文がある、述異記に「舜、南に巡狩して、蒼梧の野に葬る。堯の二女、娥皇女英、これを追へども及ばず、相與に慟哭し、涙下つて竹を沾ほし、竹上の文、これが爲に斑斑たり」とある。【四】牀敷　臥牀をしつらへる。

【題義】姑蘇志に「獅子林菴は、承天能仁寺に屬す、城の東北隅に在り。元の至正三年、僧維則建つ。多く奇石を聚め、狀、狻猊に類す。故に佛氏の語を取つて、寺に名づく。内に臥雲室・立雪堂・問梅閣・指柏軒・禪窩・竹谷の諸景あり、竝に名人の品題を經たり、最も奇勝と號す、歐陽玄記す」とあるし、青邱の作れる獅子林十二詠の序に「師子林は、吳の城東の蘭若なり、その規制、特に小、しかも號して幽勝となす。清池、その前に流れ、崇丘、その後に峙ち、怪石、崟崒として羅立し、美竹、陰森として交翳し、閒軒淨室、息ふべく、游ぶべく、至るもの、皆棲遲して歸るを忘ること、巖谷に在るが如く、塵境を去るの密邇たるを知らざるなり。好事者、その勝概十二を取り、詩を賦して之を詠じ、名人韻士、このごろ繼作あり、住山因公、聚めて卷を爲す」とある。倪雲林にも題詩があつたから、青邱は、乃ち其韻に次したのである。但し、雲林の原作は、散佚したものと見え、その集には載せて無い。

【詩意】杖を引いて吟行しつつ、打つづけて寺に來るから、道人輩は、我が閒人たることを知つて居る。それから、幽邃の景を尋ねて、段段と奧深い處に往つて見ると、鳥の聲、極めて靜に、竹の色も斑斑として見える。林下に於ては、かつて人に逢はず、この寺が出來てから、俄に城中に山を添へた樣な工合。堂の中は、狹くとも、臥牀をしつらへる餘地がある。唯だ人の歸りを促す樣な入相の鐘が鳴らぬ樣にと念じつつ、去りもあへず、ここに留まつて居る。

【餘論】この首は、三四兩句を散體と見れば、全く一の五言律で、聲律も、すッかり諧合して居る。

尹明府所藏徐熙嘉蔬圖　尹明府の藏する所の徐熙の嘉蔬の圖

(一)少賤習(二)圃事。種蔬每(三)盈疇。　少賤にして、圃事に習ふ、蔬を種ゑて、每に疇に盈つ。
深根鬬(四)玄冬。老葉凌(五)素秋。　深根、玄冬に鬬ち、老葉、素秋を凌ぐ。
(六)採擷風露餘。山庖足(七)嘉羞。　採擷、風露の餘、山庖、嘉羞に足る。
故園經亂後。蔓草日已稠。　故園、亂を經たるの後、蔓草、日、すでに稠し。
野水流畦間。蟲聲暮(八)啁啾。　野水、畦間に流れ、蟲聲、暮に啁啾。

披圖似見之。惻愴起我愁。　圖を披けば、これを見るに似たり、惻愴、わが愁を起す。
食肉豈無人。斯世誰與謀。　肉を食ふ、豈に人なからむや、この世、誰か與に謀らむ。
君多恤民意。毋忽歲饉憂。　君、民を恤むの意多し、歲饉の憂を忽にする毋れ。

【字解】【一】少賤　論語に孔子の語を記して「吾、少にして賤、故に鄙事に多能なり」とある。【二】圃事　畑を作ること。【三】畦疇　疇は畑地。【四】玄冬　冬は五色に配すれば黑なるが故に云ふ。【五】素秋　秋は白色に配するが故に云ふ。【六】採擷　摘み取る。【七】嘉蔬　よき食物。【八】啁啾　前に見ゆ、聲の悲しげなること。【九】食肉　左傳に「肉食者は鄙、未だ遠く謀る能はず」とある。主として、高位高官の者を指す。【一〇】歲饉憂　飢饉年に就いての心配。

【題義】尹明府の明府は、縣令の尊稱。名字閱歷、ともに不詳。徐熙は、圖繪寶鑑に「金陵の人、世々江南の顯族たり。尙ぶところ高雅、興を寓する閒放、花木禽獸、蟬蝶蔬果を畫き、妙、造化を奪ふ。多く澄心堂紙上に在り、畫絹に至りては、絹文稍や麁、米元章、徐熙の絹は布の如しといふは是れなり」とある。この首は、縣令尹某の所藏に係る宋の徐熙の畫ける菜蔬の圖に題したのである。

【詩意】われ少にして賤、故に畑を作ることを習ひ、毎毎、菜蔬を畑に一ぱい種ゑた。根は、深く地中に入つて、冬の寒氣を閉ぢ、葉は、長大にして、秋を凌ぐ位。風露蕭條の晨、それを摘み取つて、臺所で調理すると、まことに、結構な御馳走であつた。しかし、故園、戰亂を經たる後、蔓草は日に増し茂り、野水は、畦間を流れ、蟲の聲さへ、夕に悲しく聞こえた。今、徐熙の嘉蔬圖を披くと、さながら、この景を見る如く、惻然愴然、まことに愁に堪へられぬ位。刻下、廟堂の上には、高位高官の者が隨分居るが、この世を救濟することに就いては、丸で相談相手に成らぬ。君は、平生、人民を憐む心多きものであるから、飢饉の年の心配を忽にせず、賑恤の方法に就いて、十分に考慮して貰ひたい。

【餘論】この首は、題畫の詩であるが、披圖似見之一句を以て、輕輕これを片付け、専ら戰亂の後なる慘澹たる光景を寫し、尹明府その人の注意を促したので、もとより、徒爾の作ではない。

來鴻軒

來鴻軒

高鴻本冥飛。不墮虞羅裏。　高鴻、本と冥飛、虞羅の裏に墮ちず。
朝度雲中關。夕遊瀟湘水。　朝に雲中の關を度り、夕に瀟湘の水に遊ぶ。
驚風吹行斷。儔侶忽萬里。　驚風、行を吹いて斷え、儔侶、忽ち萬里。
哀鳴將何依。荒澤難獨止。　哀鳴、將に何にか依らむとする、荒澤、ひとり止り難し。
集君華池側。粱稻豐自美。　君が華池の側に集まり、粱稻、豐自ら美なり。
響度風翛翛。影沈波瀰瀰。　響度つて風翛翛、影沈んで波瀰瀰。

充庖知不忍。善(八)惠念終始。　庖に充つる、知る、忍びず、善惠、終始を念ふ。

願君儀(九)天朝。修(一〇)翰共騫(一一)起。　願はくは、君、天朝に儀し、修翰、共に騫起。

【字解】【一】高鴻　高い處を飛ぶ大雁。【二】冥飛　大空を飛ぶ。【三】虞羅　虞人の網。【四】雲中關　雲中は地名、その地に在る關門、卽ち雁門關を指す。一統志に「雁門關は、大同府馬邑に在り、代州の界に通ず。大同は、秦に雲中といふ」とある。【五】瀟湘　一統志に「永州湘口關は、瀟湘二水合流の處」とある。【六】吹行　行は雁の行列。【七】翛翛　風の遠くより吹き來ること。【八】善惠　飼養する。【九】儀天朝　易に「鴻、陸に漸し、その羽、用ひて、儀となすべし、吉」とあつて、朝廷の儀則となる。百官の列を爲すのが雁の行列に似て居るより云ふ。【一〇】修翰　長い羽。【一一】騫起　二字ともに揚がる。

【題義】姑蘇志に「吳縣の綠水園は、孫老橋の東に在り、故と朱勔の別墅たり。元の至正中、廬山の陳汝秩・汝言兄弟、これを購ひ得たり。杜詩名園依綠水の句を取つて、以て名づく。中に、來鴻軒・淸冷閣・蘿徑等の名あり。高啓、詩序を撰す」とある。そこで、靑邱の鳧藻集を檢すると、第三卷に綠水園雜詠序があつて、その文は、下の如くである。曰く、吳城の西南隅に朱家園といふものあり、父老言ふ、宋の朱勔の故墅なり、と。廬山の陳惟寅氏、これを得、名を更めて綠水といふ。園中池あり、且つ杜子美の詩語を用ふるなり。その林沼亭軒、亦た各扁あり。近ごろ、頗る廢すと雖も、然れども、寬閒曲勝、猶ほ以て釣游して嘯歌すべし。惟寅、余が其中に往來すること最も熟するを以て、徧ねく之を詠せむことを求む。噫、勔が倖貴を以て、時に豪侈を窮尙するに當つて、園中の珍木異石、崇臺饒榭、もとより當に此に百倍すべく、文人詞客、これが爲に稱美して誇詠するもの、亦た多し。今皆跡滅び、響沈み、復た覩るべきなし。惟寅、窮居隱約と雖も、しかも能く詩書を以て其業を世にし、孝友に篤く、その淸德雅操、もとより以て勔を蔑視すべし。すなはち、余、これが爲に筆を執る、亦た以て愧なかるべし。因つて、復た辭せず、且つ或は傳へ、父老をして園の更めて綠水と名づくるもの、惟寅より始まるを知らしめむことを庶幾するなり。詩、凡そ十六篇」と。すると、全體が十六篇で、この來鴻軒、竝に次に載する蘿徑・茶軒等は、皆、その中の物である。

【詩意】高處を翺翔する雁は、もと冥冥の大空を飛ぶもので、虞人の網には罹らず、朝には雲中なる雁門關を度り、夕には瀟湘の水に游び、南北相去ること遠く、その間を春秋に往來して居る。しかし、驚風が行列を吹き斷つ時は、折角の仲間同士も、忽ち相離れて、やがて、萬里を隔つることになり、哀鳴するも、依るところなく、荒澤には、獨りで留まることが出來ない。幸にも、君の家には、立派な池があるに因つて、その側に集まつて來ると、稻粱を供せられ、味も善く、その量も豐富である。その池中で雁が鳴くと、その聲は、翛翛たる風に隨つて遠く傳はり、時たま、水中に潛ると、その影は瀰瀰たる波の中に沈み、何の心配もなく、のどかに游んで居る。この雁を捕へて、庖廚に充つることは君の心に忍びず、仍つて、これを飼養して、終始渝はらぬのは、その愛、禽鳥に及んだので、まことに、結構なことである。この雁が朝廷の儀則たるが如く、君も出仕して、官人の列に加はり、長い羽を奮つて飛び揚がるやうに、得意に榮達せられむことを希望する次第である。

【餘論】起首八句は、雁の列を爲して飛行するをいひ、集君華池側の四句は、綠水園の池に下つて手厚き奉養を受くるをいひ、充庖知不忍の四句は、一轉して主人の身上に及び、その仁德に依つて、天晴、立身されむことを囑望したのである。

蘿徑

幽谿入蘿蔦。幾曲到巖扉。
夏鳥深啼處。陰陰花墜稀。
知當煙暝後。從此荷樵歸。

幽谿、蘿蔦に入り、幾曲、巖扉に到る。夏鳥深く啼く處、陰陰として、花墜つること稀なり。知る、煙暝するの後に當つて、これより、樵を荷うて歸るを。

【字解】〔一〕蘿蔦　つたかづら。〔二〕巖扉　山中の小家。〔三〕煙暝　煙がたそがれて暗くなる。〔四〕荷樵　樵は薪。

【題義】前首に注して置いた通り、蘿徑も、矢張、綠水園中の名勝の一で、卽ち之に題したのである。

【詩意】幽邃なる谷間の細路は、蔦かづらの間に穿ち入り、幾たびか曲つた後に、山中の小家に達する樣に成つて居る。夏の鳥は、時を得がほに囀り、その近邊は、陰陰として、ほの暗く、花は今しも眞盛で、散り落つることは稀である。やがて、煙たそがれし後、樵夫は、薪を脊負うて、ここから、歸つて行くであらう。

【餘論】宛然たる深山幽谷の景色、園中に見るところとしては、大袈裟に過ぎはせぬかと危ぶまれる。

茶軒

摘芳試新泉。手滌林下器。
一榻鬢絲傍。輕煙散遙吹。
不用醒吟魂。幽人自無睡。

芳を摘んで新泉を試む、手づから滌ふ林下の器。一榻、鬢絲の傍、輕煙、遙吹に散す。吟魂を醒ますを用ひず、幽人自ら睡るなし。

【字解】〔一〕摘芳　茶の芳芽を摘む。〔二〕一榻鬢絲傍　杜牧の詩に今日鬢絲禪榻畔とある。〔三〕遙吹　遠くより吹き來る風。〔四〕幽人自無睡　博物志に「眞茶を飲めば、人をして眠睡少からしむ」とある。

【題義】茶軒も、亦た綠水園中の名勝である。

【詩意】芳芽を摘んで造り上げた茶を新泉で烹て、その味を試みむとし、林下に於て、手づから茶器を滌ひ清めた。やがて、鬢絲亂るる幽人の傍に、一榻を置いて、茶を烹始めると、裊裊たる輕煙は、遙に吹き來る微風に散じて、その風情が、極めて面白い。茶は、心魂を醒まして、眠氣を拂ひ退けるものであるが、幽人は、自然睡ることが無いから、さういふ必要もなく、唯だ其味を賞美するだけである。

【餘論】一榻鬢絲傍の五字は、一寸見ては無理に聞こえるが、前に杜牧の句があるから、先づ善からう。結二句は、幽人の境地、自ら塵俗と異なることを云つたので、多少の情趣を認めることが出來る。

讀書

(一)世物寡所嗜。(二)雅情(三)竹素間。
(四)憑案理(五)殘帙。樂此終日閑。
爰觀自周衰。盛治不可還。
(六)淫辨相擠傾。大道成榛菅。
(七)巧詐足(八)眩世。苟得不顧患。
嬴秦任商君。王制欲盡删。
厚賦山澤空。亟戰原野(九)殘。
流風自斯降。(一〇)誅求困孤(一一)孱。
是非千萬途。欲辨亦已艱。
賴茲(一二)聖册存。足啓昏與頑。
誰云(一三)古哲駕。邈矣難仰攀。
於焉誦其言。如造揖讓班。
寄語向俗子。幸勿叩(一四)我關。
何暇從爾談。方對孔(一五)與顏。

讀書

世物、嗜むところ寡し、雅情、竹素の間。
案に憑つて殘帙を理め、この終日の閑を樂む。
ここに觀れば、周の衰へたるより、盛治、還すべからず。
淫辨、相擠傾し、大道、榛菅を成す。
巧詐、世を眩するに足り、苟くも得れば、患を顧みず。
嬴秦は商君に任じ、王制、盡く删らむと欲す。
厚賦、山澤空しく、亟戰、原野殘す。
流風、これより降り、誅求、孤孱を困む。
是非千萬途、辨せむと欲するも、亦た已に艱なり。
この聖册の存するに賴つて、昏と頑とを啓くに足る。
誰か云ふ、古哲の駕、邈たり、仰ぎ攀ぢ難し、と。
ここに、その言を誦すれば、揖讓の班に造るが如し。
寄語、俗子に向ふ、幸に我が關を叩く勿れ。
何の暇か爾に從つて談せむ、方に對す孔と顏と。

【字解】【一】世物　世間の事物。【二】雅情　超俗の情。【三】竹素　書册に同じ、古しへは、竹簡に書し、次に素絹に書し、それから後漢の蔡倫が始めて紙を發明した。東觀書に「劉向、校書を典る。先づ竹に書す。刊定し易きが爲に、繕寫すべきものは上素を以てす」とある。【四】憑案　机に倚りかかる。【五】殘帙　こはれた書帙。【六】淫辨　長長しき辯論。【七】巧詐　巧に詐る。【八】眩世　世人の目をくらます。【九】原野殘　殘は殘害、殘破、荒れはてる。【一〇】誅求　苛税を取り立てる。【一一】孤孱　孤立援なくして孱弱なるもの。【一二】聖册　聖賢の書いた書册。【一三】古哲駕　古聖人の車。【一四】我關　關は門。【一五】孔與顏　孔子と顏回。

【通義】この首は、讀書に就いて感慨を敍し、聊か末俗の澆薄を浩歎したのである。

【詩意】われは、世上の事物に就いて、嗜好するものが少く、唯だ超俗の情を書册の間に寄せて居るばかり、机に倚りかかつて、こはれかかつた書帙を始末し、終日閑暇なることを樂んで居る。ここに、

世の推移を一瞥すると、むかし、周室が衰へてから、文武の至治は、再び還すことが出來ず、はては、長長しき辯論を弄し、三寸の舌端で、互に押し退け、いつしか、大道も、榛菅と成りはてて仕舞つた。戰國になると、巧詐を以て世人の目を眩まし、かりそめにも、うまく行くといへば、あとの患害などは少しも顧みなかつた。その時、嬴姓の秦國に於ては、商鞅を任用し、盡く王制を刪り去らむことを期し、租稅を厚くして、山澤爲に空しく、戰爭が屢ば起つた爲に、原野まで、ひどく荒されて仕舞つた。その遺風が後世に影響し、人民を責めはたいて、孤立援なき孱弱の者をも困しめる樣になり、是非は樣樣で、これを辨別することは、まことに六づかしい。幸にして、聖賢の遺書が、今日まで傳はつて居て、昏愚と頑迷とを啓發することが出來る。古聖人は、早く逝き、その車は、邈然として遠く、とても仰いで攀ぢることは出來ないが、ここに、古書に依つて、その言辭を誦すれば、いつしか、身を百代の上に置き、その當時これと揖讓した人人の班列に加はつて居る樣な氣がする。そこで、俗物どもに寄語し、どうか、我が門を叩いて呉れるな、おのれは、今しも、孔子や顏回と對坐して居て、汝等と共に無駄話をする暇だに無いといひたい樣である。

【餘論】金檀の按に「この首、前の讀史一首と重るに似たり」とあつて、精細に對照すると、讀史の周衰禮樂廢、大道成二榛菅一が、ここでは、爰覩自二周衰一……大道成二榛菅一となり、讀史の嬴秦任二商君一、王制欲二盡刪一、厚賦山澤空、亟戰原野殷が、ここでは、その儘用ひられ、唯だ殷の字を殘の字に直したただけ、讀史の謂云重華親、邈矣難二仰攀一が、ここでは、重華を古哲と改めただけ、於レ焉誦二其書一、如レ造二揖讓班一も、矢張、その儘用ひられて居る。唯だ讀史の頽波自レ茲靡、千秋去無レ還と安得鳳凰鳥、飛下二浮雲間一とが、ここには無いだけであつて、その代り、十數句を增加して居る。すると、讀史が先に出來たのを、後に敷張して此首にしたのか、此首が先に出來たのを、後に省略して讀史にしたのか、いづれとも分からぬが、全く類似して居るから、本來ならば、その一を存して他を刪るべく、もしくは、その旨を注して置くべき筈である。從つて、字解も、前に讀史の條に詳しく述べたのは、ここには、重ねて揭出しなかつたから、その積りで、對照して貰ひたい。

過二立公房一　　立公の房を過ぐ

空院閉(一)二深竹一。幽花有二孤姸一。　空院、深竹に閉ざし、幽花、孤姸あり。
春深鳥語寂。風磬(二)時泠然(三)。　春深くして鳥語寂、風磬、時に泠然。
非二茲絕塵地一。何以寄二高禪(四)一。　この絕塵の地に非ざれば、何を以て高禪を寄せむ。

【字解】【一】閉深竹　深竹の中に閉ざしてある。【二】風磬　風が傳へる石磬の聲。【三】泠然　莊子に「列子の風に御して行く、泠然として善きなり」とある、泠は風聲、又音聲淸淡の貌。【四】高禪　高尙なる坐禪。

【題義】 立公は、いづれ高僧の名であらうが、その本名等は分からぬ。この首は、立公の山房を過ぎて作つたのである。

【詩意】 碌碌人も居ない僧院は、竹藪の奥に閉され、幽花が獨り其妍を矜つて居る。花ぐもりの天氣で、鳥の聲も寂として聞こえず、風が傳へる石磬の響が、泠然として聞こえるだけである。なる程、この樣に塵俗を離れた處でなければ、高尚なる坐禪を寄することも出來ないと思はれる位、立公は、流石に善く其處を擇ばれたものである。

【餘論】 かういふ風調は、王維の集中などに散見して居て、作者は、まさしく之を學んだものであらうが、その雋秀閒放の趣に於て、なほ一籌を輸するを免れない樣である。

賦得桃塢送別　　桃塢の送別を賦し得たり

何地芳菲滿。吳趨曲陌西。　何の地か、芳菲滿つ、吳趨曲陌の西。

藏金非漢壘。種樹似秦谿。　金を藏する、漢壘に非ず、樹を種うる、秦谿に似たり。

未曙忽霞起。過春猶雪迷。　未だ曙けずして忽ち霞起り、春過ぎて猶ほ雪迷ふ。

葉聞渡江唱。花憶映門題。　葉には江を渡るの唱を聞き、花には門に映ずるの題を憶ふ。

折時或傍水。遊處每成蹊。　折る時、或は水に傍ひ、遊ぶ處、每に蹊を成す。

偶來因送客。腸斷有鶯啼。　偶ま來るは、客を送るに因る、腸斷つ、鶯の啼くあり。

【字解】【一】芳菲　花草の盛きをいふ。【二】吳趨　卷一、吳趨行の條に見ゆ、もと蘇州城中の坊名。後には、蘇州の別名の如くに用ふることもある。【三】曲陌　曲れる街衢。【四】藏金　後漢書に「董卓、塢を郿に築き、萬歲塢と號し、金二三萬斤、銀八九萬斤を貯へ、積穀三十年」とある。【五】種樹似秦谿　秦谿は武陵桃源を指す。その詳は、前に贈惠山醫僧東山の條に見えて居た。【六】霞起　韓愈の題桃源圖に稱桃處處皆開花、川原遠近蒸紅霞とある。【七】雪迷　鄭奎の妻の詩に春風吹花落紅雪とある。【八】葉聞渡江唱　古樂府の注に「王獻之の愛妾、桃葉と名づく。獻之、歌を作つて、これを送つて曰く、桃葉復桃葉、渡江不用楫、但渡無所苦、我自迎接汝」とあり、江寧府志に「桃葉渡は、秦淮の口に在り」と見ゆ。【九】花憶映門題　本事詩に「博陵の崔護、姿質甚だ美、進士の第に擧げらる。清明の日、ひとり都城の南に遊び、居人の莊を得たり、一畝の宮、花木叢萃、寂として人なきが若し。門を叩けば、これに久しうして、女あり、門隙より之を窺ひ、問ふに姓氏を以てす。答へて曰く、春を尋れて獨行し、酒渴して飮を求む、と。女入り、杯水を以て至り、門を開き、牀を設けて坐を命じ、ひとり、小桃の斜柯に倚つて立ち、しかも、意を屬する、殊に厚し。崔辭して去る。迨つて門に至り、情に勝へざるが如くして入る。後、絕えて復た至らず。來歲清明の日に及び、忽ち之を思ひ、情、抑ふべからず、徑に往いて之を尋ぬれば、門院故の如くして、すでに扃鎖す。崔、因つて詩を左扉に題して曰く、去年今日此門中、人面桃花相映紅、人面不知何處去、桃花依舊笑春風」とある。【一〇】傍水　王維の詩に水上桃花紅欲燃とある。【一一】成蹊　卷三、寓感の十に見えて居たが、諺に「桃李言はず、その下、自ら蹊を成す」とある。

【題義】 桃塢は卽ち桃花塢、姑蘇志に「章武の別業は、閶門の裏、北城の下に在り。今、桃花塢と名づく。當時、郡人春游、花を此に看る。後、皆蔬圃となり、間ま花を種うるを業とするものあり」と

見えて居る。この首は、桃花塢に人を送つた時の作ではなく、桃塢送別といふ題を得て、これを賦したのである。

【詩意】春景色の殊に賑はしきは、何處かといへば、吳趨坊の西である。その地は、金を埋めたといふが、漢の董卓が壘を築いた處ではなく、桃を種ゑて、別に一境を爲して居る工合は、かの秦人が隱れ住んだといふ武陵の桃源に似て居る。その桃が花を開く時分は、天未だ明けざるに、忽ち紅霞の起るを望むべく、春を過ぎて、片片と花の散る景色は、さながら、雪と見まがふばかり。桃の葉に就いては、王獻之が其妾桃葉を送つて作つた渡江不用楫といへる短い歌を聞いたことがあるし、桃の花に就いては、崔護が再び尋ねても佳人に遇はず、惆悵の極、門に題したといふ桃花依舊笑春風の一詩を思ひ出す。その枝を折らむとして、ある時は、水に沿ひ、その人を勾引して遊びに來させるに因りて、毎毎花下に小路が通じて居る。わが偶然ここに來たのは、客を送るが爲めであつて、鶯聲の宛轉たるを聞くにつけて、自然、斷腸の想を爲した。

【餘論】題は桃塢送別であるが、その大部分は、桃塢の風物を敍し、送別は、唯だ結末二句だけ。それも、切當を缺いて居て、決して妙趣を認めない。要するに、これは、机上の題詠で、意境相屬せざるに因つて、出來榮えが、自然、目出たくなかつたのであらう。

東園種蔬

東園に蔬を種う

我非適世材。學圃乃所宜。
我は適世の材に非ず、圃を學ぶは、乃ち宜しきところ。

種蔬居東園。鋤灌敢告疲。
蔬を種ゑて東園に居り、鋤灌、敢て疲るるを告げむや。

夏來風露繁。衆綠俱紛披。
夏來つて風露繁く、衆綠、ともに紛披。

朝餐摘我菘。暮餐芼我葵。
朝餐には我が菘を摘み、暮餐には我が葵を芼ぶ。

此味賤所嗜。蔓草勿害之。
この味、賤の嗜むところ、蔓草、これを害する勿れ。

慨彼主父言。鼎食何其危。
慨す、彼の主父の言、鼎食何ぞ其れ危き。

【字解】【一】適世材　この世に適したる材器。【二】學圃　論語に「樊遲、圃を學ばむことを請ふ」とあつて、畑を作ること。【三】鋤灌　畦の間を鋤き起し、又水を與へる。【四】紛披　紛然として披く。【五】摘我菘　菘は菜、南史に「齊の周顒、鍾山に隱る。王儉、謂つて曰く、卿、山中に在つて、何の食するところ。答へて曰く、赤米白鹽、綠葵紫蓼。又問ふ、何者か佳となす。曰く、春初の早韮、秋末の晚菘」とある。【六】芼我葵　爾雅に「芼は搴なり」とあつて、その注に「皆菜を擇ぶなり」とある。葵は水あふひ。【七】賤所嗜　賤は賤者。【八】主父言　主父、名は偃、漢の人。【九】鼎食　漢書主父偃傳に「丈夫、生きて五鼎に食ふを得ず、死せば、五鼎に烹られむのみ、吾、日暮る、故に倒行して之を逆施す」とある。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】われは、澆季の今の世に適合したる材器でもなく、畑を作ることが、丁度宜しいところであ

る。そこで、東園に居て、菜蔬を種ゑ、畦の間に鍬を入れたり、水を遣つたりして、終日働いて居るが、決して、疲勞を告げない。夏になると、朝早く風露繁くして、しとどに濡れ、そして、菜の葉の綠なるが、紛然として展び廣がつて居るのは、見るからに、すがすがしくして、心地よきものである。朝飯には菜を摘み、夕食には水あふひを擇り分け、調理して之を膳に上せる。その味は、もとより賤者の嗜むところであるから、蔓草は、心して之を害するな。むかし、主父偃は、大丈夫、五鼎に食はうと云つたが、まことに危險至極の言葉であつて、今聞いてだに、人をして慨嘆せしめる。われは、もとより、そんな野心とてはなく、唯だ自分で作つた菜ッ葉を食つて、これを旨いとして居るだけである。

【餘論】唯だ有りの儘を述べただけであるが、結末に至り、主父偃を陪客として出して來たので、古典的趣味が加はつて、聊か面白くなつて居る。

聞張著作値雨。宿陳山人園。因寄

張著作が雨に値ひ、陳山人の園に宿するを聞き、因つて寄す

芳月抱(一)深惻。佳游闕(二)追攀(三)。　芳月、深惻を抱き、佳游、追攀を闕く。

聞君獨命(四)駕。遠造幽人(五)關。　聞く、君が獨り駕を命じ、遠く幽人の關に造るを。

春園花(六)絮稀。啼鳥池上閒。　春園、花絮稀に、啼鳥、池上に閒なり。

留連宿煙(七)閣。尊酌解(八)離顏。　留連して煙閣に宿し、尊酌、離顏を解く。

遙想清夜(九)徂。鳴絃竹林間。　遙に想ふ、清夜の徂くを、絃を鳴らす竹林の間。

非因雨成滯。興愜自忘還。　雨に因つて滯を成すに非ず、興愜うて、自ら還るを忘る。

【字解】【一】芳月　花の咲く月、卽ち春二三月の頃、韋應物の詩に故人問訊緣同病、芳月相思阻一杯とある。【二】深惻　深い痛惻の念。【三】追攀　同行する。【四】命駕　車の支度をする。【五】幽人關　幽人の家の門。【六】花絮　絮は河柳の花。【七】煙閣　煙たなびく高閣。【八】解離顏　旅情を洗ひ去つて笑顏をする。【九】清夜徂　夜が更ける。

【題義】張著作は、著作郎の官に居る張某、陳山人と共に、名字等は、例の如く不詳。この首は、張某が陳山人を訪ひ、雨に値つた爲に、その園に留宿したる由を聞いて、賦して之に贈つたのである。

【詩意】おのれは、花咲く此頃、生憎、深い痛惻の念を抱き、その爲に、家に籠つて居て、君の面白い游に同行することの出來ないのは、如何にも殘念であつた。聞けば、君は、ひとり車を用意して、遠く幽人の宅を訪はれたとのことで、園中には、花も、柳の花も稀で、春は、稍や季になり、池上に鳴く鳥の聲の靜なるは、極めて面白い。それから、君は留連して、煙たなびく高閣に宿し、酒尊を酌みつつ、旅愁を解いて笑ましげに見える。多分、夜の更くる頃は、竹林の間に坐して、琴を搔き鳴らして、愈よ趣を添へたことであらう。して見れば、雨の爲に、止むを得ず、滯留したのではなく、

逸興が心に愜ひ、やがて、還ることを忘れたのであらう。

【餘論】 雨に値うて、止むを得ず、泊まつたといふのは、殺風景で、趣が無い處から、これを解釋して、興愜うて自ら歸るを忘れたものとなし、雨も暫時にして歇み、夜遲く彈琴の樂があつたらうといつて、あくまで、張著作の風流を推稱したのである。

鄭隱君秀野軒圖

江晚洲渚交。雨晴草菲菲。
前山靄欲暗。罟師渡水歸。
望煙知君家。花竹隱半扉。
已休田中耒。猶響林下機。
此鄉卽桃源。亂後世所稀。
開圖若身到。不知塵境非。

鄭隱君の秀野軒の圖

江は晚にして洲渚交り、雨晴れて草菲菲たり。
前山、靄として暗からむと欲す、罟師、水を渡つて歸る。
煙を望んで君の家を知る、花竹、半扉隱たり。
すでに田中の耒を休め、猶ほ林下の機を響く。
この鄉、卽ち桃源、亂後、世、稀なるところ。
圖を開けば、身到るが若く、塵境の非なるを知らず。

【字解】【一】洲渚交　洲渚が交錯して見える。【二】罟師　網打を業とするもの、盧綸の詩に「纔出浮萍値罟師」とある。【三】隱半扉　門扉の半面を掩ひ藏して居る。【四】桃源　前に數ば見ゆ。

【題義】 この首は、鄭某が住める秀野軒の圖に題したのである。すでに隱君といふ位であるから、この人は、一かどの高士と見えるが、姓字等は不詳。なほ、秀野軒は、東坡の花竹秀而野の句を取つて名づけたのであらう。

【詩意】 江天の景色は、たそがれて、洲渚交錯、その遠近に迷はむとし、雨、すでに晴れ、芳草は菲菲として、綠、愈よ濃かである。前面の山は靄を帶びて暗くなりかかり、網打の漁者は、水を渡つて家路へと急ぐ。煙の立ちのぼる處は、卽ち君の家で、花竹の茂みは、門扉の半面を掩ひかくして居る。この時、君は、すでに田を耕して居た鋤を收めて、家に還つて來たが、君の妻は、林下の茅屋に於て、しきりに、機を織つて居る。君の居る此地は、取りも直さず、桃源ともいふべく、亂後に於ては、世上稀に見るところである。そこで圖を披いて一見すれば、身、すでに其地に至るが如く、今現に居る塵境の非なることを忘れる位である。

【餘論】 すでに、題畫であるから、なるべく、動的に、時間的に敍述せむことを企て、結末四句は、卽ち感慨を附記したのである。「望煙知君家」の四句は、淸夐絕俗、それだけ切り離しても、なほ愛誦を値する。

與諸公飲綠茗園　　諸公と綠茗園に飲す

金塘〔一〕環勝墅。緹綺〔二〕會芳時。　金塘、勝墅を環り、緹綺、芳時に會す。

雀乳〔三〕依桐葉。魚翻罥〔四〕荎絲。　雀は乳して桐葉に依り、魚は翻つて荎絲に罥む。

詩流洛下〔五〕詠。歌豔郢中〔六〕詞。　詩は洛下の詠を流し、歌は郢中の詞よりも豔なり。

一念交歡厚。觴至詎能辭。　一たび交歡の厚きを念はば、觴至るも詎ぞ能く辭せむ。

【字解】〔一〕金塘　堤防の堅固なることを金に比して云ふ。虞世南の詩に歌堂面渌水、舞館接金塘とある。〔二〕緹綺　説文に「緹は帛、丹黃色」とあり、博雅に「赤なり」とある。綺は綾。二つで美服の義。〔三〕雀乳　雀が雛を養ふ。〔四〕罥荎絲　菱の絲にからむ。〔五〕洛下詠　張喬の詩に洛下吟詩侶とある、洛は洛陽、都人の調子。〔六〕郢中　卷三、擬古の第二に見ゆ、宋玉の答楚王問に「客、郢中に歌ふものあり」と見ゆ、郢は楚の都。

【題義】説明に及ばぬ、但し、綠茗園の所在は不詳。

【詩意】丈夫に造つた隄が、景色に富める別墅を環り、立派な衣を著た人人が、春の盛りに當りて、ここに會合した。雀は雛に哺んで、桐の葉に依り、魚は池に跳つて、菱の絲にからまつて居る。座上、詩を作れば、都の風調を存し、歌を唱ふれば、郢中の詞の如く艷麗である。一たび、良友交歡の厚きを思へば、杯が廻つて來たとき、決して辭するに及ばず、遠慮なく頂戴する次第である。

【餘論】結句を聊か直しさへすれば、純然たる五律となるので、六朝の末の詩體である。

送上海石明府　　上海の石明府を送る

三月熟桑椹〔一〕。四月落棗花〔二〕。　三月、桑椹を熟し、四月、棗花を落す。

布穀〔三〕樹下飛。塘轉村路斜。　布穀は樹下に飛び、塘、轉じて、村路斜なり。

東塍〔四〕擊耕鼓〔五〕。西林擲繰車〔六〕。　東塍、耕鼓を擊ち、西林、繰車を擲つ。

但言此地樂。不聞此地嗟。　但だ言ふ、此地樂しと、此地に嗟するを聞かず。

雖無夕烽警。尚苦秋賦〔七〕加。　夕烽の警なしと雖も、尚ほ秋賦の加はるに苦しむ。

煩君始到日。爲我問田家。　君を煩はす、はじめて到るの日、わが爲に田家を問へ。

【字解】〔一〕桑椹　桑の實。〔二〕棗花　李頎の詩に四月南風大麥黃、棗花未落桐陰長とある。〔三〕布穀　鳥の名、後漢書　祖楷傳に「疏に曰く、吾聞く、布穀は孟夏に鳴き、蟋蟀は始秋に鳴く」とあつて、その注に「布穀、一名戴紝、一名戴勝」とある。和名はうじろ。〔四〕東塍　塍は田のうね、ここでは田といふに同じ。〔五〕擊耕鼓　詩經に琴瑟擊鼓、以御田祖とあつて、穀神を祭る爲に鼓を鳴らすのである。〔六〕繰車　絲を繰る車、陸游の詩に何人畫得農家樂、咿軋繰車隔短牆とある。〔七〕秋賦　秋に徵收する租稅。

【題義】上海は、松江府に屬して居る。明府は、前にも見えた通り、縣令の尊稱。この詩は、石某が上海縣令として赴任するのを送つたのであるが、その人の名字閱歷等は、分からない。

【詩意】三月には、桑の實が熟し、四月には、棗の花が落ち、頰白の鳥は、そろそろ樹下に飛んで、百姓は、これから忙しく、見わたせば、隄より轉じて、村の路が斜に通じ、滿目すべて水田である。今しも、東の野らに於ては、田祖を祭る爲に太鼓を鳴らし、西林の草小屋に於ては、絲くり車を片づけ、愈よ田に出て仕事をせねばならぬ。百姓どもは、唯だ此地が樂しいといつて、此地に就いて嗟嘆せしことを聞かない。まことに、夕に烽火を揚げるといふ戰爭の警報なきは、幸であるが、每年秋の租稅の段段增加するのは、苦痛である。君は、これから上海に赴任されるさうだが、はじめて彼地に至りし時、わが爲に、田家の模樣如何を尋ねて、人民の苦樂に就いて御注意あらむことを希望する。

【餘論】この詩は、一種特異の作法で、大半は田家の現況を述べ、結二句に於て、送別の意を寓したのである。しかし、農民の苦樂を敍するところが、今少し適確切當であつたらばと思はれる。

逢雲巖僧元實將赴湖上賦以送之

雲巖の僧元實の將に湖上に赴かむとするに逢ひ、賦して以て之を送る

早懷塵外想。每訪林間蹤。　早く塵外の想を懷き、每に林間の蹤を訪ふ。

空齋哦夜雪。共聽雲巖鐘。　空齋、夜雪に哦し、ともに、雲巖の鐘を聽く。

西澗已久別。東城忽相逢。　西澗、すでに久しく別れ、東城、忽ち相逢ふ。

還當布袈裟。去坐湖上峰。　還た當に袈裟を布き、去つて湖上の峰に坐すべし。

喧寂既殊調。無因得追從。　喧寂すでに調を殊にし、追從を得るに因なし。

倚閣一遙送。秋山紅樹重。　閣に倚つて一たび遙に送れば、秋山、紅樹重る。

【字解】【一】塵外想　出世間的願望。【二】林間蹤　林間に在る隱者などの遺跡。【三】雲巖　題義の條に注して置く。【四】袈裟　僧衣、史記大夏傳の正義に「靈鷲山、佛、むかし阿難と此山上に在りて四望し、稲田疆畔を見る、因つて、七條割截の法を此に製す、今の袈裟衣、是れなり」とある。【五】喧寂　騷がしきと靜かなると。【六】追從　後を追うて從行する。

【題義】姑蘇志に「雲巖寺は、虎邱山上に在り」と記してある。湖上は、どこの湖水か分からぬが、蘇州附近ならば、太湖であらう。この首は、雲巖寺の僧元實が太湖に赴かむとして、錫を飛ばすに逢ひ、仍つて賦して其行を送つたのである。元實は、いづれ、高僧であらうが、その貫屬閱歷等は、例の如く不詳。

【詩意】われも、早くより、出世間的願望を抱き、每每林間に在る隱者の遺跡などを訪ひ、ある時は、君と共に、人なき僧房に於て、夜雪に對して吟哦し、雲巖寺の鐘を聞いたことさへある。おもへば、西澗に於て、君と別れし後、歲月すでに久しきを經たるに、今日、ゆくりなくも、東城に於て出合つた。聞けば、君は、これより太湖に赴き、袈裟を地に布いて、湖上の山上に坐して居たいとの話。君と我

とは、仙凡喧寂、全く其調を殊にして居るから、殘念ながら、お供をして同行することが出來ない。そこで、高閣に倚つて、君の行くのを目送すると、四方の山は、秋、方に深くして、紅葉が重り合ひ、太湖附近は又一しほだらうと思はれる。

【餘論】起首四句は從前の交情、次の四句は今日の邂逅、終の四句は卽ち送別の正意である。

舟歸雨中

舟歸雨中

猿鳴楚雨急。江岸孤舟次。　猿鳴いて楚雨急に、江岸、孤舟次る。
前山到非遠。已見煙中寺。　前山到る遠きに非ず、すでに煙中の寺を見る。
寒景暮蒼然。歸人獨愁思。　寒景、暮に蒼然、歸人、ひとり愁思す。

【字解】【一】楚雨　楚天の雨。【二】次　やどる、ここでは舟を泊する。【三】蒼然　ほの暗き貌。

【題義】この首は、何處からとも知らぬが、舟で蘇州に歸る途中、雨に逢うて賦したのである。

【詩意】楚天の雨、しきりに降りそそぎ、猿の聲、悲しく聞こゆる折から、江岸に孤舟を泊した。前面の山は、行かうとすれば、さう遠くはなく、煙中の寺さへ、ありありと見える位。やがて日暮になると、秋の末の景物は、ほの暗くなり、歸りを急ぐ旅客は、ひとり愁に堪へられない。

【餘論】猿鳴楚雨急の四句は、一氣呵成、風調高亮、これだけでも十分な樣であるが、唯だ敍景である處から、更に抒情の二句を添へて、題意を全うしたのである。

秋夜會飮。送劉別駕。得星字

秋夜會飮、劉別駕を送る、星の字を得たり

征馬已歸皁。哀鴻方過庭。　征馬すでに皁に歸り、哀鴻方に庭を過ぐ。
何期當別夜。還得聚寒廳。　何ぞ期せむ別夜に當り、還た寒廳に聚まるを得むとは。
客醉誦明月。僕興瞻落星。　客は醉ひて明月を誦し、僕は興きて落星を瞻る。
光銷帷中燭。響動車前鈴。　光は銷ゆ帷中の燭、響は動く車前の鈴。
留連豈有極。之子不遑寧。　留連豈に極まりあらむや、之子、寧きに遑あらず。

【字解】【一】歸皁　皁は厩。【二】哀鴻　悲しげに鳴く雁。【三】寒廳　廳は廳事、卽ち表座敷、陸游の詩に寒廳靜似阿蘭若とある。【四】誦明月　蘇軾の前赤壁賦に「明月の詩を誦し、窈窕の章を歌ふ」とあつて、明月の詩とは、詩經に見えた月出皎兮を指す。【五】瞻落星　夜あけの消え行く星を仰ぎ見る、王貞白の詩に半窓分曉月、當枕落殘星とある。【六】帷中　帷は戸ばり。【七】之子　數ば前に見ゆ。【八】不遑寧　寧は寧處、落ち付いて居る。

【題義】晉書職官志に「州に刺史・別駕・治中・從事・諸曹從事等の員を置く」とあつて、別駕は、刺史

の下役である。得星字とは、何か古句でも分けて、韻となし、その中の星といふ字が自分に當つたといふこと。この首は、秋夜、知人どもが相會して宴飲し、その席上、劉別駕の赴任を送る爲に詩を賦し、自分は韻として、星といふ字を探り當て、やがて、これを賦したといふのである。

【詩意】旅に用ふる馬は、すでに廐に還り、悲しげに鳴く雁は、庭を過ぎて、低く飛んで行く。劉別駕と御別れをする夜、知友どもが、この表座敷に聚まつて、宴を催したのは、まことに、思ひがけぬことであつた。やがて、時を移せし後、客は醉ひて、明月の詩を誦し、下僕は早く起きて、夜あけの星を眺めて居る。帷中の燈火も、將に消えなむとし、車前の鈴は、頻りに響いて、別駕の發程を催促する。いくら、ここに留連して居たとて、はてしないことであるし、別駕は、落ち付いて寧處する暇だになく、まことに忙しい御身であるから、そろそろ出發されるが善からう。

【餘論】尋常惜別の意味でなく、その行の早からむことを促したのは、聊か面白いが、その前の八句は、極めて平凡で、絕えて精彩がない。

送陳博士歸番禺葬親

陳博士の番禺に歸りて親を葬るを送る

北風海欲氷。凜此窮(一)陰時。　北風、海、氷らむと欲す、凜たり、この窮陰の時。

問君歸何亟。親葬不可遲。　君に問ふ、歸る何ぞ亟かなる、親の葬、遲かるべからず。

遙遙望郭門。慘慘投(二)山陂。　遙遙として郭門を望み、慘慘として山陂に投す。

僧房拜遺柩。瓦(三)燈照塵帷。　僧房、遺柩を拜し、瓦燈、塵帷を照らす。

還當卜玄(四)宮。遠託瘴(五)水湄。　還つて當に玄宮を卜し、遠く瘴水の湄に託すべし。

日夕既封(六)樹。慟哭行(七)繞之。　日夕、すでに封樹、慟哭行いて之を繞る。

雨來靑楓林。猿鳥吟相悲。　雨は來る靑楓林、猿鳥吟じて相悲む。

化(八)者苟得安。萬事無足爲。　化するもの、苟くも安きを得れば、萬事爲すに足るなし。

奈何割(九)裾子。尙忍生(一〇)違離。　奈何ぞ、裾子を割く、尙は忍んで、生きながら違離する。

【字解】【一】窮陰　年暮れむとして天陰る。【二】投山陂　陂は隄、山丘陂陀の間を目ざして行く、そこに寺があるのであらう。【三】瓦燈　土器で油を燃やす燈火、釋惠洪の詩に瓦燈巳照宮商石とある。【四】玄宮　墓所を云ふ。【五】瘴水湄　瘴は毒熱の氣、番禺は熱帶の地なるが故に云ふ。毒熱の氣の立ちこめたる水涯。韓愈の詩に好收吾骨瘴江邊とあり、范成大の詩に喚渡䑺䑺瘴水濱とある。【六】封樹　墓所の土を盛り上げて木を植ゑる。【七】行繞之　墓の周圍を繞る。【八】化者　死者をいふ。【九】割裾子　晉書溫嶠傳に「嶠を散騎常侍に除す。初め、嶠、命に將はむと欲す。その母崔氏、固く之を止む。嶠、裾を絕つて去る。その後、母亡ぶ、嶠、亂に阻まれて、歸葬するを獲ず、これに由つて、固讓して拜せず、苦に北歸を請ひ、已むを得ずして命を受く」とある、衣の裾を截ち切る。【一〇】生違離　生きながら別れる。

【題意】 博士は、古しへの國子博士、今でいへば大學教授。番禺は、廣州府に屬して居る。この首は、博士陳某が、親を葬る爲め、その柩を護して、故鄉の番禺に歸るを送つて作つたのである。陳の名字閱歷は、例の如く不詳。

【詩意】 北風、地を捲いて至り、海水も、氷らむとする樣に、寒氣凜凜たる歲末天陰の時に當り、君は、ひたすら歸りを急がれるが、承れば、御尤もな次第で、親の埋葬は決して遲なはつてはならぬからである。遙遙として郭門を望みつつ、慘慘として山陂の間を指して行くと、そこには寺があつて、その寺には、靈柩が預けてある。そこで、僧房に至つて、その柩を拜した。と見れば、土器の燈暗くして、塵に染まれる四邊の帷を照らし、それが既に傷心の種である。やがて、君が長い旅をして、愈よ鄕里に還られると、第一に、何處が善いか、玄宮の地を卜して、遠く瘴江の邊に託されるであらう。次いで、日夕、工事を急ぎ、すでに土を盛り上げ、樹を植ゑて、すッかり出來上ると、君は慟哭しつつ之を繞り、ひたすら、その哀を盡されるが、雨蕭蕭として、靑葉の楓林に灑ぎ、猿鳥相和して悲吟する時などは、どんなに淋しく、且つ心を傷ましめることであらうか。しかし、立派に墓所をしつらへ、死者にして苟くも安きを得れば、それで澤山で、この上は、萬事爲すに足るものもない位。如何なれば、むかし、溫嶠は、衣の裾を引きちぎり、親の心に逆つて、生きながら別れ、そして、忍んで終天の恨を貽したのであるか。君の如きは、末世の今に珍らしい大孝で、まことに、奇特の至りである。

【餘論】 北風海欲氷の四句は、この行、歸葬の爲めなるを云ひ、遙遙望郭門の四句は、山寺に至りて遺柩を拜するを云ひ、それから、道中の事などは、すッかり省略し、還當卜玄宮の六句は、新に墓を築くことを云ひ、化者苟得安の四句は、博士の大孝を稱したのである。要するに、全篇、今後かくの如くなるであらうと想像し、又かくの如くありたいと囑望したので、卽ち言を以て相贈るといふ本旨に協つて居るのである。

渡吳淞江

吳淞江を渡る

稍離城郭喧。遠適滄洲(一)趣。　稍く城郭の喧しきを離れ、遠く滄洲の趣に適ふ。
乘潮動旅榜(二)。霧散寒江曙。　潮に乘じて旅榜を動かせば、霧は散ず寒江の曙。
蒼蒹(三)靡靡出。白鳥翻翻去。　蒼蒹靡靡として出で、白鳥翻翻として去る。
不識野人村。舟中望(四)高樹。　野人の村を識らず、舟中に高樹を望む。
遭時歎有棘(五)。拯物慙無具(六)。　時に遭うて棘あるを歎じ、物を拯うて、具なきを慙づ。
不向此鄉去。飄零復何處。　この鄉に向つて去らず、飄零、復た何の處。

【字解】 【一】滄洲　仙境の名、杜陽雜編に「隋の大業中、元藏幾、過海使判官となり、風に飄へされて洲島の間に至る。洲人云ふ、

ここは滄洲、中國を去ること、すでに數萬里、『花木常に二三月の如く、人多く死せず』とある。【二】旅榜　客舟といふに同じ。【三】蒼葭　枯れかかつた葭、詩經に蒹葭蒼蒼とある。【四】望高樹　靑邱の本傳に「大樹村は、洲湖の東に在り、南に臨つて吳淞江に切す」とあつて、大方それを指したのであらう。【五】有棘　障害が多い。【六】無具　方法が無い。

【題義】姑蘇志に「吳淞江は、卽ち古しへの婁江なり、亦た下江と名づけ、俗に劉家港と呼ぶ。又大姚より分支し、澱山湖を過ぎ、東、嘉定靑浦に至りて東北に流るるも、亦た吳淞江と名づくるものは、東江といふ。皆太湖の委なり」とある。作者は、吳淞江上の靑邱に居たことがあつて、その名を取つて號とした位。この首は、ある時、靑邱に赴く途中、江を渡る時に作つたのであらう。

【詩意】次第に、蘇州城中の喧しきを離れ、遠く滄洲の仙境に往つた樣な氣がする。潮に乘じて、客舟を進めると、大霧いつしか散じ、寒江一帶、夜が明けかかつて來た。江岸には、枯れかかつた蒹葭が靡靡として見え初め、水面には、白鳥が翩翩として飛び去る。野人の住む村は、どこか辨別し兼ねるが、舟中から高い木が見えて、どうも、それらしく、自分の往かうとする處も、最早遠くはない。剋下騷亂の世に際して、障害多きは、まことに嘆息すべく、一たび起つて、物を拯はうとは欲するが、その方法を思ひ付かぬは、まことに愧づべきである。無能無爲、吾の如きは、この鄕に居らなければ、飄零して、何處へ往くといふ目あてもなく、この地は、自分に取つて好個の隱棲である。

【餘論】起首四句は舟行、次の四句は舟中見るところ、終の四句は感慨を敍し、その次序整然たるは、例の筆致である。

無言上人丈室逢李道士

無言上人の丈室、李道士に逢ふ

竹間失舊蹊(一)。落葉紛已積。

竹間、舊蹊を失ひ、落葉、紛として已に積む。

閒來繙經院(二)。戶掩諸蟲寂。

閒に來る繙經院、戶、掩うて、諸蟲寂たり。

本尋釋門子。偶值仙家客。

本と釋門の子を尋ね、偶ま仙家の客に値ふ。

景清林意秋。慮淡池光夕。

景淸くして林意秋、慮淡くして池光夕なり。

相對總忘言。誰云累名跡(三)。

相對して總て言を忘る、誰か云ふ、名跡に累せらると。

【字解】【一】舊蹊　むかしの小路。【二】繙經院　廬山記に「謝靈運、一たび遠公を見るや、肅然として心服し、乃ち寺中に卽いて、涅槃經を飜譯し、池畜を鑿り、白蓮を池中に植ゑ、その臺を名づけて繙經臺となす」とある。【三】名跡　利名の跡。

【題義】無言上人は、報恩敎寺の僧である。靑邱に送無言上人序の一文であつて、鳧藻集に載せてあるが、その中に「報恩敎寺は、吳の北郭に在つて、吾が舍を距つること近しと爲す。その中、修竹古檜、廣堂邃閣あり、以て覽觀眺望、煩囂を抑けて虛爽を挹すべし。その主席、無言宣・白雲聚の若き、又皆賢にして余と善し。故に、諸文友、楊孟載・張來儀・王止仲・徐幼文輩と、數ば往いて遊び、每

に西髗に登り、落葉を聚めて藉いて坐し、韻を探つて詩を賦し、日入り鳥歸るに抵つて、乃ち去る。寺僧の好事者、亦た往往茗を挈へ、琴を抱き、來つて之に從ふ。示上人といふものあり、衆中に居り、年少しと雖も、しかも、警慧學を好む。余、もとより、その良緇流たるを期するなり。後、余、家を郊に徙し、仕に南京に從ふに及び、復た至らざること數年。すでに歸り、今年の春、はじめて一たび過ぐ、而して、無言・白雲、皆すでに化して去り、舊侶多くは散亡し、竹樹舍宇、頗る蕪廢して理めず。計るに、當時同游の者、惟だ止仲、郡に在るのみ。餘は或は出で、或は處り、亦た各〻四方に之く。俯仰躊躇、これが爲に盡然以て悲む」とある。これに據つて、靑邱が數ば報恩寺に遊んだことや、無言は名を宣といつたこと等が分かる。丈室は方丈の室、卽ち僧の居室。李道士は、如何なる人か、今考へることが出來ない。この首は、ある時、靑邱が無言上人の方丈を訪ふと、偶ま李道士といふものが居たから、賦して之に贈つたのである。

【詩意】しばらく、寺に來なかつた爲に、竹間の舊の小徑は、分からなくなり、おまけに、落葉が紛として積つて居る。やがて、繙經院に比すべき池臺に來て見ると、戸は閉ぢたままで、蟲の聲さへ、ひツそりとして居る。われは、釋門の弟子を尋ねる積りであつたのに、料らずも、ここに仙家の客たる李道士に邂逅した。折から、風物淸爽にして、林は秋意を含み、萬慮淡として、池水も將に夕ならむとして居る。かくて、三人相對して居ると、すべて物いふことを忘れ、利名の跡に累せらるる樣な俗心は盡く消えて仕舞つた。

【餘論】結末が最も面白く、景淸林意秋の二句は、一寸無理らしく見えるが、實は造語新警であるし、相對總忘言は、陶淵明の此中有眞意、欲辯已忘言と聊か相似て居る。

贈陶蓬先生

陶蓬先生に贈る

(一)魯連・豈趙客。(二)子房非漢臣。
魯連、豈に趙の客ならむや、子房は、漢の臣に非ず。

出處誠莫測。自是神仙人。
出處、誠に測るなし、自ら是れ神仙の人。

中解(三)龍虎鬬。飄然去難親。
中ごろ龍虎の鬬を解き、飄然去つて、親み難し。

夫子古(四)鬚眉。(五)恍惚乃後身。
夫子、鬚眉古く、恍惚、乃ち後身。

長安昔縱酒。(六)叩閶通平津。
長安、むかし酒を縱にし、閶を叩いて平津に通ず。

豈爲慕(七)珪組。但欲陳(八)經綸。
豈に爲に珪組を慕はむや、但だ經綸を陳べむと欲す。

(九)白璧棄路傍。舉世不見珍。
白璧、路傍に棄つれば、舉世、珍とせられず。

歸來(一〇)櫂扁舟。煙波復誰馴。
歸り來つて扁舟に櫂し、煙波、復た誰か馴らさむ。

豈無一杯水。爲君灑風塵。　豈に一杯の水、君が爲に風塵に灑ぐなからむや。
空將釣國手。老坐東海濱。　空しく國を釣るの手を將て、老いて東海の濱に坐す。
逢余向滄洲。笑落頭上巾。　余に逢うて滄洲に向ひ、笑うて頭上の巾を落す。
謂余有仙契。泥滓非久淪。　余に謂ふ仙契あり、泥滓は久淪に非ずと。
花源罷通世。煙霞閉千春。　花源、世に通ずるを罷め、煙霞、千春を閉す。
便從夫子歸。雞黍會四鄰。　便ち夫子に從つて歸り、雞黍、四鄰を會せむ。
特謝漁舟子。休談晉與秦。　特に謝す漁舟の子、談ずるを休めよ晉と秦と。

【字解】【一】魯連豈趙客　史記魯仲連傳に「平原君、魯連を封ぜむと欲す、魯連、辭讓す、使者三たびにして、終に受くるを肯んぜず。平原君、乃ち酒を置き、酒酣なるとき、起つて前み、千金を以て魯連の壽を爲す。魯連笑うて曰く、謂はゆる天下の士に貴ぶところの者は、人の爲に患を排し、難を釋き、紛亂を解いて、取るなきなり。もし取るあらば、是れ商賈の事なり、而して、連、爲すに忍びざるなり、と。遂に平原君に辭して去り、終身復た見えず」とある。【二】子房非漢臣　張良、字は子房、留侯に封ぜらる。史記留侯世家に「留侯、乃ち稱して曰く、家、世〻韓に相たり、韓の滅ぶるに及び、萬金の資を愛まず、韓の爲に讐を强秦に報じ、天下振動す。今三寸の舌を以て帝者の師となり、萬戸に封ぜられ、列侯に位す、これ布衣の極、良に於て足れり。願はくは、人間の事を棄て、赤松子に從つて游ばむのみ、と。乃ち辟穀導引輕身を學ぶ」とある。【三】龍虎鬪　侯圭の劃鴻溝賦に龍爭虎鬪兮萬象交奔とある。ここでは、趙と秦、楚と漢の鬪爭を指して云ふ。【四】古橫眉　橫眉は男子の面貌、その面貌が今樣でなく、むかしの人めいて居る。【五】恍惚　彷彿に同じ。【六】卬閣通平津　漢書公孫弘傳に「元朔中、丞相弘を封じて平津侯となす。丞相、侯に封ぜらるるは、弘より始まるなり。時に、上、方に功業を興し、賢良を擧ぐ。弘、自ら擧首とせられ、徒歩より起りて、數年にして宰相封侯に至る。ここに於て、客館を起し、東閣を開き、以て賢人を延き、ともに謀議に參せしむ。弘、身、一肉脫粟飯を食ふ、故人賓客、衣食を仰ぐ、奉祿皆以て之に給し、家、餘すところなし」とある。【七】珪組　珪は卽ち圭、有土者の證とする玉。組は官印に付いて居る綬。【八】經綸　天下を統治する。【九】白璧　美玉。【一〇】櫂扁舟　小舟に棹す。【一一】灑風塵　世上の騷亂を靜める。【一二】釣國手　史記齊世家に「呂尚、蓋し嘗て窮困して年老いたり、漁釣を以て、周の西伯を干す」とある。西伯を干し、やがて、功を以て齊に封ぜられ、國を有つに至りしが故に、國を釣るといつたのである。【一三】滄洲　前に數ば見ゆ、仙境。【一四】仙契　神仙の夙分。【一五】花源　桃花源の略、前に數ば見ゆ。【一六】閉千春　千年も閉ぢ塞がつて居る。【一七】雞黍會四鄰　陶淵明の桃花源記に「漁人を見て、乃ち大に驚き、從つて來るところを問ひ、具さに之に答ふれば、便ち要して家に還り、酒を設け、雞を殺して食を作る。村中、この人あるを聞き、咸な來つて問訊す」とある。【一八】晉與秦　桃花源記の續きに「自ら云ふ、先世、秦の亂を避けて、この絕境に來る、漢あるを知らず、魏晉に論なし」とある。

【題義】陶蓬は、姓名ではなく、多分雅號だらうと思はれるが、青邱が特に先生といつて尊敬せしを見れば、いづれ、高德の道士であつたに相違ない。その陶蓬が青邱を稱して仙契ありといつたのは、丁度、司馬子微が李白を稱して、仙風道骨、八表に神游すべしといつたのと同じく、好個の知己である處から、青邱は、特にこの詩を贈つて、傾倒の意を表したのである。

【詩意】魯仲連は、むざむざと趙の平原君の客たるに甘んずるものではなく、張子房も、亦た漢の臣たることが、本志ではなかつた。この二人の出處進退は、まことに測り知ることが出來ない位、自然、

これこそ神仙中の人であらう。この二人、中ごろ、龍虎の鬪を解き、一は趙の難を救ひ、一は漢をして帝たらしめ、しかも、功成りし後は、飄然として遠く去り、遂に親み難いものであつた。先生は、鬚眉古樸にして、面目、今時の人に類せず、どうやら、魯連張良の生まれ替りでは無からうかと思はれる。先生は、曩に長安に在つて酒を縱にし、又東閣を叩いて、かの公孫弘の如き人と交際されたが、それは、決して、美爵や高官を望む爲めではなく、唯だ滿腹の經綸を展べて、天下を廓淸したいといふのである。如何なる美玉でも、路傍に棄てられては、擧世これを珍とせず、その儘、棄置されるのは、まことに已むを得ざる次第である。そこで、先生は、鄕里に歸つて、扁舟に棹し、身は浩蕩たる白鷗が煙波の間に浮沈するが如く、誰も之を馴らすことが出來ない。もとより、一杯の水を灑いで、君王の爲に、世の風塵を淸めることが出來ないでもないが、まはり合せが惡ければ、それも詮なく、本來ならば、一擧して國を釣ることの出來る其手を持ちながら、老後、東海の濱に坐して、ひとり、つくねんとして釣を垂れて居る。先生は、予に逢ひし後、滄洲の仙境に向はむとし、大笑して、頭巾を振ひ落し、又予に向つて、神仙の天分があつて、汙泥に等しき今の世に、久しく沈淪すべきものではないといはれた。顧みれば、かの桃花源は、一たび世と通ずることを罷めて、千年の久しい間、煙霞に閉ぢこめられて居るが、先生に從つて其地に赴き、雞を殺し、黍を炊いで、四鄰の人人を會し、長閑けく、樂しく、會飮したいものである。かくて、塵間から尋ねて來た漁舟の子に謝して、長居をせずに歸つて貰ふことにし、今は晉の世で、むかし秦の時に來たなどといつて、世の變遷推移に就いて話すことは止めて仕舞はう。

【餘論】魯連豈趙客より老坐東海濱に至る二十句は、陶蓬先生の人物及び閱歷を敍し、逢余向滄洲の四句は、その始めて相見て深く相許せしことをいひ、花源罷通世の六句は、先生と共に桃花源の如き絕境に入つて、跡を收めたいといふ希望を述べたのである。

孤鶴篇

涼風吹廣澤(一)。日暮多浮埃(二)。
中有失(三)侶鶴。孤鳴迴且哀。
修(四)翮既摧殘。一飛四徘徊。
矯首望靈(五)嶠。雲(六)路何遼哉。
渚田有遺粟。欲下羣鴻猜。
豈不懷苦飢。懼彼羅網災。
翩(七)翩浮(八)邱伯。朝從東海來。

孤鶴篇

涼風、廣澤を吹き、日暮、浮埃多し。
中に侶を失ふの鶴あり、孤鳴迴にして且つ哀し。
修翮、すでに摧殘、一たび飛んで四に徘徊。
首を矯げて靈嶠を望む、雲路何ぞ遼なるや。
渚田に遺粟あり、下らむと欲すれば羣鴻猜む。
豈に飢に苦むを懷はざらむや、かの羅網の災を懼る。
翩翩たる浮邱伯、朝に東海より來る。

相呼與之歸。謂是仙驥(九)材。　相呼んで之と歸る、謂ふ是れ仙驥の材と。

蔭之長林下。濯之清澗隈。　これを長林の下に蔭し、これを清澗の隈に濯ふ。

圓吭(一〇)發高唳(一一)。華月(一二)中宵開。　圓吭、高唳を發し、華月、中宵に開く。

誓從臨玄景(一三)。永戲崑邱臺(一四)。　誓つて從つて玄景に臨み、永く戲る崑邱の臺。

【字解】【一】廣澤　ひろい水澤の地。【二】浮埃　飛び立つ塵埃。【三】失侶鶴　同類と離れた鶴。【四】修翮　長い羽。【五】雲嶠　仙山に同じ。【六】雲路　雲間の路。【七】翩翩　風颿の秀特なるをいふ。【八】浮邱伯　列仙傳に「王子晉、好んで笙を吹き、鳳凰の鳴を作す。伊洛の間に道士浮邱伯あり、接へて、以て嵩高山に登る」とある。【九】仙驥　仙人の乘り物、相鶴經に「蓋し羽族の宗長、仙人の騏驥なり」とある。【一〇】圓吭　廣韻に「吭は鳥の喉」とあり、舞鶴賦に引貝吭之纖婉、頓修趾之洪姱と ある。【一一】高唳　高い鳴き聲。【一二】華月　晴れた月。【一三】玄景　雲笈七籤に「太極に玄景の王司あり、三天の神仙を攝するものなり」とある、つまり、仙人の取締役。【一四】崑邱臺　十洲記に「崑崙山、その傍に瑤臺十二あり、上に金臺五所を安んず」とあり、水經注に「崑崙を無熱邱となす」とある。

【題義】この篇は、孤鶴の其所を得ざるを傷んで作つたので、多分、作者が自ら況したものであらう。

【詩意】秋の涼風は、廣い水澤を吹き度り、日暮には、飛び立つ塵埃が多く、その澤中には、つれにはぐれた鶴が居て、ひとり鳴く聲は、遙かに聞こえ、且つ悲しげである。この鶴の長い羽は、すでに摧き損はれ、一たび飛んでも、長くは續かず、しばらく休んで、四に徘徊して居る。首を昂げて仙山を望めば、雲井の路は遼遠にして、一寸行くことも出來ない。又澤地の邊の田には、落穗が澤山あるが、そこに下らうとすると、多くの雁どもが邪魔をして、寄せつけない。飢に苦んで居るのは、まことに情ないが、うッかり、網に罹ると大變だといふので、少しも、心の落ち付く暇もない。ここに、風貌秀特なる道士の浮邱伯といふ人は、朝に東海より來り、これを見て、如何にも氣の毒と思ひ、相呼んで、一緒に連れて歸り、仙人の乘り物たるべき天晴の美材を此儘に棄て置くのは、宜しくないといひ、長林の下に住所を與へ、清溪の邊に於て身を濯はしめた。そこで、孤鶴は漸く元氣を回復し、圓い喉を動かして聲高く啼くと、清響は、はるかに傳はり、夜半に、月が皓皓として差し上つた。鶴は、仙人の取締役たる玄景に附隨し、いつまでも、崑崙瑤臺の邊に在つて、游戲したいといつて、その心に誓つた。

【餘論】涼風吹廣澤より濯彼羅網災に至るまでは、孤鶴の窮況を敍し、翩翩浮邱伯より永戲崑邱臺に至るまでは、幸に救ひ出されて元氣を回復し、どうかして、長しへに崑崙に住む樣にしたいと思つて居ることを述べた。浮邱伯は、卽ち鶴の知己であつて、作者も、今こそ困窮して居るが、その樣な知己に過つて、その志願を達したいといふ希望を鶴に託して言つたのである。

雑詩

(一)結髮好遠遊。出門覽山川。
誰云(二)帝闕遠。有路不在天。
我車大且遲。日暮(三)牛領穿。
忽逢悲歌士。(四)論心涕潸然。
今日不得志。明日非少年。

雑詩

結髮、遠遊を好み、門を出でて山川を覽る。
誰か云ふ、帝闕遠しと、路あり、天に在らず。
わが車、大にして且つ遲し、日暮、牛領穿つ。
忽ち悲歌の士に逢ひ、心を論じて涕潸然。
今日、志を得ず、明日、少年に非ず。

【字解】【一】結髮　元服する。【二】帝闕　皇城の門。【三】牛領穿　牛の綱が首に食ひ入る。【四】論心　互に胸襟を披いて語り合ふ。

【題義】この首は、格別、題を設けるでもないから、雑詩としたのであらう。但し、槎軒集には、題を悲歌行としてある。

【詩意】われは、少壯にして遠游を好み、門を出でて、四方の山川を探尋した。帝城は、遠いといふが、一條の路、地上に通じて、何も天に在る譯ではない。しかし、わが車は大きく、從つて、行くこと太だ遲遲、日暮になると、牛の綱が首筋に食ひ入る位。ここに、忽然として、悲歌の士に逢ひ、胸襟を披いて、互に話し合ひ、はては、潸然として涙が流れた。顧みれば、今日志を得ざれば、早くも年が寄つて仕舞ひ、明日は、すでに少年に非ず、何でも、功業は、老年にならぬ内に成就せねばならぬ。

【餘論】一種沈痛の者であつて、まさしく悲歌に相違ないが、古意古調、いささか缺如して居る樣である。

白水冒我田

(一)白水冒我田。風雨無休時。
(二)午鳩屋上鳴。貧家起何遲。
(三)溝壑知不免。(四)順受胡可辭。
有酒我自斟。有粟妻自炊。
且盡今日歡。勿顧明日悲。
(五)商歌出金石。愧無聖人師。

白水我が田を冒す

白水、わが田を冒し、風雨、休む時なし。
午鳩、屋上に鳴き、貧家起くること何ぞ遲き。
溝壑、知る免れざるを、順受、胡ぞ辭すべけむ。
酒あり、我、自ら斟む、粟あり、妻、自ら炊ぐ。
且つ今日の歡を盡して、明日の悲を顧みる勿れ。
商歌、金石より出づ、愧づ、聖人の師なきを。

【字解】【一】白水　洪水。【二】午鳩　埤雅に「鵓鳩、陰れば其婦を屛逐し、晴るれば之を呼ぶ。語に曰く、天將陰、鳴鳩逐婦啼中林、鳩婦怒啼無好音」とある。【三】溝壑　孟子に「志士は溝壑に在るを忘れず」とある。溝壑は卽ち溪谷、死者棺槨なくして

磐谷に塡するに至るを云ふ。【四】順受　順當に受ける。【五】商歌出金石　韓詩外傳に「原憲、環堵の室、商頌を歌ふ、聲、天地に塡みて、金石より出づるが如し」とある。

【題義】白水冒我田は、起句を以て題を塡したので、その内容は、矢張、窮居の況を敍したのである。

【詩意】大洪水が我が田に掩ひかぶさり、その上、風雨は止む時もない。日午、鳩が屋根の上に啼き、どうやら晴れかかつて來て、貧家でも、やツと起き出でた。自分は、溝壑を塡め、どうせ、碌な死に態を爲すまいと覺悟して居るが、順當に受けるものは、必ずしも、辭退はしない。これに由つて、酒もあり、米もあるので、酒は、われ自ら之を酌み、米は、妻自ら之を炊ぐのである。しばらく、今日さへ樂しく送れば、それで澤山なので、明日の悲などは、顧みる暇だにない。そこで、商頌を歌へば、その聲、金石より出づるが如くであるが、われに聖人の師なく、道を聞くこと、猶ほ淺きは、まことに、愧づべきことである。

【餘論】溝壑知不免、順受胡可辭の二句は、中間に在つて、前後の關鍵を爲して居る。有酒我自掛の四句は、眼前の快樂に汲汲たる如く聞こゆれども、作者の眞意は、結末二句に在るので、もとより頽然自放、以て快となすものではない。

送韓司馬赴邊郡

韓司馬の邊郡に赴くを送る

（一）淮陰將家子。讀書負奇氣。
淮陰將家の子、讀書、奇氣を負ふ。

十年提（二）一籌。身從（三）李都尉。
十年、一籌を提げ、身は李都尉に從ふ。

此行把（四）旌麾。無愧（五）國士知。
この行、旌麾を把り、國士の知に愧づるなかれ。

邊風吹白草。正是（六）馬驕時。
邊風、白草を吹き、正に是れ馬驕るの時。

鳴笳引（七）前部。落日城西路。
鳴笳、前部を引き、落日、城西の路。

（八）上客贈（九）吳鉤。（一〇）征人唱（一一）都護。
上客、吳鉤を贈り、征人、都護を唱ふ。

（一二）近役非（一三）臨洮。君行莫辭勞。
近役、臨洮に非ず、君が行、勞を辭する莫れ。

欲問封侯日。秋來（一四）太白高。
問はむと欲す、封侯の日、秋來、太白高し。

【字解】【一】淮陰將家子　韓信の末孫、史記淮陰侯傳に「韓信は淮陰の人なり、淮陰侯に封ぜらる」とある。【二】提一籌　籌は籤會に「馬を擊つの策なり」とある、即ち鞭。【三】李都尉　梁の元帝の詩に結交李都尉、遨遊佳麗城とあつて、李陵を指す。【四】旌麾　旌は旗、麾は采配。【五】國士知　淮陰侯傳に「蕭何曰く、諸將は得易きのみ、信の如き者に至つては、國士無雙」とある。國士とは一國に冠たる士で、さういふ偉い者として知遇せられる。【六】馬驕　秋になると、馬が肥えて元氣が著い。宋史盧斌傳に「馬驕り、兵悍、往來定まるなし」とある。【七】前部　前方の部隊。【八】上客　賓客の中で上位に班するもの。【九】吳

鉤　卷一、吳鉤行の條に注して置いた。吳地に產する先端の曲つた短刀。【一〇】征人　韓司馬を指す。【一一】都護　丁都護歌ないふ。都護は同音の故を以て、一に督護に作る。丁督護歌は、樂府の古題で、六朝の宋の頃、今の儀江、その頃京口といつた處に、彭城内史徐逵之といふものが居たが、魯逵に殺された。逵之は、宋の高祖の壻である處から、高祖は、葬儀萬端の事を府督護の丁吽といふものに命じた。すると、逵之の妻、即ち高祖の娘は、吽を階下に呼びつけて、斂葬の始末はどうなつたかといつて問ひ、その度ごとに、嘆息して、丁督護、丁督護といつた。その聲が、いかにも哀切であるに因つて、それを本にして、丁督護歌を作つた。すると、この歌は、斂葬に關する哀歌である。【一二】近役　近い處に征戍する。【一三】臨洮　長城の西端で、一統志に「臨洮府、秦漢には隴西といふ」とある。【一四】太白　前に贈宋軍咨見寄の條に見ゆ、金星で兵象と稱せられて居る。

【題義】この首は、司馬韓某が邊塞の大郡に赴任するを送る爲に作つたのであるが、韓の名字閲歷等は、例の如く不詳。

【詩意】君は、韓信の末孫であつて、少壯の頃、書を讀んで奇氣を負ひ、因つて、儒生たるに甘んぜず、身は李陵の樣な大將に隷屬し、一鞭を提げて、十年の久しきに及んだ。今回は、立身して、旌麾を手にする樣な身分となられたから、天晴、國士としての知遇に愧ぢぬ樣に、しッかり遣つて貰ひたい。邊地の西風は、白草を吹いて、馬正に肥ゆるの候、笳を鳴らして、前軍の部隊を引率し、しづしづと夕日斜なる城西の路を練つて行かれる。ここに於て、上客は、吳鉤を贈つて、君を勵まし、征人たる君は、得意に丁督護の歌を唱へ、國の爲めならば死んでも善いといふ覺悟の程を示された。さはれ、その戍役の地は、臨洮ではなく、もッと近い處であるから、決して勞を厭うては成らぬ。今しも、秋、すでに來り、太白高高として兵象を示して居る折から、君は、何時、大功を立てて、封侯に列せられるか、ここに、刮目して待つて居る次第である。

【餘論】この首は、四句一解で、その立身・榮遷・征行・囑望といふ樣に、敍述が順序立つて居て、些の遺漏だに無いが、いささか壯烈の氣が缺けて居りはせぬかと危ぶまれる。

醉贈王卿

醉うて王卿に贈る

持身無可許。閭里任浮沈。
身を持して許すべきなし、閭里、浮沈に任かす。

不奉諸侯檄。曾辭公子金。
諸侯の檄を奉せず、かつて、公子の金を辭す。

斗酒豈辭醉。感君知我深。
斗酒、豈に醉を辭せむや、感ず、君が我を知るの深きを。

誰無旦暮急。相周惟季心。
誰か旦暮の急なからむや、相周ふは惟だ季心。

【字解】【一】無可許　この身を許すべき人がない。【二】諸侯檄　諸侯は地方長官、檄は任官の辭令書。後漢書劉平等傳に「毛義、家貧、孝行を以て稱せらる。南陽の張奉、その名を慕ひ、往いて之を候す。坐定まつて、府檄至り、義を以て守令となす。義、檄を捧げて入り、喜、顏色に動く。奉、心に之を賤む。義の母死するに及び、公車徵せども至らず。張奉、歎じて曰く、賢者もとより測るべからず、往日の喜は、親の爲に屈するなり」とある。【三】曾辭公子金　魯仲連が平原君の金を却けて受けざりしことを指す。史記平原君傳に「平原君趙勝は、趙の諸公子なり」とある。なほ、その詳は、前の贈陶隱先生の條に見ゆ。【四】斗酒豈辭醉　史記項羽本紀に載する樊

噲の語に「臣死だも且つ辭せず、斗酒何ぞ辭するに足らむや」とある。【五】且暮急　差し迫つて急に入用なること。【六】相周　周は救ふ。【七】季心　漢書季布傳に「布の弟季心、氣、關中を蓋ふ。人を遇する恭謹にして、任俠を爲す。方數千里、士、爲に死するを爭ふ。少年、多く時時竊に其名を借りて、以て行く。この時に當つて、季心は勇を以て、布は諾を以て、關中に聞こゆ」とある。

【題義】この首は、醉中、王卿といふ人に贈つたのである。卿は、親愛して呼んだので、その人の名字閱歷等は、丸で分からないが、詩で見ると、一かどの俠者であつたらしい。

【詩意】君は、未だ身を以て許すべき人あらざるを以て、七尺の軀を保全し、閭里に在つて、浮沈に任かせ、格別求めるところもない。されば、地方長官からの辭令書も貰はず、ある時は、貴公子からの贈金をさへ斷つた位。今君に遇うた上は、十分に歡を盡すべく、斗酒を傾けて醉を爲すとも、もとより辭せず、平生われを知ることの深きは、まことに感謝に堪へぬ次第。誰にしても、朝夕に迫る至急の用があるが、わが爲に、毎毎相救うて呉れたのは君で、取りも直さず、古しへの季心に比すべきものである。

【餘論】前半は、王卿の任俠を寫し、後半は、自分との交情を敍し、結末、これを季心に比して、前と呼應して居る。

送賈二文學北游

賈二文學の北游を送る

窮(一)年自多感。況復送良儔。

落日河上別。慷慨發秦謳(二)。

風塵阻關山。撫劍不得遊。

願逐高飛翼。相與出九州(三)。

嗟彼行路子。棲棲(四)何所求。

窮年、自ら感多し、況んや、復た良儔を送るをや。

落日河上の別、慷慨、秦謳を發す。

風塵、關山を阻て、劍を撫して、遊ぶを得ず。

願はくは、高飛の翼を逐うて、相與に九州を出でむ。

嗟す、彼の行路の子、棲棲何の求むるところ。

【字解】【一】窮年　年の暮。【二】秦謳　秦聲の歌、その聲の激楚なるを特徴とする。【三】九州　禹の九州、卽ち支那本土を指す。【四】棲棲　こせこせする。

【題義】賈二の二は排列。唐宋の頃は盛に用ひた。元明になると、さうでも無いが、それでも、文人詞客などは、往往舊に依つて用ひて居た。もと一門の人人が先祖の祭をなす時に坐る順序で、先祖に對して、同一關係の者が一列に竝び、その列中に於て、年の順で何番といつて次第するのである。文學は、文學博士の略。この首は、博士賈某の北游を送つたのである。

【詩意】年の暮には、自然、感慨が多いのに、ここに良友の遠行を送るに於ては、猶更の事である。夕日の西に舂く頃、河上に於て別を爲し、慷慨の餘、激楚なる秦聲の歌を唱へた。今しも、天下騷亂に苦み、風塵が關山を隔つるに因り、劍を撫しつつも、遊行することが出來ない。願はくは、空高く飛

鳥を逐ひ、君と共に、九州を出て、外國へでも往つて見たいと思ふ。かの旅行く人人は、こせこせとして、何を求めつつあるか、まことに、詰らぬことではないか。そこで、君の此行、大に意義あらむことを切望する。

【餘論】買二文學一は、何の爲に北游するのか分からぬが、格別、何とも此に言はず、且つ結末、いささか之に當てつけたらしく考へられるのを見ると、もとより、個人としての游で、大した目的のあるのでは無いやうである。さればこそ、願逐二高飛翼一といつて、更に大觀せむことを希望したのであらう。

送二海昌守李使君遷一海虞一

海昌の守李使君の海虞に遷るを送る

(一)兩爲二海上州一。州民定何如。　兩つながら、海上の州たり、州民、定めて何如。
(二)彼遮二使君馬一。(三)此迎二使君車一。　彼は使君の馬を遮り、此は使君の車を迎ふ。
(四)但令二人買レ牛。(五)不レ受二客饋レ魚。　但だ人をして牛を買はしめ、客の魚を饋るを受けず。
我知使君賢。(六)讀レ律又讀レ書。　われは知る使君の賢、律を讀み、又書を讀むを。

【字解】(一) 兩爲海上州　海昌も、海虞も、ともに海邊の州である。(二) 彼遮使君馬　宋史范純仁傳に「純仁、遂に就く。民數萬、馬を遮つて涕泗し、行くを得ず」とある。(三) 此迎使君車　後漢書郭伋傳に「伋、さきに幷州に在り、もとより、恩德を結ぶ。後、界に入るに及びて、老幼逢迎す。部を行つて、西河の美稷に到るや、童兒數百あり、各〻竹馬に騎して道次に迎拜す」とある。(四) 人買牛　漢書龔遂傳に「遂、渤海太守となる、民に刀劍を帶持するものあれば、劍を賣つて牛を買ひ、刀を賣つて犢を買はしむ。曰く、何すれぞ、牛を帶し、犢を佩ぶる」とある。(五) 不受客饋魚　史記に「公儀休、魯に相たり。客、魚を遺る、御けて受けず。客曰く、君、魚を嗜む、何ぞ受けざる。曰く、今相となり、能く自ら魚を給す、もし魚を受けて免ぜらるれば、誰か復た我に魚を給するものぞ」とある。(六) 讀律又讀書　金史章宗紀に「有司言ふ、律科の擧人は止だ律を讀むを知つて、敎化の源を知らず、必ず論語孟子に通知して、氣度を涵養せしめむ」とあり、蘇軾の詩に讀書萬卷不レ讀レ律、致二君堯舜一終無レ術とあつて、兩者の並行せねばならぬことを言つたのである。

【通義】海昌は、卷三、登二海昌城樓一望レ海の條に見えて居た。使君は、數ば言へる通り、有土者の尊稱。海虞は、一統志に「蘇州常熟縣は、晉の海虞」とある。この首は、海昌の守たりし李某が海虞に轉任したのを送つたのであるが、李の名字閱歷等は、例の如く不詳。

【詩意】海昌も、海虞も、兩つながら、海邊の州であるが、二州人民の心は、どうであるか。一は、使君の馬を遮つて、その留任を希望し、一は、使君の車を迎へて、その著任を慶して居る。君は、すでに一縣の守令であるから、人をして、劍を賣つて牛を買ふ樣にすべく、又客が魚を饋つても、これを受けず、すべて清廉を旨とせられたい。君は當時の賢者であつて、法律に通じ、又書を讀み、今古に通曉されて居るから、牧民の上に於て、治績を致すことは申すまでもない。

【餘論】前半は一氣呵成、その語を出すに、頗る趣がある。五六兩句は、州守爲政の要訣、七八兩句は、李使君の賢を言ひ、必ず之を行はるべき旨を囑望したのである。

端居懷兩王孝廉

端居して兩王孝廉を懷ふ

寡劣（一）時所棄。獨臥無與親。　寡劣、時の棄つるところ、獨臥、與に親むなし。

蕭然閉齋閣（二）。左右圖史陳。　蕭然として、齋閣を閉ぢ、左右、圖史陳す。

風雨摧衆芳。令人怨徂春（三）。　風雨、衆芳を摧き、人をして、徂春を怨ましむ。

豈無尊中酒。坐念兩故人（四）。　豈に尊中の酒なからむや、坐に兩故人を念ふ。

日從賢豪游。雜遝（五）車馬塵。　日に賢豪に從つて游び、雜遝す車馬の塵。

焉知離居客（六）。積抱（七）難自伸。　焉んぞ知らむ、離居の客、積抱、自ら伸び難きを。

【字解】〔一〕寡劣　德すくなく才劣なること。〔二〕齋閣　書齋たる小閣。〔三〕徂春　ゆく春。〔四〕兩故人　兩王孝廉を指す。〔五〕雜遝　雜沓に同じ、漢書劉向傳に「四郊雜遝」とある。〔六〕離居客　ひとり郷里を離れて居る人、靑邱自ら云ふ。〔七〕積抱　抱は懷抱、つもる思。

【題義】端居は、平居に同じ。孝廉は科擧の名。兩王孝廉は、孝廉に擧げられた王某二人と云ふこと。この首は、客中平居の際、相知れる孝廉王某二人に寄せたのである。

【詩意】われは、德すくなく、才劣にして、刻下の世から棄てられ、ひとり郊村に臥して、誰も共に親むものがない。そこで、書齋たる小閣を閉ぢ、左右に圖書を雜陳して、ひたすら研學を事として居る。今しも、風雨は、多くの花どもを摧き、行く春の名殘の惜まるる折から、樽中の酒が無い譯でもないが、坐ろに相知れる王孝廉二人を思ひ出した。二君は、われと異にして、日ごとに、當代の賢豪輩に從つて游び、車馬の塵、雜沓して、頻りに出入したり、往來したりして居る。ここに、離居の客たる吾は、孤寂の中に在つて、積る思は、伸ばし難く、全く鬱屈して堪へられない位。二君、もし閒暇あらば、どうか、尋ねて來て吳れ給へ。

【餘論】前八句は、孤居獨處、殊に殘春に遇うて、兩孝廉を思ふことを敍し、後の四句は、彼と我とを對比し、幸にして棄てられざれば、時に德音を惠まれたいと云つて囑望したのである。

送芑上人東歸

芑上人の東に歸るを送る

浮雲與飛鳥。相聚安可常。　浮雲と飛鳥と、相聚まること、安んぞ常とすべけむ。

偶來雲巖寺（一）。幾日共徜徉（二）。　偶ま雲巖寺に來り、幾日か、共に徜徉。

我去師亦歸。（三）澗房欲荒涼。　われ去つて師も亦た歸り、澗房、荒涼ならむと欲す。

池臥孤塔影。（四）庭棲雙桂香。　池には臥す孤塔の影、庭には棲ます雙桂の香。

（五）重過應未期。悵然（六）山水長。　重ねて過ぐる應に未だ期せざるべし、悵然として山水長し。

【字解】【一】雲巖寺　前に遂三雲巖僧元實昇一遊三湖上一賦以送レ之の條に注して置いた通り、蘇州の虎邱に在る寺。【二】徜徉　逍遙に同じ。【三】澗房　谿澗に臨める僧房。【四】庭棲　棲は留むに同じ。【五】重過　再び此地に來ること。【六】山水長　山川長く續いて路の遠きこと。

【題義】說明に及ばぬ、但し、上人の本名閱歷等は不詳。

【詩意】浮雲と飛鳥とは、いづれも、おのが心の儘にして居るから、それが各〻相聚まるといふことは、どうして常とすることが出來やう、人生も、亦た此の如きものである。われ偶ま雲巖寺に來り、岜上人と共に逍遙せしこと、すでに幾日ぞ。しかるに、われは、此を去らむとし、師も亦た其鄉に歸らうとして居るから、澗頭の僧房も、やがて、主なくして荒涼に歸するであらう。池中には、孤塔の影が橫はり、庭上には二本の桂が花咲いて、その香を留めるばかり。そして、再び師が此地を過ぐるは、何時といつて豫期することが出來ず。悵然として眺むれば、山水ともに長く、君の行路は、まさしく、その中に在る。

【餘論】起筆太だ佳、四句一氣に下り、以下は、別後澗房の岑寂を想像し、結二句は、延佇、神に入つて、いささか情思に富んで居る。

大水

吾鄉水爲國。自昔稱（一）漏天。　吾が鄉、水を國と爲す、昔より、漏天と稱す。

今年尤苦霖。冒此（二）上下田。　今年、尤も霖に苦む、この上下の田を冒す。

老農愁相告。（三）無有二十年。　老農愁へて相告ぐ、二十年あるなしと。

（四）東江入門流。（五）比屋如敗船。　東江、門に入つて流れ、比屋、敗船の如し。

夜臥牀屢移。晨炊（六）釜常懸。　夜臥、牀、屢ば移り、晨炊、釜、常に懸く。

涼風吹（七）蒲稗。羣鷺鳴我前。　涼風、蒲稗を吹き、羣鷺、わが前に鳴く。

茫茫失（八）川途。出行竟（九）迴遭。　茫茫として川途を失ひ、出行、竟に迴遭。

斯民欲（一〇）昏墊。天意豈不憐。　この民、昏墊せむと欲す、天意、豈に憐まざらむや。

陰陽致（一一）乖沴。孰能究其然。　陰陽、乖沴を致す、孰れか能く其然るを究めむ。

歲飢尙勿憂。黽勉當（一二）食鮮。　歲飢うるも、尙ほ憂ふる勿れ、黽勉、當に鮮を食ふべし。

【字解】【一】漏天　寰宇記に「邛都縣、漏天、秋夏常に雨、夷道に大漏天・小漏天あり」と見ゆ。漏天は、天の漏れ口、上に引いたのは蜀中の事、蘇州なども、矢張、漏天と稱したものと見えるが、その出處は、一寸分からない。【二】上下田　高低の田。【三】無有二十年　二十年この方例がない。【四】東江　吳淞江の一派。【五】比屋　家なみ。【六】釜常懸　淮南子に「智伯、韓魏を率ゐて趙を伐ち、晉陽を圍み、晉水を決して之に灌ぐ。城下、木に緣つて處り、釜を懸けて炊ぐ」とある。下が水だから、釜を低い處に置くことが出來ず、稍や高い處に懸けるといふ義。【七】蒲稗　ともに水草。【八】川途　平原の路。【九】回邅　おもふに任せずして立ち戻ること、梁の簡文帝の詩に由來歷山川、此地獨回邅とある。【一〇】昏墊　書經に下民昏墊、閉ぢ籠つて外へ出られぬこと。【一一】乖沴　そむき違ふ。【一二】食鮮　書經の益稷に「稷と播き、庶の食に艱めるに鮮食を奏む」とある。鮮食は川中の魚鼈を漁して食料に充てること。

【題義】この首は、蘇州地方に於ける大洪水の實況を寫したのである。

【詩意】わが蘇州は、本來水國である上に、むかしから、漏天と稱して居る位。今年は、特別に、霖雨がひどくて、洪水が高低の田に冒ひかぶさつた。老農は、愁へつつ相告げて、この樣な大洪水は、二十年以來、全く無いといつた。東江の水は、門內に入つて流れ、家なみ、敗船同樣、夜、臥するにも、牀を度度移さねばならぬし、朝、飯を炊くにも、釜を高い處に懸けて、どうやら、濟ますといふ始末。眺めやれば、涼風は蒲稗を吹き靡かし、鵜鳥の羣は我が前で鳴いて居る。一望水が茫茫として、平原の路は、何處とも分からず、折角出て行かうとしても、止むを得ず引きかへす位。人民どもは、閉ぢ籠つてばかり居るが、天意、これを憐まない譯では無からう。しかし、陰陽雨氣が都合よく運行せぬことに就いては、誰も、其原因を究めることが出來ない。歲饑ゑては、まことに困難であるが、必ずしも心配せず、セッセと魚鼈を漁して、それを食へば、先づ當分凌ぐことが出來るであらう。

【餘論】起六句は總提、東江入門流の八句は、洪水の模樣を寫し出して、餘蘊なく、慘澹たる光景は、これを目睹する如くである。斯民欲昏墊の六句は、感慨に入り、結二句は、罹難者に對して、更に奮起せむことを囑望したのである。

送黃主簿之歸安

黃主簿の歸安に之くを送る

我歌柳惲詩。送子南汀發。
山城逢社雨。綠樹啼鶯歇。
留連孤艇遲。怊悵雙壺竭。
高士尙爲簿。休慙府中謁。
無事坐閒廳。彈琴看明月。

われ柳惲の詩を歌ひ、子の南汀を發するを送る。
山城、社雨に逢ひ、綠樹、啼鶯歇む。
留連、孤艇遲く、怊悵、雙壺竭く。
高士、尙ほ簿となる、府中に謁するを慙づるを休めよ。
無事、閒廳に坐せば、琴を彈じて明月を看よ。

【字解】【一】柳惲詩　柳惲は、梁書の本傳に「字は文暢、河東解の人。行を立つること貞素、貴公子を以て、早く令名あり。少

にして學を好み、篇什に工に、尤も尺牘を好む。齊の竟陵王、引いて法曹參軍となし、太子洗馬に遷り、守都陽相に試みられ、還つて、驃騎從事中郞に除せらる。梁の武帝、京邑に至るや、惲、候して石頭に謁し、以て冠軍將軍征東府司馬となす。天監の初、長史に除せられ、侍中を兼ね、沈約と共に新律を定む。左民尙書廣州刺史に累遷し、徵されて祕書監となり、再び吳興太守となる、政を爲す清靜、民吏これに懷つく」とあり、その作に係る江南曲に、「汀洲采白蘋、日暖江南春。洞庭有歸客、瀟湘逢故人。故人何不返、春花復應晚。不道新知樂、祇言行路遠」とある。【二】社雨　提要錄に「社公社母、舊水を食はず、故に社日、雨あれば、これを社翁雨といふ」とある。社日は、禮記に「仲春の月、元日を擇びて、民に社を命ず」とあつて、周人の社日は甲を用ひ、漢では日丙午を卜し、魏氏は丁未を擇用し、晉は孟春の酉の日を用ひた。邱光庭は「唐月令の注、元日、春分前後の戊日、鄭注と同じからず、社は土を祭る、土は木を畏る、甲は木に屬するを以て、故に用ひず、戊の日の土を用ふ」といつたが、その後は、立春後の五戊を以て春社となし、立秋後の五戊を秋社となし、以て適當に前後を二分した。【三】怊悵　宋玉の高唐賦に、「悠悠忽忽、怊悵自失」とある。【四】雙壺　二つの酒壺、黃庭堅の詩に「王孫欲遣雙壺到」、杜甫の詩に「酒壺沙頭雙玉瓶」とある。【五】高士倘爲簿　簿は主簿、漢書孫寶傳に「寶、明經を以て郡吏となる。御史大夫張忠、辟して屬となし、子に經を授けしめむと欲し、更に爲に舍を除す。寶、自ら劾して去る。後、寶を主簿に署す。寶徙つて舍に入る。忠、これを怪み、所親をして寶に問はしむ。寶曰く、高士は主簿と爲らず、而して、大夫君、寶を以て可となし、一府、非を言ふなし、士、安んぞ獨り自ら高うするを得む、且つ遣はざるものは、爲さざる無かるべし、況んや、主簿をやと。忠、甚だ慙ぢ、上書して寶を薦む」とある。【六】府中謁　後漢書周澤傳に「光祿勳孫堪、かつて縣令となり、府に謁す、趨步遲緩、門亭長、堪の御吏を譴む、堪、便ち印綬を解いて去り、官に之かず」とある。【七】閒廳　靜かなる表座敷。

【題義】主簿は、祕書官の如きもの。歸安は、湖州府の屬縣。この首は、主簿黃某の歸安に赴任するを送つて作つたのである。

【詩意】われは、柳惲の作れる江南曲を歌うて、君が南汀より出發して任地に向ふを送らうと思ふ。君の行く途すがら、山城には、社雨降り注ぎ、南地は、花すでに散つて、綠樹に鶯の聲すでに歇むに際しては、春の名殘を惜み、そこに孤艇を停めて留連し、雙壺の酒の盡くるを痛むであらう。高士の君にして、主簿となられた上は、府中に謁することを慙ぢずとも宜しかるべく、是非とも、役目を大切に務め上げねばなるまい。そこで、用務が片付いて、暇ある折ふし、閒廳に坐して琴を彈じつつ、明月を看たならば、又一段の風流であらう。

【餘論】起首二句は、送別の正意。山城逢社雨の四句は、赴任の途すがら見るところの景色。高士倘爲簿の四句は、その職を曠しうせず、そして、閒餘、逸興あらむことを囑望したのである。

送王推官赴潮陽

王推官の潮陽に赴くを送る

久治亂所伏。國家失其(一)防。
久治、亂の伏するところ、國家、その防を失ふ。

初如決洪流。拱(二)手徧四方。
はじめは、洪流を決するが如く、手を拱いて四方に徧し。

頻年勞訏(三)謨。欲(四)補千百瘡。
頻年、訏謨を勞し、千百瘡を補はむと欲す。

子爲京師客。忠憤何慨慷。
子は京師の客となり、忠憤、何ぞ慨慷。

濯(五)冠捧書函(六)。平明獻朝堂。
冠を濯うて書函を捧げ、平明、朝堂に獻す。

上言固大業。下言振頽綱。（七）　上には言ふ、大業を固くせよ、下には言ふ、頽綱を振へ。

且謂有萬死。聖明察臣狂。　且つ謂ふ、萬死あり、聖明、臣の狂を察せよ。

臣言倘獲施。立能致時康。（八）　臣の言、倘し施すを獲ば、立どころに、能く時康を致さむと。

宸居（九）豈遙遠。咫尺天中央。（一〇）　宸居、豈に遙遠、咫尺、天の中央。

雞鳴列仙仗。（一一）九門（一二）洞開張。（一三）　雞鳴、仙仗を列し、九門、洞として開張。

謂宜即召見。拜起隨班行。（一四）　宜しと謂うて、もし召見せらるれば、拜起して班行に隨はむ。

上殿笏畫地。（一五）論奏盡敷詳。（一六）　殿に上つて、笏、地に畫し、論奏、盡く敷詳。

如何竟報聞。（一七）不得瞻清光。（一八）　如何か、竟に報聞し、清光を瞻るを得ざる。

一官非所願。欲令赴蠻荒。　一官、願ふところに非ず、蠻荒に赴かしめむと欲す。

徘徊（一九）出都門。風雨溼曉裝。　徘徊して、都門を出づれば、風雨、曉裝を溼す。

行行過吳洲。木葉秋始黃。　行行、吳洲を過ぎれば、木葉、秋、はじめて黃なり。

逢予解鞍飲。激烈椎（二〇）酒牀。　予に逢うて、鞍を解いて飲み、激烈、酒牀を椎す。

平生憂時心。辛苦不自忘。　平生時を憂ふるの心、辛苦、自ら忘れず。

頗聞到官所。（二一）此去路尙長。　頗る聞く、官所に到る、ここを去つて路尙ほ長しと。

紅日出霧遲。孤城海茫茫。（二二）　紅日、霧を出でて遲く、孤城、海茫茫。

遺民似猿鹿。山谷多驚藏。　遺民、猿鹿に似たり、山谷多く驚藏。

繁英（二三）豔躑躅。（二四）瑣實（二五）堆檳榔。（二六）　繁英、躑躅豔なり、瑣實、檳榔を堆す。

瘴癘（二七）況時作。投老（二八）恐子傷。（二九）　瘴癘、況んや時に作り、投老、子を傷つけむことを恐る。

何不且少留。共驚豪華鄉。　何ぞ、且つ少留し、共に豪華の鄉に驚せざる。

子笑不我顧。翩然決南翔。（三〇）　子、笑うて、我を顧みず、翩然、決して南翔。

明朝指鯨波。（三一）高帆若雲揚。　明朝、鯨波を指し、高帆、雲の若く揚がる。

去矣各異國。有憶徒相望。　去れ、各、異國、憶ふあるも、徒に相望むのみ。

【字解】【一】其防　亂を防ぐ用意。【二】拱手　手をこまぬく、施すべき術なくして唯だ見て居る。【三】訏謨　二字ともに、はかりごと。詩經に訏謨定命とある。【四】欲補千百衝　多くの弊害を矯正する、韓愈の文に「漢氏以來、羣儒區區として、百孔千衝を修補するも、隨つて亂れ、隨つて失す」とある。【五】濯冠　汚れて居らぬ冠を戴く。無論、著物なも換へるので、つまり、衣冠を新にするといふ意。【六】書函　上書の入つて居る函。【七】頽綱　頽廢したる綱紀、綱は施政の大綱。【八】時康　一時の安康。【九】宸居　天子の居ます處、卽ち御座。【一〇】天中央　天は皇宮で、その中央。【一一】仙仗　殿下の儀衞。【一二】九門

九は大數で、幾重にもなつて居る宮門。【一三】洞開閉　洞然として開く。【一四】班行　羣臣の行列。【一五】笏畫地　笏を以て地上に畫して奏上する。禮記に「凡そ君前に指畫するあれば、笏を用ふ」とあり、張九齡の詩に遠叨笏畫ノ地、超拜乃登ノ壇とある。【一六】敷詳　敷衍して詳しく申し述べる。【一七】報聞　天子が御覽になつて預かり置くといはれたといつて沙汰する。漢書東方朔傳に「四方の士、多く上書して得失を言ふ。その采るに足らざるものは、輒ち報聞して罷む」とある。【一八】瞻清光　天子に拜謁する、御容を仰ぐ、書經に「以て天子の光に近づく」とある。【一九】徘徊　躊躇する。【二〇】椎酒牀　酒席の卓を敲く、蘇軾の詩ニ送ニ石昌言一引に「彭任、飲酣なるとき、彦國が嘗に使すべきを聞き、憤慨として酒牀を椎す」とある。【二一】官所　任官された地。【二二】寶藏　蓄いて潛匿する。【二三】繁英　澤山に咲く花。【二四】躑躅　つつじ、卷二竹枝詞の條に注して置いた。【二五】瑣實　こまかな果實。【二六】檳榔　陶隱居の說に「交州に出づ、形小にして味甘し。廣州以南の者は、形大にして味澁し。陽に向ふを檳といひ、陰に向ふを大腹といふ。尖長にして紫文あるものを檳と名づけ、圓にして矮なるものを榔といふ」とある。【二七】瘴癘　炎熱の地に於ける風土病、內病を瘴といひ、外病を癘といふ。南史に「大海の南に流離し、命を瘴癘の地に寄す」とある。【二八】投老　身を投じて老ゆる。【二九】子傷　傷は身體を惡くする。【三〇】決南翔　決然として南方に向ふ。【三一】鯨波　鯨の跳れ上げる大波、劉禹錫の詩に日浴ニ鯨波一萬頃金とある。

【題義】 推官は法官で、罪人を糾治するを職とする。はじめ、唐の時に置いて、節度觀察兩使の僚屬としたが、その後、各州にも置く樣になり、又軍事推官といひ、その次を衙推といつた。宋は其制に沿ひ、元明の時も、各府に推官一人を置き、專ら一府の刑名を理めしめ、俗に刑廳と稱した。潮陽は卽ち潮州で、むかし韓愈が謫せられたことを以て特に著名である。この首は、王某が潮州府推官となつて赴任するのを送つて作つたのである。王推官の名字閱歷は、例の如く不詳、ただ早歲上書したことは、この詩に依つて分かる。なほ、一本には、潮陽を離陽に作つてある。

【詩意】 久しい治平は、禍亂の潛伏するところで、國家は之を防禦する用意を失つて居たから、それこそ大變で、禍亂の至るや、その初、非常に大きな流を切つて落すが如く、手を拱いて施す術もなく、年來、あれよあれよといつて居る間に、まんべんなく四方に廣がつて仕舞つた。そこで、朝廷に於ても、時勢の日に非なるを見て、慷慨自ら禁せず、ある時、衣冠を新にし、恭しく上書を入れた函を捧げ、朝早く參內して、これを差し出した。その上書は、始の方には、大業の基礎を固くせよといひ、終の方には、頹廢せる綱紀を振肅せよといひ、又僭越を顧みずして上書した罪の萬死に當ることは、もとより承知の上で、唯だ願はくは、聖明、臣の狂愚を察せよ、臣の言が萬一實地に施されたならば、立どころに、一時の安康を致すに相違ございませぬといつて、懇懇と申し述べた。天子の御座は、何も遙に隔つて居るでもなく、咫尺の間で、皇宮の中央に位し、雞の鳴く早晨には、殿陛の前に仙仗を排列し、九門洞然として開き、朝參の人人が順次に參向する位であるから、若し天子が成程尤もである、然らば、逢つて見て、なほ詳しく話を聞かうと仰せ出されて、謁見を仰せ付けられたならば、君は再拜して起ち、朝臣の班行に隨ひ、やがて殿に上り、笏を以て地に畫しつつ、なほ敷衍して詳しく論奏すべき筈であつたのに、どうしたものか、御覽濟になつて預り置くといふ御沙汰があつただけで、遂に拜

謁することが出來ず、折角の夙志も、むなしく書餅に歸して仕舞つた。かつては、一官、願ふところに非ずと決心して居たのに、俄に潮州の推官に任じて、蠻荒の地に赴かしめられることに成つた。そこで、心を殘しつつ、徘徊して都門を出で、曉早く、風雨に旅裝を濡し、行き行きて、呉洲に差しかかると、木葉はじめて黃ならむとする秋の初であつた。そこで、予に逢つて大に喜び、馬より下つて痛飮し、はては慷慨激烈、席上の卓を敲きつつ、まくしかけて辯じ立てるといふ始末。して見れば、平生、時勢を憂ふる赤心は、いかなる辛苦に遭つても、依然として忘れぬものと見えて、まことに賴毋しい。聞くところに據れば、これから、君の任地に赴くには、客程なほ長く、加之、潮州は霧の多い處で、紅日出づること遲く、州城は、渺茫たる大海に臨んで居る。蠻族の遺種たる住民は、猿や鹿の如く、人さへ見れば、驚いて、山谷の間に潛匿して仕舞ふ。草木にも珍種多く、花を多く著ける躑躅は、殊に美しく、こまかい實の澤山に生るのは、卽ち檳榔である。但し、風土病が時たま發作するので、ここに投じて老いむとする君の身體を壞しはせぬかと、それが、まことに心配である。何故に、君は、暫く此に留まつて、われと共に、他日、豪貴繁華の鄉に馳せ行かうと思はぬか。君は、笑つて、われを顧みず、愈よ意を決し、翩然として南方に向はれるとのこと。明朝、鯨の跳ね上げる波を指し、高く張れる帆は、さながら雪の如く揚がり、勢よく、海上から其地に行かれるであらう。さらば、君、往けよ。これより後は、各々異國に在つて、なつかしいと思つても、徒に相望むばかり、再會は、何時とも分からぬが、それも致方の無いことである。

【餘論】久治亂所レ伏より不レ得レ瞻二清光一に至るまでは、王推官が憂國の餘、かつて上書したことを敍し、事柄が事柄だけに、筆勢まことに堂堂として居る。一官非レ所レ願より辛苦不二自忘一に至るまでは、潮州の推官に任ぜられしこと、竝に呉洲を過ぎて作者と會飮せしことを記し、顛聞到二官所一より共鶩二豪華鄉一に至るまでは、潮州の風土を想像して、到底居るに堪へざるをいひ、子笑不二我顧一より以下は、送別の正意である。この篇は、佳句名句頗る多く、それが處處に鏤めてあつて、愈よ光彩の發越するを覺える。久治亂所レ伏の四句は、善く時勢の推移を盡し、宛然たる格言であるし、上言固二大業一の句は、上書の概要を盡し、一官非レ所レ願の二句は、全篇の關鍵、平生憂レ時心の二句は、前と呼應して波瀾横生、子笑不二我顧一の六句は、百川の水、東海に朝宗するが如く、巧に之を收束したものである。

309
65

昭和五年一月十七日印刷
昭和五年一月二十日發行

（岡山製本）

續國譯漢文大成 文學部 第十九秩

【非賣品】

著作權所有

編輯兼發行者 國民文庫刊行會 東京市神田區小川町一番地

右代表者 鶴田久作 東京市本郷區西片町十番地

印刷者 君島潔 東京市小石川區久堅町百八番地

印刷所 共同印刷株式會社 東京市小石川區久堅町百八番地

發行所 國民文庫刊行會
電話神田 五三五五番
振替東京 一八五七二番

終